

現代日本文學全集

24

谷崎潤一郎集



谷崎潤一郎集

杉浦非水裝幀

改造社版

昭和二年二月八日印刷
昭和二年二月十三日發行

現代日本文學全集 第二十四篇

著者 谷崎潤一郎

發行者 山本美

東京市麴町區內幸町一丁目參番地

印刷者 杉山愛二

東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二

發兌

東京市麴町區內幸町一丁目參番地
幸ビルデインダグ壹階

改 造 社

振替 東京 八四〇二番
電話 銀座 一七三三番
銀座 四一五八番
五〇四六番

「谷崎潤一郎集」目次

巻頭寫眞(照影)

序 詞(筆蹟)

痴人の愛……………一

少年……………一三

鷺姫……………一五

信西……………一七

兄弟……………一八〇

二人の稚兒……………一九七

金と銀……………二一〇

The Affair of Two Watches……………二五七

人面痘……………二六七

お國と五平……………二七九

或る少年の怯れ……………二九〇

赤い屋根……………三三〇

年 論……………三四〇

痴人の愛

私は此れから、あまり世間に類例がないだらうと思はれる私たち夫婦の間柄に就て、出来るだけ正直に、ぎつぐばらんに、有りのままの事實を書いて見ようと思ひます。それは私自身に取つて忘れがたい貴い記録であると同時に、恐らくは讀者諸君に取つても、きつと何かの参考資料となるに違ひない。殊に此の頃のやうに日本もだんだん國際的に顔が廣くなつて來て、内地人と外國人とが盛んに交際する、いろいろな主義やら思想やらが這入つて來る。男は勿論女もどしどしハイカラになる、と、云ふ様な時勢になつて來ると、今まではあまり類例のなかつた私たちの如き夫婦關係も、追ひ追ひ諸方に生じるだらうと思はれますから。

考へて見ると、私たち夫婦は既にその成り立ちから變つておました。私が始めて現在の私の妻に會つたのは、ちやうど足かけ八年前のことになります。尤も何月の何日だつたか、

詳しいことは覚えておませんが、兎に角その時分、彼女は淺草の雷門の近くにあるカフェエ・ダイヤモンドと云ふ店の、給仕女をしてゐたのです。彼女の歳はやつと數へ歳の十五でした。だから私が知つた時はまだそのカフェエへ奉公に來たばかりの、ほんの新米だつたので、一人前の女給ではなく、それの見習ひ、——まあ云つて見れば、ウエイトレスの卵に過ぎなかつたのです。

そんな子供をもうその時は二十八にもなつてゐた私が何で眼をつけたかと云ふと、それは自分でもハッキリとは分りませんが、多分最初はその兒の名前が氣に入つたからなのでせう。彼女はみんなから「直ちゃん」と呼ばれておましたけれど、或るとき私が聞いて見ると、本名は奈緒美と云ふのでした。此の「奈緒美」と云ふ名前が、大變私の好奇心に投じました。「奈緒美」は素敵だ、MONIと書くことまるで西洋人のやうだ、と、さう思つたのが始まりで、それから次第に彼女に注意し出したのです。不思議な

もので名前がハイカラだとなると、顔だちなども何處か西洋人臭く、さうして大さう俐巧さうに見え、「こんな所の女給にして置くのは惜しいもんだ」と考へるやうになつたのです。

實際ナオミの顔だちは、(斷つて置きますが、私は此れから彼女の名前を片假名で書くことにします。どうもさうしないと感じが出ないのです。)活動女優のメリー・ピクフォードに似たところがあつて、確かに西洋人じみてゐました。此れは決して私のひいき眼ではありません。私の妻となつてゐる現在でも多くの人がさう云ふのですから、事實に違ひないのです。そして顔だちばかりでなく、彼女を素つ裸にしても見ると、その體つきが一層西洋人臭いのですが、それは勿論後になつてから分つたことで、その時分には私もそこまで知りませんでした。ただおぼろげに、きつとああ云ふスタイルなら手足の恰好も悪くはなからうと、着物の着こなし工合から想像してゐただけでした。

一體十五六の少女の氣持ちと云ふものは、肉身の親か姉妹でもなければ、なかなか分りにくいものです。だからカフェエにゐた頃のナオミの性質がどんなだつたかと云はれると、どうも私には明瞭な答へが出来ません。恐らくナオ

ミ自身にしたつて、あの頃はただ何事も夢中で過したと云ふだけでせう。が、ハタから見た感じを云へば、執方かと云ふと、陰鬱な、無口な兒のやうに思へました。顔色なども少し青みを帯びてゐて、譬へば斯う、無色透明な板ガラスを何枚も重ねたやうな、深く沈んだ色合をしてゐて、健康さうではありませんでした。此れは一つにはまだ奉公に來たてだったので、外の女給のやうにお白粉もつけず、お客や朋輩にも馴染がうすく、隅の方に小さくなつて黙つてチヨコチヨコ働いてゐたものだから、そんな風に見えたのでせう。そして侍女が精巧さうに感ぜられたのも、やつぱりそのせみだつたかも知れません。

ここで私は、私自身の経歴を説明して置く必要がありますが、私は當時月給百五十圓を貰つてゐる、或る電氣會社の技師でした。私の生れは栃木縣の宇都宮在で、國の中學校を卒業すると東京へ來て藏前の高等工業へ這入り、そこを出てから間もなく技師になつたのです。そして日曜を除く外は、毎日芝の下宿屋から大井町の會社へ通つてゐました。

一人で下宿住居をしてゐて、百五十圓の月給を貰つてゐたのですから、私の生活は可成

り樂でした。それに私は、總領息子ではありましたが、郷里の方の親やきやうだいへ仕送りをする義務はありませんでした。と云ふのは、實家は相當に大きく農業を營んでゐて、もう父親は居ませんでした。が、年老いた母親と、忠實な叔父夫婦とが、萬事を切り盛りしてゐてくれたので、私は全く自由な境涯にあつたのです。が、さればと云つて道楽をするのと云ふやうな氣はありませんでした。先づ模範的なサラリーマン、——質素で、眞面目で、あんまり曲がな過ぎるほど凡庸で、何の不平も不満もなく日日の仕事を勤めてゐる、——當時の私は大方そんな風だつたのでせう。河合讓治君」と云へば、會社の中でも「君子」と云ふ評判があつたくらゐですから。

それで私の樂と云つたら、夕方から活動寫眞を見に行くとか、銀座通りを散歩するとか、たまたま奮發して帝劇へ出かけるとか、せいぜいそんなものだつたのです。尤も私も結婚前の青年でしたから、若い女性に接觸することは無論嫌ひではありませんでした。元來が田舎育ちの無骨者なので、人づきあひが拙く、従つて異性とのお交際などは一つもなく、まあ其のために「君子」にさせられた形だつたでもありません。

うが、しかし表面が君子であるだけ、心の中はなかなか油斷なく、往來を歩く時でも毎朝電車に乗る時でも、女に對しては絶えず注意を配つてゐました。恰もさう云ふ時期に於いて、たまたまナオミと云ふ者が私の目の前に現れて來たのです。

けれど私は、その當時、ナオミ以上の美人はないときめてゐた譯では決してありません。電車の中や、帝劇の廊下や、銀座通りや、さう云ふ場所ですれ違ふ令嬢のうちには、云ふ迄もなくナオミ以上に美しい人が澤山あつた。

ナオミの器量がよくなるかどうかは將來の問題で、十五やそこの小娘では此れから先が樂しみでもあり、心配でもあつた。ですから最初の私の計畫は、宛に角此の兒を引き取つて世話をしてやらう。そして望みがありさうなら、大いに教育してやつて、自分の妻に貰ひ受けても差支へない。——と、云ふくらゐな程度だつたのです。此れは一面から云ふと、彼女に同情した結果なのですが、他の一面には私自身のあまりに平凡な、あまりに單調なその日暮らしに、多少の變化を與へて見たかつたからでもあるのです。正直のところ、私は長年の下宿住居に飽きてゐたので、何とかして、此の殺風景な生活

に一點の色彩を添へ、温かみを加へて見たいと思つてゐました。それにはたとへ小さくとも一軒の家を構へ、部屋を飾るとか、花を植ゑるとか、日あたりのいいエランダに小鳥の籠を用ゐるすとかして、臺所の川事や、拭き掃除をさせるために女中の一人も置いたらどうだらう。そしてナオミが来てくれたらば、彼女は女中の役もしてくれ、小鳥の代りにもなつてくれよう。と、大體そんな考へでした。

そのくらゐなら、なぜ相當な所から嫁を迎へて、正式な家庭を作らうとしなかつたのか？——と云ふと、要するに私はまだ結婚をするだけの勇氣がなかつたのでした。此れに就いては少し詳しく話さなければなりません、一體私は常識的な人間で、突飛なことは嫌ひな方だし、出来もしなかつたのですけれど、しかし不思議に、結婚に對しては可なり進んだ、ハイカラな意見を持つてゐました。一結婚と云ふと世間の人は大さう事を堅苦しく、儀式張らせる傾向がある。先づ第一に橋渡しと云ふものがある。それとなく雙方の考へをあたつて見る。次には「見合ひ」と云ふ事をする。さてその上で雙方に不服がなければ改めて媒人を立て、結婚を取り交はし、五荷とか、七荷とか、十三荷と

か、花嫁の荷物を婚家へ運ぶ。それから奥入れ、新婚旅行、里帰り、……と随分面倒な手續きを踏みますが、さう云ふことがどうも私は嫌ひでした。結婚するならもつと簡単な、自由な形式でしたいものだと思つてゐました。

あの時分、若しも私が結婚したいなら候補者は大勢あつたでせう。田舎者ではありませんけれども、體格は頑丈だし、品行は方正だし、さう云つては可笑しいが男前も普通であるし、會社の信用もあつたのですから、誰でも喜んで世話をしてくれたでせう。が、實のところ、この「世話をされる」と云ふことがイヤなのだから、仕方がありませんでした。たとへ如何なる美人があつても、一度や二度の見合ひでもつて、お互ひの意氣や性質が分る筈はない。「まあ、あれならば」とか、「ちよつときれいだ」とか云ふくらゐな、ほんの一時の心持ちで一生の伴侶を定めるなんて、そんな馬鹿なことが出来るものぢやない。それから思へばナオミのやうな少女を家に引き取つて、徐ろにその成長を見届けてから、氣に入つたらば妻に貰ふと云ふ方法が一番いい。何も私は財産家の娘だの、教育のある偉い女が欲しい譯ではないのですから、それで澤山なのでした。

のみならず、一人の少女を友達にして、朝夕彼女の發育のさまを眺めながら、明るく晴れやかに、云はば遊びのやうな氣分で、一軒の家に住むと云ふことは、正式な家庭を作るのとは逆つた、又格別な興味があるやうに思へました。つまり私とナオミでたわいのないまま、ごとをする。「世帯を持つ」と云ふやうなシチ面倒な意味でなしに、呑氣なシンブル・ライフを送る。

これが私の望みでした。實際今の日本の「家庭」は、やれ箆笥だとか、長火鉢だとか、座布團だとか云ふ物が、あるべき所に必ずなければいけなかつたり、主人と細君と下女との仕事がいやにキチンと分れてゐたり、近所隣りや親類同士の付き合いがうるさかつたりするもので、その爲めに餘計な入費も懸るし、簡単に済ませることが煩雜になり、窮屈になるし、年々の若いサラリーマンには決して愉快なことでもなく、いいことでもありません。その點に於いて私の計畫は、たしかに一種の思ひつきだと信じてました。

私がナオミに此のことを話したのは、始めて彼女を知つてから二た月ぐらゐ立つた時分だつたでせう。その間、私は始終、暇さへあればカフェエ・ダイヤモンドへ行つて、出来るだけ

彼女に親しむ機会を作つたものでした。ナオミは大變活動寫眞が好きでしたから、公休日には私と一緒に公園の館を覗きに行つたり、その歸りにはちよつとした洋食屋だの蕎麥屋だのへ寄つたりしました。無口な彼女はそんな場合にもいたつて言葉数が少ない方で、嬉しいのだから詰まらないのだから、いつも大概はむつとりとしてゐます。そのくせ私が誘ふときは、決して「いや」とは云ひませんでした。「ええ、行つてもいいわ」と、素直に答へて、何處へでも附いて行くのでした。

一體私をどう云ふ人間と思つてゐるのか、どう云ふつもりで附いて来るのか、それは分りませんでした。まだほんたうの子供なので、彼女は「男」と云ふ者に疑ひの眼を向けようとしてない。此の伯父さんは好きな活動へ連れて行つて、ときどき御馳走をしてくれるから、一緒に遊びに行くのだと云ふだけの、極く單純な、無邪氣な心持ちであるのだらうと、私は想像してゐました。私にしたつて、全く子供のお相手になり、優しい親切な「伯父さん」となる以上のこと、當時の彼女に望みもしなければ、素振りにも見せはしなかつたのです。あの時分の、淡い、夢のやうな月日のことを考へ出すと、

お伽噺の世界にでも住んでゐたやうで、もう一度ああ云ふ罪のない二人になつて見たいと、今でも私はさう思はずにはゐられませんが。

「どうだね、ナオミちゃん、よく見えるかね？」

と、活動小屋が満員で、空いた席がない時など、後ろの方に並んで立ちながら、私はよくそんな風に云つたものです。するとナオミは、「いいえ、ちつとも見えないわ。」

と云ひながら一生懸命に背伸びをして、前のお客の首と首の間から覗かんとする。

「そんなにしたつて見えやしないよ、此の木の上へ乗つかつて、私の肩へ掴まつて御覽。」

さう云つて私は、彼女を下から押し上げてやつて、高い手すりの横木の上へ腰かけさせる。

彼女は兩足をぶらんぶらんさせながら、片手を私の肩へあてがつて、やつと満足したやうに、息を凝らして繪の方を視つめる。

「面白いかい？」

と云へば、

「面白いわ。」

と云ふだけで、手を叩いて愉快がつたり、跳ひ上つて喜んだりするやうなことはないのですが、賢い犬が遠い物音を聞き澄ましてゐるやうに、黙つて、俐巧さうな眼をパツチリ開い

て見物してゐる顔つきは、餘程寫眞が好きなのだと頷かれました。

「ナオミちゃん、お前お腹が減つてやしないか？」

さう云つても、

「いいえ、なんにも喰べたくない。」

と云ふこともありすが、減つてゐる時は遠慮なく「ええ」と云ふのが常でした。そして、洋食なら洋食、お蕎麥ならお蕎麥と、尋ねられればハツキリと喰べたい物を答へました。

二

「ナオミちゃん、お前の顔はメリー・ピクフオードに似てゐるね。」

と、いつのことでしたか、ちやうどその女優の映畫を見てから、歸りにとある洋食屋へ寄つた晩に、それが話題に上つたことがありました。

「さう。」

と云つて、彼女は別にうれしさうな表情もしないで、突然そんなことを云ひ出した私の顔を不思議さうに見ただけでしたが、「お前はさうは思はないかね。」

と、重ねて聞くと、

「似てゐるかどうか分らないけれど、でもみんなが私のことを涙血見たいだつてさう云ふわよ。」

と、彼女は濟まして答へるのです。

「そりやさうだらう、第一お前の名前からして變つてゐるもの、ナオミなんてハイカラな名前を、誰がつけたんだね。」

「誰がつけたか知らないわ。」

「お父つあんかねお母つあんかね、——」

「誰だか、——」

「ぢやあ、ナオミちゃんのお父つあんは何の商賣をしてるんだい。」

「お父つあんはもう居ないの。」

「お母つあんは？」

「お母つあんは居るけれど、——」

「ぢや、兄弟は？」

「兄弟は大勢あるわ、兄さんだの、姉さんだの、妹だの、——」

それから後もこんな話たびたび出たことがありますけれど、いつも彼女は、自分の家庭の事情を聞かれると、ちよつと不愉快な顔つきをして、言葉を決してしまふのでした。で、一緒に遊びに行くときは大抵前の日に約束をして、きめた時間に公園のベンチとか、観音様

のお堂の前とかで待ち合はせることにしたのですが、彼女は決して時間を違へたり、約束をすつぽかしたりしたことはありませんでした。

何かの都合で私の方が遅れたりして、「あんまり待たせ過ぎたから、もう歸つてしまつたかな」と、案じながら行つて見ると、矢張りキチンと其處に待つてゐます。そして私の姿に気が付くと、ふいと立ち上つてつかつか此方へ歩いて

來るのです。

「御免よ、ナオミちゃん、大分長いこと待つただらう。」

私がさう云ふと、

「ええ、待つたわ、」

と云ふだけで、別に不平さうな様子もなく、怒つてゐるらしくもないのでした。或る時などはベンチに待つてゐる約束だつたのが、急に雨が降り出したので、どうしてゐるかと思ひながら出かけて行くと、あの、池の側にある何様だかの小さい祠の軒下にしゃがんで、それでもちやんと待つてゐたのには、ひどくいぢらしい気がしたことがあります。

さう云ふ折の彼女の服装は、多分姉さんのお譲らしい古ぼけた釣仙の衣服を着て、めりんと左染の帯をしめて、髪も日本風の桃割れに結

ひ、うすくお白粉を塗つてゐました。そしていつでも、繼ぎはあたまつてゐましたけれど、小さな足にビツチリと嵌まつた、恰好のいい白足袋を穿いてゐました。どういふ譯で休みの日だけ日本髪にするのかと聞いて見ても一内できうしろと云ふもんだから」と、彼女は相變らず詳しい説明はしませんでした。

「今夜はおそくなつたから、家の前まで送つて上げよう。」

私は再々、さう云つたこともありましたが、

「いいわ、直き近所だから獨りで歸れるわ。」

と云つて、花屋敷の角まで來ると、きつとナオミは左様なら」と云ひ捨てながら、千恵町の横丁の方へバタバタ駆け込んでしまふのでした。

さうです、——あの頃のことを餘りいよくど記す必要はありませんが、一度私は、やや打ち解けて、彼女とゆつくり話をした折がありましたつて。

それは何でもしとんと春雨の降る、生暖い四月の末の宵だつたのでせう。ちやうど其晩はカフェエが暇で、大さう静かだったので、私は長いことテーブルに構へて、ちびちび酒を飲んでゐました。——かう云ふとひどく酒飲みの

やうですけれど、實は私は甚だ下戸の方なので、時間つぶしに、女の飲むやうな甘いココテルを拵へて貰つて、それをホンの一口づつ、紙めるやうに吸つてゐたのに過ぎないのですが、そこへ彼女が料理を運んで来てくれたので、「ナオミちゃん、まあちよつと此處へおかけ。」と、いくらか酔つた勢でさう云ひました。

「なあに、」
と云つて、ナオミは大人しく私の側へ腰をおろし、私がポケットから敷島を出すと、すぐにマツチを擦つてくれました。

「まあ、いいだらう、此處で少うししやべつて行つても。——今夜はあまり忙しくもなささうだから。」

「ええ、こんなことはめつたにありはしないのよ。」

「いつもそんなに忙ししいかい？」

「忙しいわ、朝から晩まで、——本を読む暇もありやしないわ。」

「ぢやあナオミちゃんは、本を読むのが好きなんだね。」

「ええ、好きだわ、」

「一體どんな物を読むのさ、」

「いろいろの雑誌を見るわ、讀む物なら何でも

いいの。」

「そりや感心だ、そんなに本が讀みたかつたら、女學校へでも行けばいいのに。」

私はわざとさう云つて、ナオミの顔を覗き込むと、彼女は瘻に觸つたのか、つんと済まして、あらぬ方角をちつと視つめてゐるやうでしたが、その眼の中には、明かに悲しいやうな、遣る瀧ないやうな色が浮かんでゐるのでした。

「どうだね、ナオミちゃん、ほんたうにお前、學問をしたい氣があるかね。あるなら僕が習はせて上げてもいいけれど。」

それでも彼女が黙つてゐますから、私は今度は慰めるやうな口調で云ひました。

「え？ ナオミちゃん、黙つてゐないで何とかお云ひよ。お前は何をやりたいんだい、何が習つて見たいんだい？」

「あたし、英語が習ひたいわ。」

「ふん、英語と、——それだけ？」

「それから音楽もやつてみたいの。」

「ぢや、僕が月謝を出してやるから、習ひに行つたらいいぢやないか。」

「だつて女學校へ上るのには遅過ぎるわ。もう十五なんですもの。」

「なあに、男と違つて女は十五でも遅くはな

いさ。それとも英語と音楽だけなら、女學校へ行かないだつて、別に教師を頼んだらいいさ。どうだい、お前眞面目にやる氣があるかい？」

「あるにはあるけれど、——ぢや、ほんたうにやらしてくれる？」

さう云つてナオミは、私の眼の中を俄かにハッキリ見据ゑました。

「ああ、ほんたうとも。だがナオミちゃん、もしさうなれば此處に奉公してゐる譯には行かなくなるが、お前の方はそれで差支へないのかね。お前が奉公を止めていいなら、僕はお前を引き取つて世話をしてみていいんだけれど。——さうして何處までも責任を以て、立派な女に仕立ててやりたいと思ふんだけれど。」

「ええ、いいわ、さうしてくれれば。」

何の躊躇するところもなく、言下に答へたキツパリとした彼女の返辭に、私は多少の驚きを感じないではゐられませんでした。

「ぢや、奉公を止めると云ふのかい？」

「ええ、止めるわ。」

「だけどナオミちゃん、お前はそれでいいにしたらつて、おツ母さんや兄さんが何と云ふか、家の都合を聞いて見なけりやならないだらうが。」

「家の都合なんか、聞いて見ないでも大丈夫だ

わ。誰も何とも云ふ者はありやしないの。」

と、口ではさう云つてゐたものの、その實彼女がそれを案外氣にしてゐたことは確かでした。つまり彼女のいつもの癖で、自分の家庭の内幕を私に知られるのが嫌さに、わざと何でもないやうな素振りを見せてゐたのです。私もそんなに嫌がるものを無理に知りたくはないのでしたが、しかし彼女の希望を實現させる爲めには、矢張りどうしても家庭を訪れて彼女の母なり兄なりに篤と相談をしなければならぬ。で、二人の間にその後だんだん話が進行するに従ひ、

「一遍お前の身内の人に會はしてくれろ」と、何度もさう云つたのですけれど、彼女は不思議に喜ばないで、「いいのよ、會つてくれないでも。あたし自分で話をするわ。」

と、さう云ふのが極まり文句でした。

私はここで、今では私の妻となつてゐる彼女の爲めに、「河合夫人」の名譽の爲めに、温ひて彼女の不機嫌を買つてまで、當時のナオミの身許や素性を洗ひ立てる必要はありませんから、成るべくそれには觸れないことにして置きます。後で自然と分つて來る時もありませう

し、さうでない迄も彼女の家が千束町にあつたこと、十五の歳にカフェエの女給に出されてゐたこと、そして決して自分の住居を人に知らせようとしなかつたことなどを考へれば、大凡そんな家庭であつたかは誰にも想像がつく筈です。から、いや、そればかりではありません、私は結局彼女を説き落して母だの兄だのに會つたのですが、彼等は殆んど自分の娘や妹の貞操と云ふことに就いては、問題にしてゐないのでした。私が彼等に持ちかけた相談と云ふのは、折角當人も學問が好きだと云ふし、あんな所に長く奉公させて置くのも惜しい兒のやうに思ふから、其方でお差支へがないのなら、どうか私に身柄を預けては下さるまいか。どうせ私も十分な事は出來まいけれど、女中が一人欲しいと思つてゐる際でもあるし、まあ臺所や拭き掃除の用事ぐらゐはして貰つて、そのあひ間に一通りの教育はさせて上げますが、勿論私の境遇だのまだ獨身であることなどをすつかり打ち明けて靴んで見ると、「さうして頂けば誠に當人も仕合せでして、……」と云ふやうな、何だか張り合ひがなさ過ぎるくらゐな挨拶でした。全く此れではナオミの云ふ通り、會ふ程のことはなかつたのです。

世の中には随分無責任な親や兄弟もあるものだ、私はその時つづくくと感じましたが、それだけ一層ナオミがいぢらしく、哀れに思へてなりません。何でも母親の言葉に依ると、彼等はナオミを持って扱つてゐたらしいので、「實は此の兒は養子にする筈でございまして、當人の氣が進みませんものですから、たのを、さういつ迄も遊ばせて置く譯にも參らず、據るところなくカフェエへやつて置きましたので」と、そんな口占でしたから、誰かが彼女を引き取つて成人させてくれさへすれば、まあ兎も角も一と安心と云ふやうな次第だつたのです。ああ成る程、それで彼女は家にゐるのが嫌だものだから、公休日にはいつも戶外へ遊びに出て、活動寫眞を見に行つたりしたんだな、雨が降つても槍が降つてもきつと私を待つてゐたのはそのせむなんだなど、事情を聞いてやつと私もその謎が解けたのでした。

が、ナオミの家庭がさう云ふ風であつたことは、ナオミに取つても私に取つても非常な幸運だつた譯で、話が極まるまで直きに彼女はカフェエから暇を貰ひ、毎日毎日私と二人で適當な借家を捜しに歩きました。私の勤め先が大井町でしたから、成るべくそれに便利な所を擇

ばうと云ふので、日曜日には朝早くから新橋の驛に落ち合ひ、さうでない日はちやうど會社の退けた時刻に大井町で待ち合はせて、蒲田、大森、品川、目黒、主としてあの邊の郊外から、市中では高輪や田町や三田あたりを廻つて見て、さて歸りには何處かで一緒に晩飯をたべ、時間があれば例の如く活動寫眞を覗いたり、銀座通りをぶらぶらついたりして、彼女は千束町の家へ、私は芝日の下宿へ戻る。たしかその頃は借家が掃底な時でしたから、手頃な家がなかなかオイソレと見つからないで、私たちは半月あまりも斯うして暮らしたものでした。

もしもあの時分、麗かな五月の日曜日の朝などに、大森あたりの青葉の多い郊外の路を、肩を並べて歩いてゐる會社員らしい一人の男と、桃類に結つた見すばらしい小娘の様子を、誰かが注意してゐたとしたら、まあどんな風かと思へたでせうか？ 男の方は小娘を「ナオミちゃん」と呼び、小娘の方は男を「河合さん」と呼びながら、主従ともつかず、兄妹ともつかず、さればと云つて夫婦とも友達ともつかぬ恰好で互ひに少し遠慮しいしい語り合つたり、番地を尋ねたり、附近の景色を眺めたり、ところどころの生垣や、邸の庭や、路端などに咲いて

ゐる花の色香を振り返つたりして、晩春の長き一日を彼方此方と幸福さうに歩いてゐた此の二人は、定めし不思議な取り合はせだつたに違ひありません。花の話で想ひ出すのは、彼女が大變西洋花を愛してゐて、私などにはよく分らないいろいろな花の名前——それも面倒な英語の名前を澤山知つてゐたことでした。カフェエに奉公してゐた時分に、花瓶の花を始終扱ひつけてゐたので自然に覺えたのださうですが、通りすがりの門の中などに、たまたま温室があつたりすると、彼女は眼敏くも直ぐ立ち止まつて、

「まあ、綺麗な花！」

と、さも嬉しさに叫んだものです。

「ぢや、ナオミちゃんは何の花が一番好きだね。」

と、尋ねてみたとき、

「あたし、チューリップが一番好きよ。」

と、彼女はさう云つたことがあります。

淺草の千束町のやうな、あんなゴミゴミした路次の中にも育つたので、却つてナオミは反動的にひろびろとした田園を慕ひ、花を愛する習慣になつたのでありませうか。萱、たんぽぽ、げんげ、櫻草、——そんな物でも畑の畔や田舎

道などに生えてゐると、忽ちチヨコチヨコと驅けて行つて摘まうとする。そして終日歩いてゐるうちに彼女の手には摘まれた花が一杯になり、幾つとも知れない花束が出来、それを大事に歸り途まで持つて來ます。

「もうその花はみんな萎んでしまつたぢやないか、好い加減に捨てておしまひ。」

さう云つても彼女はなかなか承知しないで、「大丈夫よ、水をやつたら又直ぐ生き返るから、河合さんの机の上へ置いてらいいわ。」

と、別れるときにその花束をいつも私にくれるのでした。

かうして方捜し廻つても容易にいい家が見つからないで、散々迷ひ抜いた揚句、結局私たちが借りることになつたのは、大森の驛から十二三町行つたところの、省線電車の線路に近い、とある一軒の甚だお粗末な洋館でした。

所謂「文化住宅」と云ふ奴、——まだあの時分はそれがそんなに流行つてはゐませんでした、近頃の言葉で云へばさしづめさう云つたものだつたでせう。勾配の急な、全體の高さの半分以上もあらうかと思はれる、赤いスレートで葺いた屋根。マツチの箱のやうに白い壁で包んだ外側、ところどころに切つてある長方形のガ

ラス窓。そして正面のボーチの前に、庭と云ふよりは寧ろちよつとした空地がある。と、先づそんな風な恰好で、中に住むよりは繪に畫いた方が面白さうな見つきでした。尤もそれはその筈なので、もと此の家は何とか云ふ繪かきが建てて、モデル女を細君にして二人で住んでゐたのださうです。従つて部屋取り方などは随分不便に出来てゐました、いやにだだ、ツ廣いアトリエと、ほんのささやかな玄關と、裏所と、階下にはたつたそれだけしかなく、あとは二階に三疊と四疊半とがありましたが、それとて屋根裏の物置小屋のやうなもので、使へる部屋ではありませんでした。その屋根裏へ通ふにはアトリエの室内に梯子がついてゐて、そこを上ると手すりを繞らした廊下があり、恰も芝居の棧敷のやうに、その手すりからアトリエを見おろせるやうになつてゐました。

オオミは最初此の家の「風景」を見ると、「まあ、ハイカラなこと！ あたし斯う云ふ家が、いいわ。」

と、大さう氣に入つた様子でした。そして私も、彼女がそんなに喜んだので直ぐ借りることに賛成したのです。

多分オオミは、その子供らしい考へで、間取り

の工合など實用的でなくつても、お伽噺の挿繪のやうな、一風變つた様式に好奇心を感じたのでせう。たしかにそれは呑気な青年と少女とが、成るだけ世帯じみないやうに、遊びの心持ちで住まはうと云ふにはいい家でした。前の繪かきとモデル女もさう云ふつもりで此處に暮らしてゐたのでせうが、實際たつた二人でゐるなら、あのアトリエの一と間だけでも、寝たり起きたり食つたりするには充分用が足りたのです。

三

私がいよいよオオミを引き取つて、その「お伽噺の家」へ移つたのは、五月下旬のことでしたらう。這入つて見ると思つたほどに不便でもなく、日あたりのいい屋根裏の部屋からは海が眺められ、南を向いた前の空地は花壇を造るのに都合がよく、家の折所をときどき省線の電車の通るのが取つたけれど、間にちよつとした田圃があるのでそれもそんなにやかましくはなく、先づこれならば申し分のない住居でした。

のみならず、何分さう云ふ普通の人には不適當な家でしたから、思ひの外に家賃が安く、一般に物價の安いあの頃のことではありましたが、私敷金なしの月月二十圓といふので、それも私

には氣に入りました。

「オオミちゃん、これからお前は私のことを『河合さん』と呼ばないで『讓治さん』とお呼び。そしてほんとに友達のやうに暮らさうぢやないか。」

と、引つ越した日に私は彼女に云ひ聞かせました。勿論私の郷里の方へも、今度下宿を引き拂つて一軒家を持つたこと、女中代りに十五になる少女を雇ひ入れたこと、などを知らせてやりましたけれど、彼女と「友達」のやうに暮らすとは云つてやりませんでした。國の方から身内の者が訪ねて來ることはめつたにないのだし、いづれそのうち、知らせる必要が起つた場合には知らせてやらうと、さう考へてゐたのです。

私たちは暫くの間、此の珍らしい新居にふさはしいいろいろの家具を買ひ求め、それらをそれぞれ配置したり飾りつけたるために、忙しい、しかし楽しい月日を送りました。私は成るべく彼女の趣味を感發するやうに、ちよつとした買ひ物をするのにも自分一人では極めないで、彼女の意見を云はせるやうにし、彼女の頭から出る考へを出来るだけ採用したものですが、もともと算笥だの長火鉢だのと云ふやうな、在り來たりの世帯道具は置き所のない家で

あるだけ、従つて選擇も自由であり、どうでも自分等の好きなやうに意匠を施せるのでした。私たちは印度更紗の安物を見つけて来て、それをナオミが危ツかしい、手つきで縫つて窓かけに作り、芝口の西洋家具屋から古い藤椅子だのソファだの、安樂椅子だの、テーブルだのを捜して来てアトリエに並べ、壁にはメリー・ピクフォードを始め、亞米利加の活動女優の寫眞を二つ三つ吊りました。そして私は寢道具なども、出来ることなら西洋流にしたいと思つたのですけれど、ベッドを二つも買ふとなると入費が懸るばかりでなく、夜ト布團なら田舎の家から送つて貰へる便宜があるので、とうとうそれはあきらめなければなりませんでした。が、ナオミの爲めに田舎から送つてよこしたのは、女中を寢かす夜具でしたから、お約束の唐草模様、ゴワゴワした木綿の煎餅布團でした。私は何だか可哀さうな気がしたので、「これではちよつとひど過ぎるね、僕の布團と一枚取換へて上げようか。」と、さう云ひましたが、「うらん、いいの、あたしこれで澤山。」と云つて、彼女はそれを引つ被つて、獨り淋しく屋根裏の三疊の部屋に寢ました。

私は彼女の隣りの部屋——同じ屋根裏の、四疊半の方へ寢るのでしたが、毎朝毎朝、眼をさますと私たちは、向うの部屋と此方の部屋とで、布團の中にもぐりながら聲を掛け合つたものでした。「ナオミちゃん、もう起きたかい。」と、私が云ひます。「ええ、起きてるわ、今もう何時？」と、彼女が應じます。「六時半だよ、——今朝は僕がおまんまを炊いてあげようか。」「さう？ 昨日あたしが炊いたんだから、今日は讓治さんが炊いてもいいわ。」「ぢや仕方がない、炊いてやらうか。面倒だからそれともパンで済ましてかうか。」「ええ、いいわ、だけど讓治さんは随分ずるいわ。」そして私たちは、御飯がたべたければ小さな土鍋で米を炊ぎ、別にお膳へ移す迄もなくテーブルの上へ持つて来て、鎌詰か何かを突ツつきながら食事をします。それもうるさくて厭だと思へば、パンに牛乳にジャムでごまかしたり、西洋菓子を摘まんで置いたり、晩飯などはそばやう、どんで間に合はせたり、少し御馳走が欲し

い時に二人で近所の洋食屋まで出かけて行きます。「讓治さん、今日はピフテキをたべさせてよ。」などと彼女は、よくそんなことを云つたものです。朝飯を済ませると、私はナオミを獨り残して會社へ出かけます。彼女は午前中は花壇の草花をいぢくつたりして、午後になるとからツぼの家へ鏡をおろして、英語と音楽の稽古に行きました。英語は寧ろ始めから西洋人に就いた方がよからうと云ふので、日黒に住んでゐる亞米利加人の老嬢のミス・ハリソンと云ふ人の所へ、一日置きに會話とリーダーを習ひに行つて、足りないところは私が内できととき浚つてやることにしました。音楽の方は、此れは全く私にどうしたらいいか分りませんでした。二三年前に上野の音楽學校を卒業した或る婦人が、自分の家でピアノと聲樂を教へると云ふ話を聞き、此の方は毎日芝の伊皿子まで一時間づつ授業を受けに行くのでした。ナオミは銘仙の着物の上に紺のカシマヤの袴をつけ、黒い靴下に可愛い小さな半靴を穿き、すつかり女學生になりすまして、自分の理想がやうやうかなつた嬉しさに胸をとときめかせながら、せつせと通ひまし

た。をりをり歸り途などに彼女と往來で遇つたりすると、もうどうしても千束町に育つた娘で、カフエエの女給をしてゐた者とは思へませんでした。髪もその後は桃割れに結つたことは一度もなく、リボンで結んで、その先を纏んで、お下げにして垂らしてゐました。

私は前に「小鳥を飼ふやうな心持」と云ひましたつけが、彼女は此方へ引き取られてから顔色などもだんだん健康さうになり、性質も次第に變つて来て、ほんたうに快活な、晴れやかな小鳥になつたのでした。そしてそのだだっ廣いアトリエの一と間は、彼女のためには大きな鳥籠だつたのです。五月も暮れて明るい初夏の氣候が来る。花壇の花は日増しに伸びて色彩を増して来る。私は會社から、彼女は稽古から、夕方家へ歸つて来ると、印度更紗の窓かけを洩れる太陽は、眞つ白な壁で塗られた部屋四方を、いまだにカツキリと晝間のやうに照らしてゐる。彼女はフランネルの單衣を着て、素足にスリッパを突ツかけて、とんとん床を踏みながら習つて来た唄を歌つたり、私を相手に眼隠しだの鬼ごっこをして遊んだり、そんな時にはアトリエ中をぐるぐる走り廻つて、テーブルの上を飛び越えたり、ソファの下にもぐ

り込んだり、椅子を引つくり覆したり、まだ足らないで梯子段を駆け上つては、例の掃敷のやうな屋根裏の廊下を、鼠の如くチヨコチヨコと往つたり來たりするのです。一度は私が馬になつて彼女を背中に乗せたまま、部屋の中を這つて歩いたことがありました。

「ハイ、ハイ、ドウ、ドウ、ドウ！」と云ひながら、ナオミは手拭を手綱にして、私にそれを咬へさせたりしたものです。矢張りさう云ふ遊びの日の出来事でしたらう、——ナオミがきやつきやつと笑ひながら、あまり元氣に梯子段を上つたり下りたりし過ぎたので、とうとう足を踏み外して頂邊から轉げ落ちた揚句、急にしくしく泣き出したことがありましたの。 「おい、どうしたの、——何處を打つたんだか見せて御覽。」 と、私がさう云つて抱き起すと、彼女はそれでもまだしくしくと鼻を鳴らしつつ、袂をまくつて見せましたが、落ちる拍子に釘か何かに觸つたのでせう、ちやうど右腕の脇のところに皮が破れて、血がにじみ出てゐるのです。 「何だい、此れッぼちの事で泣くなんで！ き、絆着絆を貼つてやるから此方へおいで。」

そして膏藥を貼つてやり、手拭を裂いて綿帯をしてやる間も、ナオミは一杯涙をためて、ぼたぼた涙を滴らしながらしやくり上げる顔つきが、まるで頑足ない子供のやうでした。傷はそれから運悪く腹を持つて、五六日閉りませんでした。毎日綿帯を取り替へてやる度毎に、彼女はきつと泣かないことはなかつたのです。

しかし私は、既にその頃ナオミを戀してゐたかどうか、それは自分にはよくわかりません。さう、たしかに戀してはゐたのでせうが、自分自身のつもりでは寧ろ彼女を育ててやり、立派な婦人に仕込んでやるのが楽しみなので、ただそれだけでも満足出来るやうに思つてゐたのです。が、その年の夏、會社の方から二週間の休暇が出たので、毎年の例で私は歸省することになり、ナオミを淺草の實家へ預け、大森の家に戸締りをして、さて田舎へ行つて見ると、その二週間と云ふものが、溜らなく私には單調で、淋しく感ぜられたものです。あの兒が居ないとこんなにも話まらないものか知らん、此れが戀愛の初まりなのではないか知らん、と、その時始めて考へました。そして母親の前を好い加減に云ひ繕つて、豫定を早めて東京へ着くと、もう夜の十時過ぎでしたけれど、いきなり上野の停車場か

らナオミの家までタクシーを走らせました。

「ナオミちゃん、帰つて来たよ。角に自動車が待たしてあるから、此れから直ぐに大森へ行かう。」

「さう、ぢや今直ぐ行くわ。」

と云つて、彼女は私を格子の外へ待たして置いて、やがて小さな風呂敷包みを掲げながら出て来ました。それは大さう蒸し暑い晩のことでしたが、ナオミは白つばい、ふわふわした、海紫の葡萄の模様のあるモスリンの單衣を纏つて、幅のひろい、派手な褐色のリボンで髪を結んでみました。そのモスリンは先達のお盆に買つてやつたので、彼女はそれを留守の間に、自分の家で仕立てて貰つて着てゐたのです。

「ナオミちゃん、毎日何をしてゐたんだいッ」

車が賑やかな廣小路の方へ走り出すと、私は彼女と並んで腰かけ、心持ち彼女の方へ顔をすり寄せるやうにしながら云ひました。

「あたし毎日活動寫眞を見に行つてたわ。」

「ぢや、別に淋しくはなかつたらうね。」

「ええ、淋しいことなんかなかつたけれど、

……」

さう云つて彼女はちよつと考へて、

「でも讓治さんは、思つたより早く歸つて来た

のね。」

「田舎にゐたつて詰まらないから、豫定を切り上げて來ちまつたんだよ。やつぱり東京が一番だなあ。」

私はさう云つてほつと溜息をつきながら、窓の外にちらちらしてゐる都會の夜の花やかな灯影を、云ひやうのない懐かしい氣持ちで眺めたものです。

「だけどあたし、夏は田舎もいいと思ふわ。」

「そりや田舎にもよりけりだよ、僕の家なんか草深い百姓家で、近所の景色は平凡だし、名所古蹟がある譯ぢやなし、眞つ晝間から蚊だの蠅だのがぶんぶん叫つて、とても暑くつてやり切れやしない。」

「まあ、そんな所？」

「そんな所さ。」

「あたし、何處か、海水浴へ行きたいなあ。」突然さう云つたナオミの口調には、だだッ兒のやうな可愛らしさがありました。

「ぢや、近いうちに涼しい處へ連れて行かうか、鎌倉がいいかね、それとも箱根かね。」

「温泉よりは海がいいわ、——行きたいな、ほんたうに。」

その無邪氣さうな聲だけを聞いてみると、矢張り以前のナオミに違ひないのでしたが、何かほんの十日ばかり見なかつた間に、急に身體が伸び伸びと育つて來たやうで、モスリンの單衣の下に息づいてゐる圓みを持つた肩の形や乳房のあたりを、私はそつと偷み視ないではゐられませんでした。

「此の着物はよく似合ふね、誰に縫つて貰つたの？」

と、暫く立つてから私は云ひました。

「おツ母さんが縫つてくれたの。」

「内の評判はどうだつた、見立てが上手だと云はなかつたかい。」

「誰が見立てたんでつて、云つてたわ。」

「僕が見立てたつてさう云つたかい。」

「ええ、云つたわ、——悪くはないけれど、あんまり柄がハイカラ過ぎるツて、——」

「おツ母さんがさう云ふのかい。」

「ええ、さう、——内の人たちにやなんにも分りやしないのよ。」

さう云つて彼女は、遠い所を視つめるやうな眼つきをしながら、

「みんながあたしを、すつかり變つたつて云つてたわ。」

「どんな風に變つたつて？」

「恐ろしくハイカラになつちやつたつて。」

「そりやさうだらう、僕が見たつてさうだからなあ。」

「さうか知ら。——一遍頭を日本髪に結つて御覽で云はれたけれど、あたしイヤだから結はなかつたわ。」

「ぢやあそのリボンは？」

「此れ？ 此れはあたしが仲店へ行つて自分で買ったの。どう？」

と云つて、頭をひねつて、さらさらとした油気のない髪の毛を風に吹かせながら、そこにひらひら舞つてゐる撈色の布を私の方へ示しました。

「ああ、よく映るね、かうした方が日本髪よりいくらいいか知れやしない。」

「ふん」

と、彼女は、その獅子ツ鼻の先を、ちよいとしゃくつて意を得たやうに笑ひました。悪く云へば小生意氣な此の鼻先の笑ひ方が彼女の癖ではありましたけれど、それが却つて私の眼には大へん惻巧さうに見えたものです。

ナオミがしきりに「鎌倉へ連れてつてよう」

とねだるので、ほんの二三日滞在のつもりで出かけたのは八月の初め頃でした。

「なぜ二三日でなけりやいけないの？ 行くなら十日か一週間ぐらゐ行つて居なけりや詰まらないわ。」

彼女はさう云つて、出がけにちよつと不平さうな顔をしました。が、何分私は會社の方が忙しいといふ口實の下に郷里を引き揚げて来たのですから、それがバレると母親の手前、少し合が悪いのでした。が、そんなことをいふと却つて彼女が肩身の狭い思ひをするであらうと察して、

「ま、今年は二三日で我慢をしてお置き、來年は何處か變つたところへゆつくり連れて行つて上げるから。——ね、いいぢやないか。」

「だつて、たつた二三日ぢやあ。」

「そりやさうだけれども、泳ぎたけりや歸つて來てから、大森の海岸で泳げばいいぢやないか。」

「あんな汚い海で泳げはしないわ。」

「そんなわからないことを云ふもんぢやないよ、ね、いい兒だからさうおし、その代り何か着物を買つてやるから。——さう、さう、お前は洋服が欲しいと云つてゐたぢやないか。だから洋服を拵へて上げよう。」

その「洋服」といふゑきに釣られて、彼女はやつと納得が行つたのでした。

鎌倉では長谷の金波樓と云ふ、あまり立派でない海水旅館へ泊りました。それに就いて今から思ふと可笑しな話があるのです。と云ふのは、私のふところには此の半期に買ったポナスが大部分残つてゐましたから、本來ならば何も二三日滞在するのに檢約するの必要はなかつたのです。それに私は、彼女と始めて泊まりがけの旅に出ると云ふことが愉快でなりませんでしたから、なるべくならばその印象を美しいものにするために、あまりケチケチした眞似はしないで、宿屋なども一流の所へ行きたいと、最初はそんな考へてゐました。ところがいいよと云ふ日になつて、横須賀行の二等室へ乗り込んだ時から、私たちは一種の氣後れに襲はれたのです。なぜかと云つて、その汽車の中には返子や鎌倉へ出かける夫人や令嬢が澤山乗合はしてゐて、ずらりとときらびやかな列を作つてゐましたので、さてその中に割込んで見ると、私は兎に角、ナオミの身なりがいかに見すばらしく思へたものでした。

勿論夏のことですから、その夫人達や令嬢

達もさうゴテゴテと着飾つてゐた筈はありませ
 ん、が、からして彼等とナオミとを比べて見る
 と、社會の上層に生れた者とさうでない者と
 の間には、争はれない品格の相違があるやう
 な気がしたのです。ナオミもカフェエにゐた頃
 とは別人のやうになりはしたものの、氏や育ち
 の悪いものは矢張りどうしても駄目なぢやな
 いかと、私もさう思ひ、彼女自身も一層強くそ
 れを感じたに違ひありません。そしていつもは
 彼女をハイカラに見せたところの、あのモスリ
 ンの葡萄の襟様の單衣物が、まあその時はどん
 なに情なく見えたことせう。並居る婦人達の
 中にはあつさりとした浴衣がけの人もゐました
 けれど、指に寶石を光らしてゐるとか、持ち物に
 贅を凝らしてゐるとか、何かしら彼等の富貴を
 物語るものが示されてゐるのに、ナオミの手に
 はその滑らかな皮膚より外に、何一つとして誇
 に足るものは輝いてゐなかつたのです。私は
 今でもナオミが極まり悪さうに自分のパラソル
 を袂の蔭へ隠したことを覚えてゐます。それ
 もその筈で、そのパラソルは新調の物ではあり
 ましたが、誰の目にも七八圓の安物としか思は
 れないやうな品でしたから。

で、私たちは三橋にしようか、思ひ切つて

海濱ホテルへ泊まらうかなどと、そんな空想を
 描いてゐたに拘はらず、その家の前まで行つて
 見ると、先づ門構への嚴しいのに壓迫されて、長
 谷の通りを二度も三度も往つたり來たりした末
 に、とうとう土地では二流か三流の金波樓へ行
 くことになつたのです。

宿には若い學生たちが大勢がやがや泊まつて
 ゐて、とても落着いてはゐられないので、私た
 ちは毎日濱でばかり暮らしました。お轉婆のナ
 オミは海さへ見れば機嫌がよく、もう汽車の中
 でしょげたことは忘れてしまつて、

「あたしどうしてもこの夏中に泳ぎを覚えてし
 まはなかつちや、」

と、私の腕にしがみついて、盛んにぼち、やぼ
 ちや、淺い所で暴れ廻る。私は彼女の両體を兩
 手で抱へて、腹這にさせて浮かしてやつたり、ジ
 ッカリ棒杭を掴かませて置いて、その脚を持つ
 つて足掻き方を教へてやつたり、わざと突然手を
 つつ放して苦い潮水を飲ましてやつたり、それ
 にも飽きるや波乗の稽古をしたり、濱邊にごろ
 ごろ寝ころびながら沙いたづらをしてみたり、
 夕方からは舟を借りて沖の方まで漕いで行つた
 り、——そして、そんな折には彼女はいつも海
 水着の上に大きなタオルを纏つたまま、或る時

は艦に腰かけ、或る時は靴を枕に青空を仰
 いで誰に憚ることもなく、その得意のナボリの
 船唄、「サンタ・ルチア」を甲高い聲でうたひま
 した。

- O dolce Napoli,
- O soul beato,
- Ove sorriere
- Yolle il cristo,
- In sei Impero
- Di armonia i
- Santa Lucia i
- Santa Lucia i
- Santa Lucia i

と、伊太利語でうたふ彼女のソプラノが、夕
 なぎの海に響き渡るのを聴き惚れながら、私は
 しづかに櫓を漕いで行く。「もつと彼方へ、もつ
 と彼方へ」と彼女は無限に浪の上を走りたがる。
 いつの間やら日はとつぶり暮れてしまつて、
 銀色の星がチラチラと私等の船を空から瞰お
 ろし、あたりがぼんやり暗くなつて、彼女の姿
 はただほの白いタオルに包まれ、沖間に結ばれ
 たうたかたのやうにその輪廓がぼやけてしま
 ふ。が、暗れやかな唄ごゑはなかなか止まずに、
 「サンタ・ルチア」は幾度となく繰り返され、そ
 れから「ローレイ」になり、「流浪の民」にな

り、やがてミニョンの一節になりして、ゆるやかな船の歩みと共にいろいろな唄をつづけて行きます。……

かういふ経験は、若い時代には誰でも一度あることでせうが、私に取つては實にその時が始めてでした。私は電氣の技師であつて、文學だとか藝術だとか云ふものには縁の薄い方でしたから、小説などを手にすることはめつたになかつたのですけれども、その時思ひ出したのは嘗て讀んだことのある夏目漱石の草枕です。さうです、たしかあの中に、「ヴェニスに沈みつ、ヴェニスは沈みつ」と云ふところがあつたと思ひますが、ナオミと二人で船に揺られつつ、沖の方から夕靄の帳を透して陸の灯影を眺めると、不思議にあの文句が胸に浮んで来て、何だか斯う、此のまま彼女と果てしも知らぬ遠い世界へ押し流されて行きたいやうな、涙ぐましい、うつつりと酔つた心地になるのです。

私のやうな武骨な男がそんな気分を味はふことが出来ただけでも、あの鎌倉の三日間は決して無駄ではなかつたのです。

いや、そればかりではありません、實を云ふとその三日間は更にもう一つ大切な發見を、私に與へてくれたのです。私は今までナオミ

と一緒に住んでゐながら、彼女がどんな體つきをしてゐるか、露骨に云へばその素裸な肉體の委を知り得る機会がなかつたのに、それが今度ばほんたうによく分つたのです。彼女が始めて由比ヶ濱の海水浴場へ田かけて行つて、前の晩にわざわざ銀座で買つて来た、濃い緑色の海水帽と海水服とを肌身に着けて現はれたとき、正直なところ、私はどんなに彼女の四肢の整つてゐることを喜んだでせう。さうです、私は全く喜んだのです。なぜかと云ふに、私は先から着物の着こなし工合や何かで、きつとナオミの體の曲線は斯うであらうと思つてゐたのが、想像通り中つたからです。

「ナオミよ、ナオミよ、私のメリー・ピクフオードよ、お前は何と云ふ釣合の取れた、いい體つきをしてゐるのだ。お前のそのしなやかな腕はどうだ。その眞つ直ぐな、まるで男の子のやうにすつきりとした胸はどうだ。」

と、私は思はず心の中で叫びました。そして映画でお馴染の、あの活潑なマツクセンネツトのページング・ガールたちを想ひ出さずに居られませんでした。

誰しも自分の女房の體のことなどを餘り詳しく書き立てるのは厭でせうが、私にしたつ

て、後年私の妻となつた彼女に就いて、さう云ふことを、いれ、いしくしゃべつたり、多くの人に知らしたりするのは決して愉快ではありません。けれどもそれを云はないかどうかどうも話の都合が悪いし、そのくらゐのことを遠慮しては、結局この記録を書き留める意義がなくなつてしまふ譯ですから、ナオミが十五歳の八月、鎌倉の海邊に立つた時に、どう云ふ風な體格だつたか、一と通りはここに記して置かねばなりません。當時のナオミは、並んで立つと背の高さが私よりは一寸ぐらゐ低かつたでせう。――

斷つて置きますが、私は頑健岩の如き恰幅ではありましたが、身丈は五尺二寸ばかりで、先づ小男の部だつたのです。――が、彼女の骨組の著しい特長として、胴が短く、脚の方が長かつたので、少し離れて眺めると、實際よりは大へん高く思へました。そして、その短い胴體はSの字のやうに非常に深くくびれてゐて、くびれた最底部のところに、もう十分に女らしい圓みを帯びた臀の隆起がありました。その時分私たちは、あの有名な水泳の達人ケラーマン嬢を主役にした、「水神の娘」とか云ふ人魚の映画を見たことがありましたので、「ナオミちゃん、ちよいとケラーマンの眞似を

して御覽。」

と、私が云ふと、彼女は沙濱に突つ立つて、両手を空にかざしながら、「飛び込み」の形をして見せたものですが、そんな場合に、兩腿をびつたり合はせると、胸と胸との間には寸分の隙もなく、腰から下が足頸を頂天にした一つの細長い三角形を描くのです。彼女もそれには得意の様子で、

「どう？ 譲治さん、あたしの脚は曲つてゐない？」

と云ひながら、歩いて見たり、立ち止まつて見たり、砂の上へぐつと伸ばして見たりして、自分でもその恰好を嬉しさうに眺めました。

それからもう一つナオミの體の特長は、頸から肩へかけての線でした。肩……私はしばしば彼女の肩へ觸れる機会があつたのです。と云ふのは、ナオミはいつも海水服を着るときに、「譲治さん、ちよいと此れを嵌めて頂戴。」と、私の傍にやつて来て、肩についてゐるボタンを嵌めさせるのでしたから。で、ナオミのやうに撫で肩で、頸が長いものは、着物を脱ぐと瘦せてゐるのが普通ですけれど、彼女はそれと反對で、思ひの外に厚みのある、たつぷりとした立派な肩と、いかにも呼吸の強さうな胸を持つてゐま

した。ボタンを嵌めてやる折に、彼女が深く息を吸つたり、胸を動かして背中の肉にもくもく波を打たせたりすると、それでなくてもハチ切れさうな海水服は、丘のやうに盛り上つた肩のところ一杯に伸びて、びんと弾けてしまひさうになるのです。一口に云へばそれは實に力の籠つた、「若さ」と「美しさ」の感じの溢れた肩でした。私は内内そのあたりにゐる多くの少女と比較して見ましたが、彼女のやうに健康な肩と優雅な頸とを兼ね備へてゐるものは外にないやうな気がしました。

「ナオミちゃん、少うしちツとしておいでよ、さう動いちゃボタンが固くつて嵌まりやしない。」

と云ひながら、私は海水服の端を掴まんで大きな物を袋の中へ詰めるやうに、無理にその肩を押し込んでやるのが常でした。

かう云ふ體格を持つてゐた彼女が、運動好きで、お轉變だつたのは當り前だと云はなければなりません。實際ナオミは手足を使つてやることなら何事に依らず器用でした。水泳などは自分で揚言してゐたやうに、鎌倉の三日を皮切にして、あとは大森の海岸で毎日一生懸命に習つて、その夏中にとらう物にしてしまひ、ポート

を漕いだり、ヨットを操つたり、いろんな事が出来るやうになりました。そして一日遊び抜いて、日が暮れるとガツカリ疲れて、「ああ、くたびれた」と云ひながら、ビツショリ濡れた海水着を持つて歸つて来る。

「あーあ、お腹が減つちやつた。」と、ぐつたり椅子に體を投げ出す。どうかすると、喉飯を焚くのが面倒なので、歸り路に洋食屋へ寄つて、まるで二人が競争のやうにたらく物をたべくらする。ピフテキのあとで又ピフテキと、ピフテキの好きな彼女は譯なくペロリと三皿ぐらゐお代りをするのでした。

あの歳の夏の、樂しかつた思ひ出を書き記したら際限がありませんから此のくらゐにして置きますが、最後に一つ書き洩らしてならないのは、その時分から私が彼女をお湯へ入れて、手だの足だの背中だのをゴムのスポンヂで洗つてやる習慣がついたことです。此れはナオミが睡がつたりして銭湯へ行くのを大儀がつたものですから、海の潮水をしほ落すのに臺所で水を浴びたり、行水を使つたりしたのが始まりでした。

「さあ、ナオミちゃん、そのまんま寝たまつちや身體がべたべたして仕様がないう。洗つてや

るから此の盥の中にお這入り。」

と、さう云ふと、彼女は云はれるままになつて大人しく私に洗はせてゐました。それがだんだん癖になつて、すずしい秋の季節が来ても行水は止まず、もうしまひにはアトリエの隅に西洋風呂や、バス・マツトを据ゑつけて、その周りを衝立で圍つて、ずつと冬中洗つてやるやうになつたのです。

五

察しのいい讀者のうちには、既に前回の話の間に、私とナオミが友達以上の關係を結んだかのやうに想像する人があるでせう。が、事實さうではなかつたのです。それはなるほど月日の立つに隨つて、お互ひの胸の中に一種の「了解」と云ふやうなものが出来てゐたことはありませう。けれども一方はまだ十五歳の少女であり、私は前にも云ふやうに女にかけては經驗のない謹直な「君子」であつたばかりでなく、彼女の貞操に關しては責任を感じてゐたのですから、めつたに一時の衝動に驅られてその「了解」の範圍を越えるやうなことはしなかつたのです。勿論私の心の中には、ナオミを措いて自分の妻にするやうな女はゐない、あつたと

ころで今更情として彼女を捨てる譯には行かないといふ考へが、次第にしつかりと根を張つて来てゐました。で、それだけに猶、彼女を汚すやうな仕方、或ひは弄ぶやうな態度で、最初にその事に觸れたくないと思つてゐました。

左様、私とナオミが始めてさう云ふ關係になつたのはその明くる年、ナオミが取つて十六歳の年の春、四月の二十六日でした。——と、さうハツキリと覺えてゐるのは、實はその時分、いやずつとその以前、あの行水を使ひ出した頃から、私は毎日ナオミに就いていろいろ興味を感じたことを日記に附けて置いたからです。全くあの頃のナオミは、その體つきが一日一日と女らしく、際立つて育つて行きましたから、ちやうど赤子を産んだ親が、「始めて笑ふ」とか「初めて口をきく」とか云ふ風に、その子供を生ひ立のさまを書き留めて置くのと同じやうな心持ちで、私は一一自分の注意を惹いた事柄を日記に誌したのでした。私は今でもときどきそれを繰つて見ることがありますが、大正二年九月二十一日、即ちナオミが十五歳の秋、——の條には斯う書いてあります。

「夜の八時に行水を使はせる。海水浴で日に焼けたのがまだ直らない。ちやうど海水着を着てゐたところだけが白くて、あとが眞つ黒で、私もさうだがナオミは生地が白いから、餘計カツキリと眼について、裸でゐても海水着を着てゐるやうだ。お前の體はまるで縞馬のやうだといつたら、ナオミは可笑しがつて笑つた。……」

それから一月ばかり立つて、十月十七日の條には、
「日に焼けたり皮が剥けたりしてゐたのがだんだん直つたと思つたら、却つて前よりつやつやしい非常に美しい肌になつた。私が腕を洗つてやつたら、ナオミは黙つて、肌の上を溶けて流れて行くシャボンの泡を見つめてゐた。『綺麗なね』と私が云つたら、『ほんとに綺麗なね』と彼女は云つて、『シャボンの泡がよ』と附け加へた。……」

次に十一月の五日——
「今夜始めて西洋風呂を使つて見る。馴れないのでナオミはつるつる湯の中で滑つてきやつきやつと笑つた。『大きなベビーさん』と私が云つたら、私の事を『パパさん』と彼女が云つた。……」

さうです、此の「ベビーさん」と「パパさん」と

はそれから後も屢出ました。ナオミが何かをねだつたり、だだを捏ねたりする時は、いつもふざけて私を「パパさん」と呼んだものです。

「ナオミの成長」——と、その日記にはさう云ふ標題が附いておりました。ですからそれは云ふまでもなく、ナオミに關した事柄ばかりを記したもので、やがて私は寫眞機を買ひ、いよいよメリ・ビクフオードに似て来る彼女の顔をさまざまな光線や角度から映し撮つては、記事の間のところどころへ貼りつけたりしました。

日記のことで話が横道へ外れましたが、兎に角それに依つて見ると、私と彼女とが切つても切れない關係になつたのは、大森へ来てから第二年目の四月の二十六日なのです。尤も二人の間には云はず語らず「了解」が出来てゐたのですから、極めて自然に執方が執方を誘惑するのではなく、殆んど此れと云ふ言葉一つも交さないで、暗黙の裡にさう云ふ結果になつたのです。それから彼女は私の耳に口をつけて、「讓治さん、きつとあたしを捨てないでね。」と、云ひました。

「捨てるなんて、——そんなことは決してないから安心おしよ。ナオミちゃんには僕の心がよく分つてゐるだらうが、……」

「ええ、そりや分つてゐるけれど、……」

「ぢや、いつから分つてゐた？」

「さあ、いつからだか、……」

「僕がお前を引き取つて世話すると云つた時に、ナオミちゃんも僕をどう云ふ風に思つた？」

「お前を立派な者にして、行く行くお前と結婚するつもりぢやないかと、さう云ふ風に思はなかつた？」

「そりや、さう云ふ積りなかしらと思つたけれど、……」

「ぢやナオミちゃんも僕の奥さんになつてもいい氣で来てくれたんだね。」

そして私は彼女の返辭を待つまでもなく、方一杯彼女を強く抱きしめながらつぶやきました。

「ありがとよ、ナオミちゃん、ほんとにありがと、よく分つてゐてくれた。……僕は今こそ正直なことを云ふけれど、お前がこんなに、……こんななまでに僕の理想にかなつた女になつてくれようとは思はなかつた。僕は運がよかつたんだ。僕は一生お前を可愛がつて上げるよ。……お前ばかりを。……世間によくある夫婦のやうにお前を決して粗末にはしないよ。ほんとに僕はお前のために生きてゐるんだと思つてお

くれ。お前の望みは何でもきつと聽いて上げるから、お前ももつと學問をして立派な人になつておくれ。……」

「ええ、あたし一生懸命勉強しますわ、そしてほんとに讓治さんの氣に入るやうな女になるわ、きつと……」

ナオミの眼には涙が流れてゐましたが、いつか私も泣いてゐました。そして二人はその晩ぢゆう、行くすゑのことを飽かず語り明かしました。

それから間もなく、土曜の午後から日曜にかけて郷里へ歸り、母に始めてナオミのことを打ち明けました。此れは一つには、ナオミが國の方の思はくを心配してゐる様子でしたから、彼女に安心を與へるためと、私としても公明正大に事件を運びたかつたので、出来るだけ母への報告を急いだ譯でした。私は私の「結婚」に就いての考へを正直に述べ、どう云ふ譯でナオミを妻に持たたいのか、年寄にもよく納得が行くやうに理由を説いて聞かせました。母は前から私の性格を理解して居り、信用してゐてくれたので、

「お前がさう云ふつもりならその兒を嫁に貰ふもいいが、その兒の里がさう云ふ家だと面倒が

起り易いから、あととの迷惑がないやうに氣を付けて、」

と、たださう云つただけでした。で、おほびらの結婚は二三年先の事にしても、籍だけは早く此方へ入れて置きたいと思つたので、千束町の方にも直ぐ掛け合ひましたが、此れはもともと呑氣な母や兄たちですから、譯なく濟んでしまひました。呑氣ではあるが、さう腹の黒い人達ではなかつたと見えて、怨にからんだやうなことは何一つ云ひませんでした。

さうなつてから、わたしとナオミとの親密さが急速に展開したのは云ふまでもありません。まだ世間で知る者もなく、うはべは矢張り友達のやうにしてゐましたが、もう私たちは誰に憚るところもない法律上の夫婦だつたのです。

「ねえ、ナオミちゃん」

と、私は或る時彼女に云ひました。

「僕とお前は此れから先も友達みたいに暮らさうぢやないか、いつまで立つても。——」

「ぢや、いつ迄立つてもあたしのことを「ナオミちゃん」と呼んでくれる？」

「そりやさうさ、それとも「奥さん」と呼んであげようか？」

「いやだわ、あたし、——」

「さうでなけりや「ナオミちゃん」にしようか？」
「さんはいやだわ、やつぱりぢやんの方がいいわ、あたしがさんにして頂戴つて云ふまでは。」

「さうすると僕も永久に「讓治さん」だね。」
「そりやさうだわ、外に呼び方はありやしないもの。」

ナオミはソオフアへ仰向けにねころんで、薔薇の花を持ちながら、それを頻りに唇へあてていぢくつてゐたかと思ふと、そのとき不意に、

「ねえ、讓治さん」と、さういつて、兩手をひろげて、その花の代りに私の首を抱きしめました。

「僕の可愛いナオミちゃん」と私は息が塞がるくらゐシツカリと抱かれたまま、袂の蔭の暗い中から聲を出しながら、

「僕の可愛いナオミちゃん、僕はお前を愛してゐるばかりぢやない、ほんたうを云へばお前を崇拜してゐるのだよ。お前は僕の寶物だ、僕が自分で見つけ出して研ぎをかけたダイヤモンドだ。だからお前を美しい女にするためなら、どんなものでも買つてやるよ。僕の月給をみんなお前に上げてもいいが。」

「いいわ、そんなにしてくれないでも。そんな事よりか、あたし英語と音楽をもつとほんとに勉強するわ。」

「ああ、勉強おし、勉強おし、もう直ぐピアノも買つて上げるから。さうして西洋人の前へ出ても恥かしくないやうなレディーにおなり、お前ならきつとなれるから。」

——此の「西洋人の前へ出ても」とか、「西洋人のやうに」とか云ふ言葉と、私はたびたび使つたものです。彼女もそれを喜んだことは勿論で、

「どう？ かうやるとあたしの顔は西洋人のやうに見えない？」

などと云ひながら鏡の前でいろいろ表情をやつて見せる。活動寫眞を見る時に彼女は餘程女優の動作に注意を配つてゐるらしく、ピクフオードはかう云ふ笑方をするとか、ピナ・メニケリはそんな工合に眼を使ふとか、ジェルルデイン・フアーラーはいつも頭をかう云ふ風に束ねてゐるとか、もうしまひには夢中になつて、髪を毛までもバラバラに解かしてしまつて、それをさまざまの形にしながら真仰るのですが、瞬間的にさう云ふ女優の癖や感じを捉へることは、彼女は實に上手でした。

「巧いもんだね、とてもその眞似は役者にだつて出来やしないね、顔が西洋人に似てゐるんだから。」

「さうかしら、何處が全體似てゐるのかしら？」

「その鼻つきと齒ならびのせむだよ。」

「ああ、此の齒？」

そして彼女は「い」と云ふやうに唇をひろげて、その齒並びを鏡へ映して眺めるのでした。それはほんとに粒の揃つた非常につやのある綺麗な齒列だつたのです。

「何しろお前は日本人離れがしてゐるんだから、普通の日本の着物を着たんぢや面白くないね。いつそ洋服にしてしまふか、和服にしても一風變つたスタイルにしたらどうだい。」

「ぢや、どんなスタイル？」

「此れからの女はだんだん活潑になるんだから、今迄のやうな、あんな重つ苦しい窮屈な物はいけなと思ふよ。」

「あたし、筒ッぽの着物を着て、兵児帯をしめちやいけなかしら？」

「筒ッぽも悪くはないよ、何でもいいから出来るだけ新奇な風をして見るんだよ。日本ともつかず、支那ともつかず、西洋ともつかないやうな、何かさう云ふなりはないかな——」

「あつたらあたしに拵へてくれる？」

「ああ拵へて上げるとも。僕はナオミちゃんにいろんな形の服を拵へて、毎日毎日取り換へ引換へ着せて見るやうにしたいんだよ。お召だの縮緬だのつて、そんな高い物でなくつてもいい。めりんすや銘仙で深山大から、意匠を奇抜にすることだね。」

こんな話の末に、私たちはよく連れ立つて方方の呉服屋や、デパートメント・ストアへ切れ地を捜しに行つたものでした。殊にその頃は、殆んど日曜日の度毎に三越や白木屋へ行かないことはなかつたでせう。兎に角普通の女物ではナオミも私も満足しないので、此れはと思ふ柄を見つけるのは容易でなく、在り來たりの呉服屋では駄目だと思つて、更紗屋だの、敷物屋だの、ワイシャツや洋服の切れを賣る店だの、わざわざ横濱まで出かけて行つて、支那人街や居留地にある外國人向きの切れ屋だのを、一日がかりで尋ね廻つたことがありましたつが、二人ともくたびれ切つて足を摺粉木のやうにしな

がら、それからそれへと何處迄も品物を漁りに行きます。路を通るにも油断をしないで、西洋人の姿や服装に目をつけたり、到る處のショウ・ウインドウに注意します。たまたま珍し

いものが見つかると、

「あ、あの切れはどう？」

と叫びながら、すぐその店へ這入つて行つてその反物をウインドウから出して來させ、彼女

の身體へあてがつて見て頭の下からだらりと下へ垂らしたり、胴の周りへぐるぐる巻きつけ

たりする。——それは全く、たださうやつて

冷かして歩くだけでも、二人に取つては優に面白

い遊びでした。

近頃でこそ一般の日本の婦人が、オルガンディーや、ジョオゼットや、コットン・ポイルや、ああ云ふものを單衣に仕立てることがポツポツ流行つて來ましたけれども、あれに始めて目を

つけたものは私たちではなかつたでせうか。ナオミは奇妙にあんな地質が似合ひました。それも眞面目な着物ではないので、筒ッぽにし

たり、パヂヤマのやうな形にしたり、ナイト・

ガウンのやうにしたり、反物のまま身體に巻き

つけてところどころをブローチで止めたり、さ

うしてそんななりをしてはただ家の中を往つた

り來たりして鏡の前に立つて見るとか、いろい

ろなポーズを寫眞に撮るとかして見なのです。

白や、薔薇色や、薄紫の、紗のやうに透き徹

それらの衣に包まれた彼女の姿は、一個の生き

た大輪の花のやうに美しく、「かうして御覽
あまして御覽」と云ひながら、私は彼女を抱き
起したり、倒したり、腰かけさせたり、歩かせ
たりして、何時間でも眺めてゐました。

こんな風でしたから、彼女の衣裳は一年間
に幾通りとなく殖えたものです。彼女はそれら
を自分の部屋へはとてしまひきれないので、
手あたり次第に何處へでも吊り下げたり、丸め
て置いたりしてゐました。箆笥を買へばよかつ
たのですが、さう云ふお金があるくらゐなら少
しでも餘計衣裳を買ひたいし、それに私たち
の趣味として、何もそんなに大切に保存する必
要はない。數は多いがみんな安物であるし、ど
うせ傍から着殺してしまふのだから、見える所
へ散らかして置いて、気が向いた時に何通でも
取り換へた方が便利でもあり、第一部屋の裝飾
にもなる。で、アトリエの中は恰も芝居の衣裳
部屋のやうに、椅子の上でもソファの上でも、
床の隅つこでも、甚だしきは椅子段の中途や、
屋根裏の棧敷の手すりに迄も、それがだらしな
く放つたらかしてない所はなかつたのです。そ
してめつたに洗濯をしたことがなく、おまけに
彼女はそれを素肌へ纏ふのが癖でしたから、ど
れも大概は垢じみてゐました。

これらの澤山な衣裳の多くは突飛な模様の
裁ち方になつてゐましたから、外出の際に着
られるやうなのは半分ぐらゐしかなかつたでせ
う。中でもナオミが非常に好きで、りをり戸
外へ着て歩いたのに、縞子の袷せと對の羽織が
ありました。縞子と云つても縞入りの縞子でし
たが、羽織も着物も全體が無地の蠟色で、草履
の鼻緒や、羽織の紐にまで蠟色を使ひ、その他は
すべて、半襟でも、帯でも、帯留でも、襟袢の
裡でも、袖口でも、袖でも、一様に淡い水色を配
しました。帯もやつぱり綿縞子で作つて、心を
うすく、幅を狭く着へて思ひ切り固く胸高に締
め、半襟の布には縞子に似たものが欲しいと云
ふので、リボンを買つて來つてつけたりしました。

ナオミがそれを着て出るのは大抵夜の芝居見物
の時なので、そのぎらぎらした眩しい地質の衣
裳をきらめかしながら、有樂座や帝劇の廊下
を歩くと、誰でも彼女を振り返つて見ないもの
ありません。
「何だらうあの女は？」
「女優かしら？」
「混血兒かしら？」
などといふ囁きを耳にしながら、私も彼女
も得意さうにわざとそこいらをうろついたもの

でした。
が、その着物でさへそんなに人が不思議が
たくらゐるですから、ましてそれ以上に奇抜なも
のは、いくらナオミが風變りを好んでも到底戸
外へ着て行く譯には行きません。それらは實際
ただ部屋の中で、彼女をいろいろな器に入れて
眺めるための、容れ物だつたに過ぎないのです。
たとへば一輪の美しい花を、さまざまな花瓶へ
挿し換へて見ると同じ心持ちだつたでせう。

私に取つてナオミは妻であると同時に、世に
も珍らしき人形であり、裝飾品でもあつたの
ですから、敢て驚くには足りないのです。従
つて彼女は、殆んど家で眞面目ななりをしてゐ
ることはありませんでした。此れも何とか云ふ
「亞米利加の活動劇の男装からヒントを得て、黒
いビロードで着へさせた三ツ組の背廣服など
は、恐らく一番金のかかつた、贅澤な室内着だ
つたでせう。それを着込んで、髪の手をくるく
ると巻いて、鳥打帽子を被つた姿は猫のやうに
なまめかしい感じでしたが、夏は勿論、冬もス
トリーブで部屋を暖めて、ゆるやかなガウンや海
水着一つで遊んでゐることも屢ありました。
彼女の穿いたスリッパの數だけでも、刺繡した
支那の靴を始めとして何足くらゐあつたでせう

か。そして彼女の多くの場合足袋や靴下を着けることはなく、いつもそれらの穿物を直かに素足に穿いてゐました。

六

當時私は、それほど彼女の機嫌を買ひ、ありとあらゆる好きな事をさせながら、一方では又、彼女を十分に教育してやり、偉い女、立派な女に仕立てようと云ふ最初の希望を捨てたこととはありませんでした。此の「立派」とか「偉い」とか云ふ言葉の意味を吟味すると、自分でもハッキリしないのですが、要するに私らしい極く單純な考へで、「何處へ出しても恥かしくない、近代的な、ハイカラ婦人」と云ふやうな、甚だ漠然としたものを頭に置いてゐたのでせう。ナオミを「偉くすること」と、「人形のやうに珍重すること」と、此の二つが果して兩立するものかどうか？——今から思ふと馬鹿げた話ですけれど、彼女の愛に溺惑して眼が眩んでゐた私には、そんな見易い道理さへが全く分らなかつたのです。

「ナオミちゃん、遊びは遊び、勉強は勉強だよ。お前が偉くなつてくれればまだまだ僕はいろいろの物を買つて上げるよ。」

と、私は口癖のやうに云ひました。

「ええ、勉強するわ、さうしてきつと偉くなるわ。」

と、ナオミは私に云はればいつも必ずさう答へます。そして毎日晩飯の後で、三十分くらゐ、私は彼女に會話やリーダーを渡つてやります。が、そんな場合に彼女は例のビロッドの服だのガウンだのを着て、足の突先でスリッパをおもちゃにしたがら椅子に凭れる始末です。から、いくら口でやさしく云つても、結局「遊び」と「勉強」とはごつちやになつてしまふのでした。

「ナオミちゃん、何だねそんな真似をして！勉強する時はもつと行儀よくしなけりやいけないうよ。」

私がさう云ふと、ナオミはびくつと肩をちぢめて、小學校の生徒のやうな甘つ垂れた聲を出して、

「先生、御免なさい。」

と云つたり、

「河合チエンチエイ、勘忍して頂戴な。」と云つて、私の顔をコツツと覗き込むかと思ふと、時にはちよいと頬つべたを突ツついたりする。「河合先生」も此の可愛らしい生徒に對

しては嚴格にする勇氣がなく、叱言の果てがたわいのない惡ふざけになつてしまひます。

一體ナオミは、音楽の方はよく知りませんが、英語の方は十五の歳からもう二年ばかり、ハリソン嬢の教を受けてゐたのですから、本來ならば十分出來ていい筈なので、リーダーも一から始めて今では二の半分以上まで進み、會話の教科書としては「English Echo」を習ひ、文典の本は神田乃武の「Intermediate Grammar」を使つてゐて、先づ中學の三年ぐらゐな實力に相當する譯でした。けれどもいくら最眞眼に見ても、ナオミは恐らく二年生にも劣つてゐるやうに思へました。どうも不思議だ、こんな答はないのだがと思つて、一度私はハリソン嬢を訪ねたことがあります。

「いいえ、そんなことはありません、あの兒はなかなか賢い兒です。よく出來ます。」と、さう云つて、太つた、人の好きさうなその老嬢は、ニコニコ笑つてゐるだけでした。

「さうです、あの兒は賢い兒です、しかしその割に餘り英語がよく出來ないと思ひます。讀むことだけは讀みますけれど、日本語に翻譯することや、文法を解釋することなどが、……」

「いや、それはあなたがいけません、あなたの

考へが違つてゐます。」
と、矢張り老嬢はニコニコ顔で、私の言葉を遮つて云ふのでした。

「日本の人、みな文法やトランスレーションを考へます。けれどもそれは一番悪い。あなた英語を習ひます時、決して決して頭の中で文法を考へてはいけません、トランスレートしてはいけません。英語のままで何度も何度も読んで見ること、それが一番よろしいです。ナオミさんは大變發音が美しい、そしてリーディングが上手ですから、今にきつと巧くなります。」

成るほど老嬢の云ふところにも理窟はあります。が、私の意味は文典の法則を組織的に覺えろと云ふのではありません。二年間も英語を習ひ、リーダーの三が讀めるのですから、せめて過去分詞の使ひ方や、パツシヴ・ウオイスの組み立てや、サブジャンクティブ・ムードの應用法ぐらゐは、實際的に心得ていい筈なのに、和文英譯をやらせて見ると、それがまるきり成つてゐないのです。殆んど中學の劣等生にも及ばないくらいなのです。いくらリーディングが達人だからと云つて、これでは到底實力が養成される道理がない。一體二年間も何を教へ、何を習つてゐただか譯が分らない。しかし老嬢

は不平さうな私の顔つきに頓着せず、ひどく安心しきつたやうな鷹揚な態度で頷きながら、「あの兒は大へん賢いです」を相變らず繰り返すばかりでした。

これは私の想像ではあります。が、どうも西洋人の教師は日本人の生徒に對して一種のえこひいきがあるやうです。えこひいき、——さう云つて悪ければ先入主とでも云ひませうか？

つまり彼等は西洋人臭い、ハイカラな、可愛らしい顔だちの少年や少女を見ると、一も二もなくその兒を惻巧だと云ふ風に感ずる。殊にオールド・ミスであるとその傾向が一層甚しい。ハリスン嬢がナオミを頻りに褒めちぎるのはそのせゐなので、もう頭から「賢い兒だ」ときめてしまつてゐるのでした。おまけにナオミは、ハリスン嬢の云ふ通り發音だけは非常に流暢を極めてゐました。何しろ尙並びがいいところへ聲學の素養があつたのですから、その聲だけを聞いてゐると實に綺麗で、素晴しく英語が出来さうで、私などはまるで足元へも寄りつけないやうに思ひました。それで恐ろくハリソン嬢はその聲に欺かされて、コロリと參つてしまつたに違ひないのです。嬢がどれほどナオミを愛してゐたかと云ふことは、驚いたことに、嬢

の部屋へ通つて見ると、その化粧臺の鏡の周りにナオミの寫眞が澤山飾つてあつたのでも分るのでした。

私は内心嬢の意見や教授法に對しては甚だ不満でしたけれども、同時に又西洋人がナオミをそんなにひいきしてくれる、賢い兒だと云つてくれるのが、自分の思ふ盡なので、恰も自分が褒められたやうな嬉しさを禁じ得ませんでした。のみならず、元來私は、——いや、私

ばかりではありません、日本人は誰でも大概さうですが、——西洋人の前へ出ると頗る意氣地がなくなつて、ハツキリ自分の考へを述べた勇氣がない方でしたから、嬢の奇妙なアクセントのある日本語で、而も堂堂とましく立てられると、結局此方の云ふべきことも云はないでしまひました。なに、向うがさう云ふ意見なら、此方は此方で、足りないところを家庭で補つてやればいいのだと、腹の中でさう極めながら、
「ええ、ほんたうにそれはさうです、あなたの仰つしやる通りです。それで私も分りましたから安心しました。」
とか何とか云つて、曖昧な、ニヤニヤしたお世辭笑ひを浮かべながら、そのまま不得要領

でスゴスゴ歸つて来たのでした。

「讓治さん、ハリソンさんは何と云つたッ——」
と、ナオミはその晩尋ねましたが、彼女の口調はいかにも老練の寵を恃んで、すつかりたかを括つてゐるやうに聞えました。

「よく出来るつて云つてゐたけれど、西洋人には日本人の生徒の心理が分らないんだよ。發音が器用で、ただすらすら讀めさへすりやあいといふのは大間違ひだ。お前はたしかに記憶力はいいい、だから空で覺える事は上手だけれど、翻譯させると何一つとして意味が分つてゐないぢやないか。それぢや鸚鵡と同じことだ。いくら習つても何の足しにもなりやしないんだ。」

私がナオミに叱言らしい叱言を云つたのはその時が初めてでした。私は彼女がハリソン嬢を味方にして、「それ見たことか」と云ふやうに、得意の鼻を齧めかしてゐるのが癪に觸つたばかりでなく、第一こんなで「偉い女」になれかどうか、それを非常に心もとなく感じたのです。英語と云ふものを別問題にして考へても、文典の規則を理解することが出来ないやうな頭では、全く此の先が案じられる。男の兒が中學で幾何や代數を習ふのは何の爲めか、必ずしも實用に供するのが主眼でなく、頭腦

の働きを緻密にし、練磨するのが目的ではないか。女の兒だつて、成るほど今までは解剖的の頭がなくても済んでゐたが、此れからの婦人はさうは行かない。まして「西洋人にも劣らないやうな」立派な「女」にならうとするものが、組織の才がなく、分析の能力がないと云ふのでは心細い。

私は多少依怙地にもなつて、前にはほんの十分ほど凌つてやるだけだつたのですが、それから後は一時間か一時間半以上、毎日必ず和文英譯と文典とを授けることにしたのでした。そしてその間は斷じて遊び半分の氣分を許さず、びしびし叱り飛ばしました。ナオミの最も缺けてゐるところは理解力でしたから、私はわざと意地悪く、細かいことを教へないでちよつとしたヒントを與へてやり、あとは自分で發明するやうに導きました。たとへば文法のパツシヴ・ヴオイスを習つたとすると、早速その應用問題を彼女に示して、

「さ、これを英語に譯して御覽。」
と、さう云ひます。
「今讀んだところが分つてさへゐりや、此れがお前に出来ない筈はないんだよ。」
と、さう云つたきり、彼女が答案を作る迄は

黙つて氣長に構へてゐます。その答案が違つても決して何處が悪いとは云はないで、
「何だいお前、此れぢや分つてゐないんぢやないか、もう一度文法を讀み直して御覽。」
と、何遍でも突つ返します。そしてそれでも出来ないとなると、

「ナオミちゃん、こんな易しいものが出来ないでどうするんだい。お前は一體幾つになるんだ。：幾度も幾度も同じ所を直されて、まだこんな事が分らないなんて、何處に頭を持つてゐるんだ。ハリソンさんが伶俐だなんて云つたつて、僕はちつともさうは思はないよ。此れが出来ないぢや學校に行けば劣等生だよ。」

と、私もついつい熱中し過ぎて大きな聲を出すやうになります。するとナオミはむツと面を膨らせて、しまひにはしくしく泣きだすことがよくありました。
ふだんはほんたうに仲のいい二人、彼女が笑へば私も笑つて、嘗て一度もいさかひをしたことがなく、こんな睡ましい男女はないと思はれる二人、——それが英語の時間になるときまつてお互ひに重苦しい、息の詰まるやうな氣持ちにさせられる。日に一度づつ私が怒らないことはなく、彼女が膨れないことはなく、つい

さつきまであんなに機嫌のよかつたものが、急に雙方ともシヤチコ張つて、殆んど敵意をさへ含んだ眼つきで睨めつくらをする。——「實際、私はその時になると、彼女を偉くするためと云ふ最初の動機は忘れてしまつて、あまりの胸がひなさにデリデリして、心から彼女が憎らしくなつて来るのでした。相手が男の兒だつたら、私はきつと腹立ち紛れにボカリと一つ喰はせたかも知れません。それでなくても夢中になつて「馬鹿ッ」と怒鳴りつけることは始終でした。一度は彼女の額のあたりをこつんと拳骨で小突いたことさへありました。が、さうされるとナオミの方も妙にひねくれて、たとへ知つてゐる事でも決して答へようとはせず、頬を流れる涙を呑みながらいつ迄も石のやうな沈黙を押し通します。ナオミは一旦さう云ふ風に曲り出したら驚くほど剛情で、始末に負へないたちでしたから、最後は私が根負けをして、うやむやになつてしまふのでした。

或るときこんな事がありました。「going」とか「going」とか云ふ現在分詞には必ずその前に「ある」と云ふ動詞、——「to be」を附けなければいけないのに、それが彼女には何度教へても理解出来ない。そして未だに「I going

「He making」と云ふやうな誤りをするので、私は散散腹を立てて例の「馬鹿」を連發しながら口が酸つばくなる程も細かく説明してやつた揚句、過去、未来、未来完了、過去完了といろいろなテンスに互つて、goingの變化をやらせて見ると、呆れた事にはそれがやつぱり分つてゐない。依然として「He will going」とやつたり、「I had going」と書いたりする。私は覺えずがツとなつて、

「馬鹿! お前は何と云ふ馬鹿なんだ!」

goingだの「have going」だのツてことは決して云へないツて人があれほど云つたのがまだお前には分らないか。分らないや分るまでやつて見る。今夜一と晩中かかつても出来るまでは許さないから。」

そして激しく鉛筆を叩きつけて、その帳面をナオミの前へ突き返すと、ナオミは固く唇を結んで、眞つ青になつて、上眼づかひに、チーツと鋭く私の眉間を睨めつけました。と、何と思つたか彼女はいきなり帳面を鷲掴みにして、ピリピリに引き裂いて、ぼんと床の上へ投げ出したきり、再び物凄い瞳を据ゑて私の顔を穴のあくほど睨めるのです。

「何するんだ!」

一瞬間、その、猛獸のやうな氣勢に壓されてアツケに取られてゐた私は、暫く立つてからさう云ひました。

「お前は僕に反抗する氣か。學問なんかどうでもいいと思つてゐるのか。一生懸命に勉強するの、偉い女になると云つたのは、ありや一體どうしたんだ。どう云ふ積りで帳面を破つたんだ。さ、詫まれ、詫まらなけりや承知しないぞ! もう今日限り此の家を出て行つてくれ!」

しかしナオミは、まだ剛情に押し黙つたまま、その眞つ青な顔の口もとに、一種泣くやうな薄笑ひを浮かべてゐるだけでした。

「よし! 詫まらなけりやそれでいいから、今直ぐ此處を出て行つておくれ! さ、出て行けと云つたら!」

そのくらゐにして見せないといつても彼女を威嚇かすことは出来まいと思つたので、ついと私は立ち上つて脱ぎ捨ててある彼女の着換へを二三枚、手早く固めて風呂敷に包み、二階の部屋から紙入れを持つて来て十圓札を二枚取り出し、それを彼女に突きつけながら云ひました。

「さあ、ナオミちゃん、此の風呂敷に身の周りの物を入れてあるから、此れを持つて今夜淺草

へ歸つておくれ。就いては此處に二十間ある。少いけれど當座の小遣ひに取つてお置き。いづれ後からキツパリと話はつけるし、荷物は明日にでも送り届けて上げるから。——え？ ナオミちゃん、どうしたんだよ、なぜ黙つてゐるんだよ。……」

さう云はれると、きかぬ氣のやうでもそこは流石に子供でした。容易ならぬ私の劍幕にナオミはいささか怯んだ形で、今更後悔したやうに殊勝らしく項を垂れ、小さくなつてしまふのでした。

「お前もなかなか剛情だけれど、僕にしたつて一旦斯うと云ひ出したら、決して其の儘にや濟まさないよ。悪いと思つたら詫まるがよし、それが厭なら歸つておくれ。……さ、執方にするんだよ、早く極めたらいいぢやないか。詫まるのかい？ それとも淺草へ歸るのかい？」

すると彼女は首を振つて「いやいや」をします。

「ぢや、歸りたくないのかい？」

「うん」と云ふやうに、今度は頷で頷いて見せます。

「ぢや、詫まると云ふのかい？」

「うん」

と、又同じやうに頷きます。

「それなら勘忍して上げるから、ちゃんと手を衝いて詫まるがいい。」

で、仕方がなしにナオミは机へ兩手を衝いて、——それでもまだ何處か人を馬鹿にしたやうな風つきをしながら、不精つたらしく横ツつちよを向いてお辭儀をします。

かういふ傲慢な、我が儘な根性は、前から彼女にあつたのであるか、或ひは私が甘やかし過ぎた結果なのか、いづれにしても目を經るに従つてそれがだんだん昂じて來つたこと

は明かでした。いや、實は昂じて來たのではなく、十五六の時分にはそれを子供らしい愛嬌として見逃してゐたのが、大きくなつても止まないで次第に私の手に餘るやうになつたの、かも知れません。以前はどんなにだだを担ねても此言を云へば素直に聽いたのですが、もう此の頃では少し氣に喰はないことがあると、直ぐにむうツと膨れ返る。それでもしくしく泣いたりされればまだ可愛げがありますけれど、時には私がいかに厳しく叱りつけても涙一滴こぼさないで、小憎らしいほど空惚けたり、例の鋭い上眼を使つて、まるで狙ひをつけるやうに一直線に私を見据ゑる。——もし實際に動物電

氣と云ふものがあるなら、ナオミの眼にはきつと多量にそれが含まれてゐるのだらうと、私はいつもさう感じました。なぜならその眼は女のものとは思はれない程、炯炯として強く凄じく、おまけに一種底の知れない深い魅力を湛へてゐるので、グツツと息に睨められると、折折悚然とするやうなことがあつたからです。

七

その時分、私の胸には失望と愛慕と、互ひに矛盾した二つのものが交る交る闘き合つておました。自分が撰擇を誤まつたこと、ナオミは自分の期待したほど賢い女ではなかつたこと、——もう此の事實はいくら私のひいき眼でも否むに由なく、彼女が他日立派な婦人になるであらうと云ふやうな望みは、今となつては全く夢であつたことを悟るやうになつたのです。やつぱり育ちの悪い者は争はれない、千束町の娘にはカフエエの女給が相當なのだ、柄のない教育を受けたところで何にもならない。

私はしみじみさう云ふあきらめを抱くやうになりました。が、同時に私は、一方に於いてあきらめながら、他の一方ではますます強く彼女の肉體に惹きつけられて行つたのでした。

さうです、私は特に「肉體」と云ひます、なぜならそれは彼女の皮膚や、齒や、唇や、髪や、瞳や、その他あらゆるなまめかしい姿態の美しさであつて、決してそこには精神的の何物もなかつたのですから。つまり彼女は頭腦の方では私の期待を裏切りながら、肉體の方ではよいよますます理想通りに、いやそれ以上に、美しさを増して行つたのです。「馬鹿な女」仕様のない奴だ」と、思へば思ふほど尙意地悪くその美しさに誘惑される。此れは實に私に取つては不幸な事でした。私は次第に彼女を「仕立ててやらう」と云ふ純な心持ちを忘れてしまつて、寧ろあべこべにずるずる引き摺られるやうになり、此れではいけないと氣が付いた時には、既に自分でもどうする事も出来なくなつてゐたのでした。

「世の中の事は凡て自分の思ひ通りに行くものではない。自分はナオミを、精神と肉體と、兩方面から美しくしようとした。そして精神の方面では失敗したけれど、肉體の方面では立派に成功したぢやないか。自分は彼女が此の方面で此れほど美しくならうとは思ひ設けてゐなかつたのだ。さうして見ればその成功は他の失敗を補つて餘りあるではないか。」

——私は無理にもさう云ふ風に考へて、それで満足するやうに自分の氣持ちを仕向けて行きました。

「讓治さんは此の頃英語の時間にも、あんまりあたしを馬鹿馬鹿ツて云はないやうになつたわね。」

と、ナオミは早くも私の心の變化を見て取つてさう云ひました。學問の方には疎くつても、私の顔色を讀むことにかけては彼女は實に敏かつたのです。

「ああ、あんまり云ふと却つてお前が意地を突ツ張るやうになつて、結果がよくないと思つたから、方針を變へることにしたのさ。」

「ふん」

と、彼女は鼻先で笑つて、

「そりやあさうよ、あんなに無闇に馬鹿馬鹿ツて云はれりあ、あたし決して云ふ事なんか聴きやしないわ。あたし、ほんたうはね、大概な問題はちやんと考へられたんだけど、わざと讓治さんを困らしてやらうと思つて、出来ないふりをしてやつたの、それが讓治さんには分らなかつた？」

「へえ、ほんたうかかね？」

私はナオミの云ふことが空威張りの負け惜

しみであるのを知つてゐながら、故意にさう云つて驚いて見せました。

「當り前さ、あんな問題が出来ない奴はありやしないわ。それを本氣で出来ないと思つてゐるんだから、讓治さんの方がよつほど馬鹿だわ。あたし讓治さんが怒るたんびに、可笑しくつて可笑しくつて仕様がなかつたわ。」

「呆れたもんだね、すつかり僕を一杯喰はせてゐたんだね。」

「どう？ あたしの方が少し惻巧でしょ？」

「うん、惻巧だ、ナオミちゃんには敵はないよ。」

すると彼女は得意になつて、腹を抱へて笑ふのでした。

讀者諸君よ、ここで私が突然妙な話しをし出すのを、どうか笑はないで聞いて下さい。と云ふのは、嘗て私は中學校にゐた時分歴史の時間にアントニーとクレオパトラの條を教はつたことがあります。諸君も御承知のことですが、あのアントニーがオクタヴィアヌスの軍勢を迎へてナイルの河上で船戦をする、と、アントニーに附いて來たクレオパトラは、味方の形勢が非なりと見るや、忽ち中途から船を返して逃げ出してしまふ。然るにアントニーは此の

薄情な女王の船が自分を捨てて去るのを見る
と、危急存亡の際ではあるにも拘はらず、戦争な
どは其方除けにして、自分も直ぐに女王のあと
を追ひ驅けて行きます。――

「諸君」と、歴史の教師はその時私たちに云ひ
ました。

「此のアントニーと云ふ男は女の尻を追つ驅
け廻して、命をおとしてしまつたので、歴史の
上に此のくらゐ馬鹿を曝した人間はなく、實に
どうも、古今無類の物笑ひの種であります。英雄
豪傑もいやは斯うなつてしまつては、……」

その云ひ方が可笑しかつたので、學生たちは
教師の顔を眺めながら一度にとつと笑つたもの
です。そして私も、笑つた仲間の一人であつた
ことは云ふまでもありません。

が、大切なのはこの處です。私は當時、
アントニーともあらう者がどうしてそんな薄
情な女に迷つたのか、不思議でなりませんで
した。いや、アントニーばかりではない、すぐ
その前にもジュリアス・シーザーの如き英傑が、
クレオパトラに引つかかつて器量を下げてゐ
る。さう云ふ例はまだその外にいくらでもある。
徳川時代のお家騒動や、一國の治亂興廢の跡を
尋ねると、必ず薩に物凄ひ妖婦の尿管がない

ことはない。ではその尿管と云ふのは、一旦
それに引つかかれば誰でもコロリと欺されるほ
ど、非常に陰險に、巧妙に仕組まれてゐるかと
云ふのにどうもさうではないやうな氣がする。
クレオパトラがどんなに惻巧な女だつたとし

たとところでまさかシーザーやアントニーより智
慧があつたとは考へられない。たとへ英雄で
なくつても、その女に真心があるか、彼女の言
葉が諷かほんとかぐらゐるなことは、用心すれば
洞察出来る筈である。にも拘はらず、現に自分
の身を亡ぼすのが分つてゐながら欺されてしま
ふと云ふのは、餘りと云へば腑甲斐ないことだ。

事實その通りだつたとすると、英雄なんて何も
それほど偉い者ではないかも知れない、私はひ
そかにさう思つて、マーク・アントニーが「古今
無類の物笑ひの種」であり、「このくらゐ歴史の
上に馬鹿を曝した人間はない」と云ふ教師の批
評を、そのまま肯定したものでした。

私は今でもあの時の教師の言葉を胸に浮か
べ、みんなと一緒にゲラゲラ笑つた自分の姿
を、想ひ出すことが屢あるのです。そして想
ひ出す度毎に、もう今日では笑ふ資格がないこ
とをつくづくと感じます。なぜなら私は、どう
いふ譯で羅馬の英雄が馬鹿になつたか、アント

ニーとも云はれる者が何故たわいなく妖婦の手
管に巻き込まれてしまつたか、その心持ちが
現在となつてはハッキリ領けるばかりでなく、
それに對して同情をさへ禁じ得ないくらゐで
すから。

よく世間では「女が男を欺す」と云ひます。し
かし私の経験によると、此れは決して最初か
ら「欺す」ではありません。最初は男が自ら
進んで「欺される」のを喜ぶのです、惚れた女
が出来て見ると、彼女の云ふことが諷であらう
と眞實であらうと、男の耳には凡べて可愛い。

たまたま彼女が空涙を流しながら凭れかかつ
て來たりすると、
「ははあ、此奴、此の手で己を欺さうとしてゐ
るな。でもお前は可笑しな奴だ、可愛い奴だ、
己にはちやんとお前の腹は分つてるんだが、折
角だから欺されてやるよ。まあまあたんと己を
お欺し……」

と、そんな風に男は大腹中に構へて、云はば
子供を嬉しがらせるやうな氣持ちで、わざとそ
の手に乗つてやります。ですから男は女に欺さ
れる積りはない。却つて女を欺してやつてゐる
のだと、さう考へて心の中で笑つてゐます。
その證據には私とナオミとが矢張りさうで

した。

「あたしの方が讓治さんよりお利巧だわね。」

と、さう云つて、ナオミは私を欺し終せた氣になつてゐる。私は自分を開拔け者にして、欺された體を装つてやる。私に取つては淺はかな彼女の諺を發くよりか、寧ろ彼女を得意がらせ、さうして彼女のよるこぶ顔を見てやつた方が、自分もどんなにうれしか知れない。のみならず私は、そこに自分の良心を満足させる言譯さへも持つてゐました。と云ふのは、たとへナオミが利巧な女でないとしても、利巧だと云ふ自信を持たせるのは悪くない事だ。日本の女の第一の短所は確乎たる自信のない點にある。だから彼等は西洋の女に比べていぢけて見える。近代的の美人の資格は、顔だちよりも才氣煥發な表情と態度とにあるのだ。よしや自信と云ふ程でなく、單なる己惚れであつてもいいから、「自分は賢い」「自分は美人だ」と思ひ込むことが、結局その女を美人にさせる。

一例を擧げると、私とナオミとはその頃しばしば兵隊將棋やトランプをして遊びましたが、本氣でやれば私の方が勝てる譯なのに、成るべく彼女を勝たせるやうにしてやつたので、次第に彼女は勝負事では自分の方がずつと強者だ」と思ひ驕つて、

「さあ、讓治さん、一つ捻つてあげるから入らっしゃいよ。」

などと、すつかり私を見縊つた態度で挑んで來ます。

「ふん、それぢや一番復讐戦をしてやるかな。——なかに、眞面目でかかりやお前なんかに負けやしないんだが、相手が子供だと思ふもんだから、ついつい油斷しちまつて、——」

「まあいいわよ、勝つてから立派な口をおききなさいよ。」

「よし來た！ 今度こそほんとに勝つてやるから！」

さう云ひながら、私は殊更下手な手を打つて相變らず負けてやります。

「どう？ 讓治さん、子供に負けて口惜しかなこと？——もう駄目だよ、何と云つたつてあたしに抗やしないわよ。まあ、どうだらう、三十一にもなりながら、大の男がこんな事

十八の子供に負けるなんて、まるで讓治さんはやり方を知らないのよ。」

そして彼女は「やつぱり歳よりは頭だわね」とか、「自分の方が馬鹿なんだから、口惜しがつたつて仕方がないわよ」とか、いよいよ圖に乗つて、

「ふん——」

と、例の鼻の先で生意氣さうにせせら笑ひます。

が、恐ろしいのは此れから來る結果なのです。始めのうちは私がナオミの機嫌を取つてやつてゐる。少くとも私自身はそのつもりである。ところがだんだんそれが習慣になるに従つて、ナオミは眞に強い自信を持つやうになり、今度はいくら私が本氣で踏ん張つても、事實彼女に勝てないやうになるのです。

人と人との勝ち負けは理智に依つてのみ極まるのではなく、そこには「氣合ひ」と云ふものがあります。云ひ換へれば動物電氣です。まして賭け事の場合には尙更さうで、ナオミは私と決戦すると、初めから氣を呑んでかかり、素晴らしい勢で打ち込んで來るので、此方はギリギリと壓し倒されるやうになり、立ち怯れがしてしまふのです。

「ただでやつたつて詰まらないから、幾らか賭けてやりませうよ。」

と、もうしまひにはナオミはすつかり味を始めて、金を賭けなければ勝負をしないやうになりました。すると賭ければ賭けるほど、私の負けは嵩んで来ます。ナオミは一文なしの癖に、十銭とか二十銭とか、自分で勝手に單位をきめて、思ふ存分小遣ひ錢をせしめます。

「ああ、三十圓あるとあの着物が買へるんだけれど。……又トランプで取つてやらうかな。」

などと云ひながら挑戦して来る。たまには彼女が負けることがありましたが、さう云ふ時には又別の手を知つてゐて、是非その金が欲しいとなると、どんな真似をしても、勝たずに置きませんでした。

ナオミはいつでもその「手」を用ひられるやうに、勝負の時は大概ゆるやかなガウンのやうなもの、わざとぐずぐずにだらしない纏つてゐました。そして形勢が悪くなると淫らにはしく居すまひを崩して、襟をはだけたり、足を突き出したり、それで駄目だと私の膝へ凭れかかつて頬ツべたを撫でたり、口の端を摘まんでぶるぶると振つたり、ありとあらゆる誘惑を試みました。私は實に此の「手」にかかつては弱

りました。就中最後の手段——此れはちよつと此處へ書く譯に行きませんが、——をとられると、頭の中が何だかもやもやと曇つて来て、急に眼の前が暗くなつて、勝負のことなど何が何やら分らなくなつてしまふのです。

「ずるいよ、ナオミちゃん、そんなことをしちや、……」

「ずるかないわよ、此れだつて一つの手だわよ。」

「うーん、気が遠くなつて、凡べての物が霞んで行くやうな私の眼には、その聲と共に満面に媚びを含んだナオミの顔だけがぼんやり見えます。にやにやした、奇妙な笑ひを浮かべつたその顔だけが……」

「ずるいよ、ずるいよ、トランプにそんな手があるもんぢやない、……」

「ふん、ない事があるもんか、女と男と勝負事をすりや、いろんなおまじなひをするもんだわ。あたし餘所で見ただけがあるわ。子供の時分に、内で姉さんが男の人とお花をする時、傍で見てもたらいろんなおまじなひをやつたわ。トランプだつてお花とおんなじ事ぢやないの。……」

私は思ひます、アントニーがクレオパトラ

に征服されたのも、つまりは斯う云ふ風にして、次第に抵抗力を奪はれ、圓め込まれてしまつたのだらうと。愛する女に自信を持たせるのはいいが、その結果として今度は此方が自信を失ふやうになる。もうさうなつては容易に女の優越感に打ち勝つことは出来なくなります。そして思はぬ禰禰がそこから生じるやうになります。

八

ちやうどナオミが十八の歳の秋、残暑のきびしい九月初旬の或る夕方のことでした。私はその日、會社の方が暇だつたので一時間ほど早く切り上げて、大森の家へ歸つて来ると、思ひがけなく門を這入つた庭の所に、つひぞ見馴れない一人の少年が、ナオミと何か話してゐるのを見かけました。

少年の歳は矢張りナオミと同じくらゐ、上だとしてもせいぜい十九を越えてはゐまいと思へました。白地紉の單衣を着て、ヤンキー好みの、派手なりボンの附いてゐる麥藁帽子を被つて、ステッキで自分の下駄の先を叩きながらしやべつてゐる、緒類の、眉毛の濃い、目鼻立ちが悪くないが満面にいきびのある男。ナオミはそ

の男の足下にしゃがんで花壇の蔭に隠れてゐるので、どんな様子をしてゐるのだからはつきり見えませんでした。百日草や、おいらん草や、カシナの花の咲いてゐる間から、その横顔と髪の色だけが僅かにチラチラするだけでした。男は私に気がつくのと、帽子を取つて會釋をして、

「ちやあ、又、」
と、ナオミの方を振り向いて云ひながら、すぐすたすたと門の方へ歩いて來ました。

「ちやあ、さよなら、」
と、ナオミもつづいて立ち上りましたが、「さよなら」と男は、後ろ向きのままさう云ひ捨てて、私の前を通る時帽子の縁へちよつと手をかけて、顔を隠すやうにしながら出て行きました。

「誰だね、あの男は？」
と、私は嫉妬と云ふよりは、「今のは不思議な場面だつたね」と云ふやうな、軽い好奇心で聞いたのでした。

「あれ？ あれはあたしのお友達よ、濱田さんて云ふ、——」

「いつ友達になつたんだい？」

「もう先からよ、——あの人も伊皿子へ禰樂を習ひに行つてゐるの。顔はあんなに、きびだら

けで汚いけれど、歌を唄はせるとほんとに素敵よ。いいバリトンよ。此の間の音楽會にも私と一緒にクワレルテットをやつたの。」

云はないでもない顔の悪口を云つたので、私はふいと疑ひを起して彼女の眼の中を見ましたけれど、ナオミの素振りには落ち着いたもので、少しも平素と異なつた所はなかつたのです。

「ちよいちよい遊びにやつて來るのかい。」

「いいえ、今日が始めてよ、近所へ來たから寄部を拵へるから、是非あたしにも這入つてくれつて云ひに來たのよ。」

私は多少不愉快だつたのは事實ですが、しかしだんだん聞いて見ると、その少年が全くそれだけの話をしに來たのであることは、誰でもないやうに考へられました。第一彼とナオミとが、私の歸つて來さうな時刻に、庭先でしゃべつてゐたと云ふこと、それは私の疑ひを晴らすのに充分でした。

「それでお前は、ダンスをやるつて云つたのかい。」

「考へて置くつて云つといたんだけれど、

と、彼女は急に甘つたれた猫撫で聲を出しな

がら、
「ねえ、やつちやいけない？ よう！ やらしよう！ 譲治さんも俱樂部へ這入つて、一緒に習へばいいぢやないの。」

「僕も俱樂部へ這入れるのかい？」

「ええ、誰だつて這入れるわ。伊皿子の杉崎先生の知つてゐる露西亞人が教へるのよ。何でも西比利亞から逃げて來たんで、お金がなくつて困つてるもんだから、それを助けてやりたいと云ふんで俱樂部を拵へたんですつて。だから一人でもお弟子の多い方がいいのよ。——ねえ、やらせてよう！」

「お前はいいが、僕が覺えられるかなア。」

「大丈夫よ、直きに覺えられるわよ。」

「だけど、僕には音楽の素養がないからなア。」

「音楽なんか、やつてゐるうちに自然と分るやうになるわよ。……ねえ、譲治さんもやらなきや駄目。あたし一人でやつたつて踊りに行けやしないもの。よう、さうして時時二人でダンスに行かうぢやないの。毎日毎日内で遊んでばかりゐたつて詰まりやしないわ。」

——ナオミが此の頃、少し今迄の生活に退屈を感じてゐるらしいことは、うすうす私にも分つてゐました。考へて見れば私たちが大

森へ巢を構へてから、既に足かけ四年になりま
す。そしてその間私たちは、夏の休みを除く
外は此の「お伽噺の家」の中に立て籠つてひろ
世の中との交際を斷ち、いつもいつもただ二人
きりで顔突き合はせてゐたのですから、いく
らいろいろな「遊び」をやつて見たところで、結
局退屈を感じて来るのは無理ありません。

ましてナオミは非常に飽きつぽい「ち」で、どん
な遊びでも初めは馬鹿に夢中になりますが、決
して長つづきしないのです。そのくせ何かし
てゐなければ、一時間でもちつとしてはゐられ
ないので、トランプもいや、兵隊将棋もいや、
活動俳優の眞似事もいや、となると、仕方がな
しに暫く捨てて顧みなかつた花壇の花をいぢ
くつて、せつせと土を掘り返したり、種を蒔い
たり、水をやつたりしましたけれど、それも一
時の氣紛れに過ぎませんでした。

「あーあ、詰まんないなア、何か面白い事はな
いかなア。」

と、ソオファの上に反り返つて讀みかけの小
説本をおツぼり出して、彼女が大きく欠伸をす
るのを見るにつけても、此の單調な二人の生活
に一轉化を與へる方法はないものかと、私も内
内それを氣にしてゐたのでした。で、恰もさう

云ふ際でしたから、此れは成る程、ダンスを習
ふのも悪くはなからう。もはやナオミも三年前
のナオミではない。あの鎌倉へ行つた時分とは
譯が違ふから、彼女を立派に盛装させて社交界
へ打つて出たら、恐らく多くの婦人の前でもひ
けを取るやうな事はなからう。——と、その想
像は私に云ひ知れぬ誇りを感じさせました。

前にも云ふやうに、私には學校時代から格別
親密な友達もなく、此れまで出来るだけ無駄な
付き合いを避けて暮らしてはゐましたけれど、
しかし決して社交界へ出るのが嫌ではなかつた
のです。田舎者で、お世辭が下手で、人との應
對が我ながら無細工なので、そのために引つ込
み思案になつてゐたものの、それだけに又、却
つて一層華やかな社會を慕ふ心がありました。

もともとナオミを妻にしたのも彼女をうんと
美しい夫人にして、毎日方方へ連れて歩いて、
世間の奴等に何とか彼とか云はれて見たい。
「君の奥さんは素敵なハイカラだねと、交際場
裡で褒められて見たい。と、そんな野心が大い
に働いてゐたのですから、さういつ迄も彼女
を「小鳥の籠」の中へしまつて置く氣はなかつた
のです。

ナオミの話では、その露西亞人の舞踊の教師

はアレキサンドラ・シユレムスカヤと云ふ名前
の、或る伯爵の夫人だと云ふことでした。夫
の伯爵は革命騒ぎで行くへ不明になつてしま
ひ、子供も二人あつたのださうですが、それも
今では居所が分らず、やつと自分の身一つを
日本へ落ちのびて、ひどく生活に窮してゐた
のを、今度いよいよダンスの教授を始めること
になつたのださうです。で、ナオミの音楽の先
生である杉崎春枝女史が夫人の爲めに俱樂部を
組織し、そして幹事になつたのがあの濱田と云
ふ、摩應義塾の學生でした。

稽古場にあてられたのは三田の聖坂にある、
吉村と云ふ西洋楽器店の二階で、夫人はそこへ
毎週二回、月曜日と金曜日に出張する。會
員は午後の四時から七時迄の間に、都合のい
い時を定めて行つて、一回に一時間づつ教へ
て貰ひ、月謝は一人前二十圓、それを毎月前金
で拂ふと云ふ規定でした。私とナオミと二人
で行けば月月四十圓もかかる譯で、いくら相手
が西洋人でも馬鹿げてゐるとは思ひましたが、
ナオミの云ふにはダンスと云へば日本の踊りも
同じことで、どうせ贅澤なものだからそのくら
ゐ取るのは當り前だ。それにそんなに稽古しな
いでも、器用な人なら一と月ぐらゐ、不器用な

者でも三月もやれば覚ええられるから、高いと云つても知れたことだ。

「第一何だわ、そのシレムスカやつて云ふ人を助けてやらないぢや氣の毒だわ。昔は伯爵の夫人だつたのがそんなに落ちぶれてしまふなんて、ほんとに可哀さうぢやないの。濱田さんに聞いたんだけれど、ダンスは非常に巧くて、ソシアール・ダンスばかりぢやなく、希望者があればステーチ・ダンスも教へるんだつて。ダンスばかりは藝人のダンスは下品で、駄目だわ、ああ云ふ人に教へるのが一番いいのよ。」と、まだ見たこともないその夫人に、彼女は頻りと肩を持つて、一ぱしダンス通らしいことを云ふのでした。

さう云ふ譯で私とナオミとは、兎に角入會することに、毎月曜日と金曜日に、ナオミは音楽の稽古を濟ませ、私は會社の方が退けると、すぐその足で午後六時迄に聖城の樂器店へ行くことにしました。始めの日は午後五時に田町の驛でナオミが私を待ち合はせ、そこから連れだつて出かけたが、その樂器店は坂の中途にある、間口の狭いさやかな店でした。中へ這入るとピアノだの、オルガンだの、蓄音器だの、いろいろな樂器が窮屈な場所に列んでゐて、

もう二階ではダンスが始まつてゐるらしく、騒い足取りと蓄音器の音が聞えました。ちやうど梯子段の上り口のところに、廣應の學生らしいのが五六人うぢやうぢやしてゐて、それがデロデロ私とナオミの様子を見るのが、あまり好い氣持ちはしませんでしたが、

「ナオミさん、」と、その時馴れ馴れしい大きな聲で、彼女を呼んだ者がありました。見ると今の學生の一人で、フラット・マンドリン——と云ふのでせうか、平べつたい、ちよつと日本の月琴のやうな形の樂器を小脇にかかへて、その調子を合はせながら鉦金の絃をチリチリ鳴らしてゐるのです。

「今日はア。」と、ナオミも女らしくない、書生ツぽのやうな口調で應じて、
「どうしたのまアちゃん？ あんたダンスをやらぬいの？」
「やあだア、已あ。」
と、そのまあちゃんと呼ばれた男は、ニヤニヤ笑つてマンドリンを棚の上に置きながら、
「あんなもな已あ眞つ平御免だ。第一お前、月謝を二十圓も取るなんて、まるでたけえや。」

「だつて始めて習ふんなら仕方がないわよ。」
「なあに、いづれそのうちみんなが覺えるだらうから、さうしたら奴等を取つ習まへて習つてやるのよ。ダンスなんざあそれで澤山よ。どうでえ、要領がいいだらう。」
「ずるいわまアちゃん！ あんまり要領がよ過ぎるわよ——ところで『濱さん』は二階にゐる？」

「うん、ゐる、行つて御覽。」
此の樂器屋は此の近邊の學生たちの溜りになつてゐるらしく、ナオミもちよいちよい來るものと見えて、店員などもみんな彼女と顔馴染なのでした。

「ナオミちゃん、今下にゐた學生たちは、ありや何だね？」
と、私は彼女に導かれて梯子段を上りながら尋ねました。
「あれは廣應のマンドリン俱樂部の人たちの、口はぞんざいだけれど、そんなに悪い人たちぢやないのよ。」
「みんなお前の友達なのかい。」
「友達つて云ふ程ぢやないけれど、時々此處へ買ひ物に來るとあの人たちに會ふもんだから、それで知り合ひになつちやつたの。」

「ダンスをやるのは、ああ云ふ連中が重なか
なあ。」

「さあ、どうだか、——さうぢやないでしょ、
學生よりはもつと年を取つた人が多いいんぢやな
い?——今行つて見れば分るわよ。」

二階へ上ると、廊下の取つ突きに稽古場があ
つて、「ワン、トウウ、スリー」と云ひながら足拍
子を踏んでゐる五六人の人影が、すぐと私の眼
に入りました。日本座敷を二た間打ち抜いて、
靴穿きのまま這入れるやうな板敷にして、多
分滑りをよくする爲めか何かでせう、例の濱田
と云ふ男が彼方此方へチヨコチヨコ驅けて歩い
ては、細かい粉を床の上へまいてゐます。まだ
日の長い暑い時分のことだつたので、すつつか
り障子を明け放してある西側の窓から、夕日が
きらきらとさし込んでゐる、そのほの紅い光
を背に浴びせながら、白いジヨオゼットの上衣
をして、紺のサージのスカートを穿いて、部屋
と部屋との間仕切りの所に立つてゐるのが、云
ふ違もなくシユレムスカヤ夫人でした。二人の
子供があると云ふのから察すれば、實際の歳は
三十五六にもなるのでせうか? 見たところで
は漸く三十前後ぐらゐで、成る程貴族の生れ
らしい威厳を含んだ、きりりと引き緊つた顔だ

ちの婦人——その威厳は、多少の凄みを覺えさ
せるほど蒼白を帯びた、澄んだ血色のせんで
あらうと思はれましたが、しかし凜乎たる表
情や、潇洒な服装や、胸だの指だのに輝やいて
ゐる寶石を見ると、此れが生活に困つてゐる人
とはどうしても受け取れませんでした。

夫人は片手に鞭を持つて、心持ち氣むづか
しさに眉根を寄せながら、練習してゐる人人
の足元を睨んで、「ワン、トウウ、トウリー——
露西亞人の英語ですから、"Three"を"Two"と
發音するのです。——と、静かな、しかし命令的
な態度を以て繰り返してゐます。それに従つ
て、練習生が列を作つて、覺えないステップを
踏みつつ、往つたり來たりしてゐるところは、
女の士官が兵隊を訓練してゐるやうで、いつ
か淺草の金龍館で見たことのある、女軍出征し
想ひ出しました。練習生のうちの三人は、兎に
角學生ではないらしい背廣服を着た若い男で、
あとの二人は女學校を出たばかりの、どこかの
令嬢であります。質素ななりをして、袴を
穿いて、男と一緒に一生懸命に稽古してゐる
のが、いかにも眞面目なお嬢さんらしくて悪い
感じはしませんでした。夫人は一人でも足を間
違へた者があると、忽ち

「No!」
と、鋭く叱して、傍へやつて來て歩いて見せ
る。聲えが悪くて餘りたびたび間違へると、

「No! No!」
と叫びながら、鞭でびしりツと床を叩いたり、
男女の容赦なくその人の足を打つたりします。
「教へ方が實に熱心でいらつしやいますのね、
あれでなければいけませんわ。」

「ほんたうにね、シユレムスカヤ先生けりや
熱心でいらつしやいますの。日本人の先生方だ
とどうしてもああは参りませんが、西洋の方
はたとへ御婦人でも、其處はキチンとしてい
らして、全く氣持がようございませぬよ。
そしてあの通り授業の間は一時間でも二時間
でも、ちつともお休みにならないで稽古をおつ
づけになるので、此の暑いのお大抵で
はあるまいと思つて、アイスクリームでも差し
上げようかと申すのですけれど、時間の間は
何も要らないと仰つしやつて、決して召し上ら
ないんです。」

「まあ、よくそれでもつておくれたびれになりま
せんね。」

「西洋の方は體が出来ていらつしやるから、わ
たくし其とは違ひますのね。——でも考へる

とお氣の毒な方でございますわ、もとは伯爵の奥様で、何不自由なくお暮らしになつていらしたのが、革命のために斯う云ふ事までなされるやうになつたのですから。――」

待合室になつてゐる次の間のソファに腰かけて、稽古場の有様を見物しながら、二人の婦人がさも感心したやうにこんな事をしゃべつてゐます。一人の方は二十五六の、唇の薄く大きい、支那金魚の感じがする圓顔の出眼の婦人で、髪を割らずに、額の生え際から頭の頂邊へはりぬすみの臀部の如く次第に高く膨らまして、髻の所へ非常に大きな白髓甲の帯を挿して、埃及模様の鹽瀬の丸帯に翡翠の帯留めをしてゐるのですが、シユレムスカヤ夫人の境遇に同情を寄せ、しきりに彼女を褒めちぎつてゐるのは此の婦人の方なりました。それに合従を打つてゐるもう一人の婦人は、汗のために厚化粧のお白粉がぶちになつて、ところどころに小皺のある、荒れた地肌が出てゐるのから察すると、恐らく四十近いのでせう。わざとか生れつきか束髪に結つた精細い髪の毛がぼうぼうと縮れた、瘦せたひよろ長い體つきの、身なりは派手にしてゐますけれど、ちよつと看護婦上りのやうな顔だちの女でした。

此の婦人連を取り巻いて、つましやかに自分の番を待ち受けてゐる人人もあり、中には既に一通りの練習を積んだらしく、でんでんに腕を組み合はせて、稽古場の隅を踊り廻つてゐるものもあります。幹事の濱田は夫人の代理と云ふ格なのか、自分でそれを氣取つてゐるのか、そんな連中の相手になつて踊つてやつたり、蓄音器のレコードを取り換へたりして、獨りで目まぐるしく活躍してゐます。一體女は別として、男でダンスを習ひに来ようと云ふ者は、どう云ふ社會の人間なのかと思つて見ると、不思議なことになつた服を着てゐるのは濱田ぐらゐで、あとは大概安月給取りのやうな、野暮くさい紺の三つ組みを着た、氣の利かなさうなのが

多いのでした。尤も歳は皆私より若さうで、三十臺と思はれる紳士はたつた一人しかありません。その男はモーニングを纏つて、金縁の分の厚い眼鏡をかけて、時勢おくれの奇妙に長い八字髭を生やしてゐて、一番呑み込みが悪いらしく、幾度となく夫人に「No, no」とどや、しつければ、鞭でピシリと喚はされます。と、その度毎にニヤニヤ間の抜けた薄笑ひをしながら、又始めから「ワン、トゥウ、スリー」をやり直します。

ああ云ふ男が、いい歳をしてどう云ふつもりでダンスをやる氣になつたものか? いや、考へると自分も矢張りあの男と同じ仲間ぢやないのだらうか? それでなくても嗜れがましい場所へ出たことのない私は、此の婦人たちの眼前で、あの西洋にどやしつけられる刹那を思ふと、いかにナオミのお附き合ひとは云ひながら、何だか斯う、見てゐるうちに冷汗が湧いて来るやうで、自分の番の循つて来るのが恐ろしいやうになるのです。

「やあ、入らつしやい。」と、濱田は二三番踊りつづけて、ハンケチでいきびだらけの額の汗を拭きながら、その時傍へやつて来ました。「や、此の間は失禮しました。」と今日はいささか得意さうに、改めて私に挨拶をして、ナオミの方を向きながら、「此の暑いのによく来てくれたね、――君、濟まないが扇子を持つてたら貸してくれたらいいか、何しろどうも、アツシスタントもなかなか樂な仕事ぢやないよ。」ナオミは帯の間から扇子を出して渡してやつて、「でも濱さんはなかなか上手ね、アツシスタ

ントの資格があるわ。いつから稽古し出したのよ。」

「僕かい？ 僕はもう半歳もやってゐるのさ。

けれど君なんか器用だから、すぐ覚えるよ、ダンスは男がリードするんで、女はそれに喰つ着いて行けりやあいんだからね。」

「あの、此處にゐる男の連中はどう云ふ人たちが多いでせうか？」

「私がさう云ふと、

「はあ、此れですか。」

と、濱田は鄭重な言葉になつて、

「此の人たちは大概あの、東洋石油株式會社の社員の方が多いです。杉崎先生の御親戚が會社の重役をして居られるので、その方からの御紹介ださうですがね。」

東洋石油の會社員とソシアル・ダンス！——

随分妙な取り合はせだと思ひながら、私は重ねて尋ねました。

「ぢやあ何ですか、あのあすに居る髭の生えた紳士も、やつぱり社員なんですか。」

「いや、あれは違ひます、あの方はドクトルなんです。」

「ドクトル？」

「ええ、やはりその會社の衛生顧問をして居

られるドクトルなんです。ダンスぐらゐ體の運動になるものはないと云ふんで、あの方は寧ろその爲めにやつて居られるんです。」

「さう？ 濱さん」

と、ナオミが口を挟みました。

「そんなに運動になるのか知ら？」

「ああ、なるとも、ダンスをやつてたら冬でも一杯汗を掻いて、シャツがぐちやぐちやになるくらゐだから、運動としては確かにいいね。おまけにシユレムスカヤ夫人のは、あの通り練習が猛烈だからね。」

「あの夫人は、日本語が分るのでせうか？」

「私がさう云つて尋ねたのは、實はさつきからそれが氣になつてゐたからでした。」

「いや、日本語は殆んど分りませんが、大概英語でやつてゐますよ。」

「英語はどうも、……スピーキングの方になると、僕は不得手だもんだから……」

「なあに、みんな御同様でさあ。シユレムスカヤ夫人だつて、非常なブロークン・イングリツシユで、僕等よりひどいくらゐですから、ちつとも心配はありませんよ。それにダンスの稽古なんか、言葉はなんにも要りやしません。ワ、ン、トウウ、スリーで、あとは身振りで分るんです。」

から。……」

「おや、ナオミさん、いつお見えになりましたか？」

と、その時彼女に聲をかけたのは、あの白鯉甲の簪を挿した、支那金魚の婦人でした。

「ああ、先生、——ちよいと、杉崎先生よ。」

ナオミはさう云つて、私の手を執つて、その婦人のゐるソオフアの方へ引つ張つて行きました。

「あの、先生、御紹介いたします、——河合巖治——」

「ああ、さう、——」

と、杉崎女史はナオミが靨した顔をしたので、皆まで聞かずにそれと意味を悟つたらしく、立ち上つて會釋しながら、

「——お初にお目に懸ります、わたくし、杉崎でございます。ようこそお越し下さいました。」

——ナオミさん、その椅子を此方へ持つていらつしやい。」

そして再び私の方を振り返つて、

「さあ、どうぞおかけ遊ばして。もう直きでございますけれど、さうして立つてお待ちになつていらしつちや、おくたびれになりますわ。」

「……」

「私は何と挨拶したかハツキリ覚えておまさんが、多分口の中でも、ぐもぐやらせたただけだつたでせう。此の、「わたくし」と云ふやうな切口上でやつて來られる婦人達が、私には最も苦手でした。そればかりでなく、私とナオミとの關係をどう云ふ風にか解釋してゐるのか、ナオミがそれをどの點までほのめかしてあるのか、ついうっかりして質して置くのを忘れたので、尙更どきまぎしたのでした。」

「あの、御紹介いたしますが、」

と、女史は私のもぢもぢするのに頓着なく、例の縮れ毛の婦人の方を指しながら、

「此の方は横濱のジェームス・ブラウンさんの奥さんでいらつしやいます。——此の方は大井町の電気會社にいらつしやる河合讓治さん、——」

成る程、すると此の女は外國人の細君だつたのか、さう云はれれば看護婦よりも洋装タイプだと思ひながら、私はいよいよ固くなつてお辭儀をするばかりでした。

「あなた、失禮でございますけれど、ダンスのお稽古をなさいますのは、フォイスト・タイムでいらつしやいますの？」

その縮れ毛は直ぐに私を掴まへて、こんな風

にしゃべり出しましたが、「フォイスト・タイム」と云ふところがいやに氣取つた發音で、ひどく早口に云はれたので、

「は？」

と云ひながら私が、どもどしてゐると、

「ええ、お始めてなのでございますの。」

と、杉崎女史が傍から引き取つてくれました。

「まあ、さうでいらつしやいますか、でもねえ、何でございませう、そりやジェンルマンはレディーよりもモー・モー・デイフィカルトでございませうけれど、お始めになれば直きに何でございませう。……」

此の「モー・モー」と云ふ奴が、又私には分りませんでしたが、よく聞いて見ると、「more more」と云ふ意味なのです、「ジェントルマン」を「ジェンルマン」、「リットル」を「リルル」、凡べてさう云ふ發音の仕方て話の中へ英語を挟みます。そして日本語にも一種奇妙なアクセントがあつて、三度一度は「何でございませう」を連發しながら、油紙へ火がついたやうに際限もなくしゃべるのです。

それから再びシユレムスカヤ夫人の話、ダンスの話、語學の話、音楽の話……ベトオウエ

ンのソナタが何だとか、第三シンフオーニーがどうしたとか、何何會社のレコードは何何會社のレコードより良いとか悪いとか、私がさつかりしよげて黙つてしまつたので、今度は女史を相手にしてべらべらやり出すその口ぶりから推察すると、此のブラウン氏の夫人と云ふのは杉崎女史のピアノの弟子でもありませうか。そして私はこんな場合に、「ちよつと失禮いたします」と、いい潮時を見計つて席を外すと云ふやうな、器用な眞似が出来ないので、此の饒舌家の婦人の間に挟まつた不運を嘆息しながら、否でも應でもそれを拜聴してゐなければなりませんでした。

やがて、髭のドクトルを始めとして石油會社の一團の稽古が終ると、女史は私とナオミとをシユレムスカヤ夫人の前へ連れて行つて、最初にナオミ、次ぎに私を、——此れは多分レディーを先にする——極めて流暢な英語で以て引きたのでせう、——極めて流暢な英語で以て引き合はせました。その時女史はナオミのことを「ミス・カワイ」と呼んだやうでした。私は内内、ナオミがどんな態度を取つて西洋人と應對するか、興味を持つて待ち受けてゐましたが、ふだんは已惚れの強い彼女も、夫人の前へ出てはさ

すがにちよつと狼狽の氣味で、夫人が何か一言二言云ひながら、威嚴のある眼元に微笑を含んで手をさし出すと、ナオミは眞つ赤な顔をして何も云はずにコソコソと握手をしました。私と来ては尚更の事で、正直のところ、その青白い彫刻のやうな輪廓を、仰ぎ見ることは出来ませんでした。そして黙つて俯向いたまま、ダイヤモンドの細かい粒が無数に光つてゐる夫人の手を、そうツと握り返しただけです。

九

私が、自分は野暮な人間であるにも拘はらず、趣味としてはハイカラを好み、萬事に於て西洋流を眞似したことは、既に讀者も御承知の筈です。若しも私に十分な金があつて、氣儘な事が出来たら、私は或ひは西洋に行つて生活を、西洋の「女を妻にしたかも知れませんが、それは境遇が許さなかつたので、日本人のうちでは兎に角西洋人くさいナオミを妻としたやうな譯です。それにもう一つは、たとへ私に金があつたとしたところで、男振りに就いての自信がない。何しろ背が五尺二寸と云ふ小男で、色が黒くて、齒並びが悪くて、あの堂堂たる體格の西洋人を女房に持たうなどは、

身の程を知らな過ぎる。矢張り日本人には日本人同士がよく、ナオミのやうなのが一番自分の註文に嵌まつてゐるのだと、さう考へて結局私は満足してゐたのです。

が、さうは云ふものの、白哲人種の婦人に接近し得ることは、私に取つて一つの喜び、いや、喜び以上の光榮でした。有體に云ふと、私は私の交際下手と語學の才の乏しいのに愛想を盡かして、そんな機會は一生過つて来ないものとあきらめを附け、たまに外人團のオペラを見るときか、活動寫眞の女優の顔に馴染むとかして、わづかに彼等の美しさを夢のやうに慕つてゐました。然るに圖らずもダンスの稽古は、西洋の女——おまけにそれも伯爵の夫人——と接近する機會を作つたのです。ハリソン嬢のやうなお婆さんは別として、私が西洋の婦人と握手する「光榮」に浴したのは、その時が生れて始めてでした。私はシユレムスカヤ夫人がその「白手」を私の方へさし出したとき、覺えず胸をどきツとさせ、それを握つていいものかどうか、ちよつと躊躇したくらゐりました。

ナオミの手だつて、しなやかで艶があつて、指が長長とほつそりしてゐて、勿論優雅でない

ことはない。が、その「白手」はナオミのそれのやうにきやしいや過ぎないで、掌が厚くたつぷりと肉を持ち、指もなよなよと伸びてゐながら、弱弱しい薄つべらな感じがなく、「太い」と同時に「美しい」手だ。——と、私はそんな印象を受けました。そこに嵌めてゐる眼玉のやうにギラギラした大きな指環も、日本人ならきつと嫌味になるでせうに、却つて指を纖麗に見せ、氣品の高い、豪華な趣を添へてゐます。そして何よりもナオミと違つてゐたところは、その皮膚の色の異常な白さです。白い下に向すい紫の血管が、大理石の斑紋を想はせるやうに、ほんのり透いて見える凄艶さです。私は今迄ナオミの手をおもちゃにしなから、
「お前の手は實にきれいだ、まるで西洋人の手のやうに白いね。」

と、よくさう云つて褒めたものですが、斯うして見ると、残念ながらやつぱり違ひます。白いやうでもナオミの白さは消えてゐない、いや、一旦此の手を見たあとではどす黒くさへ思はれます。それからもう一つ私の注意を惹いたのは、その爪でした。十本の指頭の悉くが、同じ貝殻を集めたやうに、どれも鮮かに小爪が揃つて、櫻色に光つてゐたばかりでなく、大方

此れが西洋の流行なのでありませうか、爪の先が三角形に、びんと尖らせて切つてあつたのです。

ナオミは私と並んで立つと一寸ぐらゐる低かつたことは、前に記した通りですが、夫人は西洋人としては小柄なやうに見えながら、それでも私よりは上背があり、踵の高い靴を穿いてゐるせるか、一緒に踊るとちやうど私の頭とすれすれに、彼女の露はな胸がありました。夫人が始めて、

“Walk with me!”

と云ひつつ、私の背中へ腕を廻してワンステップの歩み方を教へたとき、私はどんなに此の眞つ黒な私の顔が彼女の肌に觸れないやうに、遠慮したことでせう。その滑かな清楚な皮膚は、私に取つてはただ遠くから眺めるだけで十分でした。握手してさへ濟まないやうに思はれたのに、その柔かな羅衣を隔てて彼女の胸に抱きかかへられてしまつては、私は全くしてはならないことをしたやうで、自分の息が臭くはなからうか、此のにちやにちやした脂ツ手が不快を興へはしなからうかと、そんな事ばかり氣にかかつて、たまたま彼女の髪の毛が落ちて來ても、ヒヤリとしないではゐ

られませんでした。それのみならず夫人の體には一種の甘い匂ひがありました。

「あの女アひでえ腋臭だ、とてもくせえや！」と、例のマンドリン俱樂部の學生たちがそんな悪口を云つてゐるのを、私は後で聞いたことがありますが、西洋人には腋臭が多いさうです。夫人も多分さうだつたに違ひなく、それを消すために始終注意して香水をつけてゐたのでせうが、しかし私にはその香水と腋臭との交つた、甘酸っぱいやうなほのかな匂ひが、決して厭でなかつたばかりか、常に云ひ知れぬ蠱惑でした。それは私に、まだ見たこともない海の彼方の國國や、世にも妙なる異國の花崗を想ひ出させました。

「ああ、これが夫人の白い體から放たれる香氣か。」

と、私は恍惚となりながら、いつもその匂ひを貪るやうに嗅いだものです。私のやうなぶきツちよな、ダンスなど云ふ花やかな空氣には最も不適當であるべき男が、ナオミの爲とは云ひながら、どうしてその後飽きもしないで、一月も二月も稽古に通ふ氣になつたか。——私は敢て白狀しますが、

それは確かにシエレムスカヤ夫人と云ふものがあつたからです。毎月曜日と金曜日の午後、夫人の腕に抱かれて踊ること。そのほんの一時間が、いつの間にか私の何よりの楽しみとなつてゐたのです。私は夫人の前に出ると、全くナオミの存在を忘れしました。その一時間はたとへば芳烈な酒のやうに、私を酔はせずには置けませんでした。

「謙治さんは思ひの外熱心ね、直きイヤになるかと思つたら。——」

「どうして？」

「だつて、僕にダンスが出来るかななんて云つたアぢやないの。」

ですから私は、そんな話が出るたびに、何だかナオミに濟まないやうな氣がしました。

「やれさうもないと思つたけれど、やつて見ると愉快なもんだね。それにドクトルの云ひ草ぢやないが、非常に體の運動になる。」

「それ御覽なさいな、だから何でも考へてゐないで、やつて見るもんだわ。」

と、ナオミは私の心の祕密には氣がつかないで、さう云つて笑ふのでした。

さて、大分稽古を積んだからもうそろそろよからうと云ふので、始めて私たちが銀座のカフ

エエ・エルドラドオへ出かけたのは、その年の冬のことでした。まだその時分、東京にはダンス・ホールがさう澤山なかつたので、帝國ホテルや花月園を除いたら、そのカフェエがその頃漸くやり出したくらゐのものだつたでせう。で、ホテルや花月園は外國人が主であつて、服装や禮儀がやかましいさうだから、先づ手初めにはエルドラドオがよからう、と、さう云ふことになつたのでした。尤もそれはナオミが何處からか噂を聞いて來て「是非行つて見よう」と獨りで誘議出したので、まだ私にはおほびらな場所まで踊るだけの度胸はなかつたのですが、一駄目よ、讓治さんは！」

と、ナオミは私を睨みつけて、

「そんな氣の弱いことを云つてゐるから駄目なのよ。ダンスなんて云ふものは、稽古ばかりぢやいくらやつたつて上手になりツこありやしないわよ。人中へ出てづうづうしく踊つてゐるうちに巧くなるものよ。」

「それやあたしかにさうだらうけれども、僕にはその、づうづうしさがないもんだから……」

「ぢや面白いわよ、あたし獨りでも出かけるから……讓さんでもまあ、ちやんでも誘つて行つて、踊つてやるから。」

「まあ、ちやんで云ふのは此の間のマンドリン俱樂部の男だらう？」

「ええ、さうよ、あの人なんか一度も稽古しないくせに何處へでも出かけて行つて相手構はず踊るもんだから、もう此の頃ぢやすつかり巧くなつちやつたわ。讓治さんよりずつと上手だわ。だからづうづうししくなけりや損よ……ね、いらつしやいよ、あたし讓治さんと踊つて上げるわ……ね、後生だから一緒に來て……好い兒、好い兒、讓治さんはほんとに好い兒！」

それで結局出かけることに話が極まると、今度は「何を着て行かう」でまた長いこと相談が始まりました。

「ちよつと讓治さん、どれがいいこと？」

と、彼女は出かける四五日も前から大騒ぎをして、有るだけのものを引つ張り出して、それに一手を通して見るのです。

「ああ、それがいいだらう。」

と、私もしまひには面倒になつて好い加減な返辭をすると、

「さうかしら？ 此れで可笑しいかしら？」

と鏡の前をぐるぐる廻つて、

「變だわ、何だか。あたしこんなぢや氣に入らないわ。」

と、直ぐ脱ぎ捨てて、紙屑のやうに足で蹴くちやに蹴飛ばして、又次ぎの奴を引つけて見ます。が、あの着物もいや、此の着物もいやで、

「ねえ、讓治さん、新しいのを拵へてよ！」

となるのでした。

「ダンスに行くにはもつと思ひ切り派手なものでなけりや、こんな着物ぢや引き立ちほしいわ。よう！拵へてよう！ どうせ此れからちよよい出かけるんだから、衣裳がなけりや駄目ぢやないの。」

その時分、私の月月の収入はもはや到底彼女の舊澤には追ひつかなくなつてゐました。元來私は金錢上の事にかけてはなかなか凡帳面な方で、獨身時代にはちやんと毎月の小遣ひを定め、残りはたとへ僅かでも貯金するやうにしてゐましたから、ナオミと家を持つた當座は可なりの餘裕があつたものです。そして、私はナオミの愛に溺れてゐましたけれど、會社の仕事は決して疎かにしたことはなく、依然として精勵格闘な模範的社員だつたので、重役の信用も次第に厚くなり、月給の額も上つて來て、半期半期のボーナスを加へれば、平均月に四百圓になりました。だから普通に暮らすのなら二人で樂な譯であるのに、それがどうしても足りま

せんでした。細かいことを云ふやうですが、先づ月月の生活費が、いくら内輪に見積つても二百五十圓以上、場合によつては三百圓もかかります。此のうち家賃が三十五圓、——此れは二十圓だつたのが四年間に十五圓上がりました。——それから瓦斯代、電燈代、水道代、薪炭代、西洋洗濯代等の諸雑費を差し引き、残りの二百圓内外から二百三四十圓と云ふものを、何に使つてしまふかと云ふと、その大部分は喰ひ物でした。

それもその筈で、子供の頃には一品料理のピフテキで満足してゐたナオミでしたが、いつの間にかやらだんだん口が窄つて来て、三度の食事の度毎に「何がたべたい」「彼がたべたい」と、歳に似合はぬ贅澤を云ひます。おまけにそれも材料を仕入れて、自分で料理するなど云ふ面倒臭いことは嫌ひなので、大概近所の料理屋へ注文します。

「あーあ、何か旨い物がたべたいなあア。」

と、退屈するとナオミの云ひ草はきつとそれでした。そして以前は洋食ばかり好きでしたけれど、此の頃ではさうでもなく、三度に一度は「何屋のお碗がたべて見たい」とか、「何處その刺身を取つて見よう」とか、生意氣なこと

を云ひます。

午は私は會社に居ますから、ナオミ一人でたべるのですが、却つてさう云ふ折の方がその贅澤は激しいのです。夕方、會社から歸つて来ると、臺所の隅に仕出し屋のおかもちや、洋食屋の容器などが置いてあるのを、私はしばしば見ることがあります。

「ナオミちゃん、又お前何か取つたんだね！」

お前のやうにでんや物ばかり喰べてゐた日にやお金が懸つて仕様がないう。第一女一人でもつてそんな眞例をするなんて、少しは勿體ない」と云ふ事を考へて御覽。」

さう云はれてもナオミは一向平氣なもので、「だつて、一人だからあたし取つたんだわ、おかづを拵へるのが面倒なんだから。」

と、わざとふてくされて、ソオファの上へふん反り返つてゐるのです。

此の調子だから溜つたものでありません。おかげだけならまだしもですが、時には御飯を焚くのさへ臆病がつて、飯まで仕出し屋から運ばせると云ふ始末でした。で、月末になると、鳥屋、牛肉屋、日本料理屋、西洋料理屋、鮭屋、鰻屋、菓子屋、果物屋と、方々から持つて来る通ひ帳の締め高が、よくもこんなに喰べられ

たものだ、驚くほど多額に上つたのです。

喰ひ物の次ぎに嵩んだのは西洋洗濯の代でした。此れはナオミが足袋一足でも決して自分で洗はうとせず、汚れ物は凡べてクリーニングに出したからです。そしてたまたま此言を云へば、二た旨目には、

「あたし女中ぢやないことよ。」と云ひます。

「そんな、洗濯なんかすりやあ、指が太くなつちやつて、ピアノが弾けなくなるぢやないの、讓治さんはあたしの事を何と云つて？ 自分の實物だつて云つたぢやないの？ だのに此の手が太くなつたらどうするのよ。」

と、さう云ひます。

最初のうちこそナオミは家事向きの用をしてくれ、勝手元の方を働きました。それが續いたのはほんの一年か半年ぐらゐだつたでせう。ですから洗濯物などはまだいいとして、何より困つたのは家の中が日増しに亂雑に、不潔になつて行くことでした。脱いだものは脱ぎツ放し、喰べた物は喰べツ放しと云ふ有様で、喰ひ荒らした皿小鉢だの、飲みかけの茶碗や、湯呑みだの、垢じみた肌着や湯文字だの、いつ行つて見てもそこらに放り出してある。床は

勿論椅子でもテーブルでも埃が溜つてゐないことはなく、あの折角の印度更紗の窓かけも最早や昔日の像を止めず煤けてしまひ、あんなに晴れやかな「小鳥の籠」であつた筈のお伽噺の家の気分は、すつかり趣を變へてしまつて、部屋へ這入るとさう云ふ場所に特有な、むうツと鼻を衝くやうな臭ひがする。私も此れには閉口して、

「さあさあ、僕が掃除をしてやるから、お前は庭へ出ておいで。」

と、掃いたりハタいたりして見たこともありませんけれど、ハタけばハタくほどごみが出て来るばかりでなく、餘り散らかり過ぎてゐるので、片附けたくも手の附けやうがないのでした。

此れでは仕方がないと云ふので、二三度女中を雇つたこともありましたが、来る女中も来る女中もみんな呆れて歸つてしまつて、五日と辛抱してゐるものはありませんでした。第一初めからさう云ふ積りはなかつたので、女中が來ても寝るところがありません。そこへ持つて來て私たちの方でも不遠慮ないちやつきが出來なくなつて、ちよつと二人でふざけるのにも何だか窮屈な思ひをする。ナオミは人手が確えたとなると、いよいよ横着を發揮して、横のもの

を縦にもしないので、一々女中をコキ使ひます。そして相變らざ「何屋へ行つて何を注文して來い」と、却つて前より便利になつただけ、餘計費を並べます。結局女中といふものは非常に不経済でもあり、われわれの「遊び」の生活に取つて邪魔でもあるので、向うも恐れをなしたでせうが、此方も斷つて居て貰ひたくはなかつたのです。

さう云ふ譯で、月月の暮らしがそれだけは懸るとして、あとの百圓か百五十圓のうちから、月に十圓か二十圓づつでも貯金をしたいと思つたのですが、ナオミの錢遣ひが激しいので、そんな餘裕はありませんでした。彼女は必ず、一月に一枚は着物を作ります。いくらめりんすや銘仙でも裏と表とを買つて、而も自分で縫ふことはせず、仕立て賃をかけますから、五十圓や六十圓は消えてなくなる。さうして出來上つた品物は、氣に入らなければ押し入れの奥へ突つ込んで儘まるで着ないし、氣に入つたとなつと膝が抜ける迄着殺してしまふ。ですから彼女の戸棚の中には、ぼろぼろになつた古着が一杯詰まつてゐました。それから下駄の鞆澤を云ひます。草履、駒下駄、足駄、日和下駄、雨ぐり、餘所行きの下駄、不斷の下駄——此れ等が一足

七八圓から二三圓とまりで、十日間に一遍ぐらゐは買ふのですから、積つて見ると安いものではあります。」「斯う下駄を穿いちや溜らないから、靴にしたらいぢやないか。」

と云つて見ても、昔は女學生らしく袴をつけて靴で歩くのを喜んだ癖に、もう此の頃では稽古に行くにも着流しのまま、しやなりしやなりと出かけるの云ふ風で、

「あたし斯う見えても江戸ツ兒よ、なりはどうでも穿きものだけはチャンとしないぢや氣が濟まないわ。」

と、此方を田舎者扱ひにします。

小遣ひなども、音楽會だ、雷車賣だ、教科書だ、雜誌だ、小説だと、三圓五圓ぐらゐづつ三日に上げず持つて行きます。此の外に又英語と音楽の授業料が二十五圓、これは毎月規則的に拂はなければなりません。と、四百圓の收入で以上の負擔に堪へるのは容易でなく、貯金どころかあべこべに貯金を引き出すやうになり、獨身時代にくらか用意して置いたものもチビチビ成し崩しに崩れて行きます。そして、金と云ふものは手を付け出したら誠に早いもので、すから、此の三四年間にすつかり蓄へを使ひ

果して、今では一文もないのでした。

因果な事には私のやうな男の常として、借金きんの斷りを云ふのは不得手、從つて勘定はキチンキチンと拂はなければどうも落ち着いて居られないので、晦日が來ると云ふに云はれない苦勞をしました。「さう使つちや晦日が越せなくなるぢやないか」としたなめても、「越せなければ、待つて貰へばいいわよ」と、云ひます。

「三年も四年も一つ所に住んで居ながら、晦日の勘定が延ばせないなんて法はないわよ。半期半期にはきつと拂ふからつて云へば、何處でも待つてきまつてゐるわ。讓治さんは氣が小さくつて融通が利かないからいけないのよ。」

さう云つた調子で、彼女は自分の買ひたいものは凡べて現金、月月の拂ひはボーナスが這入る迄後廻しと云ふやり方。そのくせ矢張り借金の言譯をするのは嫌ひで、

「あたしそんなこと云ふのは厭だわ、それは男の役目ぢやないの。」

と、月末になればファイと何處かへ飛び出して行きます。

ですから私は、ナオミのために自分の収入を全部捧げてゐたと云つてもいいのです。彼女

女を少しでもよりよく身綺麗にさせて置くこと、不自由な思ひや、ケチ臭いことはさせないで、のんびりと成長させてやること、——それは素より私の本懐でしたから、困る困ると愚痴りながらも彼女の養澤を計してしまひます。

するとそれだけ他の方面を切り詰めるなければならない譯で、幸ひ私は自分自身の交際費はちつとも懸りませんでした、それでもたまに會社關係の會合などがあつた場合、義理を缺いても逃げられるだけは逃げるやうにする。その外自分の小遣ひ、被服費、辨當代などを、思ひ切つて節約する。毎日通ふ省線電車もナオミは二等の定期を買ふのに、私は三等で我慢をする。飯を焚くのが面倒なのででんや物を取られては大變だから、私が御飯を焚いてやり、おかずを拵へてやることもある。が、さう云ふ風になつて來るとそれが又ナオミには氣に入りません。

一男のくせに臺所なんぞ働かなくつてもいいことよ、見ツともないわよ。」

と、さう云ふのです。

「讓治さんはまあ、年が年中同じ服ばかり着てゐないで、もう少し氣の利いたなりをしたらどうなの？ あたし、自分ばかり良くつたつて

讓治さんがそんな風ぢやあやつぱり厭だわ。それぢや一緒に歩けやしないわ。」

彼女と一緒に歩ければ何の楽しみもありませんから、私にしても所謂「氣の利いた」服の一つも拵へなければならなくなる。そして彼女と出かける時は電車も二等へ乗らなければならぬ。つまり彼女の虚榮心を傷けないやうにするためには、彼女一人の養澤では濟まない結果になるのでした。

そんな事情で遣り繰りに困つてゐたところへ、此の頃又シユレムスカヤ夫人の方へ四十圓づつ取られますから、此上ダンスの衣裳を買つてやつたりしたら、つちもさつちも行かなくなりません。けれどもそれを聞き分けるやうなナオミではなく、ちやうど月末のことなので、私のふとところに現金があつたのですから、尙更それを出せといつて承知しません。

一だつてお前、今此の金を出しちゃまつたら、直ぐに晦日に差支へるのが分つてゐさうなものぢやないか。」

「差支へたつてどうにかなるわよ。」

「どうにかなるつて、どうなるのさ。どうにもなりやうはありやしないよ。」

ちやあ何のためにダンスなんか習つたのよ。

「——いいわ、そんなら、もう明日から何處にも行かないから。」

さう云つて彼女は、その大きな眼に露を漙へて、恨めしさうに私を睨んで、つんと黙つてしまふのでした。

「ナオミちゃん、お前怒つてゐるのかい、……え、ナオミちゃん、ちよつと、……此方を向いておくれ。」

その晩、私は床の中に這入つてから、背中を向けて寝たふりをしてゐる彼女の肩を揺す振りながら、さう云ひました。

「よう、ナオミちゃん、ちよつと此方をお向きつてば。……」

そして優しく手をかけて、魚の骨つきを裏返すやうに、ぐるりと此方へ引つくり獲すと、抵抗のないしなやかな體は、うつすらと半眼を閉ぢたまま、素直に私の方を向きました。

「どうしたの？ まだ怒つてるの？」

「……」

「え、おい、……怒らないでもいいぢやないか、どうかかするから、……」

「おい、眼をお開きよ、眼を……」

云ひながら、睫毛がぶるぶる顫へてゐる眼臉

の内を吊りあげると、たとへば貝の實のやうに中からそつと覗いてゐるむつくりとした眼の玉は、寝てゐるところか眞正面に私の顔を覗てゐるのです。

「あの金で買つて上げるよ、ね、いいだらう、……」

「だつて、さうしたら困りやしない？……」

「困つてもいいよ、どうにかするから、」

「ぢやあ、どうする？」

「國へさう云つて、金を送つて貰ふからいいよ、」

「送つてくれる？」

「ああ、それあ送つてくれるとも、僕は今迄一度も國へ迷惑をかけたことはないんだし、二人で一軒持つてゐればいろいろ物が懸るだらうぐらゐなことは、おふくらだつて分つてゐるに違ひないから。……」

「さう？ でもおおかあさんに悪くはない？」

ナオミは氣にしてゐるやうな口ぶりでしたが、その實彼女の腹の中には、田舎へ云つてやればいいのに」と、とうからそんな考へがあつたことは、うすうす私にも讀めてゐました。

私がそれを云ひ出したのは彼女の思ふ壺だつたのです。

「なあに、悪い事なんかなんにもないよ。けれども僕の主義として、さう云ふ事は厭だつたかしらなかつたんだよ。」

「ぢや、どう云ふ譯で主義を變へたの？」

「お前がさつき泣いたのを見たら可哀さうになつちやつたからさ。」

「さう？」

と云つて、波が寄せて来るやうな工合に胸をうねらせて、羞しさうなほほ笑みを浮べながら、

「あたし、ほんとに泣いたかしら？」

「もうどっこへも行かないつて、眼に一杯涙をためてゐたぢやないか。いつまで立つてもお前はまるでだだッ兒だね、大きなベビちゃん！」

「私のパパちゃん！ 可愛いパパちゃん！」

ナオミはいきなり私の頭にしがみつつき、その唇の朱の捺印を、きながら繁忙な郵便局のスタンブ掛りが捺すやうに、額や、鼻や、眼臉の上や、耳朶の裏や、私の顔のあらゆる部分へ、寸分の隙間もなくべたべたと着けました。

それは私に、何か、棒の花のやうな、どつしりと重い、そして露けく軟かい無数の花びらが降つて来るやうな快さを感じさせ、その花びらの薫りの中に、自分の首がすつかり埋まつてし

「うしたどの、ナオミちゃん、お前はまるで氣違ひのやうだね。」

「ああ、氣違ひよ。：：あたし今夜は氣違ひになるほど讓治さんが可愛いんだもの。：：それともうるさい？」

「うるさいことなんかあるものか、僕も嬉しいよ、氣違ひになるほど嬉しいよ、お前のためならどんな犠牲を拂つたつて構やしないよ。：：おや、どうしたの？ 又泣いてるの？」

「ありがとよ、パパさん、あたしパパさんに感謝してるのよ、だからひとりで涙が出るの。：：ね、分つた？ 泣いちやいけない？ いけなけりやあ拭いて頂戴。」

ナオミは懐から紙を出して、自分では拭かずに、それを私の手の中へ握らせました。瞳はチツと私の方へ注がれたまま、今拭いて貰ふその前に、一層涙を滾滾と睫毛の縁まで溢れさせてゐるのです。ああ何と云ふ潤ひを持つた、綺麗な眼だらう。此の美しい涙の玉をそうツと此のまま結晶させて、取つて置く譯には行かないものかと思ひながら、私は最初に彼女の頬を拭いてやり、その圓潤と盛り上つた涙の玉に觸れないやうに眼高の周りを拭

うてやると、皮がたるんだり引つ張れたりする度毎に、ちやうど微風が蓮の露を掃がす如く、玉はいろいろな形に揉まれて、凸面レンズのやうになつたり、凹面レンズのやうになつたり、しまひにははらはらと崩れて折角拭いた頬の上に再び光の絲を曳きながら流れて行きます。すると私はもう一度その頬を拭いてやり、まだいくらかは濡れてゐる眼玉の上を撫でてやり、それからその紙で、かすかな鳴咽をつづけてゐる彼女の鼻の孔をおさへ、

「さ、鼻をおかみ。」
と、さう云ふと、彼女は「チーン」と鼻を鳴らして、幾度も私に涙をかませました。

その明るく日、ナオミは私から二百圓貰つて、一人で三越へ買物に行き、私は會社で午の休みに、母親へ宛てて始めて無心狀を書いたものです。
「：：何分此の頃は物價高く、二三年前とは驚くほどの相違にて、さしたる贅澤を致さざるにも不拘、月月の經費に追はれ、都會生活もなかなか容易に無之、：：」
と、さう書いたのを感じてゐますが、平氣にもせよ、親に向つてこんな上手な諛を云ふほど、それほど自分が大膽になつてしまつたかと

十

思ふと、私は我ながら恐ろしい氣がしました。が、母は私を信じてゐる上に、悴の大事な嫁としてナオミに對しても慈愛を持つてゐたことは、二三日してから手許に届いた返辭を見ても分りました。手紙の中には「なをみに着物でも買つておやり」と私が云つてやつたよりも百圓餘計僞替が封入してあつたのです。

エルドラドオのダンス當夜は土曜日の晩でした。午後の七時半からと云ふので、五時頃會社から歸つて來ると、ナオミは既に湯上りの肌を脱ぎながら、せつせと顔を作つてゐました。
「あ、讓治さん、出來て來たわよ。」
と、鏡の中から私の姿を見るなり云つて、片手を後ろの方へ仰はして、彼女が指し示すソオファの上には、三越へ頼んで大急ぎで作らせた着物と丸帯とが、包みを解かれて長長と並べてあります。着物は口緋の這入つてゐる比翼の袷で、金紗ちりめんと云ふのでせうか、黒みがかつた朱のやうな地色には、花を黄色く葉を緑に、點點と散らした總構模があり、帯には銀絲で縋ひを施した二たすぢ三すぢの波がゆらめき、ところどころに、御座船のやうな古風

な船が浮かんでゐます。

「どう？ あたしの見立ては巧いでせう？」

ナオミは両手にお白粉を溶き、まだ湯煙の立つてゐる肉つきのいい肩から項を、その手のひらで右左からヤケにびたびた叩きながら云ひました。

が、正直のところ、肩の厚い、臂の大きい、胸のつき出た彼女の體には、その水のやうに柔かい地質が、あまり似合ひませんでした。めりんとやうな袖を着てゐると、混血兒の娘のやうな、エキゾティックな美しさがあるのですけれど、不思議な事から云ふ眞面目な衣裳を纏ふと、却つて彼女は下品に見える、模様が派手であればあるだけ、横濱あたりのチャブ屋か何かの女のやうな、粗野な感じがするばかりでした。私は彼女が一人で得意になつてゐるので、強ひて反對はしませんでしたが、此の毒毒しい装ひの女と一緒に、電車へ乗つたりダンス・ホールへ現はれたりするのは、身が竦むやうな氣がしました。

ナオミは衣裳をつけてしまふと、「さ、讓治さん、あなたは紺の背廣を着るのよ。」と、珍らしくも私の服を出して来てくれ、

埃を拂つたり火熨斗をかけたりにしてくれました。た。

「僕は紺より茶の方がいいがな。」

「馬鹿ねえ！ 讓治さんは！」

と、彼女は例の、叱るやうな口調で一と睨み睨んで、

「夜の宴會は紺の背廣かタキシードに極まつてゐるもんよ。さうしてカラーもツフトをしないでステイツフのを着けるもんよ。それがエチケットなんだから、此れから覺えてお置きなさい。」

「へえ、さう云ふもんかね、」

「さう云ふもんよ、ハイカラがつてゐる癖にそれを知らないでどうするのよ。此の紺背廣は随分汚れてゐるけれど、でも洋服はびんと皺が伸びてゐて型が崩れてゐなけりやいいのよ。さ、あたしがちゃんとして上げたから、今夜は此れを着ていらつしやい。そして近いうちにタキシードを拵へなけりやいけなわ。でなけりやあしたし歸つて上げないわ。」

それからネクタイは紺か黒無地で、蝶結びにするのがいいこと、靴はエナメルにすべきだけれど、それがなければ普通の黒の短靴にするのと、赤皮は正式に外れてゐること、靴下もほん

たうは絹がいいのだが、さうでなくても色は黒無地を搦ぶべきこと。——何處から聞いて来たものか、ナオミはそんな講釋をして、自分の服装ばかりでなく、私のことにも一つ一つ嘸しを入れ、いよいよ家を出かける迄にはなかなか手間が懸りました。

向うへ着いたのは七時半を過ぎてゐたので、ダンスは既に始まつてゐました。騒々しいジャズ・バンドの音を聞きながら梯子段を上つて行くと、食堂の椅子を取り拂つたダンス・ホールの入口に、Special Three-Admission: Ladies Free, Gentlemen ¥3.00」と記した貼紙があり、ボーイが一人番をしてゐて、會費を取ります。勿論カフェエのことですから、ホールと云つてもそんなに立派なものではなく、見わたしたところ、踊つてゐるのは十組ぐらゐもあつたでせうが、もうそれだけの人数でも可なりガヤガヤ賑つてゐました。部屋の一方にテーブルと椅子を二列にならべた席があつて、切符を買つて入場した者は各その席を占領し、ときどきそこで休みながら、他人の踊るのを見物するやうな仕組になつてゐるのでせう。そこには見知らない男や女が彼方に一團、此方に一團とかたまりながらしゃべつてゐます。そしてナオミ

が這入つて來ると、彼等には互ひ何かコソコソ
囁き合つて、かう云ふ所でなければ見られな
い、一種異様な、半ば敵意を含んだやうな、半
ば輕蔑したやうな胡散な眼つきで、ケバケバし
い彼女の姿を捜るやうに眺めるのでした。

「おい、おい、あすこにあんな女が來たぞ。」
「あの連れの男は何者だらう？」

と、私は彼等に云はれてゐるやうな氣がし
ました。彼等の視線が、ナオミばかりか、彼女
のうしろに小さくなつて立つてゐる私の上にも
注がれてゐることを、はつきりと感じました。

私の耳にはオーケストラの音楽がガンガン鳴
り響き、私の眼の前には踊りの群衆が、…：み
んな私より遙に巧さうな群衆が、大きな一
つの環を作つてぐるぐる廻つてゐます。同時
に私は、自分がたつた五尺二寸の小男であるこ
と、色が土人のやうに黒くて亂杭齒であること、

二年も前に拵へた歯だ振はない紺の背廣を着
てゐることなどを考へたので、顔がカツカツと
火照つて來て、體中に胴ぶるひが來て、「もう
こんなところへ來るもんぢやない」と思はない
ではゐられませんでした。

「こんな所に立つてゐたつて仕様がないわ。
…：何處か彼方の…：テーブルの方へ行かうぢ

やないの。」

ナオミもさすがに氣怱れがしたのか、私の耳
へ口をつけて、小さな聲でさう云ふのでした。

「でも何か知ら、此の踊つてゐる連中の間を
突ツ切つてもいいのかしら？」

「いいのよ、きつと、…：」
「だつてお前、衝きあたつたら悪いぢやない
か。」

「衝きあたらないやうに行けばいいのよ、…：
ほら、御覽なさい、あの人だつて彼處を突ツ切
つて行つたぢやないの。だからいいのよ、行つ
て見ませうよ。」

私はナオミのあとに附いて廣場の群衆を横
切つて行きましたが、足が顛へてゐる上に床が
つるつる滑りさうなので、無事に向うへ渡り着
く迄が一と苦勞でした。そして一通ガタンと轉
びさうになり、

「チョツ」
と、ナオミに睨みつけられ、しかめツ面をさ
れたことを覚えてゐます。

「あ、あすこが一つ空いてゐるやうだわ、あの
テーブルにしようぢやないの。」

と、ナオミはそれでも私よりは臆面がなく、
ヂロヂロ見られてゐる申をすうツと濟まして通

り越して、とあるテーブルへ就きました。が、
あれ程ダンスを樂しみにしてゐたくせに、すぐ
踊らうとは云ひ出さないで、何だか斯う、ちよ
つとの間落ち着かないやうに、手提げ袋から鏡
を出してこつそり顔を直したりして、

「ネクターが左へ曲つてゐるわよ。」
と、内證で私に注意しながら、廣場の方を
見守つてゐるのです。

「ナオミちゃん、濱田君が來てゐるぢやない
か。」
「ナオミちゃん、云ふもんぢやないわよ、
さんて仰つしやいよ。」
さう云つてナオミは、又むづかしい、しかめツ
面をして、

「濱さんも來てるし、まアちゃんも來てゐるの
よ。」
「どれ、何處に？」
「ほら、あすこに…：」

そして慌てて聲を落して、「指さしをしちや失
禮だわよ。」と、そつと私をたしなめてから、
「ほら、あすこにあの、ピンク色の洋服を着た
お嬢さんと一緒に踊つてゐるでせう、あれが
まアちゃんよ。」

「やあ」

と、云ひながら、その時まアちゃん是我れ我れの方へ寄つて来て、相手の女の肩越しににやにや笑つて見せました。ピンク色の洋服は、せいの高い、肉感的な長い兩腕をムキ出しにした太つた女で、豊かなく云ふよりは鬱陶しいほど澤山ある、眞つ黒な髪を肩の邊りでザクリと切つて、そいつをばやばやと縮らせた上に、リボンの鉢巻をしてゐるのですが、顔はと云ふと、頬つべたが赤く、眼が大きく、唇が厚く、そして何處までも純日本式の、浮世繪にでもありさうな細長い鼻つきをした瓜實顔の輪廓でした。私も随分女の顔には氣をつけてゐる方ですけれど、こんな不思議な、不調和な顔はまだ見たことがありません。思ふに此の女は、自分の顔があまり日本人過ぎるのを此の上もなく不幸に感じて、成るだけ西洋臭くしようと苦心慘情してゐるらしく、よくよく見ると、凡そ外部へ露出してゐる肌と云ふ肌には粉が吹いたやうにお白粉が塗つてあり、眼の周りにはペンキのやうにざらざら光る緑青色の繪の具がぼかしてあるのです、あの頬つべたの眞つ赤なもの、疑ひもなく頬紅をつけてゐるので、おまけにそんなリボンの鉢巻をした恰好は、氣の毒ながらどう考へても化粧物としか思はれません。

「おい、ナオミちゃん、……」
うつかり私はさう云つてしまつて、急いでさんと云ひ直してから、
「あの女はあれでもお嬢さんなのかね？」
「ええ、さうよ、まるで淫賣みただけけれど、……」
「お前さんの女を知つてゐるのかい？」
「知つてゐるんぢやないけれど、よくまアちゃんから話を聞いたわ。ほら、頭へリボンを巻いてるでせう。あのお嬢さんは眉毛が額のうんと上の方にあるので、それを隠すために鉢巻をして、別に眉毛を上の方へ晝いてるんだつて。ね、見て御覽なさいよ、あの眉毛は贗物なのよ。」
「だけど顔だけはそんなに悪くないぢやないか。赤いものだの青いものだの、あんなにゴチヤゴチヤ塗り立ててるから可笑しいんだよ。」
「つまり馬鹿よ。」
ナオミはだんだん自信を恢復して來たらしく、已惚れの強い平素の口調で、云つてのけて、「顔だちだつていい事なんかありやしないわ。あんな女を讓治さんは美人だと思ふの？」
「美人と云ふほどぢやないけれども、鼻も高いし、體つきも悪くはないし、普通に作つたら見られるだらうが。」

「まあ厭だ！ 何が見られるもんぢやない！ あんな顔ならいくらだつてざらにあるわよ。おまけにどうでせう、西洋人臭く見せようと思つて、いろんな細工をしてゐるところはいいけれど、それがちつとも西洋人に見えないんだから、お恩みぢやないの。まるで猿だわ。」
「ところで濱田君と踊つてゐるのは、何處かで見たりやうな女ぢやないか。」
「そりや見た筈だわ、あれは帝園の香野綺羅子よ。」
「へえ、濱田君は綺羅子を知つてゐるのかい？」
「ええ知つてゐるのよ、あの人はダンスが巧いもんだから、方で女優と友達になるの。」
濱田は茶つぽい背廣を着て、チコロト色のボツクスの靴にスパットを穿いて、群集の中でも一と際目立つ巧者な足取で踊つてゐます。そして甚だ怪しからんことには、或ひは斯う云ふ踊り方があるのかも知れませんが、相手の女とべつたり顔を着け合つてゐます。きやしやな、象牙のやうな指を持つた、ぎゆつと抱きしめたら撓つて折れてしまひさうな小丙な綺羅子は、舞臺で見るよりは遙かに美人で、その名の如く綺羅を極めたあでやかな衣裳に、縊子と云ふのか朱珍と云ふのか、黒地に金糸と濃い緑と

で龍を描いた丸帯を締めてゐるのでした。女の
方がせいが低いので、濱田は恰も髪^{かみ}の毛の匂
ひを嗅^かぎでもするやうに、頭^{かぶ}をぐつと斜^{かた}めに
かしげて、耳^{みみ}のあたりを綺羅子の横^{よこ}髪^{かみ}に嗅^かつ着
けてゐる。綺羅子は綺羅子で、眼尻^{めがね}に皺^{しわ}が寄^よる
ほど強く男^{おとこ}の頬^ほツツたへ額^{かみ}をあててゐる。二つ
の顔^{かほ}は四^よつの眼玉^{めがね}をパチクリさせながら、體^{からだ}は
離^{はな}れることがあつて、首^{くび}と首^{くび}とはいづかな離^{はな}
れずに踊^{おど}つて行^いきます。

「讓治さん、あの踊り方を知つてゐる？」

「何だか知らないが、あんまり見つともいいも
んぢやないね。」

「ほんたうよ、實際^{じっしつ}下品^{げひん}よ。」

ナオミはベツベツと唾^{つば}を吐^はくやうな口^{くち}つきを
して、

「あれはチーク・ダンスつて云^いつて、眞面目^{まじめ}な場
所^{ばしょ}でやるものぢやないんだつて。アメリカかた
りであれをやつたら、退場^{たいじやう}して下さいつて云
はれるんだつて。濱^{はま}さんもいいけれど、全く氣
障^{きさう}よ。」

「だが、女^{おんな}の方も女^{おんな}の方^{かた}だね。」

「そりやさうよ、どうせ女^{おんな}優^{やさ}なんて者^{もの}はあんな
者^{もの}よ、全體^{ぜんたい}此^{こゝ}處^{ところ}へ女^{おんな}優^{やさ}を入れるのが悪いんだわ、
そんなことをしたらほんたうのレディーは來^こな

くなるわ。」

「男^{おとこ}にしたつて、お前はひどくやかましいこと
を云^いつたけれど、紺^{くろ}の背^せ廣^{ひろ}を着^きてゐる者は少^{すく}
いぢやないか。濱^{はま}田^だ君^{くん}だつてあんななりをして
ゐるし、……」

これは私が最初^{さいしょ}から氣^きがついてゐた事^{こと}でし
た。知^しつたか振りをしたがるナオミは、所謂^{すうい}エ
テイケツトなるものを聞きかじつて來^きて、無理^{むり}
に私^{わたし}に紺^{くろ}の背^せ廣^{ひろ}を着^きせましたけれど、さて來^き
て見^みると、そんな服装^{ぶさう}をしてゐる者は二三人^{にさん}ぐ
らゐるで、タキシードなどはひとりもなく、あとは大
概^{おほむね}髪^{かみ}色^{いろ}の凝^こつたスーツを着^きてゐるのです。

「そりやさうだけれど、あれは濱^{はま}さんが間違^{まちが}
てるのよ、紺^{くろ}を着^きるのが正式^{せいし}なのよ。」

「さう云^いつたつて……ほら、あの西洋^{せいやう}人^{にん}を御^ご覽^{らん}
あれもホームスパンぢやないか。だから何^{なに}だつ
ていいんだらう。」

「さうぢやないわよ、人はどうでも自分^{じぶん}だけは
正式^{せいし}ななりをして來^きるもんよ。西洋^{せいやう}人^{にん}がああ云
ふなりをして來^きるのは、日本^{にっぽん}人が悪いからなの
よ。それに何^{なん}だわ、濱^{はま}さんのやうに場^ば敷^{じき}を踏^ふ
でゐて、踊^{おど}りが巧^{たくま}い人^{にん}なら格^{かく}別^{べつ}、讓^{じやう}治^ぢさんなん
かなりでもキチンとしてゐなけりや見^みつともな
いわよ。」

廣^{ひろ}場^ばの方^{かた}のダンスの流^{なが}れが一時^{ひととき}に停^とまつて、
盛^{さか}んな拍^{はく}手^てが起^たりました。オーケストラが止^とん
だので、彼^{かれ}等^らはみんな少^{すく}しでも長^{なが}く踊^{おど}りたさう
に、熱^{あつ}心^{しん}なのは口^{くち}笛^{ふえ}を吹^ふき、地^ち團^{だん}太^{たい}を踏^ふんで、ア
ンコールをしてゐるのです。すると音^{おん}樂^{がく}が又^{また}始^{はじ}
まる、停^とまつてゐた流^{なが}れが再^{また}びぐるると動^{うご}
き出す。一^{ひと}としきり立^たつと又^{また}止^とんでしまふ、又^{また}
アンコール……二度も三度も繰^{くり}返^{かへ}して、とう
とういくら手^てを叩^{たた}いても聴^きかれないとなると、踊^{おど}
つた男^{おとこ}は相^あ手^ての女^{おんな}の後^{あと}に従^{したが}つてお供^{お供}のやうに
護^ご衛^ゑしながら、一同^{いどう}ぞろぞろとテールの方^{かた}へ
歸^{かへ}つて來^きます。濱^{はま}田^だとまアちゃんも綺^き羅^ら子^ことピ
ンク色^{ピンクいろ}の洋^{やう}服^{ふく}をめいめいのテールへ送^{おく}り届^{とど}
けて、椅子^{いす}にかけさせて、女^{おんな}の前^{まえ}で鄭^{てい}重^{じゆう}にお辭^じ儀^ぎ
をしてから、やがて揃^{そろ}つて私^{わたし}たちの方^{かた}へやつ
て來^きました。

「やあ、今晚^{こんばん}は。大分^{おほぶん}御^ごゆつくりでしたね。」

さう云^いつたのは濱^{はま}田^だでした。

「どうしたんだい、踊^{おど}らねえのかい？」

まアちゃんも例^{れい}のぞんざいな口^{くち}調^{てう}で、ナオミ
の後^{あと}ろに突^つつ立^たつたまま、眩^{くら}い彼女^{かのんな}の盛^{さか}装^{さう}を
上^うからしげしげと見^みおろして、

「約束^{やくそく}がなけりやあ、此^{こゝ}の次^{つぎ}に己^{おれ}と踊^{おど}らう
か？」

「いやだよ、まあ、ちゃん、下手くそだもの？」
「馬鹿云ひねえ、月謝は出さねえが、此れでも
ちゃんど踊れるから不思議だ。」

と、大きな團子ツ鼻の孔をひろげて、唇を
「へ」の字なりに、えへらえへら笑つて見せて、

「根が御常用でいらつしやるからね。」

「ふん、威張るなよ！ あのピンク色の洋服と
踊つてゐる恰好なんぞあ、あんまりいい團子や
なかつたよ。」

驚いたことには、ナオミは此の男に向ふと、
忽ちこんな亂暴な言葉を使ふのでした。

「や、此奴アいけねえ、」

と、まあ、ちゃんは首をちぢめて頭を振いて、
ちらりと遠くのテーブルにゐるピンク色の方を
振り返りながら、

「己もづうづうしい方ぢや退けを取らねえ積り
だけれど、あの女には敵はねえや、あの洋服で
此處へ押し出して来ようてんだから。」

「何だいありやあ、まるで猿だよ。」

「あははは、猿か、猿たあうめえことを云つた
な、全く猿にちげへねえや。」

「巧く云つてらあ、自分が連れて来たんぢやな
いか。——ほんたうにまあ、ちゃん、見つともな
いから注意しておやりよ。西洋人臭く見せよ

うとしたつて、あの御面相ぢや無理だわよ。ど
だい顔の造作が、ニツボンもニツボンも、純ニ
ツボンと来てるんだから。」

「要するに悲しき努力だね。」

「あははは、さうよほんとに、要するに猿の悲
しき努力よ。和服を着たつて、西洋人臭く見
える人は見えるんだからね。」

「つまりお前のやうにからね。」

ナオミは「ふん」と鼻を高くして、得意のせせ
ら笑ひをしながら、

「さうさ、まだあたしの方が混血兒のやうに見
えるわよ。」

「熊谷君」

と、濱田は私に気がねするらしく、もちも
ちしてゐる様子でしたが、その名でまあ、ちゃん
を呼びかけました。

「さう云へば君は、河台さんとは始めてなんぢ
やなかつたかしら？」

「ああ、お顔はたびたび見たことがあるがね、

「熊谷」と呼ばれたまあ、ちゃんは、矢張ナオミの
背中越しに、椅子の後に俯つ立つたまま、私

の方へデロリと厭味な視線を投げました。
「僕は熊谷政太郎と云ふもんです、——自己紹

介をして置きます、どうか何分——」
「本名を熊谷政太郎、一名をまあ、ちゃんと申し
ます。——」

ナオミは下から熊谷の顔を見上げて、

「ねえ、まあ、ちゃん、ついでにもう少し自己紹
介をしたらどうなの？」

「いや、いけねえ、あんまり云ふとボロが出
るから。——詳しいことはナオミさんから御聞
きを願ひます。」

「アラ、いやだ、詳しい事なんかあたしが何を
知つてゐるのよ。」

「あははは」

この連中に取り巻かれるのは不愉快だとは
思ひながら、ナオミが機嫌よくはしやぎ出した
ので、私も仕方なく笑つて云ひました。

「さ、いかがです、濱田君も熊谷君も、此れへ
お掛けになりませんか。」

「譲治さん、あたし喉が渴いたから、何か飲む
物を云つて頂戴。濱さん、あなた何がいい？」

レモン・スクヲツシユ？」

「え、僕は何でも結構だけれど、……」

「まあ、ちゃん、あんたは？」

「どうせ御馳走になるのなら、ウイスキー・タン
サンに願ひたいね。」

「まあ、呆れた、あたし酒飲みは大嫌ひさ、口が臭くつて！」

「臭くつてもいいよ、臭い所が捨てられないツて云ふんだから。」

「あの猿がかい？」

「あ、いけねえ、そいつを云はれると詫まるよ。」

「あははは」

と、ナオミは透懼からず、體を前後に揺す振りながら、

「ぢや、讓治さん、ボーイを呼んで頂戴——

ウイスキー・タンサンが一つ、それからレモン・スクラツシユが三つ。……あ、待つて、待つて！

レモン・スクラツシユは止めにするわ、フルーツ・カクテルの方がいいわ。」

「フルーツ・カクテル？」

私は聞いたこともないそんな飲み物を、どうしてナオミが知つてゐるのか不思議でした。

「カクテルならばお酒ぢやないか。」

「うそよ、讓治さんは知らないのよ、——まあ、濱ちゃんもまアちゃんも聞いて頂戴、此の人は此の通り野暮なんだから、」

ナオミは「此の人」と云ふ時に人差指で私の肩を軽く叩いて、

「だからほんとに、ダンスに來たつて此の人と二人ぢや間が抜けてゐて仕様がないわ。ぼんやりしてゐるもんだから、さつきも滑つて轉びさうになつたのよ。」

「床がつるつるしてますからね、」

と、濱田は私を辯護するやうに、

「初めのうちは誰でも間が抜けるもんですよ、馴れると追ひ追ひ板につくやうになりますけれど、……」

「ぢや、あたしはどう？ あたしもやつぱり板につかない？」

「いや、君は別さ、ナオミ君は度胸がいいから、……まあ社交術の天才だね。」

「濱さんだつて天才でない方でもないわ。」

「へえ、僕が？」

「さうさ、春野綺羅子といつの間にかお友達になつたりして！ ねえ、まアちゃん、さう思はない？」

「うん、うん」

と、熊谷は下唇を突き出して、頷をしゃくつて頷いて見せます。

「濱田、お前綺羅子にモーションをかけたのかい？」

「ふざけちゃいかんよ、僕あそんなことをするもんかよ。」

「でも濱さんは眞つ赤になつて云ひ譯すだけ可愛いわ。何處か正直な所があるわ。——ねえ、濱さん、綺羅子さんを此處へ呼んで来ない？ よう！ 呼んでらっしゃいよ！ あたしに紹介して頂戴。」

「なんかんで、又冷やかさうツて云ふんだらう？ 君の毒舌に懸つた日にやあ敵はんからなア。」

「大丈夫よ、冷やかさないから呼んでらっしゃいよ、賑やかな方がいいぢやないの。」

「ぢやあ、己もあの猿を呼んで来るかな。」

「あ、それがいい、それがいい、」

と、ナオミは熊谷を振り返つて、

「まアちゃんも猿を呼んどいでよ、みんな一緒にならうぢやないの、」

「うん、よからう、だがもうダンスが始まつたぜ、一つお前と踊つてからにしようぢやないか。」

「あたしまアちゃんぢや厭だけれど、仕方がない、踊つてやらうか。」

「云ふな云ふな、習ひたての癖にしゃがつて、」

「ぢや讓治さん、あたし一遍踊つて来るから見てらっしゃい。後であなたと踊つて上げるか。」

ら。

私は定めし悲しうな、變な表情をしてゐたらうと思ひますが、ナオミはフイと立ち上つて、熊谷と腕を組みながら、再び盛んに動き出した群衆の流れの中へ這入つて行つてしまひました。

「や、今度は七番のフオックス・トロツトか、——」

と、濱田も私と二人になると何となく話題に困らしく、ポケットからプログラムを出して見て、こそこそ臂を持ち上げました。

「あの、僕ちよつと失禮します、今度の番は綺羅子さんと約束がありますから。——」

「さあ、どうぞ、お構ひなく、——」

私は獨り、三人が消えてなくなつた跡へボーイが持つて来たウイスキー・タンサンと、所謂「フルーツ・カクテル」なるものと、四つのコップを前にして、茫然と廣場の景氣を眺めてゐなければなりません。が、もともと私は自分が踊りたいのではなく、斯う云ふ場所ではナオミがどれほど引き立つか、どう云ふ踊り振りをするか、それを見たいのが主でしたから、結局此の方が氣樂でした。で、ほつと解放されたやうな心地で、人波の間に見え隠れするナオミ

の姿を、熱心な眼で追つ懸けてゐました。

「ウム、なかなかよく踊る……あれなら見つともない事はない……ああ云ふ事をやらせるとやつぱりあの兒は器用なものだ……」

可愛いダンスの草履を穿いた白足袋の足を爪立てて、くるりくるりと身を蹴す、華やかな長い袂がひらひらと舞ひます。一步を踏み出す度に、着物の上前前の裾が、蝶蝶のやうにハタハタと跳ね上ります。藝者が撥を持つ時のやうな、巧者な手つきで熊谷の肩を摘まんでゐる眞つ白な指、重くどつしり胴體を締めつけた胸襟な帯地、一莖の花のやうに、此の群衆の中に日立つてゐる項、横顔、正面、後の襟足、——からして見ると、成る程和服も捨てたものではあり

ません、のみならず、あのピンク色の洋服を始め突飛な意匠の婦人たちが居るせるか、私が密かに心配してゐた彼女のケバケバしい好みも、決してそんなに卑しくはありません。

「ああ、暑、暑！ どうだつた、譲治さん、あしたしの踊るのを見てゐた？」

踊りが済むと彼女はテーブルへ戻つて来て、急いでフルーツ・カクテルのコップを前へ引き寄せました。

「ああ、見てゐたよ、あれならどうして、とて

も始めてとは思へないよ。」

「さう？ ぢや今度、ワン・ステツプの時に譲治さんと踊つて上げるわ、ね、いいでしょ？……ワン・ステツプなら易しいから。」

「あの連中はどうしたんだい、濱田君と熊谷君は？」

「え、今来るわよ、綺羅子と猿を引つ張つて。——フルーツ・カクテルをもう二つ云つたらいいわ。」

「さう云へば何だね、今ピンク色は西洋人と踊つてゐたやうだね。」

「ええ、さうなのよ、それが滑稽ぢやあないの、——」

と、ナオミはコップの底を視つめ、ゴクゴクと喉を鳴らして、渴いた口を濕ほしながら、

「あの西洋人は友達でも何でもないのよ、それがいきなり猿の所へやつて来て、踊つて下さ

いッて云つたんだつて。つまり此方を馬鹿にしてゐるのよ、紹介もなしにそんな事を云ふなんて、きつとあの猿を淫蕩か何かと間違へたのよ。」

「ぢや、斷ればよかつたぢやないか。」

「だからさ、それが滑稽ぢやないの。あの猿が又、相手が西洋人だもんだから、斷り切れないで

踊つたところが！ほんたうにいい馬鹿だわ、恥ッ晒しな！」

「だけどお前、さうツケツケと悪口を云ふもんじゃないよ、傍で聞いてゐてハラハラするから。」

「大丈夫よ、あたしにはあたくしで考へがあるわよ。——なあに、あんな女にはそのくらゐのことを云つてやつた方がいいのよ、でないと此方まで迷惑するから。まあちゃんだつて、あれぢや困るから注意してやるつて云つてゐたわ。」

「そりや、男が云ふのはいいだらうけれど、……」

「ちよいと！濱ちゃんが綺羅子を連れて来たわよ、レディーが来たら直ぐに椅子から立つのもよ。」

「あの、御紹介します、——」

と、濱田は私たち二人の前に、兵士の「氣をつけ」のやうな姿勢で立ち止まりました。

「此れが春野綺羅子嬢です。——」

かう云ふ場合、此の女はナオミに比べて優つてゐるか、劣つてゐるか」と、私は自然、ナオミの美しさを標準にしてしまふのですが、今濱田の後から、しとやかなしなを作つて、そ

の口もとに悠然と自信のあるほほ笑みを浮かべながら、ひと足そこへ歩み出た綺羅子は、ナオミより一つか二つ歳かさでもありませうか。が、生き生きとした、娘嬢した點に於いては、小柄なせむもあるせうが、少しもナオミと變りなく、そして衣裳の豪華なことは寧ろナオミを壓倒するものがありました。

「初めまして、……」

と、慣ましやかな態度で云つて、俐巧さうな、小さく圓く、パツチリとした眸を伏せて、こころもち胸を引くやうにして挨拶する、その身のこなしには、さすがは女優だけあつてナオミのやうなガサツな所がありません。

ナオミは爲る事成す事が活潑の域を通り越して、亂暴過ぎます。口の利き方も、つんけんしてゐて女としての優しみに缺け、やとよもする

と下品になります。要するに彼女が野生の獸で、此れに比べると綺羅子の方は、物の言ひやう、眼の伎ひやう、頸のひねりやう、手の舉げやう、凡べてが洗練されてゐて、注意深く、神經

質に、人工の極致を盡して研きをかけられた貴重品の感がありました。たとへば彼女が、テーブルに就いてカクテルのコップを握つた時の、掌から手頭を見ると、實に細い。そのしつと

りと垂れてゐる袂の重みにも得堪へぬほどに、しなしなと細い。きめのこまやかさと色つやのなまめかしさは、ナオミと孰れ劣らずで、私は幾度卓上に置かれた四枚の掌を、代る代る打ち眺めたか知れませんでした、しかし二人の顔の趣は大變に違ふ。ナオミがメリー・ピク

フォードで、ヤンキー・ガールであるとするなら、此方はどうしても伊太利かフランスあたり、しとやかなうちに仄かなる媚びを湛へた幽艶な美人です。同じ花でもナオミは野に咲き、綺羅子は室に咲いたものです。その引き締まつた圓顔の中にある小さな鼻は、まあ何と云ふ肉の薄い、透き徹るやうな綺麗な鼻でせう！餘程の名工が拵へた人形か何かでない限り、赤ん坊の鼻だつてよもやこんな繊細ではありますまい。そして最後に氣がついたことは、ナオミが

日頃自慢してゐる見事な歯並び、それと全く同じ物の真珠の粒が、眞つ赤な瓜を割いたやうな綺羅子の可愛い口脛の中に、その種子のやうに生え揃つてゐたことです。

私が引け目を感じると同時に、ナオミも引け目を感じたに違ひありません。綺羅子が席へ交

つてから、ナオミはさつききの傲慢にも似ず、冷やかすどころか俄かにしんと黙つてしまつて、一

座はしらけ渡りました。が、それでなくても負け惜みの強い彼女は、自分が綺羅子を呼んで来て、「云つた言葉の手前、やがていつもの腕白気分を盛り返したらしく、

「濱さん、黙つてゐないで何か仰つしやいよ。

——あの、綺羅子さんは何ですか、いつから濱さんとお友達におなりになつて？」

と、そんな風にぼつぼつ始めました。

「わたくし？」

と、綺羅子は云つて、冴えた瞳をばつと明るくして、

「つい此の間からですよ。」

「あたくし」

と、ナオミも相手の「わたくし」口調に釣り込まれながら、

「今拜見して居りましたけれど、随分お上手でいらつしやいますね、よつほどお習ひになりましたの？」

「いいえ、わたくし、やる事はあの、前からやつて居りますけれど、ちつとも上手になりませんのよ、不器用なものですから、……」

「あら、そんなことはありませんわ。ねえ濱さん、あんたどう思ふ？」

「そりや巧い筈ですよ、綺羅子さんののは女優養

成所で、正式に稽古したんだから。」

「まあ、あんなことを仰つしやつて」

と、綺羅子はほうッとはにかんだやうな素振りを見せて、俯向いてしまひます。

「でもほんたうにお上手よ、見わたしたところ、男で一番巧いのは濱さん、女では綺羅子さん……」

「まあ」

「何だい、ダンスの品評會かい？ 男で一番うめえのは何と云つても已ぢやあねえか——」

と、そこへ熊谷がピンク色の洋服を連れて割り込んで来ました。

此のピンク色は、熊谷の紹介に依ると青山の方に住んでゐる實業家のお嬢さんと、井上菊子と云ふのでした。もはや婚期を過ぎかけてゐる二十五六の歳頃で、——此れは後で聞いたのですが、二三年前或る所へ嫁いだのに、あまりダンスが好きなので近頃離縁になつたのださうです。

——わざとさう云ふ夜會服の下に肩から腕を露にした装ひは、大方豊艷なる肉體美を賣り物にしてゐるのでせうが、さて斯うやつて向ひ合つた様子では、豊艷と云はんより脂

ぎつた大年増と云ふ形でした。尤も貧弱な體格よりは此のくらゐな肉づきの方が、洋服には

似合ふ譯ですけれど、何を云ふにも困つたのはその顔だけです。西洋人形へ京人形の首をつけたやうな、洋服とは甚だ縁の遠い目鼻立ち、

——それもそのままにして置けばいいのに、成るべく縁を近くしようと思つて、彼方此方へ餘計な手入れをして、折角の器量をダイナシにしてしまつてゐる。見ると成る程、本物の眉毛は録巻の下に隠されてゐるに違ひなく、その眼の上に引いてあるのは明かに作り物なのです。それから眼の縁の青い隈取り、頬紅、入れぼくろ、唇の線、鼻筋の線、と、殆んど顔のあらゆる部分が不自然に作つてあります。

「まあちゃん、あんた猿は嫌ひ？」

と、突然ナオミがそんな事を云ひました。

「猿？」

さう云つて熊谷は、ぶつと吹き出したくなるのを我慢しながら、

「何でえ、妙なことを聞くぢやねえか。」

「あたしの家に猿が二匹飼つてあるのよ、だからアちゃんが好きだったら、一匹分けて上げようと思ふの。どう？ まあちゃんは猿が好きぢやない？」

「あら、猿を飼つていらつしやいますの？」

と眞顔になつて、菊子がそれを尋ねたので、

ナオミはいよいよ圖に乗りながらいたづら好きの眼を光らして、

「ええ、飼つて居りますの、菊子さんは猿がお好き？」

「わたくし、動物は何でも好きでございますわ、犬でも猫でも——」

「さうして猿でも？」

「ええ、猿でも」

その問答があまり可笑しいので、熊谷は側方を向いて腹を抱へる、濱田はハンケチを口へあててクスクス笑ふ、綺羅子もそれと感づいたらしくニヤニヤしてゐる。が、菊子は案外人の好い女だと思つて、自分が嘲弄されてゐるとは気がつきません。

「ふん、あの女はよつほど馬鹿だよ、少し血の循りが悪いんぢやないかね。」

やがて八番目のワン・ステツプが始まつて、熊谷と菊子が踊場の方へ行つてしまふと、ナオミは綺羅子の居る前をも憚らず、口汚い調子で云ふのでした。

「ねえ、綺羅子さん、あなたさうお思ひにならなかつた？」

「まあ、何でございますか……」

「いいえ、あの方が猿みたいな感じがするので

しよ、だからあたし、わざと猿猿ツて云つてやつたんですよ。」

「まあ」

「みんながあんなに笑つてゐるのに、気が付かないなんてよつほど馬鹿だわ。」

綺羅子は半ば呆れたやうに、半ば蔑むやうな眼つきでナオミの顔を偷み視ながら、何處までも「まあ」の一點張りでした。

十一

「さあ、讓治さん、ワン・ステツプよ、踊つて上げるから入らつしやい。」

と、それから私はナオミに云はれて、やつと彼女とダンスをする光榮を有しました。

私にしたつて、きまりが悪いとは云ふものの、日頃の稽古を實地に試すのは此の際でもあり、殊に相手が可愛いナオミであつてみれば、決して嬉しくないことはありません。よしんば物笑ひの種になるほど下手糞だつたとしたところで、その下手糞は却つてナオミを引き立てることになるのですから、寧ろ私は本望なのです。

それから又、私には妙な虚榮心もありました。

と云ふのは「あれがああの女の亭主だと見える」と、評判されて見たいことです。云ひかへれ

ば「此の女は己の物だぞ。どうだ、ちつと己の寶物を見てくれ。」と大いに自慢してやりたいことです。それを思ふと私は晴れがましいと同時に、ひどく痛快な氣がしました。彼女のために今日まで拂つた犠牲と苦勞とが、一度に報いられたやうな心地がしました。

どうもさつきからの彼女の様子では、今夜は己と踊りたくないのだらう。己がもう少し巧くなる迄は厭なのだらう。厭なら厭で、己もそれ迄はたつて踊らうとは云はない。と、もう好い加減あきらめてゐたところへ、「踊つて上げよう」と來たのですから、その一と聲はどんなに私を喜ばせたか知れません。

で、熱病やみのやうに興奮しながら、ナオミの手を執つて最初のワン・ステツプを踏み出した迄は覚えてゐますが、それから先は夢中でした。そして夢中になればなるほど、音楽も何も聞えなくなつて、足取りは滅茶苦茶になる、眼はちらちらする、動悸は激しくなる、吉村樂器店の二階で、著音器のレコードでやるのとはガラリと勝手が違つてしまつて、此の人波の大海の中へ漕ぎ出して見ると、退かにも進まうにも、さつぱり見當がつきません。

「讓治さん、何をアルアル顔へてゐるのよ、シ

ツカリしないぢや駄目ぢやないの！」
と、そこへ持つて来てナオミは始終耳元で叱言を云ひます。

「ほら、ほら又すべつた！ そんなに急に廻るからよ！ もつと静かに！ 静かにツたら！」

が、さう云はれると私は一層のぼせ上ります。おまけにその床は特に今夜のダンスのために、うんと滑りをよくしてあるので、あの稽古場の積りでうつかりしてゐると、忽ちつるりとも来るのです。

「それそれ！ 肩を上げちゃいけないでば！ もつと此の肩を下げて！ 下げて！」

さう云つてナオミは、私が一生懸命に握つてゐる手を振りもぎつて、ときどきグイと、邪慳に肩を抑へつけます。

「チョッ、そんなにぎゅッと手を握つてどうするのよ！ まるであたしにしがみついてゐちや、此方が窮屈で仕様がないわよ！……それ、それ又肩が！」

これでは何の事はない、全く彼女に怒鳴られるために踊つてゐるやうなものでしたが、そのガミガミ云ふ言葉さへが私の耳には遠入らなくらく入りました。

「譲治さん、あたしもう止めるわ。」

と、そのうちにナオミは腹を立てて、まだ人は盛んにアンコールを浴びせてゐるのに、どんどん私を置き去りにして席へ戻つてしまひました。

「ああ、驚いた、まだまだとても譲治さんとは踊れやしないわ、少し内で稽古なさいよ。」

濱田と綺羅子がやつて来る、熊谷が来る、菊子が来る、テールの周囲は再び賑やかになりましたが、私はすっかり幻滅の悲哀に浸つて、黙つてナオミの嘲弄的になるばかりでした。

「あははは、お前のやうに云つた日にやあ、氣の弱え者は尚更踊れやしねえぢやねえか。まあさう云はずに踊つてやんなよ。」

私は此の、熊谷の言葉が又癪に觸りました。「踊つてやんな」とは何と云ふ言ひ草だ。己を何だと思つてゐるのだ？ 此の青二才が！

「なにあに、ナオミ君が云ふほど拙かありませんよ、もつと下手なのがいくらも居るぢやありませんか。」

と濱田は云つて、「どうです、綺羅子さん、今度のフオックス・トロットに河合さんと踊つて上げたら？」

「はあ、何卒……」

綺羅子は矢張り女優らしい愛嬌を以てうなづきました。が、私は俯つて手を振りながら、「やあ、駄目ですよ駄目ですよ。」

と、滑稽なほど面喰つてさう云ひました。「駄目なことがあるもんですか。あなたのやうに遠慮なさるからいけないんですよ。ねえ綺羅子さん。」

「ええ、……どうぞほんとに。」

「いやあいいけません、とてもいいけません、巧くなつてから願ひますよ。」

「踊つて下さるつて云ふんだから、踊つて頂いたらいいぢやないの。」

と、ナオミはそれが、私に取つての身に餘る面目でもあるかのやうに、おッ被せて云つて、

「譲治さんはあたしとばかり踊りたがるからいけないんだわ。——さあ、フオックス・トロットが始まつたから行つてらつしやい、ダンスは他流試合がいいのよ。」

“Will you dance with me?”

その時さう云ふ聲が聞えて、つかつかとナオミの傍へやつて来たのは、きつき菊子と踊つてゐた、すうりとした體つきの、女のやうな、やけた顔へお白粉を塗つてゐる、歳の若い外

人でした。背を圓く、ナオミの前へ身をかがめて、ニコニコ笑ひながら、大方お世辭でも云ふのでせうか、何か早口にべらべらもしやべります。そして厚かましい調子で「ブリーズブリーズ」と云ふところだけが私に分ります。と、ナオミも困つた顔つきをして、火の出るやうに眞つ赤になつて、その辯怒することも出来ずに、ニヤニヤしてゐます。斷りたいには斷りたいのだが、何と云つたら最も婉曲に表はされるか、彼女の英語では咄嗟の際に「一と言も出て來ないので。外人の方はナオミが笑ひ出したので、好意があると見て取つたらしく、「さあと云つて促すやうな素振りをして、押しつけがましく彼女の返辭を要求します。」

「Yes...」
さう云つて彼女が不承不承に立ち上つたとき、その頬ツツたは一層激しく、燃え上るやうに紅くなりました。
「あははは、とうとう奴さん、あんなに威張つてゐたけれど、西洋人にかかつちやあ意氣地がねえね。」
と、熊谷がゲラゲラ笑ひました。

「西洋人はづらづらしくつて困りますのよ。さつきもわたくし、ほんとに弱つてしまひましたわ。」
さう云つたのは菊子でした。
「では一つ願ひますかな。」
私は綺羅子が待つてゐるので、否でも應でもさう云はなければならぬハメになりました。

一體、今日に限つたことでありませんけれど、嚴格に云ふと私の眼にはナオミより外に女と云ふものは一人もありません。それは勿論、美人を見ればきれいだとは感じます。が、きれいであればきれいであるだけ、ただ遠くから手にも觸れずに、そうツと眺めてゐたいと思ふばかりでした。シニレムスカヤ夫人の場合も例外でしたが、あれにしたつて、私があつた時経験した恍惚とした心持ちは、恐らく普通の情慾ではなかつたでせう。「情慾」と云ふには餘りに神韻漂渺とした、捕捉し難い夢見心地だつたでせう。それに相手は全然われわれとかけ離れた外人であり、ダンスの教師なので、日本人で、帝劇の女優で、おまけに眼もあやな衣裳を纏つた綺羅子に比べれば氣が樂でした。

然るに綺羅子は、意外なことに、踊つて見ると實に輕いものでした。體全體がふわりとして、細のやうで、手の柔かさは、まるで木の葉の新芽のやうな肌觸りです。そして非常に此方の呼吸をよく呑み込んで、私のやうな下手糞を相手にしながら、感のいい馬のやうにビタリと息を合はせます。からなつて來ると輕いと云ふことそれ自身に得も云はれない快感があります。私の心は俄かに浮き浮きと勇み立ち、私の足は自然と活潑なステップを踏み、恰もメリー・ゴー・ラウンドへ乗つてゐるやうに、何處までもするすると、滑かに廻つて行きます。
「愉快愉快！ 此れは不思議だ、面白いものだ！」
私は思はずそんな氣になりました。

「まあ、お上手ですわ、ちつとも踊りにくいとはございませぬわ。」
：：：
「グलगルグラー！ 水車のやうに廻つてゐる最中、綺羅子の聲が私の耳を掠めました。：
：やさしい、かすかな、いかにも綺羅子らしい甘い聲でした。：
「いや、そんなことはないでせう、あなたがお上手だからですよ。」
「いいえ、ほんとに、...」
暫く立つてから、又彼女は云ひました。
「今夜のバンドは、大へん結構でございますの

ね。」

「はあ」

「音楽がよくないと、折角踊つても何だか張り合ひがございませぬわ。」

気がついて見ると、綺羅子の唇はちやうど私のこめかみの下にあるのでした。此れが此の女の唇だとみえて、さつき濱田としたやうに、その横髪は私の頬へ觸れてゐました。やんわりとした髪毛の撫で心地、……そしてをりをり洩れて来るほのかな囁き、……長い間憚馬のやうなナオミの蹄にかけられてゐた私には、それは想像したこともない「女らしさ」の極みでした。何だか斯う、美に刺された傷の痕を、親切な手でさすつて貰つてでもゐるやうな、……

「あたし、よつぽど斷つてやらうと思つたんだけれど、西洋人は友達がないんだから、同情してやらないぢや可哀さうよ。」

やがてテーブルへ戻つて来ると、ナオミがやささかによげた形で、辯解してゐるのでした。

十六番のワルツが終つたのは彼れ此れ十一時半でしたらうか。まだ此のあとにエキストラが數番ある。おそくなつたら自動車で歸らうとナオミが云ふのを、やうやうなだめて最後の電車

に間に合ふやうに新橋へ歩いて行きました。熊谷や濱田も女連と一緒に、銀座通りをぞろぞろと繋がりながら其處まで私たちを送つて來ました。みんなの耳にはジャズ・バンドが未だ

に響いてゐるらしく、誰か一人が或るメロディを唄ひ出すと、男も女も直ぐその節に和して行きましたが、歌を知らない私には、彼等の器用さと、物覚えのよさと、その若若しい晴れやかな聲とが、ただ好ましく感ぜられるばかりでした。

「ラ、ラ、ラララ」

と、ナオミは一と際高い調子で、拍子を取つて歩いてゐました。

「濱さん、あんたは何がいい？ あたしキヤラパンが一番好きだわ。」

「おお、キヤラパン！」

と、菊子が頓狂な聲で云ひました。

「素敵ね！ あれは。」

「でもわたくし、——」

と、今度は綺羅子が引き取つて、

「ホイスパリングも悪くはないと存じますわ。

大へんあれは踊りよくつて、——」

「蝶蝶さんがいいぢやないか、僕はあれが一番好きだよ。」

そして濱田は「蝶蝶さん」を早速口笛で吹くのでした。

改札口で彼等に別れて、冬の夜風が吹き通すブラットホームに立ちながら、電車を待つてゐる間、私とナオミとはあんまり口を利きませんでした。歡樂のあとの物淋しき、とても云ふやうな心持が私の胸を支配してゐました。尤もナオミはそんなものを感じなかつたに違ひなく、

「今夜は面白かつたわね、又近いうちに行きませうよ。」

と、話しかけたりしましたけれど、私は興奮ぎめた顔つきで「うん」と口のうちに答へただけでした。

何だ？ 此れがダンスと云ふものなのか？

親を欺き、夫婦喧嘩をし、さんざ泣いたり笑つたりした揚句の果てに、己が味はつた舞踏會と云ふものは、こんな馬鹿げたものだったのか？ 奴等はみんな虚榮心とおべつつかと己惚れと、氣障の集團ぢやないか？——

が、そんなら己は何の爲めに出かけたのだ？ ナオミを奴等へ見せびらかすため？——さうだとすれば己もやつぱり虚榮心のかたままりなのだ。ところて己がそれほど迄に自慢して居た寶

物はどうだつたらう一
「どうだね、君、君が此の女を連れて歩いた
ら、果して君の註文通り、世間はあつと驚い
たかね？」
と、私は自ら嘲るやうな心持ちで、自分の
心にさう云はないでは居られませんでした。

「君、君、盲人蛇に怖ぢずとは君のことだよ。
そりやあ成る程、君に取つては此の女は世界一
の寶だらう。だがその寶を晴れの舞臺へ出し
たところはどんなだつたい！ 虚榮心と己惚れ
の集團！ 君は巧いことを云つたが、その集團の
代表者は此の女ぢやあなかつたかね？ 自分獨
りで偉がつて、無間地獄に他人の悪口を云つて、ハタ
で見てゐて一番鼻つまみだつたのは、一體君
は誰だつたと思ふ？ 西洋人に淫蕩と間違へら
れて、尚も簡単な英語一つがしやべれないで、ヘ
ドモドシながら相手になつたのは、菊子嬢だけ
ではなかつたやうだぜ。それに此の女の、あの
亂暴な口の利き方は何と云ふまで。假りにレ
ディーを氣取つてゐながら、あの言ひ草は殆
んど聞くに堪へないぢやないか、菊子嬢や綺羅
子の方が遙かにたしなみがあるぢやないか。」

——此の不愉快な、悔恨と云はうか失望と

云はうか、ちよつと何とも形容の出来ない厭な
氣持ちは、その晩家へ歸るまで私の胸にこ
びり着いてゐました。
電車の中でも、私はわざと反對の側に腰か
けて、自分の前に居るナオミと云ふものを、も
一度どくどくと眺める氣になりました。全體已
は此の女の何處がよくつて、斯うまで惚れて
ゐるのだらう？ あの鼻かしら？ あの眼かし
ら？ と、さう云ふ風に數へ立てると、不思議
なことに、いつもあんなに私に對して魅力の
ある顔が、今夜は實に詰まらなく、下らないも
のに思へるのです。すると私の記憶の底に
は、自分が始めて此の女に會つた時分、——あ
のダイヤモンド・カフェエの頃のナオミの姿が
ぼんやり浮かんで來るのでした。が、今に比べ
るとあの時分はずつと好かつた。無邪氣で、あ
どけなくて、内氣な、陰鬱なところがあつて、
こんなガサツな、生意氣な女とは似ても似つ
かないものだつた。己はあの頃のナオミに惚れ
たので、その情勢が今日まで續いて來たのだ
けれど、考へて見れば知らない間に、此の女
は随分たまらないイヤな奴になつてゐるのだ。
あの「拙巧な女は私でござい」と云はんばかり
に、チンと濟まして腰かけてゐる恰好はどう

だ「天下の美人は私です」といふやうな、「私
ほどハイカラな、西洋人臭い女は居なからう」
と云ひたげな、あの傲然とした面つきはどうだ。
あれで英語の「え」の字もしやべれず、パツシヴ・
ヴォイスとアクテイヴ・ヴォイスの區別さへも
分らないとは、誰も知るまいが已だけはちやん
と知つてゐるのだ。……

私はこつそり頭の中で、こんな惡罵を浴び
せて見ました。彼女は少し反り身になつて、顔
を仰向けにしてゐるので、ちやうど私の座席
からは、彼女が最も西洋人臭さを誇つてゐる
ところの獅子ツ鼻の鼻の孔が、黒黒と覗けまし
た。そして、その洞穴の左右には分厚い小鼻の
肉がありました。思へば私は、此の鼻の孔と
は朝夕深い馴染みなのです。毎晩毎晩、私が此の
女を抱いてやる時、常に斯う云ふ角度から
此の洞穴を覗き込み、つい此の間もしたやう
にその肉をかんてやり、小鼻の周りを愛撫して
やり、又或る時は自分の鼻と此の鼻とを、檢の
やうに嗅ひ違はせたりするので、つまり
此の鼻は、——此の、女の顔のまん中に附着
してゐる小さな肉の塊は、まるで私の體の一
部も同じことで、決して他人の物のやうには思
へません。が、さう云ふ感じを以て見ると、一

層それが憎らしく、汚らしくなつて来るのでした。よく、腹が減つた時なぞにまづい物を夢中でムシヤムシヤ喰ふことがある、だんだん腹が膨れて来るに随つて、急に今迄詰め込んだ物のまづさ加減に気がつくや否や、一度に胸がムカムカし出して吐きさうになる、——まあ云つてみれば、それに似通つた心地でせうが、今夜も相變らず此の鼻を相手に、顔を突き合はせて寝ることを想像すると、「もう此の御馳走は澤山だ」と云ひたいやうな、何だか腹がモタレて來てゲンナリしたやうになるのです。

「これもやつぱり親の罰だ。親を欺して面白い目を見ようとしたつて、ロクな事はありやしないんだ。」
と、私はそんな風に考へました。
しかし讀者よ、此れで私がすつかりナオミに飽きが來たのだと、推測されては困るのです。いや、私自身も今迄こんな覺えはないので、一時はさうかと思つたくらゐでしたけれど、さて大森の家へ歸つて、二人きりになつて見ると、電車の中あの「満腹」の心持は次第に何處かへすつ飛んでしまつて、再びナオミのあらゆる部分が、眼でも鼻でも手でも足でも、蠱惑に充ちて來るやうになり、そしてそれらの一つ

一つが、私に取つて味はひ盡せぬ無上の物にるのでした。
私はその後、始終ナオミとダンスに行くやうになりましたが、その度毎に彼女の缺點が鼻につくので、歸り途にはきつと厭な気分になる。が、いつでもそれが長続きしたことはなく、彼女に對する愛憎の念は一と晩のうちに幾回でも、猫の眼のやうに變りました。

十二

閑散であつた大森の家には濱田や、熊谷や、彼等の友達や、主として舞踏會で近づきになつた男たちが、追ひ追ひ頻繁に出入りするやうになりました。

やつて來るのは大概夕方、私が會社から戻る時分で、それからみんなで蓄音機をかけてダンスをやりませう。ナオミが客好きであるところへ、氣兼ねをするやうな奉公人や年寄は居ず、おまけに此處のアトリエはダンスに持つて來いたから、彼等は時の移るのを忘れて遊んで行きます。始めのうちはいくらか遠慮して、飯時になれば歸ると云つたものですが、
「ちよいと！ どうして歸るのよ！ 御飯をたべていらつしやいよ。」

と、ナオミが無理に引き止めるので、しまひにはもう、來れば必ず「大森亭」の洋食を取つて、晩飯の馳走をするのが例のやうになりました。じめじめとした入梅の季節の、或る唯のことでした。濱田と熊谷が遊びに來て、十一時過ぎまでしゃべつてゐましたが、外は非常な吹き降りになり、雨がざあざあガラス窓へ打ちつけて來るので、二人とも「歸らう歸らう」と云ひながら、暫く躊躇してゐると、

「まあ、大變なお天気だ、此れぢやあとても歸れないから、今夜は泊まつていらつしやいよ。」
と、ナオミがふいとさう云ひました。

「ねえ、いいぢやないの、泊まつたつて。——まあちゃんは無論いいんだらう？」
「うん、已アどうでもいいんだけれど、……濱田が歸るなら己も歸らう。」

「濱さんだつて構やしないわよ、ねえ、濱さん」
さう云つてナオミは私の顔色を窺つて、
「いいのよ、濱さん、ちつとも遠慮することは無いのよ、冬だと布圍が足りないけれど、今なら四人ぐらゐりどうにかなるわ。それに明日は日曜だから、談治さんも内にゐるし、いくら疲坊してもいいことよ。」
「どうです、泊まつて行きませんか、全く此の

雨ぢや大變だから。」

と、私も仕方なしに勧めました。

「ね、さうなさいよ、そして明日は又何かして遊ばうぢやないの、さう、さう、夕方から花月園へ行つてもいいわ。」

結局二人は泊まることになりましたが、

「ところで蚊帳はどうしようね、」

と、私が云ふと、

「蚊帳は一つしかないんだから、みんな一緒に寝ればいいわよ。その方が面白いぢやないの。」

と、そんな事がひどくナオミには珍らしいのか、修學旅行にでも行つたやうに、きやつきやつと喜びながら云ふのでした。

これは私には意外でした。蚊帳は二人に提

供して、私とナオミとは蚊やり線香でも焚きながら、アトリエのソオファで夜を明かしても済むことだと考へてゐたので、四人が一つ部屋の中へごろごろかたまつて寝ようなどは、

思ひ設けても居ませんでした。が、ナオミがその氣になつてゐるし、二人に對してイヤな顔をするでもないし、……と、例の通り私がぐづぐづしてゐるうちに、彼女はさつきと極めてしま

つて、

「さあ、布団を敷くから三人とも手傳つて頂

戴。」

と、先に立つて號令しながら、屋根裏の四疊半へ上つて行きました。

布団の順序はどう云ふ風にするのかと思ふ

と、何分蚊帳が小さいので、四人が一行に枕を並べる譯には行かない。それで三人が並行になり、一人がそれと直角になる。

「ね、かうしたらいいぢやないの。男の人が三人そこへお並びなさいよ、あたしが此方へ獨りで寝るわ。」

と、ナオミが云ひます。

「やあ、えれえ事になつちやつたな。」

蚊帳が吊れると、熊谷は中を透かして見ながらさう云ひました。

「此れぢやあどうしても豚小屋だぜ。みんな、ごちやごちやになつちまふぜ。」

「ごちやごちやだつていいぢやないか、贅澤なことを云ふもんじゃないわ。」

「ふん！ 人様の家に御厄介になりながらか。」

「當り前さ、どうせ今夜はほんとに寝られやしないんだから。」

「已あ寝るよ、グウグウ鼻をかいて寝るよ。」

ましんと熊谷は地響きを立てて、着物のまま真つ先にもぐり込みました。

「寝ようつたつて寝かしゃしやないわよ。——濱さん、まアちゃんを寝かしちや駄目よ、寝さうになつたら操ぐつてやるのよ。——」

「ああ慈し暑い、とても此れぢやあ寝られやしないよ。——」

まん中の布団にふん反り返つて膝を立ててゐる熊谷の右側に、洋服の濱田はズボンと下着のシャツ一枚で、瘦せた體を仰向けに、べこんと腹を凹ましてゐました。そして靜かに戸外の雨を聞き澄ましてでもゐるやうに、片手を額の

上に載せて、片手ではたばたと團扇を使つてゐる音が、一層暑苦しさうでした。

「それに何だよ、僕ア女の人があると、どうもおちおち寝られないやうな氣がするよ。」

「あたしは男よ、女ぢやないわよ、濱さんだつて女のやうな氣がしないつて云つたぢやないか。」

蚊帳の外、うす暗い所で、ぱつと寝間着に着換へる時のナオミの白い背中が見えま

した。

「そりや、云つたことは云つたけれど、……」

「……やつぱり傍へ寝られると、女のやうな氣がするのかい？」

「ああ、まあさうだな。」

「ちや、まアちやんは？」

「已ア不氣さ、お前なんか女の數に入れちやあゐねえさ。」

「女でなけりや何なのよ？」

「うむ、まあお前は海豹だな。」

「あはははは、海豹と猿と孰方がいい？」

「孰方も己あ御免だよ。」

と、熊谷はわざと眠さうな聲を出しました。

私は熊谷の左側に寝ころびながら、三人がしきりに、べちやくちや云ふのを黙つて聞いてゐました。

「ナオミが此處へ這入つて来ると、濱田の方が、私の方が、いづれ孰方かへ頭を向けなければならぬのだが、と、内内それを氣にしてゐました。」

と云ふのは、ナオミの枕が孰方つかずに、曖昧な位置に放り出してあつたからです。何でもさつき布團を興く時に、彼女はわざとさう云ふ風に、あとでどうでもなるやうに置いたのぢやないかと思はれました。と、ナオミは桃色の縮みのガウンに着換へてしまふと、やがて這入つて来て衝つ立ちながら、

「電氣を消す？」

と、さう云ひました。

「ああ、消して貰ひてえ、……」

さう云ふ熊谷の聲がしました。

「ちやあ消すわよ。……」

「あ、痛え！」

と、熊谷が云つたとたんに、いきなりナオミはその胸の上に飛び上つて、男の體を踏み臺にして、蚊帳の中からパチリとスキツチを切りました。

暗くはなつたが、表の電信柱にある街燈の灯先が窓ガラスに映つてゐるので、部屋の中はお互ひの顔や着物が見分けられるほど、いやいやと明るく、ナオミが熊谷の首を踏いで、自分の布團へ飛び降りた刹那、寝間着の裾のさつとはだけた風の勢が私の鼻を颯りました。

「まアちやん、一服煙草を吸はない？」

ナオミは直ぐに寝ようとはしないで、男のやうに股を開いて枕の上にとつかと腰かけ、上から熊谷を見おろしながら云ふのでした。

「よう！ 此方をお向きよ！」

「畜生、どうしても己を寝かさねえ算段だな、」

「うふふふ、よう！ 此方をお向きよ！ 向かなけりやいぢめてやるよ。」

「あ、いてえ！ よせ、止せ、止せつたら！ 生き物だから少し鄭重にしてくんねえ、踏み臺にされたり蹴られたりしちや、いくら頑丈でも溜らねえや。」

「うふふふ」

私は蚊帳の天井を見てゐるのでハッキリ分りませんでしたが、ナオミは足の爪先で男の頭をグイグイ押したもので、

「仕方がねえな」

と云ひながら、やがて熊谷は寝返りを打ちました。

「まアちやん、起きたのかい？」

さう云ふ濱田の聲がしました。

「ああ、起きちやつたよ、盛んに迫害されるんはね。」

「濱さん、あなたも此方をお向きよ、でなけりや迫害してやるわよ。」

濱田はつづいて寝返りを打つて、腹這ひになつたやうでした。

同時に熊谷がガチャガチャと袂の中からマツチを搜り出す音がしました。そしてマツチを擦つたので、ぼろつと私の眼瞼の上に明りが來ました。

「讓治さん、あなたも此方をお向いたらどう？」

「う、うん、……」

「どうしたの、眠いの？」

「う、うん、……少しとろとろしかけた所だ、」

「うふふふ、巧く云つてらア、わざと寝たふりをしてるんぢやないの、ねえ、さうぢやない？ 気が採めやしない？」

私は圖星を指されたので、眼をつぶつてはみましたけれど、顔が真っ赤になつたやうな気がしました。

「あたし大丈夫よ、ただ斯うやつて騒いでるだけよ、だから安心して寝てもいいわ。…それともほんとに気が採めるなら、ちよつと此方を見て見ない？ 何も痩せ我慢をしないでだつて、」

「やつぱり迫害されたいんぢやないかね、」
さう云つたのは熊谷で、煙草に火をつけて、すばツと口を鳴らしながら吸ひ出しました。

「いやよ！ こんな人を迫害したつて仕様がないわよ、毎日してやつてゐるんだもの。」

「御馳走様だなア」
と濱田の云つたのが、心からさう云つたのでなく、私に對する一種のお世辭のやうにしか取れませんでした。

「ねえ、譚治さん、——だけれど、迫害されたいんならして上げようか。」
「いや、澤山だよ、」

「澤山ならあたしの方をお向きなさいよ、そんな、一人だけ仲間外れをしてゐるなんて妙ぢやないの。」

私はぐるりと向き直つて、枕の上へ頤を載せました。と、立て膝をして、兩脛を八の字に踏ん張つてゐるナオミの足の、一方は濱田の鼻先に、一方は私の鼻先にあるのです。そして熊谷はと云ふと、そのハの字の間へ首を突つ込んで、悠悠と敷島を吹かしてゐます。

「どう？ 譚治さん、此の光景は？」

「うん、…」

「うんとは何よ、」
「呆れたもんだね、まさに海豹に違ひないね。」

「ええ、海豹よ、今海豹が氷の上で休んでるところよ。前に三匹寝てゐるのも、これも男の海豹よ。」

低く、密雲の閉ざすやうに、頭の上に垂れ下がつてゐる崩黄の蚊帳、…夜目にも黒く、長髪と解いた髪の中の白い顔、…しどけないガウンの、ところどころに露はれてゐる胸や、腕や、膨らツ脛や、…此の恰好は、ナオミ

がいつも此れで私を誘惑するポーズの一つで、かう云ふ姿を見せられると私は恰も餌を投げられた獸のやうにさせられるのです。私は

明かに、ナオミが例のそそのかすやうな表情をして、意地の悪い眼で微笑しながら、ぢつと此方を見おろしてゐるのを、うす暗い中で感じました。

「呆れたなんて諛なのよ。あたしにガウンを着られるとたまらないって云ふ癖に、今夜はみんなが居るもんだから我慢してるのよ。ねえ、譚治さん、申つたでせう。」

「馬鹿を云ふなよ、」
「うふふふ、そんなに威張るなら、降参させてやらうか。」

「おい、おい、ちと穩やかでねえね、さう云ふ話は明日の晩に願ひてえね。」

「賛成！」
と、濱田も熊谷の尾に附いて云つて、
「今夜はみんな公平にして貰ひたいなア。」

「だから公平にしてるぢやないの。恨みツこないやうに、濱田の方へは此方の足を出してゐるし、譚治さんの方へは此方を出してゐるし、」

「さうして己はどうなんだい？」
「まあちゃんが一番得してるわよ、一番あたしの傍にゐて、こんな所へ首を突ン出してるぢやないの。」

婆もくたびれたものか、好い心持ちさうに眠つてゐます。

「ナオミちゃん」

と、私はみんなの静かな寢息をうかがひながら、口のうちにさう云つて、私の布団の下にある彼女の足を撫でてみました。ああ此の足、此のすやすやと眠つてゐる眞つ白な美しい足、此れはたしかに己の物だ。己は此の足を、彼女が小娘の時分から、毎晩毎晩お湯へ入れてシヤボンで洗つてやつたのだ。そしてまあ此の皮膚の柔かさは、——十五の歳から彼女の體は、ずんずん伸びて行つたけれど、此の足だけはまるで發達しないかのやうに依然として小さく可愛い。さうだ、此の拇趾もあの時の通りだ。小趾の形も、踵の圓味も、ふくれた甲の肉の盛り上りも、凡てあの時の通りぢやないか。……私は覺えず、その足の甲へさうツと自分の唇をつけずには居られませんでした。

夜が明けてから、私は再びうとうとしたやうでしたが、やがてどつと云ふ笑ひ聲に眼がさめて見ると、ナオミが私の鼻の孔へかんじんよりを突つ込んでゐました。

「どうした？ 謙治さん、眼がさめた？」

「ああ、もう何時だね。」

「もう十時半よ、だけど起きたつて仕様がなからどんが鳴るまで寢てゐようぢやないの。」

雨が止んで、日曜の空は青青と晴れてゐましたが、部屋の中にはまだ人いきれが残つてゐました。

十三

當時、私のこんなふしだらな有様は、會社の者は誰も知らない筈でした。家に居る時と會社に居る時と、私の生活は斷然と二分されてゐました。勿論事務を執つてゐる際でも、頭の中にはナオミの姿が始終チラついてゐましたけれど、別段それが仕事の邪魔になるほどではなく、まして他人は氣がつく譯もありません。同僚の眼には私は矢張り君子に見えてゐるのだらうと、さう思ひ込んでゐたことでした。

ところが或る日——まだ梅雨が明けきれない頃で、鬱陶しい晩のことでしたが、同僚の一人の波川と云ふ技師が、今度會社から洋行を命ぜられ、その送別會が築地の精養軒で催されたことがありました。私は例に依つて義理一遍に出席したに過ぎませんから、會食が済み、デザート・コースの挨拶が終り、みんながぞろぞろ食堂から喫煙室へ流れ込んで、食後のリキウ

ルを飲みながらガヤガヤ雑談をし始めた時分、もう歸つても好からうと思つて立ち上ると、

「おい、河合君、まあかけ給へ、」

と、ニヤニヤ笑ひながら呼び止めたのは、Sと云ふ男でした。Sはほんのり微醺を帯びて、TやKやHなどと一つソフォアを占領して、そのまん中へ私を無理に取り込めようとするのでした。

「まあ、さう逃げんでもいいぢやないか、此れから何處かへお出かけかね、此の雨の降るのに。」

と、Sはさう云つて、執方つかずに衝つ立つたままの私の顔を見上げながら、もう一度ニヤニヤ笑ひました。

「いや、さう云ふ譯ぢやないけれど、……」

「ぢや、眞つ直ぐにお歸りかね。」

さう云つたのはHでした。

「ああ、濟まないけれど、失敬させてくれ給へ。僕の所は大森だから、こんな天気には路が悪くつて、早く歸らないと俾がなくなつちまふんだよ。」

「あははは、巧く云つてるぜ。」

と、今度はTが云ひました。

「おい、河合君、種はすつかり上つてるんだぜ。」

「何が？」

「種」とはどう云ふ意味なのか、Tの言葉を判じかねて、私は少し狼狽しながら聞き返しました。

「驚いたなアどうも。君は君子とばかり思つてゐたのになア……」

と、次ぎにはKが無闇と感心したやうに首をひねつて、

「河合君がダンスをすると云ふに至つちやあ、何しろ時勢は進歩したもんだよ。」

「おい、河合君。」

と、Sはあたりに遠慮しながら、私の耳に口をつけるやうにしました。

「その、君が連れて歩いてゐる素晴らしい美人と云ふのは何者かね？ 一遍僕等にも紹介し給へ。」

「いや、紹介するやうな女ぢやないよ。」

「だつて、密劇の女優だつて云ふ話ぢやないか。……え、さうぢやないのか。活動の女優だと云ふ噂もあるし、混血兒だと云ふ説もあるんだが、その女の巢を云ひ給へ。云はなけりや歸さんよ。」

私が明かに不愉快な顔をして、口を吃らしてゐるのも気が付かず、Sは夢中で膝を乗り

出して、ムキになつて尋ねるのでした。

「え、君、その女はダンスでなけりやあ呼べないのか？」

私はもう少しして「馬鹿ッ」と云つたかも知れませんでした。まだ會社では恐らく誰も気がつくまいと思つてゐたのに、豈剛らんや喫ぎつ

けてゐたばかりでなく、道樂者の名を博してゐるSの口吻から察すると、奴等は私たちを夫婦

であるとは信じないで、ナオミを何處へでも呼べる種類の女のやうに考へてゐるのです。

「馬鹿ッ、人の細君を掴まへて『呼べるか』とは何だ！ 失敬な事を云ひ給ふな」

此の堪へ難い侮辱に對して、私は當然、血相を變へて斯う怒鳴りつけるところでした。いや、たしかにほんの「瞬間」、私はさつと顔色を變へました。

「おい、河合河合、教へろよ、ほんとに！」

と、奴等は私の人の好いのを見込んでゐるので、何處までもぶらぶらしく、Hがさう云つてKの方を振り向きながら、

「なあ、K、君は何處から聞いたんだつて云つたつた。——」

「僕ア慶應の學生から聞いたよ。」

「ふん、何だつて？」

「僕の親戚の奴なんぞでね、ダンス氣違ひだもんだから始終ダンス場へ出入りするんで、その美人を知つてゐるんだ。」

「おい、名前は何て云ふんだ？」

と、Tが横合から首を出しました。

「名前は……ええと、……妙な名だつたよ、……ナオミ、……ナオミと云ふんぢやなかつたかな。」

「ナオミ？……ぢやあやつぱり混血兒かな。」

さう云つてSは、冷やかすやうに私の顔を覗いて、

「混血兒だとすると、女優ぢやないな。……何でも偉い發展家ださうだぜ、その女は。盛んに慶應の學生なんか荒らし廻るんださうだから。」

私は變な、瘰癧のやうな薄笑ひを浮かべたまま、口もとをびくびく顫はせてゐるだけでしたが、Kの語が此處まで來ると、その薄笑ひは俄かに凍りついたやうに、頬ツべたの上で動かなくなり、眼玉がグツと眼窩の奥へ凹んだやうな気がしました。

「ふん、ふん、そいつお頼もしいや！」

と、Sはすつかり恐悦しながら云ふのでした。

「君の親戚の學生と云ふのも、其の女と何か

あつたのかい？」

「いや、そりやどうだか知らないが、友達のうちに二三人はあるさうだよ。」

「止せ、止せ、河合が心配するから。——ほら、ほら、あんな顔をしてるぜ。」

Tがさう云ふと、みんな一度に私を見上げて笑ひました。

「なあに、ちつとぐらゐ心配させたつて構はんさ。われわれに内諍でそんな美人を専有しようとするなんて、その心がが怪しからんよ。」

「あはははは、どうだ河合君、君子もたまにはイキな心配するのもよからう？」

「あはははは」

もはや私は、怒るところではありませんでした。誰が何と云つたのかまるで聞えませんでした。ただ、つと云ふ笑ひ聲が、兩方の耳にがらがん響いただけでした。咄嗟の私の當惑は、どうして此の場を切り抜けたらいいか、泣いた方がいいのか、笑つたらいいのか、——が、うつかり何か云つたりすると、尙更嘲弄されやしないかと云ふことでした。

兎に角私は、何が何やら上の空で奥煙室を飛び出しました。そしてぬかるみの往來へ立つて冷めた雨に打たれる迄は、足が大地へ着き

ませんでした。未だに後から何かを追ひ驅けて来るやうな心地で、私はどんどん銀座の方へ逃げ伸びました。

尾張町のもう一つ左の四つ角へ出て、そこを私は新橋の方へ歩いて行きました。……と云ふよりも、私の足がただ無意識に、私の頭とは關係なく、その方角へ動いて行きました。

私の眼には雨に濡れた鋪道の上に街の燈火のきらきら光るのが映りました。此のお天氣にも拘はらず、通りはなかなか人が出てゐるやうでした。あ、藝者が傘をさして通る、若い娘がフ

ランネルを着て通る、電車が走る、自動車が驅ける、……

……ナオミが非常な發展家だ。學生たちを荒らし廻る？……そんな事が有り得るだらうか？有り得る、たしかに有り得る、近頃のナオミの様子を見れば、さう思はないのが不思議なくら

ゐる。實は已だつて内氣にしてはゐるのだけれど、彼女を連れ巻く男の友達が餘り多いので、却つて安心してゐたのだ。ナオミは子供だ、そ

して活潑だ。「あたし男よ。」と彼女自身が云つてゐる通りだ。だから男を大勢集めて、無邪氣

に、賑やかに、馬鹿ツ騒ぎをするのが好きなんだ。假に彼女に下心があつたとしたつて、

これだけ多くの人目があれば、それを忍べるものではなし、まさか彼女が、……と、さう考へた此の「まさか」が悪かつたんだ。

けれどもまさか、……まさか事實ぢやないのぢやなからうか？ ナオミは生意氣にはなつたが、でも品性は氣高い女だ。己はその事をよく知つてゐる。うはべは己を輕蔑したりするけれども、十五の歳から養つてやつた己の恩義には感謝してゐる。決してそれを裏切るやうなことはしない、と、寝物語に彼女が屢々涙を以て

云ふ言葉、己は疑ふことは出来ない。あのKの話——事に依つたら、あれは會社の人の悪い奴等が、己をからかふのぢやなからうか？

ほんたうに、さうであつてくれればいいが、……あの、Kの雜處の學生と云ふのは誰だらうか？その學生の知つてゐるのでも二三人は關係がある？ 二三人？……濱田？ 熊谷？……怪しいとすれば此の二人が一番怪しい、が、それならどうして二人は喧嘩しないのだらう？ 別

に來ないで、一緒にやつて來て、仲よくナオミと遊んでゐるのはどう云ふ氣だらう？ 己の眼を睥す手段だらうか？ ナオミが巧く操つてゐるので、二人は互ひに知らないのだらうか？

いや、それよりも何よりも、ナオミがそんなに

墮落してしまつたらどうか？ 二人に關係があつたとしたら、此の間の晩の雑魚寝のやうな、あんな無恥な、いやあいやとした眞似が出来たらどうか？ 若しさうだつたら彼女のしぐさは賣笑婦以上ぢやないか。……

私はいつの間にか新橋を渡り、芝の通りを眞つ直ぐにびちやびちや泥を撥ね上げながら金杉橋の方まで歩いてしまひました。雨は寸分の隙間もなく天地を閉ぢ込め、私の體を前後左右から包圍して、傘から落ちる雨だれがレイノコートの肩を濡らします。ああ、あの雑魚寝をした晩もこんな雨だつた。あの、ダイヤモンド・カフェエのテーブルでナオミに始めて自分の心を打ち明けた晩も、春ではあつたがやつぱりこんな雨だつた。と、私はそんなことを思ひました。すると今夜も、自分が斯うしてびしよ濡れになつて此處を歩いてゐる最中、大森の家には誰かが来て居やしないだらうか？ 又雑魚寝ぢやないのだらうか？——と、さう云ふ疑懼が突然浮かんで來るのでした。ナオミをまんなに、濱田や熊谷が行儀の悪い居ずまひで、べちやくちや冗談を云ひ合つてゐる淫らなアトリエの光景が、まさまざと見えて來るのでした。

「さうだ、己はかうぐづぐづしてゐる場合ぢやないんだ。」

さう思ふと私は、急いで田町の停車場へ駆けつけました。一分、二分、三分……と、やつと三分目に電車が來ましたが、私は嘗てこんなに長い三分間を経験したことがありませんでした。

ナオミ、ナオミ！ 己はどうして今夜彼女を置き去りにして來たのだらう。ナオミが傍に居ないからいけないんだ、それが一番悪い事なんだ。——私はナオミの顔さへ見れば、此のイライラした心持ちが幾らか救はれる氣がしました。彼女の潤達な語聲を聞き、罪のなきさうな臉を見れば疑念が晴れるであらうことを祈りました。

が、それにしても、若しも彼女が再び雑魚寝をしようなどと云ひ出したら、自分は何と云ふべきだらうか？ 此の後自分は、彼女に對し、彼女に寄りつく濱田や熊谷や、その他の有無無象に對し、どんな態度を執るべきだらうか？ 自分は彼女の怒りを犯しても、敢然として監督を嚴にすべきであらうか？ それで彼女が大人しく自分に承服すればいいが、反抗したらどうなるだらう？ いや、そんなことはない。——自

分は今夜會社の奴等らに甚だしい侮辱を受けた。だからお前も世間から誤解されないうやうに、少し行動を慎んでおくれ。」と云へば、外の場合とは違ふから、彼女自身の名譽のためにでも、恐らく云ふことを聴くであらう。若しその名譽も誤解も顧みないやうなら、正しく彼女は怪しいのだ。互の話は事實なのだ。若し、

……ああ、そんな事があつたら……

私は努めて冷静に、出來るだけ心を落ち着けて、此の最後の場合を想像しました。彼女が私を欺いてゐたことが明かになつたとしたら、私は彼女を許せるだらうか？——正直のところ、既に私は彼女なしには一日も生きて行かれません。彼女が墮落した罪の一半は勿論私にもあるのですから、ナオミが素直に前非を悔いて許まつてさへくれるなら、私はそれ以上彼女を責めたくはありませんし、責める資格もないのです。けれども私の心配なのは、あの剛情な、殊に私に對しては一つ入強面になりたがる彼女が、假りに證據を突きつけたとしても、さう易易と私に頭を下げるだらうかと云ふことでした。たとへ一旦は下げたとしても、實は少しも改心しないで、此方を甘く見

くびつて、二度も三度も同じ過を繰り返すや

うになりはしないか？そして結局、お互ひの意地ッ張りから別れるやうになつてしまつたら？——それが私には何より恐ろしいことでした。露背に云へば彼女の貞操その物よりも、ずつと此の方が頭痛の種でした。彼女を糺明し、或ひは監督するにしても、その際に處する自分の腹を豫め決めて置かなければならない。「そんならあたし出て行くわよ。」と云はれたとき、「腕手に出て行け。」と云へるだけの覺悟が出来てゐるならいいが。……

しかし私は、此の點になるとナオミの方にも同じ弱點があることを知つてゐました。なぜなら彼女は、私と一緒に暮らしてこそ思ふ存分の贅澤が出来ますけれども、一と度此處を追い出されたら、あのむさくろしい千束町の家より外、何處に身を置く場所があるでせう。もうさうなれば、それこそほんとに賣笑婦にでもならない以上、誰も彼女にチャホヤ云ふ者はなくなるでせう。昔は宛に角、我が儘一杯に育つてしまつた今の彼女の虚榮心では、それは到底忍び得ないに極まつてゐます。或ひは濱田や熊谷などが引き取るや云ふかも知れませんが、學生の身で、私がさせて置いたやうな榮耀榮華がさせられないのは、彼女にも分つてゐる筈です。

さう考へると、私が彼女に贅澤の味を覚えさせたのはいい事でした。

さうだ、さう云へばいつか英語の時間にナオミがノートを引き裂いた時、己が怒つて「出て行け」と云つたら、彼女は降参したぢやないか。あの時彼女に出て行かれたらどんなに困つたか知れないのだが、己が困るより彼女の方がつと困るのだ。己があつての彼女であつて、己の傍を離れたが最後、再び社會のどん底へ落ちて此の世の下積になつてしまふ。それが彼女には餘程恐ろしいに違ひないのだ、その恐ろしさは今もあの時と變りはあるまい。もはや彼女も今歳は十九だ。歳を取つて、多少でも分別がついて来ただけ、一層彼女はそれをハッキリと感じる筈だ。さうだとすれば萬一おどかしに「出て行く」と云ふことはあつても、よもや本氣で實行することは出来なからう。そんな見え透いた威嚇で以て、己が驚くか驚かないか、そのくらゐなことは分つてゐるだらう。……

私は大森の驛へ着くまでに、いくらか勇氣を取り返しました。どんな事があつてもナオミと私とは別れるやうな運命にはならない、もうそれだけはきつと確かだと思へました。家の前までやつて來ると、私の忌まはしい

想像はすつかり外れて、アトリの中は眞つ暗になつて居り、一人の客もないうらしく、しーんと静かで、ただ屋根裏の四疊半に明りが燈つてゐるだけでした。

「ああ、一人で留守番をしてゐるんだな、——」
私はほつと胸を撫でました。「此れでよかつた。ほんたうに仕合はせだつた」と、そんな氣がしないでは居られませんでした。

締まりのしてある玄関の扉を合鍵で開け、申へ這入ると私は直ぐにアトリエの電氣をつけました。見ると、部屋は相變らず取り散らかしてありますけれど、矢張り客の來たやうな形跡はありません。

「ナオミちゃん、唯今、……歸つて来たよ、……」

さう云つても返辭がないので、梯子段を上つて行くと、ナオミは一人四疊半に床を取つて、安らかに眠つてゐるのです。此れは彼女に珍らしいことではないので、退屈すれば晝でも夜でも、時間を構はず布団の中へもぐり込んで小説を讀み、そのまますやすやと寝入つてしまふのが常でしたから、その罪のない寝顔に接しては、私はいよいよ安心するばかりでした。

「此の女が己を欺いてゐる？ そんな事がある

るだらうか？…此の、現在己の眼の前で平和な呼吸をつづけてゐる女が？…

私は密かに、彼女の眼りを覺まさないやうに枕もへ据わつたまま、暫くちつと息を殺してその寝姿を見守りました。昔、狐が美しいお姫様に化けて男を欺したが、寝てゐる間に正體を顯はして、化けの皮を剥がされてしまつた。——私は何か、子供の時分に聞いたことのあるそんな囁を想ひ出しました。寢像の悪いナオミは、拙い巻きをすつかり剃いでしまつて、兩股の間にその襟を挟み、乳の方まで露はになつた胸の上へ、片肘を立ててその手の先を、恰も挽んだ枝のやうに載せてゐます。そして片一方の手は、ちやうど私が据わつてゐる膝のあたりまで、しなやかに伸びてゐます。首は、その伸ばした手の方角へ横向きになつて、今にも枕からずり落ちさうに傾いてゐる、そのついで鼻の先の所に、一冊の本がページを開いたまま落ちてゐました。それは彼女の批評に依れば「今の交壇で一番偉い作家だ」と云ふ有島武郎の、「カインの末裔」と云ふ小説でした。私の眼は、その假り綴ぢの本の純白な西洋紙と、彼女の胸の白さとの上に、交る交る注がれました。

ナオミは一體、その肌の色が目によつて黄色く見えたり白く見えたりするのでしたが、ぐつすり寝込んでゐる時や起きたばかりの時などは、いつも非常に汚れてゐました。眠つてゐる間に、すつかり體中の脂が脱けてしまふかのやうに、きれいになりました。普通の場合「夜」と「暗黒」とは附き物ですけれど、私は常に「夜」を思ふと、ナオミの肌の「白さ」を連想しないでゐられませんでした。それは眞つ晝間の、隈なくひろい「白さ」とは違つて、汚れた、きたない、垢だらけな布團の中の、云はば襤褸に包まれた「白さ」であるだけ、餘計私を惹きつけました。で、かうしてつくづく眺めてゐると、ランプの笠の蔭になつてゐる彼女の胸は、まるで眞つ青な水の底にでもあるものやうに、鮮やかに浮き上つて來るのでした。起きてゐる時はあんなに喃れやかな、變幻極らないその顔つきも、今は憂鬱に眉根を寄せて苦い藥を飲まされたやうな、頸を締められた人のやうな、神秘的な表情をしてゐるのですが、私は彼女の此の寝顔が大へん好きでした。「お前は寢ると別人のやうな表情になるね、恐ろしい夢でも見てゐるやうに。」——と、よくそんなことを云ひひきました。「此れでは彼女の死顔もきつと美しさに違ひない」と、さう思つたことも屢々ありました。

私はよしや此の女が狐であつても、その正體がこんな妖艶なものであるなら、寧ろ喜んで魅せられることを望んだでせう。……

私は大凡そ三十分ぐらゐ、さうして黙つて据わつてゐました。笠の蔭から明るい方へはみ出してゐる彼女の手は、甲を下に、掌を上、に、結びかけた花びらのやうに柔かに握られて、その手頭には静かな脈の打つてゐるのがハッキリと分りました。

「いつ歸つたの？…」

「うう、さう、さう、と、安らかに繰り返されてゐた寢息が少し亂れたかと思ふと、やがて彼女は眼を開きました。その憂鬱な表情をまだ何處やらに残しながら、……

「今、……もう少し前。」

「なぜあたしを起さなかつた？」

「呼んだんだけど起きなかつたから、さうとして置いたんだよ。」

「そこに据わつて、何をしてたの？——寝顔を見てゐた？」

「ああ、」

「ふつ、可笑しな人！」

さう云つて彼女は、子供のやうにあどけなく笑つて、伸ばしてゐた手を私の膝に載せました。

「あたし今夜は獨りぼつちで詰まらなかつたわ。誰か来るかと思つたら、誰も遊びに來ないんだもの。……ねえ、ババさん、もう寝ない？」

「寝てもいいけれど、……」
「よう、寝てよう！……ごろ寝しちやつたもんだから、方蚊に喰はれちやつたわ。ほら、こんなよ！ここん所を少うし掻いて！——」
云はれるままに、私は彼女の腕の背中だのを暫く掻いてやりました。

「ああ、ありがと、痒くて痒くて仕様がないわ。——濟まないけれど、そこにある寝間着を取つてくれない？さうしてあたしに着せてくれない？」

私はガウンを持つて來て、大の字なりに倒れてゐる彼女の體を抱き抱きました。そして私が帯を解き、着物を着換へさせてやる間、ナオミはわざとぐつたりとして、死骸のやうに手足をぐにやぐにやにさせてゐました。

「蚊帳を吊つて、それからババさんも早く寝てよう。——」

十四

その夜の二人の寝物語は、別にくだくだしく書く迄もありません。ナオミは私から精養軒で

の話を聞くと、「まあ、失敬な！何で云ふ物を知らない奴等だらう！」と口汚く罵つて、一笑に附してしまひました。要するにまだ世間ではソシアル・ダンスと云ふものの意義を諒解してゐない。男と女が手を組み合つて踊りさへすれば、何かその間に良くない關係があるものやうに臆測して、直ぐにさう云ふ評判を立てる。新時代の流行に反感を持つ新聞などが、

又いい加減な記事を書いては中傷するので、一彼の人々はダンスと云へば不健全なものだと極めてしまつてゐる。だから私たちは、どうせそのくらゐな事は云はれる覺悟でゐなければならぬ。

「それにあたしは、讓治さんより外の男と二人ツきりで居たことなんか一度もないのよ。——」

ねえ、さうぢやなくつて……」
ダンスに行く時も私と一緒に内遊ぶ時私と一緒に、萬一私が留守であつても、客は一人と云ふことはない。一人で來ても今日は此方も一人だからと云へば、大概遠慮して歸つてしまふ。彼女の友達にはそんな不作法な男は居ない。——ナオミはさう云つて、

「あたしがいくら我が儘だつて、いいことと悪いことぐらゐは分つてゐるわよ。そりや讓治さん

んを欺さうと思へば欺せるけれど、あたし決してそんな事はしやしないわ。ほんとに公明正大よ、何一つとして讓治さんに隠したことなんかありやしないのよ。」

と云ふのでした。
「それは僕だつて分つてゐるんだよ、ただあんな事を云はれたのが、氣持が悪かつたと云ふだけなんだよ。」

「悪かつたから、どうするつて云ふの？もうダンスなんか止めるつて云ふの？」
「止めなくつてもいいけれど、成るべく誤解されないやうに、用心した方がいいと云ふのさ。」

「あたし、今も云ふやうに用心して附き合つてゐるぢやないの。」
「だから、僕は誤解して居やあしないよ。」
「讓治さんさへ誤解して居なけりや、世間の奴等が何で云はうと、恐くでもないわ。どうせあたしは、亂暴で口が悪くつて、みんなに憎まれるんだから。——」

そして彼女は、ただ私が信じてくれ、愛してくれば澤山だとか、自分は女のやうでないから自然男の友達が出来、男の方がサツパリしてゐて自分も好きだものだから、彼等とばかり遊ぶのだけれど、色の戀のと云ふやうなイヤラ

しい氣持ちは少しもないとか、センチメンタルな、甘つたるい口調で繰り返して、最後には例の「十五の歳から育てて貰つた恩を忘れたことはない」とか、譲治さんを親とも思ひ夫とも思つてゐます」とか、極まり文句を云ひながら、さめざめと涙を流したり、又その涙を私に拭かせたり、矢張り早に接吻の雨を降らせたりするのでした。

が、そんなに長く話をしながら濱田と熊谷の名前だけは、故意にか偶然にか、不思議に彼女を云ひませんでした。私も實は此の二つの名を云つて、彼女の顔に現はれる反應を見たいと思つてゐたのに、とうとう云ひそびれてしまひました。勿論私は彼女の言葉を一から十まで信じた譯ではありませんが、しかし疑へばどんな事でも疑へますし、強ひて過ぎ去つた事までも詮議立てする必要はない、此れから先を注意して監督すればいいのだと、……いや、始めはもつと強硬に出るつもりでゐたにも拘らず、次第にさう云ふ曖昧な態度にさせられました。そして涙と接吻の中から、すすり泣きの音に交つて嘩かれる聲を聞いてゐると、諷ではないかと二の足を踏みながら、やつぱりそれが本當のやうに思はれて來るのです。

こんな事があつてから後、私はそれとなくナオミの様子に氣をつけましたが、彼女は少しづつ、あまり不自然でない程度に、在來の態度を改めつつあるやうでした。ダンスにも行くことは行きますけれど、今迄のやうに踊臺ではなく、行つても餘り澤山は踊らずに、程よい處で切り上げて來る。客もうるさくはやつて來ない。私が會社から歸つて來ると、獨りで大人しく留守番をして、小説を読むとか、編み物をするとか、靜かに蓄音器を聴いてゐるとか、花壇に花を植ゑるとかしてゐる。

「今日も獨りで留守番かね？」

「ええ、獨りよ、誰も遊びに來なかつたわ。」

「ちや、淋しくはなかつたかね？」

「初めから獨りとしまつてゐれば、淋しいことなんかありやしないわ、あたし平氣よ。」

さう云つて、

「あたし、賑やかなのも好きだけれど、淋しいのも嫌ひぢやないわ。子供の時分にはお友達なんかちつともなくつて、いつも獨りで遊んでゐたのよ。」

「ああ、さう云へばそんな風だつたね。ダイヤモンド・カフェエにゐた時分なんか、仲間の者ともあんまり口を利かないで、少し陰鬱なくら

みだつたね。」

「ええ、さう、あたしはお馴染なやうだけれど、ほんたうの性質は陰鬱なのよ。——陰鬱ぢやいやない？」

「大人しいのは結構だけれど、陰鬱になられても困るなア。」

「でも此の間ぢゆうのやうに、暴れるよりはよくはなかつて？」

「そりやいらいいか知れやしないよ。」

「あたし、好い兒になつたでしよ。」

そしていきなり私に飛び着いて、兩手で首ツ玉を抱きしめながら、眼が晦むほど切なく激しく、接吻したりするのでした。

「どうだね、暫くダンスに行かないから、今夜あたり行つて見ようか。」

と、私の方から誘ひをかけても、

「どうでも——譲治さんが行きたいのなら、——」

と、浮かぬ顔つきで生返事をしたり、

「それより活動へ行きますせうよ、今夜はダンスは氣が進まないわ。」

と云ふやうなこともよくありました。

又あの、四五年前の、純な楽しい生活が、二人の間に戻つて來ました。私とナオミとは水入らずの二人きりで、毎晩のやうに淺草へ出かけ、

活動小屋を覗いた歸りには何處かの料理屋で
 昨飯をたべながら、「あの時分は斯うだつた」と
 か「ああだつた」とか、互ひになつかしい昔のこ
 とを語り合つて、思ひ出に耽る。「お前はなりが
 小さかつたものだから、帝國館の横木の上へ腰
 をかけて、私の肩に掴まりながら給を見たんだ
 よ」と私が云へば、「讓治さんが始めてカフエ
 エへ来た時分には、イヤにむつつりと黙り込ん
 で、遠くの方からチロチロ私の顔ばかり見て、
 氣味が悪かつた」とナオミが云ふ。

「さう云へばババさんは、此の頃あたしをお湯
 へ入れてくれないのね、あの時分にはあたしの
 體を始終洗つてくれたぢやないの。」

「ああ、さうさう、そんな事もあつたつねね。」
 「あつたつちぢやないわ、もう洗つてくれない
 の。こんなにあたしが大きくなつちや、洗ふ
 のは厭？」

「厭なことがあるもんか、今でも洗つてやりた
 いんだけど、實は遠慮してゐたんだよ。」
 「さう？ ぢや、洗つて頂戴よ、あたし又バ
 ビーさんになるわ。」

こんな會話があつてから、ちやうど幸ひ行
 水の季節になつて来たので、私は再び、物置
 きの隅に捨ててあつた西洋風呂をアトリエに運

び、彼女の體を洗つてやるやうになりました。

「大きなベビさん——と、嘗てはさう云つたも
 のですけれど、あれから四年の月日が過ぎた今
 のナオミは、そのたつぷりした身長を湯船の
 中へ横たへて見ると、もはや立派に成人し切つ
 て、完全な大人になつてゐました。ほどけ
 ば夕立雲のやうに、一杯にひろがる豐滿な髪。

ところどころの關節に、ゑくぼの出来てゐる
 まるやかな肉づき。そしてその肩に更に一層の
 厚みを増し、胸と臀とはいやが上にも弾力を
 帯びて、唯く波うち、優雅な脚はいよいよ長
 くなつたやうに思はれました。

「讓治さん、あたしいくらかせいが伸びた？」
 「ああ、伸びたとも。もう此の頃ぢや僕とあん
 まり違はないやうだね。」
 「今にあたし、讓治さんより高くなるわよ。此
 の間目方を計つたら十四貫二百あつたわ。」

「驚いたね、僕だつてやつと十六貫足らずだ
 よ。」
 「でも讓治さんはあたしより重いのか？ ちびの
 癖に。」

「そりや重いさ、いくらちびでも男は骨組みが
 頑丈だからな。」

「ぢや、今でも讓治さんは馬になつて、あたし

を乗せる勇氣がある？——来たての時分にはよ
 くそんなことをやつたぢやないの。ほら、あた
 しは背中へ跨つて、手拭ひを手綱にして、ハイ
 ハイドウドウつて云ひながら、部屋の中を廻つ
 たりして、——」

「うん、あの時分には輕かつたね、十二貫ぐ
 らゐなもんだつたらうよ。」
 「今だつたらば讓治さんは潰れちまふわよ。」
 「潰れるもんかよ。誰だと思ふなら乗つて御
 覽。」

二人は冗談を云つた末に、昔のやうに又馬
 ぐつこをやつたことがあります。

「さ、馬になつたよ。」
 と、さう云つて、私が四つん這ひになると、
 ナオミはどしんと背中の上へ、その十四貫二百
 の重みでのしかかつて、手拭ひの手綱を私の
 口に咬へさせ、

「まあ、何て云ふ小きなよたよた馬だらう！
 もつとしつかり！ ハイハイ、ドウドウ！」
 と叫びながら、面白さうに脚で私の腹を締
 めつけ、手綱をグイグイとしごきます。私は

彼女に潰されまいと一生懸命に力み返つて、汗
 を掻き掻き部屋を廻ります。そして彼女は、私
 がへたばつてしまふ迄はそのいたづらを止めな

いのでした。

「譲治さん、今年の夏は久し振りで鎌倉へ行かないらう」

八月になると、彼女は云ひました。

「あたし、あれツきり行かないんだから行つて見たいわ。」

「成る程、さう云へばあれツきりだつたかね。」

「さうよ、だから今年は鎌倉にしませうよ、あたしたちの記念の土地ぢやないの。」

ナオミの此の言葉は、どんなに私を喜ばしたことでせう。ナオミの云ふ通り、私たちが新婚旅行と——まあ云つて見れば新婚旅行に出かけたのは鎌倉でした。鎌倉ぐらゐわれわれに取つて記念になる土地はない筈でした。あれから

後も毎年何處かへ避暑に行きながら、すつかり鎌倉を忘れてゐたのに、ナオミがそれを云ひ出してくれたのは、全く素晴らしい思ひつきでした。

「行かう、是非行かう！」

私はさう云つて、一も二もなく賛成しました。

相談が極まるとそこそこに、會社の方は十日間の休暇を貰ひ、大森の家に戸じまりをして、月の初めに二人は鎌倉へ出かけました。宿は長

谷の通りから御用邸の方へ行く道の、植木と云ふ植木屋の離れ座敷を借りました。

私は最初、今度はまさか金波樓でもあるまいから、少し氣の利いた旅館へ泊まるつもりでしたが、それが圖らずも間借りをするやうになつたのは、大變都合のいいことを杉崎女史から聞いたと云つて、此の植木屋の離れの話を

ナオミが持つて来たからでした。ナオミの云ふには、旅館は不経済でもあり、あたり近所に氣がねもあるから、間借りが出来れば一番いい。

で、仕合はせなことに、女史の親戚の東洋石油の重役の人が、借りたままで使はずにある貸間があつて、それを此方へ譲つて貰へるさうだから、いつそ其の方がいいぢやないか。その重

役は、六、七、八、と三ヶ月間五百圓の約束で借り、七月一杯は居たのだけれど、もう鎌倉も飽きて来たから誰でも借りたい人があんなら喜んで貸す。杉崎女史の周旋とあれば家賃な

どはどうでもいいと云つてゐるから、……と云ふのでした。

「ね、こんな旨い話はないからさうしませうよ。それならお金もかからないから、今月一杜行つて居られるわ。」

と、ナオミは云ひました。

「だつてお前、會社があるからそんなに長くは遊べないよ。」

「一だけ鎌倉なら、毎日汽車で通へるぢやないの、ね、さうしない？」

「しかし、そこがお前の氣に入るかどうか見て来ないぢやあ、……」

「ええ、あたし明日でも行つて見て来るわ、そしてあたしの氣に入つたら極めてもいい？」

「極めてもいいけれど、ただと云ふのも氣持ぢが悪いから、そこを何とか話をつけて置かなければ、……」

「そりや分つてるわ。譲治さんは忙しいだらうから、いいとなつたら杉崎先生の所へ行つて、お金を取つてくれるやうに頼んで来るわ。まあ百圓か百五十圓は拂はなくつちや。……」

こんな調子で、ナオミは獨りでばたばたと進行させて、家賃は百圓と云ふことに折れ合ひ、金の取引も彼女がすつかり済ませて來ました。

私はどうかと案じてゐましたが、行つて見ると思つたよりも好い家でした。貸間とは云ふものの、母屋から獨立した平家建ての一と棟で、八疊と四疊半の座敷の外に、玄關と湯殿と臺所があり、出入口も別になつてゐて、庭から

直ぐと往來へ出ることが出来、植木屋の家族とも顔を合はせる必要はなく、此れなら成る程、二人が此處で新世帯を構へたやうなものでした。私は久し振りで、純日本式の新しい屋の上に腰をおろし、長火鉢の前にあぐらを掻いて、伸び伸びとしました。

「や、此れはいい、非常に気分がゆつたりするね。」

「いい家でせう？ 大森と執方がよくつて？」
「ずつと此の方が落ち着くね、此れなら幾らでも居られさうだよ。」

「それ御覽なさい、だからあたしが此處にしようつて云つたんだわ。」

さう云つてナオミは得意でした。
或る日——此處へ来てから三日目ぐらゐ立つた時だつたでせうか、午から水を浴びに行つて、一時間ばかり泳いだ後、二人が浴濱にころがつてゐると、

「ナオミさん？」

と、不意に私たちの顔の上で、さう呼んだ者がありました。

見ると、それは熊谷でした。たつた今海から上つたらしく、濡れた海水着がべつたりと胸に吸ひ着き、その毛むくぢやらかな脛を傅はつて、

ぼたぼた潮水が滴れてゐました。

「おや、まアちゃん、いつ来たの？」

「今日来たんだよ、——つつきりお前にちげへねえと思つたら、やつぱりさうだつた。」

そして熊谷は海に向つて手を舉げながら、

「おーい」

と呼ぶと、沖の方でも、

「おーい」

と誰かが返辭をしました。

「誰？ 彼處に泳いでゐるのは？」

「濱田だよ、——濱田と關と中村と、四人で今日やつて来たんだ。」

「まあ、そりや大分賑やかだわね、何處の宿屋に泊まつてゐるの？」

「へッ、そんな景氣のいいんぢやねえんだ。あんまり暑くつて仕様がねえから、ちよつと日歸りてやつて来たのよ。」

ナオミと彼とがしゃべつてゐる所へ、やがて濱田が上つて来ました。

「やあ、暫く！ 大へん御無沙汰しちまつて、——どうです河合さん、近頃さつぱりダンスに

お見えになりましたね。」

「さう云ふ譯でもないんですが、ナオミが飽きたと云ふもんだから。」

「さうですか、そりや怪しからんな。——あなた方はいつから此方へ？」

「つい二三日前からですよ、長谷の植木屋の離れ座敷を借りてゐるんです。」

「そりやほんとにいい所よ、杉崎先生のお世話でもつて今月一杯の約束で借りたの。」

「乙う洒落てるね。」

と、熊谷が云ひました。

「おや、當分此處に居るんですか、」

と濱田は云つて、

「だけど鎌倉にもダンスはありますよ。今夜も實は海濱ホテルにあるんだけれど、相手があれば行きたいところなんだがなア。」

「いやだわ、あたし」

と、ナオミはいべもなく云ひました。

「此の暑いのにダンスなんか禁物だわ、又そのうちに涼しくなつたら出かけるわよ。」

「それもさうだね、ダンスは夏のものぢやないね。」

さう云つて濱田は、つかぬ様子でモヂモヂしながら、

「おい、どうするいまアちゃん——もう一遍泳いで来ようか？」

「やあだア、已あ、くたびれたからもう歸らう

や。これから行つて一と休みして、東京へ歸ると日が暮れるぜ。」

「此れから行くつて、何處へ行くのよ？」

と、ナオミは濱田に尋ねました。

「何か面白い事でもあるの？」

「なあに、扇が谷に關の叔父さんの別荘があるんだよ。今日はみんなでそこへ引つ張つて來られたんで、御馳走するつて云ふんだけれど、窮屈だから飯を喰はずに逃げ出さうと思つてゐるのさ。」

「さう？ そんなに窮屈なの？」

「窮屈も窮屈も、女中が出て來て三つ指を銜きやがるんで、ガツカリよ。あれちや御馳走になつたつて飯が喉へ通りやしねえや。——なあ、濱田、もう歸らうや、歸つて東京で何か喰はうや。」

さう云ひながら、熊谷は直ぐに立たうとはしないで、脚を伸ばしてどつかり濱へ腰を据ゑたまま、砂を掴んで膝の上へ打つかけてゐました。

「ではどうです、僕等と一緒に晩飯をたべませんか。折角來たもんだから、——」

ナオミも濱田も熊谷も、ひとしきり黙り込んでしまつたので、私はどうもさう云はなければ

ば、バツが悪いやうな氣がしました。

十五

その晩は久しぶりで賑やかな晩飯をたべました。濱田に熊谷、あとから關や中村も加はつて、離れ座敷の八疊の間に六人の主客がチャア臺を圍み、十時頃までしゃべつておました。私も始めは、此の連中に今度の宿を荒らされるのは厭でしたが、かうしてたまに會つて見れば、彼等の元氣な、サツパリとしたことはありませんでした。ナオミの態度も、人をそらさぬ愛嬌があつて、蓮ツ葉でなく、座輿の添へ方やもてなし振りは、すつかり理想的でした。

「今夜は非常に面白かつたね、あの連中にときどき會ふのも悪くはないよ。」

私とナオミとは、終列車で歸る彼等を停車場まで送つて行つて、夏の夜道を手を携へて歩きながら話しました。星のきれいな海から吹いて來る風の涼しい晩でした。

「さう？ そんなに面白かつた？」

ナオミも私の機嫌のいいのを喜んでゐるやうな口調でした。そして、ちよつと考へてから云ひました。

「あの連中も、よく付き合へばそんなに悪い人たちぢやないのよ。」

「ああ、ほんたうに悪い人たちがぢやないね。」

「だけど、又そのうちに押しかけて來やしないかしら？ 關さんは叔父さんの別荘があるから、此れからちよいちよいみんなを連れてやつて來るつて、云つてぢやないの。」

「だが何だらう、僕等の所へさう押しかけや來ないだらう。……」

「たまにはいいけれど、度び度び來られると迷惑だわ。もし今度來たら、あんまり優待したい方がいいことよ。御飯なんか御馳走しないで、大概にして歸つて貰ふのよ。」

「けれどもまさか、追ひ立てる譯にも行かんからなあ。……」

「行かない事はありやしないわ、邪魔だから歸つて頂戴つて、あたしとつと追ひ立ててやるわ。——そんな事を云つちやいけない？」

「ふん、又熊谷に冷やかされるぜ。」

「冷やかされたつていいぢやないの、人が折角鎌倉へ來たのに、邪魔に來る方が悪いんだもの。」

二人は暗い松の末蔭へ來てゐましたが、さう云ひながらナオミはそつと立ち止まりました。

「讓治さん、」

甘い、かすかな、訴へるやうなその聲の意味が私に分ると、私は無言で彼女の體を兩手の中へ包みました。がぶりと一滴、潮水を呑んだ時のやうな、激しく強い唇を味はひながら、……

それから後、十日の休暇はまたたくうちに過ぎ去りましたが、私たちは依然として幸福でした。そして最初の計畫通り、私は毎日鎌倉から會社へ通ひました「ちよいちよい来る」と云つてゐた關の連中も、ほんの一遍、一週間ほど立つてから立ち寄つたきり、殆んど影を見せませんでした。

すると、その月の末になつてから、或る緊急な調べ物をする用事が出来て、私の歸りがおそくなることがありました。いつもは大抵七時迄には歸つて来て、ナオミと一緒に夕飯をたべられるのが、九時まで會社に居残つて、それから歸ると彼れ此れ十一時過ぎになる、一そんな晩が、五六日はつづく豫定になつてゐた、そのちやうど四日目のことでした。

その晩私は、九時までかかる筈だつたのが、仕事早く片附いたので、八時頃に會社を出ました。いつものやうに大井町から省線電車

で横濱へ行き、それから汽車に乗り換へて、鎌倉へ降りたのは、まだ十時には間のある時分でしたらうか。毎晩毎晩、——と云つても僅か三日か四日でしたけれど、——此のところ引きつづいて、歸りのおそい日が多かつたのですから、私は早く宿へ戻つてナオミの顔を見、ゆつくりくつろいで夕飯を喰べたいと、いつもよりは氣がせいゐたので、停車場前から御用邸の傍の路を俥でゆきました。

夏の日盛りの熱いさなかを一日會社で働いて、それから再び汽車に揺られて歸つて來る身には、此の海岸の夜の空氣は何とも云へず柔かな、すがすがしい肌觸りを覚えさせます。それは今夜に限つたことではありませんが、その晩はまた、日の暮れ方にさつと一遍、夕立ちがあつた後だつたので、濡れた草葉や、露のしたたる松の枝から、しづかに上る水蒸氣にも、こつそり忍び寄るやうなしめやかな香が感ぜられました。ところどころに、夜目にもしるく水たまりが光つてゐましたけれど、沙地の路はもはや埃を揚げぬ程度にまれいに乾いて、走つてゐる車夫の足音が、びろろの上をでも踏むやうに、軽く、しとしとと地面に落ちて行きました。何處かの別荘らしい家の、生垣の奥から蒼

音器が聞えたり、たまに一人か二人づつ、白地の浴衣の人影がそこらを徘徊してゐたり、いかにも避暑地へ来たらしい心持がするのでした。

木戸口のところで俥を降りして、私は庭から離れ座敷の縁側の方へ行きました。私の靴の音を聞いてナオミが直ぐにその縁側の障子を明けて出るであらうと豫期してゐたのに、障子の中は明りがかんかん燈つてゐながら、彼女の居さうなけはひはなく、ひつそりしてゐるのでした。

「ナオミちゃん、……」

私は二三度呼びましたが、返辭がないので、縁側へ上つて障子を明けると、部屋はからツぽになつてゐました。海水着だの、タオルだの、浴衣だのが、壁や、襖や、床の間や、そこらちうに引つけてあり、茶器や、灰皿や、座布團などが出しつ放しになつてゐる座敷の様子、いつもの通り亂雑で、取り散らかしてはありましたが、それは決して、つい今しがた留守になつたのではない静かさがそこにあるのを、私は戀人に特有な感覺を以て感じました。

「何處かへ行つたのだ、……恐らく二三時間も

前から、……」

それでも私は、便所を覗いたり、湯殿を調べたり、なほ念のために勝手口へ降りて、流しもとの電燈をつけて見ました。すると私の眼に觸れたのは、誰かが盛んに喰ひ荒らし、飲み荒らして行つたらしい正宗の一升壺と、西洋料理の残骸でした。さうだ、さう云へばあの灰皿にも煙草の吸殻が澤山あつた。あの同勢が押しかけて来たのに違ひないのだ。……

「おかみさん、ナオミが居ないやうですが、何處かへ出て行きましたか？」

「私は母屋へ驅けて行つて、植惣のかみさんに尋ねました。」

「ああ、お嬢さんでいらつしやいますか。——」

「かみさんはナオミのことを「お嬢さん」と云ふのです。夫婦ではあつても、世間に對しては單なる同僚者、若しくは許婚と云ふ風に取つて貰ひたいので、さう呼ばなければナオミは機嫌が悪かつたのです。」

「お嬢さんはあの、夕方一遍お歸りになつて、御飯をお上りになつてから、又皆さんとお出かけになりましたでございます。」

「皆さんと云ふのは？」

「あの、……」

と云つて、かみさんはちよつと云ひ濁んでから、

「あの熊谷さんの若様や何か、皆さん御一緒でございましたが、……」

私は伯のかみさんが、熊谷の名を知つてゐるのみか、「熊谷さんの若様」などと彼を呼ぶの不思議に思ひましたけれど、今そんな事を聞いてゐる暇はなかつたのです。

「夕方一遍歸つたと云ふと、晝間もみんな一緒でしたか？」

「お午過ぎに、お一人で泳ぎにいらつしやまして、それからあの、熊谷さんの若様と御一緒にお歸りになりました、……」

「熊谷君と二人きりで？」

「はあ、……」

私は實は、まだその時はそんなに慌ててはゐませんでした。かみさんの言葉が何となく云ひにくさうで、その顔つきに當惑の色がますます強く表れて來るのが、次第に私を不安にさせました。此のかみさんに腹を見られるのはイヤだと思ひながら、私の口調は性急にならずにはゐませんでした。

「ぢやあ何ですか、大勢一緒ぢやないんですか！」

「はあ、その時はお二人きりで、今日はホテルに晝間のダンスがあるからと仰つしやつて、お出かけになつたんでございますが、……」

「それから？」

「それから夕方、大勢さんで戻つていらつしやいました。」

「晩の御膳は、みんな内でたべたんですね？」

「はあ、何ですか大さうお賑やかに、……」

さう云つてかみさんは、私の眼つきを判じながら、苦笑ひするのです。

「晩飯を食つてから又出かけたのは、何時頃でしたらうか？」

「さあ、あれは、八時時分でございますでせうか、……」

「ぢや、もう二時間にもなるんだ。」

と、私は覺えず口へ出して云ひました。

「するとホテルにでも居るのかしら？ 何かおかみさんは、お聞きになつちや居ませんかしら？」

「よくは存じませんが、御別荘の方ぢやございませんまいか、……」

成る程、さう云はれば關の叔父さんの別荘と云ふのか、肩が谷にあつたことを私は思ひ出しました。

「ああ別荘へ行つたんですか。それぢや此れから僕は迎ひに行つて来ますが、どの邊にあるか、おかみさんは御存知ありますまいか？」

「あの、直きその、長谷の海岸でございますが、……」

「へえ、長谷ですか？ 僕はたしか扇が谷だと聞いてたんですが、……あの、何です、僕の云ふのは、今夜も此處へ来たかどうか知らないけれど、ナオミのお友達、鬮と云ふ男の叔父さんの別荘なんだが、……」

私がさう云ふと、かみさんの顔には、つとかな驚きが走つたやうでした。

「その別荘と違ふんでせうか？……」

「はあ、……あの、……」

「長谷の海岸にあると云ふのは、一體誰の別荘なんですか？」

「あの、——熊谷さんの御親戚の、……」

「熊谷君の？……」

私は急に眞つ青になりました。

停車場の方から長谷の通りを左へ切れて、海濱ホテルの前の路を眞つ直ぐに行つて御覽なさい。路は自然と海岸へつきあたります。その出はづれの角にある大久保さんの御別荘が、熊谷さんの御親戚なのでございます。——さうか

みさんは云ふのでしたが、全く私には初耳でした。ナオミも熊谷も、今まで嘗てそんな話をおくびにも出しはしませんでした。

「その別荘へはナオミはたびたび行くんでせうか？」

「はあ、いかがでございますかしら、……」

さうは云つても、そのかみさんのオドオドした素振りを、私は見逃しませんでした。

「しかし勿論、今夜が始めてぢやないんでせうな？」

私はひとりで呼吸が迫り、聲がふるへるのをどうすることも出来ませんでした。私の剣幕に恐れをなしたのか、かみさんの顔も青くなりました。

「いや、御迷ひはかけませんから、構はずに仰つしやつて下さい。昨夜はどうでした？ 昨夜も出かけたんですか？」

「はあ、……ゆうべもお出かけになつたやうでございますでしたが、……」

「ぢや、昨日の晩は？」

「はあ、……」

「やつぱり出かけたんですね？」

「はあ、……」

「その前の晩は？」

「はあ、その前の晩も、……」

「僕の歸りがおそくなつてから、ずつと毎晩さうなんでせうね？」

「はあ、……ハツキリ覚えてはをりませんけれど、……」

「で、いつも大概何時ごろに戻つて来るんです？」

「大概何でございます、……十一時ちよつと前ごろには、……」

では初めから二人で己を憐いであつたのだ！

それでナオミは鎌倉へ来たがつたのだ！——私の頭は暴風のやうに廻轉し始め、私の記憶は非常な速さで、此の間ちゆうのナオミの言葉と行動とを、一つ残らず心の底に映しました。一瞬間、私を取り巻くからくりの絲が驚く程の明瞭さで露はれましたそこには殆んど、私のやうな單純な人間には到底想像も出来なかつた、二重にも三重にももの諷があり、念には念を入れた謀し合はせがあり、而もどれ程大勢の奴等がその陰謀に加擔してゐるか分らないくらゐ、それは複雑に思はれました。私は突然、平な、安全な地面から、どしんと深い陥穽へ叩き落され、穴の底から、高い所をガヤガヤ笑ひながら通つて行くナオミや、熊谷や、濱

田や、關や、その他無数の人影を羨ましうらに見送つてゐるのです。

「おかみさん、僕は此れから出かけて来ますが、もし行き違ひに戻つて来て、僕が歸つて来たことは何卒黙つてゐて下さい、少し考へがあるんですから。」

さう云ひ捨てて、私は表へ飛び出しました。

海濱ホテルの前へ出て、教へられた路を、成るべく暗い蔭に寄りながら進んで行きました。そこは、兩側に大きな別荘の並んでゐる、森閑とした、夜は人通りの少い街で、いい鹽梅にさう

明るくはありませんでした。とある門燈の光の下で、私は時計を出して見ました。十時がやつと廻つたばかりのところでした。その大久保の別荘と云ふのに、熊谷と二人きりでゐるのか、それとも例の御定連と騒いでゐるのか、兎に角現場を突き止めてやりたい。若し出来るなら彼等に感づかれないやうにコツソリ證據を掴んで来て、あとで彼等がどんなしらじらしい出来かを云ふか試してやりたい。そして動きが取れないやうにして置いて、トツチメてやりたいと思つたので、私は歩調を早めて行きました。

目的の家はすぐ分りました。私は暫くその

前迎りを往つたり来たりして、構への様子を窺ひましたが、立派な石の門の内にはこんもりとした植ゑ込みがあり、その植ゑ込みの間を縫うて、ずつと奥まつた玄關の方へ砂利を敷き詰めた道があり、「大久保別邸」と記された標札の文字の古さと云ひ、ひろい庭を圍んでゐる苔のついた石垣と云ひ、別荘と云ふよりは年數を經た屋敷の感じで、こんな所にこんな宏壯な邸宅を持つた熊谷の親戚があらうなどは、思へば思ふほど意外でした。

私は成るべく、砂利に足音を響かせないやうに、門の中へ忍んで行きました。何分樹木が繁つてゐるので、往來からは母屋の模様がよく分りませんでした。近寄つて見ると、奇妙なことに、表玄關も裏玄關も、二階も下も、そこから望まれる部屋と云ふ部屋は悉くひっそりとして、戸が締まつて、暗くなつてゐるのです。

「ハテナ、裏の方にでも熊谷の部屋があるのぢやないか。」

私はさう思つて、又足音を殺しながら、母屋に添つて後ろ側へ廻りました。すると果して、二階の一と間と、その下にある勝手口に、明り

その二階が熊谷の居間であることを知るには、たつた一目で十分でした。なぜかと云ふのに、縁側を見ると例のフラット・マンドリンが手すりに寄せかけてあるばかりか、座敷の中には、たしかに私の見覚えのあるタスカンの中折帽子が柱にかかつてゐたからです。が、障子が明け放されてゐるのに、話聲一つ洩れて来ないので、今その部屋に誰もゐないことは明らかでした。

「事に依ると、己と行き違ひになつたのぢやないか。熊谷の奴、その邊までナオミを送つて行つたのぢやないか。」

——さう云へば勝手口の方の障子も、今しがた誰かがそこから出て行つたらしく、矢張り明け放しになつてゐました。と、私の注意は、勝手口から地面へさしてゐる仄かな明りを傳はつて、つい二三間先のところに裏門のあるのを發見しました。門は扉がついてゐない古い二本の木の柱で、柱と柱の間から、由比が濱に碎ける波が闇にカツキリと白い線になつて見え、強い海の香が襲つて来ました。

「きつと此處から出て行つたんだな。」
そして私が裏門から海岸へ出るや殆んど同時に、疑ふべくもないナオミの聲がすぐと近

所で聞きました。それが今まで聞えなかつたのは、大方風の加減か何かだつたのでせう。——「ちよつと！靴の中へ砂が這入つちやつて、歩けやしないよ。誰か此の砂を取つてくれない？……まあ、ちやん、あんた靴を脱がしてよ！」

「いやだよ、己あ。己あお前の奴隷ぢやあねえよ。」

「そんなことを云ふと、もう可愛がつてやらないわよ。……ちやあ濱さんは親切だね、……ありがと、ありがと、濱さんに限るわ、あたし濱さんが一番好きさ。」

「畜生！人が好いと思つて馬鹿にするない。」

「あ、あつはははは！いやよ濱さん、そんなに足の裏を擦つちや！」

「擦つてるんぢやないんだよ、こんなに砂が附いてゐるから、擦つてやつてゐるんぢやないか。」

「ついでにそれを舐めちやつたら、パパさんになるぜ。」

さう云つたのは關でした。つづいてどつと四人の男の笑ひ聲がしました。

ちやうど私の立つてゐる場所から、沙丘がだらだらと降り坂になつたあたりに、葎簀張りの茶店があつて、聲はその小屋から聞えて来る

のです。私と小屋との間隔は五間と離れてゐませんでした。まだ會社から歸つたままの茶のアルバカの背廣服を着てゐた私は、上衣の襟を立て、前のボタンをすつかり蔽めてカラーとワイシャツが目立たぬやうにし、麥藁帽子を脇の下に隠しました。そして身を屈めて這ふやうにしながら、小屋のうしろの井戸側の蔭へついでと走つて行きましたが、とたんに彼等は、

「さあ、もういいわよ、今度は彼方へ行つて見ようよ。」

と、ナオミが音頭を取りながら、ぞろぞろ繋がつて出て來ました。

彼等は私には氣がつかないで、小屋の前から被打ち際へ降りて行きました。濱田に熊谷に關に中村、——四人の男は浴衣の着流しで、そのまん中に挟まつたナオミは、黒いマントを引つかけて、踵の高い靴を穿いてゐるのだけが分りました。彼女は鎌倉の宿の方へ、マントや靴を借り物に違ひありません。風が吹くのでマントの裾がばたばためくれさうになる、それを内側から兩手でしつかり體へ巻きつけてゐるらしく、歩く度毎にマントの中で大きな聲が圓くむつくりと動きます。そして彼女は酔つ拂ひのやうな

步調で、兩方の肩を左右の男に打ツつけながら、わざとよろけて行くのでした。

それまでちつと小さくなつて息をこらしてゐた私は、彼等との距離が半町ぐらゐ隔たつて、白い浴衣が遠くの方にほんのちらちら見える時分、始めて立ち上つてそつとその跡を追ひました。最初彼等は、海岸を眞つすぐに、材木座の方へ行くのだらうかと思はれましたが、中途でだんだん左へ曲つて、街の方へ出る沙山の向うたやうでした。彼等の姿が、その沙山の向うへ隠れきつてしまふと、私は急に全速力で山を駆け上り始めました。なぜなら私は、ちやうど彼等の出る路が、松林の多い、身を隠すのに屈覚な物蔭のある、暗い別荘街であるのを知つてゐたので、そこならもつと傍へ寄つても、多分彼等に發見される恐れはないと思つたからです。

降りると忽ち、彼等の陽氣な唄聲が私の耳朶を打ちました。それもその筈、彼等は僅か五六歩に足らぬところを、合唱しながら拍子を取つて進んで行くのです。

Just before the battle, mothers,
I am thinking must of you, ……

それはナオミが口癖にうたふ唄でした。熊谷

は先に立つて、指揮棒を振るやうな手つきをしてゐます。ナオミは矢張り彼方へよろよろ、此方へよろよろと、肩を打つつけて歩いて行きます。すると打つつけられた男も、ポートでも漕いでゐるやうに、一緒になつて端から端へよるけて行きます。

「ヨイシヨ！ ヨイシヨ！……ヨイシヨ！ ヨイシヨ！……」

「アラ、何よ！ そんなに押しちや堀へ打つつかるぢやないの。」

「ばらばらばらッ、と、誰かが堀をステッキで殴つたやうでした。ナオミがきやツきやツと笑ひました。

「さ、今度はホニカ、ウワ、ウイキ、ウイキだ！」

「よし来た！ 此奴あ布哇の臂振りダンスだ、みんな唄ひながらけつを振るんだ！」

ホニカ、ウワ、ウイキ、ウイキ！ スウイト、ブラウン、メイドウン、セツド、トウ、ミー、……そして彼等は一度に臂を振り出しました。

「あッはははは、おけつの振り方は關さんが一番うまいよ。」

「そりやさうさ、己あ此れでも大いに研究したんだからな。」

「何處で？」
「上野の平和博覽會でさ、ほら、萬國館で土人が踊つてゐるだらう？ 己あ彼處へ十日も通つたんだ。」

「馬鹿だな貴様は。」
「お前もいつそ萬國館へ出るんだつたな、お前の面ならたしかに土人とまぢげへられたよ。」

「おい、まあちゃん、もう何時だらう？」
さう云つたのは濱田でした。濱田は酒を飲まないのので一番眞面目のやうでした。

「さあ、何時だらう！ 誰か時計を持つてゐねえか？」

「うん、持つてゐる、——」
と、中村が云つて、マツチを擦りました。

「や、もう十時二十分だぜ。」
「大丈夫よ、十一時半にならなけりやババは歸つて来ないんだよ。此れからぐるりと長谷の通りをひと廻りして歸らうぢやないの。あたし此のなりで賑やかな所を歩いて見たいわ。」

「賛成賛成！」
と、關が大聲で怒鳴りました。

「だけど此の風で歩いたら一體何に見えるだらう？」

「どう見ても女團長だね。」

「あたしが女、長なら、みんなはあたしの部下なんだよ。」

「白波四人男ぢやねえか。」
「それぢやあたしは辨天小僧よ。」

「エエ、女團長河合ナオミは、……」
と、熊谷が活辯の口調で云ひました。

「……夜陰に乗じ、黒きマントに身を包み、……」

「うふふふ、お止しよそんな下司張つた聲を出すのは！」

「……四名の悪漢を引率いたして、由比が濱の海岸から……」

「お止しよまあちゃん！ 止さないかつたら！」
「おし、ヤツとナオミが、平手で熊谷の頬ツペたを打ちました。」

「あ痛え、……下司張つた聲は己の地聲さ、己あ浪花節語りにならなかつたのが、天下の恨事だ。」

「だけれどメリー・ピクフォードは女團長にやならないぜ。」

「それぢやない？ プリシラ・デイーンかい？」

「うん、さうだ、プリシラ・デイーンだ。」

十六

「ラ、ラ、ラ、ラ、ラ、」
と濱田が再びダンス・ミュージックを唄ひながら、踊り出した時でした。私は彼がステツプを踏んで、ふいと後ろ向きになりさうにしたので、素早く木蔭へ隠れましたが、同時に濱田の「おやー」と云ふ聲がしました。

「誰？——河合さんぢやありませんか？」
みんな俄かに、しーんと黙つて、立ち止まつたまま、闇を透かして私の方を振り返りました。「しまつた」と思つたが、もう駄目でした。

「パパさん！　パパさんぢやないの！　何してゐるのよそんな所で？　みんなの仲間へお這入んなさいよ。」

ナオミはいきなりツカツカと私の前へやつて来て、ぱつとマントを開くや否や、腕を伸ばして私の肩へ載せました。見ると彼女は、意外も意外、マントの下に一絲をも纏つてゐませんでした。

「何だお前は！　お前は己に恥を掻かせたな！　ばいた！　淫賣！　ちごく！」

「おほほほほ、」
その笑ひ聲には、酒の匂ひがぶんぶんしました。私は今迄、彼女が酒を飲んだところを一度も見たことはなかつたのです。

ナオミが私を欺いてゐたからくりの一端は、その晩とその明るく日と二日がかりで、やつと剛情な彼女の口から聞き出すことが出来ました。

私が堆察した通り、彼女が鎌倉へ来たがしたのは、矢張り熊谷と遊びたかつたからなのだと思います。扇が谷に關の親類が居ると云ふのは眞つ赤な諷で、長谷の大久保の別荘こそ、熊谷の叔父の家だつたのです。いや、そればかりか、

私が現に借りてゐる此の離れ座敷も、實は熊谷の世話なものでした。此の植木屋は大久保の邸のお出入りなので、熊谷の方から談じ込んで、

どう話をつけたものか、前に居た人に立ち退いて貰ひ、そこへ私たちを入れるやうにしたのでした。云ふ迄もなく、それはナオミと熊谷とが相談の上でやつたことで、杉崎女史の周旋だとか、東洋石油の重役云々は、全くナオミの出陣目に過ぎなかつたのです。さてこそ彼女

は、自分でどんな事を運んだ譯でした。植惣のかみさんの話に依ると、彼女が始めて下檢分に來た折には、熊谷の若様と一緒にやつて來て、恰も若様の一家の人であるかのやうに

振る舞つてゐたばかりでなく、前からさう云ふ觸れ込みだつたものだから、よんどころなく先のお客を斷つて、部屋を此方へ明け渡したのだと云ふことでした。

「おかみさん、まことに飛んだ係り合ひで御迷惑をかけて済みませんが、どうかおかみさんの知つていらつしやるだけの事を私に話してくれませんか。どんな場合でもあなたの名前を出すやうなことはしませんから、私は決して此の事に就いて、熊谷の方へ談じ込む氣はないんです。事實を知りたいだけなんです。」

私は明くる日、今まで休んだことのない會社を休んでしまひました。そして嚴重にナオミを監視して、「二歩も部屋から出てはならぬ」と堅く云ひつけ、彼女の衣類、穿き物、財布を悉く纏めて母屋に運び、その一室でかみさんを訊問しました。

「ちや何ですか、もうずつと前から、私の留守中二人は往き來してゐたんですか？」

「はあ、それは始終ございました。若様の方からお出けになりましたり、お嬢さまの方から「大久保さんの別荘には全體誰がゐるんですね？」

「今年(こゝね)は皆さんが御本宅(ごほんたく)の方(かた)へお引き揚げ(おひきあげ)になりました。時時(ときとき)お見え(おみえ)にはなりませんけれど、いつも大柳(おおいなぎ)熊谷(くまがや)さんの若様(わかしら)お一人(ひとり)でございませう。」

「ではあの、熊谷君(くまがやくん)の友達(ともだち)はどうでしたらう？あの連中(れんちゆう)も折折(せせ)やつて来た(きた)でせうか？」

「はあ、ちよ、ちよ、ちよ、おいでになりましたでございませう。」

「それは何(なに)ですか、熊谷君(くまがやくん)が連れて来(も)るんですか、めいめい勝手(かたがへ)に来(こ)るんですか？」

「さあ」

と云(い)つて、——此(こ)れは私(わたし)が後(あと)で氣(き)がついた事(こと)なのですが、その時(とき)かみさんは非(ひ)常(じょう)に困(こま)つたらしい様子(ようす)をしました。

「……御(ご)めいめいでおいでになつたり、若様(わかしら)と御(ご)一緒(いっしょ)だつたり、いろいろのやうでございませうが、……」

「誰(たれ)か、熊谷君(くまがや)の外(ほか)にも、一人(ひとり)で来(き)た者(もの)があるでせうか？」

「あの濱田(はまた)さんと仰(お)つしやるお方(かた)や、それから外(ほか)のお方(かた)たちも、お一人(ひとり)でお越(こ)しになつた事(こと)がございませうかと存(ぞん)じます、……」

「ぢやあそんな時は何(なに)處(どこ)かへ誘(よ)つて出(で)るのですかね？」

「いいえ、大抵(たいてい)内(うち)でお話(わ)しになつていらつしやいました。」

私(わたし)に一番(いちばん)不可解(ふかか)なのは此(こ)の一事(じ)でした。ナオミと熊谷(くまがや)とが怪(あや)しいとすれば、なぜ邪魔(じま)になる連中(れんちゆう)を引(ひ)つ張(は)つて来(き)たりするのだらう？彼等(かれら)の一人(ひとり)が訪(ま)ねて来(き)たり、ナオミがそれと話(わ)してゐるとはどう云(い)ふ譯(わけ)だらう？彼等(かれら)がみんなナオミを狙(ねら)つてゐるとしたら、何故(なぜ)喧嘩(けんか)が起(お)らないだらう？

昨夜(けさ)もあんなに四人(よにん)の男(おとこ)は仲好(なほ)くふざけてゐたぢやないか。さう考(かんが)へると再び(また)私(わたし)は分(わか)らなくなつて、果(はた)してナオミと熊谷(くまがや)とが怪(あや)しいかどうかさへ、疑問(ぎもん)になつてしまふのでした。

ナオミはしかし、此(こ)の點(てん)になると容易(やす)に口(くち)を開(ひら)きませんでした。自分(じぶん)は別に深(こ)い企(く)らみがあつたのではない、ただ大勢(おほしやう)の友達(ともだち)と騒(さわ)きたかつただけなのだ、何處(どこ)迄(まで)もさう云(い)ひ張(は)るのです。では何(なに)のためにあゝ迄(まで)危険(けんけん)に、私(わたし)を欺(あざ)めたのかと云(い)ふと、

「だつて、パパさんがあの人(ひと)たちを疑(うた)ぐつてゐて、餘計(よけい)な心配(しんぱい)をするんだもの。」

と云(い)ふのでした。

「それぢや、關(せき)の親類(せんとく)の別荘(べつしやう)があると云(い)つたのはどう云(い)ふ譯(わけ)だい？關(せき)と熊谷(くまがや)とどう違(ちが)ふんだ

い？」

さう云(い)はれると、ナオミははたと汗(あせ)辭(じ)に窮(きつ)したやうでした。彼女は急(いそ)に下(した)を向(む)いて、黙(もく)つて、唇(くちびる)を噛(か)みながら、上眼(うまな)づかひに穴(あな)のあくほど私(わたし)の顔(かほ)を睨(にら)んでゐました。

「でもまあちゃんが一番(いちばん)疑(うた)ぐられてゐるんだもの、——まだ關(せき)さんにして置(お)いた方が(かた)いくらかいいと思(おも)つたのよ。」

「まあちゃんなんて云(い)ふのはお止(と)し！熊谷(くまがや)といふ名(な)があるんだから！」

我慢(がまん)に我慢(がまん)をしてゐた私(わたし)は、そこでとうとう爆發(ばくぱつ)しました。私(わたし)は彼女(かのじょ)が「まあちゃん」と呼(よ)ぶのを聞(き)くと、むいづが走る(はし)るほどイヤだつたのです。

「おい！お前は熊谷(くまがや)と關(せき)があつたんだらう？正直(しょうじき)のことを云(い)つておしまひ！」

「關係(くわいけい)なんかありやしないわよ、そんなにあたしを疑(うた)ぐるなら、證據(てんこ)でもあるの？」

「證據(てんこ)がなくつても己(おれ)にはちゃんと思(おも)つてゐるんだ。」

「どうして？——どうして分(わか)るの？」

ナオミの態度(たいど)は凄(こ)いほど落(お)ち着(き)いたものでした。その口邊(くちべ)には小憎(こにく)らしい薄笑(うすわら)ひさへ浮(う)かん

でゐました。

「昨夜のあつぎまは、あれは何だ？ お前はあんなさまをしながらそれでも潔白だと云へる積りか？」

「あれはみんながあたしを無理に酔つ拂はして、あんななりをさせたんだもの。——ただあややつて表を歩いただけぢやないの。」

「よし！ それぢや飽く迄潔白だと云ふんだな？」

「ええ、潔白だわ。」

「お前はそれを誓ふんだな！」

「ええ、誓ふわ。」

「よし！ その一言を忘れずに居ろよ！ 己はお前の云ふことなんか、もう一言も信用しぢや居ないんだから。」

それきり私は、彼女と口をききませんでした。

私は彼女が、熊谷に通牒したりすることを恐れて、書翰箋、封筒、インキ、鉛筆、万年筆、郵便切手、一切のものを取り上げてしまひ、それを彼女の荷物と一緒に植惣のかみさんに預けました。そして私が留守の間にも決して外出することが出来ないやうに、赤いちぢみのガウン一枚を着せて置きました。それから私は、三日目の朝、會社へ行くやうな風を装つて鎌倉を

出ましたが、どうしたら證據を得られるか、散散汽車の中で考へた末、兎に角最初に、もう一月も空屋になつてゐる大森の家へ行つて見ようと思ひました。もし熊谷と關係があるなら、無論夏から始まつたことではない。大森へ行つて、ナオミの持ち物を搜索したなら、手紙か何か出て來はしないかと思つたからです。

その日はいつもより一と汽車おくれ出て來たので、大森の家の前まで來たのは彼れこれ十時頃でした。私は正面のポーチを上り、合鍵で扉をあけ、アトリエを横ぎり、彼女の部屋を調べるために屋根裏へ昇つて行きました。そして部屋のドアを開いて、一歩中へ踏み込んだ瞬間、私は思はず「あつ」と云つたなり、二の句がつげずに立ち竦んでしまひました。見るとそこには、濱田が獨りぼつ然として臥ころんでゐるではありませんか！

濱田は私が這入つて來ると、突然顔を眞つ赤にして、

「やあ」

と云つて起き上りました。

「やあ」

「やあ」
さう云つたきり、二人は暫く、相手の腹を讀むやうな眼つきで、睨めツくらをしてゐまし

た。
「濱田君、……君はどうしてこんな所に？」

「……」
濱田は口をもぐもぐやらせて、何か云ひさうにしましたけれど、矢張り黙つて、私の前に憐れみを乞ふかの如く、項を垂れてしまひました。

「え？ 濱田君、……君はいつから此處に居るんです？」

「僕は今しがた、……今しがた來たところなんです。」

もうどうしても逃れられない、覺悟をきめた

と云ふ風に、今度はハツキリとさう云ひました。

「しかし此の家は、戸締まりがしてあつたでせう、何處から這入つて來たんですね？」

「裏口の方から、——」

「裏口だつて、錠がおけてゐた筈だけれど、……」

「ええ、僕は錠を持つてゐるんです。——」
さう云つた濱田の聲は、聞えないくらゐ微かでした。

「錠を？——どうして君が？」

「ナオミさんから貰つたんです。——もうさう云へば、僕がどうして此處に來て居るか、大目あなたはお察しになつたと思ひますが、……」

濱田は静かに面を上げて、晒然としてゐる私の顔を、まともに、そして眩しさに、ちつと見ました。その表情にはいざとなると正直な、お坊つちやんらしい氣品があつて、いつもの不良少年の彼ではありませんでした。

「河合さん、僕はあなたが今日出し抜けに此處へおいでになつた理由も、想像がつかなくはありませぬ。僕はあなたを欺してゐたんです。それに就いてはたとへどんな制裁でも、甘んじて受ける積りなんです。今更こんな事を云ふのは變ですけれど、僕はとうから、一度あなたに云ふ所を發見される迄もなく、自分の罪を打ち明けようと思つてゐました。……」

さう云つてゐるうちに、濱田の眼には涙が一粒浮かんで来て、それがぼたぼた頬を傳はつて流れ出しました。凡べてが全く、私の豫想の外でした。私は黙つて、眼瞼をパチパチやらせながら、その光景を眺めてゐましたが、彼の自白を一應信用するとしても、まだ私には腑に落ちないことだらけでした。

「河合さん、どうか僕を赦すと云つてくれませぬか、……」
「しかし、濱田君、僕にはまだよく分つてゐないんだ。君はナオミから鍵を貰つて、此處へ何

しに来てゐたと云ふんです？」
「此處で、……此處で今日……ナオミさんと逢ふ約束になつてゐたんです、」

「え？ ナオミと此處で逢ふ約束に？」
「ええ、さうです、……それも今日だけぢやないんです。今迄何度もさうしてたんです。……」

だんだん聞くと、私たちが鎌倉へ引移つてから、彼とナオミとは此處で三度も密會してゐると云ふのでした。つまりナオミは、私が會社へ出て行つたあとで、一と汽車か二と汽車おくらせて、大森へやつて來るのださうです。いつも大概朝の十時前後に來て、十一時半には歸つて行く。それで鎌倉へ戻るのはおそくも午後一時頃なので、彼女がまさかその間に大森まで行つて來たらうとは、宿の者にも氣がつかれないやうにしてある。そして濱田は、今朝も十時に落ち合ふ手筈になつてゐたので、さつき私が上つて來たのを、つきりナオミが來たのだとばかり思つてゐた、と、さう彼は云ふのでした。

此の驚くべき自白に對して、最初に私の胸を一杯に充たしたのは、ただ茫然たる感じより外ありませんでした。開いた口が塞がらない、何とも彼とも話にならない、事實その通り

の氣持ちでした。斷つて置きますが私はその時三十二歳で、ナオミの歳は十九でした。十九の娘が、斯くも大膽に、斯くも奸黠に、私を欺いて居ようとは！ ナオミがそんな恐ろしい少女であるとは、今の今まで、いや、今になつても、まだ私には考へられないくらゐでした。

「君とナオミとは、一體いつからさう云ふ關係になつてゐました？」
濱田を赦す救きないは寧ろ二の次ぎの問題として、私は飽く迄も根柢り葉柢り、事實の真相を知りたいと思ふ願ひに燃えました。

「それはよほど前からなんです、多分あなたが僕を御存じにならない時分、……」
「ぢや、いつだつたか君に始めて會つたことがありましたつけれ、——あれは去年の秋だつたでせう、僕が會社から歸つて來ると、花壇のところで君がナオミと立ち話をしてゐたのは？」
「ええ、さうでした、彼れ此れちやうど一年になります。——」

「すると、もうあの時分から？」
「いや、あれよりもつと前からでした。僕は去年の三月からピアノを習ひに、杉崎安史の所へ通ひ出したんですが、あそこで始めてナオミさんを知つたんです。それから間もなく、何で

も三月ぐらゐ立つてから、——」

「その時分は何處で逢つてたんです？」

「やつぱり此處の、大森のお宅でした。午前中

はナオミさんは何處へも稽古に行かないし、獨

りて淋しくつて仕様がなから遊びに来てくれ

と云はれたんで、最初はそのつもりで訪ねて來

たんです。」

「ふん、ぢや、ナオミの方から遊びに來いと云

つたんですね？」

「ええ、さうでした。それに僕はあなたと云ふ

ものがあることを、全く知りませんでした。自

分の國は田舎の方だから、大森の親類へ

來てゐるので、あなたとは従兄妹同士の間柄だ

と、ナオミさんは云つてゐました。それがさう

でないといつたのは、あなたが始めてエルドラ

ドオのダンスに來られた時分でした。けれども

僕は、……もうその時はどうすることも出來な

くなつてゐたのです。」

「ナオミが此の夏、鎌倉へ行きたがつたのは、

君と相談の結果なのぢやないでせうか？」

「いいえ、あれは僕ぢやないんです、ナオミさ

んに鎌倉行きをすすめたのは熊谷なんです。」

濱田はさう云つて、急に一段と語氣を強めて、

「……それぢやナオミは熊谷君とも？……」

「さうです、今ナオミさんを一番自由にしてゐ

る男は熊谷なんです。僕はナオミさんが熊谷

を好いてゐるのを、とうからうすすは感づい

てゐました。けれども一方僕と關係してゐな

がら、まさか熊谷ともさうなつてゐようとは、

夢にも思つてゐなかつたんです。それにナオミ

さんは、自分はただ男の友達と無邪氣に騒ぐの

が好きなんだ、それ以上の事は何も無いんだ

つて云ふもんだから、成る程それもさうかと思

つて、……」

「ああ」と、私はため息をつきながら云ひました。

「それがナオミの手なんですすよ、僕もさう云は

れど、……もうその時はどうすることも出來な

くなつてゐたのです。」

「ナオミが此の夏、鎌倉へ行きたがつたのは、

君と相談の結果なのぢやないでせうか？」

「いいえ、あれは僕ぢやないんです、ナオミさ

んに鎌倉行きをすすめたのは熊谷なんです。」

濱田はさう云つて、急に一段と語氣を強めて、

「……それぢやナオミは熊谷君とも？……」

「さうです、今ナオミさんを一番自由にしてゐ

る男は熊谷なんです。僕はナオミさんが熊谷

を好いてゐるのを、とうからうすすは感づい

てゐました。けれども一方僕と關係してゐな

がら、まさか熊谷ともさうなつてゐようとは、

つてゐました。事實はどうか知りませんが、ナオミさんの話だと、あなたはナオミさんに學問を仕込むつもりで養育なすつただけなので、同様はしてゐるけれど、夫婦にならなけりやいけないと云ふ約束がある譯でもない。それにあなたとナオミさんとは歳も大變違つてゐるから、結婚しても幸福に暮らせるかどうか分らないと云ふやうな、……」

「そんな事を、……そんな事をナオミが云つたんですね。」

「ええ、云ひました。近いうちにあなたに話して、僕と夫婦になれるやうにするから、もう少し時期を待つてくれろと、何度も何度も僕に堅い約束をしました。そして熊谷も手を切ると云ひました。けれどもみんな出鱈目だつたんです。ナオミさんは初めツから、僕と夫婦になるつもりなんかまるツきりなかつたんです。」

「ナオミはそれぢや、熊谷君ともそんな約束をしてゐるんでせうか？」

「さあ、それはどうだか分りませんが、恐らくさうぢやなからうと思ひます。ナオミさんは飽きツばいたぢですし、熊谷の方だつてどうせ眞面目ぢやないんです。あの男は僕なんかよりずつと狡猾なんですから、……」

不思議なもので、私は最初から濱田を憎む心はなかつたのですが、こんな話をきかされて見ると、寧ろ同病相憐れむ——と、云ふやうな気持ちにさせられました。そしてそれだけ、一層熊谷が憎くなりました。熊谷こそは二人の共同の敵であると云ふ感じを強く抱きました。「濱田君、まあ何にしてもこんな所でしゃべつてもゐられないから、何處かで飯でも喰ひながら、ゆつくり話さうぢやありませんか。まだまだ深山聞きたいことがあるんですから。」

で、私は彼を誘ひ出して、洋食屋では工合が悪いので、大森の海岸の「松淺」へ連れて行きました。

「それぢや河合さんも、今日は會社をお休みになつたんですか。」

と、濱田も前の興奮した調子ではなく、いくらか重荷をおろしたやうな、打ち解けた口ぶりで、途途そんな風に話しかけました。

「ええ、昨日も休んぢまつたんです。會社の方も此の頃は又意地悪く忙しんで、出なけりや悪いんですけれど、一昨日以來頭がむしやいしやしちまつて、とてもそれどころぢやないもんだから、……」

やるのを、知つてゐますかしら？」

「僕は昨日は一日内にゐましたけれど、今日は會社へ出ると云つて來たんです。あの女のこゝとだから、或ひは内氣がついたかも知れないが、まさか大森へ來るとは思つてゐないでせう。僕は彼女の部屋を捜したら、ラブ・レターでもありやしなにかと思つたもんだから、それで突然寄つて見る氣になつたんです。」

「ああ、さうですか、僕はさうぢやない、あなたが僕を掴まへに來たと思つたんです。しかしそれだと、後からナオミさんもやつて來やしないでせうか。」

「いや、大丈夫、……僕は留守中、着物も財布も取り上げちまつて、一歩も外へ出られないやうにして來たんです。あのなりぢや門口へだつて出られやしませんよ。」

「へえ、どんななりをしてゐるんです？」

「ほら、君も知つてゐる、あの桃色のちぢみのガウンがあつたでせう？」

「ああ、あれですか。」

「あれ一枚で、細帯一つ締めてゐないんだから、大丈夫ですよ。まあ猛獸が檻へ入れられたやうなもんです。」

「しかし、さつき彼處へナオミさんが這入つて

来たらどうなつたでせう。それこそほんとに、どんな騒ぎが持ち上つたかも知れませんね。」
「ですが一體、ナオミが君と今日逢ふと云ふ約束をしたのはいつなんでしょう？」

「それは一昨日、——あなたに見つかつたあの晩でした。ナオミさんは、僕があつたの晩すねてゐたもんですから、御機嫌を取るつもりか何かで、明後日大森へ来てくれろつて云つたんですが、勿論僕も悪いんですよ。僕はナオミさんと絶交するか、でなけりや熊谷と喧嘩をするのが當り前だのに、それが僕には出来ないんですよ。自分も卑屈だと思ひながら、気が弱くつて、ついぐずぐずに奴等と付き合つてゐたんです。ですからナオミさんに欺されたとは云ふものの、つまり自分が馬鹿だつたんですよ。」

「私は何だか、自分のことを云はれてゐるやうな気がしました。そして「松淺」の座敷へ通つて、さし向ひに据わつて見ると、どうやら此の男が可愛くさへなつて來るのですした。」

十七

「さあ、濱田君、君が正直に云つてくれたので、僕は非常に氣持がいい。兎に角一杯やりませんか。」

さう云つて私は、杯をさしました。
「ちや河合さんは、僕を教して下さるんですか。」

「教すも教さないもありませんよ。君はナオミに欺されてゐたので、僕とナオミとの間柄を知らなかつたと云ふのだから、ちつとも罪はない譯です。もう何とも思つてやしません。」
「いや、有り難う、さう云つて下されば僕も安心するんですよ。」

濱田はしかし、やつぱり極まりが悪いと見えて、酒を進めても飲まうとはしないで、伏しめがちに、遠慮しながらぼつぼつ口を利くのでした。
「ちや何ですか、失禮ですが河合さんとナオミさんとは、御親戚と云ふやうな譯ぢやないんですか？」

暫く立つてから、濱田は何か思ひつめてゐたらしく、さう云つて微かな溜息をつきました。

「ええ、親戚でも何でもありません。僕は宇都宮の生れですが、あれは生粹の江戸っ兒で、實家は今でも東京にあるんです。當人は學校へ行きたがつてゐたのに、家庭の事情で行かれなかつたもんですから、それを可哀さうだと思つて、十五の歳に僕が引き取つてやつたんですよ。」

よ。
「さうして今ぢや、結婚なすつていらつしやるんですね？」

「ええ、さうなんです、兩方の親の許しを得て、立派に手續きを踏んであるんです。尤もそれは、あれが十六の時だつたので、あんまり歳が若過ぎるのに『奥さん』扱ひにするのも變だし、當人にしてもイヤだらうと思つたもんだから、暫くの間は友達の間にして暮らさうと、そんな約束ではあつたんですがね。」

「ああ、さうですか、それが誤解の原だつたんですね。ナオミさんの様子を見ると、奥さんのやうには思へなかつたし、自分でもさう云つてゐなかつたから、それで僕等もつい欺されてしまつたんです。」

「ナオミも悪いが、僕にも責任があるんですよ。僕は世間の所謂『夫婦』と云ふものが面白くないんで、成るべく夫婦らしくなく暮らさうと云ふ主義だつたんです。そいつがどうも飛んだ間違ひになつたんだから、もう此れからは改良しますよ。いや、ほんたうに懲り懲りましたよ。」

「さうなすつた方がよござんすね。それから河合さん、自分のことを柵に上げてこんなことを

云ふのも可笑しいですが、熊谷は悪い奴ですから、注意なさらないといけませんよ。僕は決して恨みがあるから云ふんぢやないんです。熊谷でも關でも中村でも、あの連中はみんな良くない奴等なんです。ナオミさんはそんなに悪い人ぢやありません。みんな彼奴等が悪くさせてしまつたんです。……

濱田は感動の籠つた聲で云ふと同時に、その兩眼には再び涙を光らせておりました。さてはこの青年は、これほど眞面目にナオミを戀してゐたのだつたか、さう思ふと私は感謝したいやうな、濟まないやうな氣がしました。若しも濱田は、私と彼女とが既に完全な夫婦であると云はれなかつたら、進んで彼女を譲つてくれと云ひ出すつもりだつたのでせう。いやそれどころか、たつた今でも、私が彼女をあきらめさへしたら、彼は即座に彼女を引き取ると云ふでせう。此の青年の眉宇の間に溢れてゐるいぢらしいほどの熱情から、その決心があることは疑ふべくもないのでした。

「濱田君、僕は御忠告に従つて、いづれ何とか二三日のうちに處置をつけます。そしてナオミが熊谷とほんとに手を切つてくれればよし、さうでなければもう一日も一緒にゐるのは不

快ですから、……」

「けれど、けれどあなたは、どうかナオミさんを捨てないで上げて下さい。」

と、濱田は急いで私の言葉を遮つて云ひました。

「もしもあなたに捨てられちまへば、きつとナオミさんは墮落します、ナオミさんに罪はないんですから。……」

「有り難う、ほんとに有り難う！ 僕はあなたの御好意をどんなに嬉しく思ふか知れない。そりや僕だつて十五の時から面倒を見てゐるんですもの、たとへ世間から笑はれたつて、決してあれを捨てようなんて氣はないんです。ただあの女は剛情だから、何とか巧く悪い友達と切れるやうに、それを案じてゐるだけなんです。」

「ナオミさんはなかなか意地ッ張りですから。詰まらないことだ、いと喧嘩になつちまふと、もう取り返しがつきませんから、その處を上手におやりになつて下さい、生意氣なことを云ふやうですけれど、……」

私は濱田に何遍となく「ありがとありがと」を繰り返しました。二人の間に年齢の相違、地位の相違と云ふやうなものがなかつたら、そして私たちが前からもつと親密な仲であつたら、

私は恐らく彼の手を執り、互ひに抱き合つて泣いたかも知れませんでした。私の氣持ちは少くともそのくらゐまで行つてゐました。

「どうか濱田君、これから後君だけは遊びに来て下さい。遠慮するには及びませんから。」

と、私は別れ際になさう云ひました。

「ええ、だけれど當分は伺へないかも知れませんが、……」

と濱田はちよつともちもぢして、顔を見られるのを厭ふやうに、下を向いて云ひました。

「どうしてですか？」

「當分、……ナオミさんのことを忘れることが出来る迄は、……」

さう云つて彼は、涙を隠しながら帽子を冠つて、「さよなら」と云ひさま、「松淺」の前の品川の方へ、電車にも乗らずに歩いて行きました。

私はそれから兎に角會社へ出かけました。勿論仕事など手につく筈はありません。ナオミの奴、今頃はどうしてゐるだらう。寢間着一枚で放つたらかして來たのだから、よもや何處へも出られる筈はないだらう。と、さう思ふ傍からやつぱりそれが氣にならずにはゐませんでした。それと云ふのが、何しろ實に意外な

事が後から後からと起つて来て、欺された上にも欺されてゐたことが分るに随ひ、私の神経は異常に鋭く、病的になり、いろいろな場合を想像したり臆測したりし始めるので、さうなつて来るとナオミと云ふものが、とても私の智慧では及ばない、神變不可思議の通力を備へ、又いつの間は何をしてゐるか、ちつとも安心はならないやうに思はれて來るのです。已はからしてはゐられない、どんな事件が留守の間に降つて湧いてゐるかも知れない。——私は會社をそこそこにして、大急ぎで鎌倉へ歸つて來ました。

「やあ、唯今、」

と、私は門口に立つてゐる上さんの顔を見らるなり云ひました。

「はあ、いらつしやるやうでございますよ、」

それで私はほつとしながら、
「誰か訪ねて來た者はありませんかね?」

「いいえ、どなたも、」

「どうです? どんな様子ですかね?」

私は頭で離れの方をさしながら、上さんに眼くばせしました。そしてその時氣が付いたのですが、ナオミの居るべきその座敷は、障子が

締まつて、ガラスの中は薄暗く、ひつそりとして、人氣がないやうに見えるのでした。

「さあ、どんな御様子か、——今日は一日ちつと彼處に這入つていらつしやいますけれど、……」

ふん、とうとう一日引つ込んでゐたか。だがそれにしてもイヤに様子が静かなのはどうしたんだらう、どんな顔つきをしてゐるだらうと、まだ幾分かは胸騒ぎに驅られながら、私はそつと縁側へ上り、離れの障子を明けました。

と、もう夕方の六時が少し廻つた時分、明りのとどかない部屋の奥の隅の方に、ナオミはだらしない恰好をして、ふん反り返つてぐうぐう眠つてゐるのです。蚊に喰はれるので、彼方へ轉がり、此方へ轉がりしたものでせう、私のクレバネットを出して腰の周りを包んでゐましたが、それで器用に隠されてゐるのはほんの下つ腹のところだけで、紅いちぢみのガウンから眞つ白な手足が、湯立つたキヤベツの莖のやうに浮き出でゐるのが、さう云ふ時には又洩悪く、變に蠱惑的に私の心を掻き撈りました。私は黙つて電燈をつけ、獨りでさつきと和服に着換へ、押し入れの戸をわざとガタビシ云はせましたけれど、それを知つてか知らないでか、ナ

オミの寢息はまだすやすやと聞えしました。

「おい、起きないか、夜ぢやないか。……」

三分ばかり、用もないのに机に凭れて、手紙を書くやうな風を裝つてゐた私は、とうとう根負けがしてしまつて聲をかけました。

「ふむ、……」

と云つて、不承不承に、睡さうな返辭をしたのは、私が二三度怒叫つてからでした。

「おい! 起きないかつたら!」

「ふむ、……」

さう云つたきり、又暫くは起きさうにもしません。

「おい! 何してるんだ! おいつたら!」

私は立ち上つて、足で彼女の腰のあたりを亂暴にぐんぐん搦す振りました。

「あーあ」

と云つて、先づいよつくりとそのしなしなした二本の腕を眞つ直ぐに伸ばし、小さな、紅い握り拳をぎゅつと固めて前へ突き出し、生あくびを噛み殺しながらやをらを體を擡げたナオミは、私の顔をチラと偷んで、すぐ側方を向いてしまつて、足の甲だの、脛のあたりだの、背筋の方だの、蚊に喰はれた痕を頻りにほりほり掻き始めました。寢過ぎたせゐか、それともこつ

そり泣いたのであらうか、その眼は充血して、髪は化粧物のやうに亂れて、兩方の肩へ垂れてゐました。

「さ、着物を着換へる、そんな風をしてゐないで。」

母屋へ行つて着物の包みを取つて来てやり、彼女の前へ放り出すと、彼女は「一言も云はないで、つんとしてそれを着換へました。それから晩飯の膳が運ばれ、食事を済ましてしまふ間、二人はとうとう軌方からも物を云ひかけませんでした。

此の、長い、鬱陶しい、睨み合ひの間に、私はどうして彼女に泥を吐かせたらいいか、此の剛情な女を素直に詫まらせる道はないだらうかと、ただそればかりを考へました。濱田の云つた忠告の言葉、——ナオミは意地っ張りだから、ふいとしたことでは喧嘩をすると、もう取り返しがつかなくなると云ふことも、無論私の頭にあります。濱田があんな忠告をしたのは、恐らく彼の實驗から來てゐるのでせうが、私にしてもさう云ふ覺えはたびたびあります。何より彼より彼を怒らせてしまつては一番いけない。彼女がつむじを曲げないやうに、決して喧嘩にならないやうに、さうかと云つて此方

が甘く見られないやうに、上手に切り出さなければならぬ。で、それには此方が裁判官のやうな態度で問ひ詰めて行くのは最も危険だ。「お前は熊谷と此れ此れだらう?」「そして濱田とも此れ此れだらう?」「斯う正面から肉迫すれば、へえ、さうです」と恐れ入るやうな女ではない。きつと彼女は反抗する、飽くまで知らぬ存ぜぬと云ひ張る。すると此方もチリチリして來て癪癪を起す。もうさうなつたらおしまひだから、押し問答をすることは兎に角よくない。此れは彼女に泥を吐かせると云ふやうな考へは止めにして、いつそ此方から今日の出來事を話してしまつた方がいい。さうすればいくら剛情でもそれを知らないとは云へないだらう。よし、さうしようと思つたので、

「僕は今日、朝の十時頃に大森へ寄つたら濱田に遇つたよ。」

と、先づそんな風に云つて見ました。

「ふうん、」

とナオミは、さすがにぎよつとしたらしく私の視線を避けるやうに、鼻の先でさう云ひました。

「それから彼れ此れするうちに飯時になつたもんだから、濱田を誘つて、松淺へ行つて、一緒

に飯を喰つたんだ。——

もうそれからはナオミは返辭をしませんでした。私は彼女の顔色に絶えず注意を配りながら、あまりに皮肉にならないやうに諄諄と話して行きましたが、語り終つてしまふまで、ナオミはちつと下を向いて聽いてゐました。そして惡びれた様子はなく、ただ頬の色が、心持ち青ざめただけでした。

「濱田がさう云つてくれたので、僕はお前に聞く迄もなくみんな分つてしまつたんだ。だからお前は何も剛情を張ることはない。惡かつたらば惡かつたと、さう云つてくれさへすればいいんだ。……どうだい、お前惡かつたかね?」

悪いと云ふことを認めるかね、

ナオミがなかなか答へないので、ここで私の心配してゐた押し問答の形勢が持ち上りさうになりましたが、「どうだね? ナオミちゃん」と、私は出来るだけ優しい口調で、

「惡かつたことさへ認めてくれれば、僕はなんにも過ぎ去つたことを咎めやしないよ。何もお前に兩手をついて詫まれと云ふ譯ぢやない。此の後から云ふ間違ひがないやうに、それを撥つてくれたらいいんだ。え? 分つたらうね?」

惡かつたと云ふんだらうね?」

するとナオミは、好い鹽梅に、唾で「うん」と頷きました。
「ぢやあ分つたね?」此れから決して熊谷やなんかと遊びはしないね?」

「うん」

「きつとだらうね? 約束するね?」

「うん」

此の「うん」で以て、お互ひの顔が立つやうにどうやら折り合ひがつかきました。

十八

その晩、私とナオミとは最早や何事もなかつたやうに寝物語をしましたけれども、しかし正直の氣持を云ふと、私は決して心の底から綺麗サツパリとはしませんでした。自分が今、………此の女は、既に清淨潔白ではない。

………此の考へは私の胸を晦く鎖したばかりでなく、自分の寶であつたところのナオミの値打ちを、半分以上に引き下げたしまひました。なぜなら彼女の値打ちと云ふものは、私が自分で育ててやり、自分で此れほどの女にしてやり、さうしてただただ自分ばかりがその肉體のあらゆる部分を知つてゐると

云ふことに、その大半があつたのですから、つまりナオミと云ふものは、私に取つては自分が栽培したところの一つの果實と同じことです。私はその實が今日のやうにや派に成熟する迄に随分さまざまの丹精を凝らし、勞力をかけた。だからそれを味はふのは栽培者たる私の當然の報酬であつて、他の何人にもそんな權利はない筈であるのに、それが何時の間にかあかの他人に皮を剥られ、齒を立てられてゐたのです。さうしてそれは、一旦汚されてしまつた以上、いかに彼女が罪を詫びてももう取り返しのつかないことです。彼女の肌と云ふ貴い聖地には、二人の賊の泥にまみれた足痕が永久に印せられてしまつたのです。これは思へば思ふほど口惜しいことこの限りでした。ナオミが憎いと云ふのでなしに、その出来事が憎くて溜りませんでした。

「謙治さん、勘忍してね、……」

ナオミは私が黙つて泣いてゐるのを見ると、書間の態度とは打つて變つて、さう云つてくれましたけれど、私はやはり泣いて頷くばかりでした。「ああ期忍するよ」と口では云つても、取り返しのつかないと云ふ無念さは消すことが出来ませんでした。

鎌倉の一と夏はこんな始末で散散な終りを告げ、やがて私たちは入彦の住居へ戻りました。が、今も云ふやうに私の胸にわだかまりが出来たものですから、それが自然と何かの場合に現はれると見え、それから後の二人の仲はどうもしつくりとは行きかねました。表面は和解したやうであつても、私は決して、まだほんたうにはナオミに心を許してゐない。會社へ行つても依然として熊谷のことが心配になる。留守の間の彼女の行動が氣になる餘り、毎朝家を出かけると見せてこつさり裏口へ立ち廻つたり、彼女が英語や音楽の稽古に行くこと云ふ日は、そつとその跡をつけて行つたり、時時彼女の眼を偷んでは、彼女宛てに来る手紙の内容を調べ見たり、さう云ふ風になるで私が秘密探偵のやうな氣持ちになるに随ひ、ナオミはナオミで、腹の中では此のしつっこい、私のやり方をせせら笑つてゐるらしく、言葉に出して言ひ争ひはしないまでも、變に意地悪い素振を見せるやうになりました。

「おい、ナオミ!」

と、私は或る晩、いやに冷たい顔つきをして寝た振りをしてゐる彼女の體を揺す振りながら、さう云ひました。「斷つて置きますがもうそ

の時分、私は彼女を「ナオミ」と呼びつけにしてゐたのです。」

「何だつてそんな……寝たふりなんぞしてゐるんだ？ そんなに己が嫌ひなのかい？……」

「寝たふりなんかしてゐやしないわ、寝ようと思つて眼を潰つてゐるだけなんだわ。」

「ぢやあ眼をお開き、人が話をしようとするのに眼を潰つてゐる法はなからう。」

さう云ふとナオミは、仕方なしにうツツりと眼を潰してゐる細い眼つきは、その表情を一層酷なものにした。

「え？ お前は己が嫌ひなのかよ？ さうならさうと云つておくれ。……」

「なぜそんなことを尋ねるの？……」

「己には大概、お前の素振りで分つてゐるんだ。此の頃の己たちは喧嘩こそしないが、心の底では互ひに鎗を削つてゐる。これでも己たちは夫婦だらうか？」

「あたしは鎗を削つてやしない、あなたこそ削つてゐるんぢやないの。」

「それはお互ひさまだと思ふ。お前の態度が己に安心を與へないから、己の方でもつい疑ひの眼を以て……」

「ふん。」

とナオミは、その鼻先の皮肉な笑ひで私の言葉を打ツ切つてしまつて、

「ぢやあ聞きませんが、あたしの態度に何か怪しい所があるの？ あるなら證據を見せて頂戴。」

「そりや、證據と云つてはありやしないが、……」

「證據がないのに疑ぐるなんて、それはあなたが無理ぢやないの。あなたがあたしを信用しないで、妻としての自由も權利も與へないで置きながら、夫婦らしくしようとしたつてそりや駄目だわ。ねえ、譲治さん、あなたはあたしが何も知らずにゐると思つて？ 人の手紙を内證で讀んだり、探偵みたいに跡をつけたり、……」

あたしちやんと知つてゐるのよ。」

「それは己も悪かつたよ、けれども己も以前の事があるもんだから、神經過敏になつてゐるんだ。それを察してくれないぢや困るよ。」

「ぢや、一體どうしたいのよ？ 以前の事はもう云はないツて約束ぢやないの。」

「己の神經過敏はほんたうに安まるやうに、お前が心から打ち解けてくれ、己を愛してくれたらいいんだ。」

「でもさうするにはあなたの方で信じてくれなけりやあ、……」

「ああ信じるよ、もう此れからはきつと信じるよ。」

私はここで、男と云ふものの淺ましさを白状しなければなりません、中間は兎に角夜

の場合になつて來ると私はいつも彼女に負けた。私が負けたと云ふよりは、私の中にある獸性が彼女に征服されました。事實を云へば

私は彼女をまだまだ信じる氣にはなれない、にも拘はらず私の獸性は盲目的に彼女に降伏することを強ひ、凡べてを捨てて安んずるやうに

させてしまひます。つまりナオミは私に取つて、最早や貴い寶でもなく、有り難い偶像でもなくなつた代りに、一個の娼婦となつた譯です。そこには戀人としての清さも、夫婦としての情愛

もない。もうそんなものは昔の夢と消えてしまつた！ それならどうしてこんな不貞な、汚れた女に未練を残してゐるのかと云ふと、全く

彼女の肉體の魅力、ただそれだけに引き摺られつつあつたのです。此れはナオミの墮落であつて、同時に私の墮落でもありました。なぜなら

私は、男子としての節操、潔癖、純情を捨て、過去の誇りを抛つてしまつて、娼婦の前に身

を屈しながら、それを恥とも思はないやうになつたのですから。いや時としてはその卑しむべき娼婦の姿を、さながら女神を打ち仰ぐやうに崇拜さへもしたのですから。

ナオミは私の此の弱點を面の憎いほど知り抜いておました。自分の肉體が男に取つては抵抗し難い蟲惑であること、夜にさへなれば男を打ち負かしてしまへること、——かう云ふ意識を持ち始めた彼女は、晝間は不思議なくらゐる不愛想な態度を示しました。自分はこのにゐる一人の男に自分の「女」を賣つてゐるのだ、それ以外には何も此の男に興味もなければ因縁もない、と、そんな様子をありありと見せて、恰も路傍の人のやうにむらツとそつけなく濟まし込んで、たまに私が話しかけてもろくすつぼう返辭もしません。是非必要な場合にだけ「はい」とか「いいえ」とか答へるだけです。かういふ彼女のやり方は、私に對して消極的に反抗してゐる心を現はし、私を極度に侮蔑する意を示さうとするものであるとしか、私には思へませんでした。「讓治さん、あたしがいくら冷淡だつて、あなたは怒る権利はないわよ。あなたはあたしから取れる物だけ取つてゐるんぢやありませんか。それでああなたは満足してゐるぢやありませんか。」

んか。——私は彼女の前へ出ると、さう云ふ眼つきで睨まれてゐるやうな気がしました。そしてその眼は動ともすると、

「ふん、何と云ふイヤな奴だらう。まるで此奴は犬みたやうにさもしい男だ。仕方がないから我慢してやつてゐるんだけれど。」

と、そんな表情をムキ出しにして見せるのでした。

けれども斯る状態が長持ちをする筈はありません。二人は互ひに相手の心に搜りを入れ、陰險な暗闘をつづけながら、いつか一度はそれが爆發することを内鬨悟しておましたが、或る晩私は、

「ねえ、ナオミヤ。」

と、特にいつもより優しい口調で呼びかけました。

「ねえ、ナオミヤ、もうお互ひに詰まらない意地ツ張り止さうぢやないか。お前はどうか知らないが、僕は到底堪へられないよ、此の頃のやうなこんな冷やかな生活には……」

「ではどうしようツて云ふ積りなの？」
「もう一度何とかしてほんたうの夫婦にならうぢやないか。お前も僕も半分の半分になつてゐるのがいけないんだよ。眞面目になつて昔の幸

福を呼び戻さうと、努力しないのが悪いんだよ。」

「努力したつて、氣持ちと云ふものはなかなか直つて来ないと思ふわ。」

「そりやあさうかも知れないが、僕は二人が幸福になる方法があると思ふよ。お前が承知してくれさへすりやあいことなんだが……」

「どんな方法？」

「お前、子供を生んでくれないか、母親になつてくれないか？ 一人でもいいから子供が出来れば、きつと僕等はほんたうの意味で夫婦になれるよ、幸福になれるよ。お願ひだから僕の頼みを聞いてくれないか？」

「いやだわ、あたし。」

と、ナオミは即座にきつぱりと云ひました。

「あなたはあたしに、子供を生まないやうにしてくれ。いつ迄も若若しく、娘のやうにしてゐてくれ。夫婦の間に子供の出來るのが何よりも恐ろしいツて、云つたぢやないの？」

「そりや、そんな風に思つた時代もあつたけれども……」

「それぢやあなたは、昔のやうにあたしを愛さうとしないんぢやないの？ あたしがどんなに年を取つて、汚くなつても構はないと云ふ

「氣なんぢやないの？ いいえ、さうだわ、あなたこそあたしを愛さないんだわ。」

「お前は誤解してゐるんだ。僕はお前を友達のやうに愛してゐた、だが此れからは眞實の妻として愛する。……」

「それであなたは、昔のやうな幸福が戻つて來ると思ふのかしら？」

「昔のやうではないかも知れない、けれども眞の幸福が、……」

「いや、いや、あたしはそれなら澤山だわ。」

さう云つて彼女は、私の言葉が終らないうちに激しく冠を振るのでした。

「あたし、昔のやうな幸福が欲しいの。でなければあなたにも欲しくはないの。あたしさう云ふ約束であなただけの所へ來たんだから。」

十九

ナオミがどうしても子供を産むのが厭だと云ふならば、私の方には又もう一つ手段がありました。それは大森の「お伽噺の家」を畳んで、もつと眞面目な、常識的な家庭を持つと云ふ一事です。全體私はシンブル・ライフと云ふ美名に憧れて、こんな奇妙な、甚だ實用的でない繪かきのアトリエに住んだのですが、われわれの

生活を自墮落にしたのは此の家のせゐも確かにあるのです。かう云ふ家に若い夫婦が女中も置かずに住まつてゐれば、却つてお互ひに我が儘が出て、シンブル・ライフがシンブルでなくなり、ふしだらになるのは已むを得ない。それで私は、私の留守中ナオミを監視するために、小間使ひを一人と飯焚きを一人置くことにする。主人夫婦と女中が二人、これだけが住まへるやうな所謂「文化住宅」でない純日本式の、中流の紳士向きの家へ引き移る。今迄使つてゐた西洋家具を賣り拂つて、凡べてを日本風の家具に取り換へ、ナオミのために特にピアノ一臺買つてやる。かうすれば彼女の音楽の稽古も杉崎女史の出教授を頼めばよいことになり、英語の方もハリソン嬢に出向いて貰つて、自然彼女が外出する機会がなくなる。此の計畫を實行するには纏つた金が必要でしたが、それは國もとへさう云つてやり、すつかりお膳立てが盡ふまではナオミに知らせない決心を以て、私は獨りで借家捜しや家財道具の見積りなどに苦心してゐました。

國の方からは取り敢へずこれだけ送ると云つて、千五百圓の爲替が來ました。それから私は女中の世話も國へ頼んでやつたのですが、

「小間使ひには大へん都合のいいのがある、内使つてゐた仙太郎の娘がお花と云つて、今年十五になつてゐるから、あれならお前も氣心分つて安心して置けるだらう。飯焚きの方も心あたりを捜してゐるから、引つ越し先が極まるまでには上京させる」と、爲替と同封の母の手でさう云つて來ました。

ナオミは私が内何か企んでゐるのをうすうす感づいてゐたのでせうが、「まあ何をするか見てゐてやれ」と云つた調子で、初めのうちは凄まじく濟まして落ち着いてゐました。が、ちやうど母から手紙が届いて二三日過ぎた或る夜のこと、

「ねえ、讓治さん、あたし、洋服が欲しいんだけれど、揃へてくれない？」

と、彼女は突然、甘つたれるやうな、そのくせ變に冷やかすやうな、猫撫で聲でさう云ひました。

「洋服？」

私は暫くあつげに取られて、彼女の顔を穴の開くほど覗詰めながら、「ははあ、此奴、爲替の來たのが分つたんだな、それで搜りを入れてるんだな」と氣がつかしました。

「ねえ、いいぢやないの、洋服でなけりや和服

でもいいわ。冬の餘所行きを拵へて頂戴。」
「僕は當分そんな物は買つてやらんよ。」

「どうしてなの？」

「着物は腐るほどあるぢやないか。」

「腐るほどあつたつて、飽きちやつたから又欲しいんだわ。」

「そんな贅澤はもう絶対に許さないんだ。」

「へえ、ぢや、あのお金は何に使ふの？」

「とうとう來たな！ 私はさう思つて空惚けながら、

「お金？ 何處にそんなものがあるんだ？」

「讓治さん、あたし、あの本箱の下にあつた書留の手紙を見たのよ。讓治さんだつて人の手紙を勝手に見るから、そのくらゐな事をあたしがしたつていいだらうと思つて、——」

此れは私には意外でした。ナオミが金のことを云ふのは、書留が來たから爲替が違入つてゐたのだらうと見當をつけてゐるだけなので、まさか私があの本箱の下に隠した手紙の臭味を見てゐようとは、全く豫期してゐなかつたのです。が、ナオミはどうかして私の秘密を嗅ぎ出さうと、手紙のありかを捜し廻つたに違ひなく、あれを讀まれてしまつたとすると、爲替の金額は勿論のこと、移轉のことも女中のこ

とも、凡べてを知られてしまつたのです。

「あんなにお金が澤山あるのに、あたしに着物の一枚ぐらゐ拵へてくれてもいいと思ふわ。」

「ねえ、あなたはいつか何と云つて？ お前の爲めならどんな狭苦しい家に住んでも、どんな不自由でも我慢をする。さうしてそのお金でお前に出来るだけ贅澤をさせるつて、さう云つたのを忘れちまつたの？ まるであなたはあの時分とは違つてゐるのね。」

「僕がお前を愛する心に變りはないんだ、ただ愛し方が變つただけなんだ。」

「ぢや、引つ越しのことはなぜあたしに隠してゐたの？ 人には何も相談しないで、命令的にやる積りなの？」

「そりや、適當な家が見付かつた上で、無論お前にも相談をする積りでゐたんだ。……」

さう云ひかけて、私は調子を和らげて、なだめるやうに説き聞かせました。

「ねえ、ナオミ、僕はほんたうの氣持ちを云ふと、今でもやつぱりお前に贅澤をさせたいんだよ。着物ばかりの贅澤でなく、家も相當の家に住まつて、お前の生活全體を、もつと立派な奥さんらしく向上させてやりたいんだよ。だからなんにも不平を云ふところはなないぢやないか。」

「さうお、そりやどうも有りがと、……」

「何なら明日、僕と一緒に借家を捜しに行つたらどうだね。此處よりもつと間敷があつて、お前の氣に入つた家できへありや何處でもいいんだ。」

「それならあたし、西洋館にして頂戴、日本の家は眞つ平御免よ。——」

私が返事に困つてゐる間に、「それ見たことか」と云ふ顔つきで、ナオミは喚んで吐き出すやうに云ふのでした。

「女中もあたし、淺草の家へ頼みますから、そんな田舎の山出しなんか斷つて頂戴、あたしが使ふ女中なんだから。」

かう云ふいさかひが度重なるに従つて、二人の間の低氣壓はだんだん濃くなつて行きまし

た。そして一日口をきかないやうなことも屢

でしたが、それが最後に爆發したのは、ちやうど鎌倉を引き拂つてから二箇月の後、十一月の初旬のことで、ナオミが未だに熊谷と關係を斷つてゐないと云ふ動かぬ證據を、私が發見した時でした。

此れを發見する迄のいきさつに就いては、別段ここにさう詳しく書く必要がありません。私

は疾うから、引つ越しの準備に頭を使つてゐる一方、直覺的にナオミを怪しいと眠んでゐたので、例の探偵的行動を少しも緩めずに居た結果、或る日彼女と熊谷とが、大膽にもつい大森の家の近所の曙樓で密會した歸りを、とうとう抑へてしまつたのです。

その日の朝、私はナオミの化粧の仕方がいつもよりも派手であるのに、疑ひを抱き、家を出るなり直ぐ引つ返して、裏口にある物置小屋の炭俵の蔭に隠れてゐたのです。さう云ふ譯でその頃の私は、會社を休んでばかりゐました。すると果して、九時頃になつた時分、今日は積古に行く日でもないのに彼女がひどくめかし込んで出て來ましたが、停車場の方へは行かないで、反対の方へ、足を早めてさつきと歩いて行くのでした。私は彼女を五六間やり過してから大急ぎで家へ飛び込み、學生時代に使つてゐたマントと帽子を引き出し出して洋服の上へそれを被り、素足に下駄穿きで表へ駆け出すと、ナオミの跡を遠くの方から追つて行きました。そして彼女が曙樓へ這入つて行き、それから十分ぐらゐの後に熊谷がそこへやつて來たのを確かに見届けて置いてから、やがて彼等の出て來るのを待ち構へてゐたのです。

歸りもやはり別別で、今度は熊谷が居残つたらしく、一と足先にナオミの姿が往來へ現はれたのは、彼れ此れ十一時頃でした。——私は殆んど一時間半も曙樓の近所をうろろしてゐた譯です。——彼女は來た時と同じやうに、そこから十丁餘りある自分の家まで、傍目もふらずに歩いて行きました。そして私も次第に歩調を早めて行つたので、彼女が裏口のドアを開けて中へ這入る、すぐその跡から、五分とは立たずに私が這入つて行つたのです。

這入つた刹那に私の見たものは、瞳の据わつた、一種凄惨な感じの籠つたナオミの眼で、彼女はそのこに、棒のやうに突つ立つたまま、私の方を鋭く睨んでゐるのでしたが、その足もとには私がさつき脱ぎ換へて行つた帽子や、外套や、靴や、靴下があつたまま散らばつてゐました。彼女はそれで一切を悟つてしまつたのでせう、麗かに晴れた秋の朝の、アトリエの明りを反射してゐる彼女の顔は穏やかに青ざめ、凡べてをあきらめてしまつたやうな深い静けさがそこにありました。

「出て行け！」
たつた一言、自分の耳ががんとする程強烈なつきり、私も二の句が次げなければ「ナオミも

何とも返辭をしません。二人は恰も白刃を抜いて立ち向つた者がピタリと青眼に構へたやうに、相手の隙を狙つてゐました。その瞬間に私は實にナオミの顔を美しいと感じました。女の顔は男の憎しみがかかればかかる程美しくなるのを知りました。カルメンを殺したドン・ホセは、憎めば憎むほど一層彼女が美しくなるので殺したのだと、その心境が私にハッキリ分りました。ナオミがぢいッつと視線を据えて、顔面の筋肉は微動だもさせずに、血の氣の失せた唇をしつかり結んで立つてゐる邪惡の化身のやうな姿。——ああ、それこそ淫婦の面魂を遺憾なく露はした形相でした。

「出て行け！」
と、私はもう一度叫ぶや否や、何とも知れない憎さと恐ろしさと美しさとに驅り立てられつつ、夢中で彼女の肩を掴んで、出口の方へ突き飛ばしました。

「出て行け！ さあ！ 出て行けつたら！」
「勘忍して、……談治さん！ もう今度ツから、……」

ナオミの表情は俄かに變り、その聲の調子は哀訴にふるへ、その眼の縁には涙をさめざめと流へながら、べつたりそこへ跪いて歎願

するやうに私の顔を仰き視ました。

「讓治さん、悪かつたから勘忍してツてば！」

勘忍して、勘忍して、勘忍して、……」

こんなにかたく彼女が赦しを乞ふだらうとは豫

期してゐなかつたことなので、はつと不意討ち

を喰つた私は、そのために尙憤激しました。

私は、兩手の拳を固めてつづけさまに彼女を殴

りました。

「畜生！ 犬！ 人非人！ もう貴様には用は

ないんだ！ 出て行けつたら出て行かんか！」

と、ナオミは咄嗟に、「此りや失策つたな」と

気がついたらしく、忽ち態度を改めてすうッ

と立ち上つたかと思ふと、

「ぢやあ出て行くわ。」

と、まるで不慮の通りの口調でさう云ひまし

た。

「よし！ 直ぐに出て行け！」

「ええ、直ぐ行くわ、——二階へ行つて、着換

へを持って行つちやあいけない！」

「貴様は此れから直ぐに歸つて、使ひを寄越

せ！ 荷物はみんな渡してやるから！」

「だつてあたし、それぢや困るわ、今すぐいる

ぞ！」

私はナオミが今すぐ荷物を運ぶと云ふのを

一種の威嚇と見て取つたので、負けない氣でさ

う云つてやると、彼女は二階へ上つて行つて、

そこらぢゆうをガタビシと引つ掻き廻して、パ

スケツトだの、風呂敷包みだの、背負ひ切れた

いほどの荷造りをして、自分でとツとと 俵を

呼んで積み込みました。

「では御機嫌よう、どうも長長御厄介になりま

した。——」

と、出て行くときにさう云つた彼女の挨拶は、

至極あつさりしたものでした。

二十

彼女の俵が行つてしまふと、私はどう云ふ

籍りだつたか直ぐに懐中時計を出して、時間を

見ました。ちやうど午後零時三十六分、……あ

あさうか、さつき彼女が 噴き出して来たのが

十一時、それからあんな大喧嘩をしてあツと云

ふ間に形勢が變り、今まで此處に立つてゐた彼

女がもう居なくなつてしまつたんだ。その間が

僅かに一時間と三十六分、……人は 屢、看護

してゐた病人が最後の息を引き取る時とか、

又は大地震に出つ會した時とかに、覺えず知ら

ず時計を見る癖があるものですが、私がその

時ふいと時計を出して見たのも大方それと似た

やうな氣持ちだつたでせう。大正〇年十一月

〇日午後零時三十六分、——自分は此の日の此

の時刻に、遂にナオミと別れてしまつた。自分

と彼女との關係は、此の時を以て或は終焉を

告げるかも知れない。……

「先づぼツとした！ 重荷が下りた！」

何しろ私は此の間ぢゆうの暗間に疲れ切つ

てゐた際だつたので、さう思ふと同時にぐつた

り椅子に腰かけたままぼんやりしてしまひまし

た。咄嗟の感じは、「ああ有り難い、やつとのこ

とで解放された」と云ふやうな、せいせいとした

氣分でした。それと云ふのが私は單に精神的

に疲勞してゐたばかりでなく、生理的にも疲勞

してゐたので、一度ゆつくり休養したいと云ふ

ことは、寧ろ私の肉體の方が痛切に要求して

ゐたのです。たとへばナオミと云ふものは非常

に強い酒であつて、あまりその酒を飲み過ぎる

と體に毒だと知りながら、毎日毎日、その芳醇

な香氣を嗅がされ、なみなみと盛つた杯を見

せられては、矢張り私は飲まずにはゐられな

のやうにどんより重く、ふいと立ち上ると眩暈がしきうで、仰反けさまに後ろへ打つ倒れさまになる。そしていつでも二日酔ひのやうな心地で、胃が悪く、記憶力が衰へ、すべての事に興味がなくなり、まるで病人か何ぞのやうに元気がない。頭のなかには奇妙なナオミの幻ばかりが浮かんで来て、それが時時おくびのやうに胸をむかつかせ、彼女の臭ひや、汗や、脂が、始終むうツと鼻についてゐる。で、見れば「眼の毒」のナオミが居なくなつたことは、入梅の空が一時にからツと晴れたやうな工合でした。

が、今も云ふやうにそれは全く咄嗟の感で、正直のところ、そのせいせいした心持ちが続いたのは、一時間ぐらゐなものだつたでせう。まさか私の肉體がいくら頑健だからと云つて、ほんの一時間やそこらの間に疲勞が恢復し切つた譯でもありませんが、椅子に腰かけてはつと一と息ついたかと思ふと、間もなく胸に浮かんで来たのは、さつきのナオミの、あの喧嘩をした時の異常に凄い容貌でした。「男の憎しみがかかればかかる程美しくなる」と云つた、あの一刹那の彼女の顔でした。それは私が刺し殺しても飽き足りないほど憎い憎い淫婦

の相で、頭の中へ永久に焼きつけられてしまつたまま、消さうとしてもいつかな消えずにゐたのでしたが、どう云ふ譯か時間が立つに随つていよいよハッキリと眼の前に現はれ、未だにぢーいツと瞳を据ゑて私の方を睨んでゐるやうに感ぜられ、而もだんだんその憎らしさが底の知れない美しさに變つて行くのでした。考へて見ると彼女の顔にあんな妖艶な表情が溢れ、阿修羅の如き神神しさが加つたところを、私は今日まで嘗て一度も見ることがありません。疑ひもなくそれは「邪惡の化身」であつて、そして同時に、彼女の體と魂とが持つ悉く的美が、最高潮の形に於いて發揚された姿なのです。私はさつきも、あの喧嘩の眞つ最中に覺えずその美に撲られたのみならず、「ああ美しい」と心の中で叫んだのでありながら、どうしてあの時彼女の足下に跪いてしまはなかつたか。いつも優柔で意氣地なしの私が、いかに憤激してゐたとは云へあの恐ろしい女神に向つて、どうしてあれほどの面罵を浴びせ、手を振り上げるものが出来たか。自分のどこからそんな無鐵砲な勇氣が出たか。——それが私には今更不思議なやうに思はれ、その無鐵砲と勇氣とを恨むやうな心持ちさへ、次第に湧き上つて

来るのでした。「お前は馬鹿だぞ、大變なことをしちまつたんだぞ。ちつとやそつとの不都合があつても、それと『あの顔』と引き換へにならと思つてゐるのか。あれだけの美は此の後決して、二度と世間にはありはしないぞ。」

私は誰かにさう云はれてゐるやうな氣がし始め、ああ、さうだつた、自分は實に詰まらなことをしてしまつた。彼女を怒らせないやうにと、あんなに不斷から用心してゐながら、かういふ結末になつたと云ふのは魔がしたのに違ひないんだと、そんな考へが何處からともなく頭を擡げて来るのでした。

たつた一時間前まではあれほど彼女を荷厄介にし、その存在を呪つた私が、今は反對に自分を呪ひその輕卒を悔いるやうになつたと云ふのは？ あんなに憎らしかつた女が、忽ちのうちにこんなにも慈しくなつて来るとは？ 此の急激な心の變化は私自身にも到底説明の出来ないことで、恐らく戀の神様ばかりがしてゐる謎でありませう。私はいつの間にか立ち上つて、部屋を往つたり來たりしながら、どうしたら此の戀慕の情を癒やすことが出来るだらうかと、長い間考へました。と、どう考へ

ても癒やす方法は見付からないで、ただただ彼女の美しかつたことばかりが想ひ出される。過去五年間の共同生活の場面場面が、ああ、あの時にはかう云つた、あんな顔をした、あんな眼をしたと云ふ風に、後から後からと浮かんで来て、それが一未練の種でないものはない。

殊に私の忘れられないのは、彼女が十五六の娘の時分、毎晩私が西洋風呂へ入れてやつて體を洗つてやつたこと。それから私が馬になつて彼女を背中へ乗せながら「ハイハイ、ドウドウ」と部屋の中を這ひ廻つて遊んだこと。——どうしてそんな下らない事がそんなに迄も懐かしいのか、實に馬鹿げてゐましたけれど、若しも彼女が此の後もう一度私の所へ歸つて来てくれたら、私は何より眞つ先にあの時の遊戯をやつて見よう。再び彼女を背中の上へ跨がらせて、此の部屋の中を這つて見よう。それが出来たら己はどんなに嬉しいか知れないと、まるでその事を此の上もない幸福のやうに空想したりするのでした。いや、單に空想したばかりでなく、私は彼女が戀しきの餘り、思はず床に四つ這ひになつて、さながら今も彼女の體が背中へぐつとのしかかつてでもゐるかのやうに、部屋をグルグル廻つてみました。それから

私は、——此處に書くのも恥かしい事の限りですが、——二階へ行つて、彼女の古着を引つ張り出してそれを何枚も背中に載せ、彼女の足袋を両手に極めて、又その部屋を四つん這ひになつて歩きました。

此の物語を最初から讀んで居られる讀者は、多分覺えて居られるでせうが、私は「ナオミの成長」と題する一冊の記念帖を持つてみました。それは私が彼女を風呂へ入れてやつて、體を洗つてやつてゐた頃、彼女の四肢が日増しに發達する様を詳しく記して置いたもので、つまり少女としてのナオミがだんだん大人になるところを、——ただそればかりを専門のやうに書き止めて行つた一種の日記帳でした。私はその日記のとどこころに、當時のナオミのいろいろな表情、ありとあらゆる姿態の變化を寫眞に撮つて貼つて置いたのを思ひ出し、せめて彼女を偲ぶよすがに、長い間、埃にまみれて突つ込んであつたその帳面を、本箱の底から引き摺り出して順順にページをはぐつて見ました。それらの寫眞は私以外の人間には絶対に見せるべきものではないので、自分で現像や焼き付けなことをしたのですが、大分水洗ひが完全でなかつたのでせう。今ではポツポツさばかすのやう

な斑點が出来、物によつてはすつかり時代がついてしまつて、まるで古めかしい畫像のやうに臃腫としたものもありましたけれど、しかしそのために却つて懐かしさは増すばかりで、もう十年も二十年も昔のこと、……幼い頃の遠い夢をでも辿るやうな気がするのです。そしてそこには、彼女があの時分好んで装つたさまざまな衣裳やなりかたが、奇抜なものも、輕快なものも、贅澤なものも、滑稽なものも、殆んど剩す所なく寫されてゐました。或るページには天鵞絨の背廣服を着て別装した寫眞がある。次をめぐると薄いコットン・ポイルの布を身に纏つて、彫像の如く立してゐる姿がある。又

その次にはきらきら光る縞子の羽織に縞子の着物、幅の狭い帯を胸高に締め、リボンの半襟を着けた様子が現はれて来る。それから種種雑多な表情動作や活動女優の眞似事の數々、——メリー・ビクフォードの笑顔だの、ゲロリア・スワインソンの眸だの、ポーラ・ネグリの猛り立つたところだの、ビーブ・ダニエルの乙に氣取つたところだの、憤然たるもの、嬌然たるもの、凛然たるもの、恍惚たるもの、見るに隨つて彼女の顔や體のこなしは一變化し、いかに彼女がさう云ふことに敏感であり、器用であり、伶俐であ

つたかを語らないものとはないのでした。

「ああ飛んでもない！ 己はほんとに大變な女を逃がしてしまつた。ピクフオードと、スワンソンと、ポーラ・ネグリと、ビーブ・ダニエルが一人になつてゐるやうな女を！」

私は心も狂ほしくなり、口惜しまきれに地團太を踏み、なほも日記を繰つて行くと、まだ寫眞が幾色となく出て來ました。その撮り方はだんだん微に入り、細を穿つて、部分部分を大映しにして、鼻の形、眼の形、唇の形、指の形、腕の曲線、肩の曲線、背筋の曲線、脚の曲線、手頸、足頸、肘、膝頭、足の趾までも寫してあり、さながら希臘彫刻や、或ひは奈良の佛像か何かを抜ふやうにしてあるのです。ここに至つてナオミの體は全く藝術品となり、私の眼には實際奈良の佛像以上に完璧なものであるかと思はれ、それをしみじみ眺めてゐると、宗教的な感激さへが湧いて來るやうになるのです。ああ、私は一體どう云ふ積りでこんな精密な寫眞を撮つて置いたのでせうか？ 此れがいつかは悲しい記念になると云ふことを、豫覺してでもゐたのでせうか？

私のナオミを戀ふる心は加速度を以て進みました。もう日が暮れて窓の外には夕の星が

またたき始め、うすら寒くさへなつて來ましたが、私は朝の十一時から御飯もたべず、火も起さず、電氣をつける氣力もなく、暗くなつて來る家の中を二階へ行つたり、階下へ降りたり、「馬鹿」と云ひながら自分で自分の頭を打つたり、空家のやうに森閑としたアトリエの壁に向ひながら「ナオミ、ナオミ」と叫んでみたり、揚句の果ては彼女の名前を呼び續けつつ床に額を擦りつけたりしました。もうどうしても、どうあらうとも彼女を引き戻さなければならぬ。己は絶對無條件で彼女の前に降伏する。彼女の言ふところ、欲するところ、凡べてに己は服従する。……が、それにしても今頃彼女は何してゐるだらう？ あんなに荷物を持つてゐたから、東京驛からきつと自動車で行つただらう。さうだとすると淺草の家へ着いてから五六時間は立つてゐる筈だ。彼女は實家の人人に對し、追ひ出されて來た理由を正直に話したらうか？ それとも例の負けず嫌ひで、一時遁れの出鱈目を云ひ、姉や兄貴を煙に巻いてでもゐるだらうか？ 千束町で卑しい稼業をしてゐる實家、この娘だと云はれることをひどく嫌つて、親兄弟を無智な人種のやうに扱ひ、めつたに里に歸つたことのない彼女。……此の不調和な一族の

間に、今頃どんな善後策が講ぜられてゐるだらう？ 姉や兄貴は勿論詫まりに行けと云ふ「あたしは決して詫まりになんか行くもんか。誰か荷物を取つて來てくれる」と、ナオミは何處までも強氣に出る。そして殆んど心配などはしてゐないやうに、平氣な顔で冗談を云つたり、氣焰を吐いたり、英語交りにまくし立てたり、ハイカラな衣裳や持ち物などを見せびらかしたり、まるで貴族のお嬢様が貧民窟を訪れたやうに、威張り散らしてゐやしないか。……

しかしナオミが何と云つても、兎に何事件が事件であるから、早速誰かが飛んで來なければならぬ筈だが、……若し當人が「詫りになんか行かない」と云ふなら、姉か兄貴が代りにやつて來るところだが、……それともナオミの親兄弟は誰にも親身にナオミのことを案じてなんぞゐないのだらうか？ ちやうどナオミが彼等に對して冷淡なやうに、彼等も昔からナオミに就いては何の責任も負はなかつた。あの兒のこととは一切お任せ申しますと、十五の娘を此方へ預けつ放しにして、どうでも勝手にしてくれと云ふ態度だつた。だから今度もナオミのしたい放題にさせて、打つちやらかして置くのだらうか？ それならそれで荷物だけでも受け取

りに来さうなものではないか。「歸つたら内ぐに使ひを寄越せ、荷物はみんな渡してやるから」とさう云つてやつたのに、未だに誰も来ないといふのはどうしたんだらう？ 着換への衣類や手周りの物は一と通り持つて行つたけれど、彼女の「命から二番目」である晴れ着の衣裳はまだ幾通りも残つてゐる。どうせ彼女はあのむさくろしい千束町に一日燻つてゐる筈はないから、毎日毎日、近所隣を驚ろかさやうな派手な風俗で出歩くだらう。さうだとすれば尙更衣裳が必要な譯だし、それがなくてはとも辛抱出来ないだらうに。……

けれどもその晩、待てど暮らせどナオミの使ひは来ませんでした。私はあたりが眞つ暗になるまで電燈をつけずに置いたので、若しも空家と間違へられたら大變だと思つて、慌てて家ちゆうの部屋と云ふ部屋へ明りを燈し、門の標札が落ちてゐやしないかと改めて見、戸口のところへ椅子を持つて来て何時間となく戸外の足音を聞いてゐましたが、八時が九時になり、十時になり、十一時になつても、……とうとう朝からまる一日立つてしまつても、結局何の便りもありません。そして悲觀のどん底に落ちた私の胸には、又いろいろ取り止めのな

い麗流が生じて来るのでした。ナオミが使ひを寄越さないのは、事に依つたら事件を軽く見てゐる證據で、二三日したら解決がつくとたか括つてゐるんぢやないかな。「なに大丈夫だ、向うはあたしに惚れてゐるんだ、あたしなしには一日も居られやしないんだから、迎ひに来るに極まつてゐる」と、懸け引きをしてゐるんぢやないかな。彼女にしたつて今迄贅澤に馴れて来たのが、あんな社會の人間の中で暮らせないことは分つてゐるんだ。さうかと云つて外の男の所へ行つても、己ほど彼女を大事にしてやり、氣隨氣儘をさせて置く者はありやしないんだ。ナオミの奴はそんなことは百も承知で、口では強がりを云ひながら、迎ひに来るのを心待ちにしてゐるんぢやないかな。それとも明日の朝あたりでも、姉か兄貴がいよいよ仲裁にやつて来るかな。夜が忙しい商賣だから、朝でなければ出られない事情があるかも知れない。何しろ使ひが来ないと云ふのは却つて一縷の望みがあるんだ。明日になつても音沙汰がなければ、己は迎ひに行つてやらう。もうからなれば意地も外聞もあるんぢやない、もともと己はその意地でもつて失策つたんだ。實家の奴等に笑はれようと、彼女に内兜を見

透かされようと、出かけて行つて、平詫まりに詫まつて、姉や兄貴にも口添へを頼んで、「後生一生活のお願ひだから歸つておくれ」と、百萬遍も繰り返す。さうすれば彼女も顔が立つて、大手を振つて戻つて来られよう。

私は殆んどまんぢりもしないで一と夜を明かし、明くる日の午後六時頃まで待ちましたけれど、それでも何の沙汰もないので、もう溜りかねて家を飛び出し、急いで浅草へ駆け付けました。一刻も早く彼女に會ひたい、顔さへ見れば安心する！——戀ひ焦がれるとはその時の私を云ふのでせう、私の胸には「會ひたい見たい」の願ひより外何物もありませんでした。

花屋敷の後ろの方の、入り組んだ路次の中にある千束町の家へ着いたのは大方七時頃でしたらう。さすがに極まりが悪いので私はそつと格子をあけ、

「あの、大森から来たんですが、ナオミは參つて居りませうか？」

と、土間に立つたまま小聲で云ひました。

「おや、河合さん」と、姉は私の言葉を聞きつけて次ぎの間の方から首を出しましたが、やがて怪訝さうな顔つきをして云ふのでした。

二十一

「へえ、ナオちゃんか？——いいえ、参つては居りませんが、」
「そりや可笑しいな、来て居ない筈はないんですがな、昨夜此方へ伺ふと云つて出たんですから。……」

最初私は、姉が彼女の意を含んで隠してゐるものと邪推したので、いろいろに云つて頼んで見ましたが、だんだん聞くと、事實ナオミは此處へ来てゐないらしいのです。

「をかしいな、どうも、……荷物も澤山持つてゐたんだし、あのまま何處へも行かれる筈はないんだけれど。……」
「へえ、荷物を持つて？」

「バスケットだの、靴だの、風呂敷包みだの、大分持つて行つたんですよ。實は昨日、つまらないことでちつと喧嘩をしたもんですから、……」
「それで常人は、此處へ来ると云つて出たんですか。」

「常人ぢやあない、僕がさう云つてやつたんですよ、此れから直ぐに淺草に歸つて、人を寄越せて。誰かあなた方が来て下されば話がつると思つたもんですから。」

「へえ、成る程、……だけど兎に角手前共へは参りませぬのよ、さう云ふことなら追つ付け来るかも知れませぬけれど。」
「だけでもお前、昨夜ツからなら分りやしねえぜ。」
と、さうかうするうちに兄貴も出て来て云ふのでした。

「そりや何處か、お心當りがおあんなすつたら外を捜して御覽なさい。もう今まで来ねえやうぢやあ、此處へ歸つちや来ますまいよ。」
「それにナオちゃんはさつぱり家へ寄り付かないんで、あれはかうツと、いつだつたか知らず——もう二た月も顔を見せたことはないんですよ。」

「では済みませんが、もしも此方へ参りましたら、たとへ常人が何と云はうと、早速どうか僕の所へ知らして頂きたいんですが。」

「ええ、そりやあもう、あツしの方ぢや今更あの兒をどうするツて氣はねえんですから、来れば直ぐにも知らせますがね。」
上り框へ腰をかけて、出された瀝茶をすすりながら、私は暫く途方に暮れてゐましたけれど、妹が家を出をしたと聞いても別に心配をするでもない姉や兄貴が相手では、ここで衷

情を訴へたところでどうにも仕様がありません。で、私は重ねて、萬一彼女が立ち廻つたら時を移さず、晝間だつたら會社の方へ電話をかけてくれること。尤も此の頃は時時會社を休んでゐるから、もしも會社に居なかつた場合は直ぐ大森へ電報を打つて貰ひたいこと。さうしたら私が迎ひに来るから、それまで必ず何處へも出さずに置いてくれること。などをくどくど頼み込んで、それでも何だか此の連中のずべらなのがアテにならないやうな氣がして、なほ念のために會社の電話番號を教へたり、此の様子では大森の家の番地なんぞも知らないのではないかと思つて、それを詳しく書き止めたりして出て来ました。

「さて、どうしたらいいんだらう？ 何處へ行つちまつたんだらう？」
——私は殆んど、それを掻かないばかりの氣持ちで、——いや、實際べ、それを掻いてゐたかも知れませんが、——千束町の路次を出ると、何と云ふ目的もなく、公園の中をぶらぶら歩きながら考へました。實家へ歸らないところを見ると、事態は明かに豫想したよりも重大なのです。

「此れはきつと熊谷の所だ、彼奴の所へ逃げて行つたんだ。」——さう氣がつくと、ナオミが

「さて、どうしたらいいんだらう？ 何處へ行つちまつたんだらう？」

昨日出て行く時に、「だつてあたし、それぢや困るわ、今すぐいろいろ入用なものがあるんだから」とさう云つたのも、成る程思ひ中るのでした。さうだ、やつぱりさうだつたんだ、熊谷の所へ行く積りだから、あんなに荷物を持つて行つたんだ。或ひは前から、かう云ふ時にはかうしようとして、二人で内内打ち合はせがしてあつたかも知れん。さうだとすると此れは中中むづかしいかも知らんぞ。第一己は熊谷の家が何處にあるのかも知らない。それは調べれば分るとしても、まさか彼奴が兩親の家へ彼女を匿まつては置けなからう。彼奴は不良少年だけれど、親は相當な者らしいから、自分の息子にそんな不都合を働かしては置かないだらう。彼奴も家を飛び出して、二人で何處かに隠れてゐやしないか？ 親の金でも引ッ渡つて、今日は鎌倉、明日は箱根と、遊び歩いてゐやしないか？ が、それならそれと、ハツキリ分つてくれればいい。さうすれば己は熊谷の親に談判して、厳しい干渉を加へて貰ふ。たとへ彼奴が親の意見を聴かないにしたつて、金が盡きれば二人で暮らせる譯がないから、結局彼奴は自分の家へ戻らだらうし、ナオミは此方へ歸つて来る。トドの詰まりはさうなるだらうが、その間の己

の苦勞と云ふものは？——それが一月で済むものやら、二た月、三月、或ひは半年もかかるものやら？——いや、さうなつたら大變だ。そんな事をしてゐるうちにだんだん歸りそびれてしまつて、又ひよつとすると第二第三の男が出て來ないもんでもない。すると此奴はぐづぐづしてゐる所ぢやないんだ。かうして離れてゐればるだけ彼女との縁が薄くなるんだ。刻一刻と彼女は遠くへ去りつつあるんだ。己れやれ！ 逃げようとしたつて逃がすもんか！ 己はどうしても引き戻してやるから？

苦しい時の神頼み、——私はつひぞ神信心をしたことなどはなかつたのですが、その時ふいと思ひ出して、觀音様へお參りをしました。そして「ナオミの居所が一時も早く知れますやうに、明日にも歸つてくれますやうに」と、眞心籠めて祈りました。それから何處をどう歩いたか、二三軒のバアへ寄つて、ぐでんぐでんに酔つ拂つて、大森の家へ歸つたのは夜の十二時過ぎでした。が、酔つてはゐてもナオミの事が始終頭の中にあつて、寝ようとしても容易に寝つかれず、そのうちに酒が醒めてしまふと、又しても一つ事をくよくよと考へる。どうしたら居所が突き止められるか、事實熊谷と逃

げたかどうか、彼奴の家へ談判するにも其奴を確めた上でなければ輕卒過ぎるし、さうかと云つて秘密探偵でも頼まなければ、ちよつと確める方法はなし、……と、散散思案に餘つた揚句、ひよつこり考へつゝいたのは例の濱田のことでした。さうさう、濱田と云ふ者が居たつて、己はウツカリ忘れてゐたが、あの男なら己の味方になつてくれよう。己は「松淺」で別れた時、己の男の住所を控へて置いた筈だから、明日にも早速手紙を出すかな。手紙なんかぢや焦れつたいから電報を打つか？ そいつもちつと大袈裟なやうだが、多分電話があるだらうから、電話をかけて來て貰ふか？ いやいや、來て貰ふには及ばないんだ、その暇があつたら熊谷の方を探つて貰ふ方がいいんだ。此の際より肝要なのは熊谷の動靜を知ることにある。濱田だつたら手藪があるから直きに報告を齎らしてくれよう。目下のところ、己の苦しみを察してくれ、己を救つてくれる者はあの男より外にないんだ。此れもやつぱり「苦しい時の神頼み」かも知れないんだが、……

明くる日の朝、私は七時に飛び起きて近所の自動電話「聴せつけ、電話帳を繰ると、好い鹽梅に濱田の家が見つかりました。

「ああ、坊つちやまでございますか、まだお休
みでございませうが、……」

「女中が出て来てさう云ふのを、
誠に恐れ入りますが、急な用事でございま

すので、ちよつと何卒お取り次ぎを、……」

と、押し返して頼むと、暫く立つてから電
話口へ出て来た濱田は、

「あなたは河合さんですか、あの大森の？」

と、寢惚けた聲で云ふのでした。

「ええ、さうですよ、僕は大森の河合ですよ、
どうもいつぞやは大へん御迷惑をかけてしまつ

て、それに突然、こんな時刻に電話をかけて甚
だ失禮なんです、実はあの、ナオミが逃げて
しまひましてね、——」

此の、「逃げてしまひましてね、」と云ふ時、私
は覺えず泣き聲になりました。非常に寒い、も
う冬のやうな朝のこと、寢間着の上にとでら
一枚引つ懸けたまま慌てて出て来たものでは
から、私は受話器を握りながら、胴顫ひが止ま
りませんでした。

「ああ、ナオミさんが、——矢つ張りさうだつ
たんですか。」

すると濱田は、意外にも、いやに落ち着いて
さう云ふのでした。

「それぢやあ、君はもう知つてゐるんですか？」

「僕は昨夜遇ひましたよ。」

「えつ、ナオミに？ ……ナオミに昨夜遇つた
んですか？」

「今度私は前は、前とは違つた胴顫ひで、體中が
ガクガクしました。あまり激しく顫へたので前
商をカチリと送話器の口に打ツつけました。

「昨夜僕はエルドラドオのダンスに行つたら、
ナオミさんが来てゐましたよ。別に事情を聞
いた譯ではないんですけれど、どうも様子が變

でしたから、大方そんな事なんだろうと思つた
んです。」

「誰と一緒に来てゐましたか？ 熊谷と一緒に
やないんですか？」

「熊谷ばかりぢやありません、いろんな男が
五六人も一緒に、中には西洋人もゐました。」

「西洋人が？ ……」

「ええ、さうですよ、さうして大さう立派な洋
服を着てゐましたよ。」

「家を出る時、洋服なんぞ持つてゐなかつたん
ですが、……」

「それが兎に角、洋服でしたよ。而も非常に
堂々たる夜會服を着てゐましたよ。」

私は狐につままれたやうに、ポカンとした

きり、何を尋ねていいのやら、いかれ見當が付
かなくなつてしまひました。

二十二

「ああ、もし、もし、どうしたんですか、河
合さん、……もし、……」

私があまり電話口で黙つてゐるので、濱田
はさう云つて催促しました。

「ああ、もし、もし、……」

「ああ、……」

「河合さんですか、……」

「ああ、……」

「どうしたんですか、……」

「ああ、……どうしたらいいか分らないんです、
……」

「しかし電話口で考へてゐたつて、仕様がな
ぢやありませんか。」

「仕様がなことは分つてるんだが、……しか
濱田君、僕は實に困つてるんですよ。どうし
たものか途方に暮れてゐるんですよ。彼奴が
なくなつてから、夜もロクロク寝ないくらゐに
苦しんでゐるんです。……」

ここで私は、濱田の同情を求めするために精
一杯の哀れみを籠めてつづけました。

「……濱田君、僕は此の場合、君より外に頼りにする人がないもんだから、飛んだ御迷惑をかけるんですけれど、僕は、僕は、……どうかしてナオミの居所を知りたいんです。熊谷の所にゐるんだか、それとも誰か外の男の所にゐるんだか、それをハツキリと突き止めたんです。就いては誠に、勝手なお願ひなんです、君の御盡力ですそれを調べて頂く譯には行かないでせうか。……僕が自分で調べるよりも、君が調べて下さる方がいろいろ手筈がありがたいなりはしないかと、さう思ふもんですから、……」

「ええ、そりや、僕が調べれば直きに分るかも知れませんがね、」

と、濱田は造作もなささうに云つて、
 「ですが河合さん、あなたの方にも大凡そ何處と云ふ心當りはないんですか？」
 「僕はテツキリ熊谷の所だと思つてゐたんです。實は君だからお話ししますが、ナオミは未だに僕に内證で、熊谷と關係してゐたんです。それが此の間、バレたもんだから、とうとう僕と喧嘩になつて、家を飛び出しちまつたんです。……」
 「ふむ、……」
 「ところが君の話だと、西洋人だのいろんな男

が一様だと云ふし、洋服なんか着てゐると云ふんで、僕には全く見當がつかなくなつちやつたんです。でも熊谷に會つて下されば大概の様子は分るだらうと思ふんですが、……」

「ああ、よござんす、よござんす、」
 と、濱田は私の愚痴っぽい言葉を打ち切るやうに云ふのでした。

「それぢや兎に角調べて見ますよ。」

「それもどうか、成るべく至急にお願ひしたいんですけれど、……若し出来るなら今日のうちにでも結果を知らして下さると、非常に助かるんですけれど、……」

「ああ、さうですか、多分今日ぢゆうには分るでせうが、分つたら何處へお知らせしませう？ あなたは此の頃、やつぱり大井町の會社ですか？」

「いや、此の事件が起つてから、會社はズツと休んでゐるんです。萬一ナオミが歸つて來ないもんでもないと、そんな氣がするもんですから、成るだけ家を空けないやうにしてゐるんです。それで何とも勝手な話ですけど、電話ではちよつと工合が悪いし、お目に懸れば大變好都合なんです、……どうでせうか？ 様子

が知れたら大森の方へ來て頂くことは出來ないでせうか？」
 「ええ、構ひません、どうせ遊んでゐるんですから。」
 「ああ、有り難う、さうして下さればほんたうに僕は有り難いんです！」
 さてさうなると、濱田の來るのが一刻千秋の思ひなので、私は尙もセカセカしながら、
 「ぢや、おいでになるのは大概何時頃になるでせうか？ おそくも二時か三時頃には分るでせうか？」
 「さあ、分るだらうとは思ひますが、しかし此奴は一應尋ねて見てからでなけりやあハツキリしたことは云へませんねえ。最善の方法を取つては見ますが、場合に依つたら二三日かかるかも知れませんが、……」
 「え、そりや仕方がありません、明日になつても明後日になつても、僕は君が來て下さるまで、ぢつと内で待つてゐますよ。」
 「承知しました、詳しい事はいづれお目に懸つてからお話しませう。——ぢや、左様なら。」
 「あ、もし、もし、」
 電話が切れさうになつた時、私は慌ててもう一度濱田を呼び出しました。

「もし、もし、…あのう、それから、…これはその時の事情次第でどうでもいいことなんです、君が直接ナオミにお會ひになるやうだつたら、そして話をする機會があつたら、さう云つて頂きたいんですがね。——僕は決して彼女の罪を責めようとはしない、彼女が墮落したに就いては自分の方にも罪のあることがよく分つた。それで自分の悪かつたことは幾重にも詫まるし、どんな條件でも聞き入れるから、一切の過去は水に流して、是非もう一度歸つて來てくれるやうに。それも厭なら、せめて一遍だけ僕に會つてくれるやうに。——」

どんな條件でも聞き入れると云ふ文句の次ぎに、もつと正直な氣持ちを云ふと、彼女が土下座しろと云ふなら、僕は喜んで土下座します。大地に額を擦りつけると云ふなら、大地に額を擦りつけます。どうにでもして詫まります。と、寧ろさう云ひたいくらゐでしたが、さすがにそこまで云ひかねました。

「——僕がそれほど彼女のことを思つてゐると云ふことを、若し出來るなら傳へて頂きたいんですがね。…」

「ああ、さうですか、機會があつたらそれも十分さう云つて見ますよ。」

「それから、あのう、…或ひはああ云ふ氣象ですから、歸りたいには歸りたくつても、意地を突ツ張つてゐるのぢやないかと思ふんです。そんな風なら、僕が非常にシヨゲてゐるからとさう仰つしやつて、無理にも當人を連れて來て下さると尙いいんですが、…」

「分りました、分りました、どうもそこ迄は請け合ひかねますが、出來るだけの事はやつてみますよ。」

餘り私がつつこいので、濱田も聊かウンザリしたやうな口調でしたが、私はその自動電話で、藁口の中の五錢銅貨がなくなるまで、三通話ほど立て続けにしゃべりました。恐らく私が泣き聲を出したり、顫へ聲を出したりして、こんなには確辯に、こんなにつうづうしくしゃべつたことは、生れて始めてだつたでせう。が、電話が濟むと、私はほつとするどころでなく、今度濱田の來てくれるのが、無上待ち遠しになりました。多分今日ぢゆうには云つたけれども、若し今日ぢゆうに來ないやうなら、どうしたらいいだらう？——いや、どうしたら、どうよりも、自分はどうなつてしまふだらう？ 自分は今、一生懸命ナオミを戀ひ慕つてゐるより外、何の仕事も持つてゐないのだ。

どうすることも出來ずにあるのだ。寝ることも、食ふことも、外へ出ることも出來ないで、家の中にチーツと籠つて、あかの他人が自分のために奔走してくれ、或る報道を齎してくれ、手束束待つてゐなければならぬのだ。實際人は、何もしないでゐる程の苦痛はありませんが、私はその上に死ぬほどナオミが戀しいのです。その戀しさに身を焦らしながら、自分の運命を他人に委ねて、時計の針を視詰めてゐると云ふことは、考へて見ても溜らないことです。ほんの一分の間にしても、「時」の歩みと云ふものが驚くほど遅遅として、無限に長く感ぜられます。その一分が六十回でやつと一時間、百二十回でやつと二時間、假りに三時間待つものとしても、此のいよぎない、どうにもかうにもしやうのない「一分」を、セコンドの針がチクタク、チクタクと、圓を一周する間を、百八十回こらへねばならない！それが三時間どころではなく、四時間になり、五時間になり、或ひは半日、一日になり、二日も三日にもなつたとしたら、まるで牢屋にでも繋かれたやうで、待ち遠しさと戀しさの餘り、私はきつと發狂するに違ひないやうな氣がしました。

が、いくら早くても濱田の来るのは夕方になるだらうと、覺悟をきめてゐたのですが、電話をかけてから四時間の後、ちやうど十二時頃になつて、表の呼鈴がけたたましく鳴り、續いて濱田の、

「今日は」

と云ふ意外な聲が開えた時には、私は覺えず、嬉し紛れに飛び上つて、急いでドアを開けに行きました。そしてソハソハした口調で、
「ああ、今日は。今すぐ此處を開けますよ、鍵が悪くてゐるもんですから、」

と、さう云ひながらも、「こんなに早く来てくれようとは思はなかつたが、事に依つたら譯なくナオミに會へたんぢやないかな。會つたら直きに話が分つて、一緒に彼女を連れて来てでもくれたんぢやないかな」と、ふとそんな風に考へると、尙更嬉しさが込み上げて来て、胸がドキドキするのです。

ドアを開けると、私は濱田の後ろの方に彼女が寄り添つてゐるかと思つて、邊りをキョロキョロ見廻しましたが、誰も居ません。濱田がひとりポーチに立つてゐるだけでした。

「やあ、先刻は失禮しました。どうでしたかしら？ 分りましたか？」

私はいきなり噛み着くやうな調子で尋ねると、濱田はイヤに落ち着き拂つて、私の顔を憐れむが如く眺めながら、
「ええ、分ることは分りましたが、……しかし河合さん、もうあの人はとても駄目です、あきらめた方がよござんすよ。」

と、キツパリ云ひ切つて、首を振るのでした。

「そ、そ、そりやあどう云ふ譯なんですか？」

「どう云ふ譯つて、全く話の外なんですから、僕はあなたの爲めを思つて云ふんですが、もうナオミさんのことなんぞは、忘れておしまひになつたらどうです。」

「さうすると君は、ナオミに會つてくれたんですか？ 會つて話はしてみたけれども、とても絶望だと云ふんですか？」

「いや、ナオミさんには會やしません。僕は熊谷の所へ行つて、すっかり様子を聞いて来たんです。そしてあんまりヒド過ぎるんで、實に驚いちゃまつたんです。」

「だけど濱田君、一體全體ナオミは何處に居るんです？ 僕は第一にそれを聞かして貰ひたいんだ。」

「それが何處と云つて、極まつた所がある譯ぢやなく、彼方此方を泊まり歩いてゐるんです。」

よ。」

「そんなに方方泊まれる家はないでせうがね。」

「ナオミさんにはあなたの知らない男の友達があ、幾人あるかも知れやしません。尤も最初、あなたと喧嘩をした日には、先づ眞つ先に熊谷の所へやつて来たさうです。それも豫め電話をかけて、コツソリ訪ねて来てくれるんらよかつたんだが、荷物を積んで、自動車飛ばして、いきなり玄關へ乗り着けたんで、家ぢゆうの者が一體あれは何者だと云ふ騒ぎになつたもんだから、『まあお上り』とも云ふ譯に行かず、さすがの熊谷も弱つちやつたと云つてゐました。」

「ふうん、それから？」

「それで仕方がないもんだから、荷物だけを熊谷の部屋へ隠して、二人で兎も角も戶外へ出て、それから何でも怪しげな旅館へ行つたと云ふんですが、而もその旅館が、此の大森のお宅の近所の何とか樓とか云ふ家で、その日の朝もそこで出會つてあなたに見付かつた場所だと云ふから、實に大膽ぢやありませんか。」

「それぢや、あの日に又彼處へ行つたんですか。」

「ええ、さうだつて云ふんですよ。それを熊谷

た。」

「ふうん、それから？」

「それで仕方がないもんだから、荷物だけを熊谷の部屋へ隠して、二人で兎も角も戶外へ出て、それから何でも怪しげな旅館へ行つたと云ふんですが、而もその旅館が、此の大森のお宅の近所の何とか樓とか云ふ家で、その日の朝もそこで出會つてあなたに見付かつた場所だと云ふから、實に大膽ぢやありませんか。」

「それぢや、あの日に又彼處へ行つたんですか。」

「ええ、さうだつて云ふんですよ。それを熊谷

た。」

「ふうん、それから？」

「それで仕方がないもんだから、荷物だけを熊谷の部屋へ隠して、二人で兎も角も戶外へ出て、それから何でも怪しげな旅館へ行つたと云ふんですが、而もその旅館が、此の大森のお宅の近所の何とか樓とか云ふ家で、その日の朝もそこで出會つてあなたに見付かつた場所だと云ふから、實に大膽ぢやありませんか。」

「それぢや、あの日に又彼處へ行つたんですか。」

「ええ、さうだつて云ふんですよ。それを熊谷

た。」

「ふうん、それから？」

が得意さうに、のろけ交りにしゃべり散らすんで、僕は聞いてゐて不愉快でした。」

「するとその晩は、二人で彼處へ泊まつたんですね？」

「ところがさうぢやないんです。夕方までは其處にゐたけれど、それから一緒に銀座を散歩して、尾張町の四つ角で別れたんださうです。」

「けれども、それはをかしいな。熊谷の奴、諷をついてゐるんぢやないかな。」

「いや、まあお聞きなさい、別れる時に熊谷が少し氣の毒になつたんで、『今夜は何處へ泊まるんだい』ツてさう云ふと、『泊まる所なんか幾らもあるわよ。あたしこれから横濱へ行くわ』ツて、ちつともシヨゲてなんかゐないで、そのままスタスタ新橋の方へ行くんださうです。」

「横濱と云ふのは、そりやあ誰の所なんですか？」

「そいつが奇妙なんです、いくらナオミさんが顔が廣いツて、横濱なんか泊まる所はないだらうから、ああ云ひながら多分大森へ歸つたんだらうと、さう熊谷が思つてゐると、明くる日の夕方電話が懸つて、『エルドラドオで待つてゐるから直ぐ来ないか』と云ふ譯なんです。」

それで行つて見ると、ナオミさんが目の覺めるやうな夜會服を着て、孔雀の羽根の扇を持つて、頸飾りだの腕環だのをキラキラさせて、西洋人だのいろんな男に圍まれながら、盛んにはしゃいでゐるんださうです。」

濱田の話聞いてゐると恰もピツクリ箱のやうで、「おやツ」と思ふやうな事實がピヨンピヨン跳び出して來るのです。つまりナオミは、最初の晩はその西洋人の所へ泊まつたらしいのですが、その西洋人はウイリアム・マツカネルとか云ふ名前前で、いつぞや私が初めてナオミとエルドラドオへダンスに行つた時、紹介もなしに傍へ寄つて來て、無理に彼女と一緒に踊つた、あのづうづうしい、お白粉を塗つた、にやけた男がそれだつたのです。ところが更に驚くことには、——此れは熊谷の觀察です

が、——ナオミはあの晩泊まりに行くまで、そのマツカネルと云ふ男とは何もそれほど懇意な仲ではなかつたのだと云ふのです。尤もナオミも、前から内内あの男に思ひ召しがあつたらしい。何しろちよつと女好きのする顔だちで、すつきりとした、役者のやうな所があつて、ダンス仲間でも「色魔の西洋人」と云ふ噂があつたばかりでなく、ナオミ自身も「あの西

洋人は横顔がいいわね、何處かジョン・パリに似てるぢやないの。」——ジョン・パリと云ふのは亞米利加の俳優で、活動寫眞でお馴染のジョン・パリモーアのことなのです。——と、さう云つてゐたくらゐるだから、確かにあれに眼を着けてゐたのだ。或ひはちよよいちよい色眼ぐらゐは使つたことがあるかも知れない。それでマツカネルの方でも、「此奴は俺に氣がある」と見て、「私の家へ來ませんか」とか、「あなた大變ハイカラで可愛らしいです」とか、からかつたことがあるんだらう。だから友達と云ふのもなく、ほんのそれだけの縁故でもつて押しかけて行つたに違ひないんだ。そして訪ねて行つて見ると、マツカネルの方ぢや面白鳥が飛び込んだと思つて、「あなた今晩私の家へ泊まりませんか」

「ええ、泊まつても構はないわ」と云ふやうなことになつたんだらう。——

「何ほ何でも、そいつは少し信じかねるな、初めての男の所へ行つて、その晩すぐに泊まるなんて。」

「だけど河合さん、ナオミさんはさう云ふことは平氣でやると思ひますがね、マツカネルもいくらか不思議に感じたと見えて、『此のお嬢さんは一體何處の人ですか』ツて、昨夜熊谷に聞

「何處の人だか分らない女を、泊める方も泊める方だな」

「泊めるどころか洋服を着せてやつたり、腕環や頸飾りをつけてやつたりしてゐるんだから、なほ振つてるぢやありませんか。さうしてあなた、たつたと晩ですつかり馴れ馴れしくなつちまつて、ナオミさんは其奴のことを『マツカネル』とも『ウイリアム』とも云はないで、『ウイリー、ウイリー』ツて呼ぶんださうです。」

「ぢや、洋服や頸飾りも、その男に買はせられたせうか？」
「買はせたものもあるらしいし、西洋人のことだから、友達の女の衣裳が何かを借りて来て、そいつを一時間に合はせたのもあるらしいツて云ふことですよ。ナオミさんがあたし洋服が着てみたいわツて、甘ツたれたのが始まりで、とうとう男が御機嫌を取ることになつちまつたんぢやないでせうか。その洋服も出来合ひのやうなものぢやなくつて、體にびつたり嵌まつてゐて、靴なんかもフレンチ・ヒールのきゅつと踵の高い奴で、總エナメルの爪先のところ、多分新ダイヤか何かでせうが細かい寶石が光つてゐるんです。まるで昨夜のナオミさんは、

お伽噺のシンデレラと云ふ風でしたよ。」

私は濱田にさう云はれて、そのシンデレラのナオミの姿がどんなに美しかつたかと思ふと、はつと我知らず胸が躍つて來るのでしたが、又その次ぎの瞬間には、あまり不行跡に呆れてしまつて、淺ましいやうな、情ないやうな、口惜しいやうな、何とも云へないイヤな氣持ちになるのです。熊谷ならばまだしもこのと、性の知れない西洋人の所へなんぞ出かけて行つて、ずる、ずるべつたり泊まり込んで、着物を揃へて貰ふなんて、それが昨日まで假りにも亭主を持つてゐた女のすべき業だらうか？ あ、己が長年同様してゐたナオミと云ふのは、そんな汚れた、賣春婦のやうな女だつたのか？ 己には彼女の正體が今の今まで分らないで、愚かな夢を見てゐたのか？ ああ、成るほど濱田の云ふやうに、己はどんなに戀しくつても、もうあの女はあきらめなければならぬのだ。己は見事に恥を掻かされた、男の面へ泥を塗られた。……

濱田君、くだいやうでももう一度念を押しますが、今の話は残らず事實なんですな？ 熊谷が證明するばかりでなく、君も證明するんですな？」

濱田は私の眼の中に涙が湧いて來たのを見て、氣の毒さうに頷きながら、

「さう云はれると僕はあなたの、お心持ちをお察して、云ひ辛くなつて來るんですが、現に昨夜は僕もその場に居合はせられたんだし、大體熊谷の云ふことは本當だらうと思はれるんです。まだ此の外にもお話すればいろいろなさ事が出て來るので、成る程とお思ひになつてせうが、何卒そこまではお聞きにならずに、僕を信じて下さいませんか。僕が決して、面白半分にならずに、事實を誇張してゐるのではないと云ふことを、——」

「ああ、有り難う、そこまで何へばもういいんです。もうそれ以上聞く必要は……」
どうした加減か、かう云つた拍子に私の言葉は喉に詰まつて、急にバラバラ大粒の涙が落ちて來たので、「此りやいけない」と思つた私は、突然濱田にひしと抱き着き、その肩の上へ顔を突つ伏してしまひました。そしてわあッと泣きながら、途轍もない聲で叫びました。
「濱田君！ 僕は、僕は、……もうあの女をキレイサツパリあきらめたんです！」
「御尤もです！ さう仰つしやるのは御尤もです！」
と、濱田も私に釣り込まれたのか、矢張り濁

聲で云ふのでした。

「僕は、ほんたうの事を云ふと、ナオミさんには最早や望みがないと云ふことを、今日にはあなたに宣告する氣で來たんですよ。そりや彼人のことですから、又いつ何時、あなたの所へ平氣な顔で現はれるかも知れませんが、今では事實、誰も眞面目でナオミさんを相手にする者はありません。眞面目です。熊谷なんぞに云はせると、まるでみんなが慰み物にしてゐるんで、とても口には出來ないやうなヒドイ仇名さへ附いてゐるんです。あなたは今まで、知らない間にどれほど恥を掻かされてゐるか分りやしません。

……

當ては私と同じやうに熱烈にナオミを戀した濱田、そして私と同じやうに彼女に背かれてしまつた濱田、——此の少年の、悲憤に充ちた、心の底から私の爲めを思つてくれる言葉の節節は、鋭いメスで腐つた肉を抉り取るやうな効果がありました。みんなが慰み物にしてゐる、口には出來ないヒドイ仇名が附いてゐる、——此の恐ろしいスツパ抜きは却つて氣分をサバサバとさせ、私は瘡が取れたやうに一時に肩が輕くなつて、涙さへ止まつてしまひました。

二十三

「どうです河合さん、さう閉ぢ籠つてばかりゐないで、氣晴らしに散歩して見ませんか」と、濱田に元氣をつけられて、「それではちよつと待つて下さい」と、此の二日間口も激がず、髭も剃らずにゐた私は、剃刀をあてて、顔を洗つて、セイとした心持ちになり、濱田と一緒に外へ出たのは彼れ此れ二時半頃でした。

「かう云ふ時には、却つて郊外を散歩しましょう」と濱田が云ふので、私もそれに賛成しましたが、

「それぢや、此方へ行きませうか。」

と、池上の方へ歩き出したので、私はふいとイヤな氣がして立ち止まりました。

「あ、其方はいけない、その方角は鬼門ですよ。」

「へえ、どう云ふ譯で？」

「さつきの話の、曙樓と云ふ家がその方角にあるんですよ。」

「あ、そいつはいけない！ ぢやあどうしませう？ 此れからずつと海岸へ出て、川崎の方へ行つて見ませうか。」

「ええ、いいでせう、それなら一番安全です。」

すると濱田は、今度はグルリと反對を向いて、停車場の方へ歩き出しましたが、考へてみると、その方角も満更危険でないことはない。ナオミが未だに曙樓へ行くのだとすれば、ちやうど今頃熊谷を連れて出て來ないとも限らないし、例の毛唐と京濱間を往復しないものでもなし、いづれにしても、省線電車の停まる所は禁物だと思つたので、

「今日は君には飛んだお手數をかけましたなあ。」

と、私は何氣なくさう云ひながら、先へ立つて、横丁を曲つて、田圃路にある踏切を越えるやうにしました。

「なあに、そんな事は構ひません、どうせ一度はかう云ふ事がありやしないかと思つてゐたんです。」

「ふむ、君から見たら、僕と云ふものは随分滑稽に見えたでせうね。」

「けれど僕も、一時は滑稽だつたんだから、あなたを笑ふ資格はありません。僕はただ、自分の熱が冷めて見ると、あなたを非常にお氣の毒だとは思ひましたよ。」

「しかし君は若いんだからまだいいですよ、僕らのやうに三十幾つにもなつて、こんな馬鹿な目

を見るなんて、話にも何もなりやしません。それも君に云はれなければ、いつ迄馬鹿を續けてゐたか知れないんだから、……」

田圃へ出ると、晩秋の空は恰も私を慰めるやうに、高く、爽やかに晴れてゐましたが、風がひゆうひゆう強く吹くので、泣いた跡の、服れぼつたい目の縁がヒリヒリしました。そして遠くの線路の方には、あの禁物の省線電車が、畑の中を、ごうごう走つて行くのでした。

「濱田君、君は晝飯をたべたんですか。」と、暫く無言で歩いてから、私は云ひました。

「いや、實はまだですが、あなたは？」
「僕は一昨日から、酒は飲んだが飯は殆んどたべないんで、今になつたら非常に腹が減つて来ました。」

「そりやさうでせう、そんな無茶をなさらない方がよござんすね、體を壊しちゃ詰まりませんから。」

「いや、大丈夫、君のお蔭で悟りを開いちゃつたから、もう無茶な事はしやしません。僕は明日から生れ變つた人間になります、さうして會社へも出る積りです。」

「ああ、その方が氣が紛れますよ。僕も失戀し

た時分、どうかして忘れようと思つて、一生懸命音楽をやりましたつげ。」

「音楽がやれると、さう云ふ時には何より一番いいでせうなあ。僕にはそんな藝はないから、會社の仕事をコソコソやるより仕方がないが。——しかし兎に角腹が減つたぢやありませんか、何處かで飯でも喰ひませうよ。」

二人はこんな風にしやべりながら、六郷の方までぶらぶら歩いてしまひましたが、それから間もなく、川崎の町の或る牛肉屋へ上り込んで、ジクジク煮える鍋を圍みながら、また「松淺」の時のやうに杯の遣り取りを始めてゐました。

「君、君、どうです一杯。」
「やあ、さう飲まされぢや、空き腹だからこたへますなあ。」

「まあいいでせう、今夜は僕の厄落しだから、一つ祝杯を舉げて下さい。僕は明日から酒は止めます、その代り今夜は大いに酔つて談じようぢやありませんか。」

「ああ、さうですか、それぢやあなたの健康を祝します。」

濱田の顔が眞つ赤に火照つて、満面に出てきたニキビの頭が、恰も牛肉が湯立つたやうにぶつぶつ光り出した時分には、私も大分酔つ拂

つて、悲しいのだから嬉しいのだから何も分らなくなつてゐました。

「ところで濱田君、僕は聞きたいことがあるんだ、私は頃合を見計らつて、一段と膝を進めながら、

「ヒドイ仇名がナオミに附いてゐると云ふのは、一體どんな仇名ですか？」
「いや、そりや云へません、そりやあともヒドイんですから。」

「ヒドクつたつて一向構はんぢやありませんか。もうあの女は僕とはあかの他人だから、遠慮することはないぢやないですか。え、何と云ふんだか教へて下さいよ。却つてそいつを聞かされた方が、僕は氣持ちがサツパリするんだ。」

「あなたはさうかも知れませんが、僕には到底云ふに堪へないことなから勘忍して下さい。兎に角ヒドイ仇名だと思つて、想像なすつたら分るんですよ。尤もさう云ふ仇名が附いた、由來だけならお話ししてもよござんすがね。」

「ぢやあその由來を聞かして下さい。」
「しかし河合さん、……困つちやつたなあ、と云つて、濱田は頭を掻きながら、

「それも随分ヒドインですよ、お聞きになつたらいくら何でも、きつと氣持ちを悪くしますよ。」

「いいですよ、いいですよ、構はないから云つて下さい！ 僕は今ぢやあ純然たる好奇心から、あの女の秘密を知りたいんです。」

「ぢやあその秘密を少少ばかり云ひませうか、

——あなたは一體、此の夏録倉にいらしつた時分、ナオミさんに幾人男があつたと思ひますか？」

「さあ、僕の知つてゐる限りでは、君と熊谷だけだけれど、まだその外にもあつたんですか？」

「河合さん、あなた驚いちゃいけませんよ、——關も中村もさうだつたんですよ。」

私は酔つてはゐましたけれど、ビリリと體に電氣が來たやうな氣がしました。そして思はず、眼の前にあつた杯をガブガブ五六杯引つけてから、始めて口を利きました。

「するとあの時の連中は、一人残らず？」

「ええ、さうですよ、さうしてあなた、何處で會つてゐたと思ふんです？」

「あなたの借りていらしつた、植木屋の離れ座敷ですよ。」

「ふうむ、……」

と云つたなり、まるで息でも詰まつたやうにいと沈んでしまつた私は、

「ふうむ、さうか、實際驚きましたなあ、」

と、やつと呻るやうな聲を出しました。

「だからあの時分、恐らく一番迷惑したのは植木屋のかみさんだつたでせうよ。熊谷の義理があるもんだから、出てくれるとも云ふ譯に行かず、さうかと云つて自分の家が一種の魔窟になつてしまつて、いろんな男がしつきりなしに出入りするんで、近所隣りには體裁が悪いし、それに萬一、あなたに知れたら大變だと思ふもんだから、ハラハラしてゐたやうでしたよ。」

「はあ、成る程、さう云はれりやあ、いつだか僕がナオミのことを尋ねると、かみさんがひどく面喰つて、オドオドしてゐたやうでしたが、さう云ふ譯があつたんですか。大森の家は君の密會所にされるし、植木屋の離れは魔窟になるし、それを知らずにゐたなんて、イヤハヤどうも、散散な目に遭つたんだな。」

「あ、河合さん、大森のことは云ひっこなし！ それを云はれると詫まります。」

「あはははは、なあにいいですよ、もう何も彼も一切過去の出來事だから、差支へないぢやあ

りませんか。しかしそれほどナオミの奴に巧く欺されてゐたのかと思ふと、寧ろ欺されても痛快ですな。あんまり技がキレイなんで、唯あつと云つて感心しちまふばかりですな。」

「まるで相撲の手か何かで、スポリと背負ひ投げを喰はされたやうなもんですからね。」

「同感同感、全くお説の通りですよ。——それで何ですか、その連中はみんなナオミに纏弄されて、互ひに知らずにゐたんですか？」

「いや、知つてましたさ、どうかすると一度に二人がカチ合ふことがあつたくらゐです。」

「それで喧嘩にもならないんですか？」

「奴等は互ひに、暗黙のうちに同盟を作つて、ナオミさんを共有物にしてゐたんです。つまり

それからヒドイ仇名が附いちゃつたんで、敵ぢやあみんな、仇名でばかり呼んでましたよ。あなたはその御存知ないから、却つて幸福だつ

たけれど、僕はつくづく淺ましい氣がして、どうかしてナオミさんを救ひ出さうと思つたんで

すが、意見をするつんと怒つて、あべこべに僕を馬鹿にするんで、手の附けやうがなかつたんです。」

濱田もさすがにあの時分のことを想ひ出したのか、感傷的な口調になつて、

「ねえ河合さん、僕はいつぞや『松浅』で目目懸つた時、こんなことまではあなたに云はなかつたでせう。」

「あの時の君の話だと、ナオミを自由にしているものは熊谷だと云ふ——」

「ええ、さうでした、僕はあの時さう云ひました。尤もそれは諛ぢやないので、ナオミさんと熊谷とはガツツな所が性に合つたのか、一番仲好くしてゐました。だから誰よりも熊谷が巨魁だ。悪いことはみんな彼奴が教へるんだと思つたので、ああ云ふ風に云つたのですが、まさかそれ以上は、あなたに云へなかつたんですよ。まだあの時は、あなたがナオミさんを捨てないやうに、そして善良な方面へ導いておやりになるやうにと、祈つてゐたのですから。」

「それが導くどころぢやない、却つて此方が引き摺られて行つちまつたんだから、——」

「ナオミさんに懸つた日には、どんな男でもさうなりませう。」

「あの女には不思議な魔力があるんですね。」

「確かにそれは魔力ですなあ！ 僕もそれを感じたから、もうあの人には近寄るべからず、近寄つたらば此方が危いと悟つたんです。」

ナオミ、ナオミ、——互ひの間にその名が

幾度繰り返されたか知れませんでした。二人はその名を酒の肴にして飲みました。その滑らかな發音を、牛肉よりも一層旨い食物のやうに、舌で味はひ、唾液で紙り、そして唇に上せました。

「だがいいですよ、まあ一遍はああ云ふ女に欺されて見るのも。」

と、私は感愾無量の體でさう云ひました。「そりやさうですとも！ 僕は兎に角あの人のお蔭で初恋の味を知つたんですもの。たとへ僅かの間でも、美しい夢を見せて貰つた、それを思へば感謝しなげりやなりませんよ。」

「だけでも今にどうなるでせう、あの女の身の行く末は？」

「さあ、これからどんどん墮落して行くばかりでせうね。熊谷の話ぢや、マツカネルの所にだつて長く居られる筈はないから、二三日したら、又何處かへ行くだらう、己んところにも荷物があるから来るかも知れないツて云つておましたが、全體ナオミさんは、自分の家がないんでせうか？」

「家は淺草の銘酒屋なんですよ、——彼奴に可哀さうだと思つて、今まで誰にも云つたことはありませんがね。」

「ああ、さうですか、やつぱり育ちと云ふものは争はれないもんですね。」

「ナオミに云はせると、もとは旗本の侍で、自分が生れた時は下二番町の立派な邸に住んでゐた。『奈緒美』と云ふ名はお祖母さんが付けてくれたんで、そのお祖母さんは鹿鳴館時代にダンスをやつたハイカラな人だつたと云ふんですが、それも何處まで本當だか分りやしません。何しろ家庭が悪かつたです、僕も今になつて、しみじみそれを思ひますよ。」

「さう聞くと、尙更恐ろしくなりますなあ、ナオミさんには生れつき淫蕩の血が流れてゐたんで、ああなる運命を持つてゐたんですね、折角あなたに拾ひ上げて貰ひながら、——」

二人はそこで三時間ばかりしゃべりつづけて、戸外へ出たのは夜の七時過ぎでしたが、いつまで立つても話は盡きませんでした。

「濱田君、君は省線で歸りますか？」

と、川崎の町を歩きながら、私は云ひました。「さあ、これから歩くのは大變ですから、——」

「それはさうだが、僕は京濱電車にしますよ、彼奴が横濱にゐるんだとすると、省線の方は危険のやうな気がするから。」

「それぢやあ僕も京濱にしませう。——だけど

もいづれ、ナオミさんはああ云ふ風に四方八方飛び廻つてゐるんだから、きつと何處かで打つかりますよ。」

「さうなつて来ると、うツかり戸外も歩けませぬね。」

「盛んにダンス場へ出入りしてゐるに違ひないから、銀座あたりは最も危険区域ですね。」

「大森だつて危険区域でないこともない、横濱があるし、花月園があるし、例の曙樓があるし、…事に依つたら、僕はあの家を疊んでしまつて下宿生活をするかも知れません。當分の間、此のホトボリが冷める迄は彼奴の顔を見たくないから。」

私は濱田に京濱電車を附き合つて貰つて、大森で彼と別れました。

二十四

私が斯う云ふ孤獨と失戀に苦しめられてゐる際に、又もう一つ悲しい事件が起りました。

と云ふのは外でもなく、郷里の母が腦溢血で突然逝つてしまつたことです。

危篤だと云ふ電報が来たのは、濱田に會つた翌翌日の朝のことで、私はそれを會社で受け取ると、すぐその足で上野へ駈けつけ、日の暮

れ方に田舎の家へ着きました、もうその時は、母は意識を失つてゐて、私を見ても分らないらしく、それから二三時間の後に息を引き取つてしまひました。

幼い折に父を失ひ、母の手一つで育つた私は、「親を失ふ悲しみ」と云ふものを始めて経験した譯です。況んや母と私の仲は世間普通の親子以上であつたのですから。私は過去を回想しても、自分が母に反抗したことや、母が私を叱つたことや、さう云ふ記憶を何一つとして持つてゐません。それは私が彼女を尊敬してゐたせもあるでせうが、寧ろそれより、母が非常に思ひやりがあり、慈愛に富んでゐたからです。よく世間では、息子がだんだん大きくなり、郷里を捨てて都へ出るやうになつてしまふと、親は何かと心配したり、その子の素行を疑つたり、ひはそれが原因で疎遠になつたりするものですが、私の母は、私が東京へ行つてから後も、私を信じ、私の心持ちを理解し、私の爲めを思つてくれました。私

の下に二人の妹があるだけで、總領息子を開放すことは、女親としては淋しくもあり心細くもあつたでせうに、母は一度も愚痴をこぼしたことはなく、常に私の立身出世を祈つて

ゐました。それ故私は、彼女の膝下にゐた時よりも遠く離れてしまつた時に、一層強く、彼女の慈愛のいかに深いかを感じたのです。殊にナオミとの結婚前後、それに引き續いていろいろの我が儘を、母が快く聽いてくれる度毎に、その温情を涙ぐましく思はないことはなかつたのです。

その母親にかうも急激に、思ひがけなく死なれた私は、亡骸の傍に侍りながら夢に夢見る心地でした。つい昨日まではナオミの色香に身をまかせ、魂も狂つてゐた私、そして今では佛の前に跪いて線香を手向けてゐる私、此の二つの「私」の世界は、どう考へても連絡がないやうな気がしました。昨日の私がほんたうの私か、今日の私がほんたうの私か?—歎き、悲しみ、愕きの涙に暮れつつも、自分で自分を省ると、何處からともなくさう云ふ聲が聞えます。

「お前の母が今死んだのは、偶然ではないのだ。母はお前を戒めるのだ、教訓を垂れて下さつたのだ」と、又一方からそんな囁きも聞えて來ます。すると私は、今更のやうに在りし日の母の佛を偲び、濟まない事をしたのを感じて、再び悔恨の涙が堰きあへず、あまり泣くので極まりが悪いので、そつと後ろの裏山へ登つて、

少年時代の思ひ出に充ちた森や、野原や、畑の景色を眺めおろしながら、そこでさめざめと泣きつづけたりますのでした。

此の大いなる悲しみが、何か私を玲瓏たるものに淨化してくれ、心と體に堆積してゐた不潔な分子を、洗ひ清めてくれたことは云ふ迄もありません。此の悲しみがなかつたら、私は或ひは、まだ今頃はあの汚らひしい淫婦のことが忘れられず、失戀の痛手に悩んでゐたでせう。それを思ふと、母が死んだのは矢張り無意義ではないのでした。いや、少くとも、私はその死を無意義にしてはならないのでした。で、その時の私の考へでは、自分は最早や都會の空氣が厭になつた、立身出世と云ふけれども、東京に出て唯徒らに輕佻浮華な生活をするのが立身でもなし、出世でもない。自分のやうな田舎者には結局田舎が適してゐるのだ。自分はこのまま國に引つ込んで、故郷の土に親しまう。そして母親の墓守をしながら、村の人々を相手にして、先祖代代の百姓にならうと、そんな氣持ちにさへなつたのですが、叔父や、妹や、親類の人人の意見では、「それもあんまり急な話だ、今お前さんが力を落すのも無理はないが、さればと云つて男一匹が、母の

死のために大事な未来をむざむざ埋めてしまふでもなからう。誰でも親に死に別れると一時は失望するものだけれど、月日が立てばその悲しみも薄らいで来る。だからお前さんも、さうするならばさうするで、もつとゆつくり考へてからにしたらよからう。それに第一、突然罷めてしまつたんでは會社の方へも悪いだらうから」と云ふのでした。私は「實はそれだけではない、まだみんなには云はなかつたが、女房の奴に逃げられてしまつて、……と、つい口もとまで出ましたけれど、大勢の前で取かしくもあり、ごたごたしてゐる最中なので、それは云はずにしまひました。ナオミが田舎へ顔を見せないことに就いては、病氣だと云つて取り繕つて置いたのです。」そして初七日の法要が済むと、最後の事は、私の代理人として財産の管理をしてゐてくれた叔父夫婦に頼み、兎に角みんなの云ふ言を聽いて一と先づ東京へ出て來ました。

が、會社へ行つても一向面白くありません。それに社内の私の氣受けも、前ほど良くはありません。精勵格勤品行方正で「君子」の仇名を取つた私も、ナオミのことですつかり味噲を附けてしまつて、重役にも同僚にも信用が

なく、甚だしきは今度の母の死去に就いても、それを口實に休むのだらうと、冷やかす者さへあるのです。そんなこんなで私は愈々イヤ氣がさして、二十七日の日に一と晩泊まりで歸省した折、「そのうちに會社を罷めるかも知れない」と、叔父に洩らしたくらゐでした。叔父は「まあまあ」とさう云つて、深くも取り上げてくれないので、又明くる日から濫濫會社へ出ましたけれど、會社にゐる間はまだいいとして、夕方から夜の時間が、どうにも私には過しやうがありません。それと云ふのが、田舎へ引つ込むか、斷然東京に踏み止まるか、その決心がつかまへんから、私は未だに下宿住みをするのでなく、ガランとした大森の家に獨りで寢泊まりをしてゐたのです。

會社が濟むと、私は矢張りナオミに遇ふのが厭でしたから、賑やかな場所は避けるやうにし、京濱電車で眞つ直ぐ大森へ歸ります。そして近所の一品料理か、そばかうどんで翌ばかりの晩飯をたべると、もうそれからは何もする事がありせん。仕方がないから寢室へ上つて布団を被つてしまひますが、その儘すやすや寢られることはめつたになく、二時間も三時間も眼が冴えてゐます。寢室と云ふのは、例の屋根裏

の部屋の中で、そこには今では彼女の荷物が置いてあり、過去五年間の不秩序、放埒、荒色の匂ひが、壁にも柱にも滲み着いてゐます。その匂ひとはつまり彼女の肌の臭ひで、不精な彼女は汚れ物などを洗濯もせずに、丸めて突っ込んで置くものですから、それが今では風通しの悪い室内に籠つてしまつてゐるのです。私は此れでは溜らないと思つて、後にはアトリエのソファアに寝ましたが、それでも容易に寝つかれないことは同じでした。

母が死んでから三週間過ぎて、その年の十二月に這入つてから、私は遂に辭職の決心を固めました。そして會社の都合上、今年一杯で罷めると云ふことに極まりました。尤も此れは誰にも豫め相談をせず、獨りで運んでしまつたので、國の方ではまだ知らないでゐたのですが、さうなつて見ると後一と月の辛抱ですが、私は少し落ち着きました。いくらか心にも餘裕が出来、暇な時には讀書するとか、散歩するとかしましたけれど、しかしそれでも危険區域には、決して近寄りませんでした。或る晩あまり退屈なので品川の方まで歩いて行つた時、時間つぶしに松之助の映畫を見る氣になつて活動小屋に這入つたところが、ちやうどロイド

の喜劇を映してゐて、若い亞米利加の女優たちが殊にビープ・ダニエルなどが現はれて來ると、矢張りいろいろ考へ出されてイケませんでした。「もう西洋の活動寫眞は見ないことだ」と、私はその時思ひました。

すると、十二月の半ばの、或る日曜の朝でした。私が二階に寝てゐると、(私はその頃、アトリエでは寒くなつて來たので、再び屋根裏へ引つ越してゐました。)階下で何かかさかさと云ふ物音がして、人のけはひがするのです。ハテ、をかしいな、表は戸締まりがしてある筈だが、……と、さう思つてゐるうちに、やがて聞き覚えのある足音がして、それがづかづか階段を上つて、私が胸をヒヤリとさせる暇もなく、「今日はア」

と、晴れやかな聲で云ひながら、いきなり鼻先のドアを開けて、ナオミが私の眼の前に立ちました。

「今日はア」

と、彼女はもう一度さう云つて、キョトンとした顔で私を見ました。

「何しに來た？」

私は寢床から起きようとしたもので、静かに、冷淡にさう云ひました、よくもつうづうし

く來られたものだ」と心のうちでは呆れながら。

「あたし?—荷物を取りに來たのよ。」

「荷物は持つて行つてもいいが、お前、何處から這入つて來たんだ。」

「表の月から。—あたしン所に鍵があつたの。」

「ちやあその鍵を置いて行つておくれ。」

「ええ、置いて行くわ。」

それから私は、ぐるりと彼女に背中を向けて黙つてゐました。暫くの間、彼女は私の枕もとでばたばた云はせながら、風呂敷包みを拵へてゐるのでしたが、そのうちにきゅつと帯を解くやうな音がしたので、氣が付いて見ると、彼女は部屋の隅の方の、しかし私の視線の届く場所へやつて來て、後ろ向きになつて、着物を着換へてゐるのです。私はさつき、彼女が此處へ這入つて來た時、早くも彼女の服裝に注意したのですが、それは見覚えのない銘仙の衣類で、而も毎日そればかり着てゐたものか、襟垢が附いて、膝が出て、よれよれになつてゐるのでした。彼女は帯を解いてしまふと、その薄汚ない銘仙を脱いで、此れも汚いメリンスの長襦袢一つになりました。それから、今引き

出した錦紗縮緬の長襦袢を取つて、それをふはりと肩に纏つて、懐中をもくもくさせながら、下に着てゐたメリンスの方を、するすると敷を脱ぐやうに畳の上へ落します。そしてその上へ、好きな衣裳のひとつであつた龜甲餅の大島を着て、紅と白との市松格子の伊達巻を巻いてぎゆうツと胴がくびれるくらゐ固く締め上げ、今度は帯の番かと思ふと、私の方を向き直つて、そこにしゃがんで、足袋を穿き換へるのです。

私は何より、彼女の素足を見せられるのが一番強い誘惑なので、成るべく其方を見ないやうにはしましたけれど、それでもちよいちよい眼を向けないではゐられませんでした。彼女も無論それを意識してやつてゐるので、わざとその足を鱗のやうにくねくねさせながら、時々探りを入れるやうに、私の眼つきにそつと注意を配りました。が、穿き換へてしまふと、脱ぎ捨てた着物をさつさと始末して、

「さよならア」

と云ひながら、戸口の方へ風呂敷包みを引き摺つて行きました。

「おい、鍵を置いて行かないか。」

と、私はその時始めて聲をかけました。

「あ、さうさう、」

と彼女は云つて、手提袋から鍵を出して、「ぢや、此處へ置いて行くわよ。——だけでもあたし、とても一遍ぢや荷物が運びきれないから、もう一度来るかも知れないわよ。」

「來ないでもいい、己の方から淺草の家へ届けやるから。」

「淺草へ届けられちゃ困るわ、少し都合があるんだから。——」

「そんなら何處へ届けたらいいんだ。」

「何處ツであたし、まだ極まつちやあゐないんだけれど、……」

「今月中に取りに来なけりや、己は構はず淺草の方へ届けるからな、——さういつ迄もお前の物を置いとく譯には行かないんだから。」

「ええ、いいわ、直き取りに来るわ。」

「それから、斷つて置くけれど、一遍で運びきれぬやうに車でも持つて、使ひの者を寄越しておくれ、お前自身で取り来ないで。」

「さう、——ぢや、さうします。」

そして彼女は出て行きました。

此れで安心と思つてゐると、二三日過ぎた晩の九時頃、私がアトリエで夕刊を讀んでゐる時、又ガタリと云ふ音がして、表のドアへ誰かが鍵を挿し込みました。

二十五

「誰？」

「あたしよ」

云ふと同時にパタンと戸が開いて、黒い、大きな熊のやうな物體が戸外の闇から部屋へ闖入して來ましたが、忽ちぱつとその黒い物を脱ぎ捨てると、今度は狐のやうに白い肩だの腕だのを露はにした、うすい水色の佛蘭西ちりめん

のドレスを纏つた、一人の見馴れない若い西洋の婦人でした。肉つきのいい項には虹のやうにキラキラ光る水晶の頸飾りをして、眼深に被つた黒天鵝絨の帽子の下には、一種神秘的な感じがするほど恐ろしく白い鼻の尖端と頤の先が見え、生しい朱の色をした唇が、燃えるやうに際立つてゐました。

「今晚はア」

と、さう云ふ聲がして、その西洋人が帽子を取つた時、私は始めて「おや、此の女は？」

とさう思ひ、私からしみじみ顔を眺めてゐるうちに、漸く彼女がナオミであることに気がつきました。かう云ふと不思議なやうですけれども、事實それほどナオミの姿はいつもと變つてゐたのです。いや、姿だけならいくら變つ

ても見違へる筈はありませんが、何よりも先づ私の瞳を欺いたものはその顔でした。いかなる魔法を施したのか、顔がすつかり、皮膚の色から、眼の表情から、輪廓までが變つてゐるので、私はその聲を聞かなかつたら、帽子を脱いだ今になつても、まだ此の女は何處かの知らない西洋人だと思つてゐたかも知れません。次ぎには前にも云ふ通り、その肌の色の恐ろしい白さです。洋服の外へはみ出してゐる豊かな肉體のあらゆる部分が、林檎の實のやうに白いとです。ナオミも日本の女としては黒い方ではありませんでしたが、しかしこんなに白い筈はない。現に殆んど肩の方まで露出してゐる兩腕を見ると、それがどうしても日本人の腕とは信じられない。いつぞや帝劇でバンドマンのオペラがあつた時、私は若い西洋の女優の腕の白さに見惚れたことがあります。いや、あれよりうど此の腕があれに似てゐる、いや、あれより明白いくらゐる感じでした。

するとナオミは、その水色の柔かい衣と頸飾りとをゆりりとさせて、踵の高い、漆のやうな光澤のある、新ダイヤの石を飾つたバテントレザー靴の爪先でチヨコチヨコと歩いて、——ああ、此れが此の間濱田の話したシンデレラの

靴なんだなと、私はその時思ひました。——片手を腰にあてて、肘を張つて、さも得意さうに胸をひねつて奇妙ななを作りながら、啞然としてゐる私の鼻の先へ、いきなり無遠慮に寄つて来たものです。

「讓治さん、あたし荷物を取りに来たのよ。」
「お前が取りに来ないでもいい、使ひを寄越せと云つたぢやないか。」

「だつてあたし、使ひを頼む人がなかつたんだもの。」

さう云ふ間も、ナオミは始終、體をぢつとしてはゐませんでした。顔はむづかしく、眞面目腐つた風をしながら、胸をびたりと喰つ着けて立つて見るとか、片足を一步踏み出して見るとか、踵でコツンと床板を叩いて見るとか、その度毎に手の位置を換へ、肩を聳やかし、恰も全身の筋肉を針線のやうに緊張させ、凡べての部分に運動神経を働かせてゐました。すると私の視覚神経もそれに従つて緊張し出して、彼女の一舉手、一投足、その體中の一寸一寸を、残る限なく見て取らないではゐませんでした。が、よくよくその顔に注意すると、成るほど面變りをしたのも道理、彼女は生え際の髪の毛を、二三寸ぐらゐに短く切つて、一本一本毛の先を

綺麗に揃へて、支那の少女がするやうに、額の方へ暖簾の如く垂れ下げてゐるのです。そして残りの毛髪を一つに纏めて、圓く、平に、顛頂部から耳朶の上へ被らせてゐるのが、大黒様の帽子のやうです。此れは彼女の今迄にない結髪法で、顔の輪廓が別人のやうになつてゐるのは、此のせゐに違ひありません。それから尙も氣を付けて見ると、眉の恰好が又いつもとは異つてゐます。彼女の眉毛は生れつき太く、クツキリとして濃い方であるのに、それが今夜は、細長い、ぼうつと霞んだ弧を描いて、その弧の周圍は青青と刺つてあるのです。此れだけの細工がしてあることは直ぐと私に分りました。魔法の種が分らないのは、その眼と、唇と、肌の色でした。眼玉がこんなに西洋人臭く見えてゐるのは、眉毛のせゐもあらうけれども、まだその外にも何か仕掛けがしてあるらしい。それは大方眼陰と睫毛だ、あすこに何か秘密があるのだ、と、さうは思つても、それがどう云ふ仕掛けであるか判然しません。唇なども、上唇の眞ん中のところ、ちやうど櫻の花瓣のやうに、いやにカツキリと二つに割れてゐて、而もその紅さは、普通の口紅をさしたのとは違つた、生き生きとした自然のつやがある。肌の白さに至

つては、一夜のうちに白哲人種と化したのでもあらうか、いくら視詰めても全く生地の皮膚のやうで、お白粉らしい痕がありません。それに白いのは顔ばかりでなく、肩から、腕から、指の先までがさうなのですから、もしお白粉を塗つたとすれば全身へ塗つてゐなければならぬ。で、この不可解なえたいの分らぬ妖しい少女、——それはナオミであると云ふよりも、ナオミの魂が何かの作用で、或る理想的な美しさを持つ幽霊になつたのぢやないのか知らんかと、私はそんな氣さへしました。

「ねえ、いいでせう、二階へ荷物を取りに行つても? ——」

と、ナオミの幽霊はさう云ひました、が、その聲を聞くや矢張りいつものナオミであつて、確かに幽霊ではありません。

「うん、それはいい、……それはいいが、……」
と、私は明かに慌ててゐたので、少し上ずつた口調で云ひました。

「……お前、どうして表の戸を開けたんだ?」
「どうしてツて、鍵を開けたわ。」
「鍵は此の前、此處へ置いて行つたぢやないか。」

「鍵なんかあたし、幾つもあるわよ、一つツき

りぢやないことよ。」
その時始めて、彼女の紅い唇が突然微笑を浮かべたかと思ふと、媚びるやうな、嘲るやうな眼つきをしました。

「あたし、今だから云ふけれど、合鍵を澤山拵へて置いたの、だから一つづらゐる取られたつて困りやしないわ。」

「けれども己の方が困るよ、さう度度やつて来られちゃ。」
「大丈夫よ、荷物さへすつかり運んでしまへば、来いと云つたつて来やしないわよ。」

そして彼女は、踵でクルリと身を蹴して、トン、トン、トンと階段を昇つて、屋根裏の部屋へ駆け込みました。

……それから一體、何分ぐらゐ立つたでせうか? 私がアトリエのソファに凭れて、彼女が二階から降りて来るのをぼんやり待つてゐた間、……それは五分とは立たない程の間だつたか、或ひは半時間、一時間ぐらゐもさうしてゐたのか? ……私にはどうも此の間の「時の長さ」と云ふものがハッキリしません。私の胸にはただ今夜のナオミの姿が、或る美しい音楽を聴いた後のやうに、恍惚とした快感となつて尾を曳いてゐるだけでした。その音楽は非

常に高い、非常に淨らかな、此の世の外の聖なる境から響いて来るやうなソプラノの唄です。もうさうなると情慾もなく戀愛もありません、……私の心に感じたものは、さう云ふものとは凡そ最も縁の遠い漂渺とした陶酔でした。私は幾度も考へて見ましたが、今夜のナオミは、あの汚らしい淫婦のナオミ、多くの男にヒドイ仇名を附けられてゐる賈春婦にも等しいナオミとは、全く兩立し難いところの、そして私のやうな男はただその前に跪き、崇拜するより以上のことは出来ないところの、貴い憧れの的でした。もしも彼女の、あの眞つ白な指の先がちよつとでも私に觸れたとしたら、私はそれを喜ぶどころか寧ろ戦慄するでせう。その冒瀆に恐れわななき、一瞬のうちに死んでしまふでせう。此の心持ちは何に譬へたら讀者に了解して貰へるか、——まあ云つて見れば、田舎の親父が東京へ出て、或る日偶然、幼い折に家出をした自分の娘と往來で遇ふ。が、娘は立派な都會の婦人になつてしまつて、穢い田舎の百姓を見ても自分の親だとは氣が付かず、親父の方ではそれと氣が付いても、今では身分が違ふために傍へも寄れない、此れが自分の娘だつたかと驚き米れて、取か

しさの餘りコソコソ逃げて行つてしまふ。——その時の親父の、淋しいやうな、有り難いやうな心持ち。それでなければ許嫁の女に捨てられた男が、五年も十年も立つてから、或る日横濱の埠頭に立つと、そこに一艘の商船が着いて、歸朝者の群が降りて来る。そして聞らずもその群の中から彼女を見出す。さては彼女は洋行をして歸つて来たのかとさう思つても、男は最早や彼女に近づく勇氣もない。自分は昔に變らない一介の貧學生、女はと見れば野暮臭い娘時代の儼はなく、巴里の生活、紐育の贅澤に馴れたハイカラな婦人、二人の間には既に千里の差が出来てゐる。——その時の書生の捨てられた自分を我と我が身で蔑むやうな、思ひの外な彼女の出世をせめても己れの喜びとする心持ち。——かう云つてみても、矢張り十分に説き盡してはゐませんけれども、強ひて譬へればさう云つたやうなものでせうか。兎に角今迄のナオミには、いくら拭つても拭ひきれない過去の汚點がその肉體に滲み着いてゐた、然るに今夜のナオミを見るとそれらの汚點は天使のやうな純白な肌へ消されてしまつて、思ひ出すくへ忌まはしいやうな気がしたものが、今はあべこべに、その指先に觸れるだけで勿體

ないやうな感じがする。——これは一體夢でせうか？ さうでなければナオミはどうして、何處からそんな魔法を授かり、妖術を覺えて来たのでせうか！ 二三日前にはあの薄汚い銘仙の着物を着てゐた彼女が……ト、ト、ト、ト、ト、再び威勢よく階段を降りる足音がして、その新ダイヤの靴の爪先が私の眼の前で止まりました。

「讓治さん、二三日うちに又来るわよ。」と、彼女は云ふのです。……眼の前に立つてはゐますけれども、顔と顔とは三尺ほどの間隔を保ち、その清冽な手足は勿論、風のやうに軽い衣の裾をも決して私に觸れようとはしないで、……

「今夜はちよつと本を二三冊取りに来ただけなの。まさかあたしが、大きな荷物を一度に背負つて行かれやしないわ。おまけにこんななりをしてゐて。」

私の鼻は、その時何處かで嗅いだことのあるほのかな匂ひを感じました。ああ此の匂ひ……海の彼方の國や、世にも妙な異國の花園を想ひ出させるやうな匂ひ……此れはいつぞや、ダンスの教授のシユレムスカヤ伯爵夫人……あの人の肌から匂つた匂ひだ。ナオミはあれと

同じ香水を着てゐるのだ……

私はナオミが何と云つても、ただ「うんうん」と頷いただけでした。彼女の姿が再び夜の闇に消えてしまつても、まだ部屋の中に漂ひつつ次第にうすれて行く匂ひを、幻を趁ふやうに鋭い嗅覺で趁ひかけながら……

二十六

讀者諸君、諸君は既に前回迄のいきさつのうち、私とナオミとが間もなく擦りを戻すやうになることを、——それが不思議でも何でもない、當然の成り行きであることを、豫想されただけでありませう。さうして事實、結果は諸君の豫想通りになつたのですが、しかしさうなつてしまふ迄には思ひの外に手数が懸つて、私はいろいろ馬鹿な目を見たり、無駄な骨折りをしてりました。

私とナオミとは、あれから直ちに馴れ馴れしく口を利くやうにはなりました。と云ふのは、あの明くる晩も、その次ぎの晩も、あれからずつと、ナオミは每晚何かしら荷物を取りに来ないことはなかつたからです。來れば必ず二階へ上つて包みを拵へて降りて來ますが、それもほんの申譯の、縮緬の帛紗へ包まるくらゐな

細細した物で、

「今夜は何を取りに来たんだい？」

と尋ねて見ても、

「此れ？ 此れは何でもないの、ちよいとした物のな。」

と、曖昧に答へて、

「あたし、喉が渴いてゐるんだけれど、お茶を一杯飲ましてくれない？」

などと云ひながら、私の傍へ腰かけて、二三十分しやべつて行くと云ふ風でした。

「お前は何處か此の近所にあるのかね？」

と、私は或る晩彼女とテーブルに向ひ合つて、紅茶を飲みながらさう云つたことがありました。

「なぜそんな事を聞きたがるの？」

「聞いたつて差支へないぢやないか。」

「だけれども、なぜよ。——聞いてどうする積りなのよ。」

「どうすると云ふ積りはないさ、好奇心から聞いて見たのさ。——え、何處にあるんだよ？」

「いや、云はないわ。」

「なぜ云はない？」

「あたしは何も、讓治さんの好奇心を満足させ

る義務はないわよ。それほど知りたけりやあたしの跡をつけていらつしやい、秘密探偵は讓治さんのお得意だから。」

「まさかそれほどにたくはないがね、——しかしお前のある所が何處か近所に違ひないとは思つてゐるんだ。」

「へえ、どうして？」

「だつて、毎晩やつて来て荷物を運んで行くぢやないか。」

「毎晩来るから近所にあると限りやしなわ、電車もあれば自動車もあるわよ。」

「ぢや、わざわざ遠くから出て来るのかい？」

「さあ、どうか知ら、——」

さう云つて彼女はハゲラカシてしまつて、

「毎晩来ちやあ悪いツて云ふの？」

と、巧妙に話題を轉じました。

「悪いと云ふ譯ぢやないが、……来るなど云つても構はず押しかけて来るんだから、今更どうも仕方がないが、……」

「そりやあさうよ、あたしは意地が悪いから、来るなど云へば尙来るわよ。——それとも來られるのが恐ろしいの？」

「うん、そりや、……いくらか恐ろしくもない。……」

すると彼女は、仰向きになつて眞つ白な頬を見せ、紅い口を一杯に開けて、俄かにきやツきやツと笑ひこけました。

「でも大丈夫よ、そんな悪い事はしやしないわよ。それよりかもあたし、昔のことは忘れてしまつて、此れから後まただのお友達として、讓治さんと附き合ひたいの。ねえ、いいでしょ？」

それならちつとも差支へないでしょ？」

「それも何だか、考へて見ると妙なもんだよ。」

「何が妙なの？ 昔夫婦でゐた者が、友達になるのがなぜ可笑しいの？ それこそ舊式な、時勢後れの考へぢやなくつて？——ほんたうにあたし、以前のことなんか此れツばかりも思つてゐないのよ。そりや今だつて、若し讓治さんを誘惑する氣なら、此處で直ぐにもさうしてしまふのは譯なしだけれど、あたし誓つて、そんな事はきつとしないわ。折角讓治さんが決心したのに、それをグラツカセちや氣の毒だから。……」

「ぢや、氣の毒だと思つて憐れんでやるから、友達になれと云ふ譯かね？」

「何もさう云ふ意味ぢやないわ。讓治さんだつて憐れまれたりしないやうに、シツカリしてゐればいいぢやないの。」

「ところがそれが怪しいんだよ、今はシツカリしてゐる積りだが、お前と付き合ふとだんだんグラツキ出すかも知れんよ。」

「馬鹿ね、讓治さんは。——それぢや友達になるのはいや？」

「ああ、まあいやだね。」

「いやならあたし、誘惑するわよ。——讓治さんの決心を踏み躪つて、滅茶苦茶にしてやるわよ。」

ナオミはさう云つて、冗談ともつかず、眞面目ともつかず、變な眼つきでニヤニヤしました。

「友達として清く付き合ふのと、誘惑されて又ヒドイ日に遭はされるのと、孰方がよかつて？」

——あたし今夜は讓治さんを脅迫するのよ。」

一體此の女は、どんな積りで己と友達にならうと云ふのかと、私はその時考へました。彼女が毎晩訪ねて来るのは、單に私をからかふだけの興味ではなく、まだ何かしらもうろろみがあるに違ひありません。先づ友達になつて置いて、それから次第に丸め込んで、自分の方から降参をする形式でなく再び夫婦にならうと云ふのか？ 彼女の眞意がさうであるなら、そんな面倒な策略を弄してくれないでも、私は

譯なく同意したでせう。なぜなら私の胸の中には、彼女と夫婦になれるのであつたら決して「いや」とは云へない氣持ちが、もういつの間にかムラムラと燃えてゐたのですから。

「ねえ、ナオミや、ただの友達になつたつて無意味ぢやないか。そのくらゐなら、いっそ元通り夫婦になつてくれないかね。」

と、私は時と場合に依つては、自分の方からさう切り出した方がいいのでした。けれども今夜のナオミの様子では、私が眞面目に心を打ち明けて頼んだところで、手輕に「うん」とは云ひさうもない。

「また讓治さんと夫婦になる？ そんなことは眞つ平御免よ、ただの友達でなければいよいよ。」

と、此方の腹が見えたとなると、いよいよ圖に乗つて茶化すかも知れない。私の折角の心持ちがそんな扱ひを受けるやうでは詰まらなしいし、それに第一、ナオミの眞意が夫婦になると云ふのではなく、自分は何處までも自由の立場にゐて、いろいろの男を手玉に取らう、そして私を手玉の一つに加へてやらうと、さう云ふ魂膽だとすれば、尙更迂濶なことは云へない。現に彼女はその住所をさへハツキリ云はないくらゐだから、今でも誰か男があると思

はなければならぬし、それをそのままずるづるべつたり妻に持つたら、私は又しても憂き目を見るのだ。

そこで私は咄嗟の間に思案をめぐらして、

「では友達になつてもいいよ、脅迫されぢや溜らないから。」

と、此方もニヤニヤ笑ひながらさう云ひました。と云ふのは、友達として付き合つてゐれば、

追ひ追ひ彼女の眞意が分つて来るだらう。そして彼女にまだ少しでも眞面目なところが残つてゐたら、その時始めて此方の胸を打ち明けて、夫婦になるやうに説きつける機會もあるだらうし、今より有利な條件で妻にすることが出来るでもあらうと、私は私で腹に一物あつたらです。

「ぢやあ承知してくれたのね？」

ナオミはさう云つて、擦ぐつたさうに私の顔を覗き込んで、

「だけど讓治さん、ほんたうにただの友達よ。」

「ああ、勿論さ。」

「イヤらしいことなんか、もうお互ひに考へないのよ。」

「分つてゐるとも。——それでなけりやあ己も困るよ。」

「ふん」

と云つて、ナオミは例の鼻の先で笑ひました。こんな事があつてから後、彼女はますます足繁く出入りするやうになりました。夕方會社から歸つて來ると、

「讓治さん」

と、いきなり彼女が燕のやうに飛び込んで來て、

「今夜晩飯を御馳走しない？ 友達ならばそのくらゐの事はしてもいいでしょ。」

と、西洋料理を奢らせて、たらふく喰べて歸つたり、さうかと思ふと雨の降る晩に遅くやつて來て、寢室の戸をトントンと叩いて、

「今晚は、もう寝ちまつたの？——寝ちまつたらば起きないでもいいわ。あたし今夜は泊まる積りでやつて來たのよ。」

と、勝手に隣りの部屋へ這入つて、床を敷いて寝てしまつたり、或る時などは朝起きて見ると、彼女がちゃんと泊まり込んでゐて、ぐうぐう眠つてゐたりすることもありました。そして彼女は二た言目には、「友達だから仕方がないわよ」と云ふのでした。

私はその時分、彼女をつくづく天稟の淫婦であると感したことがありましたが、それはど

う云ふ點かと云ふと、彼女はもともと多情な性質で、多くの男に肌を見せるのを屁とも思はない女でありながら、それだけに又、平素は非常にその肌を秘密にすることを知つてゐて、たとへ僅かな部分でも、決して無意味に男の眼には觸れさせないやうにしてゐたことです。誰にでも許す肌であるものを、不斷は秘し隠しに隠さうとする、——此れは私に云はせると、確かに淫婦が本能的に自己を保護する心理なのです。なぜなら淫婦の肌と云ふものは、彼女に取つて何より大切な「賣り物」であり、「商品」であるから、場合に依つては貞女が肌を守るよりも、一層嚴重にそれを守らねばならない譯で、さうしなければ「賣り物」の値打ちはだんだん下落してしまひます。ナオミは實に此の間の機微を心得てゐて、嘗て彼女の夫であつた私の前では、尙更その肌を押し包むやうにしてみました。が、では絶対に憤し深くなるのかと云ふと、それが必ずしもさうではなく、私があるとなぎと着物を着換へたり、着換へる拍子にするりと襦袢を滑り落して、

「あら」

と云ひながら、兩手で裸體の肩を隠して隣りの部屋へ逃げ込んだり、一と風呂浴びて歸つ

て來て、鏡臺の前で肌を脱ぎかけ、そして始めて氣が付いたやうに、

「あら、讓治さん、そんな所にちやいやけないわ、彼方へ行つてらっしゃいよ。」

と、私を追ひ立てたりするのでした。かう云ふ風にして見せるともなく折折ちらと見せられるナオミの肌の僅かな部分は、たとへば頸の周りとか、肘とか、脛とか、踵とか云ふ程の、ほんのちよつとした片鱗だけではありません。したけれど、彼女の體が前よりも尙つややかに、憎いくらゐるに、美しさを増してゐることは、私の眼には決して見逃せませんでした。私はしばしば想像の世界で、彼女の全身の衣を剥ぎ取り、その曲線を飽かずに眺め入ることを餘儀なくされました。

「讓治さん、何をそんなに見てゐるの？」

と、彼女は或る時、私の方へ背中を向けて着換へながら云ひました。

「お前の體つきを見てゐるんだよ、何だか斯う、先より水水しくなつたやうだね。」

「まあ、いやだ、——レディーの體を見るもんぢやないわよ。」

「見やしないけれど、着物の上からでも大概分るさ。先から出ツ竹だつたけれど、此の頃は又

やないわよ。」

「あら」

と云ひながら、兩手で裸體の肩を隠して隣りの部屋へ逃げ込んだり、一と風呂浴びて歸つ

て來て、鏡臺の前で肌を脱ぎかけ、そして始めて氣が付いたやうに、

「あら、讓治さん、そんな所にちやいやけないわ、彼方へ行つてらっしゃいよ。」

と、私を追ひ立てたりするのでした。かう云ふ風にして見せるともなく折折ちらと見せられるナオミの肌の僅かな部分は、たとへば頸の周りとか、肘とか、脛とか、踵とか云ふ程の、ほんのちよつとした片鱗だけではありません。したけれど、彼女の體が前よりも尙つややかに、憎いくらゐるに、美しさを増してゐることは、私の眼には決して見逃せませんでした。私はしばしば想像の世界で、彼女の全身の衣を剥ぎ取り、その曲線を飽かずに眺め入ることを餘儀なくされました。

「讓治さん、何をそんなに見てゐるの？」

膨れて来たね。」

「ええ、膨れたわ、だんだんお臀が大きいなるわ。だけでも脚はすつきりして、大根のやうぢやなくつてよ。」

「うん、脚は子供の時分から眞つ直ぐだつたね。立つとビタリと喰つ着いたけれど、今でもさうかね。」

「ええ、喰つ着くわ、」
さう云つて彼女は、着物で體を圍ひながらピンと立つて見て、

「ほら、ちゃんと着くわよ。」
その時私の頭の中には、何かの寫眞で覺えのあるロダンの彫刻が浮かびました。

「讓治さん、あなたあたしの體が見たいの？」
「見たければ見せてくれるのかい？」
「そんな譯には行かないわよ、あなたとあたしは友達ぢやないの。——さ、着換へてしまふ迄ちよいと彼方へ行つてらっしゃい。」

そして彼女は、私の背中へ叩きつけるやうにびしやんとドアを締めました。

こんな調子で、ナオミはいつも私の情態を募らせるやうにばかり仕向ける、そして際どい所までおびき寄せて置きながら、それから先へは嚴重な關を設けて、一步も這入らせないので

す。私とナオミとの間にはガラスの壁が立つてゐて、どんなに接近したやうに見えても、實は到底踏えることの出来ない隔たりのある。ウツカリ手出しをしようものなら必ずその壁に突き當つて、いくら焦れても彼女の肌には觸れる譯に行かないのです。時にはナオミはヒヨイとその壁を除けさうにするので、「おや、いいのかな」と思つたりしますが、近寄つて行けば矢張り元通り締まつてしまひます。

「讓治さん、あなた好い兒ね、一つ接吻して上げるわ。」
と、彼女はからかひ半分によくそんなことを云つたものです。からかはれるとは知つてゐながら、彼女が唇を向けて來るので、私もそれを吸ふやうにすると、アハヤと云ふ時その唇は逃げてしまつて、はッと二三寸離れた所から私の口へ息を吹つけ、

「此れが友達の接吻よ。」
と、さう云つて彼女はニヤリと笑ひます。

此の「友達の接吻」と云ふ風變りな挨拶の仕方、——女の唇を吸ふ代りに、息を吸ふだけで満足しなければならぬところの不思議な接吻、——此れはその後習慣のやうになつてしまつて、別れ際などに、

「ちや左様なら、又來るわよ。」
と、彼女が唇をさし向けると、私はその前へ顔を突き出して、恰も吸入器に向つたやうにポカンと口を開きます。その口の中へ彼女がはッと息を吹つ込む、私がそれをすうッとして深く、眼を潰つて、おいしさうに胸の底に嘸み下します。彼女の息は濕り氣を帯びて生温く、人間の肺から出たとは思へない、甘い、花のやうな蒸気がします。

「彼女が私を迷はせるやうに、そつと唇へ香水を塗つてゐたのださうですが、さう云ふ仕掛けがしてあることを無論その頃は知りませんでした。——私は斯う、彼女のやうな妖婦になると、内臓までも普通の女と違つてゐるのぢやないか知らん、だから彼女の體内を通じて、その口腔に含まれた空氣は、ちやうど花園を漕つて來た風のやうに、こんななまめかしい匂ひがするのぢやないか知らん、と、よくさう思ひ思ひしました。そして眼を潰つて、ちつと味はふと、それが單なる空氣であり、水蒸氣でありながら、何だか彼女の肉體の一部であるやうな心地がして、舌や唇で觸られるのと全く同じ觸感を覺え、その軟かいいぶきの中には正しく彼女の生命が通ひ、彼女の心臓から沸き出る血潮が、動悸を打つて流れてゐる

やうに感じたものでした。

私の頭はかうして次第に惑亂され、彼女の思ふ存分に掻き攪られて行きました。私は今では、正式な結婚でなければ厭だの、手玉に取られるだけでは困るのと、もうそんなことを云つてゐる餘裕はなくなりました。いや、正直を云ふと斯うなることは初めから分つてゐた筈なので、若しほんたうに彼女の誘惑を恐れるなら、附き合はなければいゝものを、彼女の眞意を探るためだとか、有利な機会を窺ふためだとか云つたのは、自分で自分を欺かうとする口實に過ぎなかつたのです。私は誘惑が恐い恐いと云ひながら、本音を吐けばその誘惑を心待ちにしてゐたのです。ところが彼女はいつ迄立つてもそのつまらない友達、ツコを繰り返すばかりで、決してそれ以上は誘惑しません。これは彼女がいやが上にも私を焦らす計略だらう、焦らして焦らし抜いて、「時分はよし」と見た頃に突然友達を脱ぎ、得意の魔の手を伸ばすのであらう、今に彼女はきつと手を出す、出さないで済まず女ではない、此方はせいぜい彼女の計略に載せられてやつて、「ちんちん」と云へば「ちんちん」をする、「お預け」と云へば「お預け」をする、何れでも彼女の計文通りの變

當をやつておれば、しまひには獲物に有りつけるだらうと、毎日毎日、鼻をうごめかしておましたが、私の豫想は容易に實現されさうもなく、今日はいよいよ假面を脱ぐか、明日は魔の手が飛び出すかと思つても、その日になると空機一髪と云ふところでスリと逃げられてしまふのです。

さうなるのは私は、今度はほんたうに焦れ出しました。「己は此の通り待ちかねてゐるんだ、誘惑するなら早くしてくれ」と云はぬばかりに、體中に隙を見せたり、弱點をさらけ出したりして、果ては此方からあべこべに誘ひをかけたりました。しかし彼女は一向取り上げてくれな

い、「何よ謙治さん！ それぢや約束が違ふぢやないの。」
と、子供をたしなめるやうな眼つきで、私を叱りつけるのです。
「約束なんかどうだつていい、己はもう……」
「駄目、駄目！ あたしたちはお友達よ！」
「ねえ、ナオミ、……そんなことを云はないで、……お願ひだから、……」
「まあ、うるさいわね！ 駄目だつたら……」
き、その代リキツスして上げるわ。」

そして彼女は、例のは、ツと云ふ息を浴びせて、「ね、いいでしょ？ 此れで我慢しなけりや駄目よ、此れだけだつて友達以上かも知れないけれど、謙治さんだから特別にして上げるんだわ。」

が、此の「特別な愛撫」の手段は、却つて私の神経を異常に刺激する力があつても、決して静めてはくれません。
「奇生！ 今日駄目だつたか、又ゴマかされてしまつたか。」

と、私はますます苛立つて來ます。彼女が、いと風のやうに出て行つてしまふと、暫くの間は何事も手に着かず、自分で自分に腹を立てて、檻に入れられた猛獣の如く部屋の中をウロウロしながら、そこらぢゆうの物を八つ中りに叩きつけたり、破いたりします。

私は實に、此の氣違ひじみた、男のヒステリ 1とも云ふべき發作に悩まされたものですが、彼女の來るのが毎日であるので、發作の方も極まつて一日に一遍づつは起るのでした。おまけに私のヒステリーは普通のそれと性質が違ひ、發作が止んでしまつても、後でケロリと氣が輕くなりはしませんでした。寧ろ氣分が落ち着いて來ると、今度は前よりも一層明瞭に、一層執

拗に、ナオミの肉體の細細した部分がチーツと
思ひ出されました。着換へをした時にちよいと
着物の裾から洩れた足であるとか、息を吹つか
けてくれた時について、二三寸傍まで寄つて來た
唇であるとか、さう云ふものがそれらを実際
に見せられた時より、却つて後になつて一と入
まざまざと眼の前に浮かび、その唇や足の線を
傳はつて次第に空想をひろげて行くと、不思議
や實際には見えなかつた部分までも、恰も種極
を現像するやうにだんだん見え出して、遂には
全く大理石のヴィナスの像にも似たものが、私
の心の闇の底に忽然と姿を現はすのです。私
の頭は天鵝絨の帷で圍まれた舞臺であつて、そ
こに「ナオミ」と云ふ一人の女優が登場します。
八方から注がれる舞臺の照明は、眞暗な中に揺
らいでゐる彼女の白い體だけを、カツキリと強
い圓光を以て包みます。彼女は絶え間なくゆ
らゆらと、霜のやうに冴えた、筋のやうにねつ
とりとした手足を波打たせて踊つてゐますが、
その踊りの意味は外の人には分らないでも、私
にはよく分るのです。私が一心に視詰めてゐ
ると、彼女の肌は燃える光りはいよいよ明るさ
を増して來る、時には私の肩を灼きさうに迫
つて來る、活動寫眞の「大映し」のやうに部分

部分が非常に鮮やかに擴大される、……その
幻影が實感を以て私の官能を脅かす程度
は、本物と少しも變りはなく、物足りないのは
手で觸れることが出來ないといふ一點だけで、
その他の點では本物以上に生き生きとしてゐ
る。あんまりそれを視詰めると、私はしまひに
グラグラと眩暈がするやうな心地を覺えて、體
中の血が一度にかアツと顔の方へ上つて來て、
ひとりでに動悸が激しくなります。すると再
びヒステリーの發作が起つて、椅子を蹴飛ばし
たり、カーテンを引きちぎつたり、花瓶を打つ
壊したりします。
私の妄想は日増しに狂暴になつて行き、眼
を潰りさへすればいつでも暗い眼瞼の蔭にナオ
ミがゐりました。私はよく、彼女の芳はしい息
の匂ひを想ひ出して、虚空に向つて口を開け、
さながら彼女のいぶきを吸ふやうに、はツとそ
の邊の空氣を吸ひました。往來を歩いてゐる時
でも、部屋に蟄居してゐる時でも、彼女の唇が
戀しくなると、私はいきなり天を仰いで、はツ
はツとやりました。私の眼には到る所にナオ
ミの紅い唇が見え、そこらちゆうにある空氣
と云ふ空氣が、みんなナオミのいぶきであるか
と思はれました。つまりナオミは天地の間に充

満して、私を取り巻き、私を苦しめ、私の叫
きを聞きながら、それを笑つて眺めてゐる悪靈
のやうなものでした。
「讓治さんは此の頃變よ、少うしどうかして
るわよ。」
と、ナオミは或る晩やつて來て、さう云ひま
した。
「そりやあどうかしてゐるだらうさ、こんなに
お前に焦らされりやあ、……」
「ふん、……」
「何がふんだい？」
「あたし、約束は嚴重に守る積りよ。」
「いつ迄守る積りなんだい？」
「永久に、」
「冗談ぢやない、かうしてゐると己はだんだん
氣が變になるよ。」
「ぢや、いいことを教へて上げるわ、水道の水
を頭からザツと打つかけるといいわ。」
「おい、ほんたうにお前……」
「又始まつた！ 讓治さんがそんな眼つきをす
るから、あたし尙更からかつてやりたくなるん
だわ。そんなに傍へ寄つて來ないで、もつと離
れていらつしやいよ、指一本でも觸らないやう
にして頂戴よ。」

「ぢやあ仕方がない、友達のキッスでもしておくれよ。」

「大人しくしてゐれば上げてあげるわ、だけでも後で気が變になりやしなくつて？」

「なつてもいいよ、もうそんな事を構つてなんからられないんだ。」

二十七

その晩ナオミは、「指一本でも觸らないやうに」私をテーブルの向う側にかけてさせ、ヤキモキしてゐる私の顔を面白さうに眺めながら、夜遅くまで無駄口を叩いてゐましたが、十二時が鳴ると、

「譲治さん、今夜は泊めて貰ふわよ。」

と、またしても人をはからかふやうな口調で云ひました。

「ああ、お泊まり、明日は日曜で己も一日内にゐるから。」

「だけでも何よ、泊まつたからつて、譲治さんの註文通リにはならないわよ。」

「いや、御念には及ばないよ、註文通リになるやうな女でもないからな。」

「なれば都合が好いと思つてゐるんぢやないの。」

さう云つて彼女は、タスクスと鼻を鳴らして、「さ、あなたから先へお休みなさい、寢語を云はないやうにして。」

と、私を二階へ追ひ立てて置いて、それから隣りの部屋へ這入つて、ガチンと鍵をかけた。

私は勿論、隣りの部屋が氣にかかつて容易に寢つかれませんでした。以前、夫婦でゐた時

分にはこんな馬鹿なことはなかつたんだ、己が斯うして寢てゐる傍に彼女もゐたんだ、さう思ふと、私は無上に口惜しくなりませんでした。

壁一重の向うでは、ナオミが頻りに、——

或ひはわざとさうするのか、——ドタンバタンと、床に地響きをさせながら、布団を敷いたり、

枕を出したり、寢支度をしてゐます。あ、今髪を解かしてゐるな、着物を脱いで寝間着に着換

へてゐるところだなと、それらの様子が手に取るやうに分ります。それからバツと夜具をまく

つたけはひがして、續いてどしんと、彼女の體が布団の上へ打つ倒れる音が聞えました。

「えらい音をさせるなあ、——」

と、私は半ば獨り言のやうに、半ば彼女に聞

えるやうに云ひました。「まだ起きてるの？ 寢られないの？」

と、壁の向うから直ぐとナオミが應じました。「ああ、なかなか寢られさうもないよ、——己

はいろいろ考へ事をしてゐるんだ。」

「うふふふ、譲治さんの考へ事なら、聞かないでも大概分つてゐるわ。」

「だけでも、實に妙なもんだよ。現在お前が此の壁の向うに寢てゐるのに、どうすることも出来な

ないなんて。」

「ちつとも妙なことはないわよ。ずつと昔はさうだつたぢやないの、あたしが始めて譲治さんの所へ来た時分は、——あの時分には今夜のやうにして寢たぢやないの。」

私はナオミにさう云はれると、ああさうだつたか、そんな時代もあつたんだつて、あの時

分にはお互ひに純なものでつたのにと、ホロリとするやうな氣になりましたが、此れは少しも

今の私の愛慾を靜めてはくれませんでした。却つて私は、二人がいかに深い因縁で結び着

けられてゐるかを思ひ、到底彼女と離れられない心持ちを、痛切に感じるばかりでした。

「あの時分にはお前は無邪氣なもんだつたがね。」

「今だつてあたしは至極無邪氣よ、有邪氣なのは譲治さんだわ。」

「何でも勝手に云ふがいいさ、己はお前を何處迄も追つ駆け廻す積りだから。」
「うふふふ」

「おい！」
私はさう云つて、壁をどんと打ちました。

「あら、何するのよ、此處は野中の一軒家ぢやないことよ。何卒お静かに願ひます。」

「此の壁が邪魔だ、此の壁を打つ壊してやりた
いもんだ。」

「まあ騒騒しい。今夜はひどく鼠が暴れる。」
「そりや暴れるとも。此の鼠はヒステリーに
なつてゐるんだ。」

「あたしはそんなお爺さんの鼠は嫌ひよ。」

「馬鹿を云へ、己はぢぢいぢやないぞ、まだや
つと三十二だぞ。」

「あたしは十九よ、十九から見れば三十二の人
はお爺さんよ。悪いことは云はないから、外に
奥さんをお貰ひなさいよ、さうしたらヒステリ
ーが直るかも知れないから。」

ナオミは私が何を云つても、しまひにはもう、
うふうふ笑ふだけでした。そして間もなく、
「もう寝るわよ。」

と、ぐうぐう空軒をかき出しましたが、やが
てほんたうに寝入つたやうでした。

明くる日の朝、眼を覺まして見ると、ナオミ
はしどけない寝間着姿で、私の枕もとに据わ
つてゐます。

「どうした？ 談治さん、昨夜は大變だつたわ
ね。」

「うん、此の頃は、時あんな風にヒステリ
ーを起すんだよ。恐かつたかい？」

「恐かなかつたわ、面白かつたわ、又あんな風
にさせて見たいわ。」

「もう大丈夫だ、今朝はすつかり治まつちま
つた。——ああ、今日は好い天気だなあ。」

「好い天気だから起きたらどう？ もう十時過
ぎよ。あたし一時間も前に起きて、今朝湯に行
つて来たの。」

私はさう云はれて、寝ながら彼女の湯上り
姿を見上げました。一體女の「湯上り姿」と
云ふものは、——その眞の美しさは、風呂か
ら上つたばかりの時よりも、十五分なり二十分
なり、多少時間を置いてからがいい。風呂に漬
かるとどんなに皮膚の綺麗な女でも、一時は肌
が茹り過ぎて、殊に指の先などが赤くふやける
ものですが、やがて體が適當な温度に冷やされ
ると、始めて嬢が固まつたやうに透き徹つて來
る。ナオミは今しも、風呂の歸りに戸外の風に

吹かれて來たので、湯上り姿の最も美しい
瞬間にゐました。その脆弱な、うすい皮膚は、
まだ水蒸氣を含みながら眞つ白に汗え、着物
の襟に隠れてゐる胸のあたりには、水彩畫の繪
の具のやうな紫色の影があります。顔はつや
つやと、セラチンの膜を張つたかの如き光澤を
帯び、ただ眉毛だけがじつとり濡れてゐて、そ
の上にはカラリと晴れた冬の空が、窓を透して
ほんのり青く映つてゐます。

「どうしたんだい、朝ッばらから湯になんぞ這
入つて。」

「どうしたつて大きなお世話よ。——ああ、い
い心持ちだつた。」

と、彼女は鼻の兩側を平手でハタハタと輕
く叩いて、それからぬうツと、顔を私の眼の前
へ突き出しました。

「ちよいと！ よく見て頂戴、髯が生えてる？」

「ああ、生えてるよ。」

「ついでにあたし、床屋へ寄つて顔を剃つて來
ればよかつたつけ。」

「だつてお前は剃るのが嫌ひだつたぢやない
か。西洋の女は決して顔を剃らないと云つて。」

「——」
「だけど此の頃は、亞米利加なんかぢや顔を剃

るのが流行つてゐるのよ。ね、あたしの眉毛を御覽なさい、アメリカの女はこんな工合にみんな眉毛を剃つてゐるから。」

「ははあ、さうか、お前の顔が此の間から面變りがして、眉の形まで逆つちまつたのは、そこをそんな風に剃つてゐるせむか。」

「ええ、さうよ、今頃になつて気が付くなんて、時勢後れね。」

ナオミはさう云つて、何か別な事を考へてゐる様子でしたが、

「譲治さん、もうヒステリーはほんたうに直つて？」

と、ふいとそんなことを尋ねました。

「うん、直つたよ。なぜ？」

「直つたら譲治さんにお願ひがあるの。——此れから床屋へ出かけて行くのは大儀だから、あたしの顔を剃つてくれない？」

「そんな事を云つて、又ヒステリーを起させようツて氣なんだらう。」

「あら、さうぢやないわよ、ほんとに眞面目で頼むんだから、そのくらゐな親切があつてもいいでしょ？ 尤もヒステリーを起されて、怪我でもさせられちゃ大變だけれど。」

「安全剃刀を貸してやるから、自分で剃つたら

いいぢやないか。」

「ところがさうは行かないの。顔だけならいいけれど、頸の周りから、ずうツと肩の後ろの方まで剃るんだから。」

「へえ、どうしてそんな所まで剃るんだ？」

「だつてさうでしょ、夜會服を着れば肩の方まですつかり出るでしょ。——」

そしてわざわざ、肩の肉をちよつとばかり出して見せて、

「ほら、ここいらまで剃るのよ、だから自分ぢや出来やしないわ。」

さう云つてから、彼女は慌てて又その肩をスボリと引つ込めてしまひましたが、毎度してやられる手ではありながら、それが私には矢張り抵抗し難いところの誘惑でした。ナオミの顔が剃りたいのでも何んでもないんだ、己を纏弄するつもりで、湯にまで這入つて來やがつたんだ。——と、さう分つてはゐましたけれども、

兎に角肌を剃らせると云ふのは、今迄にない一つの新しい挑戦でした。今日こそ、うんと近くへ寄つて、あの肌理の細かな、滑らかな皮膚を

みじみと見られる、もちろん觸つてみることも出来る。さう考へただけでも私は、とても彼女の申し出でを斷る勇氣はありませんでした。

ナオミは私が、彼女のために瓦斯焔燻で湯を沸かしたり、それを金盥へ取つてやつたり、安全剃刀のジレットの刃を附け換へたり、いろいろ支度をしてやつてゐる間に、窓のところへ

机を持ち出してその上に小さな鏡を立て、兩足の間に聲をびたんこに落して据わつて、次

ぎには白い大きなタオルを櫛の周りへ巻き着けました。が、私が彼女の棒を水に塗らして、いよいよ剃らうとするとたんに、

「譲治さん、剃つてくれるのはいいけれど、一つ條件があることよ。」

と、云ひ出しました。

「條件？」

「ええ、さう、別にむづかしい事ぢやあないの。」

「どんな事さ？」

「剃るなんて云つてゴマカシて、指で方方摘まんだりしちや厭だわよ、ちつとも肌に觸らないやうにして、剃つてくれないけりや。」

「だつてお前、——」

「何が『だつて』よ、觸らないやうに剃れるぢやないの、シャボンではラシで塗ればいいんだし、剃刀はジレットを使ふんだし、……床屋へ行つても上手な職人は觸りやしないわ。」

「床屋の職人と一緒にきれちやあ遣り切れな
いな。」
「生意氣云つてらあ、實は剃らして貰ひたい癖
に！——それがイヤなら、何も無理には頼まな
いわよ。」

「イヤぢやあないよ。さう云はないで剃らして
おくれよ、折角支度までしちやつたんだから。」
私はナオミの、抜き衣紋にした長い襟足を
視詰めると、さう云ふより外はありませんでし
た。

「ぢや、條件通りにする？」
「うん、する。」

「絶対に觸つちやいけないわよ。」

「うん、觸らない。」
「もしちよつとでも觸つたら、その時直ぐに止
めにするわよ。その左の手を、ちやんと膝の上
に載せていらつしやい。」

私は云はれる通りにしました、そして右の
方の手だけを使つて、彼女の口の周りから剃つ
て行きました。

彼女ほうつとりと、剃刀の刃に撫でられて行
く快感を味はつてゐるかのやうに、瞳を鏡の
面に据ゑて、大人しく私に剃らせてゐました。
私の耳には、すうすうと引く睡いやうな呼吸

が聞え、私の眼には、その頤の下でピクピクし
てゐる頸動脈が見えてゐます。私は今や、長
い睫毛で刺されるくらの彼女の顔に接近しまし
た。窓の外には乾燥し切つた空氣の中に、朝の
光りが朗らかに照り、一つ一つの毛根が数へら
れるほど明るい。私はこんな明るい所で、こ
んなにいつ送も、そしてこんなにも精細に、自
分の愛する女の鼻を凝視したことはめつた
にありません。からして見るとその美しさは
巨人のやうな偉大さを持ち、容積を持つて迫つ
て來ます。その恐ろしく長く切れた眼、立派な
建築物のやうに秀でた鼻、鼻から口へつたがつ
てゐる突元とした二本の線、その線の下に、た
つぷり深く刻まれた紅い唇。ああ、これが「ナ
オミの顔」と云ふ一つの靈妙な物質なのか、此の
物質が己の煩惱の種となるのか。……さう考へ
ると實に不思議になつて來ます。私は思はず
ブラシを取つて、その物質の表面へ、ヤケにシ
ヤボンの泡を立てます。物が、いくらブラシで搔
き廻しても、それは靜かに、無抵抗に、ただ柔か
な弾力を以て動くのみです。

……私の手にある剃刀は、銀色の虫が這ふ
やうにしてなだらかな肌を這ひ下り、その項か
ら肩の方へ移つて行きました。かつぶくのいい

彼女の背中が、眞つ白な牛乳の海のやうに、廣
く、堆く、私の視野に這入つて來ました。一
體彼女は、自分の顔は見えてゐるだらうが、背中が
こんなに美しいことを知つてゐるだらうか？
彼女自身は恐らくは知るまい。それを一番よく
知つてゐるのは私だ、私は嘗て此の背中を、
毎日湯に入れて流してやつたのだ。あの時もち
やうと今のやうにシヤボンの泡を掻き立てなが
ら。……これは私の戀の古蹟だ。私の手が、
私の指が、此の凄麗な雪の上に嬉嬉として戯
れ、此處を自由に、楽しく蹈んだことがあるの
だ。今でも何處かに痕が残つてゐるかも知れな
い。……

「讓治さん、手が顫へるわよ、もつとシツカリ
やつて頂戴。……」
突然ナオミの云ふ聲がしました。私は頭が
ガンガンして、口の中が干涸らびて、奇態に體が
顫へるのが自分でも分りました。はッと思つて、
「氣が逆つたな」と感じました。それを一生懸命に堪へると、急に顔が熱くなつたり、冷めた
くなつたりしました。
しかしナオミのいたづらは、まだこれだけで
は止まないのです。肩がすつかり剃れてしま
ふと、袂をまくつて、肘を高くさし上げて、

「さ、今度は腋の下。」

と云ふのでした。

「え、腋の下？」

「ええ、さう、——洋服を着るには腋の下を刺るもんよ、此處が見えたら失禮ぢやないの。」

「意地悪！」

「どうして意地悪よ、可笑しな人ね。——あたし湯冷めがして来たから早くして頂戴。」

その一刹那、私はいきなり剃刀を捨てて、彼女の肘へ飛び着きました。——飛び着くと云ふよりは噛み着きました。と、ナオミはちやんとそれを豫期してゐたかの如く、直ぐその肘で私をグンと撥ね返しましたが、私の指はそれでも何處かに觸つたと見え、シヤボンでツルリと滑りました。彼女はもう一度、力一杯私を壁の方へ突き除けるや否や、

「何するのよ！」
と、鋭く叫んで立ち上りました。見るとその顔は、——私の顔が眞つ青だつたからでせうが、彼女の顔も——冗談ではなく、眞つ青でした。「ナオミ！ ナオミ！ もうからかふのは好い加減にしてくれ！ よ！ 何でもお前の云ふことは聴き！」
何を云つたか全く前後不覺でした、ただセ

ツカチに、早口に、さながら熱に浮かされた如くしやべりました。それをナオミは、黙つて、まじまじと、棒のやうに突つ立つたまま、呆れ返つたと云ふ風に睨みつけてゐるだけでした。
私は彼女の足下に身を投げ、跪いて云ひました。
「よ！ なぜ黙つてゐる！ 何とか云つてくれ！ 吾なら己を殺してくれ！」
「氣遣ひ！」
「うん、氣遣ひだ、氣遣ひで悪いか。」
「誰がそんな氣遣ひを、相手になんかしてやるもんか。」
「ぢやあ己を馬にしてくれ、いつかのやうに己の背中へ乗つつかつてくれ、どうしても否ならそれだけでもいい！」
私はさう云つて、そこへ四つん這ひになりました。

一瞬間、ナオミは私が事實發狂したかと思つたやうでした。彼女の顔はその時一層、どす黒いまでに眞つ青になり、瞳を据ゑて私を見てゐる眼の中には、殆んど恐怖に近いものがありました。が、忽ち彼女は猛然として、圓太い、大膽な表情を湛へ、どしんと私の背の中へ踏みながら、

「さ、これでいいか。」

と、男のやうな口調で云ひました。

「うん、それでいい。」

「此れから何でも言ふことを聴くか。」

「うん、聴く。」

「あたしが要るだけ、いくらでもお金を出すか。」

「出す。」

「あたしに好きな事をさせるか、——一干渉なんかないか。」

「しない。」

「あたしのことを『ナオミ』なんて呼びつけにしないで、『ナオミさん』と呼ぶか。」

「うん、呼ぶ。」

「きつとか。」

「きつと。」

「よし、ぢやあ馬でなく、人間扱ひにして上げる、可哀さうだから。——」

そして私とナオミとは、シヤボンだらけになりました。……

「……此れで漸く夫婦になれた、もう今度こそ逃がさないよ。」

と、私は云ひました。

「あたしに逃げられてそんなに困った？」
「ああ、困ったよ、一時はとても歸つて来ては
くれないのかと思つたよ。」

「どう？ あたしの恐ろしいことが分つた？」
「分つた、分り過ぎるほど分つたよ。」

「ぢや、さつき云つたことは忘れないわね、何
でも好きにさせてくれるわね。——夫婦と云つ
ても、堅ッ苦しい夫婦はイヤよ、でないとおた
し、又逃げ出すわよ。」

「此れから又『ナオミさん』に『譲治さん』で
行
くんだね。」

「ときどきダンスに行かしてくれませんか？」

「うん、」

「いろいろなお友達と付き合つてもいい？ も
う先のやうに文句を云はない？」

「うん、」

「尤もあたし、まあ、あちゃんとは絶交したのよ。」

「へえ、熊谷と絶交した？」

「ええ、した、あんなイヤな奴はありやしない
わ。——此れから成るべく西洋人と付き合ふの、
日本人より面白いわ。」

「その横濱の、マツカネルと云ふ男かね？」
「西洋人のお友達なら大勢あるわ。マツカネル

だつて、別に怪しい譯ぢやないのよ。」

「ふん、どうだか、——」

「それ、さう人を疑うからいけないのよ、あ
たしが斯うと云つたらば、ちやんとそれをお信
じなさい。よくつて？ さあ！ 信じるか、信
じないか？」

「信じる！」

「まだその外にも証文があるわよ、——譲治
さんは會社を罷めてどうする積り！」

「お前に捨てられちまつたら、田舎へ引つ込ま
うと思つたんだが、もう斯うなれば引つ込ま
ないよ。田舎の財産を整理して、現金にして持
てくるよ。」

「現金にしたらどのくらゐある？」

「さあ、此方へ持つて來られるものは、二三十
萬はあるだらう。」

「それッぽつち？」

「それだけあれば、お前と己と二人ツきりなら
澤山ぢやないか。」

「贅澤をして遊んで行かれる？」

「ソリや、遊んぢやあ行かれないよ。——お前
は遊んでもいいけれど、己は何か事務所でも開
いて、獨立して仕事をやる積りだ。」

「仕事の方へみんなお金を注ぎ込んでちまつちや

イヤだわよ、あたしに贅澤をさせるお金を、別
にして置いてくれなけりや。いい？」

「ああ、いい。」

「ぢや、半分別にして置いてくれる？——三十
萬圓なら十五萬圓、二十萬圓なら十萬圓、——」

「大分細かく念を叩すんだね、」

「ソリやあさうよ、初めに條件を極めて置くの
よ。——どう？ 承知した？ そんなに迄して
あたしを奥さんに持つのはイヤ？」

「イヤぢやないツたら、——」

「イヤならイヤと仰つしやいよ、今のうちなら
どうでもなるわよ。」

「大丈夫だつてば、——承知したつてば、——」

「それからまだよ、——もうさうなつたらこん
な家にはゐられないから、もつと立派な、ハイ
カラな家へ引つ越して頂戴。」

「無論さうする。」

「あたし、西洋人のゐる街で、西洋館に住まひ
たいの、綺麗な寢室や食堂のある家へ這入つて
コックだのボーイを使つて、——」

「そんな家が東京にあるかね？」

「東京にはないけれど、横濱にはあるわよ、横
濱の山手にさう云ふ傳家がちやうど一軒空いて

ゐるのよ、此の間ぢやんと見て置いたの。」
私は始めて彼女に深いたくらみがあつたのを知りました。ナオミは最初からさうする積りで、計畫を立てて、私を釣つてゐたのです。

二十八

さて、話は此れから三四年の後のことになりまして、

私たちは、あれから横濱へ引き移つて、かねてナオミの見つけて置いた山手の洋館を借りましたけれども、だんだん贅澤が身に沁みるに従ひ、やがてその家も手狭だと云ふので、間もなく本牧の、前に瑞西の家族が住んでゐた家を、家具ぐるみ買つて、そこへ這入るやうになりました。あの大地震で山手の方は残らず焼けてしまひましたが、本牧は助かつた所が多く、私の家も壁に龜裂が出来たぐらゐで、殆んど此れと云ふ損害もなしに済んだのは、全く何が仕合せになるか分りません。ですから私たちは、今でもずつと此の家に住んでゐる譯なのです。

私はその後、計畫通り大井町の會社の方は辭職をし、田舎の財産は整理してしまつて、學校時代の二三の同窓と、電気機械の製作販賣を目的とする合資會社を始めました。此の會社は、

私が一番の出資者である代りに、實際の仕事は友達がやつてくれてゐるので、毎日事務所へ出る必要はないのですが、どう云ふ譯か、私が一日家にゐるのをナオミが好まないもので、それから、イヤイヤながら日に一遍は見廻ることにしてあります。私は朝の十一時頃に、横濱から東京に行き、京橋の事務所へ二時間顔を出して、大概夕方四時頃には歸つて來ます。

昔は非常な朝勉家で、朝は早起きの方でしたけれども、此の頃の私は、九時半か十時でなければ起きません。起きると直ぐに、寢間着のまま、そつと爪先で歩きながら、ナオミの寢室の前に行つて、靜かに扉をノックします。しかしナオミは私以上に寢坊ですから、まだその時は夢現で、

「ふん」と、微かに答へる時もあり、知らずに寢てゐる時もあります。答があれば私は部屋へ這入つて行つて、挨拶をし、答へがなければ扉の前から引き返して、そのまま事務所へ出かけるのです。

かう云ふ風に、私たち夫婦はいつの間にか、別別の部屋へ寢るやうになつてゐるのですが、もとはと云ふと、此れはナオミの發案でした。

婦人の閨房は神聖なものである、夫と雖も妾に犯すことはならない、——と、彼女は云つて、廣い方の部屋を自分が取り、その隣りにある狭い方を私に、廣い方の部屋にあてがひました。さうして隣り同志とは云つても、二つの部屋は直接つながつてはゐないのでした。その間に夫婦専用の浴室と便所が挟まつてゐる、つまりそれだけ、互ひに隔たつてゐる譯で、一方の室から一方へ行くには、そこを通り抜けなければなりません。

ナオミは毎朝十一時過ぎまで、起きるでもなく睡るでもなく、寢床の中でうつらうつらと、煙草を吸つたり新聞を讀んだりしてゐます。煙草はデイトリノの細巻、新聞は都新聞、それから雑誌のクラシックやウオーグを讀みます。

いや、讀むのではなく、中の寫眞を、——主に洋服の意匠や流行を、——一枚一枚丁寧に眺めてゐます。その部屋は東と南が開いて、エランダの下に直ぐ本牧の海を控へ、朝は早くから明るくなります。ナオミの寢臺は、日本間ならば二十畳も敷けるくらゐな、廣い室の中央に据ゑてゐるのですが、それも普通の安い寢臺ではありません。或る東京の大使館から賣り物に出た、天蓋の附いた、白い、紗のやうな軟の

垂れてゐる寢臺で、此れを買つてから、ナオミは一層寢心地がよいのか、前よりもなほ床離れが悪くなりました。

彼女は顔を洗ふ前に、寢床で紅茶とミルクを飲みます。その間にアマが風呂場の用意をします。彼女は起きて、眞つ先きに風呂へ這入り、湯上りの體を又暫く横たへながら、マツサーヂをさせます。それから髪を結び、爪を研ぎ、七つ道具と云ひますが中中七つどころではない、何十種とある薬や器具で顔ちゆうをいぢくり廻し、着物を着るのに彼れか此れかと迷つた上で、食堂へ出るのが大概一時半になります。

午飯をたべてしまつてから、晩まで殆んど用はありません。晩にはお客に呼ばれるか、或ひは呼ぶか、それでなければホテルへダンスに出かけるか、何かしないことはないのですから、その時分になると、彼女はもう一度お化粧をし、着物を取り換へます。夜會がある時は殊に大變で、風呂場へ行つて、アマに手傳はせて、體ちゆうへお白粉を塗ります。

ナオミの友達をよく變りました。濱田や熊谷はあれからふつり出入りをしなくなつてしまつて、一頃は例のマツカネルがお氣に入りのやうでしたが、間もなく彼に代つた者は、デユガ

ンと云ふ男でした。デユガンの次ぎには、ユスタスと云ふ友達が出来ました。此のユスタスと云ふ男は、マツカネル以上に不愉快な奴で、ナオミの御機嫌を取ることが實に上手で、一度私は腹立ち紛れに、舞踏會の時此奴を打ん殴つたことがあります。すると大變な騒ぎになつて、ナオミはユスタスの加勢をして「氣違ひ！」と云つて私を罵る。私はいよいよ猛り狂つて、ユスタスを追ひ廻す。みんなが私を抱き止めて「チヨーヂ！チヨーヂ！」と大聲で叫ぶ。——私の名前は譚治ですが、西洋人は「Tony」の積りで「チヨーヂ」「チヨーヂ」と呼ぶのです。——そんなことから、結局ユスタスは私の家へ来ないやうになりましたが、同時に私も、又ナオミから新しい條件を持ち出され、それに服従することになつてしまひました。

ユスタスの後にも、第二第三のユスタスが出来たことは勿論ですが、今では私は、我ながら不思議に思ふくらゐ大人しいものです。人間と云ふものは一遍恐ろしい目に會ふと、それが存道觀念になつて、いつ迄も頭に残つてゐると見え、私は未だに、嘗てナオミに逃げられた時の、あの恐ろしい經驗を忘れることが出来なのです。「あたしの恐ろしいことが分つたか」と、さう云つた彼女の言葉が、今でも耳にこびり着いてゐるのです。彼女の浮氣と我が儘とは昔から分つてゐたことで、その缺點を取つてしまへば、彼女の値打ちもなくなつてしまふ。浮氣な奴だ、我が儘な奴だと思へば思ふほど、一層可愛さが増して来て、彼女の罫に陥つてしまふ。ですから私は、怒れば尙更自分の負けになることを、悟つてゐるのです。

自信がなくなると仕方がないもので、目下の私は、英語などでも到底彼女には及びません。實地に附き合つてゐるうちに自然と上達したのでせうが、夜會の席で婦人や紳士に愛嬌を振りまきながら、彼女がべらべらまくし立てるのを聞いてゐると、何しろ發音は昔から巧かつたのですから、變に西洋人臭くつて、私には聞きとれないことがよくあります。さうして彼女は、ときどき私を西洋流に「チヨーヂ」と呼びます。

今日になつて、唯一つ、私が後悔してゐることは、何でも彼でも「西洋西洋」で、彼女を餘りハイカラに育ててしまつたことです。さうしなかつたら、私はもう少し、彼女の我が儘を抑へることが出来たでせう。それに日本の「西洋流」は、寧ろ「亞米利加流」なので、レディーに對する

禮儀作法が、下らないことに逆やかましく、ナオミがそれを一何處からか覺えて來て、私に實行させるのには、全く閉口してしまひます。かうなつたのも勿論私の責任なのではありませんが。……

此れで私たち夫婦の記録は終りとします。此れを読んで、馬鹿馬鹿しいと思ふ人は笑つて下さい。教訓になると思ふ人は、いい見せしめにして下さい。私自身は、ナオミに惚れてゐるのですから、どう思はれても仕方がありません。

ナオミは今年二十三で、私は三十六になります。

もう彼れ此れ二十年ばかりも前にならう。津く私が多ぐらゐで、鵜殿町二丁目の家から水天宮裏の有馬學校へ通つて居た時分——櫻が咲いて空が霞んで人形町通りの紺暖簾にほかほかと日があたつて、取り止めのない夢のやうな幼心にも何となく春が感じられる陽氣な時候の頃であつた。

或るうらうらと晴れた日の事、眠くなるやうな午後後の授業が済んで畢だらけの手に算盤を抱へながら學校の門を出ようとすると、
「萩原の榮ちゃん。」

と、私の名を呼んで後からばたばたと追ひ縫つた者がある。其の子は同級の鳩信一と云つて入學した當時から尋常四年の今日まで附添ひ人の女中を片時も側から放した事のない評判の意氣地なし誰も彼も弱蟲だの泣き蟲だのと悪口をきいて遊び相手になる者のない坊ちやんであつた。

「何か用かい。」
珍らしくも信一から聲をかけられたのを不思議

議に思つて、私は其の子と附添ひの女中の顔をしげしげと見守つた。

「今日あたしの内へ来て一緒に遊びな。内のお庭でお稻荷様のお祭があるんだから。」

緋の打紐で括つたやうな口から、優しい、おづおづした聲で云つて、信一は訴へるやうな眸をした。いつも一人ぼつちでいぢけて居る

子が、何でこんな意外な事を云ふのやら、私は少しうろたへて、相手の顔を読むやうにぼんやり立つた儘であつたが、日頃は弱蟲だの何だのと悪口を云つていぢめ散らしたやうなもの、かうやつて眼の前に置いて見ると、有繋良

家の子息だけに氣高く美しい所があるやうに思はれた。絲織の筒袖に博多の献上の帯を締め、黄八丈の羽織を着てきやらこの白足袋に雪駄を穿いた様子が、色の白い瓜實顔の面立とよく似合つて、今更品位に打たれたやうに、私はうつとりとして了つた。

「ねえ、萩原の坊ちやん、内の坊ちやんと御一緒に遊びなさいませ。實は今日手前共にお祭がございましてね、あの成る可く大人しいお可愛らしいお友達を誘つてお連れ申すやうにお母様のお云ひ附けがあつたものですから、それで坊ちやんがあなたをお誘ひなさるのでございませよ。ね、いらしつて下さいませ。それともお嬢でございませうか。」

「ああ、それぢや左様なら。」
かう云つて、私は子供の方を向いてなつかしさに挨拶をしたが、信一は例の品のある顔を

「そんなら一旦内へ歸つて、斷つてから遊びに行かう。」
と、わざと殊勝らしい答をした。

「おやさうでございましたねえ。ではあなたのお家までお供して參つて、お母様に私からお願ひ致しますせうか、さうして手前共へ御一緒に參りませう。」

「うん、いいよ。お前所は知つて居るから後から一人でも行けるよ。」

「さうでございませうか。それではきつとお待ち申しますよ。お歸りには私がお宅までお送り申しますから、御心配なさらないやうにお家へ斷つていらつしやいませ。」

「ああ、それぢや左様なら。」
かう云つて、私は子供の方を向いてなつかしさに挨拶をしたが、信一は例の品のある顔を

にこりとみさせず、唯鷹揚にうなづいただけであつた。

今日からあの立派の子供と仲好しになるのかと思ふと、何となく嬉しい氣持がして、日頃遊び仲間のお屋の幸吉や船頭の鐵公などに見付からぬやうに急いで家へ歸り、盲編の學校着を對の黄八丈の不斷着に着更へるや否や、「お母さん、遊びに行つて来るよ。」と、雪駄をつツかかながら格子先に云ひ捨て、其の儘塙の家へ駈け出して行つた。

有馬學校の前から真直ぐに中之橋を越え、濱町の岡田の堀へついで中洲に近い河岸通りへ出た所は、何となくさびれたやうな閑靜な一廓をなして居る。今はなくなつたが新大橋の袂から少し手前の右側に名代の團子屋と煎餅屋があつて、其のすぢ向うの角の、長い長い塙を繞らした嚴めしい鐵格子の門が塙の家であつた。前を通るとこどももした邸内の植込込みの青葉の隙から破風型の日本館の瓦が斑鼠色に輝き、其の後に西洋館の緋紅緋色の煉瓦がちらちら見えて、いかにも物持ちの住むらしい、奥床しい構へであつた。

成る程其の日は何か内にお祭りでもあるらしく、陽氣な馬鹿囃しの太鼓の音が塙の外に洩れ、

開放された横町の裏木戸からは此の界限に住む貧乏人の子供達が多勢ぞろぞろ庭内に入つて行く。私は表門の番人の部屋へ行つて信一を呼んで貰はうかと思つたが、何となく恐ろしい氣がしたので、其の子供達と同じ様に裏木戸の藩りを抜けて構への中へ入つた。

何と云ふ大きな屋敷だらう。かう思つて私は飄箏形をした池の汀の芝生に亘んでひろいひろい庭の中を見廻した。周延が描いた千代田の大輿と云ふ三枚續きの繪にあるやうな遣り水、築山、雪見燈籠、溜り物の鶴、洗ひ石などがお誂へ向きに配置されて、水のほとりの伽藍石から幾個も幾個も飛び石が長く續き、遙向うに御殿のやうな座敷が見えてゐる。彼處に信一が居るのかと思ふと、もうとても今日は會へないやうな氣がした。

多勢の子供達は毛氈のやうな青草の上を踏んで、のどかな暖かい日の下に遊んで居る。見ると綺麗に飾られた庭の片隅の稲荷の祠から裏の木戸口まで一間置き位に地口の行燈が並び、接待の甘酒のおでんだの汁粉だのの屋臺が處處に設けられて、餘興のお神樂や子供供力のみまはりには山のやうに人が集まつてゐる。折角楽しみにして遊びに来たかひもなく、何だかが

つかりして私はあてもなく、其處らを歩き廻つた。「兄さん、さあ甘酒を飲んでおいで、お錢は要らないんだよ。」

甘酒屋の前へ來ると赤い襟をかけた女中が笑ひながら聲をかけたが、私はむづかしい顔をして其處を通り過ぎた。やがておでん屋の前へ來ると、また、「兄さん、さあおでんを食べておいで、お錢がなくても上げるんだよ。」

と、頭の乗けた翁に聲をかけられる。「いらぬよ、いらぬよ。」と、私は情ない聲を出して、あきらめたやうに裏木戸へ引き返さうとした時、紺の法被を着た酒臭い息の男が何處からかやつて來て、「兄さん、お前はまだお菓子を貰はねえんだらう。歸るんならお菓子を貰つて歸りな。さ、此れを持って彼處の御座敷の小母さんの處へ行くとお菓子をくれるから、早く貰つて來るがいい。」

かう云つて眞紅に染めたお菓子の切符を渡してくれた。私は悲しさが胸へこみ上げて來たが、若しや座敷の方へ行つたら信一に會へるか知らんと思ひ、云はれる儀に切符を貰つて又庭の中

を歩き出した。

「幸ひと其れから間もなく附添ひの女中に見附けられて、

「坊ちゃん、よくいらして下さいました。もう先きからお待ち兼ねでございますよ。さあ彼方へいらつしやいませ。かう云ふ卑しい子供達の中で遊びになつてはいけません。」

と、親切に手を握られ、私は思はず涙ぐんで、直ぐには返事が出来なかつた。

床の高い、子供の丈ぐらゐ有りさうな縁に沿うて、庭に突き出た廣い座敷の蔭へ廻ると、十坪ばかりの中庭に、萩の袖垣を結び繞らした小座敷の前へ出た。

「坊ちゃん、お友達がいらつしやいましたよ。」

青柳の木立の下から女中が呼び立てると、障子の蔭にばたばたと小刻みの足音がして、

「此方へお上んな。」

と甲高い聲で怒鳴りながら、信一が縁側へ駈けて来た。あの臆病な子が、何處を押しせばこんな元氣の好い聲が出るのだらうと、私は不思議に思ひながら、見違へる程盛装した女の様子をまぶしさうに見上げた。黒羽二重の髪斗目の紋附に羽織袴を着けて立つた姿は、縁側一杯に照らす麗かな日をまともに浴びて黒い七子の羽

織地が銀沙のやうにきらきら光つて居る。

友達に手をひかれて通されたのは八疊ばかりの小綺麗な座敷で、餅菓子の折の底を嗅ぐやうな甘い香り部屋の中に漂ひ、ふくよかな八反の座蒲團が二人待ち顔に敷かれてあつた。直ぐにお茶だのお菓子だのお強飯に口取りを添へた溜塗の高臺だのが運ばれて、

「坊ちゃん、お母様がお友達と仲よくこれを召し上げるやうにつて。：：それから今日は好いお召を召していらつしやるんですから、あんまりお徒をなさらないやうに大人しくお遊びなさいましよ。」

と、女中は遠慮して居る私に赤飯やきんとんを進めて次へ退つて了つた。

物静かな、日あたりの好い部屋である。燃えやうな障子の紙に縁先の木蓮の影が映つて、遙に庭の方から、てん、てん、てん、とお和樂の太鼓の音が子供達のがやがや云ふ騒ぎに交つて響いて来る。私は遠い不思議な國に來たやうな氣がした。

「信ちゃん、お前はいつも此のお座敷にゐるのかい。」

「ううん。此處は本當は姉さんの所なの、彼處にいろんな面白い姉さんの玩具があるから、見

せてあげようか。」

かう云つて信一は地袋の中から、奈良人形の狸狸や、木目込み細工の尉と姥や、西京の芥子人形、伏見人形、伊豆藏人形などを二人のまはりへ綺麗に列べ、さまざまの男女の姿をした首人形を二層程の臺の目へ敷知れず挿し込んで見せた。二人は蒲團へ腹這ひになつて、髯を生やしたり、眼をむきだしたりして居る巧緻な人形の表情を覗き込むやうにした。さうして

「まだここに繪草紙が澤山あるんだよ。」

と、信一は又袋戸棚から、半四郎や菊之丞の似顔繪のたたらに一杯詰まつて居る草雙紙を引き擦り出して、色色の繪本を見せてくれた。

何十年経つたか判らぬ木版刷の極彩色が、光澤も褪せないで鮮かに匂つてゐる美濃紙の表紙を開くと、儼然いヶバケバの立つて居る紙の面に、舊幕時代の美しい男女の姿が生き生きとした目鼻立ちから細かい手足の指先まで、さながら動き出すやうに描かれてゐる。丁度此の屋敷のやうな御殿の奥庭で、多勢の腰元と一緒に

お姫様が盛を追つて居るかと思へば、淋しい橋の袂で深編笠の侍が下郎の首を打ち落し、死骸の懷中から奪ひ取つた文箱の手紙を、月に

かざして讀んで居る。其の次には黒装束に覆面の曲者がお扇の中へ忍び込んで、ぐつすり裏で居る椎茸髷の女の喉元へ蒲團の上から刀を突き通して居る。又ある所では行燈の火影かすかな一と問の中に、濃艶な寝巻姿の女が血のしたたる剃刀を口に咬へ、虚空を掴むで足許に斃れて居る男の死に驚をぢるりと眺めて、「さまを見やがれ」と云ひながら立つて居る。信一も私も一番面白がつて見たのは奇怪な殺人の光景で、眼珠が飛び出して居る死人の顔だの、脚斬りにされて腰から下だけで立つて居る人間だの、眞黒な血痕が雲のやうに斑をなして居る不思議な圖面を、夢中になつて覗き込んで居ると、

「あれ、また信ちゃんは人の物を徒らして居るんだね。」
 から云つて、友禪の振袖を着た十三四の女の子が襖を開けて駆込んで来た。額のかつまつた、眼元口元の凜凜しい顔に子供らしい怒りを含んで、つツと立つた儘弟と私の方をきりきり睨め付けて居る。信一は一と縮みに縮み上つて着くなるかと思ひの外、
 「何云つてなんだい。徒らなんかしやしないよ。お友達に見せてやつてるんぢやないか。」

と、まるで取り合はないで、姉の方を振り向きもせずに繪本を繰つて居る。
 「徒らしない事があるもんか。あれ、いけないつてばさ。」

「ばたばたと姉は駆け寄つて、見て居る本を引つたくらうとしたが、信一もなかなか放さない。表紙と裏とを雙方が引張つて綴ぢ目の所が今にも裂けさうになる、暫くさうして睨み合つて居たが、

「姉さんのけちんぼ! もう借りるもんかい。」
 と、信一はいきなり本をたたき捨てて、有り合ふ奈良人形を姉の顔へ投げ付けたが、狙ひが外れて床の間の壁へ衝つた。

「それ御覽な、そんな徒らをするぢやないか。——またあたしを打つんだね。いいよ、打つたら澤山お打ち。此の間もお前のお蔭で、こら、こんなに悲になつて未だ消えやしない。これをお父様に見せて云つつけてやるから覺えておいで。」

恨めしさうに涙ぐみながら、姉は縮緬の裾をまくつて、前白な右胸の腕に印せられた悲の痕を見せた。丁度膝頭のあたりからふくら脛へかけて、血管が青く透いて見える薄い柔い肌の上を、紫の斑點がぼかしたやうに傷傷しく

濁染んでゐる。

「云つつけるなら勝手においひつけ。けちんぼ、けちんぼ。」
 信一は人形を足で滅茶滅茶に蹴倒して、

「お庭へ行つて遊ばう。」
 と、私を連れて其處を飛び出してしまつた。

「姉さんは泣いて居るか知ら。」
 戸外へ出ると、氣の毒なやうな悲しいやうな氣持になつて私は尋ねた。

「泣いたつていいんだよ。毎日喧嘩して泣かしてやるんだ。姉さんたつて彼れはお妾の子なんだもの。」

こんな生意氣な口をきいて、信一は西洋館と日本館の間にある櫺や櫺の大木の蔭へ歩いて行つた。其處は繁茂した老樹の枝がこんもりと日を遮つて、じめじめした地面には青苔が一面に生え、暗い肌寒い氣流が二人の襟元へしみ入るやうであつた。大方古井戸の跡でもあらう、沼とも池とも付かない濁つた水溜りがあつて、水草が緑青のやうに浮いて居る。二人は其の溜へ腰を下ろして、濕っぽい土の匂を嗅ぎながらぼんやり足を投げ出して居ると、何處からともなく幽玄な、微妙な奏樂の響が洩れて来た。
 「あれは何だらう。」

かう云ひながらも、私は油断なく耳を傾けた。

「あれは姉さんがピアノを弾いて居るんだよ。」

「ピアノって何だい。」

「オルガンのやうなものだつて、姉さんがさう云つたよ。異人の女が毎日あの西洋館へ来て姉さんに教へてやつてるの。」

かう云つて信一は西洋館の二階を指した。肉色の布のかかつた窓の中から絶えず洩れて来る不思議な響き……或る時は森の奥の妖魔が笑ふ木霊のやうな、或る時はお伽噺に出て来る侏儒共が多勢揃つて踊るやうな、幾千の細かい想像の綾糸で、幼い頭へ微妙な夢を織り込んで行く不思議な響は、此の古治の水底で奏でるのかとも疑はれる。

奏樂の音が止んだ頃、私はまだ消えやらぬ *orchestra* の快感の尾を心に曳きながら、今にあの窓から異人や姉嬢が顔を出しはすまいかと思ひ憧れてちつと二階を覗つめた。

「信ちゃん、お前は彼處へ遊びに行かないのかよ。」

「ああ、徒らをしていけないつて、お母さんがどうしても上げてくれないの、いつかそつと行つて見ようとしたら、錠が下りて居てどうして

も開かなかつたよ。」

信一も私と同じやうに好奇心な眼つきをして二階を見上げた。

「坊ちゃん、三人で何かして遊びませんか。」

ふと、かう云ふ聲がして後から駆けて来た者がある。其れは同じ有馬學校の一二年生の生徒で名前こそ知らないが、毎日のやうに年下の子供をいぢめて居る名代の俄鬼大將だから類はよく覚えて居た。どうして此奴がこんな處へやつて来たのだらうと、訝りながら黙つて様子を見て居ると、其の子は信一に仙吉仙吉と呼び捨てにされながら、坊ちゃん坊ちゃんと御機嫌を取つて居る。後で聞いて見れば塙の家の馬丁の子であつたが、其の時私は、猛獸遣ひのチャリネの美人を見るやうな眼で、信一を見ない譯には行かなかつた。

「そんなら三人で泥坊ごっこしよう。あたしと榮ちゃんがお巡查になるから、お前は泥坊におんなな。」

「なつてもいいけれど、此の間見たいに非道い亂暴をしつこなしですよ。坊ちゃんは綱で縛つたり、鼻糞をくつつけたりするんだもの。」

此の問答をきいて、私は愈驚いたが、可愛らしい女のやうな信一が、荒くれた熊のやうな

仙吉をふん縛つて苦しめて居る光景を、どう考へて見ても實際に想像することが出来なかつた。

やがて信一と私は巡查になつて、沼の周囲や木立の間を縫ひながら盗賊の仙吉を追ひ廻したが、此方は二人でも先方は年上だけに中捕まらない。漸くの事、西洋館の裏手の塙の隅にある物置小屋まで追ひ詰めた。

二人はひそひそ示し合せて、息を殺し、聲音を忍ばせ、そうつと小屋の中へ入つた。併し仙吉は何處へ隠れたものか姿が見えない。さうして押し漬だの棘味だの醤油梅だの咽せ返るやうな古臭い匂が、薄暗い小屋の中にこもつて、わらち蟲がぞろぞろと蜘蛛の巣だらけの屋根裏や櫛の周圍に這つて居る有様が、何か不思議な面白い徒らを幼い者にそそのかすやうであつた。すると何處やらでくすくすと忍び笑ひをするのが聞えて、忽ち梁に吊るしてあつた用心籠がめりめりと鳴るかと思ふと、其處から「わあ」と云ひながら仙吉の顔が現れた。

「やい、下りて来い。下りて来ないに非道い目に會はせるぞ。」

信一は下から怒鳴つて、私と一緒に籠で顔

「さあ来い。誰でも傍へ寄ると小便をしつかけるぞ。」

仙吉が籠の上から、あはや小便をたれさうにしたので、信一は用心籠の真下へ廻り、有り合ふ竹竿で籠の目から仙吉の髻だの足の裏だの、所嫌はずつつ突き始めた。

「さあ、此れでも下りないか。」

「あいた、あいた。へい、へい、もう下りますから御免なさい。」

悲鳴を揚げてあやまりながら、痛む節節を抑へて下りて来た奴の胸ぐらを取つて、

「何處で何を盗んだか、正直に白状しろ。」

と、信一が出鱈目に訊問を始める。仙吉は又、やれ白木屋で反物を五反取つたの、にんべんで鱈節を盗んだの、日本銀行でお札をごまかしたのと、出鱈目ながら生意氣な事を云つた。

「うん、さうか、太い奴だ。まだ何か悪い事をしたらう。人を殺した覚えはないか。」

「へいございませす。熊谷土手で按摩を殺して五十兩の財布を盗みました。さうして其のお金で吉原へ参りました。」

緞帳芝居か覗き機巧で聞いて来るものと見えて、如何にも當意即妙の返答である。

「まだ其の外にも人を殺したらう。よし、よし、

云はないな。云はなければ拷問にかけてやる。」
「もう此れだけでございませすから、勘忍しておくんない。」

信一は、手を合せて拜むやうにするのを耳にかけず、素早く仙吉の締めて居る薄襪の淺黄の唐縮緬の兵児帯を解いて後手に縛り上げた上、其のあまりで兩脚の踝まで器用に括つた。それから仙吉の髪を引張つたり、頬べたを摘まみ上げたり、眼瞼の裏の紅い處をひつくりかへして白眼を出させたり、耳朶や唇の端を掴んで振つて見たり、芝居の子役か雛妓の手のやうなきやしゃな青白い指先が狡猾に働いて、肌理の粗い黒く醜く肥えた仙吉の顔の筋肉は、ゴムのやうに面白く伸びたり縮んだりした。其れにも飽きると、

「待て、待て、貴様は罪人だから顔に入墨をしてやる。」
かう云ひながら、其處にあつた炭俵の中から佐倉炭の塊を取り出し、唾吐をかけて仙吉の顔へこすり始めた。仙吉は滅茶滅茶にされて崩れ出しさうな顔の輪廓を奇態に歪めながらひひいと泣いて居たが、しまひには其の根氣さへなくなつて、相手の偽すがままに委せた。日頃學校では馬鹿に強さうな餓鬼大将の荒くれ男

が、信一の爲めに見る影もない態になつて化物のやうな目鼻をして居るのを見ると、私はこれ迄出會つたことのない一種不思議な快感に襲はれたが、明日學校で意趣返しされると云ふ恐れがあるので、信一と一緒に徒らをする氣になれなかつた。

暫くしてから帯を解いてやると、仙吉は恨めしさに信一の顔を横目で睨んで、力なくぐたりと其處へ突俯した儘何と云つても動かない。腕を掴んで引き起さうとしても亦ぐたりと倒れてしまふ。二人とも少し心配になつて、様子を窺ひながら黙つてゐて居たが、

「おい、どうかしたのかい。」

と、信一が邪慳に襟頭を捕へて、仰向かせて見れば、いつの間にか仙吉は泣く眞似をして汚れた顔で筒袖で半分程拭き取つてしまつて居る可笑さに、

「わはははは。」

と、三人は顔を見合はせて笑つた。

「今度は何か外の事をして遊ばう。」

「坊ちゃん、もう亂暴をしちやいけませんよ、こら御覽なさい、こんなひどく痕が附いたぢやありませんか。」

見ると仙吉の手頭の所には、縛られた痕が赤

く残つて居る。

「あたしが狼になるから、二人旅人にならな
いか。さうしてしまひに二人共狼に喰ひ殺さ
れるんだよ。」

信一が又こんな事を云ひ出したので、私は薄
氣味悪かつたが、仙吉が、
「やりませう。」

と云ふから承知しない譯にも行かなかつた。

私と仙吉とが旅人のつもり、此の物置小屋がお
堂のつもりで、野宿をしてゐると、眞夜中頃に
信一の狼が襲つて来て、顔に戸の外で吠え始
める。とうとう狼は戸を喰ひ破つてお堂の中
を四つ這ひに這ひながら、犬のやうな牛のやう
な稀有な呻り聲を立てて逃げ廻る二人の旅人を
追ひ廻す。信一があまり眞面目でやつて居るの
で、捕まつたらどんな事をされるかと、私は
心から少し恐くなつてにやにや不安な笑ひを
浮べながら其の實一生懸命俵の上や筵の蔭
を逃げ廻つた。

「おい仙吉、お前はもう足を喰はれたから歩い
ちやいけないよ。」

狼はかう云つて旅人の一人をお堂の隅へ追
ひ詰め、體にとび上つて方角へ喰ひ付くと、仙
吉は役者のするやうな苦悶の表情をして、眼を

むき出すやら、口を歪めるやらいろいろの身振
りを巧に演じて居たが、遂に喉笛を喰ひ切れ
て、キヤツと致死期の悲鳴を最期に、手足の指
をぶるぶるとわななかせ、虚空を掴んでバツタ
リ倒れてしまつた。

さあ今度は私の番だ。かう思ふと氣が氣で
なく、急いで樽の上へ跳び上ると、狼に着物

の裾を咬はられ、恐ろしい力で下からぐいぐい
引張られた。私は眞着になつて樽へしつかり
掴まつて見たが、激しい狼の權幕に氣後れが

して「ああもうとても助からない」と観念の眼
を閉づる間もなく引きずり落され、土間へ仰向
きに轉げたかと思ふと、信一は疾風のやうに私

の首ツたまへのしかかつて喉笛を喰ひ切つた
「さあもう二人共死骸になつたんだからどんな
事をされても動いちやいけないよ。此れから骨

までしやぶつてやるぞ。」
信一にかう云はれて、二人ともだらしなく大

の字なりに土間へ倒れたまま、一寸も動けな
かつた。急に私は體の處處方がむづ痒くなつ
て、着物の裾のはだけた處から冷めたい風がす

うすうと股ぐらに吹き込み、一方へ伸ばした右
手の中指の先が微かに仙吉の髪の毛に觸れて
居るのを感じた。

「此奴の方が太つて居て旨さうだから、此奴か
ら先へ喰つてやらう。」

信一はさも愉快さうな顔をして、仙吉の體
へ這ひ上つた。

「あんまり非道いことをしちやいけませんよ。」
と、仙吉は半眼を開き、小聲で訴へるやうに
囁いた。

「そんな非道い事はしないから、動くときかな
いよ。」

むしやむしやと仰山に舌を鳴らしながら、
頭から顔、胴から腹、兩腕から股や脛の方ま
でも喰ひ散らし土のついた草履のまま目鼻の上

でも胸の上でも勝手に踏み躪るので、又しても
仙吉は體中泥だらけになつた。
「さあ此れからお臀の肉だ。」

やがて仙吉は俯向きに臥かされ、臀を捲くら
れたかと思ふと、薙を二つ並べたやうに腰か
ら下が裸體になつてぬツと際し出された。ま

り上げた着物の裾を死體の頭へ被せて背中へ
跳び乗つた信一は、又むしやむしやとやつて居
たが、どんな事をされても仙吉はぢつと我慢を

して居る。寒いと見えて粟立つた臀の肉が薄
弱のやうに顫へて居た。
今に私もあんな態をさせられるのだ。かう

思つて密に胸を講かせたが、まさか仙吉同様の非道い目にも會はずまい位に考へて居ると、やがて信一は私の胸の上へ跨がつて、先づ鼻の頭から嗅ひ始めた。私の耳には甲斐絹の羽織の裏のさやさとこすれて鳴るのが聞え、私の鼻は着物から放つ樟腦の香を嗅ぎ、私の頬は柔かい羽二重の肌ふうわりと撫でられ、胸と腹とは信一の生暖かい體の重味を感じて居る。調ほひのある唇や滑かな舌の端が、べろと擦ぐるやうに舐めて行く奇怪な感覺は恐ろしいと云ふ念を打消して魅するやうに私の心を征服して行き、果ては愉快を感じるやうになつた。忽ち私の顔は左の小鬢から右の頬へかけて激しく踏み躪られ、其の一下になつた鼻と唇は草履の裏の泥と摩擦したが、私は其れをも愉快に感じて、いつの間にか心も體も全く信一の傀儡となるのを喜ぶやうになつてしまつた。

やがて私も俯向きにされて裾を剥がされ、腰から下をべろべろと嗅はれてしまつた。信一は、二つの死骸が裸にされた臀を土間へ列べて倒れてゐる様子を、さも面白さうにからから笑つて見て居たが、其の時不意に先の女中が小屋の戸口に現れたので、私も仙吉も吃驚して起き上つた。

「おや、坊ちゃんはこの處にいらつしやるんですか。まあお召物を臺なしに遊ばして何をなすつていらつしやるんですねえ。どうして又こんな穢い所でばかりお遊びになるんでせう。仙ちゃん、お前が悪いんだよ、ほんとに。」

女中は恐ろしい眼つきをして叱りながら、泥の足型が印せられて居る仙吉の鼻を、様子ありげに眺めて居る。私は未だ踏みつけられた顔の痕がびりびりするのをぞつと堪へて何か餘程の悪事でも働いた後のやうな氣になつて立ちすくんだ。

「さあ、もうお風呂が沸きましたから、好い加減に遊ばしてお家へお入りなさいませんと、お母様に叱られますよ。萩原の坊ちゃんも亦入らして下さいますな。もう遅うございますから私がお宅までお送り申しませうか。」

女中も私にだけは優しくしたが、

「獨で歸れるから、送つて貰はないでもいいの。」

かう云つて私は辭退した。

門の所まで送つて来てくれた三人に、

「あばよ。」

と云つて戶外へ出ると、いつの間にか街は青い夕靄に罩められて、河岸通にはちらちら灯が

ともつて居る。私は恐ろしい不思議な國から急に人里へ出て来たやうな氣がして、今日の出来事を夢のやうに回想しながら家へ歸つて行つたが、信一の氣高く美しい器量や人を人も思はぬ我が儘な仕打ちは、一日の中にすつかり私の心を奪つて了つた。

明くる日學校へ行つて見ると、昨日あんな非道い目にも會はされた仙吉は、相變らず多勢の飯鬼大將になつて弱い者いぢめをして居る代り、信一は又いつもの通りの意氣地なしで、女中と一緒に小さくなつて運動場の隅の方にいぢけて居る氣の毒さ。

「信ちゃん、何かして遊ばないか。」

と、たまたま私が聲をかけて見ても、

「ううん、」

と云つたなり、眉根を寄せて不機嫌らしく首を振るばかりである。

それから四五日立つた或る日のこと、學校の歸りがけに信一の女中は又私を呼び止めて、

「今日はお嬢様のお雛様が飾つてございますから、お遊びにいらつしやいます。」

かう云つて誘つてくれた。

其の日は表の通用門から番人にお辭儀をして入つて、正面の玄關の傍にある細格子の出入

口を開けると、直ぐに仙吉が跳んで来て廊下傳ひに中二階の十疊の間へ連れて行つた。信一と姉の光子は雛段の前に臥せりながら、豆炒を喰べて居たが、二人が入つて来ると急にくすくす笑ひ出した様子が、何か又怪しからぬ徒ら企らんで居るらしいので、

「坊ちゃん、何か可笑しいことがあるんですか。」
と、仙吉は不安らしく姉弟の顔を眺めて居る。

緋羅紗を掛けた床の雛段には、淺草の観音堂のやうな茶寮殿の甍が聳え、内裏様を始め五人囃しの官女が殿中に列んで、右近の櫻左近の橋の下には、三人上戸の仕丁が酒を暖めて居る。其の次ぎ次ぎの段には、燭臺だのお膳だの鐵漿の道具だの唐草の金襴繪をした可愛い調度、此の間姉の部屋にあつたいろいろの人の形と一緒に飾つてある。

私は雛段の前へ立つて、つくづくと其れに見惚れて居ると、後からそうつと信一がやつて来て、
「今ね、仙吉を白酒で酔拂はしてやるんだよ。」
かう耳うちをしたが、直ぐにばたばたと仙吉の方へ駆けて行つて、

「おい仙吉、これから四人でお酒盛りをしようぢやないか。」
と何喰はぬ顔で云ひ出した。
四人は圓くなつて、豆炒を肴に白酒を飲み始めた。

「これはどうも結構な御酒でございますな。」
などと大人めいた口をきいて皆を笑はせながら、仙吉は猪口を持つやうな手つきで茶飲茶碗からぐいぐい白酒を呷つた。今に酔拂ふだらうと思ふと可笑しさが胸へこみ上げて、時姉の光子は堪りかねたやうに腹を抱へたが、仙吉が酔拂ふ時分には少しばかりお相手をした他の三人も、そろそろ怪しくなつて来た。下腹の邊に熱い酒がぶつぶつ沸き上つて、顔から雙の蟀谷がほんのり汗ばみ、頭の鉢の周圍が妙に痺れて、

「坊ちゃん私は酔ひましたよ。皆も眞赤な顔をして居るぢやありませんか。一つ立つて歩いて見ませんか。」
仙吉は立ち上つて大手を振りながら座敷を歩き出したが、直ぐに足許がよろけて倒れる拍子に、床柱へこつんと頭を打ち付けたので、三人がどつと吹き出すと、

「あいつ、あいつ。」

と、頭をさすつて顔を擽めて居る當人も可笑しさが堪へられず、鼻を鳴らしてくすくす笑つて居る。

やがて三人も仙吉の眞似をして立ち上り、歩いては倒れ、倒れては笑ひ、キヤツキヤツと圖に乗つて途方もなく騒ぎ出した。

「エーイツ、ああ好い心持だ、己は酔つて居るんだぞ、べらんめえ。」
仙吉が髻を端折つて肩へ彌造を拵へ、職人の眞似をして歩くと、信一も私も、しまひには光子までが髻を端折つて肩へ拳骨を突つ込み、丁度お嬢吉三のやうな姿をして、

「べらんめえ、己は酔拂ひだぞ。」
と、座敷中をよるよる練り歩いては笑ひ轉げらる。
「あツ、坊ちゃん坊ちゃん、狐ごつこをしませんか。」
仙吉がふと面白い事を考へ付いたやうにかう云ひ出した。私と仙吉と二人の田舎者が狐退治に出かけると、却つて女に化けた光子の狐の爲めに化かされて了ひ、散散な目に會つて居る所へ、侍の信一が通りかかつて二人を救つた上、狐を退治してくれると云ふ趣向である。まだ酔拂つて居る三人は直ぐに賛成して、其の

芝居に取りかかった。

先づ仙吉と私が向鉢巻きに臂端折りで、手にしたのは、きを振りかざし、

「どうも此の邊に悪い狐が出て徒らをするから、今日こそ一番退治してくれべえ。」

と云ひながら登場する。向うから光子の狐がやつて来て、

「もし、もし、お前様達に御馳走して上げるから、あたしと一緒にいらつしやいな。」

かう云つて、ほんと、二人の肩を叩くと、忽ち私も仙吉も化かされて了ひ、

「いよう、何とはあ素晴らしい別嬪でねえか。」

などと、眼を細くして光子にでれつき始め

る。

「二人共化かされてるんだから。糞を御馳走のつもりで喰べるんだよ。」

光子は面白くて堪らぬやうにゲラゲラ笑ひながら、自分の口で喰ひちぎつた餡こる餅だの、

滅茶滅茶に足で踏み潰した蕎麥饅頭だの、鼻汁で練り固めた豆炒だのを、さも穢らしさうに

皿の上へ堆く盛つて私達の前へ列べ、

「これは小便のお酒のつもりよ。——さあお前さん、一つ召し上げ。」

と、白酒の中へ痰や唾吐を吐き込んで二人に

すすめる。

「おおいしい、おおいしい。」

と舌鼓を打ちながら、私も仙吉も旨さうに片端から残らず喰べてしまつたが、白酒と豆炒

とは變に鹽からい味がした。

「これからあたしが三味線を弾いて上げるから、二人お皿を冠つて踊るんだよ。」

光子がはたきを三味線の代りにして、「こりやこりや。」と唄ひ始めると、二人は菓子皿を頭

へ載せて、「よい来た、よいやさ。」と足拍子を取つて踊り出した。

其所へやつて来た侍の信一が、忽ち狐の正體を見届ける。

「獸の癖に人間を欺すなどとは不届な奴だ、

ふん縛つて殺して了ふからさう思へ。」

「あれッ、信ちゃん亂暴な事をすると聽かないよ。」

勝氣な光子は負けるが嫌さに信一と取組み合

ひ、お轉婆の本性を現して剛情にも中中降参

しない。

「仙吉、この狐を縛るんだからお前の帯をお借

し、さうして暴れないやうに二人で此奴の足を

抑へて居る。」

私は此の間見た草雙紙の中の、旗本の若

侍が仲間と力を協せて美人を掠奪する挿繪

の事を想ひ泛べながら、仙吉と一緒に友禪の裾

模様の上から二本の脚をしつかりと抱きかかへ

た。其の間に信一は辛うじて光子を後手に縛

り上げ、漸く縁側の欄干に括り着ける。

「榮ちゃん、此奴の帯を解いて猿轡を嵌めてお

やり。」

「よし来た。」

と、私は早速光子の後に廻つて鬘金縮緬の

扱帯を解き、結ひたての唐人鬘がこれはぬやう

に樹足の長い鬘すぢへ手を挿し入れしつとりと

油にしめつて居る鬘の下から耳を掠めて頭

あたりをぐるぐる二た廻り程巻きつけた上、

力の限り引き絞つたから縮緬はぐいぐいと下

服れのした頬の肉へ喰ひ入り、光子は全閻寺の

雪姫のやうに身を悶えて苦しんで居る。

「さあ今度はあべこべに貴様を糞攻めにしてやるぞ。」

信一が餅菓子を手當り次第に口へ啣んでは、

べつべつと光子の顔へ吐き散らすと見る見るう

ちにさしも美しい雪姫の器量も癡病やみか

瘡つかきのやうに、二た目と見られない姿にな

つて行く面白さ。私も仙吉もとうとう釣り込

まれて、

「この畜生、よくも先已達に穢い物を喰はせやがったな。」

かう云つて信一と一緒にべつべつとやり出しだが、其れも手緩くなつて、しまひには領と云はず、頬と云はず、至る所へ喰ひちぎつた餅菓子子を擦りつけて、館ころを押し潰したり、大福の皮をなすりつけたり、またたくうちに光子の顔は萬遍なく汚してしまつた。日鼻も判らぬ眞黒なのつべらぼうな怪物が唐人語に結つて、濃艶な振袖姿をしてゐる所は、さしづめ百物語か化物合辭記に出て來さうで光子はもう抵抗する氣合もなくなつたと見え、何をされても大人しく死んだやうになつて居る。

「今度だけは命を助けてやる。此れから人間を化かしたりなんかすると、殺して了ふぞ。」

間もなく信一が猿轡や縛しめを解いてやると、光子はふいと立ち上つて、いきなり襖の外へ、廊下をばたばたと逃げて行つた。

「坊ちゃん、姉さんは怒つて云つつけに行つたんでせう。」

今更飛んでもない事をしたと云ふ風に、仙吉は心配らしく私と顔を見合はせる。

「なに云つつけたつて構ふもんか、女の癖に生意氣だから、毎日喧嘩していちめてやるんだ。」

信一が空嘯いて威張つて居る所へ、今度はずうツと徐かに襖が開いて、光子が綺麗に顔を洗つて戻つて來た。館と一緒に白粉までも洗ひ落して了つたと見え、却つて前よりは牙え牙えとして、つやのある玉肌の生地が一と際透き徹るやうに輝いて居る。

定めし又一と喧嘩持ち上るだらうと待ち構へて居ると、

「誰かに見つかるときまりが悪いから、そうつとお湯殿へ行つて落して來たの。——ほんとに皆亂暴だつたらありやしない。」

と、光子は物柔かに恨みを列べるだけで、而もにこにこ笑つて居る。

すると信一は圖に乗つて、

「今度私が人間で三人犬にならないか。私がお菓子や何かを投げてやるから、皆四つ這ひになつて其れを喰べるのさ。ね、いいだろ。」と云ひ出した。

「よし來た、やりませう。——さあ犬になりましたよ。わん、わん、わん。」

早速仙吉は四つ這ひになつて、座敷中を威勢よく駆け廻る。其の尾について又私が駆け出すと光子も何と思つたか、

「あたしは唯犬よ。」

と、私達の中へわり込んで來て、其處ら中を這ひ廻つた。

「ほら、ちんちん。……お預けお預け。」

などと三人は勝手な藝をやらせられた揚句、「よウシ！」

と云はれれば、先を争つてお菓子のある方へ跳び込んで行く。

「ああいい事がある。待て、待て。」

かう云つて信一は座敷を出て行つたが、間もなく緋縮緬のちやんちやんを着た本當の狎を二匹連れて來て、我我の仲間入りをさせ、喰ひかけの館ころだの、鼻糞や唾吐のついた饅頭だのを疊へばらばら振り撒くと、犬も狎も我れ勝ちに獲物の上へ折り重なり、齒をむき出し舌を伸ばして、一つ餅菓子を喰ひ合つたり、どうかするとお互に鼻の頭を舐め合つたりした。

お菓子を平けて了つた狎は、信一の指の先や足の裏をべろべろやり出す。三人も負けない氣になつて其の眞似を始める。

「ああ探ぐつたい、探ぐつたい。」

と、信一は欄干に腰をかけて、眞白な柔い足の裏を迭る迭る私達の鼻先へつき出した。

「人間の足は臨辛い酸い味がするものだ。綺麗な人は、足の指の爪の恰好まで綺麗に出來て居

る。」
こんな事を考へながら私は一生懸命五本の指の股をしやぶつた。

狎はますますぢやれつき出して何向に倒れて四足を空中に踊らせ、裾を咬へてはぐいぐい引張るので、信一も面白がつて足で頬を撫でてやったり、腹を揉んでやつたり、いろいろな事をする。私も其の眞似をして裾を引張ると、羽二重のやうな足の裏は、狎と同じやうに頬を踏んだり頬を撫でたりしてくれたが、眼球の上を踵で押された時と、土踏まずで唇を塞がれた時は少し苦しかつた。

そんな事をして、其の日も夕方まで遊んで歸つたが、明るる日からは毎日のやうに塙の家を訪ね、いつも授業を終へるのが待ち遠しい位になつて、明けても暮れても信一や光子の顔は頭の中を去らなかつた。漸く馴れるに隨つて信一の我が儘は益益つのり、私も全く仲吉同様の手下にされ遊べば必ず打たれたり縛られたりする。をかした事にはあの剛情な如までが、狐退治以來すつかり降参して、信一ばかりか私や仲吉にも遊ばやうな事はなく、時時三人の側へやつて来ては、「狐ごっこをしないか。」

などと、却つていちめられるのを嬉ぶやうな素振さへ見え出した。

信一は日曜の度毎に浅草や人形町の玩具屋へ行つて鉦刀を買つて来ては、早速其れを振り廻すので、光子も私も仲吉も體に悲の絶えた時はない。追追と芝居の種も盡きて来て、例の物置小屋だの湯殿だの裏庭の方を舞臺に、いろいろの趣向を凝らしては痛暴な遊びに耽つた。私と仲吉が光子を締め殺して金を盗むと、信一が如さんの仇と云つて二人を殺して首を斬り落したり、信一と私と二人の悪漢がお嬢様の光子と郎黨の吉を毒殺して、屍體を河へ投げ込んだり、いつも一番いやな役廻りになつて非道い目に會はされたのは光子である。しまひには紅や繪の具を體へ塗り、殺された者は血だらけになつてのた打ち廻つたが、どうかすると信一は本物の小刀を持つて来て、

「此れで少ウし切らせないか。ね、ちよいと、ぼつちりだからそんなに痛かないよ。」
こんな事を云ふやうになつた。すると三人は素直に足の下へ組み敷かれて、
「そんなに非道く切つちや嫌だよ。」
と、まるで手術でも受けるやうにぢつと我慢しながら、其の瘡恐ろしさうに傷口から流れ出

る血の色を眺め、眼に一杯涙ぐんで肩や膝のあたりを少し切らせる。私は内へ隔つて毎晩母と一緒に風呂へ入る時、其の傷痕を見付けられないやうにするのが一と通りの苦勞ではなかつた。

さう云ふ風な遊びが凡そ一と月も續いた或る日のこと、例の如く塙の家へ行つて見ると、信一は尙醫者へ行つて留守だとかで、仲吉が一人手持不沙汰でぼつ然として居る。
「光ちゃんは？」
「今ピアノのお稽古をして居るよ。お嬢さんの居る西洋館の方へ行つて見ようか。」
かう云つて仲吉は私をあの大木の木蔭の古治の方へ連れて行つた。忽ち私は何も彼も忘れて、年経る櫛の根方に腰を下したまま、二階の窓から覗れて来る樂の響にうつとりと耳を澄ました。

此の屋敷を始めて訪れた日に、やはり古の音で信一と一緒に聞いた不思議な響：或る時は森の奥の妖魔が笑ふ木霊のやうな、ある時はお伽嚢に出て来る侏儒が多勢揃つて踊るやうな、幾千の細かい想像の綾糸で、幼い頭へ微妙な夢を織り込んで行く不思議な響は、今日もあの時と同じやうに二階の窓から聞えて居る。

「仙ちゃん、お前も彼處へ上つた事はないのか
い。」

「仙ちゃんの止んだ時、私は又止み難い好奇心に充
奏樂の止んだ時、私は又止み難い好奇心に充
たされて仙吉に尋ねた。」

「ああ、お嬢さんと掃除番の寅さんの外は、あ
んまり上らないんだよ。已ばかりか坊ちゃんだ
つて知りやしないぜ。」

「中はどんなになつて居るんだらう。」

「何でも坊ちゃんのお父様が洋行して買つて來
たいろいろ珍しい物があるんだつて。いつか寅
さんに内證で見せてくれつて云つたら、可けな
いつてどうしても聞かなかつた。——もうお稽
古が済んだんだぜ、榮ちゃん、お前お嬢さんを
呼んで見ないか。」

二人は聲を揃へて、

「光ちゃん、お遊びな。」

「お嬢さん、遊びませんか。」

と、二階の方へ怒鳴つて見たが、ひつそりと
して返辭はない。今迄聞えて居たあの音楽は、
人なき部屋にピアノとやらが自然に動いて、微
妙の響を發したのかとも怪しまれる。

「仕方がないから、二人で遊ぼう。」

私も仙吉一人が相手では、いつものやうにも
騒がれず、張合が抜けて立ち上ると不意に後で

げらげらと笑ひ聲が聞え、光子がいつの間にか
其處へ來て立つて居る。

「今私達が呼んだのに、何故返辭しなかつたん
だい。」

私は振り返つて詰るやうな眼つきをした。

「何處であたしを呼んだの。」

「お前が今西洋館でお稽古をしてる時に、下か
ら聲をかけたのが聞えなかつたかい。」

「あたし西洋館なんか居やあしないよ。彼處
へは誰も上れないんだもの。」

「だつて、今ピアノを弾いて居たぢやないか。」

「知らないわ、誰か他の人だわ。」

仙吉は始終の様子を胡散臭い顔をして見て居
たが、

「お嬢さん、嘘をついたつて知つてますよ。ね、
榮ちゃんと私を彼處へ内證で連れて行つて下
さいな。又剛情を張つて嘘をつくんですか、白
狀しないと斯うしますよ。」

と、にやにや底氣味悪く笑ひながら、早速光
子の手頸をちりちりと捻ぢ上げにかかる。

「あれ仙吉後生だから勘忍しておくれよう。

嘘ぢやないんだつてばさあ。」

光子は拜むやうな素振をしたが、別段大聲を
揚げるでも逃げようとすでもなく爲すが儘に

手を捻ぢられて身悶えて居る。きやしやな腕
の青白い肌が、頑丈な鐵のやうな指先にむす
と掴まれて、二人の少年の血色の快い、對照は、
私の心を誘ふやうにするので、

「光ちゃん、白狀しないと拷問にかけるよ。」

かう云つて、私も片方を捻ぢ上げ、扱聲を解
いて沼の側の木解の幹へ縛りつけ、

「さあ此れでもか、此れでもか。」

と、二人は相變らず扱つたり擦つたり、夢中
になつて折檻した。

「お嬢さん、今に坊ちゃんが歸つて來ると、も
つと非道い目に會ひますぜ、今の内に早く白狀
しておしまひなさい。」

仙吉は光子の胸ぐらを取つて、兩手でぐツと
喉を締めつけ、

「ほら、だんだん苦しくなつて來ますよ。」

かう云ひながら、光子が眼を白黒させて居る
のを笑つて見て居たが、やがて今度は木から解
いて地面へ仰向きに突き倒し、

「へえ、此れは人間の縁臺でございます！」

と、私は膝の上、仙吉は顔の上へドシリ腰を
かけ、彼方此方へ身を揺す振りながら光子の體
を臂で踏んだり壓したりした。

「仙吉、もう白狀するから勘忍しておくれよ

う。

光子は仙吉の髻に口を塞がれ、蟲の息のやうな細い聲で憐みを乞うた。

「そんなら乾度白状しますね。やつぱり先は西洋館に居たんでせう。」

髻を擽げて少し手を絞めながら、仙吉が訊問する。

「ああ、お前が又連れて行けつて云ふだらうと思つて嘘をついたの。だつてお前達をつれて行くと、お母さんに叱られるんだもの。」

「よござんす、連れて行かないんなら。それ、又苦しくなりますよ。」

「あいた、あいた。そんなら連れて行くよ。連れてつて上げるからもう勘忍しておくれよ。其の代り晝間だと思付かるから晩にしてお呉んな。ね、さうすればそうツと寅造の部屋から鍵を持つて来て開けて上げるから、ね、榮ちゃんも行きなれば晩に遊びに来ないか。」

とうとう降参し出したので、二人は尙も地面へ抑へつけた儘、色色と晩の手筈を相談した。

丁度四月五日のことで、私は水天宮の縁日へ行くと、言つて内を跳び出し暗くなつた時分に表門から西洋館の玄關へ忍び込み、光子が鍵

を盗んで仙吉と一緒にやつて来るのを待ち合はせる。但し私が時刻に遅れるやうであつたら、二人は一と足先へ入つて、二階の階段を昇り切つた所から二つ目の右側の部屋に待つて居ると斯う云ふ約束になつた。

「よし、さう定まつたら赦して上げます。さあお起きなさい。」

と、仙吉は漸くの事て手を放した。

「ああ苦しかつた。仙吉に腰をかけられたら、まるで息が出ないんだもの。頭の下に大きな石があつて痛かつたわ。」

着物の埃を拂つて起き上つた光子は、體の節節を揉んで、上氣せたやうに頬や眼球を眞紅にして居る。

「だが一體二階にはどんな物があるんだい。」

一旦家へ歸るとなつて、別れる時私はかう尋ねた。

「榮ちゃん、吃驚しちやいけないよ。其りや面白いのが澤山あるんだから。」

様のお屋敷前には黒山のやうに人だかりがして、賣藥屋が女の胎内を見せた人形を指しながら、何か頻と聲高に説明して居る。いつも樂しみにして居る七十五座のお神樂も、猫八の手工品も、永井兵助の居合抜きも今日は一向見る氣にならず、急いで家へ歸つてお湯へ入り、晩飯もそこそこ、

「縁日に行つて来るよ。」

と、再び飛び出したのは大方七時近くであつたらう。水のやうに濕んだ青い夜の空氣に縁日のあかりが溶け込んで、金清樓の二階の座敷には亂舞の人影が手に取るやうに映つて見え、米屋町の若い衆や二丁目の矢場の女や、いろい

ろの男女が兩側をぞろぞろ往來して、今が一番人の出さかる刻限である。中之橋を越えて、暗い淋しい濱町の通りから後を振り返つて見ると、薄曇りのした黒い空が、ぼんやりと赤く濁染んで居る。

いつか私は塙の家の前に立つて、山のやうに黒く聳えた高い堯を見上げて居た。大橋の方から肌寒い風がしめやかに闇を運んで吹いて来て、例の櫛の大木の葉が何處やら知れぬ空の中

途ではさばらばさりと鳴つて居る。そうツと塙の中を覗いて見ると門番の部屋のあかりが戸の隙

間から竈に細長い線を成して洩れて居るばかり、母屋の方はすつかり兩戸がしまつて、曇天の背景に魔者の如く森閑と眠つて居る。表門の横にある通用口の、冷めたい鐵格子へ兩手をかけて暗闇の中へ押し込むやうにすると、重い扉がキーと軋んで素直に動く。私は雪駄がちやらつかぬやうに足音を忍ばせ、自分で自分の忙しい呼吸や高まつた鼓動の響を聞きながら、闇中に光つて居る西洋館の硝子戸を見つめて歩いて行つた。

次第次第に眼が見えるやうになつた。八つ手の葉や、樺の枝や、春日燈籠や、いろいろと少年の心を怯えさせやうな姿勢を取つた黒い物が、小さい瞳の中へ暴れ込んで来るので、私は御影の石段に腰を下ろし、しんしんと夜氣のみ入る中に首をうなだれた儘、息を殺して待つて居たが、いつか二人はやつて来ない。頭上へ蓋さつて居るやうな恐怖が體中をぶるぶる顫はせて、齒の根ががくがくわなないて居る。ああ、こんな恐ろしい所へ来なければ好かつた、と思ひながら、

「神様、私は悪い事を致しました。もう決してお母様に嘘をついたり、内説で人の内へ入つたり致しません。」

と、夢中で口走つて手を合はせた。すつかり後悔して、歸る事にきめて立ち上つたが、ふと玄關の硝子障子の扉の向うに、ぼつりと一點小さな蠟燭の灯らしいものが見えた。

「おや、二人共先へ入つたのかな。」

かう思ふと、忽ち又好奇心の奴隸となつて、殆ど前後の分別もなく把手へ手をかけ、グルツと廻すと造作もなく開いて了つた。

中へ入ると推測に違はず正面の螺旋階の上り端に——大方光子が私の爲めに置いて行つたものであらう。半ば燃え盡きて蠟がとろとろ流れ出して居る手燭が、三尺四方へ雲東ない光を投げて居たが、私と一緒に外から空氣が流れ込むと、炎がゆらゆらと瞬いて、ワニス塗の襦干の影がぶるぶる動搖して居る。

因唾を呑んで抜き足さしし、盗賊のやうに螺旋階を上り切つたが、二階の廊下はますます眞暗で、人の居さうなけはひもなく、カタリとも音がしない。例の約束をした二つ目の右側の扉

——それへ手搜りで擦り寄つてちつと耳を翫て見ても、矢張りヒソソリと静まり返つて居る。

半ばは恐怖、半ばは好奇の情に充たされて、まよと思ひながら私は上半身を凭せかけ、扉

をグツと押し見た。

ぱつと明るい光線が一時に障を刺したので、クラクラしながら眼をしばたき、妖怪の正體を見定めるやうに注意深く四壁を見廻したが誰も居ない。中央に吊るされた大ランプの、五色のレンズで飾られた蠟色の傘の影が、部屋の上半部を薄暗くして、金銀を鏤めた椅子だの卓子だの鏡だのいろいろの裝飾物が燦然と輝き、床に敷き詰められた暗紅色の敷物の柔かさは、春草の野を踏むやうに足袋を隔てて私の足の裏を喜ばせる。

「光ちゃん。」

と呼んで見ようとしても死滅したやうな四邊の寂寞が唇を壓し、舌を強張らせて聲を發する勇氣もない。始めは氣が付かなかつたが、部屋の左手の隅に次の間へ通ずる出口があつて、重い縞子の帷が深い皺を疊み、ナイヤガラ製の襦布を想はせるやうにとどりと垂れ下つて居る。其

れを排して、隣室の模様を覗いて見ようとしたが帷の向うが眞暗なので手が疎むやうになる。

其の時不意に燐燐棚の上の置時計がヂ！と蟬のやうに呟いたかと思ふと、忽ち鏗然と鳴つてキンコンケンと奇妙な音楽を奏で始めた、之を合

圖に光子が出て来るのではあるまいかと帷の

方を一心に視詰めて居たが、二三分の間に音楽も止んで了ひ、部屋は再び元の静肅に復つて、緞子の皺は一と筋も揺がず、寂然と垂れ下つて居る。

ぼんやりと立つて居る私の瞳は、左側の壁間に掛けられた、油絵の肖像畫の上に落ちて、うかうかと其の額の前まで歩み寄り、丁度ラムプの影で薄暗くなつて居る西洋の乙女の半身像を見上げた。厚い金の額縁で、長方形に劃られた畫、面の中に、重い暗い茶褐色の空氣が滯うて、縁に胸をお納戸色の衣に蔽ひ、裸體の儘の肩と腕とに金や珠玉の鐙を飾つた下髪の女が、夢みるやうに黒眼がちの瞳をばつちりと開いて前方を視つめて居る。暗い中にもくつきりと鮮かに浮き出て居る純白の肌の色、氣高い鼻筋から唇、頤、兩頬へかけて見事に神妙しく整つた、端嚴な輪廓、——これがお伽噺に出て來る天使と云ふのであらうかと思ひながら、私は暫くうつとりと見上げて居たが、ふと額から三尺ばかり下の壁に沿つた圓卓の上に、蛇の置き物のあるのに氣が付いて其の方へ眼を轉じた。此れは又何で拵へたものか、二た廻り程とぐるを巻いて蕨のやうに頭を擡げた姿勢と云ひ、ぬらぬらした青大将の鱗の色と云ひ如何にも

眞に迫つた出来栄である。見れば見る程つづく感心して今にも動き出しさうな氣がして來たが、突然私は「おや」と思つて二三歩後へ退いた儘眼を見張つた。氣のせむか、どうやら蛇は本當に動いて居るやうである。爬虫動物の常として極めて緩慢に、注意しなければ殆ど判らないくらゐ悠長な態度で、確かに首を前後左右へ蠢かして居る。私は總身へ水をかけられたやうに寒くなり、眞着な顔をして死んだやうに立ち竦んでしまつた。すると緞子の帷の皺の間から、油絵に畫いてある通りに乙女の顔が、又一つヌツと現はれた。

顔は暫くにはやにやと笑つて居たが、緞子の帷が二つに割れてすると肩をすべつて背後で一つになつて了ふと、女の子は全身を現はして其處に立つて居る。

縁に膝頭へ届いて居る短いお納戸の裳裾の下は、靴足袋も纏はぬ石骨のやうな素足に肉色の床靴を穿き、溢れるやうにこぼれかかる黒髪を兩肩へすべらせて、油絵の通りに腕環に頸飾を着け胸から腰のまはりへかけて肌を痒と緊めつけた衣の下にはしなやかな筋肉の微動するのが見えて居る。
「榮ちゃん……」

と、牡丹の花瓣を囁んだやうな紅い唇をふはせた一刹那、私は始めて、彼の油絵が光子の肖像畫である事に氣が付いた。
「……先刻からお前の來るのを待つて居たんだよ。」

かう云つて、光子は脅かすやうにぢりぢり側へ歩み寄つた。何とも云へぬ甘い香が私の心を探つて眼の前に紅い霞がちらちらする。

「光ちゃん一人なの？」
私は救を求めやうな聲で、おつおつ尋ねた。何故今夜に限つて洋服を着て居るのか、眞暗な隣の部屋には何があるのか、未だいろいろに聞いて見たい事はあつても喉佛につかへて居て容易に口へは出て來ない。

「仙吉に會はせて上げるから、あたしと一緒に此方へおいでな。」
光子に手頭を把られて、俄にガタガタ顫へ出しながら、

「あの蛇は本當に動いて居るんぢやないか知ら。」
と、氣懸りで堪らなくなつて私は尋ねた。
「動いて居やしないぢやないか、あれ御覽な。」
かう云つて光子はにやにや笑つて居る。成る

程さう云はれて見れば、先は確かに動いて居たあの蛇が、今はちつととぐるを巻いて少しも姿勢を崩さない。

「そんなものを見て居ないで、あたしと一緒に此方へおいでよ。」

暖かく柔かな光子の掌は、とても振り放す事の出来ない魔力を持つて居るやうに軽く私の腕を捕へて、薄気味の悪い部屋の方へずると引張つて行き、忽ち二人の體は重い緞子の帷の中へめり込んだかと思ふ間もなく、眞暗な部屋の中に入つて了つた。

「榮ちゃん、仙吉に會はせて上げようか。」

「ああ、何處に居るのだい。」

「今蠟燭をつけるのと判るから待つておいで。——それよりお前に面白いものを見せて上げよう。」

光子は私の手頭を放して、何處かへ消え失せて了つたが、やがて部屋の正面の暗い闇にピシピシと凄じい音を立てて、細い青白い光の絲が無數に飛びちがひ、流星のやうに走つたり、波のやうにのたくつたり、圓を畫いたり、十文字を畫いたりし始めた。

「ね、面白いだろ、何でも書けるんだよ。」

から云ふ聲がして、光子は又私の傍へ歩いて

來た様子である。今迄見えて居た光の絲はだんだんに薄らいで闇に消えかかつて居る。

「あれは何ぞ？」

「舶來の機寸で壁を擦つたのさ。暗闇なら何を擦つても火が出るんだよ。榮ちゃんの着物を擦つて見ようか。」

「お止しよ、あぶないから。」

私は吃驚して逃げようとする。

「大丈夫だよ、ね、ほら御覽。」

と、光子は無造作に私の着物の上ん前を引張つて機寸を擦ると、絹の上を螢が這ふやうに青い光がきらきらして、ハギハラと片假名の文字が鮮明に描き出された儘、暫くは消えずに居る。

「さあ、あかりを付けて仙吉に會はせて上げようね。」

ピシツと鑽火を打つやうに火花が散つて、光子の手から蠟燭寸が燃え上ると、やがて部屋の中程にある燭臺に灯が移された。西洋蠟燭の光は、朦朧と室内を照らして、さまざまの器物や置き物の黒い影が、魘魅魘魘の跋扈するやうな姿を、四方の壁へ長く大きく映して居る。

「ほら仙吉は此處に居るよ。」

かう云つて、光子は蠟燭の下を指した。見ると燭臺だと思つたのは、仙吉が手足を縛られて兩肌を脱ぎ、額へ蠟燭を載せて仰向いて坐つて居るのである。顔と云はず頭と云はず、鳥の糞のやうに溶け出した蠟の流は、兩眼を縫ひ、唇を塞いで、頤の光からぼたぼたと膝の上に立ち、七分通り燃え盡した蠟燭の火に今や睫毛が焦げさうになつて居ても、婆羅門の行者の如く胡坐をかいて拳を後手に括られたまま、大人しく端然と控へて居る。

光子と私が其の前へ立ち止ると、仙吉は何と思つたか蠟で強張つた顔の筋肉をもぐもぐと動かし、漸く半眼を開いて怨めしさうにチツと私の方を睨んだ。さうして重苦しい切ない聲で嚴かに吠り出した。

「おい、お前も己も不斷あんまりお嬢様をいぢめたものだから、今夜は仇を取られるんだよ。己はもうすつかりお嬢様に降参して了つたんだ。お前も早く詫つて了はないと、非道い目に會はされる。……」

かう云ふ間も蠟の流は遠慮なくだらだらと蚯蚓の這ふやうに額から睫毛へ傳はつて來るので再び仙吉は、眼をつぶつて固くなつた。

「榮ちゃん、もう此れから信ちゃんの云ふ事な

んぞ膽かないで、あたしの家來にならぬか、いやだと云へば彼處にある人形のやうに、お前の體へ蛇を何匹でも巻き付かせるよ。」

光子は始終底氣味悪く笑ひながら、金文字入の洋書が一杯詰まつて居る書棚の上の石膏の像を指した。恐る恐る顔を上げて上眼ぶかひに薄暗い隅の方を見ると、筋骨逞しい裸體の巨漢が蟒に巻き付かれて凄じい形相をして居る彫刻の傍に、例の青大将が二三匹大人しくとごろを巻いて、香爐のやうに控へて居るが、恐ろしさが先へ立つて本物とも贋物とも見極めが付かない。

「何でもあたしの云ふ通りになるだらうね。」
「……私は眞蒼な顔をして、黙つて頷いた。
「お前は先仙吉と一緒にあたしを蘇臺の代りにしたから、今度はお前が燭臺の代りにおなり。」
忽ち光子は私を後手に縛り上げて仙吉の傍へ胡坐を掻かせ、兩足の踝を嚴重に括つて、一蠟燭を落さないやうに仰向いておいでよ。」
と、額の眞中へあかりをともした。私は聲も立てられず、一生懸命燈火を支へて切ない涙をほろほろこぼして居るうちに、涙よりも熱い蠟の流が眉間を傳つてたらだら垂れて來ても口も塞がれて了つたが、薄い眼瞼の皮膚を透し

て、ぼんやりと燈火のまたたくが見え、眼珠の周圍がぼろろと紅く霞んで、光子の盛な香水の匂が雨のやうに顔へ降つた。
「二人共チツとさうやつて、もう少し我慢をしておいで。今面白いものを聞かせて上げるから。」

かう云つて、光子は何處かへ行つて了つたが、暫くすると、不意にあたりの寂寥を破つて、ひつそりとした隣の一部屋から幽玄なピアノの響が洩れて來た。
銀盤の上を玉あられの走るやうな、溪間の清水が潺湲と苔の上にしたたるやうな不思議な響は別世界の物の音のやうに私の耳に聞えて來る。額の蠟燭は大分知くなつたと見えて、熱い汗が蠟に交つてぼたぼたと流れ出す、隣に坐つて居る仙吉の方を横眼で微かに見ると、顔中へ餛飩粉に似た白い塊が二三分の厚さにこびり着いて盛り上り、牛蒡の天ぶらのやうな姿をして居る。丁度二人は「浮かれ胡弓」の嘶の中の人間のやうに、微妙な樂の音に恍惚と耳を傾けた儘、いつまでもいつまでも眼瞼の裏の明い世界を視詰めて坐つて居た。

其の明るる日から、私も仙吉も光子の前へ出

ると猫のやうに大人しくなつて跪きたまたま信一が姉の言葉に逆はうとすると、忽ち取つて抑へて、何の會釋もなくふん縛つたり撲つたりするので、さしも傲慢な信一も、だんだん日を経るに従つてすつかり姉の家來となり、家に居ても學校に居る時と同じやうに全く卑屈な意氣地なしと變つて了つた。三人は何か新嬉嬉として光子の命令に服従し、一腰掛けにお

なり。」と云へば直ぐ四つ這ひになつて背を向けるし、「吐玉峰におなり。」と云へば直ちに畏まつて口を開く。次第に光子は増長して三人を奴隸の如く追ひ使ひ、湯上りの足の爪を切らせたり、鼻の穴の掃除を命じたり、口を飲ませたり、始終私達を側へ侍らせて、長く此の國の女王となつた。

西洋館へは其れ切り一度も行かなかつた。彼青大将は果して本物だか贋物だか、今考へて見てもよく判らない。

鶯

姫

(一場五幕)

— A FAIRY PLAY —

時 第一場と第五場——現代

第二場より第四場まで——王朝時代

所 京都

登場者

(現代の部)

大伴 先代生

壬生 野春子

鈴木 道子

木村 常子

中川 文子

其の他女生徒多勢

(王朝時代の部)

壬生 左大臣

鶯 姫

冷泉 親王

京極 大納言

町尻 中納言

梅小路 三位

藏人 命婦

春日 少将

阿部 晴明

羅生門の鬼

雷 神

其の他隨身、童、雑色等

第一場 京都の南の郊外にある女学校の構内。やや上手寄りに校舎の建物の一部が見えて、前方の運動場に臨んで居る。建物は軽快な卵色のペンキを塗つた、新しい西洋館で、教室の硝子窓の外にはゆつくりとしたエランダが附いて居る。エランダの程よき所に、運動場へ降りる石の階段がある。建物の下手側面に満開の櫻が二三本植わり、その後ろに煉瓦塀が續いて塀の

向うにはうらうらと晴れた紺青の空の中に、愛宕山が巖壁と霞に煙つて居る。

ちやうど午後の休憩時間の最中で、多勢の生徒のガヤガヤと戯れ騒ぐ聲が、いかにも陽氣らしく構内に響き渡つて居る。暖かさうな、ほかほかした春の日光がエランダの椅子に腰かけて居る大伴教授の横顔へ、くつきりと照り付けて居る。教師の年齢は五十五六歳、古ぼけた紺の背廣服を着た、瘦せた小柄な人物で、カーライルの肖像をもつと貧相に、もつと愚鈍にしたやうな、髯だらけの正直らしい薄祿い老翁である。

今しも午の辨當を濟ませて、睡氣ざましに此處へ出て来たところらしく、重ねた膝の上に両手を置いたまま、ぼんやりと運動場を眺めて居る。

下手の櫻の木の下で、四五人の女生徒が、「オイチ、二一」と掛け聲をしながら、細飛びをやつて居る。時時、鬼ごっこをして居る三四人の生徒たちが、上手から下手、下手から上手へ、きやつきやつと笑ひ興じながら、追ひつ追はれつして通り過ぎる。女生徒の或る者は鈴仙の縮入れに海老茶の袴を穿き、或る者は瀟洒とした洋服を着

て、一樣に派手なりボンを髪に結んで居る。いづれも十二三歳から十五六歳の少女である。

大伴老人は、未だに餘念もなく運動場を視詰めて居る。斜めにさし込む朗らかな光線を満身に浴びながら、折折眩しうに眼瞼をしばだたいて、無邪氣な少女等の蝶蝶のやうに飛び廻る様子を、うつとりと見惚れて居るらしい。少女等の嬉嬉たる笑ひ聲が聞える度毎に、老人の、皺の多い、黄色い兩頬に微笑が浮かんで、象の眼のやうな細い瞳には、得も云はれぬ愛嬌が輝いて見える。

十三四の桃色の洋服を着た少女の一が、片手にラケットを持って、息を切らせつつ上手から駆けて来る。

(少女の一) 大伴先生! あたしたちと一緒にテニスをなさいますせんか。

老人は何とも答へず、唯にこにこと笑つて少女の姿を打ち眺める。

(少女の一) ねえ先生! 彼方へいらして、一緒にテニスをなさいますせんか。あたし先生をお誘ひに参りましたのよ。

老人は何か云はうとして、口元をムズムズ

させたが再びにやにやと間の抜けた薄笑ひに紛らせてしまふ。

(少女の一、焦れつたさうに肩を振りながら) よう先生! それとも先生はテニスがお嫌ひなんでしょうか。

(老人) わしかい? わしはな、文久生れの老人で、テニスなどと云ふ西洋の遊びは、好きにも嫌ひにもやつた事がないから、お付き合いが出来ないのだよ。折角誘ひに来て下さるのは有り難いが、わしは斯うやつて日にあたりながら、皆さんの遊戯を見物して居るのが一番面白い。

(少女の一) だつて、外の先生たちは誰方だつてテニスをなさるんですもの。お出来にならなければ私が教へて上げますから、兎に角彼方へ入らつしやいませ。

(老人) いやいや、わしのやうに老碌すると、何も彼も覺えが悪くなつてな。それに體は利かなくなるし、眼は遠くなるし、此のやうに年を取つては人間もおしまひだよ。まあまあなた方のやうな若い時代が人生の花だ。わし見たいな老人を相手にせずと、子供はやつぱり子供同士で遊んだ方がつきづきしいだらう。(此の老人は話の中に時時古語を交へる

癖がある。)

(少女の一) 先生、つきづきしいって何のことですか。

(老人) つきづきしいと云ふのは、昔の言葉で似つかはしいと云ふ事だ。枕の草紙などによくある言葉だが、三年級の讀本には出て居なかつたかな。

(少女の一) そんな言葉はまだ教へて頂きませぬわ。私は三年生ぢやございませんもの。

(老人) はてな、あなたは三年生ぢやなかつたかな。

(少女の一) ええ、二年生ですわ。

(老人) さうだつたかね。わしは此の通り老碌して居るからなう。

(少女の一) ですが先生は、話の中に時時昔の言葉をお使ひなさるんですね。

(老人) うん、大方人間が舊弊だから言葉まで古代になるんであらう。あはははははは。

(少女の一) それぢやあたし彼方へ行つて誰か外の人を誘つて来ますわ。

(老人) ああさうなさい、さうなさい。

少女の一、ばたばたと下手へ走り去る。老人は又暫く運動場を眺めて居たが、やがてテニスのラケットから取り出した鏡

縁の老眼鏡をかけて、上着の内隠しに入れてあつた小型の書物を膝の上に開きながら、静かに讀書に耽り始める。しかし、一ペエチばかり読んで居るうちにだんだん夢魔に襲はれて来るらしく、二三度こくりこくり居睡りをしたかと思ふと、いつの間にやらだらしなく首を項垂れて、ほんたうに寝込んでしまふ。

その時まで、側面の櫻の木蔭に繩毬びをして居た四人の生徒等は、次第にゴランダの前の方へ飛んで来る。中で一番年嵩なのは、鈴木道子と云ふ四年級の生徒で、十六七歳の、お嬢らしい少女である。その次ぎは十五六歳の木村常子と中川文子。最年少者は二年生の壬生野春子。四人のうち三人は和服を着、春子だけが純白の清清しい洋装をして居る。中高の瓜實顔の、際立つて眉目の秀麗な十四五歳の少女で、背丈のスタリとした優雅な體つきは何處か知らに、名門の姫君らしい高貴な品威が備はつて居る。

(鈴木道子) ふと大伴老人の寝姿に心付き、繩毬びの手を休めて三人に目くばせする。ちよいと、しつ！ しつ！ 皆さんお静かになさ

い。大伴先生が又此れを(居睡りの眞似をする)なすつていらつしやるわよ。

三人、遊戯を止めてそつと石段の下に歩み寄る。

(木村常子) あら、ほんたうよ。まあ何も知らないで、いい心持ちさうに、すやすやと眠つていらつしやるのね。

(壬生野春子、中川文子) おほほほほ。

兩人手を口へあててくすくすと忍び笑ひをする。

(鈴木道子) しつ！ しつ！ お静かになさいつてば！ 何か徒らをして驚かして上げようぢやありませんか。

(中川文子) そんな事をして、後で先生に叱られると大變だわ。

(鈴木道子) 大丈夫よ中川さん。私いつでも先生を驚かして上げるけれど、叱られた事などぞありやしないわ。大伴先生はもう著碌していらつしやるんですもの。

(木村常子) ええさうよ、もう老い惚れていらつしやるのよ。だから毎日日向ぼつこをして、こつくりこつくり居睡りばかりなさるんだわ。

(壬生野春子、中川文子) おほほほほ。

(鈴木道子) あ、いい事がある。中川さん、あなたね、そうツと先生の眼鏡を外しておしまひなさい。

(中川文子) 外してもいいこと、ほんたうに叱られやしなくつて？

(木村常子) 大丈夫よ、文子さん。

中川文子、足音を盗んでゴランダへ上り、密かに老人の眼鏡を外して来る。

(木村常子) それから、其の本も隠してしまひませう。(文子の後から上つて行つて、老人の膝の上の書物を浚つて来る。)

(鈴木道子) おほほほほ、まだ先生は氣が付かないで眠つてらつしやるわ。まあ何て云ふ氣楽な方でせう。

(中川文子) 誰方か此の眼鏡を預かつて頂戴な。あたし持つて居るのは嫌だわ。

(鈴木道子) あ、さう、さう、壬生野さんに預けるのが一番いい。さ、その本と眼鏡を此方へお出しなさい。(常子と文子から二つの品を受け取つて春子を手招きする。)ね、壬生野さん、あなたに此れを預けますから、ポツ

ケットへ入れてヂツと隠していらつしやい。壬生野さんは大伴先生のお氣に入りだから、見付かつたつて叱られやしなわい。

(壬生野春子、至極無邪氣に) ええいいわ。あたし預かつて居て上げるわ。大伴先生なら、恐くも何とありませんもの。(眼鏡と本とを受け取つて、ポケットに入れる。)

(木村常子) 壬生野さん、それかね、あなた先生の後へ廻つて、眼鏡をして御覽なさい。いくら先生が古い惚れていらしつても、さうすればきつと眼をお覺ましになるわ。(中川文子) およしなさいよ。そんな事をしちや、なんぼなんでもあんまり悪いと思ひますわ。

(木村常子) いい事よ。壬生野さんなら何をなすつても、大伴先生はお怒りにならないの。(壬生野春子) いいわ、面白いからやつて見るわ。

(鈴木道子、いやに大人振つた、生意氣な口調で) ほんとに壬生野さんは無邪氣だわねえ。

壬生野春子、抜き足差し足にてゼランダへ上りちよこちよこ老人の背後へ廻つて、可愛らしい掌を伸べて老人の两眼を塞ぐ。
(老人、漸く眼を塞ました様子で) 誰だ、私の眼を塞ぐのは誰だ。(少女の手頭を捕へうる)

さきうに首を振る。) 少女等どつと笑ふ。
(老人) くら、くら、徒らをしてはいかん。誰だ、誰だ。

(壬生野春子) 先生、私よ……誰だかお分りになつて?
(老人、それと心付きながら、わざと惚けて彼女の手頭を撫でて居る。) はてな、誰だらうな。

(壬生野春子) おほほほほほ。
(鈴木道子) 先生のお氣に入りの方よ。ね、先生、お分りになつたでせう。

(壬生野春子) おほほほほほ。
(木村常子) ああ笑ひ聲がお分りにならないければ、先生は餘つぽどどうかしていらつしやいませう。

(老人) わしの氣に入りの生徒と? はてな、誰かな。
(壬生野春子) 私よ、先生。

と云つて、いきなり兩手を放し、ゼランダを威勢よく駆け出して、上手へ逃げ込んでしまふ。
(老人、眼をしよほしよほさせながら) くら、くら、誰か私の眼鏡を隠したな。おやおや、本

もなくなつて居るわい。(立ち上つて、椅子の周圍をウロウロと捜し廻る。)

少女等手を叩いて哄笑する。
(中川文子) 先生、御本も眼鏡も春子さんがお持ちになつていらつしやいますの。たつた今彼方へ逃げていらつしやいましたわ。

(老人、嬉しさうに) ほほう、また壬生野さんの徒らかね。あの兄のお轉變にも困つたものだよ。
(鈴木春子) だつて壬生野さんは、先生の御氣に入りですから、少うしぐらふ徒らをなすつても仕方がありませんわ。

(文子、常子、互ひに顔を見合はせて囁るやうに) おほほほほほ。
(老人、うらたへて) 鈴木さん、そんな事を云ふものではありませんよ。あなたは何だか、私だ壬生野さんを鼻屑にして居るやうに思つていらつしやる。

(鈴木道子) でも同級生の方が昔さう云ひますわ。先生は教場に入らしつても、壬生野さんばかりちやほやなさるんですつて。

(老人) それはな、少しはさう云ふ事があるかも知れんがな。——わしは壬生野と云ふ名前がなつかしくて、それで彼の兄を大切に

居る。壬生野と云ふと、何となく遠い古の、殿上人を想ひ浮べるのでな。

(鈴木道子) それぢや先生は、壬生野さんが華族様のお姫様で、お公卿様の御子孫だから、それで御最厚になさいますの。

(老人) さう云つては語弊がある。何も華族様の姫君だからと云ふ譯ではない。

(木村常子) いいえさうだわ。華族様のお嬢様だから大事になさるのよ。

(中川文子) 平民の子は詰まらないわねえ。

(鈴木道子) ほんとなねえ。

(木村常子) ほんとなねえ。

(老人) これ、これ、あなた方は生徒の癖に、わしを年寄りだと思つて馬鹿にするのだね、少女等笑ふ。

(老人) わしは長らく國文の教師をして居るせゐか、兎角古風な、平安朝の昔を慕ふ癖があつてな。王朝時代の儼の残つて居るものは何でも好きだよ。壬生野さんの様子を見ると、名前ばかりか顔つきなどにも、何處となく大宮人の血が傳はつて居るやうでな。やつぱり血統と云ふものは争はれぬて。

(中川文子) そんなら先生は古風な物は何でもお好きなんですね。

(老人) うん、まあさうだ。私は第一に此の京都と云ふ土地が好きだ。私の故郷は關東の相模の國でな、昔ならばむくつけき東夷の生れだが、京都が好きならばつかりに、此の學校の教師になつて、もう彼れ此れ二十年も奉職して居る。どうせ死ぬなら、私は此の都の土になりたと思つて居るよ。

(木村常子) 冷やかすやうに、死ぬなんて、先生はまだお若いぢやありませんか。

(老人) あはははは、木村さんは私の老練して居る事を知つて居ながら、なかなか人が悪いなう。

(鈴木道子) ほんたうですわ。先生はまだお若くつていらつしやいますもの。老練なすつたなんて、いかじき僻事ですわ。

(老人少女一同) あははははは。

(老人) あなた方は、多分歴史の先生に教へて頂いて、よく知つて居るでせう。——平安

京の昔には、今ちやうど、此の學校の立つて居る近所に、あの有名な羅生門と云ふのがあつてな。それから此の西の方に、老人夢みる如き窟を擧げて、西の空を指す。西寺の塔があつて、東寺の塔と向ひ合つて居たのだ。此處から北の方へ一直線に、廣き二十八丈

の朱雀大路が続いて居て、朱雀門、應天門、大極殿と連つて行く。(眼を開けて、理想に耽るが如き様子をする。) わしは今でも、あの時分の都の様がまざまざと見えるやうな心地がする。緋の生絹の水干を着た童を従へて、此の邊りを徘徊して居る大宮人の風流な姿が、夢のやうに眼の前へ浮かんで来る。

(依然として瞑目したまま、詭語の如くに云ふ。) わしのやうに年を取ると、此の世の中には何の興味もなくなつてしまふが、わしはただ、過去の幻を夢に見るのを樂しみにして生きて居るのだ。

老人が眞面目になつて獨り語を云ふ様子の不審さに、少女等は呆然として其の顔つきを眺めて居たが、やがて一同くすくす笑ひながら下手へ逃げ去る。

壬生野春子 鶯を入れた鳥籠を兩手で捧げながら、愉快さうに上手より走つて来る。

(壬生野春子) 先生！ 大伴先生！

(老人、漸く我に復つたやうに眼を開いて。) はい、はい、何だね。大さう急ぎ込んで居るぢやないか。

(壬生野春子) 先生私ね、彼處の櫻の木のとこ

るで、鶯を掴まへて参りましたの。

(老人) まあ可哀さうに、そんな物を掴まへないで早く逃がしておやりなさい。

(壬生野春子) でもね、大伴先生は小鳥がお好きだから、先生に差し上げようと思つて籠へ入れて参りましたのよ。

(老人) その籠は何處にあつたんだね。

(壬生野春子) 此れですか、此れはね、いつか先生が教員室に飼つていらしたカナリヤの籠でございます。先生のカナリヤが死んでしまつたので、小使さんが此の籠を取つて置いたのですつて。——ちやうど彼處の櫻の枝に、二羽の鶯が止まつて居たのを、私漸うの事で、一羽だけ掴まへましたわ。

(老人) 掴まへるなら二羽とも掴まへてやればいいに、番ひの鳥が一羽にされては、嘸かし籠の外が戀ひしいだらう。可哀さうだから空へ放しておやりなさい。

(壬生野春子) 二羽の鶯が一羽になると、なぜそんなに可哀さうなですか、ねえ先生。

(老人) はははは。あなたはまだ子供だから、さう云ふ理窟は分るまいがの。——しかしあなたももう直きに物の衰れを知り初めるだらう。はははは。(薄気味悪く笑ふ。)

(壬生野春子) でも先生、私が折角掴まへて上げたのですから、カナリヤの代りに飼つておやりなさいました、先生が可愛がつておやりになれば、鶯だつて可哀さうな事はありませんもの。

(老人) さうかな。あなたが其れ程に云ふのだから、飼つて置くとしてようかな。

老人、鳥籠を受け取つて、椅子の傍らに据ゑる。授業の知らせの鐘が鳴る。

(老人) さあ、さあ、授業が始まつたから彼方へお出で。私は此の時間は隙だから、また本でも讀むとしよう。(ポツケツトを搜つて急に思ひ出し) お、さう、さう、壬生野さん、あなたは何か、私の物を隠して居るだらう。

(壬生野春子) おほほほほ。先生御免なさい。春子、老人の膝の上に眼鏡と本とを投げ出して、踵しく下手へ馳せ行く。

老人は相變らずにここにしなながら、春子の後ろの影を見送つた後、眼鏡をかけて再び讀書に耽り始める。二階のガラス窓の中は音楽の教室と見えて、オルガンの音と共に多勢の女學生の合唱が、陽気に唄げに聞えて来る。

(唱歌) 春の彌生の曙に、

四方の山邊を見渡せば、花盛りかも白雲の、

かからぬ隈でなかりける……此の唱歌が、幾度となく繰り返されて、長く続いて居る。階下の教室には地理の授業が始まつた所らしく、一人の生徒の直立の姿勢で教科書を朗讀する様子が、ガラス越しにちらちらと隠見する。一京都市は、山城平野の北隅にあり。行政上、上京下京の二區に分る、市街極めて端正なり。此の地は桓武天皇奠都以來、一千有餘年の帝都たりし處、京都御所を始め、神社、佛閣、名所舊蹟多く、山水明媚にして近傍形勝の地に富む。親中、嵐山高雄山最も名高し。……など讀み上げる聲が、折折鮮明に洩れて来る。遠くの方で體操をする生徒等の掛け聲が「一、二、三、……」と、のどかに響き渡る。稍西に傾きかけた光線が、いよいよ麗かに老人の姿を照らして居る。

老人はいつの間にか又居睡りをし始める。遂には膝の書物を床に落して、伸び伸びと椅子に凭れたまま、ぐつすり寝入つてしまふ。唱歌朗讀、體操の掛け聲が、まだば

んやりと聞えて居る。

エランダの上手から一匹の青鬼が現はれて、老人の寢息を窺ひつつ傍らに近寄り、ちやうど先刻の少女のやうに眼鏡を外して眼隠しをする。

(老人) 誰れだね、また徒らをする者は？

生野さんかね。

(青鬼) からからと笑ふ。) おい爺さん、今度は相手が違つて居るよ。

(老人) 訝しげに眉を擧め、) はてな、つひぞ聞き馴れない聲のやうだが、あなたは一體誰方かな。

(青鬼) 已かい？ 己は鬼だよ。青鬼だよ、嘘だと思ふなら己の手に觸つて見る。

(老人、眼を塞がねながら、おつおつと鬼の手頭を撫でる。) どうだ、壬生野子傳のお嬢さんの手とは、大分違つて居るだらう。第一己の手に指が四本しかない。それに鷹のやうな爪が生えて、熊のやうな毛がもぢやもぢや附いて居るだらう。

(老人、俄にガタガタ顫へ出す。) た、た、たすけてくれ。私は鬼に取り憑かれるやうな悪い事をした覚えはない。

(青鬼) あははははは。覚えがないとは云はせ

ないぞ。お前はいい年をして、おまけに學校の先生でありながら、あの無邪気な壬生野子傳のお嬢さんに懸想して居るだらう。

(老人) と、と、とんでもない事だ。わしは唯、過去の夢に生きて居る人間なのだ。わしはあの女の兒を、古の物語にある姫君のやうに想像して、そつと喜んで居るだけだ。いくら學校の教師だつて、そのくらゐの事は許されてもいいだらう。

(青鬼) いや、いや、何と云つてもあのお嬢さんに懸想して居る。爺さんの癖に、お前はなかなか嘘をつくのが上手だな。

(老人) 私は決して嘘は云はない。——正直を云ふと私は遠い古の夢の中で、あの兒に懸想して居るかも知れない。平安朝の昔に、わしが殿上人の公達に生れたと想像して、あの美しい春子姫のやうな、やむごとない姫御に紅袴の小桂を着せ、精好の袴を穿かせて、古風な戀を楽しんだら、どんなに世の中が面白からうと、そんな妄想に耽ることはあるかも知れない。だがもう其れは至つてたわいのない、ほんの一時の幻なのだ。

(青鬼) はは、だんだん本音を吐いて來たな。——ところで爺さん、お前は平安朝の昔の物

なら、何でも好きだと云つたつけない。

(老人) まあ大概は好きな積りだが。

(青鬼) すると爺さんは己を嫌ふ譯には行くまいぞ。己は此れでも、平安朝の時代から、此の近所の羅生門に巢を喰つて居た鬼なのだ。ほら、お前は覺えて居るだらう。——むかしむかし、都良香に朗吟の下の句を教へてやつたと云ふ、有名な羅生門の鬼は己の事なのだ。

(老人) ははあ、あの朗吟の下の句は何とか云つたな。水滸浪洗舊苔巖——と云ふのだつたかな。

(青鬼) うんさうだ。よく覺えて居てくれたな。老練してもさすがに爺さんは國文の教師だけある。あの時己は都良香が困つて居たから、ちよいと下の句を附けてからかつてやつたのだ。何と此れでもなかなかえらい詩人だらう。——己は其の後あまり人間を馬鹿にしたものだから、とうとう波邊綱と云ふ恐ろしい奴に掴まつた。腕を片つ方斬り取られて、非道い目に會はされたが、直に取り返して、また元の通りに體へくつ着けてしまつた。こんな重寶な眞像は、人間には出來ないだらう。

(老人) ではお前さんは、其の時分から今日ま

で生きて居なさるんだね。
(青鬼) さうともさ。己が棲んで居た羅生門も、立派だったのは僅かの間で、弘仁七年の八月の大風に倒れてからは、再建しても様な物は建たなかつたよ。己も王朝の末の頃には、時時姿を現はして人間界を騒がしてやつたが、それきり今日まで徒らにやつて居たんだ。しかし爺さんがあんまり昔を戀ひしがるから、つい氣の毒になつてな、王朝時代の鬼の姿をお前に見せにやつて来たのだ。——

さあ、爺さん、別にお前を取つて喰はうと云やあしないから、氣を落ち着けて、とつくりと己の様子を見るがいい。(眼を塞いで居た手を放す) どうだ、己の此の恰好は、そつくり昔の繪巻物にある通りだらう。
(老人、鬼の姿を見上げ見下ろして、つくづくと感心する。) 成る程なあ、お前さんがさうやつて立つて居ると、地獄草紙の古畫からでも抜け出して来たやうだなあ。——たとへ鬼だらうが蛇だらうが、王朝時代の遺物だと思ふと、私は嬉しくつて體がぞくぞくして来るよ。

(青鬼) 爺さん、お前が其れ程昔の世の中に憧がれて居るなら、一番己の神通力で、王朝時代の都の景色を此處へ出現させてやらうか。
(老人) えつ、お前さんにそんな事が出来るのかい。
(青鬼) おい、おい、爺さん。あんまり己の能力を見繕つて貰ふまいぞ。己はな、斯う見えても人間以上の自在力を持つて居るのだ、望みとあらば、過去の世界でも未來の世界でも、立ち所に眼の前へ作り出して御覽に入れらう。
(老人) わしの望みは未來にはない。ただもう過去の幻にあるのだ。
(青鬼) よし、よし、そんなら過去を見せてやらう。だが、己がお前に見せるのは幻ではないのだぞ。實際にあつた過去の世界なのだ。つまりお前が王朝時代の人間に生まれ變つて、その頃の平安京に住んで居るのだと考へれば、間違ひはないのだ。
(老人、歡びの餘り身を慄はせて、) えつ、そ、そんな不思議な事が出来るのかね。
(青鬼) 出来なくつてどうするものか。さ、己の云ふ事を聽いて、もう一瀧眼を潰つて御覽。(再び老人の眼を塞ぐ。)——いいかな、お前が今斯うして休んで居る學校の廊下は、

王朝の昔にちやうど羅生門のあつた所なのだ……いいかな。お前はもう、千年ばかり前の時代に溯つて、羅生門の樓閣の上で、鬼と一緒に住んで居るのだぞ。
此の言葉と共に舞臺だんだんに薄暗くなる。

第二場

舞臺は王朝時代の平安京の光景となる。中央に巍然たる羅生門の建物。門は丹雘粉壁の二重閣。屋蓋には碧瓦を葺き、頂上に黄金の鸚尾を飾り、擦に青銅の風鐸を吊るす。「羅生門」の額の懸つた正面に石の階段を設け、階段の前に一條の溝があつて、其れに石橋が架せられる。門の後ろは其の當時の京都の市街。兩側に柳の行路樹を植ゑた朱雀大路の遠景。時刻は第一場と同じく、春風駘蕩たる卯月の日の午後。麗日照照として斜に樓門を照らす。
女學校の唱歌、朗讀、體操の掛け聲等が、恰も夢の中で聞くやうに、どこからともなく未だに微かに洩傳はる。老人は依然として眼を塞がれたまま、鬼と一緒に樓上の丹塗りの勾欄に凭れて居る。門前の石橋のは

とりに、賤民の輩どもが、伴大納言の繪巻にあるやうな服装をして、腹這ひになつたり、あぐらを掻いたりして遊んで居る。彼等は不思議にも一様に黙黙として菓子をもシヤムシヤと頬張りながら、静かに辯がつて居る。時時、上手或ひは下手から男女の庶民が通り過ぎる。

(青鬼) さあ爺さん、もう眼を明いても大丈夫だ。(眼慮)の手を放す。) どうだい、見晴らしがいだらう。かう云ふ天氣に此處から眺めると、都の景色は一と眼に見渡せる。ほら、彼處に高く聳えて居るのが東寺の塔。此方にあるのが西寺の塔。(順順に空の四方を指さす。)それから今度は此方を御覽。(兩人立ち上つて、側面の勾欄の方へ歩いて行き、小手を翳して遙かに朱雀大路を望む。)此れが有名な朱雀大路だ。それ、其の右に見える町が宣風坊、左の方が台義坊、それからもつとズツと手前の大路の右側にちよいと立派な邸があるだらう。

(老人) ふん、ふん。

(青鬼) あれがな、以前は六孫王經基の住んで居た邸なのだ。

(老人) あの、ずつと向うの左側に、長い長い

築土の塼を繞らした殿めしい御殿の礎が見えるが、あれは誰方のお邸かな。
(青鬼) ああ、あれか。あれは朱雀院と云つて、上皇様のお住まいになる御殿だよ。あの築土は四町四方もあるのだから、長い筈き。はてな、今日は内裏に何かお祝ひでもあるのかな。朱雀門の前の廣場に、大分半車が立て込んで居るわい。

(老人) どれ、どれ、何處に朱雀門があるんだね。

(青鬼) ほら、此の大路を真直ぐに行つた突あたり、丹塗りの柱がちらちらと霞んで見えるだらう。

(老人) ははあ、成る程大分遠方だな。惜しい事に霞が深くつて、私にはよくは分らんが、あの門の屋根の上に、びかびかと金色に光つて居るのは何だらう。

(青鬼) あれは樓門の鴛尾が、日に反射して輝いて居るのだ。あの先に又應天門があつて、それから若龍樓、白虎樓、大極殿となるのだ

が、爺さんにはとても見えまい。さあ彼方へ行つて、往來の風俗でも見る事にしよう。

兩人、再び正面へ戻つて勾欄に肘をかける。軟風がそよそよと吹いて、檐の風鐸を

鳴らす。
(青鬼) 何だかいやに生暖かい風が吹くな。春は此れだから睡くなるよ。

(老人) おやおや、其處の橋のところに子供たちが日向ぼっこをして居るやうだ。鬼の居るのが恐くないのかね。

(青鬼) なあに彼奴等には知れやしない。己は忍術を使つて、お前と己の姿を、人間の眼に映らないやうにして居るのだ。

(老人) それにしても此の子供たちは、先から馬鹿に大人しいな。さすがに平安朝の童は違つたものだ。

(青鬼) あははははは、つまらない事に感心するな。彼奴等は物を喰つて居るから、それで大人しいんだよ。

(老人) 子供の喰つて居るものは、あれは何だらう。

(青鬼) あれはつばい、餅と云つてな、棒の葉っぱに餅をくるんだ菓子なんだ。

(老人) そんな物がよく喰へたものだ。金鑛や羊羹をたべさせてやりたいな。

(青鬼) おつと爺さん、さつきの約束を忘れてはいけないよ。お前は何處迄も王朝時代の人間なのだ。大正の世の中の女学校の先生で

はないのだよ。

(老人) おおさうだづけ。わしはすっかり忘れて居た。

其の時まで無言の状態を續けて居た童共が、急に勢よく語り始める。

(童の一) おい、おい、此の羅生門に鬼が居ると云ふ噂だが本當か知ら。

青鬼、びつくりして思はず首を縮める。

(童の二) 嘘さ、嘘に極まって居るさ。だつて誰も見た者がないぢやないか。

(童の三) 馬鹿を云へ、見た人間が多勢居るぞ。内の親父はな、此の間東の市の柵へ

糸を買ひに行つてな、晩に遅く此處を通つたら、あすこの勾欄のところに、(門を指さす。)たしかに鬼が一匹居たとよ。

(童の四) 鬼なんぞ己はちつとも恐くはないぞ。己は今に頼光様の家來になつて、鬼退治をしてやるんだ。

(童の五) 法螺を吹くのもいい加減にしろ。お前のやうに嘘をつく奴が、却つて鬼に凌はれるんだつて、己の知つて居る仁和寺の坊さんがさう云つたぞ。

菜を買ひ歩く販婦、野菜の籠を頭に載せて、賣り聲高く呼ばはりながら、下手より上手

へ通る。

(販婦) 菜はいらんかな。——すずな、すずしろ、あしなづな、せり、はくべら、みつばせり、——菜はいらんかな。

販婦と入り違ひに、上手より、壺裝束の一人の貴婦人が、右の手に山吹の枝を携へて

緩やかに歩み出で、市女笠を傾けて西の空の目曜を眺めながら、羅生門をくぐつて

下手へ去る。

(老人) 今此の門をくぐつて行つたのは何處の女だらう。

(青鬼) さやうさ。いづれ上つ方の御殿に住へて居る女房か何かだらう。此の近所のお寺

へでも、お参りに行くところらしいな。

(老人) うつとりとして女の方を振り返りながら、わしは壺裝束と云ふものを初めて見た

が、成る程風流なものだなあ。あして片手に山吹の花を掲げて、笥の大路をしとやかに

歩んで行く様子は、まあ何と云ふ奥床しい風情だらう。わしはどうやら、嬉しくつて懐

くつて、涙がこぼれて来る。

下手より亭垂衣を着た女が、雑色の男をつれて歩いて来る。羅生門の下まで来ると、女はさきさも疲れたやうに石階に腰う

ち掛け、衣の間から蕪たけた美しい眉根を露はして子供等に尋ねる。

(女) なう、なう、其處に居る童たち。妾は都の神泉苑のほとりまで、所用があつて行くのぢやが、消が分らうで難詰して居る。どうぞ教へて賜らぬかいな。

(童の一) 何だつて、神泉苑へ行くのだつて? そんな所は己あ知らないや。

(童の二) 知つて居るけれどまだまだ道のりが餘つほどあるぞ。此れから北の路を東へ行つて南へ曲つて、西へ行つて北へ廻つて、五

里も十里も先の方だぞ。あつはははははは。(雑色) やい、やい、此の餓鬼共は己が御主人

を驚るのだな。

(女) 手もて雑色の男を制する。これ、これ、そのやうに強う云ふものではない。——なう、

其處なお子たち、妾はな、播磨の國の飾磨の里から、はるばると都へ上つて來た者ぢや

どうぞ路を教へて賜れ。

(童の三) ふふん、それぢやお前は田舎者だな。

(童の四) 田舎者には都の廣さは分るまい。神泉苑へ行く迄には、大路小路が何本もある。

針小路、梅小路、鹽小路、北小路、綾小路、

具足小路……………

(童一) わッははははは。

(雑色) この假鬼めら！云はせて置けばいい

氣になつて馬鹿にし居る！ええ、斯うして
くれるわ…(いきなり一人の子供の頭を擡

(女) これ、これ、手荒な事をするではない

ぞ。

(雑色) いえ、いえ。私に任せてお置きなさい

れい。

(子供の一) 畜生！よくも己を擡りやあが

つたな。

(子供の二) やつつけちまへ。

雑色と子供等と入り亂れて喧嘩をする。上

手から、一人の隨身らしい男、細縷の冠

に綯を付け、胸臍の袍を着て胡録を負ひ、

弓を抱へつつ急ぎ足に出て来る。

(隨身) こら、こら、何をそのやうに騒いで居

る。…壬生の大匠の姫君さまのお通りぢ

や。退らぬか、退らぬか。
(女) おお、それ、それ、大臣の姫君のお通り
ぢや、早う彼方へ行かういな。
学垂衣を着たる女、雑色の手を出いて下
手へ退場。その後から子供等がバラバラ

と逃げて行く。

(老人) 樓上へ随組みをして考へる。はてな。

(青鬼) 爺さん、何を考へて居るんだね。

(老人) こんな事を云ふと、又お前さんに怒ら
れるかも知れないが、壬生の大匠の姫なら、若

しや彼の春子姫の御先祖ではあるまいか。

(青鬼) あはははは。まだお前は春子姫を覚え

て居るね。…いかにも爺さんの云ふ通り、

壬生野の大匠は春子姫の御先祖だよ。今此處

をお通りになる姫君と云ふのは、鶯姫と云

つてな、顔立ちと云ひ、氣象と云ひ、年恰好

と云ひ、春子姫にそっくり其の儘のお嬢様

さ。

(老人) 勾欄に掴まりながら、夢中になつて上手

を見込む。ああ、彼處へやつて来る車の中

に姫君が乗つていらつしやるのだな。だが残

念な事に、御簾が垂れて居て、お姿がまるき

り見えぬ。…何とかして、一と眼でもい

いから拜む譯には行かないかな。ほんたうに
たつた一と眼、姫のお姿を拜ませてさへ頂
ければ私はどんなに仕合せだらう。
(青鬼) そんなにくよくよしないでも大丈夫
だ。あの車が此處を通る時、きつと姫君は御
簾の隙から顔をお出しになるだらう。己には

其れがちゃんど分つて居る。

(老人) うまくお顔が拜めさへすれば、私は死

んでも本望だ。…ああ、早く車が此方へ來な

いかな。馬鹿に挽き方がのろいぢやないか。

(青鬼) あの車の中にはな、姫君の外にもう一

人、藏人の命婦と云ふ、お附き添ひの乳人が

乗つて居る筈だ。

鶯姫の乗りたる手車しづしづと上手より

挽かれて来る。車の前後には、中前の隨身

の外に柳さびの烏帽子を付け、白い狩衣を

着た雑色共が七八人護衛して居る。姫の

行列の一團が將に羅生門の前を過ぎて、

殆んど下手へ入らんとする時、空の彼方か

らけたたましい杜鵑の啼き聲が落ちて來

る。

(藏人) 命婦の聲、車の中より) もし、姫君様、

ほととぎすが啼きますぞえ。

同時に車の後方の御簾がきつと打ち上げ
られて、中から姫と命婦とが顔をさし出
す。姫は全く壬生野春子と同じひとらしく
見える。
(鶯姫) おお、ばあや、彼處を御覽。あれ、
あれ、彼處の雲の中に、ほととぎすが飛んで
行くぞいな。

姫愛らしい瞳を開いて、暫くの間恍惚と空を眺める。

(藏人命婦) ほんにまあ珍しい、今年はこれが初めてでござんする。

(驚姫) あのほととぎすの聲を聞いたら、妾は野遊びがしたうなつた。今日のやうな麗かな日に、此のまま家へ歸るのは、残り惜しいわいな。

(藏人命婦) いえ、いえ、其れはなりません。今日は母君の御代参で、石清水の八幡宮へ詣でたものではござりませぬか。あまりお歸りが暇取つては、大殿様に叱られます。

(驚姫) いやぢや、いやぢや、妾はどうでも歸るのはいやぢや。野遊びが悪くば船遊びをする程に、早う嵐山へ連れて行きや。

(藏人命婦) はて、さて、姫君には又しても、なせ其のやうにむづかりなされるのでござりませぬか。早うお歸り遊ばして、その御用意をなさらねばなりませんぞえ。

(驚姫) 婿えらびなぞどうでもよい。妾は野遊びがしたいのぢや。

(藏人命婦) いえ、いえ、さうは参りませぬ。これ方方、早う車をやめて賜。

(雜色一同) 畏まつてござります。

(驚姫) 藏人命婦、車を車へ奥へ突き込んで御簾を御す。姫、尙も「いやぢや、いやぢや」と云ひ募りながら、下手へ挽かれて行く。

(青鬼) あはははは。どうだ爺さん、あの無邪氣な様子は、壬生野子爵のお藏さんに生き寫しだらう。

(老人) うらん。(呻るやうな聲を出して感服する。)

(青鬼) 婿えらびなぞどうでもよいと云ふところはほんたうに可愛いぢやないか。

(老人) それにしても今宵の饗宴に招かれる公達は、何と云ふ果報者だらう。私もさう云ふ身の上に生れて来ればよかつたが、考へて見ると運がないなあ。

らどうだらう。お前なんぞあ、どうせ人間の數にも足りない男だから、思ひ切つて今日限り人間を止めてしまつて、己たちの仲間へ遣入らうと云ふ氣はないかね。

(老人) お前さんたちの仲間と云ふと、鬼になるのかね。

(青鬼) うん、まあさうだ。

(老人) ええ、めつさうな。そいつばかりは眞つ平御免だ。

(青鬼) 何もそんなに恐がる事はないだらう。人間ならこそお前は運が悪いのだが、鬼になれば己のやうな神通力が備はつて、好きな眞似が出来るんだぜ。早い話が饗宴の席へ忍び込んで、人間共が知らない間に、驚姫を渡つて来たつて、誰も何とも云ふ者はありやしないぜ。

(老人) 成る程さう云はれると其れもさうだな。

(青鬼) だからよ、悪い事は云はないから、鬼になつてしまひなさい。第一お前、人間と違つて千年でも二千年でも生きて居られて、自由自在に世の中を渡れるだけでもどんなに得だか分りやしない。——どうだ爺さん、得心が行つたかね。

(老人) 全くお前さんの云ふ通りだ。しかし何かね、鬼になるには、餘程手数がかかるか知らん。

(青鬼) なあに譯なした。お前の決心が着きさへすれば、己が此の場で直ぐに禁脈を施してやる。

(老人) それでは早速お前さんに頼むとしよう。わしは鬼になり次第、此れから直ぐに鶯姫の邸へ出掛けて見る積りだ。

(青鬼) よし、よし、そんならちよいと此方へ来なさい。

鬼、老人を伴うて樓の背面に隠れる。

(青鬼の聲) さあ爺さん、お前は青鬼になりましたか。赤鬼になりたいか。

(老人の聲) わしは赤鬼になりたい。……：舞臺暗くなる。

第三場 壬生大臣の邸内、泉殿の場。舞臺やや上手に、池に臨んだ泉殿があつて、

下手の廊に續く。池の汀の前栽の櫻花が、盛りを過ぎて折折ちらほらと風に散つて居る。

今しも酒宴の最中で、殿上の正面から上手側面の座席へかけて、冷泉親王、梅小路

三位、春日少將、京極大納言、町尻中納言など、五人の客人が居流れる。いづれも二十歳前後の、花やかな若若しい公達揃ひで、紅梅、二藍、蘇芳、濃紫など思ひ思ひの色目の直衣に指貫を穿く。下手側面の疊に、主人役の壬生大臣が控へて居る。四十歳ぐらゐのでつぶり太つた、緒ら顔の鷹揚らしい男振りである。

既に全く日が暮れて、庭の面は暗くなつて居る。殿上の四隅に燭臺を据ゑ、主客の前に酒肴を載せた折敷、高杯が置かれて、卯花の汗衫を着た女童が物を運んで居る。

一同酒に酔ひしれて、管絃を弄び朗詠を歌ひ、大分御機嫌の體である。一番上座の冷泉親王は琵琶を弾じ、梅小路三位は横笛を吹き、春日少將と京極大納言とは拍子

を打ちつつ詩歌を吟じ、町尻中納言は鼓を鳴らして居る。

何處やらで、微かに遠山寺の梵鐘の音が聞える。

(春日少將、少し仰向き反り返つて、眼を潰りながら朗詠を歌ふ。) 巫女、蘭花紅似粉。

昭君村柳翠於眉。

(京極大納言) いや、お見事、お見事、今度は

某が吟ずる番ぢや。えつへん！と云つて、同じやうに眼を潰つて反り返る。) 花明上苑、輕軒馳九陌の座、猿叫空山斜月、螢千嵐之路。

(壬生大臣) やんや、やんや！少將殿も大納言殿もなかなか御立派なお聲ぢやな。

(梅小路三位) ちやが大臣には御御斷をなされますな。二人とも此の聲で女子を欺して居るのぢやわい！

(一同) わつはははははは。

(冷泉親王) それはさうと、鶯姫はいかがなされた。早うお顔を見たいものぢや。

(町尻中納言) そのこと、そのこと、いかにお美しい姫君でも、あまり大事に隠まうて置かれると、遂には微が生えますぞ。

(一同) わつはははははは。

(壬生大臣) ほんに姫は何をして居るのぢや。これ、これ、早う行つて呼んで参れ。

(女童) ははあ。女童下手の廊を走り行く。

(春日少將) 鶯姫が見えるやうに、ちと鶯の朗詠でも吟じませうかな。

(京極大納言) いかさま、其れが宜しかうな。

(春日少將) 誰か碧樹鶯啼而羅幕猶垂。
幾處華堂夢覺而珠簾未卷。

(京極大納言) どれ、どれ、今度は某、一つ
鶯の御馬樂を歌ひ申さう。——「梅が枝に
來居る鶯ヤ、春かけてハレ、春かけて啼け
どもいまだヤ、雪は降りつつ、あはれそこよ
しヤ、雪は降りつつ。」

鶯 鶯、葡萄色の唐衣に白綾三重襟の裳を
着け、蒲扇をかざしながら、藏人命婦
に手を曳かれて不承無精に廊を歩み來
る。

(藏人命婦) もし、姫君、あれをお聞きなさ
りませ。あの通り皆様が鶯の歌をうたうて、
姫のお越しをお待ちなされて居られます。

さあ、さあ、そのやうにおむづかりなさらず
と、早うお出でなされませいなあ。

(鶯) いやぢや、いやぢや、妾は婿えらび
などをするのはいやぢや。

其の時、一匹の赤鬼が姫の跡を追うて廊
を走り出で泉殿の下手の簀子にあぐらを
掻いて酒宴の模様を眺めて居る。人び一向
に心付かず。

(藏人命婦) いえ、いえ、なんと仰つしやつて
も、今宵の宴會に姫君がお越しなさらないで

は、大殿様のお顔が潰れてしまひます。(無
理やりに姫を引き控つて、泉殿の入り口の御
簾の前まで連れて行く。) それ、それ、ちよい
と此處から中の様子を御覧なさりませ。何と
まあ、お綺麗な公達ばかりが、お揃ひなされ
たではござりませぬか。あれ、彼處の上座に
琵琶を弾じて居らせられるのが、忝もなくも
冷泉親王でござりまするぞえ。それから其の
右に控へておいでなさるのが梅小路三位、左
のお方が春日少將、あの、向うの席にいらつ
しやるのが京極大納言、そのお隣りが町尻中
納言——まあほんに誰方様も雛のやうに美
しい方方でござんすわいな。なう姫君、あの
五方のうちで誰方が一番お好きでござります
る。

(姫君) 妾はあのやうな醜拂ひは大嫌ひぢや。
みんな氣味の悪い人たちぢや。

姫が隙見をするの知らずに、一同ますま
す醜酔して騒ぎ喚いて居る。管絃や催馬
樂の調子が、だんだん亂雑に奔放になつて
來る。

(春日少將の催馬樂) 我家とはばり帳をも垂
れたるを、大君さませ針にせん、御着に何よ
けん、………

(壬生大臣、少將に釣り込まれて、一緒になつ
て歌ふ) 鮑榮螺子をかせせよけん。

(一同) わッはははははは。
(藏人命婦、袖を口にあてて、) おほほほほ。

(鶯) あれ、あの様を見やいなう。父上ま
でが御一緒に淺ましう酔ひしれて居るぞい
な。

(梅小路三位) さあ、さあ、もつと歌はうで
ざらぬか。今度は某がやる番ぢや。——「西
寺の老鼠若ねずみ、御裳揃んづ、袈裟揃んづ、
法師に申さん師に申せ。」

(鶯) おほほほほ、あの方方は、どうやら
氣遣ひのやうぢやわいの。

(町尻中納言、ぐたぐたに酔ひ崩れて直衣の襟を
外し、前後左右へ體を揺す振りながら、) よ
し、よし、では某も歌ふといたさう。——
「酒をたうべて、たべ酔うて、たんどころんぞ
まうで來る。よろほひぞまうで來る。」

藏人命婦が我を忘れて隙見をして居る
間に、姫は欠伸を二つ三つして、飽き飽き
したやうに下手の廊へ逃げて來る。例の
赤鬼が得たりと姫の傍らへ馳せ寄つて、輕
く彼女の袂を捕へる。

(赤鬼) 姫君様、姫君様、

(鶯姫) 妾を呼ぶのは誰ぢや。

(赤鬼) へい、へい、私はな、都の羅生門に長年棲んで居りまする、赤鬼でござりますが、

ちとお姫様へ申し上げたい事があつて、此れ

へ妾を現はしました。

(鶯姫) なに？ 羅生門の赤鬼ぢやと。

(赤鬼) へい、へい、さやうでござります。

(鶯姫) さうして其方は、妾に何の用事があ

るのぢや。

(赤鬼) 私はな、姫君様を、よい所へお連れ

申して上げようと存じまして、推参いたした

のでござります。——姫君様には、野遊びが

したいと仰つしやりましたな。

(鶯姫) おおさうぢや。妾は野遊びがした

いわいの。

(赤鬼) 船遊びもお好きでござりませうな。

(鶯姫) おお、船遊びも大好きぢや。

(赤鬼) あの酔ひどれの客人たちは、皆お嫌ひ

でござりませうな。

(鶯姫) ほんに氣味の悪い人たちぢや。妾

はあのやうな男子たちが強い嫌ひぢや。

(赤鬼) よう仰せられました。何と云ふお俐巧

な姫君様でござりませう。——もし、もし、

それではな、私と御一緒によい所へお越し

なされませ。私に附いておいでになれば、

野遊びでも船遊びでも、お好み次第でござり

ます。

(鶯姫) そなた、ほんとに好い所へ伴うて

賜るかえ。

(赤鬼) ええええ、なんで私が偽りを申しま

せう。嵐山でも嵯峨野でも、姫君様のお好き

な所へ、きつとお供を致します。

(鶯姫、雀躍りして喜ぶ。) それが本當なら

嬉しい、嬉しい。これ赤鬼、早う妾を連れ

行きや。

(赤鬼) よろしうござります。さあ、さあ、お

いでなされませ。

赤鬼、不意に姫の襟頭を捕へ荒荒しく小脇

に抱へて廊から庭に飛び降り、下手奥の

間に消行く。鶯姫の「あれエ！ 助けて

エ！」と叫ぶ聲が、ほのかに二三度聞えて

來るが、誰も氣が付きたる様子なし。女童

あわだしげに酒宴の席へ駆け付けて、左

大臣に注進する。

(女童) 申し上げます。唯今阿部晴明さまが、

急な御用で御越しなされてござりまする。

(壬生大臣) 晴明が参つたとな。はて何事であ

女童の後から、阿部晴明が同じく倉皇とし

て駆け付ける。

(阿部晴明) 何事とは江瀧千萬。某唯今御門

前を過ぎたところ、一匹の赤鬼が、此のお

邸へたしかに忍び入つたるけはひ。捨てて置

いては一大事でござりまするぞ！

(壬生大臣) ええ、赤鬼が！

大臣を始め主客一同眞青になる。此の時

再び、速く速く鶯姫の悲鳴が聞える。

(藏人命婦、始めてハツと心付き) おお大變

ぢや。姫君のお姿が見えませぬ。姫君様、姫

君さまいなう！ (狂氣の如く簀子の周圍を

馳せ廻る。)

(阿部晴明) うむ、さては鬼めが、姫を渡つて

行つたと見ゆる。

(壬生大臣、勾欄の角に立ち上つて、大音に呼

ばはる。) 姫よ、姫よ、鶯姫は何處へ参つ

た。——こりや、衛士の者どもは居らぬか。

早う松明を燈して参れ。

下手より五六人の衛士の面面、手に手に松

明を打ち振りつつ現はれ、庭の隅隅を照な

く照らして見る。

(藏人命婦) 姫君様、姫君様、姫君様さまい

なう！

(壬生大臣) 姫よ、姫よ、姫は何處ぢや。父の聲が聞えたら答へてくれい！

(藏人命婦) もし、晴明さま、姫は何處へおいでなされたか、古うて下さりませい。

(阿部晴明) されば某按ずるに、はや姫君は此の邊にはおはしませぬ。鬼に泣はれて、東の空を高く高く翔つて、今しもちやうと東寺の塔の頂邊に、引き据ゑられて居られます。

(冷泉親王) 東寺の塔の頂邊ぢやと？

(阿部晴明) さやうでござります。

皆皆實子に立ち出でて、もどかしさうに東の空を打ち仰ぐ。

(梅小路三位) 東寺の塔の頂邊では、太刀も達かず矢も及ばぬ、はてさてお傷はしい事ぢやなう。

(藏人命婦) なう晴明さま、其方は日本一の陰陽師ではおはしませぬか。どうぞ其方の御修法の方で、姫君様をお救ひなされて下さりませ。

(阿部晴明) 其の仰せを待つ迄もござりませぬ。鶯姫の御命は、しかと某がお引き受け申すでござらう。

(壬生大臣) おお、忝ない忝ない。姫の命を救うてくれたら、丹波の國の身が莊園を、残らず其方に取らすぞよ。

(阿部晴明) 有り難う存じます。——某だ今此の場に於いて呪文を唱へ、天上の雷神を呼び出して、塔上の鬼を退治させるでござりませう。

(藏人命婦) 空に向つて合掌しながら、姫君さま、姫君さま、どうぞ御無事でお歸りなされませ。

(阿部晴明) 庭前の池の汀に降り立ち、瞑目して印を結び、口の中で嚴かに呪文を唱へる。唸、嗚呼嗚呼、摩訶鉢囉、很那時、吻什吻、……忽ち一陣の風が吹き起つて、殿上の燈火を消す、見る見るうちに四面暗澹となり、雨滴の音がばらばらと響く。

(衛士の二) やや、今迄空が暗れて居たのに、大粒の雨が落ちて来た！

(阿部晴明) 尙も呪文を續けて居る。微咭微、摩那栖、嗚深暮、嗚咭咭、泮泮泮。姿

詞。……

大雨沛然として到る。暗夜を劈く電光。雷鳴。——

第四場 東寺の塔の頂邊。舞臺一面に暗黒。稻妻のはたく影に、塔の頂上の鶯のあたりが纔かに見える。赤鬼が屋根瓦に腹這ひながら、鶯姫の袴の裾をしつかりと掴んでぐいぐい引張つて居る。姫は一生懸命に九輪へしがみ着いて、頻りに悲鳴を放つ。

(赤鬼) さあ、己の云ふ事を聴かないか。聴かなければ此處から下へ突き落してしまふぞ！

此の塔の高きは、十八丈八尺二寸あるのだ。此處から落ちれば粉微塵になつてしまふぞ！

(鶯姫) あれエ！ 助けてくれエ！

(赤鬼) ええ、何と云ふ剛情なあまつちよだ！

さあ己の云ふ事を聴きさへすれば、お前の好きな野遊びでも船遊びでもさせてやるのだ。

(鶯姫) いやぢや、いやぢや。其方は妾を欺したのぢや。どうぞ妾を父上の許へ歸して賜れ。いやぢやわいなう。

(赤鬼) よし、よし、此れ程云つても聴かなければ、いつその事頭から鬮をつけて、囃つてしまふぞ！

(鶯姫) あれエ！ 助けてエ！

赤鬼、屋上に立ち上つて、鶯姫を喰ひ殺さうとする。更に激しき雷鳴と電光が起る。

(171)

上手の空から太鼓を背負つた雷神が黒雲に乗つて屋根へ降りて来る。

(雷神) やい赤鬼! こいつ不埒な奴だ!

雷神二人の間に分けて入つて鬼を突きつけ、鶯姫を背後に庇ふ。

(赤鬼) なんだ貴様は? 人の仕事の邪魔をしやがつて、一體何處からやつて来たんだ。

(雷神) 己は天に居る雷神だが、日本一の陰陽師の阿部時明に頼まれて、鶯姫を救ひに来たのだ。己が此の場へ這入つたからは、もう

姫君に指一本でも指させはしないぞ。

(赤鬼) 雷神でも風神でも、己の仕事の邪魔をする奴は斯うしてくれ!

(雷神) この赤鬼め! 生意氣云ふな!

赤鬼、雷神を相手に猛烈な格闘を演じた揚句、とうとう負かされて右の腕を捻ぢ上げられる。

(雷神) さあ、どうだ、参つたらう。

(赤鬼) あいたたたた。あやまつた、あやまつた。

(雷神) いくら詫つても、貴様のやうな奴を生かして置く譯には行かないのだ。此處から下へ突き落すから、観念しろ。

(赤鬼) きやッ。

と叫んで、塔上から眞つ倒まに落される。

第五場 舞臺がバツと明るくなると、第一

場と同じ女學校のゼランダに、大伴老人が以前の如く椅子に腰かけて眠つて居る。何か悪夢に驚かれて居るらしく、うんうん呻りながら手足を掻掻く。

上手から壬生野春子が駆けて来て、老人の寝姿を見守る。

(壬生野春子) 先生、先生、(肩を押して揺り起す。) まだ寝つていらつしやるんですか。もう

三時でございますよ。

(老人) うーん、うーん、

(壬生野春子) 先生、どうしてそんなに呻つていらつしやいますの。先生、先生つてば!

老人、あまり體を掻掻き過ぎて、バツタリと椅子から轉げ落ち、眼を開くや否や、

(老人) おお鶯姫! (と云つて、突然春子にかじり着き、ふと氣が付いて極まり悪さうに。)

うん、あなたは壬生野さんだつたか。壬生野春子、さもさも氣味が悪さうに黙つて老人の顔を見詰める。

(老人) 壬生野さん、勘忍して下さいよ。わたしは夢を見てな、寢惚けて居たものだから、あ

なたに飛んだ失禮をしましたわい。

(壬生野春子) 先生、私何だか先生が恐くなり

ましたわ。

(老人) なあに恐い事も何ありません。今は寢惚けて居たんですよ。ははははは。

(壬生野春子) ねえ、先生、その鶯を私に返して下さいましな。私考へて見たら、やつぱり籠の外へ放してやつた方がいと思ひますわ。

(老人) おお、成る程、此の鶯が傍に居たので、私はあんな夢を見たのだ。さあ、さあ、あなたに返して上げませう。

少女、老人より籠を受け取り、蓋を開いて鶯を放してやる。

鶯、喜ばしげに飛りながら、翩翩として空高く舞ひ上る。老人と少女とが其の影を見送つて居る。

幕

信西

登場者

少納言入道信西

師光

師清

成景

清實

出雲前司光泰

光泰の郎黨数人

時 平治元年十二月、信義義朝の謀叛ありたる夜。

所 山城近江の國境、信樂山の奥

荒廢した山奥の深夜。枯燥せる雜草、灌木、落葉、石ころなどが、處處はす亂雜に群り背後は一帶の竹藪に掩はる。舞臺の中央に太き老杉の幹一本高く聳え、こんもりした枝を傘の如く擴げる。能ふ限り舞臺面

の上下を高くして、曇りたる冬の夜の空を充分に見せ、幽鬱な時澹たる薄光を以て四邊をつつむ。

信西、年の頃七十餘歳、編笠を戴き、黒き法衣を纏うて杉の根がたに腰をかけ、兩手に膝頭を抱いてうつつむいて居る。其の向つて右に師光、清實、左に師清、成景、物の具に身を固めて蹲踞る。此の主従五人は、始終何物かを彈るやうな低い調子で、囁くが如くに語る。

(信西) (ちつと地面を視詰めた儘、歎かれた聲。) 師光、師清、成景、清實、皆其處に居るか。

(郎黨四人) はい、此處に控へて居ります。

(信西) わしは先刻から眼をつぶつて居る。もう世の中の物を見る氣力も失せて了うた、——どうぢや、空は曇つて居るか。星が一つも見えずになつて居るか。
(師光) (他の三人の郎黨と共に空を仰ぎながら) 隈なく曇つて居ります。

(信西) 星が一つも見えぬと申すのぢやな。

(師光) 左様でござります。

(師清) 我が君、何故そのやうに空の星を氣になされまする。

(信西) あのお思はしい星が見える間は、わしは眼を開く勇氣がないわ。(と云ひつつ笠を脱ぎ、眼をしばだたきながら、恐る恐る上下左右を見廻す。) もう大分夜が更けたやうぢやな。曇つて居ても、空には月があると見えて雲が鈴のやうに光つて居る。

(成景) 月の光が雲を射徹して、私の顔を冷かに照らして居ります。そこいら中の草木の色が、謎の世界のものやうに見えて居ります。

(清實) これが秋の夜であつたら、深川の水が映つて、妻戀ふる鹿の聲も聞えるでござりませうに、冬枯れ時の眞夜中では、山も草木も死んだやうでござります。

(信西) (身を戦かせ恐ろしげに) みんな暫く黙つて見てくれ。さうして、靜に耳を澄してあの物音を聴いてみてくれ。お前達にはあの物音が聞えないか。あの何處やらで、がさがさと云ふ物の音が……
(師光) あれは大方、夜風がうしろの竹藪にあ

たる音でござりませう。

(信西) わしには、何となく人の足音のやうに聞えるが…

(師清) こんな夜更に、この山奥へ参る者はござりますまい。

(信西) いや、さうも云はれないのぢや。いつ何時わしの命を奪りに来る者があるかも知れないのぢや。この信西の首が欲しさに、どのやうな山の奥、野の末までも草木を分けて尋ね歩く人達が多勢居るのぢや。今頃京都では一信西は何處へ逃げた、早く捜し出してあの男の首を斬れ。」と源氏の侍共が騒いで居るであらう。

(成景) それは合點の参らぬこととござります。學問と申し、器量と申し、今の朝廷に肩を列べる者もない、御威勢のある我が君を、殊に主上の御覺えの優れてめでたい、我が君の御命を源氏の侍が附け狙ふとはどう云ふ譯でござります。

(信西) お前達には、其の仔細が解らぬであらうな。

(成景) 一向合點が参りませぬ。

(清實) 私共は、唯君の仰せのままに、此處までお供致して参つたのでござります、丁度今

日の午頃のこと、わが君には青穂めた瀧をなすつて、都に居ては命が危い故、一刻も早くわしを何處かの山奥へ伴れて行つて、隠してくれい。」と仰しやりました。それで私共は取る物も取り敢へず、深い仔細も承らずに君をお伴れ申して、一と先づ田原の奥の大道寺の所領まで逃げのびたのでござりました。すると君には、「いやまだ此處では安心が出来ない。もつと人里を離れた、もつと寂しい處へ行かねばならぬ。」と仰しやつて、とうとうこんな山奥へ参つたのでござります。

(師清) あの時君の様子と申したら、失禮ながらまるで御心が狂つたやうで。正氣のある人の沙汰とは覺えぬ程でござりました。

(師光) 保元このかた世には泰平が打ち續いて、源平の武士は内裏を守護し奉り、朝廷の御威光の至らぬ限もなく、わが君の御身の上は磐石のやうに確だと思はれますのに、どのやうな仔細があつて、今宵のやうな見苦しい事をなされます。

(信西) お前達のやうな無學な人は仕合はせぢや。わしは昨日迄自分の學問や才智を誇つて居つたが、今となつて見れば、却つて愚な人が羨ましいわ。わしは若い時分に唐土の孔

子の道を學んだ。さうして僅一年程の間に其の奥儀を究めて了つた。それからわしは老子の道を學んだ。さうしてまた一年も経つと其の奥儀を究めることが出来た。其の次には佛の道を學んだ。さうして此れも一年ばかりの間に、残らず學び盡して了つた。最後にわしは此の宇宙の間にある凡ての事柄を、悉く知らうとした。天文でも、醫術でも、陰陽五行の道でも、わしの學ばない處はなかつた。星の運行に依つて、世間の有爲轉變を占ふことも、人間の相を觀て、其の人の吉凶禍福を判する事も、出来るやうになつたのぢや。わしの眼には遠い未來の事までも明に見える。世の中や人の身の上に大事件が起る前には、必ず其の兆が現れるのぢやが、わしの眼には其れがはつきりと見えるやうになつたのぢや。しまひには自分の悲しい運命迄が、自分に能く見えるやうになつて來た。其れがわしの不仕合はせであつたのぢや。

(師清) それでは近頃には、何か其のやうな恐ろしい前兆でも現れたのでござりまするか。

(信西) うむ、わしが其れに氣が附いたのは、今日の午頃であつた。院の御所に何ふ途中であつた。天の中央に懸つた日輪が、

白い暈を被つて居た。あれは「白虹日を貫く。」と云うて、時を移さず朝敵が都に起り、國難を俾す前兆なのぢや。また時ならぬ眞晝の空に、大衛星がきらきらと光つて居るのを見た。それは「大伯爵天に侵す。」と云うて、今後の中に朝廷の忠臣が君に代り参らせて命を落す證據なのぢや。

(成宗) 其の忠臣と仰しやるのは、誰方の事でござりませう。

(信西) 其れはわしの事であらう。——わしは其れに就いて、いろいろと思ひ合はす事がある。昔、まだわしが通憲と云ふ俗人であった時分、熊野権現へ参詣に行く路すがら、或る占者がわしの相を觀て云うた言葉があつた。「あなたは諸道に優れた人ぢやが、併し、氣の毒な事には行く末首を劔にかけられて、屍骸を野原に曝す相がある。萬一出家でもしたならば、其の禍を免れる事もあるであらうが、其れも七十を越す迄生きて居たらば危からう。」と其の占者が云うたのぢや。わしは其の時早速鏡の前で、自分の額をつくづくと眺めた。すると恐ろしい事には、其の占者の云うた通り、劔難の相が現れて居た。それからわしは此のやうに頭を圓めて名も信

西と改めたのぢやが、七十の坂はもう四五年前に越して了うた。それや此れやを考へ合はせると、今度はどうしても、わしの命は助からないであらう。しかし、わしのやうに自分の運命が、あまりハッキリ見えすぎると、人は臆病にならずには居られぬものぢや。見、見す判つて居ながら、どうかして其の運命に打ち克たう、打ち克たうとしたくなくふもの、一日として安心心はなかつたのぢや。

(清實) それでは、其の朝敵と仰しやるのは誰の事でござります。

(信西) 云はずと知れた信頼と義朝ぢや。あの二人は日頃から、恐れ多くも主上や院を始め、わしや清盛などに大分怒を抱いて居た。丁度今清盛が熊野へ参詣に行つた留守を幸ひ、信頼の奴が愚者の義朝を語らうて、謀叛を起すのであらう。きつと今頃はあの二人が、主上や院を御所へ押し込め奉り、わしや清盛の邸を焼打にして居る時分ぢや。さうして、あわよくば思ふが儘の高位高官に上り、二人して天下の政治を勝手に料理しようとするのであらう。

(師光) 何と仰しやります。其れが眞實なら、容易ならぬ事ではござりませぬか。

(信西) まこととも、まこととも、お前達は物を眼の前に見せられぬ間は、其の眞實を信ずることが出来ぬかな。——さうぢや、あの信頼の事に就いて想ひ出す事があるわ。いつであつたか彼の男が、近衛大将の位を所望した折、院には如何したものであらうと、わしに御、ね遊ばした事があつた。わしは其の時、「どうして、どうして、あのやうな男を近衛大将になされてはなりません。そんな事をなされると、彼は今に増長して謀叛でも起し兼ねない人物でござります」と、唐土の安祿山の例を引いてお止め申したことがあつた。今思へば其れが矢張中つたのぢや。わしの判斷は、今迄一度も外れた事はないのぢや。

(師光) たとへ京都は、一旦右衛門督(信頼)や左馬頭(義朝)の手に落ちて、昔から朝敵の榮えた例はござりませぬ。紀州に赴かれた大貳殿(清盛)が變を聞いて引返されたら、不敵の輩も瞬くうちに滅ぼされるでござりませう。

(信西) さうであらう。お前の今云うた事は、やがて眞實となるであらう。清盛が戻つて來

たら忽ち滅ぼされて、あの二人の首は頼門に曝される事であらう。だが明日をも知れぬ自分の運命に心付かず、勇ましく働いて居る愚な義朝は、わしより仕合はせであるかも知れぬ。わしは今、自分で自分の運命に詛はれて、手も足も出ずに居るのぢやから。

(師清) しかし、今日こそ我が君の謀略の効果が現れたのでござりませう。御身の上にかかりかかる禍を未然に防がれて、此の山奥に委を隠され、朝敵に一泡吹かせてやつたのは、快いでござります。無今頃は、血眼になつて御行方を捜し求めて居りませう。

(成景) もう此處まで落ちのびた上は、よもや敵の日に止ることはござりませぬ。大貳殿の戻られるまで、暫く此處に御半抱なされば大丈夫でござります。

(信西) お前達はさう思つて居るのか。わしの日頃の學問が役に立つたと云ふのか。あの執念深い信頼、云ふ男が、ひと通りの事でわしを捜す事を思ひ切ると思ふのか。ああ、どうかしてわしも其のやうな氣持になりたい。どうせ殺されるにしても、殺される間際まで其の氣持で居たいものぢや。あの信頼は、草を分けても此の信西を捜し出さずには措かぬ

男ぢや。今頃源氏の郎黨共は、手に手に炬火を持つて、京都の八方へ放たれたであらう。先刻まで忍んで居た大道寺の所領へも来たであらう。ふとしたらもう此の山の周圍を取り巻いて、そろそろと登つて来るかも知れぬ。一町、二町、三町、と、だんだん近くなつて、此の後の竹藪に忍び込んだかも知れぬ。ああ、わしはとて助からないのぢや。

わしは死ぬのぢや、殺されるのぢや。あの二人の首が頼門に掛けられぬ前に、先づわしの首が鴨河原へ曝されるのぢや。…わしは其れをよく知つて居る。わしには其れが能く判つて居る。判つて居る事が何にならう。何の爲めにならう。ああ、わしはどうしても助からない。ど…うしても…

(師光) わが君、如何なされました。御心を確になさりませぬ。天下に響いた少納言信西と云ふお名前前に取ぢぬやうに。

(信西) お前はわしを卑怯だと思ふのぢやな。わしは運命の前にお辭儀をするのが嫌なのぢや。卑怯だと云はれても構はないのぢや。ひるひるい、天下に一人位は、あの愚な義朝の勇氣よりも、此の信西の臆病の方が貴いものぢやと云ふ事を知つてくれる者があらう。わ

しは唐土にも天竺にも、肩を列べる者のない學者なのぢや。久壽の昔那智山で觀世音菩薩の化身ぢやと云はれた事もあるのぢや。

しかし其れも、みんな過ぎ去つた事になつた。此の日本の國に、自分を蹴落すものはないと思つて居たのは昨日のことであつた。わしはあの文盲な、さうして勇猛な東夷の義朝に蹴落されたのぢや。老いて此の世に存すれば辱を受けること多し」と云ふが、其の通りであつた。此れ程年をとりながら、わしは何故君の爲め國の爲めに命を捨てた氣にならなないのであらう。—おお、また一入と寒くなつて来たな。命の火の消えかかつて居るわしの體は、この寒さに堪へられさうにも覺えぬわ。

(清實) お徳はしう存じます。

(師光) わが君、何故其のやうな弱弱しいことを仰しやります。日頃の御氣象にも似合はぬこととござります。氣をシツカリとお持ちなされい。愚者の、東夷の、左馬頭のやうな天を恐れず、神を憚らぬ左馬頭のやうな強い心をお持ちなされい。力をこめて、運命の綱を突き破つておしまひなされい。曇りたる空、次第次第に晴れ渡り、拭ふが如くに

冴えて星五つ六つきらきらと輝き、月光普く地上を照らす。但し、月は舞臺面に現さざること。おお、いつの間にか空が晴れて参りました。さあ我が君、恐れることはござりませぬ。あの空の星を、あの忌まはしい空の星を、額を上げて胸を張つて、つくづくと御覽なされい。

(信西) 静に、おづおづと頭を上げて、空を仰ぐ。あの星が其れぢや。あれ、彼處に、鋭い月の光にもまけずに瞬いて居るあの星が、わしの運命を誼ふのぢや。風吹き來りて竹藪をざわざわと鳴らす。あれはやつぱり風の音か、此の次に竹藪が鳴る時は、源氏の討手が現れるであらう。

(成景) 私共は先刻からのお言葉を、まだ疑うて居りますが、若しも源氏の討手が参らうなら、腕の限り斬つて斬りまくり、我が君に指でもささせぬ覺悟でござります。

(信西) ふむ、まだお前達は、わしの言葉が信じられぬと云ふのぢやな。
(清實) 誰も、誰も、君の判断の中らぬことを願うて居ります。

(信西) 討手の影が見えてから、始めて眞實と悟つたと何にならう。たとへお前達四人が

力の限り刃向つても、名にし負ふ源氏の荒武者が十騎も二十騎も押し寄せたら手もない事ぢや。あの星を見るがよい。あの星を。あれが何よりの證據なのぢや。あの星が消えるか、わしの命が消えるか、二つに一つぢや。
(師清) それでは兎も角も、お心の休まるやうに、今少し山の奥か、それとも亦、南都の方へ落ちのびませうか。

(信西) 頭の上にあの星が睨んで居る間は、何處へ行つても同じ事ぢや。わしにはあの星を空から射落す力はない。あの星を頭の上から引きずり下す力がないのぢや。どうかしてあの星の見えない處へ行きたいものぢや。
(ふと、何かを見つけたやうに、下手の方を見やりて頷く) うむ彼處に材木と鉾とが置いてある。大方樵夫が遺れて行つたのであらう。お前達、あれを此處へ持つて來てくれ。

郎黨等、下手から新しく挽きたる四分板四五枚と鉾を運び來る。
(師光) わが君、これを如何なされるのでござります。

(信西) 星の見えない處へ身を隠すのぢや。此の杉の木蔭に穴を掘つて、土の中に身を埋め、竹の節で氣息を通はせれば、生きて居ら

れるであらう。あの星の光が消えるまで、わしはさうして生きながらへ、運命の力に克つて見せるのぢや。…時のたたないうちに、早く其處を掘つてくれい。
郎黨等、杉の木蔭を穿ち、穴の中を板にてかこひ、後の竹藪から竹の幹を切つて來る。

(師光) 仰せの通りにしつらへました。
(信西) いろいろと大儀であつたなう。お前達の心づくしは、死ぬるまで過分に思つて忘れぬであらう。それでは、わしは此の穴に身を埋めて、世の中の静まるのを待つとしよう。再び目の目が見られたらば、お前達にも厚く禮をするつもりぢや。お前達も人目にかからぬうち、早く此處を立ち退いて、何處の山里へなりと身を落ち着いたがよい。もしまたわしの體に萬一の事があつたなら、京都に残して置いた妻子共の面倒を見てやつてくれるやうに、くれぐれも頼んで置いぞ。

(師清) 仰せまでもないこととござります。我が君にどのような事があらうとも、命の綱をしつかと握むと放さぬやうになされませ

(師光) 君にお願ひがござります。忌まはしい

ことながら、萬一、これが長いお別れとならぬとも限りませぬ。何卒其の時は世の物笑とならぬやう、天晴れの御最期をお願ひ申して置きます。また其の時に私共が亡き後の君の御回向を葬ふことが出来ませうに、唯今此の場で誓を切りたう存じます。師清も、成景も、清實も、別に異存はなからうな。

(師清、成景、清實) 決して異存はない。四人一度に誓を切る。

(師光) かうなつた上は、われわれ四人に、何卒法名をお授け下さいまし。

(信西) うむ、よろこそ申ししてくれた。——師光……

(師光) はい。

(信西) 信西の一字を取つて、お前の法名は西光と稱へるがよい。

(師光) 忝なう存じます。

(信西) 師清、お前の法名は西清。

(師清) はい。

(信西) 成景は西景、清實は西實と稱へるがよい。

(師清、成景、清實) 忝なう存じます。

(師光) いつまで居てもお名残は盡きませぬ、それではこれで一同お暇を願ひます。

(信西) うむ、(と云ひつつ、つかつかと穴の端に進み、そこに名ひて無言の儘暫く空の星を凝視し、力なげにうなだれる。……) 星はまだ光つて居る。わしは此の穴の中で、息氣のつづく限り念佛を誦へて居よう……

(師光) それではお暇を申します。

(信西の聲) (穴の中より) 師光、師光。

(師光) はい。(這ひ寄りて、竹の端に耳をつける。)

(信西の聲) 星はまだ光つて居るか。

(師光) はい、未だに光は衰へませぬ。

(信西) 四人、立ち上りて下手へ歩み行く。

(清實) いまだに討手は来ないやうだ。己はど

うも君の仰しやつた事が、ほんたうとは思はれない。

(成景) 己も半信半疑で居る。

(師清) もしも仰しやつた事が當らないとすれば、こんな騒ぎをしたのは馬鹿馬鹿しい。師

光、お前は何でまた誓を切るの、長のお別

れだのと、不吉なことを云ひ出したのだ。

(師光) 己の觀た處では、君のお命はもうな

いものにきまつて居るのだ。たとへ世の中が

亂れやうが亂れまいが、人間があんなことと

考へたり、喋つたりすると云ふのは、もう

直き死ぬる前兆にきまつて居るものだ。

(成景) いやな事を云ふではないか。

(師光) いやな事でも、其れは本當の事だ。

(清實) さうして見ると事に依つたら、本當に

世の中が亂れ出したのかも知れない。今まで

君の仰しやつたことで、當らなかつたことは

なかつたからなう。

(師清) さうだとすると、こんな處にぐづくつ

しては居られない。早く何處かへ落ちのびよ

う。

(成景) しかし己はどうしてもまだ半信半疑

だ。

四人下手へ退場。山中に尊影なく、月光霜

の如く地上を照らして寂莫として居る。唯

信西の穴の中にて唱ふる不斷の念佛の聲、

南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛と微に聞ゆ。

暫くして、上手、下手、後の竹藪などの處

處より、甲冑に身を固めたる兵士五六人、手に手に炬火を持ちて、一人又は二人づつ

現れる。出雲前司光泰が、郎黨を率ゐて出て來たのである。兵士等、盜賊の如く足音をしのばせ、互に耳うちをして、ひそひそと隣り合ふ。

(光泰) 人聲の聞えたのは、たしかに此の邊であつたらしいが……

(郎黨の一) はい、此邊でござりました。まだ聞えて居るやうでござります。

(郎黨の二) あの聲は、何を喋つて居るのだらう。

(郎黨の三) あれは念佛を唱へて居るらしい。(光泰) あの藪の中ではないか。

(郎黨の四) 藪の中はすつかり搜して見ました。が、何も居りませぬ。

(郎黨の五) 可笑しいな。(郎黨の六) 可笑しいな。

(郎黨の一) まるで地の底から聞えるやうだ。

(郎黨の二) さうだ、これは不思議だ。己達の足の下で聲がするのだ。

兵士等、頻に耳をかしげ、地面を眺めつつ杉の木蔭に集る。念佛の音ハツタリ止む。光泰、竹の先を指し示し、目くばせにて掘れと命ず、兵士等、心得て忽ち穴を發く。信

西、自ら懐劍を脇腹につき立てたれど未だ死に切れず、満身鮮血に染み、肩息になりて摺み出さる。兵士等、炬火を信西の面に上に打ち振る。

(光泰) 己は信西法師の顔を知らぬが、誰か知つた者はないか。

(郎黨の一) 誰も存じませぬ。(光泰) しかし、此の坊主が信西に相違あるまい。

(郎黨の二) まだ息氣があるやうでござります。訊ねたら返辭をするかも知れぬ。

(光泰) (信西の顔を凝視して) こら、お前は信西法師であらうな。右衛門督殿の命をうけて、出雲前司光泰がお前を召し捕りに來たのだぞ。お前は世間の評判にも似合はぬた

わけた臆病者だな、命が惜しさに、穴の中に埋まつて居るとは、何と云ふ卑怯な奴だ。

(信西) (光泰の言葉を解せざるもの如く、眼

臉をはためかせて譚語のやうに、星はまだ光

つて居るか……

光泰、心付きてふと天を見る。夜ほのぼのとあけかかりて、白み初めたる空に明星明滅す、遠き山里に鶉鳴を聞き、冬の拂曉の覺束なき薄明のうちに幕を垂れる。

兄

弟

姫は長い春の日に遊び飽きると、細殿の局へやつて来て、乳人の話に耳を傾けるのが常であつた。貴い家柄の長女に生れて、世の中云ふものを知らずに育つた、まだ幼い姫の身には、乳人の物語るいろいろの世間話、代代の御門の御事蹟や、先祖の大臣たちの性行や、けふ此の頃の攝政關白の榮華のさまや、さては天竺震旦の御佛や聖賢の話など、凡べてが珍らしく面白く感ぜられた。

「私の夫は、もと東國の常陸の介を勤めて居た事がございます。」

かう云つて、乳人はまた遠い東の國國の風俗を話して聞かせる折もあつた。常陸と云ふのは都から何百里の彼方にあつて、其處へ行くには武藏野と云ふ廣い寂しい野原を過ぎねばならぬこと、そこには體中に毛の蓬蓬と生えた、熊のやうな鬼のやうな夷と云ふ人種が住んで居ること、和歌で名高い筑波根と云ふ山があるこ

と、さうして今から三十年ばかり前に、將門と云ふ男が、その近傍を打ち從へて朝廷へ謀叛した。四十歳に近い女ではあるが、乳人は随分さまざまなることを見聞きして居るやうであつた。

「それほど都から隔たつた土地に、そなたの夫はよくまあ住んで居られたねえ。」

姫が斯う云つて同情を寄せると、彼女はいかにも心得顔に、

「誰しも嫌でございますが、公けのお役目ならば致し方がございません。東と云ふと一概に邊鄙の土地だと思し召すかも知れませんが、邊鄙なだけに氣樂なこともあるやうでございます。いつぞや敏敏の少將がおなくなりになつた時に、東國の人はそれを知らずに、はるばると都へ馬を贈つて参つたことがございました。その折少將の父上の、小野宮の大臣がおよみ遊ばしたお歌を御存知でいらつしやいますか。」

などと云つて、一まだ知らぬ人もありけり東路に、われも行きぞ住むべかりける」と、口の内に

で吟じながら、檀紙へすらすらと書き下して見せたりする。

その小野宮の大臣の弟で、姫の祖父にあたる故の九條の右大臣の略を、乳人は一番熱心に屢々語つた。

「祖父さまはほんたうにえらいお方でいらせられました。天徳四年の五月四日におなくなり遊ばしましたが、御生でいらしつたら、今頃はきつと太政大臣におなりなされたでございます。當帝と云ひ、東宮と云ひ、二代の御門はみな祖父様の孫でいらつしやいますよ。」

さう云つてから、乳人はいつでも九條殿の御遺誠を讀んで聞かせる。「先起稱二屬星名號一七七遍。次取レ鏡見レ面。次見レ照知二日吉凶一。次取二楊枝一而レ西洗レ手。次誦二佛名一。及可レ念二尋常所尊一重神一社一。次記二昨日事一。次服二粥一。次梳二頭一。次除二手足一甲一。」

……と、漢文の文章を細やかに説明して、姫にも此れを目課としなければいけないと云ふ。

彼女の教へる所に依ると、祖父の次ぎにえらゐるのは、姫の父親の中納言であつた。その證據には、父は九條殿の三男に生れながら、伯父の參議の地位を迫り越して、既に三位中將の要職を占めて居る。此のやうな立派な父君を持

たれた姫は、今に必ず御門の后におなりなさるに相違ない。立身出世を遊ばすことは、疑ひない。などといふはれると、ことし漸う十二三の姫の胸にも、花やかな楽しい未来が夢のやうに描き出される。

「ねえ、ばあや、鷹は大丈夫の宮になれるかねえ。」

「大丈夫でございませうとも。」
と云つて、乳人は大きく頷きながら、頼もしさうな返辭とする。

全く乳人の云ふ通り、父は伯父よりも数等勝れた人物のやうであつた。東三條の中將は、早い出世をされたものだ。此の様子では、兄君より先に大臣になれるだらう。」と云ふやうな評判さへも、ちらほらと世上に洩れ傳はる。その爲めでもあらうか、父と伯父とは互ひに反目して居るらしく、堀河の伯父の邸と、東三條の父の邸とは、目と鼻の間にありながら、つひぞ往來をしたことがない。例の乳人が口にする御遺誡の中にも、「爲親必竭二孝敬之誠。恭兄如父。愛兄弟如子……」と云ふ文句があるのに、伯父と父とはなせ斯うだらうと、姫は折折恨めしかつた。

「お父様と伯父様との御仲が悪いのは、元方卿

の悪靈の所業だと、誰やらが呟いて居たけれど、そんな事があるものか知り。」
かう云つて姫が不審がれば、乳人は顔を眞蒼にして、

「悪靈などと、めつさうな事を仰つしやいます。二度と再びそのやうな言葉を仰つしやつてはなりません。」

と、聲をひそめて、たしなめるやうな口調で云つた。

「御兄弟の仲が悪いのは、伯父上様のせみでございませう。兄が弟に負けるのは、兄に働きがないからでございませう。それなのに伯父上さまは、お父さまの御立身をお嫉みなさるのでございませうよ。」

父の邸に仕へて居る者共は、女房たちを始め下司下郎までも、異口同音に斯う云ふのであつた。淺ましいとは思ひながら、姫もだんだん其の氣になつて、伯父を凌いで行く父の威勢が、やがて后の宮と云ふ仕合はせを、わが身に授けてくれるだらうと、いつからともなく待ち設けて居た。

「ねえお姫さま、私はね、あなたが行く行く貴いお方におなり遊ばすやうに、始終神佛をお祈り申して居るのでございませうよ。物は試し

でございますから、一つ御運勢を占つて御覽なさいまし。」

乳人は頻りに、夕占問ひをして見ると云つて姫にすすめた。それは日の夕暮れに街の四つ辻へ出て、行人の言葉によつて身の吉凶を判断する、至極簡単な方法であるが、不思議にもあたるものだといふた。

ちやうど三月の末の或る日の夕方、姫は中門のほとりに行んで、前栽の山吹がやり水の面に散つて行くのを、ぼんやりと眺めて居たが、ふと夕占問ひの話を想ひ浮べると、何とはなしに好奇心に驅つれながら、獨りでふらふらと邸の門を出て行つた。彼女の家は、二條の南町尻の西に方つて、二叩ばかりの築土を繞らした嚴めしい櫓へであつた。そこから三條の通りへ下つて、西へ眞山ぐに逆つて行くと、路幅の廣い大宮の辻へ来る。姫は其の辻のまん中に、北を向いたまま暫らくの間立つて居た。

内裏を退出する公卿が何かであらう。郁芳門の方から一臺の檳榔毛の車が、長い長い神泉苑の土塀に添うて、からからと走り去つた後には、ひつそりとして人通りも稀であつた。宵闇の迫つて居る往來の片隅には、癩疹で死んだらしい病人の死骸が、二つ三つ捨ててあつて、

その上に蠅だの虻だのが夥しく群がって居る。何處かの家で八講が始まつて居るらしく、法華經を誦する聲が、たそがれの町に微かに悲しく響いて居る。やがて大路の北の方から、水干を着た一人の男が、笛を吹きながら悠悠と歩いて来たが、姫の姿が眼に留まると、訝しうに立ち止まつて、

「もし、もし、其方は路にでも迷つたのかね。でなくば、早う内へお歸り。日の暮れがたに子供が表をうろついて居ると、人さらひに攫はれますぞ。」

と、姫の髪を撫でながら、いたはるやうに云ふのであつた。

その男の過ぎた後から、又二人の男女が、足ばやに四つ角を横きつて行つた。けれども誰も、姫の様子をちよいと振り向いて見るばかりで、別段聲をかけようともしないのである。姫はがつかりして、もと来た道へ戻らうとする、折柄すたすと尻切れの草履の足音が、鳥の羽ばたきのやうに鳴つて、

「お姫さま、あなたは夕占問ひをなさいますか。」

かう云つて、後ろから呼びかけた者がある。見れば年の頃六十餘りの、銀のやうな白髪を

生やした、眞白な装束を纏うた姫である。落ち窪んだ眼には一杯に眼脂が溜つて、皺だらけの頬は傷しくこけて、口をきく度に頷をわなわなと顫はせて居る。あの路端の死骸と云ひ、此の老人の風情と云ひ、悉達太子が伽毗羅城の門前で出遭つた、淨居天の化身ではあるまいかと、姫は乳人に聞かされた因果經の佛傳を、思ひ起さずには居られなかつた。

「あなたの望んでいらつしやることは、必ず成就いたしますよ。あなたは今に、貴いお方のお后におなりなさいませう。あなたのお子さまは、一天下の主におなりなさいませう。お姫様の行くすゑは、この大宮の大路のやうに、廣く長くお榮えなさるでございませう。」

姫は杖をあげて大路を指した。さうして、愛らしい姫のみめかたちをしげしげと打ち守つた後、再びすたすと歩む影が、程なく青い夕霧の中に消えて行つた。

二

東三條の兼家卿の姫君が、冷泉院の上皇の女御になつたのは、それから間もない事であつた。

時の御門は十一歳の御童で、殿上人の奉つ

た村濃の紐の着いた獨樂を、清涼殿の板敷にくるくると廻しながら、興じて居られるお年頃である。それに兼家卿の權勢も、まだ其處までは及ばないので、姫は上皇の御殿へ上るやうになつた。

院はやうやう二十のお歳で、つい四五箇月前に、讓位せられたばかりであるが、御門の位におはします間は、絶えず元方卿の惡靈に、惱まされてのみおいでになつた。その祟りが恐ろしさに、僅か三年で位をお降りになつたのである。

「近頃の御様子はどうでございませう。御機嫌よくいらせられますか。」

女御が二條堀河の御殿から、東三條の邸へ洗びに来られる度に、父の中納言はかう云つて、心配さうに聞くのであつた。

「をりをり物怪のお祟きになる時は、はたで見さへ凄じう覺えますが、さもない時はお顔の色も美しうして、ほんにあでやかな、有り難いお方の方のやうに拜まれます。さうして此の頃は、ただもう春宮の御生長遊ばすのを、楽しみにしておいでなさります。」

春宮と云ふのは、ことし二歳の師貞の親王で、冷泉院が御在位の時分、一條攝政の姫君との間

に、お生れなされたお方であつた。

「さればこそ、早う女御にも、あのやうな親王をお生みなされたがようござります。院のお爲めにも女御のお爲めにも、又かく申す父の爲めにも、それが何よりの仕合はせでござる。」

中納言は、幼い折から病み煩ひをした事がなく、仲び仲びと育つて来た女御の健康を、頼みにせずには居られなかつた。綾文の葡萄身ぶどうみの唐衣からぎの上に、房房と垂れて居る丈な黒髪や、櫻色おうしきに、生き生きとかがやいて居る豊かな頬を打ち眺めては、彼女のすぐれた體質が、一門の榮華の元を授けてくれるやうに祈つて居た。時時、院のおん物怪の激しい、折などに、女御が里方へ逃げて来られると、物に動ぜぬ中納言は「あははは」と高笑ひをして、

「そのやうに氣がお弱くては、えらいお人にはなれませぬぞ。」

と、力強く囁ましたりした。

元方もとがた民部卿の悪黨は、今から二十年も昔、天曆七年の三月に、卿が惜死を遂げた頃から、朝廷の人々にいろいろの祟りをすると云ふ噂が、いづも世間に絶えなかつた、而も其の噂は、村上天皇の女御であつた卿の御娘と、その御腹の廣平の親王とが、最近に引き續いて薨去されて

から、悪黨の味方が更に二つ殖えたやうに、一層喧ましく取り沙汰されて、ますます公卿や女房たちの恐怖の的となつた。元方が悪黨に化したのは、云ふまでもなく、自分の孫の廣平の親王が、一の宮でありながら御門の位に即かれなかつたのを、含んで居るのであるらしい。從つて卿の怨念は、當時の親戚者であつた九條の右大臣の一門は無論のこと、その一門に好意を寄せる凡べての方面に、讐を報いねば已まなかつた。二の宮の冷泉院の御惱みを始め、天徳四年から七八年の間に、九條の右大臣が五十二

三でなくなつたのも、その御女の中宮が天折されたのも村上の御門が崩御になつたのも、皆悪靈の所行であると人は信じた。

兼家卿の邸にも、怪しい事件はたびたび起つた。或る年の十五夜に、冷泉院の女御と中納言とが、南殿の庇の間に向ひ合つて、女房たちを圍まれながら、夜の更けるまで物語つて居た事があつた。月の光を貰うけるやうに、わざと格子を明け放つて、大殿油を消して居たので、部屋の中には、隈なき影が鮮やかにさし込んで居た。すると、晴れ渡つた空の方から、目に見えぬものが、ばたばたと欄干のあたりに舞ひ降りて、格子を下ろしてしまつたのである。

「あれ、物怪が、……」
女御が斯う叫んで、几帳の蔭に身を隠されると、女房たちは大波の湧き騒ぐやうに、桂の袖を掻き合はせて、床にひれ伏したまま、尊勝陀羅尼を一生懸命に誦し續けた。

「誰だ、其處をしめた者は誰だ。」
中納言は鋭く叱咤した。さうして、いきなり傍の太刀に手をかけて、格子の隙から洩れて来る月光に、きらきらと白刃を打ち振りながら、一月を見るのに折角格子を上げたものを、何物が締めたのだ。もとのやうに上げる、上げる。上げなければ容赦はせぬぞ。」

と、きつと表を睨みつつ繰り返して云つた。その勢に怯んだものか、格子は再び自ら開いて、物怪は遙かな虚空へ逃げて行つた。
「父は何と云ふ勇ましい、豪膽な人であらう。」
——さう思はれると、女御は此の上もなく頼みがひのある心地がせられて、いつぞやの姫の豫言や乳人の話も、偶然ではないやうに感ぜられた。
實際、兼家卿の官位は、その頃から際立つてぐんぐんと昇り始めた。兄の兼通卿がやつと中納言に任ぜられて、彼に追ひ着く隙もなく、弟は忽ち右大将になり、權大納言になり、

天祿三年の閏二月には、大納言に轉じて右大將をも兼ねて居た。「この勢ではもう直きに大臣になれるだらう」と、殿上人は目を見張つて囁き合つたが、同じ年の十一月に、太政大臣伊弉册が薨去されたので、機會は遂に到來したやうであつた。

「今度こそは少くとも、右大臣になれるに違ひない。」

かう信じたのは大將自身ばかりでなく、誰も彼も卿の榮進を期待して居た。しかし朝廷からは、いつ迄立つても何の御沙汰も下らなかつた。下らないどころか、それ迄官位の低かつた兄の兼通卿が、月末の二十七日に、意外にも一足飛びに内大臣に任ぜられ、やがて關白にさへなつたのである。

様子聞いて、東三條へ尋ねて來られた女御のおん眼には、涙があつた。父の右大將は、それこそ惡黨になりはせぬかと訝しまれるやうな、殺氣立つた眼つきをして、物をも云はずに控へて居た。

「それがしが聞いたところでは、堀河の伯父御が秘密に手段を選らして、是非とも關白の官旨を下し賜るやうに、たつて御門へお願ひ申したとやら、専らの評判でございます。」

と太郎の道隆が、女御と父とを見比べながら、慰めるやうな調子で云つた。「何も騒ぐには及ぶまい。向うにそれだけの手段があるなら、此方にも覺悟がある。」

右大將はただ斯う云つたきりであつた。さうして明くる日から病と稱して、當分内裏へ顔も出さなかつた。

三

堀河の大臣兼通卿が、關白の官旨を蒙る迄には、随分長い間の隠忍と勞とがあつた。卿は、弟よりも官位が低いばかりに、いかにも無能の兄のやうに目されるのが、心外でならなかつた。成る程卿には、弟のやうな潤達な氣象もなく、縦横の才氣もない。けれども卿は自分の材幹が、弟よりも劣つて居ようとは、どうしても信ぜられなかつた。自分の出世が遅いのは、兼家のやうな派手な所がなく、人づきあひが悪い爲めなのである。それなのに弟の奴は、自分の立身を鼻にかけて、動ともすれば兄をないがしろにしようとする。今に覺えて居るがいいと、さう云ふ風に考へて居た。

卿は右大臣家の二男に生れながら、幼い折から妙に陰鬱で、片意地で、可愛がられない少年であつた。さうして父の輔輔が亡くなつた後には、伯父の實頼も兄の伊弉も、三郎の兼家の爲めばかりを思つて、一向卿を相手にしない。大概の公卿ならば、とうに榮達の望みを絶つて、出家入道して、無理にも世の中をあきらめてしまふのが普通であるのに、卿はそのやうな意志薄弱な男ではなかつた。うはべは頗る働きのない、霸氣に乏しい人間に見えても、その實一徹な卿の胸中には、絶えず激しい功名心が執念く燃えて居た。

卿は四十の歳になるまで、機會の來るのを辛抱強く待つて居た。しかし、徒らに手をつかねて運命を自然に任せて居る限り、機會は永遠に來さうもない。

「伯父や兄が頼みにならないとすれば、自分は後の宮にお縋り申すより仕方がない。」

最後に卿はさう決心したのである。

其れはちやうど村上の御門の御代で、卿の御妹の安子姫が、中宮として時めいておいでになる時分であつた。ある日、弘徽殿の宮のおん許へ、兼通卿が何と云ふ事もなく候して、暫らくもちもちと躊躇つて居る様子であつたが、やがて、思ひ餘つたやうに、

「お願ひがござります。」

と、御前に近く振り寄りながら、額づいて云つた。

「わたしは、弟に先を越されるのが口惜しうございます。この後、せめて關白の旨旨だけは、兄弟の順序に仰せ下さるやうに、宮様のお手づからのお文を、いただきたくござりまする。」

后の宮は、不遇な兄君の此の言葉を、今更のやうに哀れに聞き召したのである。

「よし、よし、何なりと書いて取らせよう。」から仰つしやつて、直ぐに其の席でお文を卿へお渡しになつた。

卿はその折の御書付けを、御門や中宮が崩御になつた後までも、袋に入れて、頭に懸けて、肌身放さず持つて居た。安和二年の五月に、卿が四十五歳でやうやう宮内卿になつた時、弟の兼家は四十一歳で、既に中納言であつたが、「關白だけは自分が先に取つて見せる。と、卿は私かに成算を抱いて、わざと落ちて着き拂つて居た。」

御文を頂いてから殆んど十年近くも立つて、中宮の御腹の親王の圓融院が御在位の時、卿が弟に對する復讐の機運は、始めて熟して來たのである。天祿三年の十一月一日に、一條攝

政の薨去の報が傳はると、間もなく卿は參内して、清凉殿の殿上の間へ伺候した。主上はまだ十三四の幼いお歳で、鬼の間に遊んでおいでになると、其處へ兼通卿がむづかしい顔をして、這入つて來さうなけはひであつた。不平のあまり、日頃めつたに朝廷へ出たことのない、無愛想な此の伯父を、主上にはうるさく思召されたのであらう。楯形の窓の間から、卿の姿をちらりと御覽せられて、そのまま朝餉の間の方へ、駆けておいでにならうとすると、卿が二三歩お跡を追つて、「奏上いたします。」と云つた。

「此れを御覧下さりますせ。」

かう云つて、兼通卿が堅忍に捧げて居る物を、主上は生憎に思召しながら御手に取つて御覽になつた。それは、紫の薄様に、一關白をば次第のままにせさせ給へ。ゆめゆめ遣へさせ給ふな。」と、見事に走らせた女文字である。

「おお、此れは故宮のお手ぢや。」

なつかしさうに仰つしやつて、主上は暫らくお母後の亡き御佛を、お忍びになる御氣色であつたが、やがて御文をお持ちになつたまま、奥の間へ入らせられた。

かくて半月ばかりのうちに、内大臣の任命が兼通卿へ下つたのである。それからの卿は、思ひのままに驕足を伸ばして、關白になり、太政大臣になり、天延元年七月には、姫君を御門の中宮に奉つて、外戚の權威を振ふやうになつた。

卿はもう五十を越えた老人であつたが、半生の屈辱と逆境とに依つて、一層強く培はれた性來の實地型は、存分に希望を遂げた今日になつても、容易に緩和されないので、なほ弟を憎んで居た。弟に對する復讐はまだ充分でないやうに感ぜられた。自分が嘗て味はつたやうな孤立無援の状態に、弟の奴を陥れてやらう。――卿は始終さう思つて居た。

兼通卿の堀河の住居と、兼家卿の東三條の住居とは、閑院の邸一つを隔てて居るばかりなので、弟の家を訪れる公卿の牛車が聞える度に、

「又しても、東三條へ追従に行く」と見える。今通つたのは、あれは誰だ。」

と、兼通卿は氣色を悪くして、車の主を調べさせた。人は後難を恐れて、成る可く東三條へ近寄らないやうにした。たまたま巳むを得ない用事があれば、夜中にくつそりと尋ねて行つ

た。

卿は、女御の中宮が、美しい男親王をお生
みになるのを見ない内は、容易に安心が出来な
かつた。自分の孫にあたらせられる御方が天下
の主となられてこそ、自分の榮華は絶頂に達す
るのであつた。しかし、太政大臣の勢力を以
てしても、此ればかりは思ふに任せず、中宮に
は長く御姫の御様子がない。御門は心うく
思召して、兼家卿の二番目の姫を女御に上る
やうに、内内での御沙汰があつた。卿は再び、
更に激しく弟を嫉視した。

「中宮がああしておいでになるのに、東三條の
大納言が、女御を上る要はない。彼奴は何處
までも、磨に楯を突かうとする。」
卿はかう云つて、極力女御の御入内を妨げ
た。

「年中磨を喫つて居る弟の奴を、何とかして
亡き者にしてやりたい。」
などと云ふ恐ろしい考へさへも、胸中に浮ぶ
事があつた。

弟の兼家卿の方でも、黙つて兄に負けては
居ず、「たとへ關白が何と云はうと、上の御言
葉があるからは、差し控へるには及ぶまい。」さ
う思つて、世間へは知らせずに、姫君の入内の

支度を怠いで居た。

東三條の一門に取つて、此の上もないめでた
い事は、冷泉院の女御が、御姫なされたとい
ふ知らせであつた。それを聞くと、兼家卿の邸
の内は、俄に春が来たやうに活氣づいて、五
境の御修法や長日の御讀經や、御安産の加持祈
禱に手を盡した。

「東三條の大將は油斷がならない。彼奴は、
院の女御が男親王をお産みになるやうに祈つて
居るのだ。さうして行く行く、その親王を押し
立てて、謀叛をしようと思ふのだらう。」

こんな事を云つて、兼通卿はその祈禱をさへ、
苦苦しく感ぜずには居られなかつた。

太政大臣の執拗な威壓と迫害にも拘はらず、
御修はと御讀經とは、山山寺の大徳、修験者
に依つて半年の間怠らずに行はれた。院の女
御は貞元元年丙子正月三日に、恙なく男
親王を御産みになつた。

四

その明くる年、兼通卿が五十三歳の晩秋のこ
とである。太郎の顯光と、次郎の和光とが鷹飼
をつれて、大原野へ夕狩りに行かうとする日
に、

「お父様もおいでになりませぬか。」
と云つて、公達は頻りに父を誘つた。

卿は二三日前から、夕ぐれになると何となく
胸が塞がつて、かすかな頭痛を覺えて居た。
卿は平生自分の病氣を意議する事が嫌ひであ
つた。自分はまだまだ生きたければならぬ。
子孫の繁榮をたしかめた後でなければ、迂闊に
死ぬる譯には行かない。「さう云ふ考へが常に
頭にあるせるか、大抵の病氣には強ひて抵抗
しようとした。それが今度だけは、格別苦しい
こともないのに、どう云ふものか重病にかか
りさうな豫感に襲はれて、不愉快でならなかつ
た。」

「氣分がすぐれないのは、天氣が悪い爲めだら
う。しぐれ模様空が、毎日毎日鬱陶しく曇つ
て居るからだらう。」
かう思つて、無理にも安心して居たが、鷹狩
の日は朝來珍らしく晴れ渡つて、霏解けのした
庭の地面にうららかな小春日和の日光が、紫竹
の影をくつきりと印して居た。十月中旬の、
青空とした空の色を仰ぐと、卿は急に救はれた
やうな心地がして、こんな時には、血氣盛んな公
達と共に、山野を駆け廻つた方が、却つて頭痛
が一掃するやうに感ぜられた。

「よろしい、唐も一緒に行くとしよう。」
から云つて、卿は備い巻を纏まして、未の
下刻に堀河の邸から草毛の馬を驅つた。

けれども、卿はまだ道程の半分も来ないうち
から、早くも悪寒に襲はれ始めた。西日をうけ
て、ぱつと眼の覚めるやうに反射して居る比叡
山の頂きを、手綱を締めながら見上げようとす
ると、不思議な眩暈がして、仰向けにふらふら
と倒れさうになる。野尻束を纏うて地指が指貫
に蕉の皮の行囊をさへ穿いて居る兩脚が、浴ん
ど無感に冷え切つて、體中の血が蜂谷の邊へ
悉く集まつて来るやうに思はれる。久しく馬
へは乗らなかつたにしても、あまりに息切れが
して動悸が激しい。同じやうな紺の狩襖を着け
て、つきげの駒に跨がつて居る二人の公達の方
に、逆ましい鳴符の鷹に載れて居る様子や、犬飼の
手に丸かれた黒尾の犬の、狩場へ近づくにつれ
て、鈴を鳴らして勇み立つ姿が、をりをり卿
の注意を惹く毎に、卿は「はつ」として元氣に
なるが、それが一向長もちをしない。
「御血色がお悪いやうに見えますが、どうかな
さいましたか。」
隨身の一人が尋ねると、
「いや、別段……」

と云つて、物を云ふのも大儀らしく、卿はただ
首を振るばかりである。

日の暮れ方に鷹野へ着いてから後は、卿は全
く夢中であつた。夢中で、若い者に負けない積
りで森や叢や丘陵の間を馳せ廻つて居たも
の、辛うじて體が馬上に撃がつて居たに過ぎ
なかつた。最初は綱身が水を浴びたやうになつ
て、立烏帽子の縁がふるへるほど、頭蓋骨がき
りきりとなつて、凡べての光景が幻の如くぼん
やりと瞳に映つて居た。
太郎の顯光が、獲物の中の二羽の山鳥を、榊
の枝に結び着けて、右大臣の雅信卿へ贈らうと
して騒いで居る時、
「雄があるなら取つて置け、鷹が卯酒の肴に
する。」
と、負け惜しみを云つたのを、譏詠のやうに覺
えて居るだけで、卿は何處をどう歩いて何時こ
ろ家に歸つたのか、少しも記憶に残つて居ない。
恐らく途で昏倒して、公達や隨身どもに擔ぎ込
まれたのであらう。
気が付いて見ると、卿の耳には、何か地鳴り
のやうな響が、轟轟と聞えて居る。それは此の
世の落りの知らせで、自分は今、地獄へ墮ちて行

くのではあるまいか、それとも又自分の體は
船底のやうな所に押し籠められて居て波の音
に聞まれて居るのだらうか。——そんな事をう
つつともなく考へて居るうちに、卿にはふと、
それが大勢の人間の、騒騒しく怒鳴つて居る聲
であるらしく思はれて來た。聲はどうかすると、
蚊の呻るやうに遠くなつて、やがて今度は鳴神
のやうにおどろおどろしく近づいてくる。中
でも一番近い聲が、やがてはつきり卿の耳へ這
入り始めた。

「南無東方藥瑠璃光佛、藥王藥上菩薩、耆婆
醫王、雪山童子、……」
自分は病氣で寝て居るのだ。さうして誰か
が服藥の呪文を唱へて居るのだ。——卿が斯う
腹の中で呟いて居る間に、聲は一層明瞭に、朗
朗と呪文を高唱し續けた。
「……善神扶助、五臟平和、六腑調順、七十萬
脈、自然通張、四肢強健、壽命延長、行
住坐臥、諸天衛護莎訶。」
卿はばつちりと眼を開いた。
「お氣がおつきになりましたか。お藥を召し
上りませ。」
と云つて、典藥頭の丹波忠明が、今の呪文を誦
しながら、卿の頭へ乗りにかかるやうにして、口

元へ湯薬を注ぎ込んで居た。

「まろはどうしたと云ふ事だ。」

卿はかう云つて、自分の周囲を徐ろに眺めた。仰向きに寝て居る鼻先に、何か紅いものと白いものとがちらちらするので、顔越しに見定めると、それはけばけばしい紅梅の御衣を召された中宮のお顔で、おん睫毛には涙が一杯に宿つて居る。宮の左右に侍りながら、ずらりと枕もとに並んで居る家族の者共の兩頬も、同じやうに涙で濡れて居る。

「おお、お父様が眼をおあきになつた。」

公達の一人が斯う呼ばはつたやうであつた。同時に五六人の女房の顔が、息のかかるほど近くへ寄つて、「お氣をたしかになさりませ。たしかになさりませ。」と、口口に甲高い調子で云つた。先、夢の中で聞いて居た騒騒しい人聲は、忠明の呪文が止んでしまつても、未だに屏風の向うから、嚴かに絶え間なく響いて居た。

「あれは何を云つて居るのだ。あの聲は誰だ。」

「あのお聲がお分りになりましたか。あれは寛朝僧正や餘慶律師が、此の間から仁王經を讀誦遊ばして、御平癒の祈願をこめていらつしやるのでございます。」と、女房が云つた。

病氣の爲めに我を折つたことのない卿は、これだけの人人が寄り集まつて涙を流したり、泣きわめいたり、祈禱をしたりするほど、自分が瀕死の境にあるかと思へば、情ないやうなまじましいやうな心地がした。この月始めから自分を咎やかして居た豫感は、やつぱりほんたうであつた。自分はとうとう勝てなかつた。公達の話に依ると、鷹狩りの歸途に氣を失つて、その晩枕に就いてから、今日は既に七日目で、病氣は傷寒であると云ふ。――肩がばきばきにかいて、眼の球が扱られるやうに痛い。寝返りを打たうとすると、いつの間にか手足に力がなくなつて、體が不自由になつて居る。おつと静かに安臥して居ながら、襟首のあたりが始終火のやうに火照つて、その熱が盛んに燃え上る時は、隣臑として危く失心しさうになる。をりをり典薬頭が甘葛の汁に削米を入れて、枕の縁から口に注ぐのを、卿は何より旨さうにして舌にうけた。

それから長い間、卿は日に幾度となく、屢々昏倒し、屢々蘇生した。卿には正氣で居る時の熱病の苦しみよりも、前後不覺で居る時の幻覺の方が恐ろしかつた。

「まろの病氣は傷寒ではない。兼家の生靈が

崇つて居るのだ。餘慶律師は何をして居る。早く彼奴を調伏してくれ。」

そんな譚話を云ふかと思ふと、元方卿の惡靈が、磐石のやうな重みで、胸の上に跨がつて居るのだと云つたりした。凄じい夢の間には、嬉しい夢にも遇ふと見えて、

「后の宮が男親王をお生みなされた。忝い、忝い。」

と云つて、瘦せ衰へた頬に、寂しい笑ひを洩らしたりする。

九月が暮れて十月の初冬になつたが、卿の容體は快い方へ向かなかつた。朝のうちはいくらか氣分が落ち着いて、看護の人人と嫌よく話をするけれど、夕方からは必ず熱に浮かされる。さすがに我慢強い卿も、だんだん氣が弱くなつて、以前のやうに激しい譚話を、口走る精根もなく、ややともすれば情に脆さうな事を云ふ。夜の明け方に眼を覺まして、檯臺の灯の薄暗い影を見詰めて居ると、頭腦が透き徹るほどはつきりして來て、儼しかつた過去の生涯が次ぎから次ぎへと思ひ出され、自分は餘りに冷酷な人間であつたやうな心地もする。そんな考へが起るのは死ぬ前兆のやうにも感ぜられるが、それをどうしても追ひ拂ふことが出

來ない。

十一日の早朝の卯の下刻ごろ、卿は例のやうにすがすがしい頭を枕に載せて、暫らくの間、ちつと感慨に耽つて居た。爽やかな黎明の外氣が、何處からとなく流れて来る部屋の中には、二三人の女房が、長炭櫃を圍んだまま、看護に疲れて睡つて居る。今しがた起き出たらしい都の町町の、鶯の啼き聲や、寺寺の鐘の音や、往來の人の騷擾や、晧の物の響の遠くの方で鳴つて居るのが、高僧の讀經のやうに莊嚴に聞えて、卿は靜かに耳を澄ましてゐると、やがて近隣の公卿の家から、牛車に乗つて出て行く者があつた。轍の音は邸の方より東の方に始まつて、それが程なく此方へ練つて來るらしく、隨身の舞踏の聲が、凍えるやうな寒空に冴え返つて居る。

「あの車は、東三條の邸から出たと思はれるが、……」

卿は、狐語のやうに云つた。さうして、今頃弟の兼家は、何處を訪れる積りだらうと、訝しみますには居られなかつた。

「さうでございます。東三條の大將のやうに思はれます。」

と、女房の一人が眼を擦りながら云つた。折柄

次ぎの間に詰めて居た次郎の朝光も、急いで父の枕許へ馳せ寄つて、

「あれは叔父御に相違ございません。きつと叔父御は、お父様のお見舞ひに入らつしやるのでせう。」

かう云ひながら、意外の喜びに打たれたやうに、病人の顔色を窺ふのであつた。

「さうか。」と云つて、卿は既日して何事かを考へて居るやうであつた。日頃は仲が悪かつたが、兄の命の且夕に迫つて居るのを、弟はやつぱり案じて居てくれたのである。此れ迄兼家を恨んで居たのは、みんな自分の僻みであつた。今にも弟が見えたらば、潔く從來の罪を詫びて、一門の後事を託すしよう。關白の位をも譲つてやらう。さうしたら、弟は、どんなにか嬉し涙に明ぶだらう。――その刹那の光景を想像するだけでも、卿は胸が一杯になつた。

「東三條の大將が、まろの見舞ひに來てくれる。珍らしい事があるものだ。――その邊を綺麗に片附けて置けよ。」

卿はこみ上げて來る泣き聲を無理にこらへると、車はたしかに三條坊門を轉轉として

進んで來たが、卿の邸の門前には止まらずに、堀河の角を北へ曲つて、内裏の方へ行くのである。病床に侍つて、客の到着を待ち構へて居た人人は、一様に不審の眉を顰めた。朝光は早くも眼の色を變へて、再び恐る恐る、父の表情を偷み視すには居られなかつた。

「腐は此れから内裏へ參る。腐の體を抱き起せ。」

卿が突然かう云つたのは、車の響がもう聞えなくなつた時分である。

一瞬間に卿の相好は全く違つて、眞青になつた顔の中に、吊り上つた毗が狂人の如く血走つて居る。

「起せ、起せ、」と云ひながら、水を湛つた瘦せ犬のやうにぶるぶると顛ひ立て、口と鼻とを大きく歪めて、あはや息を引き取りさうな、切ない喘ぎ方をする。

「大變でございます、殿が物怪にお兇かれなかりました。」

近侍の者が、斯う云つて絶叫したのも無理はない。明日にも命の危い病人が、女房たちの力まかせに抑へる手を撥ね除けて、起き上らうとするのである。

「どうなされました、お父様、淺まらうござ

る。」
朝光が父の耳元へ口を寄せて、正氣を喚び返すやうに、厲聲叱呼した。

「兼家の奴は、兼家の奴は、……」

と、卿は車の過ぎ去つた方角を睨んで、性急に身を藻掻きつつ云ふのであつた。

「……鷹が病氣をよい事にして、内裏へ何か奏聞に行き居つた。さう云ふ人間なればこそ、鷹は彼奴を憎んで居たのだ。鷹にはきつと覺悟がある。今から直ぐに参内するから、早く車に裝束をしる。」

左右の袂を控へて居る公達の手を振り切つて、卿は獨りでもふらふらと歩いて出さうな

けはひである。病氣になる前の剛情と一徹とが卿の心を俄に捉へたのである。而もその剛情と一徹とは、長の煩ひに傷傷しく棄れて影のやうになつた人間を、達者な時よりも一層物凄く、人間以上の鬼神のやうに恐ろしくした。一座の者は卿の見暮に氣を奪はれて、命令のままにするより外仕方がなかつた。

「冠を持って」「東帯を持って」と呼ばはりながら、兩手を人の肩に懸けて、立ち上ると同時に卿は氣を失つたやうであつたが、しかし決してよるめきはしなかつた。氣を失つたまま袴を穿か

せ、袍を着けさせ、石帯を締めさせて居た。さうして、すつかり朝服を纏つて、黄金づくりの飾太刀を佩くや否や殆ど奇蹟に近い程のしつかりした足取りで、東の赤戸の階へ、二た足三歩歩いて行つた。顯光と、朝光と、二人の兄弟が惘然としてその跡を追つた。

三人の親子を乗せた唐鹿車が、堀河の邸を出たのは、兼家卿が通つてから半時も立たない間であつた。兄は父の卿とさし向ひになり、弟は卿の右に坐して、車の揺れる度毎に、兩方から卿を支へて居た。簾越しに、兄弟が物見の窓から戶外を眺めると、やうやう朝霧の晴れた地上には、霜が眞白に降りて居る。北に向つて走つて居る車の、蘇芳の緋の下簾の隙間や、傍立の手形の中から、すうすうと洩れて来る凜烈な寒風に、父は襟元を吹かれながら、後ろの窓に倚り添うて、仰向きに眼を閉ぢて居る。兄弟は、それでも病人が生きて居るのを不思議に感じつつ、紫色になつた父の顔色を、車の停るまで黙然として凝視して居た。

卿は内裏の瀧口の陣の所まで、公達に擔がれて來たが、そこから獨りで眞直ぐに簀子を渡り、白地に浮線緋の丸のついた下襲の裾を、長と曳き擦つて、清凉殿の具の隅の、荒海の障子の際から、この世に迷ひ出た幽霊のやうに弘明の間へ姿を現はした。さうして、漢の武帝が造つたと云ふ昆明池の風景を描いた、絳彩色の衝立の前を二三間進むと、案に違はず東三條の石大將が、今しも日御座へ臨御になつた主上に拜謁して、何事をか奏上してゐる最中であつた。

卿の機子を御覽になつた主上のおん驚きは、申すまでもない。後ろの方に衣ずれの音がするので、何氣なしに振り返つて見た石大將は、驚愕と云ふよりも寧ろ恐怖を覺えたのである。なぜかと云ふのに此の間から兄の病死を待ち設けて居た大將は、今朝明け方に兼通卿が息を引き取つたと云ふ風説を聞いて、その機を逸せず、關白の宣旨を自分へ下し賜はるやうに、急いで内裏へお願ひに上つたのである。剩へ其處に在んで居る兄の形相は、到底息のある人間の間隙のやうには考へられない。大將に取つては風説が無根であつた事に氣が付くよりも、兄が黄泉から來たのであると信ずる方が、遙かに自然なくらゐであつた。

兼通卿は昔懐として鬼の間の方へ立つて行く弟には目もくれず、先列耶を出た時のやうな沈着な態度で、御前に進んで平素のやうに恭

しく敬禮した。けれども其の瞳は、主上の龍顏を仰ぎ視ないで、兩手に捧げた象牙の笏の裏面へ、吸ひ着かれた如く注がれて居る。

「わたくしは今日、病を冒して、生あるうちに最後の除目を行ひに参りました。」

と、奏上した卿の聲は微かではあるが、風爽とした意氣に充ちて居た。此の言葉と共に卿は氣が弛んだのであらう、忽ちよるめくやうに頷づいて、笏をばつたりと床に落した。

* * *

右近大將藤原兼家は、何と云ふ罪もなく、ただ朝廷に對して不穩の舉動があると云ふ口實の下に、その日のうちに治部卿に貶せられた。それから程なく、兼通卿は關白の位を從弟の左大臣賴忠に譲つて此の世を去つた。

五

賴忠卿は、前關白とは反對に、女性的な誰に對しても恨みを買はない好人物であつた。卿は自分の姫を、女御に上げたいと思ひながら、なくなつた兼通卿に濟まないやうに感ぜられて、さうする程の勇氣もない。同時に兼家卿の境遇をも氣の毒がつて、長く治部卿の位置に置くの忍びなかつた。ちやうど攝河の兄が薨去

をしてから一年の後、天元元年の十月の除目に、東三條の弟は從弟の關白の推舉に依つて、始めて右大臣に任ぜられたのである。

しかし、兄にさへ楯を突くほどの右大臣は、從弟の親切を恩に着て居る暇はなかつた。關白が先任者の遺志を揮つて居る間に、右大臣は二番目の姫君を御門の女御に上つて、久しい間の希望を遂げた。それは御姉君の冷泉院の女御にも勝つた、愛敬のある、健やかに若若しい姫君で、攝河の伯父が存生中は、何となく氣むづかしい攝河の伯父が存生中は、何となく肩身が狭くて、あまり世間に顔出しをしなかつた道隆、道兼などの公達も、やうやう近頃時を得たやうに、蹴鞠の遊戲に加はつたり、物見車を走らせたりする。一昨年春の春お産のあつた院の女御は、そのうちに又二の宮の男親王をお生みになる。右大臣家に取つてめでたい出来事が、重なり合つて起る間に、前關白の御女の申宮は、父の卿のお跡を追はせられて、天元二年六月の二日に崩御になつた。

好人物の賴忠卿は、中宮の御法事を執行了した後、その年の冬に姫君を内に参らせて、傍若無人な右大臣に對抗を試みたが、春の初めには、早くも海壺の女御が御妊娠の御様子なので、初め

て御子をお儲けになる上の御喜びはひと通りでない。しばしのおん別れを、遣る瀆なく思召しながらも、三月と云ふにお許しが出て、女御は東三條のお里方へお歸りになる。その夜は朝廷に仕うまつる上達部や殿上人が寝らずお供に従つて、右大臣家に詰めると云ふ騒ぎであつた。例に依つて長日の御修法や御讀經が、内裏とおん里方と兩方で行はれる。内蔵司では白の御帳だの装束だの、いろいろの御産用の調度を拵へる。夜晝わかぬ御見舞の勅使が、内裏と東三條との間を馳せ違ふ。女御は五月の朔日から御産の御氣色があつて、あくる六月一日寅の時に、いささかの御惱みもなく、玉の様な男親王をお生みになつた。

どう云ふものか、その年は大風、地震、火災などが頻發して、七月には宮城の諸門が吹き倒され、十月には内裏が炎上した。御門は朝光大納言の住んで居た閑院の御殿へお移りになつて、僅か數町を隔てて居る東三條の邸の、若宮や女御のお身の上を、御軫念あらせられてのみお暮しになつた。御誕生後の御肥立もよく、御五十日や百日を恙なくお過しになつた。若宮のお姿を、ひと目御覽になりたいとは思しながら、假の内裏の所狭きままに、お呼び寄せになる譯

にも行かない。とすれば、東三條の女御のおん許へと思し立つ折もあるが、さすがに關白の頼忠卿の心中を衰れに思し召されて、そのやうな様子もない。ただ時時、賀茂平野などへ行幸遊ばされて、若宮の御成育をお祈りになるばかりである。

右大臣の幸運を見るにつけても、頼忠卿は頗りに焦つたが、卿の御女の女御は、遂に御子をお宿しにならなかつた。しかし關白の姫君であるから、誰に憚るところはない。御門からは、皇后の御位に即かせようと、有り難いお言葉さへ下つたのを、卿は御遠慮申上げて、「一の御子をお生みになつた海壺の女御をこそ。」などと、相變らず憤み深い風であつた。

「梅壺の女御は、行く末必ず後の宮にならされる御方である。今度は先づ、順序として卿の御女が、御位に即かれても宜しからう。」

と、朝廷の再度の御沙汰があつてから、卿は始めて安心して、内内で立后のおん催しを急ぎながら、總かに不平を慰めて居た。天元四年の冬の初めに、主上は新造の内裏へお移りになつた。男親王がお生れになつた上は、やがて御位をお降りにならうと思し召すもの、東三條におはします若宮と女御とは、な

ぜか其の後、長く参内せられなかつた。それは父の右大臣が、頼忠卿の御女の立后の噂を聞いて、わざと女御をお引き止め申して居たのである。御門は宸機を憚ませられて、幾度となくお迎ひの勅使をお遣しになるけれど、一向お召しに應じない。院の女御と、海壺の女御と、お二た方のお腹の親王たちと、それから女御の御兄弟の四人の公達と、此れだけの方々が一つの邸に日を送られる東三條の御殿の内は、いつも陽氣な笑ひ聲に充ち一居た。

あくる年の正月の庚申待には、冷泉院の女御のお部屋でも、梅壺の女御のお部屋でも、お召し使の女房たちをお相手に、夜を徹していろいろのおん慰みがあつたので、お邸の中は常にも勝る賑やかさであつた。太郎の道隆を頭に、こし十八歳になる末の弟の道長まで、四人の公達は彼方の御殿から此方の御殿へと、お二た方の女御のおん許を遊び歩いて、恭や雙六や、偏突や、いしなどりや、さては和歌のやりとりで餘念がない。

「お蔭様でわたくしどもは、睡くならずに済んでしまひます。」
と、女房たちも一緒になつて、夜の明けかかるのも知らずに、打ち興じて居た。

冷泉院の女御の御部屋では、ひとしきり勝負事が止んで、四方山の世間話が出来るやうであつた。兄弟のうちでも一番酒好きの道隆が、いつの間にかほろ酔の機嫌の緒を弄らせて、岩櫃の周圍に集まつた一座の人々を見渡しながら、雑談の中心となつて居る。女御がまだ姫君であらせられた頃の、物語りの乳人も交つて、話題は女房の衣裳の好みから、若い殿上人の品定めだの當時の歌よみ手書きの批評だの、和歌と漢詩の比較論だの、際限もなく擴がって行つた。

「和歌の話で思ひ出したが、まろは近頃耳よりの事を聞いた。あの和歌の上手な閑院の左大将の北の方は、離縁になつたと云ふではないか。」

と、次郎の道氣が、突然間から嘖を入れた。「ああ、あの話でございますか。あの事なら私はよく存じて居ります。」

と、かう云つたのは乳人である。「……御器量もよし、才もおありになり、三人の男君や美しい姫君までもお生み遊ばした北の方をお去りになると云ふのは、左大将がお悪いのでございますよ。つまりまあ、慾に眼が晦んだとでも、申すのでございませうね。」

「さうすると何かな、外に裕福な女があつて、その方へ嫁いたと云ふ譯かな。」

「さうなのでございますよ。ほら、御存知でいらつしやいませう、先日お亡くなりになつた枇杷大納言の北の方、あれが今度、左大將の北の方におなりなさいました。」

「あれがかい。」

かう云つて眼を圓くしたのは道隆である。

「あの北の方は、まろもよく知つて居るが、もう四十ぐらゐで、朝光とは親子ほどに歳が違ふ。それに色が黒くて、ちぢれ毛で、たしか額に痘瘡の痕があつた筈だ。いかに裕福だと云つてもなあ。」

公達が口を揃へて従弟の左大將朝光を散散に嘲ると、一座はどつと笑ひ崩れた。

「あのお方も、お父君の關白がおなくなりなされてから、妙に魔がさしたのでございませう。」

こんなことを云ふ女房もある。

「それどころではございません。今度の北の方について、もつとをかしい話がございませう。」

と、乳人がまた膝をすすめた。「先の北の方にくらべると、成る程御器量は及びませんが、それはそれは大將を大切になさる

のでございます。第一、お側には裳や唐衣や立派な装束をした女房が、三十人ばかりも仕へて居て、大將がお出でになれば、痒いところへ手の届くやうに、お持てなしをなさります。此の頃のやうに寒い晩には、炭火を澤山に焚いて、その上に伏籠を伏せて、大將がお召し喚への褌の服をいつもほかほかと暖めてお上げになる。炭櫃に銀の提下を二十ほど据ゑて、さまざまのお薬を並べてお置きになる。大殿籠る時などには、三四人の女房が大きな火鉢斗を持ち出して、お休みになる癖の上を、何過も何過も擦つて上げる。さすが裕福なお方だけに、萬事がさう云ふ風ださうでございますよ。」

「いやはや。」

と、三郎の道綱が大きな聲で云つた。

「それで朝九の大將は、その親切にほだされて、元の北の方の事を、ふつつり忘れてしまつたらうか。」

「ところがさうは參りません。をりをり元のお方を慰ひしう思召して、その方へ草をやれと仰つしやいます。肝腎の雑色だの隨身だの牛飼の童などが、今度の北の方から年中御酒をいただいたり、装束を賜はつたりして居るので、どうしても仰せに従はないのださうでございます。」

「あははははは、それを朝光は、よく辛抱して居られるな。あの男も父の關白に似て、片意地な、つめたい所があるのだらう。」

道兼が感心したやうに首を振つた。

「それでも左大將は、思つたよりも風流なお方でございます。このごろ、胡籐の櫛に水晶をつける事が流行るやうでございますが、あれは最初、あの大将がお考へになつたのでございませう。」

青裾濃の唐衣を着た、うら若い女房の一人が斯う云つて朝九を辯護すると、鷹揚な道長がにたりと笑つて、

「お許はあの人が好きと見える。」

と、横眼をつかひながら云つた。

「それはあんまりでございます。まあいやな事、……」

うるたへながら云ひ譚をする女房の口の下から、隅の方に居る誰やらが、

「最上川のほれば下るいな舟の……」

と、小さな聲で冷やかしたので、一座の者が、又どつと笑ひ崩れた。

此れ等の人人が、とかたまりになつて、多量もなくしゃべり合つて居る光景を、院の女御は

面白さうに打ち跳めておいでになつた。戸外はもうほんのりと白み初めたのに、一方の壁に懸けられた、帝釋天と青面金剛との畫像が燈臺の油煙の蔭にぼんやり浮かんで居る部屋の中は、いまだに和氣諷讀たる夜の圓居の有様である。

畫像の前には、さまざまの草花を盛つた六器や水瓶が、脇櫃の上に載つて居る。女御は其處から少し離れた御席に、白の御衣へ紅の唐綾をお重ねになつて、おん手を沈の火桶にかざされながら、をりをり、お側の者共と御一緒に、ほほ笑んでおいでになる。

「……ですが皆さん、經文のうちでは一體どのお經が、一番御利益があると思召します。」

或る女房がこんな問題を提出すると、それから暫ら經文の優劣に就いて、人人は實例を挙げつつ議論の花を吹かせて居た。或る者は仁王經の功德を讃へ、或る者は般若心經の靈驗を語つたが結局此處に集まつた男女の中では法華經を信する者が最も多數のやうであつた。

「何と云つても、法華經より有り難いお經はございませんまい。あのお經を讀誦したお蔭で、盲目の眼が開いたり、難病が助かつたりした例は、昔からどれ程あるか知れませんが、御利益のうちでも一番不思議な事は、あのお經を信心

すると、自分の前世が分るやうになると申します。」

かう云つて、乳母人が威丈高になつて、反對者を説き伏せにかかつた。

「それは外のお經でも御利益がないとは申しません。けれども前世を知る事の出来るのは、法華經だけでございませう。……」

「法華經を讀誦すると、どうして前世が分るやうになりますか知ら。」

かう云つて乳人に尋ねたのは、先刻の青裾濃の唐衣を着た女房である。

「それについて、こんな話がございますよ。」と、乳人は其の質問を待ち構へて居たらしく、物體ぶつた口調で言葉を續けた。

「つい此の間、美作の國に蓮華と云ふ坊さんが居りましたね。その人が幼い折から、毎日毎日法華經を讀誦して、しまひには經文を空で覺えるやうになりましたが、どう云ふ譯か、二十七品だけを覺えて、いつ迄立つても普賢品を覺える事が出来ません。或る時などは、普賢品の一の文句を、數萬遍も繰返して讀誦しました

が、やはりどうしても覺えられないで居りました。すると、たしか去年の夏の事だつたと申します。その坊さんの或る夜の夢に、普賢菩薩の

お使ひだと云ふ、貴い童が現はれて、廣は其方に、宿業の因縁を知らせに來たのぢやと、かう仰つしやるのださうでございませう。……」

「ほほう、其の坊さんの宿業と云ふのは、どう云ふのだらう。」

と、道綱が釣り込まれて言葉を挟んだ。人人はいつの間にか眞面目になつて、熱心に乳人の口もとを見守つて居る。

「その童が坊さんに仰つしやるには、其方の前世は狗であつた。其方は或る時、母親の狗に伴はれて、人の家の敷敷の下に住んで居ると、ちやうど板敷の上で、法華經を讀誦して居る者があつた。其方は有り難い經文を、床下で聞いて居た爲めに、人間となつて此の世に生れて來たのぢやが、その時親狗は、序品から二十七品までを聞いて、普賢品の讀誦を聞かずに、其方を

つれて床下を出て行つた。其方が普賢品を覺えられないのは、さう云ふ因縁であるからぢや。しかし、其方の信心に免じて、此の後は普賢品を覺えさせ進ぜよう。來世は必ず、法華經の功德に依つて、佛にめぐり會ふであらう。かう仰つしやつたかと思ふと、坊さんは眼が覺めま

した。それから後は夢の中のお告げの通りに、普賢品が易易と覺えられたさうでございませう。

から云ふ話には、まだいくらもございませうが、法華經の有り難きは、此れで大概お分りになるでございませう。」

因唾を呑んで耳を傾けて居た男女の顔には、知らず識らず敬虔の情が表はれて、誰も彼も此の物語を疑はうとはしなかつた。二三人の女房はいかにも緊張し切つた眼つきをして、ほつと微かな溜息をさへ洩らして居た。

「それほど法華經を信ずるお許は、自分の前世を知つて居るかな。」

道兼がこんな事を云つて、乳人に戯れたのは、餘程立つてからである。

「残念ながら、信心が足らぬと見えまして、まだ私の前世は分らないのでございませう。」

「お許のやうな物識りでも、さすがに前世だけは知らないな。——それ仲尼の智も、臚上の座を視る能はずか。」

いまだに酔つて居る道隆が、道兼の跡について、をかした節で斯う然鳴つた。一座は三たび賑やかに笑ひ崩れた。

喉を告げる鳥の啼く音が、頻りに表に聞えて居るけれど、御殿の内では、絶えず女房が、大殿油に油をさして廻つて居た。院の女御は、乳人の話の途中から、大さうお睡さうに、胸息に

凭れておいでになつたが、やがて其のままお休みになつた御様子である。俯伏しに倚りかかつていらせられる御頭の、長長と垂れたすべらかしのおん黒髪や、瀧浦の摺裳のうへに、組入の天井の燈籠の明りが眩く落ちて、おん頂きの黄金の釵子や、蝶鳥の銀絲の繡のあるお腰のあたりが、繪のやうに美しく、きらきらと輝いて居る。

「女御さまがお休み遊ばしたやうでござりませう。お邪魔にならないやうに、静かに致して居りませう。」

一人の女房が云つた。

「いやいや、もう夜が明けるのに、却つてお風を召すといけない。お起し申すがいいだらう。」

道長が斯う云ひながらお傍へ寄つて、

「お眼覚めなさりませ、お眼覚めなさりませ。」と、二三度くり返して云つた。

しかし女御は、何のお答へもなく、すやすやと快げに眠つておいでになるのである。

一夜が明けます。お眼覚めなさりませ。」

道長はもう一遍、おん耳元へ近づいて、少しく聲を張り上げて云つた。けれども依然としてお答へがない。四人の公達が不審に思つて、左右から言葉をかけ、胸息を揺つても、ただぐつ

たりと項垂れてのみおいでになる。「御氣分がお悪うございませうか。」

かう云ひかけて、道隆が試みに女御のおん手を取つて見ると、それは氷のやうに冷たくなつて居た。わづか半時前までは、御機嫌の好かつた院の女御は、法華經の利益の物語の間に、もう事切れておいでになつたのである。

たわわに携つた牡丹の大輪をゆり起すやうに、女房たちが御遺骸を抱き参らせると、夕顔の花のやうな白いお顔には、おん懐みの影だに

なく、らふたけたおん眉根の神神しさは、御存生中と變りがない。人人は、餘りの事で涙も出ないで、此の不可解な御遺骸を、怪しみ畏れるばかりであつた。

暫く立つてから、ふと、乳人が思ひついたやうに、

「きつと、元方卿の悪靈の業でござります。あの物怪は、何處まで御一門に祟りをするにか。」

と、云つて、急にさめざめと泣き始めた。

父の右大臣兼家卿は、悪靈を退治して御命を喚び戻すやうに、あらん限りの手段を悉した。

直ちに諸山の大徳や修験者を招いて、女御のおん遺骸をもとの通りに胸息に寄せ参らせ、その

周囲で盛んなる加持祈禱を行つたりした。耳
を聳するやうな讀經の聲が室内に轟いて、護
摩壇の火が、白綾の女官の御衣にあかあかと燃
え映つても、俯伏しに伏し給ふ御頭は、遂に起
きようとなさらなかつた。

かう云ふ混雜のうちに、庚申の夜は全く明け
放れて、風のない、静かな正月の空からは、大
粒の雪が續紛と降つて居た。

*
女御の御最期は、或ひは御不運であつたかも
知れない。しかし、女御が嘗て夕占問ひをなさ
れた折の、姫の言葉は偽りではなかつたのであ
る。なぜと云ふに、女御はおなくなりになつて
から、程なく皇后の御位を賜られ、御子の后
貞親王は、やがて帝の御位にお即きなされた
のであつた。

二人の稚兒

二人の稚兒は二つ違ひの十三に十五であつた。年上の方は千手丸、年下の方は琉璃光丸と呼ばれて居た。二人は同じやうに、まだ頑是ない時分から女人禁制の比叡の山に預けられて、貴い上人の膝元で育てられた。千手丸は近江の國の長者の家に生れたのださうであるが、或る事情があつて、此の宿房へ連れて來られたのは四つの歳のことである。琉璃光丸は某の少納言の若君でありながら、やはり何かの仔細があつて、やうやう乳への乳を放れかけた三つの歳に、都を捨てて王城鎮護の靈場に記せられたのである。二人は勿論、さう云ふ話を誰からともなく聞かされて居るものの、自分達に明瞭な記憶があるのでなく、たしかかな證據があると思ふ譯でもない。自分たちは父もなく母もなく、ただこれまでに丹精して養うて下された上人を親と観み、佛の道に志すより外はないと思つて居た。

「お前たちは、よくよく仕合はせな歩の上だと思はなければなりません。人間が親を戀ひ慕

うたり、故郷に憧れたりするのは、みな淺ましい煩惱の所業であるのに、山より外の世間を見ず、親を持たないお前たちは、煩惱の苦しみを知らずに生きて來られたのだ。」と、をりをり上人から諭されるにつけても、二人は自分たちの境遇の有り難さを、感誦せずには居られなかつた。

上人のやうな高德の聖でさへ、此の山へ逃げて來られた以前には、有りと有らゆる浮世の煩惱に苦しめられて、其の絆を斷ち切るまでに、長い間の觀行を積まれたのださうである。まして上人のお弟子の中には、朝夕經文の講釋を聴きながら、未だに煩惱を絶やす事が出来ないので、歎いて居る者が多數であると云ふ。二人は世の中を知らないお蔭で、それほど恐ろしい煩惱と云ふ悪病に、罹らずに済んでしまふのである。煩惱を滅せば、やがて菩提の果を證することが出来ると云ふ其の煩惱を、初めから解脱して居る自分たちは、近いうちに稚兒講を剃り落して戒律を受けたなら、必ず師の御

坊にも劣らぬやうな貴い出でなれるであらうと、其れを樂しみに目を送つて居た。

けれども二人は、子供らしい無邪氣な好奇心から、煩惱の苦しみとやらに充ちて居る浮世と云ふものがどんな思まはしい國土であるか、其處に住みたいとは思はぬまでも、いろいろの想像を廻らして見る事はあつた。上人を始め多くの先達の話に依れば、此の穢はしい世の中で、西方淨土の佛を僅かに傳へ一居るところは、自分たちの居る山だけださうである。山の四方へひらがつて、靑空の雲につづいて居るあの廣い廣い大地、——あの大地こそは、經文のうちにまざまざと描かれて居る五濁の世界であると云ふ。二人は四明ヶ嶺の頂きから、互ひに自分の故郷だと聞かされた方角を眺めおろしては、たわいのない夢のやうな空想を、胸に浮べずには居られなかつた。或る時千手丸は近江の國を眺めやつて、うす紫の霞の底に輝いて居る琵琶の湖を指しながら、

「ねえ琉璃光丸、あそこが浮世だと云ふけれど、そなたは彼處をどんな土地だと思つて居る。」

と、兄弟らしい口調で、もう一人の稚兒に云つた。

「浮世は塵や埃にまみれた厭な所だと聞いて居るが、此處から見ると、あの湖の水の面は、のやうに澄んで居る。そなたの眼にはさう見えないだらうか。」

瑞晴光丸は、そんな愚かな質問をして、年上の女に笑はれはせぬかと危ぶむやうに、恐る恐る云つた。

「だが、あの美しい水の底には恐ろしい龍神が棲んで居るし、湖の縁にある三上山と云ふところには、その龍よりもつと大きい蜈蚣が棲んで居る事を、そなたは多分知らないのだらう。山の上から眺めると浮世はきれいに見えるけれど、降りて行つたら其れこそ油断ならぬ土地だと、いつぞや上人が仰つしやつたのは、きつとほんたうに違ひない。」

かう云つて、千手丸は口元に伶俐巧さな笑みを洩した。

或る時瑞晴光丸が、遙かな都の空を望んで、繪圖をひろげたやうな平原に、蜿蜒と連なつて居る玉城の堯をさし示しながら、

「ねえ千手丸、あすこも浮世に違ひないが、彼處には、此のお寺の薬師堂や大講堂にも劣らない、立派な樓閣がありさうに見えるではないか。そなたはあの人家を何だと思ふ。」

と、不審らしく眉をひそめた。

「あすこには、日本國を知ろしめす皇帝の御殿がある。浮世のうちでは、彼處が一番深く貴い住居なのだ。しかし人間があゝの御殿に住まへるやうな、十善の玉位に生れるには、前世にそれだけの功德を積まなければならぬのだ。だからわれわれは、やつぱり此の山で修業をして、今生に出来るだけの善根を植えて置かなければなるまいぞ。」

かう云つて、千手丸は年下の兒を顧ました。

だが、剛ます方も、剛まさされて居る方も、此れだけの問答では、容易に好奇心を満足させる譯には行かなかつた。上人の仰せに従へば、浮世は幻に過ぎないと云ふ。山の上から眺めた景色が、たとへ美しさうに見えても、ちやうど水の面に映つて居る月の光りのやうなもので、影に等しく泡に等しいものであると云ふ。――あの、尾上の雲を見るがいい。遠くから眺めると雪のやうに清淨で、銀のやうにきらきらと輝いて居るが、あの雲の中へ這入つて見ると、雪でもなく銀でもなく、ただ濛濛とした霧ばかりである。お前たちは、此の山の谷底から湧き上る雲の中に、包まれた覺えがあらう。浮世はその雲と同じことだ。――かう云つて説明されると、

成る程それで分つたやうな氣はするが、やはり何處やら物足りなかつた。二人が殊に、最も物足りなく感じたのは、浮世に住んで居る人間の一種で總べての福の源とされて居る女人と云ふ生き物を見たことのない一事であつた。

「麿が此の山へ登つたのは、たしかに三つの歳ださうだが、そなたは四つになるまで在家に居たと云ふではないか。そんなら少しは浮世の様子を覺えて居てもよさうなものだ。外の女人は兎も角も、せめて母者人の姿なりと、頭に残つては居ないか知らん。」

「まろも時時、母者人の儀を想ひ出さうと努めて見るが、もうちつとで想ひ出せさうになりながら、うすい帳に隔てられて居るやうで、いつも焦れつたい心地がする。まろの頭にぼんやりと残つて居るものは、生暖かいふところから垂れて居た乳房の舌ざはり、甘いつかしい乳汁の香ばかりだ。女人の胸には、男の體に備はつて居ない、ふつくらとふくらんだ、豊かな乳房があるだけたしからしい。ただそれだけが折折おもひ出されるけれど、それから先は、まるきり想像の及ばない、前世の出来事のやうにばやけて居る。……」

夜になると、上人のお次ぎの部屋に枕を並

べて眼の二人は、こんな工合にひそひそと話をするのであつた。

「女人は惡魔だと云ふのに、そんな優しい乳房があるのは不思議ではないか。」

かう云つて瑠璃光丸が訝しめば、
「成る程さうだ。惡魔にあんな柔かい乳房がある譯はない。」

と、自分の記憶を疑ふやうに、千手丸も首をかしげる。

二人は幼い頃から習ひ覺えた經文に依つて、女人と云ふものが如何に憐愍な動物であるかを、よく知つて居る筈であつた。しかし女人が、

いかなる手段で、いかなる性質の毒物を流す物であるかは、殆んど推量する事が出来なかつた。

「女人、最爲に惡難一。縛着牽人入二罪門。」と云ふ優填王經の文句だの、「執劍向敵猶可勝、女賊害人難可禁」と云ふ智度論の文句から察すれば、女人は男子を高手小手に縛めて、恐ろしい所へ曳き擦つて行く盜賊のやうにも考へられた。けれども又、「女人は大魔王なり、能く一切の人を食ふ」と、涅槃經に説かれた言葉に従へば、虎や獅子より更に巨大な怪獸のやうでもあつた。「一」とたび女人を見れば、能く眼の功德を失ふ。縦ひ大蛇を見

るといへども、女人をば見るべからず。」と、寶積經に書いてあるのが本當であるとしたら、古語に棲む鱗のやうに、その體から毒氣を噴き出す爬蟲類でもあるらしかつた。千手丸と瑠璃光丸とは、さまざまの經文の中から、女人に關する斬らしい記事を搜して來ては、それを互ひに披露しあつて、常に意見を闘はした。

「そなたも魔も、その恐ろしい女人を母に持つて、一度は膝に掻き抱かれた事もあるのに、かうして今日まで恙なく育つて來た。それを思ふと、女人は猛獸や大蛇のやうに、人を喰ひ殺したり毒氣を吐いたりする物ではないだらう。」

「女人は地獄の使なりと、唯識論に書いてあるから、猛獸や大蛇よりも、もつとすさまじい形相を備へて居るのだらう、われわれが女人に殺されなかつたのは、よほど運が好かつたのだ。」

「だが――」

と、千手丸は相手の言葉を遮つて云つた。

「そなたの唯識論の、其の先の方にある文句を知つて居るか。女人地獄使、永斷佛種子、外面似菩薩、内心如夜叉、――かう書いてある所を見ると、たとへ心は夜叉のやうでも、面は定めし美しいに相違ない。その證據には、この間都から參詣に來た商人が、うつとりと磨の

顔を眺めて、女子のやうに愛らしい稚兒だと、獨り語を云うたぞや。」

「まろも先達の方から、そなたはまるで女子のやうだと、たびたびからかはれた覺えがある。まろの姿が惡魔に似て居るのかと思ふと、恐ろしくなつて泣き出した事さへあるが、何も泣くには及ばない、そなたの顔が菩薩のやうに美しくと云ふのだと、慰めてくれた人があつた。まろは未だに、褒められたのやら誹られたのやら分らずに居る。」

かうして話し合へば話し合ふほど、ますます女人の正體は二人の理解を超越してしまふのであつた。

大筒精界の靈場とは云ひながら、此の山の中にも毒ある蛇や逞ましい、獸は棲んで居る。春になれば鶯が啼いて花が綻び、冬になれば草木が枯れて雪が降るのは、浮世と少しも變りがない。ただ異なつて居るのは、女人と云ふ者がひとりも居ない事だけである。それほど佛に嫉はれて居る女人が、どうして菩薩に似て居るのだらう。それほど容貌の美しい女人が、どうして大蛇よりも恐ろしいのだらう。

「浮世が幻であるとしたら、女人もきつと美しい幻なのだ。幻なればこそ、凡夫はそれ

に迷はされるのだ。ちやうど深山を行く旅人が、
狭霧の中に迷ふやうに。」

いろいろ考へ抜いた末に、二人はとうとう斯
う云ふ判断に到達した。美しい、幻、美しい
唐無、——それが女人と云ふものであると、否
でも應でも決めてしまはなければ、二人の理性
はどうしても満足を得られなかつた。

年下の瑠璃光丸の好奇心は、恰も幼児がお
伽嚙の樂園を慕ふやうな、淡い氣紛れなもので
あつたが、年上の千手丸の胸に、縛つて居るも
のは、好奇心と言ふ言葉では表はせないほどに
強かつた。夜な夜な彼と向ひ合つて、すやすや
と熟睡する瑠璃光丸の無心な寢顔を眺めては、
自分ばかりが何故かうまで、頭を悩ますのであ
らうと、彼は他人の無邪氣さを羨まずには居ら
れなかつた。さうしてたまたま眼を潰れば、眼
險のうちに種種雑多な女人の、儂がありありと
浮かんで、夜もすがら彼の眼を騒がせる。或る
時は三十二相を具足する御佛の姿となつて、
紫磨金の光の中に彼を擁するかと見たり、或
る時は阿鼻地獄の積卒の相を現じて、十八本の
角の先から燃え上る炎の舌で、刹那に彼を燒き
殺すかと覺えたりする。ややともすれば、悪夢
に墮されてびつしりと冷汗を掻き、瑠璃光丸

に呼び醒まされて、尊の上に飛び起る事など
もある。

「そなたは今しがた、妙な謔語を口走つて呻つ
て居た。何ぞ物の怪にでも襲はれたのか。」
かう云つて尋ねられると、千手丸は恥かしさ
うに項を垂れて、

「まろは女人のまほろしに責められたのだ。」

と、聲をふるはせて答へるのである。

目を細るままに、だんだん子俤らしい快活
と單純とが、千手丸の素振りや表情から失は
れて行つた。隙さへあれば、彼はこつそり瑠璃
光丸の目を奪んで、大講堂の陣にイみなが
ら、觀世音や彌勒菩薩の飄忽な尊容に、夢見る
やうな瞳を凝らしつつ、惘然と物思ひに耽つて
居た。さう云ふ折に、彼の頭を一杯に壊めて
居るものは、唯識論の「外面似菩薩」の一句であ
つた。たとへ内心は夜叉に等しいにもせよ、又
その姿は幻に過ぎないにもせよ、この山の數
多の塔堂におはします諸菩薩のやうな人間が、
世の中に生きて居るとしたらどんなに端麗な、
どんなに莊嚴なものであらう。かう考へると、
女人に對する恐怖の念はいつの間にか消滅し
て、跡に残るのは怪しい憧れ心地であつた。藥
師堂、法華堂、戒壇院、山王院、——彼は山内

るところの堂宇をさまよつて、其處に安置して
ある本尊だの、脇士だの、楣院を飛躍する天人
の群像だのを、飽かず眺め入りながらうとう
とと目を送つた。もう此の頃では、年下の兒を
相手にして、女人の噂などを語り合はうとし

なかつた。「女人」の二字を口にするのが、瑠璃
光丸には何でもない事のやうに思はれるのに、
彼には不思議に罪の深い、悪事であるやうに感
ぜられて來た。

「自分はなぜ、瑠璃光丸のやうな無邪氣な態度
で、女人の問題を取り扱はうとしないのだら
う。眼には貴い御佛の像を拜みながら、なぜ
心には淺ましい女人の影が浮ぶのだらう。」

ひよつとしたら、これが煩惱と云ふものでは
ないかしらん。——さう氣が附くと、彼は身の
毛の疎つやうな心地がした。山の上には煩惱の
種がないと云ふ、上人のお言葉を靴みにしては
居るものの、自分はいつか煩惱の囚人となつて
居るのではあるまいか。いつそのこと、彼は日
頃の胸中の悶えを、上人に打ち明けて見よう
かとも思つたが、たやすく人に打ち明けてはな
るまい。と、絶えず耳元でささやく聲が聞えて
居た。その悶えは苦しいと同時に甘かつた。た
だ何となく、大事に藏つて置きたいやうなもの

であつた。

* * *

千手丸が十六になり、瑠璃光丸が十四になつた歳の春であつた。東塔をめぐる五つの谷には山櫻が咲き亂れて、四十六坊をつむ青葉若菜に、梵鐘の響きが蒸されるやうな、鬱陶しい、ものうい陽氣が毎日續いた。或る日の明け方、二人は上人の仰せをうけて、横川の僧正の許へ使ひにやられた歸り路に、人通りの稀な杉の木蔭に腰をおろして、暫しく疲れを休めて居た。千手丸はをりをり深い溜息をつきながら、兜率谷の底から立ちのぼる朝霧の、尾上の雲につながられて行くさまを、一心に視つめて居たが、ふと、

「そなたはさぞ、ちかごろの磨の様子を不審に思つて居るだらう。」

かう云つて、にこりともせず、年少の友の方を振りかへつた。

「……まろはそなたと浮世の話をし合つてから、女人の事が氣にかかつて、明け暮れ此のやうに惱んで居る。まろはゆめゆめ、女人に會ひたいと思ふのではないけれど、恥かしいことには、如來の尊像の前に跪いて、いくら祈禱を捧げても、女人の儀が眼の先にちらつて、

片時も佛を念ずる隙がない。何と云ふ惘れ果てた人間になつたのだらう。……」

瑠璃光は驚いて、千手の頬から流れ落ちる涙を見た。泣いて居るからには、千手は定めし眞面目なのであらう。それにしても、女人の問題がどうして彼に此れほどの苦悶を與へるのか、その理由が瑠璃光には分らなかつた。

「そなたはまだ、出家をするのに一二年間があるが、まろはことし得度するのだと、上人が仰つしやつていらした。だが、この思はしい根性が直らぬうちは、菩提の道へ志したとて何の效があらう。たとへ六波羅密を修し、五戒を守つても、頭の中の妄想が一期の障りとなつて、まろは永劫に、輪廻の世界から逃れる事は出来ないだらう。成る程女人は、虚空にかかると、紅のやうな、假りの幻であるかも知れない。しかしわれわれのやうな愚かな凡夫が、虹をまぼろしと悟るのには、有り難い説教を聴くよりも、いつそ雲の中へ這入つて見た方が、容易に合點が行くものだ。それ故まろは、出家をする前に一遍そつと山を下つて、女人と云ふものを見て來ようとした、さうしたらきつと幻の意味が分つて、立ちどころに妄想が消え失せるに違ひない。」

「そんな事をして、上人に叱られはしないだらうか。」

迷ひの雲を打ち拂ふ爲めに、女人の正體を究めに行くかと云ふ千手の決心は、いかにもいぢらしい。けれども瑠璃光には、たつた一人の友を恐ろしい浮世へ放してやるのが、心もとなく感ぜられた。琵琶の湖の龍神だの、三上山の蜈蚣だのが、出て來たらどうする氣だらうか。女人に手足を縛られて、眞暗な穴ぐらへ曳き込まれはしないだらうか。萬一生きて歸つて來ても、「わしが許すまで山を降りてはなりません」と、嚴しく警められた上人の掟を破つて、再び山に住むことが出来るだらうか。

「浮世には無数の厄難が待ち構へて居る事は、勿論覺悟して居るのだ。猛獸の牙にかかり、盜賊の刃に脅やかされるのも、佛法修行の一つではないか。過まつて命を落しても、かうして煩惱に苦しめられて居るよりは、増してはなにか。それに先達の話では、都はここから僅かに二里の道のりで、朝早く山を下れば、晝少し過ぎには歸つて來られると聞いて居る。都へ行くのが遠ければ、麓の坂本の宿へ降りても、女人は澤山見られるさうな。たつた半日上人の眼を掠めれば、まろの望みは遂げられるのだ。」

よしや後になつて露顯しても、悟りの道の妨げになる疑惑を晴らす事が出来たら、必ず上人は喜んで下さるに極まつて居る。そなたが案じてくれるのは忝いが、どうぞ止めずに置いてくれ。まろの決心は堅いのだ。」

「下手はきつぱりと云ひ切つて、脚下に展けて居る琵琶湖の水面の、曉の霧の中を滑るやうに昇つて行く日輪を眺めながら、

「幸ひ今日は又とない好い折だ。此れから出かければ未の刻には歸つて来られる。無事で戻つたら、今宵はそなたに珍らしい浮世の話を語つて進ぜよう。それを楽しみに待つて居るがいい。」

と、瑠璃光の肩へ手をかけて、宥め賺かすやうにした。「そなたが行くなら、まろも一緒につれて行つてくれ。」

かう云つて、今度は瑠璃光が泣いた。

「恙なく歸つて来られればいいが、たとへ半日の旅にもせよ、そなたの身に若しもの事があつたら、いつの世に再び會へるだらう。命を捨てても厭はないと云ふそなたと、今ここで別れるやうな不人情の眞似は出来ない。まして上人にそなたの行くへを尋ねられたら、まろは何と

云つて答へたらいいだらうか。どうせ叱られるくらゐなら、そなたと一緒に山を出て見たい。そなたの爲めに修行になるなら、まろの爲めにも修行になるに極まつて居る。」

「いやいや、妄想の間に鎖されたまろと、そなたの胸の中とは雪と墨ほどに違つて居る。淨瑠璃のやうに清いそなたは、わざわざ危難を冒して、修行をするには及ばないのだ。そなたの體に間違ひがあつたら、それこそ廢は上人へ申し譯がないではないか。面白い所へ出掛けるのなら、そなたを捨てて行きはしない。浮世はどんなにいやらしい、物凄く土地なのか、運よく命を完うして歸つて来たら、まろの迷ひの夢もさめて、きつとそなたに精しい話をして聞かすことが出来るだらう。さうすればそなたは、自分で浮世を見るまでもなく、幻の意味が分るやうになるのだ。だから大人しく待つて居るがいい。もし上人がお尋ねになつたら、山路に踏み迷つて、まろの姿を見失つたと云つて置いてくれ。」

それでも下手は、名残惜しさに瑠璃光の傍へ寄つて、長い間頬擦りをした。物心がついてから一度も離れた例のない友と山とに、ちよいとも別れるのが、辛いやうでもあり勇まし

いやうでもあつた。彼の感情は、始めて戰場へ出る士卒の興奮によく似て居た。實際死ぬかも知れないと云ふ懸念と、功を立てて凱旋したらと云ふ希望とが、小ひさな胸に渦を卷いた。

二日立つても三日立つても、下手は歸つて来なかつた。谷へでも落ちて死んだのではあるまいかと、同宿の人人が八方へ手分けをして、山中を残りず捜し廻つても、彼の姿は見えなかつた。

「上人さま、わたくしは悪い事をいたしました。先日わたくしは上人さまへうそを申したのでございます。」

かう云つて、瑠璃光丸が上人の前に手をつかへて、生れて始めて不妄語戒を犯した事を懺悔したのは、下手が居なくなつてから、十日程過ぎた後であつた。

「横川から歸る道すがら、下手どのを見失つたと申したのは嘘でございます。下手どのはこちらの山には居りませぬ。たとへ人に頼まれたとは云へ、心にもない偽を申したのは、わたくしが悪うございました。どうぞお許し下さりませ。なぜわたくしはあの時に、下手どのを止めなかつたのでございませう。」

さう云ひながら、瑠璃光丸は壘へひれ伏して、くやし泣きに身を悶えた。

自分が兄とも頼んで居た千手丸は、今ごろ何處をうろついで居るだらう。いかなる野末の草に寝ね、露に濡れて居るだらう。半日のうちに戻つて来ると、あれ程堅く云ひ残した言葉を思へば、きつと何か變事があつたに相違ない。此の上は徒らに山内を搜索するより、浮世を隈なく調べて貰ひたい。さうして幸ひに生き長らへて居たら、一刻も早く救ひ出してやりたい。

瑠璃光丸はさう決心して、叱られる事を覺悟しながら、千手が山を降りた動機を、包まず上人に白狀したのであつた。

「一旦浮世へ出て行つたからには、大海の中へ石ころを投げたも同然だ。千手の體は、もうどうなつたか分りはせぬ。」

上人は少年に對して威嚴を示す爲めに、ことさら眼をつぶつて息を吸ひ込むやうにして、考へ深い口調で云つた。

「それにしても、お前は妄想に迷はされずによく山へ残つて居た。年は下でも、お前と千手とは幼い時分から機根が違つて居た。――さすがに血と云ふものは争はれない。」

はやんどといふ殿上人の種である。「血と云ふものは争はれない。」と云ふ文句は、二人の器量や品格が比較される度毎に、以前から屢々人の口の端は上つて瑠璃光の耳にも響いて居たが、それを上人から聞かされるのは今日が初めてであつた。

「ほしのままに掟を破つて、山を脱げ出るとは情い奴だが、そんな愚かな眞假をした割で、憂き目を見て居るだらうと思ふと、不便にも感ぜられる。今ごろは犬に食はれたか賊に殺はれたか、恐らく無事で生きては居まい。もう此の世にははぬないものとあきらめて、追福を祈つてやるとしよう。それについてもお前は決して煩惱を起してはなりませんぞ。千手丸がよい見せしめだ。」

かう云つて上人は、利發らしい、くりくりとした瑠璃光の眼の球を覗きながら、「何と云ふ賢い兒だらう。」と云はぬばかりに、その背筋を撫でてやつた。

毎晩瑠璃光はたつた一人で、上人のお次ぎの部屋に寝なければならなかつた。別れる時に、「では直き歸つて来る。」と云ひ捨て、人日にからかぬやうに、わざと往來の淋しい崎嶇たる峠道を、八瀬の方へ辿つて行つた千手の後ろ姿

が、夜な夜な彼の夢の中で、小ひさく小ひさく遠くへ消えた。今になつて考へれば、見ず見ず命を落す事に極まつて居たものを、無理にも斷念させなかつたのは、自分にも罪があるやうな氣がするけれど、あの折自分が一緒に居たら、どんな禍が待つて居たらうと想像すると、彼は覺えず己れの幸運を祝福せずには居られなかつた。

「此れと云ふのも、自分には御佛の冥護が加はつて居たのだ。自分は飽くまでも上人の仰せを守り、行く末高德の聖になつて、必ず千手丸の菩提を引つてやらう。」

さう繰り返して、瑠璃光は心に誓つた。果して自分が、上人から褒められたほどの鋭い機根を備へて居るなら、いかなる難行苦行にも堪へて、遂には眞如法界の理を悟り、妙覺の位を證する事が出来るに違ひない。――かう思ふだけでも、けなげな彼の頭の中には、無限の信仰が燃え上るやうに感ぜられた。

やがて其の年の秋が来た。千手が山を下つてから既に半年の月日が過ぎた。満山の蟬しぐれがうら悲しい蟬の聲に代つて、森の梢がそろそろ黄ばみ始めた時分である。瑠璃光丸は或る日ゆふべの勤行を終つて、文殊樓の前の石段

を、宿院の方へ降りて行くと、

「もし、もし、あなたさまは瑠璃光丸と仰つしやいますか。」

かう云つて、あたりを憚るやうに、石段の上から小聲で呼びかける者があつた。

「わたくしは山城の國の深草の里から、主の使ひで、あなたさまをお尋ね申して参りました。

この文を私からあなた様へ、直き直きにお渡し申すやうに、云ひ付かつて居るのでございませう。」

男は樓門の蔭に身を隠して、袂の裏に忍ばせてある文の端を、何か曰くがありさうにちらりと示しながら、頻りにべこべこお時儀をして瑠璃光をさしまねいた。

「——かう申ただけではお分りになりますまいが、くはしい譯は此れにしたためてございませう。此の文を、成るべく人目にかからぬやうに御覽に入れて、是非御返事を伺つて参れと云ふ、主の申し付けでございます。」

瑠璃光は、いやしい奴僕の風俗をした、あまりの薄暮のある男の顔を、胡散らしく見守つて居たが、何心なく受け取つた文の面に眼を落すと同時に、

「おお、千手どのの手だ。」

と、我を忘れて叫ばずには居られなかつた。その甲高い調子を、男は制するやうにして言葉を續けた。

「さやうでございます。よく覚えて居て下さいました。その文の主は、あなたさまと仲好しであつた千手丸さま、今の私のあるじでございます。ことしの春山を降りると程なく恐ろしい人買ひに渡はれて、長い間いたましい思ひをなさいましたが、未だに御運が盡きなかつたのでございませう。ちやうど二た月ばかり前に、深草の長者の許へ下男に賣られたのが縁となつて、あの優しいみめかたちを長者の娘に見初められて、今では其の家の入り簪になり、何不足ない羨ましい御身分におなりなさいました。

ついではいつぞやの御約束通り、浮世の様子をあなた様へお知らせ申したく、この文を持参いたしましたのでございます。浮世は決して、山の上で考へて居たやうな幻でもなく、恐ろしい所でもない。女人と云ふものは、猛獸や大蛇などに似ても似つかない、彌生のは花よりもきらびやかな、御佛のやうに情深いものだと思ふことが、こまごまと書いてある筈でございます。

千手丸さまは、長者の娘ばかりか多くの女人に戀ひ慕はれて、明日は神崎、けふは蟹島、江

口と云ふやうに、處處方を浮れ歩いて、二十五菩薩よりもうるはしい遊女の群れにかしづかれながら、春の野山を狂ひ飛ぶ蝶蝶のやうな、楽しい月日を送つておいでになるのでございませう。かほどに面白い浮世とも知らずに、わびしく暮らしておいでになるあなた様の御身の上を考へると、お氣の毒でなりませんので、成らう事ならそつと深草の里へお迎へ申して、昔のよしみ此の仕合はせを分けて上げたたいと、かやうに主人は申して居ります。私がお見受け申しても、あなた様は千手丸様にも勝つた美しい、愛らしいお稚兒でいらつしやるのに、かう云ふ山の中でお果てなさるのには、あまり勿體なうございませう。あなた様のやうなお立派な御器量のお方が、世の中へお出でになつたら、どんなに人人から持て囃されいとしがられるのでございませう。まあわたくしの申すことが謠かまことか、その文を御覽なすつて下さいませう。さうして是非、わたくしと一緒に深草へお出で下さいませう。私は此れから近江の國の堅田の宿へ打ち越えて、あすの明け方には再び此處へ戻つて参ります。それまでの間によくよく分別をなすつて、決心がおつきになつたら、誰にも見咎められないやうに、此の樓門の下で私を待つてい

らつしやいまし。必ず必ず悪いやうにはいた
しませぬ。もしあなた様をお連れ申す事が出来
たら、主八はどれほど喜んでございませう。」

かう云つて、にこにこ笑つて居る男の風體が、
瑠璃光には諷もなく恐ろしかつた。半歳ぶり
で思ひもかけぬ友の消息を得た嬉しさを、しみ
じみと味はふ暇もなく、自分の一生の運命に
關する重大な問題を、不意に鼻先へひろげら
れた彼は、暫らく息が詰まるやうな、眼が眩め
くやうな心地に襲はれて、戦慄しながら立ちす
くんで居た。

「さても其のちの數數の事ども、いづこに筆
を起しいづこに筆をとどむべくさふらふやら
む。みづから山に罷りこし絶えて久しき對面し
て、まああたり申し聞えんとおぼえ候へども、
一旦掟を破りさふらふ身にては、一乘のみね高
くそばだちて仰ぐべからず、一味のたに深くた
たへて近づき難しとこそ覺え候へ……」

かう書いてある手紙の端を持つたまま、瑠璃
光は自分で自分の身を疑ふが如く、ただ上の
空で、ところどころの文言を慌しく讀み散ら
した。「半日がほどにて歸り候はんなどまをし
候て、かく打ち過ごしきふらふ間、さだめて
われに謀られたりとおぼし構へられ候はんこ

と、かへすがへすもくちをしよう心ぐるしくおぼ
え候。千手が身に於いては、さるころがまへ
初めより露ばかりも候はず、その日のゆふぐれ
宿坊へ戻り候はんとして、雲母越にさしか
かり候をりふし、俄かに物蔭よりをどり出で
たる人のさまにて、淺ましう口をふたがれ眼を
ふたがれて何處ともなく昇き行かれさふらふほ
どのこちち、佛罰たちどころにいたりて生きな
がら三途八難に赴くかとおぼえ候ひしぞや。」

かう云ふ殊勝な文句もあれば、また思ひ切つて
大膽な「あらをかしやあらをかしや。」と云ふ言
葉を以て書き起した、神をも佛をも憚らぬやう
な一節が見えた。「あらをかしやあらをかしや、
浮世は夢にても幻にても候はず、まことは西
方淨土を現じたる安樂國にて候ぞや。けふこ
のごろの千手が爲めには、一念三千の法門も、
三諦同融の觀行も、さらに要ありとも覺えす
さふらふ。圓頓の行者たらんよりは、煩惱の凡
夫たらんこと、はるかに樂しくよろこばしく

候ぞかし。かやうに申しさふらふことをば、
かまへて御惑ひあるべからずさふらふ。とくと
く御ところをひるがへして、山を降りさせたま
ふべきなりとおぼえ候。」——此れがまさしく
あの千手丸の口吻であらうか。あれほど信心深

かつた、煩惱の二字を呪ひに呪つて居た千手丸
の、此れがほんたうの料簡であらうか。その文
章の全幅に溢れて居る冒瀆な言語と、妙に浮
き浮きした調子と、一種人を壓迫するやうな意
氣組みとは、瑠璃光の胸に強い反感を挑發する
と共に、一方ではそれと同じ強さを以て、長い
間頭の奥に潜んで居た「浮世」に對する好高心
が、むらむらと湧いて來るのであつた。

「あすの朝まででよろしうございませうからとつ
くりとお考へなさいまし。申すまでもござい
ませんが、決して他人に相談をなすつてはなり
ませんが、此の山の坊さんたちの云ふことは、み
んな眞赤な諷でございませう。あなた様のやうな
罪のないお稚兒に、世の中をあきらめさせよう
として、好い加減な氣体めを云ふのでございま
す。兎にも角にも、其の文をゆつくり御覽にな
つた上、御自分で御分別をなさいまし。ようご
ざいますか。」

男は瑠璃光の顔つきに表れて居る狐疑の色
を、それと見て取つてそのかすやうに云つ
た。さうして、いそがしきうに二三度軽く頭
を下げて、すたすたと石段を駆け降りて行つ
た。

それでもまだ、瑠璃光の體のふるへは止ま

らなかつた。男は純潔な生一本な少年の心に、這入り切れないほどの重苦しい物を託して行つた。自分が明日の朝までに用意して置く返答に依つて、自分の將來がどうにでもなる。——そんな大事件が、彼の手に乗ねられた例は嘗てなかつた。さう自覺するだけでも、彼は激しい動悸を制することが出来なかつた。

夜になつても、不安と興奮とに胸裡を支配されて、彼は到底與へられた問題を、靜かに落着いて考へる譯には行かなかつた。長へに封ぜられて居た「女人」の秘密を發き、いたるところに驚異の文字を連ねてある不思議な手紙を、もう少し胸騒ぎが治まつてから讀み返して見ようと思ひながら、そつと机の上に載せたまま、彼は瞑目して一心に佛を念じた。なつかしい舊友の消息ではあるけれど、折角自分が勇猛精進の志を堅めて、隨緣起行の功を積まうとして居るものを、不意に横あひから掻き亂さうとするのが、恨めしくもあり腹立たしくもあつた。

一讀めは迷ひの原になる。いつそ燒き捨ててしまはうかしらん。」
かう思ふ傍から、「そんなに危険を感じるほど、自分は弱い人間ではない。」と、己れの卑怯を

嘲笑ふ氣にもなつた。自分が迷ふのも迷はぬのも、御佛の思し召し一つである。浮世が幻でないといふ千手丸の言葉が、果してどれだけ信ずるに足るか、どれだけ自分を誘惑するか。その誘惑に堪へられないくらゐなら、自分は御佛に捨てられたのであると、をりをり頭を擽けて来る好奇心が、彼にいろいろの辯解の辭を作らせずに措かなかつた。

「……そもそも女人のやさしさ美しき、繪にも文にもかきつくしがたく、何にたとへ何にくらべてか告げまらせ候はん。……きのふもよどの津に舟をうかべて、江口と申すところに参り候へば、川ぞひの家よりあまたの遊女たち水にさをさして寄りつどひ候ありさま、せいしぼさちの降り立ちたまふか、楊柳觀世音の假形したまふかとあやしまれて、世にもめでたくありがたくおぼえさふらひしに、やがて千手が舟をめぐりて口口に神樂催馬樂をうたひどもし候へば、何にてもあれ、歌一首きかせんと申しさふらふほどに、一人の遊女ふなばたをたたいて、有漏路より無漏路へかよふ釋迦だにも羅睺羅が母はありとこそきけと、くりかへしくりかへし、節をかしうらたひ出で候ものか……」

その前後の文章は、千手が渾身の力をこめて、瑠璃光の道心を突き崩さうとして居るやうな書き方であつた。生れ落ちてから十六年の後、はじめて世間と云ふものを見せられた若人の、無限の歡喜と讚嘆とが、其處に聲高く叫ばれて居た。或るところでは有頂天になつて踊り上り、或るところでは自分を欺いて居た上人を怨み、或るところでは幼馴染の瑠璃光の爲めに、昔に變らぬ友情を誓つて、敵意を披瀝して下山をすすめて居るのであつた。瑠璃光は今迄に此れほど深い讀後の印象を、經文の一節からも、他の何物からも受けた事はないやうに感ぜられた。

「十萬億土の彼方にあると信ぜられて居る極樂淨土は、つい此の山の麓にある。其處には無數の生きた菩薩が居て、自分が行けばいつでも款待してくれる。」——此の驚くべき事實は、もはや一點の疑ふ餘地もない。千手の手紙には書き洩らしてあるけれど、其處には定めし迦陵嚩伽や孔雀や鸚鵡が囀つて居るのであらう。碑礫礫の樓閣や、金銀赤珠の階道が築かれて居るのであらう。忽ち瑠璃光の眼の前には、お伽噺にあるやうな素晴らしい空想の世界が、まざまざと描き出されたのであつた。それほど樂

しい世界へ降りて行くことが、何故悟道の妨げになるのであらう。何故上人は、その世界を卑しき、その世界から自分たちを遠ざけようとするのであらう。彼は謙恐に打ち克たうとする前に、打ち克たなければならぬ理由を知りたかつた。

彼はほの暗い燈火のかけに文を繰り展げて、幾度も幾度も読み返しながら、一と晩中、まんどりともせずに考へ明かした。自分の智識、自分の理解力のおらゆる範圍から、手紙の事實を否認するに足るだけの、何等かの證據を掴み出さうと藻掻いても見た。我ながらけなげであると思はれるほど、良心の聲に耳を傾け佛の救ひを求めても見た。さうして結局、彼が最後の決心を躊躇させて居るものは、ただ住み馴れた宿院の生活に對する未練さと、上人の訓戒が強ひる盲目的な畏敬との外には、何も存在しないのであつた。

しかし、此の二つの物は案外熱切に彼の心を把握して居た。彼がどうしても山を降りまいと努めるならば、此の二つの感情を、出来るだけ高調し助長するより道はなかつた。
「お前は千手丸の報告を信じて、佛陀の教や上人の警めを信じないのか。物薄なくも佛陀

や上人を誑つきだと云ふのか。それでお前は濟むと思ふのか。」

かう、彼は聲に出してまで呟いて見た。浮世は千手丸の云ふやうに、きつと面白い所に相違ない。けれども其の面白さに引かされて、十四年來築き上げた堅固な信仰を一朝にして抛つてしまつていいであらうか。自分は此の間かは難行苦行に堪へようかと云ふ誓を立てて居なかつたか。現世の快樂を得られたにしては居なかつたか。その爲めに佛罰を蒙つて、來世で地獄へ墮ちるのであつたら、十倍二十倍の苦痛ではないか。

「血と云ふものは争はれない……」

この文句が、その時ふと瑠璃光の胸に浮かんだ。自分と千手丸とは幼い折から機根が違つて居る。自分には佛佛の加護がある。自分が今、運よく來世の應報を想ひ出したのも、必ず佛佛の加護に違ひない。來世と云ふものがある以上、自分はどうして佛罰を恐れずに居られよう。來世の希望があればこそ、上人はわれわれに現世の快樂を禁ぜられたのであらう。千手丸は信じて居ないやうであるが、自分は飽くとも來世を信じ、佛罰を信じよう。それでこそ始めて、自分の機根が優れて居ると云へるで

はないか。上人が自分を褒めて下さつたのは、此處のことを云ふのではないか。

その考へは、たとへば天の啓示のやうに瑠璃光の頭上に降つて來た。最初は電光の如く閃閃ときらめいて居たものが、次第に汪洋たる海の波濤の如くにひろがって、ひたひたと瑠璃光の魂を浸し、全身に漲つて來た。そのすがすがしい、調朗たる音楽に酔つて居るやうな心持ちは、三昧の境地に這入つた行者でなければ味はひ得ない、極めて貴い宗教的感激であるかのやうに覺えたのであつた。瑠璃光は我知らず掌を合せて眼に見えぬ佛を拜んだ。さうして、胸の奥で次ぎの言葉をつづけざまに繰り返した。

「しばしの間でも今生の榮華に心を移して、來世の果報を捨てようとした愚かな罪を、どうぞお許し下さいませ。もうわたくしは二度と再び、今夜のやうな淺ましい考へを起す筈はございませぬ。どうぞお許し下さいませ。」
もうどんな事があつても、自分は人の誘惑に乗りはしない。千手丸が現世の快樂に耽りたれと思ふなら、獨りで勝手に耽るがいい。それで來世は無間地獄へ墮つて倒さまに落されて、無量劫の苦しみを忍ぶがいい。その折にこそ自

分は西方淨土へ行つて、高い所から彼の泣き喚く姿を眺おろしてやらう。もう何と云はれても、自分の信念は搖ぎはしない。自分は各機一髪の際に喰ひ止めたのだ。もう大丈夫、もうたしかだ。

瑠璃光が斯う云ふ決心に到達した時、長い秋の夜がしろじろと明るくなつて、曉の勤行の鐘が朗らかに鳴つた。彼は平生より幾層倍も緊張した胸を抱いて、今しがた眼を覺ましたらしい上人の居間へ、うやうやしく侍候した。

千手丸の使ひの男は、その日の朝の卯の刻ごろに、文殊樓の石段のほとりに待つて居ると、果して其處へ瑠璃光丸はやつて來たが、少年の答へは全然彼の豫期に外れて居た。

「浮世は面白であらうが、まろには少し仔細があつて、山を降りるのを止めにする。まろは女人の情よりも、やはり御佛の恵みの方が有り難い。」

と、瑠璃光は云つた。さうして懷ろから昨夜の文意を取り出しながら、

「まろは、此の世で苦勞する代りに、後の世で安樂を享ける積りだと、千手どのに傳へておくれ。此の文を持つて居ると却つて心の迷ひになる、どうぞ此れも、ついでに持つて歸つてお

くれ。」

男が不思議さうに眼をしばたいて、何事をか云はうとして居る隙に、急いで瑠璃光は文意を地に投げ捨てて、後をも見ずに宿房の方へ委を消した。

かくて其年の冬になつた。

「もうお前も、來年は十五になる。千手丸の例もあるから、春になつたら早早出家をするがいい。」と、上人は瑠璃光に云つた。

だが、一日舊友の消息に依つて、掻き亂されさうになつた彼の心は、一時の情熱で無理に抑へて居たものの、決して長く平靜を伺つては居なかつた。彼の胸にも、だんだん煩惱が

暗の光を放ち始めた。嘗て千手丸を苦しめた妄想の意味が、彼にもやうやう分りかけて來た。彼も千手丸と同じやうに、女人の夢に見たり、堂塔の諸菩薩の像に戀惑を感ずる時代となつた。どうかすると、彼は千手丸の手紙を返してしまつたのが、惜しいやうな氣持ちが

した。ことによつたら、また深草から使の男が來はしまいかと、何となく待たれる目もあつた。彼は上人に顔を見られるのが恐ろしかつた。

けれども、未だに「御佛の冥護を信じて居る瑠璃光は、千手丸のやうな無分別な行動を取らうとはしなかつた。彼は或る時上人の前に畏まつて、こんな事を云つた。

「上人さま、どうぞわたくしの愚かさを憐んで下さいまし。今ではわたくしも、千手どのを嘲笑ふことが出來ない人間になりました。どうぞ私に、煩惱の炎を鎮める道を、女人の幻を打ち消す方法を、授けて下さいまし。解脱の門に這入る爲めには、どんなに辛い修行でも厭はぬ覺悟でございます。」

「お前は其れを、よくわしに懺悔してくれ。ほんたうに見上げた心がけだ。感心な稚兒だ。」と、上人が云つた。

「さう云ふ邪念が萌した時には、ただ偏へに佛の御慈悲にお纏り申すより仕方がない。此れから二十一日の間、毎日怠らず水垢離を承つて、法華堂に參籠するがいい。さうすればきつと御利益に與つて、忘まはしい幻を打ち拂ふことが出来るだらう。」

かう上人が教へてくれた。ちやうど其の明るの日から二十一日目の、満願の夜であつた。瑠璃光が堂の柱に凭たれながら、連日の疲勞の結果とらと居睡り

をして居ると、夢の中に氣高い老人の姿が現れて、頻りに彼の名を呼んで居るらしかった。「わしはお前によい事を知らせ上げてあげる。お前は前世で、天竺の或る國王の御殿に仕へて居る役人であつた。その時分、其處の都に一人の美しい女人が居て、お前を深く戀ひ慕つて居た。しかしお前は、其の頃から道心の堅固な、情慾に溺れない人間であつた爲め、女人はどうしてもお前を迷はす事が出来なかつたのだ。お前は女人の色香を斥けた善果に依つて、此の世では上人の膝下に育てられ、有り難い智識を授かる身の上になつたが、お前を慕うて居た女人も、未だにお前を忘れかねて、姿を變へて此の山の中に住んで居る。お前が女人の幻に苦しめられて居るなら、その女に會つてやるがいい。その女は、お前を迷はせようとした罪の報いで、此の世では禽獸の生を享けたが、貴い靈場を棲み家として、朝夕經文を耳にした爲めに、來世には西方淨土に生れるのだ。さうして、漸く極樂の蓮華の上で、お前と共に微妙の菩薩の相を現じて、無十方の佛陀の光明に浴するのだ。その女は今、唯獨り此の山の釋迦ヶ嶽の頂きに、手紙を負うて死なうとして居る。早く其の女に會つてやるがいい。さうしたら、其の

女はお前より先に阿彌陀佛の國へ行つて、お前の菩提を蔭ながら助けしてくれるだらう。お前の妄想は必ず名がなくなつて居るだらう。——わしはお前の信仰を賞づる餘り、普賢菩薩の使者となつて兜率天から降りて來たものだ。お前の信仰が行くする長く搖がないやうに、此の水晶の珠數を與へる。決してわしの言葉を疑うてはなるまいぞ。」

瑠璃光がはつとして我に復つた時、もう老人の姿は見えなかつたにも拘はれず、彼の膝の上には、正しく水晶の珠數が曉の露のやうに、瑤瑤と輝いて居た。

十二月の末に近い朝まだきの、身を切るやうな寒風の中を、釋迦ヶ嶽の頂上へ登らうとするのは、いたいけな稚兒に取つて、三七日の水垢離に堪ず難行であらうものを、淺からぬ三世の宿縁を深いで居る女人の、現世の姿に會ひたさに、險しい山路を夢中で迎つて行く瑠璃光には、何の苦勞も何の障礙も感ぜられなかつた。途中から罪業として降り出した細のやうな雪さへも、彼の一徹の意志と情熱とを、ますま十燃え上らせる薪に過ぎなかつた。見る見るうちに天も地も谷も林も、清濁たる銀色に包まれて行く間を、彼は幾たびか躓き倒れながら

進んだ。

やうやう頂上に達したと思はれる頃であつた。淵を巻きつづ續粉として降り積もる雪の中に、それよりも更に眞白な、一塊の雪の精かと訝しまれるやうな、名の知れぬ一羽の鳥が、翼の下にいたましい負傷を受けて、點點と眞紅の花を散らしたやうに血をしたたらせながら、地に轉けて喘ぎ悶えて苦しんで居た。その様子が眼に留まると、瑠璃光は一散に走り寄つて、雛をかばふ親鳥の如く、兩腕に彼女をしつかりと抱き締めた。さうして、聲も立てられぬほどの嵐の底から、彌陀の稱號を高く高く唱へて、手に持つて居た水晶の珠數を彼女の項にかけてやつた。

瑠璃光は、彼女よりも自分が先に凍死にはしないかと危ぶまれた。彼女の肌へ蔽ひかぶさるやうにして、顔を伏せて居る瑠璃光の、可愛らしい、小さな建築のやうな稚兒髷の髮に、鳥の羽毛とも粉雪とも分らぬものが、頻りにはらはらと降りかかつた。

金

と

銀

第一章

動坂の終點まで行く筈であつた青野は、根津の停留場へ來ると、なぜか慌てて車掌臺の方から電車を飛び降りてしまつた。その時ちやうど彼と擦れ違ひに、運轉手臺の方から乗り込んだらしい一人の男があつた。さつぱりしたポオラルのインパネスを着て、白っぽい烏打帽子を被つて居るその後影が、車内の吊り革にぶら下つて居るのを、青野は往來から遠く見送つてほつと胸を撫でおろした。

「たしかに今村に違ひない。好い胸梅だつた。もう少しでふん掴まるころだつた。」

彼はほんたうに虎口を脱したやうな氣がした。去年の夏假裝會をやるのだと云つて、今村の外套と薩摩上布とを借り出した上、其の晩すぐに質に入れて姿を晦ましてしまつてから、青野は今村に掴まりさへすれば、必ず攪りつけられるものと覺悟して居た。電車の中だからが大道のまん中だからが、見附け次第を取を掻か

せてやると、揚言して居る今村の噂も彼は内内聞き込んで居た。新聞には度び度び悪名を曝され、友人からは擯斥されて、恥を取とも思はなくなつて居る青野でも、擲られる事だけはさすがに恐ろしかつたのである。

だが、あれから一年立つた今日、今村はもうあの夏外套の事などは忘れてしまつたかの如く、また新しいインパネスを拵へて得得として着て歩いて居る。その様子が、いかにも金に不自由のない、物を盜まれても平氣な境遇に居る事を證據立てて居るやうなので、青野はいくらか安心もすれば羨ましくも感ぜられた。あんな立派な外套を纏つて居たら、己に會つてもまさか擲る譯には行かないだらう、などとも思つた。去年の外套は質屋で五圓にしか取らなかつたが、今年の奴なら拾圓は大丈夫だらうといふやうなさもしい考へさへ、胸に浴べずには居られなかつた。

「いや、今村は己に氣が付かなかつた筈はない。己が急いで前の方から降りようとした時

彼奴はちらりと己の顔に横眼を使つて、わざと反對の方角から乗つたやうだつた。事に依つたらもう今村は己なんかを相手にしない積りなのか知ら？」

さうだとすると、擲られるよりは餘り屈辱であるやうな氣がして、青野はひとりりで顔が赤くなるのを覺えた。戸外を歩く度毎に始終こんな心配をするくらゐなら、いつそ早く取つ掴まつて、一遍に擲られてしまつた方が、却つてせいせいするだらうとも考へられた。

「なんだ馬鹿馬鹿しい！ 逃げるには及ばなかつたぢやないか。擲りたければ擲らしてやりやあよかつたんだ。」

彼は路傍の人に聞えるほどの高い聲でかう獨語を云つた。自分と云ふ人間が、まるで他人のやうに賤しく、醜く、滑稽に見えて仕方がなかつた。自分が今村の地位に在つて、自分のやうな男を友達に持ち、往來のまん中で打んたぐつてやつたら、さぞ痛快を感めるだらうと、つまらない想像に耽つたりした。

實際、青野のやうに自分で自分の悪い性分を十分に知り抜いて、散散愛想を盡かして居ながらも、その性分を遂に改めることが出来ず、生涯それに引き擦られて生きて行かなければ

ならない人間は、かうして自分を擧げることが、たつた一つの自分を許す逃げ道であつた。さうしなければ彼は到底自分の體の置場がなかつた。彼は自分でも、自分のやうな卑しい人と一緒に歩くのが溜らなく厭であつた。折折は自分の悪い性分を自分の外へ放り出して、敷いたり、憐れんだり、をかしがつたりしてやりたかつた。そんな風にすれば、せめて一時は自分の品性が高まるやうに感ぜられた。

「世の中の凡べての者が今村と同じく自分を捨ててしまつたら、自分は果して安穩に生きて行けるだらうか、それだけでなくも喰ふに困つて居るのに、さうなつたら自 はどうする見だらうか。」

「さうなつたら」どころではない、もう大分さうなつて來て居るのである。少くともたつた一人の親友 大川を除いてしまつたら、現在の青野を救つてくれさうな篤志家は一人も居ない。舊友と云ふ舊友はみんな今村の味方になつて、彼の横つ面に脊骨の一つや二つを喰らはせかねない連中ばかりである。まだしもふん縛られて警察へ突き出されないのが、仕合はせなくらゐである。此の場合、もしあの 大川にまでも捨てられるやうな事があつたら、さうして其れ

でもまだ生きようとするなら、否でも應でも盜賊になるか乞食になるより外はなからう。根津の通りを田端の方へぼんやりと歩いて行つた青野の頭には、こんな考へが際限もなく組んづ解れつした。彼は時時、はつと我に復つた如く立ち止まつて、初夏の往來を眺め廻した。きれいに晴れ渡つた朝の青空や、新緑の上野の森や、鮮かな日光を受けて目の醒めるやうに明るく照つて居る屋根や地面や、そんな景色が彼には特別に美しく見えた。かうして此處に居んだまゝ、いつまでも此の景色に見入つて居られたら、どんなに幸福だか知れないとも思つた。ふと、五六年前、彼がまだ今日のやうに落ちぶれない時分、フランスから歸朝する際に暫く足をどめて居た中央印度のガンヂス河の流域の風光が、蜃氣樓の如く彼の目の前に浮かんできた。ベナレスや、ラホールや、アムリツアルの町の、夢の都のやうな不思議な色彩、寶石の結晶したやうな殿堂や寺院の建築、其處に住んで居る市民や行者の、お伽噺の人間じみた奇妙な服装——それ等の物が臘ろけになつた記憶の底から、嘗て目撃した實在の世界とも、彼自身の空想の産物とも別らない程自由に精細に、儼然と彼の瞳を射るのであつた。今も

あの大陸のあの地方へ行けば、此の六月の青空の下に、あれ等の光景がまざまざと展開して呟ると云ふ事實が、青野には何だか本當とは信ぜられなかつた。あの素晴らしい、まるで刺繍の給のやうな國土へ足を踏み入れた時代の彼と、こんななまで尾羽打ち枯らして根津の通りを辿つて居る彼の之間には、何處をどう捜しても全く何等の連絡もないのであつた。

彼は仰向きに首を反らせて、遠い故郷を慕ふやうな眼つきで、つくづくと空の色を視つめてから、またすたすたと歩き出した。大川の家へ行つて、牛肉か洋食か、何か知らず脂っこい、滋養分を含んで居さうな食物に行りつく積りで、わざと書飯も喰はずに出て來たせむか、いつの間にか非常な空腹を覺えて居た。大川に會つたら先づ第一に、「ああ腹が減つた。牛肉を御馳走しないか。」と云ふやうな癡癡式に洒洒落落と切り出してやらう。すると大川が「よしと云つて早速ロースを一斤か、或ひは一斤半ぐらゐ注文する。水こんろの鐵鍋の上で、どどろのセビア色に煮つまつた肉の塊を、温かい飯と一緒に舌へ載せながら、はつはつと馬のやうな息を吹き吹き、口の中がぐちやくちやにならるほど嘔みしめたらどんなにうまいだらう。さ

うして、気が重くなるほど胃袋へ一杯に物が詰まつて、下腹がむつくりとゴム鞠のやうに膨れて來たら、どんなに生きがひのある心地がするだらう。……さう想つて見るだけでも、青野の鼻先には、芳ばしい牛糞の匂がぷーんと襲つて來るのであつた。彼は一層足を早めながら、動坂を右へ曲つて閑静な郊外の町へ滲入つた。

其の邊には、一體にかなめの生垣を繞らした、気樂さうな、小綺麗な住宅が並んで居た。茶の湯の宗匠でも住ひさうな、庵室めいた風雅な普請だの、市内の豪商の別邸でもありさうな、廣廣とした庭を圍んだ、奥床しい板塀の構へなどが、ところどころに入り交つて、油のやうに光つて居る綠樹の新芽と其の鮮かさを争ふやうに、新築の木の香を漂はせて居た。さう云ふ自家の一つ一つが執れも牛糞の匂と等しく、青野の慾望を刺戟せずには置かなかつた。自分が一度は、こんなおんびりした家の内に暮らして見たい。かう云ふ理想の主となつて、少しの屈託もない、余裕のある生活を營んで見たい。此處に住んで居る紳士たちは、みんな今村の着て居たやうな夏外套を持つて居るだらう。牛肉なんぞは厭になるほど喰ひ飽きて居るだらう。中には又、淑女畫報に出て來

るやうな、花やかなハイカラな妻君を持つて居る奴も居るだらう。無論相當の資産があつて、身の周りの小遣ひにも月に百圓や二百圓は水のやうに流すのだらう。青野が此れから訪ねて行かうとする大川も、たしかに幸福な彼等の中の一入である。いや大川ばかりか、青野と同期に美術學校を卒業した同窓の中には、大川に劣らない境遇に出世したものが既に二三人は居るのである。青野にしたつて、順當に行きさへすれば、決してそれだけの地位を得られない筈はなかつた。卒業當時の評判から云へば、誰を措いても、彼が眞先に立身しさうな形勢であつた。その形勢に狂ひを生じさせた罪は云ふまでもなく、青野自身にある。みんな自分の心がけが悪いのである。我ながら呆れ返るほど淺ましい、社會の公人として立つて行くべき資格のない、忌まはしい天性の背徳病のお蔭である。

田端の山の上の、大川の邸の煉瓦塀が眼に這入ると、青野は急に恐ろしい所へ來たやうな気がして、一步一步に足が竦み動悸が昂まつた。いかに大川が自分に對して常に寛大で、親切であるとは云へ、自分は今、どの面下げて彼の門を叩くことが出来るだらう。それも單

純な訪問だけならばまだしもであるが、例に依つて金の無心に行くのである。何の面目あつて、どんな顔つきをして、それを云ひ出すことが出来るだらう。冗談らしく笑つて頼むのは、あんまり今迄に彼を欺し過ぎて居る。さうかと云つて泣いて拜むほどしらしい人間にもなり切れない。ゆうべの手紙で、ほぼ大川は承知して居るやうなもの、それでも機嫌よく貸してくれるやうな事は、黙つて居ても先方から札の束を投げ出してくれるやうな事は、萬が一にもありさうではない。なんぼお人好しのお坊つちやんの大川でも、きつと不愉快を隠し得ないで、一應は出し盡るやうな態度を示すだらう。その不愉快を突き破つて、無理にも金を借りて來るのは、相手が大川であるだけに、餘計青野は心に濟まなかつた。今村の外套を盗むよりも、もつと罪の深い、殘酷な悪事であると思はれなかつた。

一雄辯は銀、沈黙は金と云ふ諺がある。それをもぢつて能才は銀、天才は金と云つたところで誰が異議を唱へるだらう。少くとも藝術家としての素質に於いて、君と僕とは金と銀との相違がある。銀があつて始めて金の眞さが分るやうに、僕には君のえらさがよく分つて居

る。僕は飽く迄も君を尊敬する。昔で青野にからう云ふ手紙を寄せた大川は、未だに其の時の氣持を失はずに居るのである。青野の人格のゼロである事が立證せられた今日でも、依然として大川は彼の藝術的天分を畏敬して居る。青野のえらさは自分でなければ分らないと云ふやうな、一種の誇さへも抱いて居る。去年の秋の展覽會に出品された青野の大作が、故意か偶然かあらゆる藝術家や鑑賞家に依つて黙殺されてしまつた際にも、大川だけは「寧ろ嫉妬を感じず」と云つたくらゐに、心の底から傾倒して、賞讃の言葉を惜しまなかつた。審査員を始めとして、すべての先輩や友人が、彼の平素の背徳を憎むの餘り、あれだけの作物に一言の批評も、一片の同情も與へてくれなかつた時に、かう云つてくれた虚心坦懐な大川の氣象が、青野には涙の出るほど有難かつた。賜まで腐つてしまつた自分の根性に比較して、大川の純潔さが、それこそ一嫉妬を感じずらくらゐに氣高く見えた。大川だけは自分を捨てないで居てくれる。自分もせめて此れからは、彼に捨てられるやうな不義理・眞面目をしまいと、青野は固く胸に誓つた。にも拘らず、その後彼は、大川に對してどれだけ義理を守つた

らう、義理を守つたどころか、却つて相手の好意に附け込んで有りつただけの破廉恥な行爲を重ねたではないか、二三日で返すからと云つて、内地ではめつたに買ふことの出来ない中世紀の印度の宗教畫や、文藝復興期の名畫の複製を借りて来て、右那無耶の間に五十圓で古本屋へ賣り拂つたり、それを大川に發見されて、頭を掻いてゴマカシたり、さう云ふ悪事はあれから既に幾度となく繰り返して居る。もしも外套を盗んだだけで、今村に擲られる理由があるとすれば、彼は、大川からいつ何れ絶交狀を送られても、文句の云へないハメになつて居る。まして大川は、美術學校時代の彼の舊友のうちで、技術から云つても傾向から云つても、將來彼と角逐し競争すべき唯一の對抗者であつて、彼の墜落を心ひそかに祈つて居る隨一人であらねばならなかつた。青野と同じロマンテイツクの世界に憧れ、同じ境地に美の幻影を求め居るらしい大川が、人一倍青野の天分を嫉視したり、その逆境に痛快を感じたりするのは、極めて自然な事であつた。彼に對して、表面はより、親切を装ひ、寛大に振る舞つて居る大川の胸中に、敵ふべからざる嫉妬の情の燃え狂つて居ることは、他人は知らず、青野には

ハツキリと看取することが出来た。大川が自分を過度に庇護してくれるのは、自分に對して温情のある果ではなく、その嫉妬の自ら欺かぬが爲めであることへ、邪推し得る場合もあつた。我が儘な性質の一面に、恐ろしく神經過敏な道徳を持つて居る彼は、なまじひに嫉妬に悩まされて居る爲めに、猶更相手の貧窮を救はずには居られなくなつて居るらしかつた。電燈であるとは氣が付き居ながら、青野は仕様ことなしに其の弱點に斬り込んで、かけられるだけの迷惑をかけた。勿論大川を困らせるのが主眼ではなく、金を借りるのが目的ではあつたけれども、少くとも或の意味に於いて自分が強者となり得る相手を、そのパトロンに見出したことは、擦れつ枯らしの彼に取つて、全然愉快でないことはなかつた。彼は自分の意地の悪い性分を呪ひながらも、大川に濟まない濟まないと思ひながらも、ややともすれば得意の情を色に現したり、口吻に洩らしたりした。それが大川には又たまらなく不愉快なやうであつた。自分の弱點をさらけ出すと共に、相手の弱點をも發き出して、その土金を捲き上げて行く青野のやり方を、彼はどれ程憎んだか知れなかつた。落魄した舊友を惠んで、高潔な義侠的精神を發揮

したやうに口惚れて居た彼は、いつの間にか自分が衰へむべき僞善者であつて、相手に試されて居る事を發見したのである。外の人なら氣持ちよく依頼に應ずる場合でも、相手が青野である事に處つて、友情だの誠意だのと云ふものが、お互ひの胸に微塵も湧き上つて来ない。思ひやりの深い、徳義に厚い人間であつた筈の自分は、その實他人の才能を嫉妬する偏狭な男で、相手が其れに附け込んで居る光景が、其處にまざまざと曝露される。さうなつても彼はやつぱり、隠露されたままに任せて、青野を見限つてしまふ氣になれなかつた。それほど大川は負け惜しみの強い、同時に正直な性分でもあつた。青野に對する嫉妬の情がたとへ一分でも存する間は、自分の藝術が青野を追い越さない内は、青野を捨てる譯には行かないと、堅く決心して居るやうであつた。さうして其の決心が堅ければ堅いだけ、反對に嫉妬の火の手はますます盛んに燃え上るらしかつた。青野が社會から葬られて、生活難に喘ぎながら天井裏のやうな二階で描いて居る近頃の製作を見る度に、めきめきと新境地を開拓して行く豐かな天分に脅かされて、彼はいよいよ青野を自分の強敵であると悟らずには居られなかつ

た。あんなに落ちぶれ切つて居ても、いつかは再び世間に認められて、自分の聲價を凌ぐやうになるであらう。たとへ其れが自分と青野との死後に生ずる出来事であつても、妬ましの變りのある筈はない。かう云ふ考へが、絶えず大川の頭に巢を喰つて居る様子は、青野にありありと讀めるのであつた。大川の抱いて居る嫉妬は、眞の藝術家が必ず感じなければならぬ、實に、尊敬に値ひする嫉妬である事は、彼も十分に知つて居た。それなのに彼はむごくも其の感情を利用して、飽く迄も大川に厄介をかけようとするのである。自分の惡徳に比れば、大川の僞善の方がどれ程いたましく、どれ程殊勝であるか分らないと云ふ氣がむらむらと起つて来るにつれて、青野はかうして大川の家を訪ねて行く自分の體が恨めしかつた。

「さうだ、せめて今日だけは快く牛肉の御馳走になつて、金の話なんぞしないで歸るとしよう。ゆうべの手紙の用件はやめにしたと云つて安心させてやらう。よしんば食ふに困つて日乾しになつても、大川にあんな思ひをさせるよりは増しかも知れない……」

彼は一旦ぐりかけた門の前を通り過ぎて、

その邊を二三度往つたり來たりした。かう云ふ折にいつても衰へれる一種の胸騒ぎの底から、忘れかかつて居た空腹の感覺が、再び激しく胃袋をきゆうきゆうと絞るやうであつた。牛肉を喰はせて貰ふことが、金を恵まれるのと同じ程度に、目下の彼には緊急な用件となつて居た。

第二章

書生に導かれて大川の書齋のドアを明けた時、青野は金の問題を斷念することに腹をきめて、輕輕とした心持ちで室内へ足を運んだ。

「ああ君君、ゆうべの用件はもう済んでしまつたから今日はずだぶらりと遊びに來たんだ。何しろ恐ろしく腹が減つてるんだから、牛肉を奢つてくれたまへ。此の頃の僕は豆腐と味噌汁で命を繋いで居るんだぜ。」

大川が出て來たら、早速かう云つてからから笑つて見せる積りで、内内その言葉をくちさずさんで居た彼は、三十分ばかり其處に獨りで待たされて居た。暫くの間彼は室の中央の紫檀の机に頬杖をついて高臺の縁に臨んで居る東向きの窓の彼方の、海のやうにひらけた郊外の田圃を眺めて居た。正午に近い太陽を一面に浴びて居る平原の、ところどころに點在して居る森

だの人家だのが、真白な窓掛けのレース越しに、遠くの方でピカピカと光つて居る。こつてりとペンキ塗りにしたやうな藍色の空へ、どこからともなく午砲 音が放たれると、見る見るうちに遙かな野へ反響が瀾漫して、小ひきなどんが地平線の四方八方から、ゴム鞆を弾ませるやうに微かに無 にとどろいて居る。と、千住や三河島邊の工場の汽笛が、俄かに伏兵の起つた如く聲を揃へて啼き始めた。

「ただ今先生は仕事をやりかけていらつしやいますので、失禮でございますが御飯を召し上りながら、もう少しお待ち下さいませうに。」

やがて書生が這入つて来て、かう云ひながら机の上に 食事の用意を、整へるのを、青野は面をふくらせながら見守つて居た。あんなに戀ひ憶れて居た牛肉のあてが外れて、其處に並べられたものは錦手の大きな井と、細根大根に赤生姜をあしらつた漬物の小皿とに過ぎなかつたのである。天どんとも、五もくとも、鰻飯とも想像される其の入れ物を、彼は恨めしきうに横眼で睨んで、せめて鰻であつてくれればいいなどと思つたりした。が、さう思つたのは僅かの間で、書生が居なくなつてから井の傍へ寄つて見ると、蓋を明けるまでもなく、下

から紙屑のやうにはみ出して居るころもに依つて、中味が天どんである事が直ぐに分つた。

「ちよッ、天ぶらかア」
彼は憶えずこんな獨語を口走つた。何だか妙、涙の出るほど忌ま思ましかつた。

「仕事をして居る」と云ふ書生の言葉から察すると、大川は朝から閉ぢ籠つて何か書いて居るのだらう。秋の形覽會に出品すべき製作の準備にそるそる取りかかつて居ると云ふ時が、二三日前の新聞にも出て居たやうであるから、或ひは手をつけ始めたのかも知れない。自分の仕事を人に見られるのが大嫌ひな大川は、青野に對しては、特に一層秘密主義を守つて、容易

にアトリエへ這入らせなかつた程であるから、從來とても場合に依れば一時間や三十分は待たされる例があつた。けれども今日、青野には、かうして長く待たされるのが何となく尋常な事でないやうに感ぜられた。

「またづうづうしく金の無心にやつて来たんだね。實際君は始末に困る。もうとても僕の手には負へないから、今度だけは勘辨してくれ給へ。どうか成るべくなら待つて居るうちに考へ直して、僕に何はずに歸つてくれ給へ。」と云ふやうな謎を遠廻しにかけられて居るの

ではあるまいかと邪言された。青野の眼には、大川の恐ろしく不機嫌な、昨夜の手紙を讀んだ時から其の問題を苦に病み續けて居る臆病な顔つきが、もうはつきりと見えるやうな心地がした。今日こそはどうかして青野の奴に愚弄されまい。金を貸しても貸さないでも己は常に彼奴から馬鹿にされた結果になつて居る。それを今度は何ととして巧みに切り抜ける方法はないか知らん。」と、頻りに頭を悩ましたが

「仕事もろくに手につかないで、徒らに胸糞を悪くしたり、業を煮やしたりして居る様子を考へると、青野は氣の毒でたまらなくもあり痛快なやうでもあつた。或る善良な罪咎もな

い一人の人間が、自分のねぢくれた根性のために斯くまで不愉快を催して居る事實が、彼にはしみじみ、情なくつて、誰と云ふ相手もなしに腹が立つた。

「大川君、どうか許してくれ給へ、君も胸糞が悪いだらうが、僕だつて随分胸糞が悪いんだ。」と、彼は心の底で呟いて見た。不思議な事に

は、その胸糞の悪い氣分がだんだん強まるに従つて、金の無心を斷念しようと思ふ以前の潔い覺悟は、いつの間にかやらすつかり鈍つてしまつて居た。どうせこんなに胸糞が悪い以

上は、やつぱり無心をした方がいいのだと云ふ、奇妙な結論に彼は到達した。さうして程なく、

「やあ失敬、大變待たせたね。」

と云ひながら、強ひて平靜を装ひつつ書齋へ出て来た大川の姿に接した時、彼はたとへ狂

言にもせよそんな覺悟を發表する勇氣を持たなかつた。無理に落ち着かう落ち着かうと努力

して居た大川は、青野と向き合つた一刹那に、到底我慢し切れないほど胸糞が悪かつたらしく、

が、つと苦い唾液を呑んで、唇をにちやにちやらせて、多少敵が敵に面した時のやうな眼つきをした。此れ迄にもこんな場合には幾

分かさう云ふ表情を示しはしたが、今日のやうに昂奮した、險惡な相は見せたことがない。

青野は殆んど、照れ隠しに笑ふ眞似さへ出来なかつた。一余の話はやめよう。」などとウツカリ

云はうものなら、それが却つて不自然に聞えて、ますます相手を怒らせはしないかと危ぶま

れるくらゐ、その顔は一途に緊張し切つて、名状し難い不安と懊惱とを漲らせて居る。

一暫く御無沙汰しちまつて、何ともし譯がない。……彼はかうしてのめめと君に會ひに

來られる義理ぢやないんだけれど、殊にゆうべ

の手紙のやうなお頼みをするなんて、そんな厚かましい事が出来る譯はないんだけれど……」

青野はかう云ひ出すより仕方がなかつた。それが一番此の場の光景に對して自然であり適切であつた。彼の胸中に残つて居た微かに痛

快の心持ちは、こんな工合に語り續けて居るうちに、何等の痕跡も留めず消え失せて、ただ

眞暗な、卑屈な、破廉恥な根性ばかりが、我ながら重苦しいほどの執拗さを以て、頭の中へ

一杯に塞がつて來るのを覺えた。その重苦しさ

に堪へかねて、動悸が一時にどきどきと激しくなつた。今嗅つたばかりの蝦の天ぶらの噓が、

咽喉からムカムカと込み上げて來るのまでが、ますます胸糞を悪くさせ、彼の氣分を自暴自棄

に導いて行つた。

「今度と云ふ今度は、僕も少し考へた事があるつて、もう一遍だけ、是非君に救つて貰はうと思つて、來にくいところを押して出て來たやう

な譯なんだ……」

大川は机の向う側に据わつて、人差指と中指との間に挟んだ兩切りの西洋煙草を、煙突の

如く眞直ぐに立てて、その先から立ち昇る線香の煙のやうな細い線を、ちつと一心に視詰め

て居た。昂奮して居る爲めに手先がぶるぶる

戦いて、微かな顔へがシガレットの先端の灰にまでも、一刻一刻と塔のやうに堆く積つて、あはや崩れさうになりつつある灰にまでも傳はつて居る。

「……ねえ、どうだらう君、聽いて貰ふ譯には行かないだらうか。事情は昨日の手紙に書いた通りなんだが……」

「そりやあ、此れ迄君の要求に對して一遍も斷つたことのない僕だから、特に今度に限つて、頼みを聽かないと云ふのも變なものだし……」

と、大川は漸く口を切つた。

「だからまあ、聽いて上げない事もなからう。殊にゆうべの手紙で見ると、今度の金はいつもの金とは意味が違ふ。君を救ふためではなくつて、君の藝術を救ふ爲めに貸さなければなら

ない金のやうだ。成る程ああ云ふ風に云はれて見ると、僕にはたしかに斷りづらい。實際君はウマイところを狙つて來て居る。」

かう云つた時、始めて彼の唇の周圍にほんのりと笑ひが浮かんできた。尤も、眉をしかめるよりは更に相手を不愉快にさせる笑ひ方ではあるが、

「青野はせん方なしに俯向いてしまつた。

二君も随分僕に對しては、僕から金を絞り取る

爲めには、いろいろの政略を弄して居る。目下の君は、繪を畫くための資本がないので、僕から金を借り倒すことを職業とし、且その職業に一生懸命になつた餘り、興味を感じて居るやうにさへ見える。ま、こんな事を云ふと君は怒るかも知れないが、今日は何も彼も正直に話してしまはうと思ふんだ。」

絲を繰り出すやうにぐづぐづとしゃべつて居た彼の口調は、急に此處から活氣を帯びて、彼は半身を乗り出しながら、斷乎として相手の眼の中を覗き込んだ。

「今度の借金は君の藝術の爲めだと云ふ。それはまさか嘘ではあるまい。君がなんぼ嘘つきの破廉恥漢でも、君の唯一の誇るべき財産である藝術まで、だしに使つて、僕を欺さうとするのではないだらう。一旦社會から放逐されてしまつた君が、もう一度世間へ花を咲かす爲めに、或ひはもつと高い目的で君の眞の藝術を永遠に此の世へ遺さんが爲めに、萬難を排して大作に取りかからうと云ふ、その企ては友人の僕として義理にも助けなければなるまい。その爲めに繪具を買つたり、部屋を借りたり、モデルを雇つたりするのだから、費用を都合してくれと云ふ君の頼みを、若しも斷つたりしたら僕

はきつと卑怯な奴だと、少くも君には思はれるだらう。今度に限つて君の無心をはねつけたら、必ず僕が君の藝術を嫉妬して居る結果だと云ふやうに、見下されるだらう。」

「ふん、…何も僕は、さうまで君を邪推する必要はない。僕がいかに墮落し切つた、恩知らずの人間でも、君の此れ迄の親切に對しては、心から感謝して居るくらゐなのだから、…」
「いや、君、先も云つた通り、今日は正直に話をしよう。君に正直を望むのは、てんで無理な注文かも知れないが、僕の言葉を聖魔化さず聞き取るくらゐの、誠意だけは持つて貰はう。」

かきにかかつて斯う浴びせかけた大川の眼玉は狂人のやうに血走つて、顔は眞青になつて居る。青野にはどうして彼が此れほど迄に憎激して居るのか、その理由が分らなかつた。

「君が僕の親切を、心から感謝して居る。そりや君にしたつて、全然感謝して居ない事はなだらうが、よもや僕を親切だとは思つて居なからう。僕も亦、近頃の自分が君に對して親切だとは、夢にも思つて居ないのだ。僕はたしかに君の推察通り、君の才能を嫉んで居る。嫉んで居ればこそ、その弱點を露はすのが厭きに、

かうして君の面倒を見て居る。たしかに其れに違ひないのだ。…けれども僕は最初から君に對して今のやうな嫉妬を感じては居なかつた。

最初は僕も、外の友人に對すると同じやうに君に對しても親切だつた。純然たる好意から、暖かい友情から、君の窮境を氣の毒にも思ひ、出来るだけの援助を與へて居た。君の爲めに可なり亂暴な詐欺にかけられて、損害を受けた時でも、僕は君を哀れにこそ思へ腹を立てはしなかつた。君も知つての通り、僕は性來お坊つちやんで、お人好しで、氣の弱い人間だから、自分の行爲の善惡に對しては潔癖の方だけれども、他人には随分寛大だつた。今でも君以外の人に對してはかうまで狭量に腹を立てたり、痲癢を起したりする事はめつたにない。ところが僕は君と附き合ひ出してから、始めて僕自身胸の奥にも卑しい根性の滲んで居る事を發見したのだ。僕は自分で氣がつかない間に、いつからともなく君の態度に挑發されて、嫉妬の感情を意識するやうになつたのだ。「君の行爲は親切ではない。それは嫉妬と云ふものだ」と、君は僕に教へてくれた。明かにさうは云はな

いまでも、何となくさう云ふ意味の口吻を洩らした。さうして君が君の墮落し切つた品性を、

露骨に僕の前へさらけ出すに従つて、僕もだんだん其れに對抗して、君と一緒に醜く淺ましくなつて行つた。君に云はせれば、それは思ふ壺かも知れないが、僕には實に不愉快で溜らない。僕は深刻に君のベテンにかかつたやうな氣がしてならない。」

「ベテンと云ふのはあまりひどいよ。」

と青野が云つた。

「成る程そりやあ僕の態度が君の嫉妬を挑發するやうな結果になつたかも知れない。けれども僕が最初から其れを意識して、計劃を立ててやつたやうに取らなくつてもいいぢやないか。第一そんな眞似をして僕に何の利益があるのだ。君の世話になつて居る僕が、君に嫉妬を起させれば却つて損になるぢやないか。」

果して大川が云つた通り、こんな場合に青野はウカウカと相手に釣り込まれて、正直になるやうな人間ではなかつた。自分が此の家を訪れたのは、金を借りるのが目的であつた事を、彼は何處までも忘れなかつた。正直に怒つて居る積りでも、自然と間に合はせの嘘が口をついて出た。

「つまり議論なんかやめにして、早く貸すなら貸さないか。」——若し青野の腹の中を、正

直に發表するとすれば、かう云ふより外にないであらう。

君はまだ嘘をついて居るんだね。斷つて置くが僕は君に金を貸さないと云つて居やあしないんだよ。金が欲しければ貸してやる。貸してやるから嘘を云ふのは止し給へと云ふんだ。さ、安心の爲めに先へ渡して置いてやらう。」

豫め用意して置いたものか、大川は壞から二百圓の札の束を出して、スボンと机の上をハタいた。さうして犬に物を投げるやうに、其れを青野の腕先に置いた。

「さ、いいだらう。かうすれば君に文句はないんだらう。僕は今日はいつもと違つて、ひどく痲痺が起つて居るんだから、少しは君も胸襟を開いて、正直になつてくれ給へ、僕は此の金を貸すんぢやあない。此の金で君の正直を買ふんだ。」

「どうも、さう君のやうに腹を立てられぢやあ實際弱るなあ、僕は嘘をつくまいとは思つて居るんだけれど、知らず識らず嘘をついてしまふんだよ。僕のはもう、嘘つきが慢性になつて居るんだから、此の病氣はどうしたつて直りつこはない。」

こんな事をしゃべつて居るうちに、突然青野

の胸には自己に對する反感と憎惡とが湧いて來た。何かまづい物を喰ひ過ぎた時のやうな、重しい、倦怠と悲痛とが半半に交つたやうな、造る瀬のない氣分が體中に充ち互つた。考へて見ると、自分にたつた一人の友人であつた大川さへも、もう今日では友人でなくなつて居る。彼はただ、彼自身の嫉妬を蔽はんが爲めに、敵に糧を送りつつある人間に過ぎない。此

方に其れだけの不都合があるとは云へ、金を悪まれる代りには、自分は常に此の男から有らん限りの侮辱と輕蔑とを浴びせかけられる。親の口からも云はれないやうな、裁判官でも取てしないやうな、暴慢な、無禮な言語を自分は彼から甘んじて聞かされて居る。彼はいつの間

に、自分に對してそんな權力を持つやうになつたのだらう。全體誰に許されて其の權力を行使して居るのだらう。——さうして彼は、自分に金をのみながら、其れを友情の結果だとは認めず、自分も彼を恩に着ようとはして居ない。どうして此のやうな苦しい關係に二人は立たされてしまつたのだらう。同じ藝術の道に志して居ながら、二人はただ金の貸し借りの問題のみ接觸し、いがか合つて居る。自分も大川も、藝術上の問題に就いて、此れ程激

しく此れ程昂奮して物を云ひ合つたことはいない。金の事がなかつたら、二人はとうに絶交して居たにまづ居る。——自分は其れでもいいとして、大川を其處まで引き擦り込んでもいい、みんな自分の罪ではないか。自分が金の問題を斷念しきへすればいいのぢやないか。自分はこの嫌な氣持ちを味はつて迄も、やつぱり金が欲しいのかしら？ 自分はなぜ、此處にある札の束を突返さうとしないのだらう。……

一でも何でも、己は此の金を借りるより外仕様がなないな。どうせ己は、此の世の中では背徳漢に生れついたので。生きて居る間は散散悪い行ひをして、其の代り立派な藝術を後世へ遺しきへすればいいのだ。それが己の運命なのだから已むを得ない。」

さう思ひながら、青野はホツと息を洩らし、恐る恐る札の束へ手をかけて、机の上からこそそと膝の上へ持つて行つた。

「僕が君に正直にしろと云ふのは、何も善人になれと云ふ意味ではない。悪人なら悪人でいいから、腹の中を包まずに打ち明けてくれると云ふ事なんだ。僕も今迄は嫉妬を隠して親切を装つて居た。それをきれいに告白した以上、君の方でも、一體どう云ふ積りで僕に附き合つて

居るのか、態度を明瞭にして貰ひたい。君と僕との腐れ縁は、此の後ともいつ迄續くか分らないのだから、金の問題が起る度毎に、かう云ふ不愉快な思ひをするのではやり切れない。だから今後は、悪人なら悪人、善人なら善人でお互ひにもう少し徹底した態度を取つたら、少しは二人の關係が氣持ちのいい物になるだらうと思ふんだ。同じく金の貸し借りをするにしても、もつと圓滑に、もつと愉快に話が出来るだらうと思ふんだ。……ねえ君、さうぢやないか、僕は今日の機會に、君と其の相談をして置きたいのだ。」

「けれど、君僕が正直に腹の中を打明けたところで、決して圓滑になりやしないんだよ。」

青野は氣味の悪い苦笑ひをして、投げ出すやうに云つた。

「正直に腹の中を打ち明けて、お互ひに愉快を感ずるのは、善人同志の交際だけだよ。僕の腹の中は、まるで醗酵した五味溜のやうなもので、掻き廻せば掻き廻すほど餘計悪臭を放つに過ぎない。その悪臭には僕自身でさへ堪へきれないくらゐなんだから、君のやうな善人にはとても鼻持ちがなるもんぢやない。僕のやうに腹の底の汚い男が、どうして藝術家として生

れて来たんだか、自分でも其れを不思議にして居るくらゐなんだ。僕の不正直は性質でもあるが、一つは他人に其の悪臭を嗅がせない爲の禮儀でもあるんだ。……」

「いや、どんなに臭くつてもいい。臭さがハツキリと分つてさへ居れば、僕の方にも其れを豫防する方法はあるが、なまじ隠されて居る爲めに、いつの間にか此方にも傳染するやうになつてしまふ。——たとへば君の腹の中は、僕の嫉妬を利用して、僕から金を借りようと思つて居るのだとする。ただ其の爲めに僕と附き合つて居るのだとする。君の態度がさうと極まれば、僕の方でも此れからは嫉妬を露骨に現はして、君と接觸する事が出来る。尤も僕はかう云つたところで、嫉妬の爲めに君を見殺しにするやうな、卑屈な眞似は斷じてしない。僕はむしろ君に利用されるのを快しとして、君のさもししい根性を憐れみながら、僕の計す限りはいくらでも利用されてやらう。さうして正堂堂と、作物の上で君の藝術と競争しよう。君は利用する、僕は利用される。ただ其れだけの關係で二人は交際する。君と僕とは友人でも何でもなく、金の問題で結びつけられて居るに止まる。さう極まりさへすれば、テキパキとし

て氣持ちがいい。僕は僕のもう心の満足を買ふために金を出すので、友人としての義務からではない。さう覚悟して居れば、いくら君に欺されたつて腹の立つ譯はないのだ。……ねえ君、それで差支へはないだらう。」

「どうも僕としては心苦しいが、……しかし心苦しいなんて事を、眞顔で云へる人間ではないのだから、それぢや仰せに従つて君を當分利用させて貰はう。」

「よろしい、利用し給へ。」
大川は腕を組んで、體に反りを打たせて、こ

とさらに豪快な調子で云つたが、血色は一層青ざめて居た。
「……それでもう話は済んだ。君も金を受け取つたら、別に用はないだらう。今日は此れで歸つてくれ給へ、僕はいそがいんだから。」

「大變お邪魔をして濟まなかつた。それぢや歸ることにするが、……最後にもう一つ、僕の正直な腹の中を云はせてくれ給へ。」
「よし、聞かう。」

と云ふ代りに、大川は黙つて頷いて、反噬するやうな瞳を輝やかしながら、煙草の灰を性急に灰皿へ叩き落した。
「僕は兎に角、——こんな事を改まつて云ふ

のはをかしいが、——兎に角君に感謝する。君の僕を助けてくれる動機が何であるにもせよ、僕は其のお蔭で藝術に専心になることが出来る。成らう事なら、僕は眞面目な人間に生れ變つて、友人として君と交際をしたいのだけれど、それが出来ないのは如何にも苦しい。僕が苦し

いことだけは、どうか君も推量してくれ給へ。さうして、此處に居る此の僕と云ふ人間、——卑しい、さもない、意氣地のない人間は、ほんたうの僕ではなくつて、僕の藝術が眞實の僕

だと云ふ事を認めてくれ給へ。」
話して居る間に、青野は幾度か懐に入れた二頁紙を、返してしまはうかと思つた。何がそんなに苦しいのだ。苦しければ其の金を返したらいいぢやないか。生れ變つて来る程の面倒を見ないでも、其の金を懐から吐き出してしまひさへすれば、眞面目な男になれるぢやないか。」

と、彼の良心は彼を叱つた。が、それでもどうしても、彼は其の金を放す心にはなれなかつた。

「そりや君だつて、苦しくない事はないだらう。實際僕も、君のやうな天分を持つて居る藝術家が眞面目な人格者であつてくれたら、友

達としてどんなに頼みになつたらうと、それを残念に思つて居るけれど、今更そんな事を云つたつて仕様がな。君の五味溜のやうに腐つた腹の中に、一箇の寶石が交つて居ることは僕も認めて居る。認めて居ればこそ僕は嫉妬を感じて居るのだ。……」

かう云ひかけた時、大川は自分の眼にも、青野の眼にも、涙が潤みかかつて居るのを感じた。二人は申し合はせたやうに、あわてて顔を背けてしまつた。

「……しかし君が人間として生きて居る間は、どうしても僕は君を尊敬する気にはなれない。君の天才は、君の死後でなければ認められないのだ。君が死んだら、恐らく僕ばかりでなく、多くの人が君を尊敬するやうになるだらう。」

ふと、大川の頭の中に、或る厭な事が連想された。自分も青野も此の世から死んでしまつた後、青野の天才が普く認められると同時に、その天才を嫉妬し、敵視した、或る凡庸な、通俗な、一人の畫家として自分の名前が世に傳はつたらどうであらう。大川と云ふまづい繪かきが居た。さうして其奴が、こんな下手な繪をかきな

ながら、青野の天才と競争する氣で、をりをり金などを悪んでやつて居たのださうだ。」と云

ふやうな噂が千載に残つて、凡庸藝術家の好い標本として嘲笑されたらどうであらう。

「生きて居る間は、君も藝術の事はかり考へて居られないやうに、僕にしたつて名譽心もあれば功名心もある。だから僕は飽く迄も君を嫉妬する。僕より先に君が守派な製作を成し遂げれば、それを不快に感ぜずには居られない。そんな事がないやうにと、祈らずには居られない。經濟上の援助は與へるが、藝術の上ではお互ひに敵だと云ふ事を、僕はここで男らしく宣言して置く。どうか其れを覺えて居てくれたまへ。」

「有り難う、僕はその宣言に對してもお禮を云ふ。——僕は勿論、自分の藝術に關してシツカリした信念を持つて居る。けれども斯うまで世間から疎外され迫害されると、たまには自分の力を疑はずには居られなくなる。いくら自信のある製作を発表しても、一向世間が認めてくれないのは、必ずしも僕の背徳に對する反感からではなく、僕の藝術に其れだけの價値がないのか知らず、云ふやうな僻みも起る。その僻みや疑ひを除去してくれるのは君の嫉妬だ。君に嫉妬され敵視されて居る間は大丈夫だと、さう思つて僕はいつも自分を慰めもすれば勵

ましもして居る。かう云ふと皮肉のやうに聞えるだらうけれど、決してその積りではないのだから、悪く取らないでくれ給へ。凡べての人が僕を振り捨てて顧みようとしないのに、君だけが僕の天分を認めて居てくれる事は、僕に取つてどれ程の恩恵だか分らないのだから。」
年中噂ばかりついて居る青野は、たまに正直な告白をするのが、我ながら極まりが悪くて居たたまらないやうであつた。彼は處女の如く頬を紅くした。

「先生、今のお客様は青野さんでせう？」
榮子はアトリエの隅の長椅子に腰をかけて、半分脱ぎかけたスリッパを、白足袋を穿いた鉄のやうなきやしやな足の先で弄びながら、書齋から戻つて來る大川に言葉かけた。十八九の體中がぜんまいのやうにしなしと撓ひさうな、非常に滑かな背恰好の女である。相應に丈も高く、肉附きも豊かであるが、若し試みに胸中を持つて抱き上げでもしたら、水底から掬ひ上げられた藻草のやうな鹽梅に、べつたり濡れて垂れ下るかと思はれるほど、その手足はなまめかしく柔かに見える。鏡で縮らせたらしい髮の毛の二つに分れた櫛が、面長の兩頬に鬚鬚

と波を打つて、その房房した波間から、流れに引石ころのやうに露はれて居る耳朶には、日本女の女に珍らしい土耳古石の青い耳環が、殿堂の櫛を飾る風鐸の如くちらちらと揺いで居る。
「どうなすつたの、何か青野さんと喧嘩でもなすつたの。大そう顔色がお悪いやうぢやありませんか。ねえ、ねえ先生つてば！」
彼女の元氣な、甲高い聲は、森閑とした眞晝のアトリエの四壁に響して、二つにも三つにも聞えたやうであつた。それでも大川はまだむつつり来たりして居る。彼女もせずに室内を往つたり來たりして居る。彼女も、デスクの上に置いてある印度製の煙草の箱の、白檀の木の蓋をカタンカタンとはしたなく鳴らしながら、中から巻煙草を取つて、唇でスツパスツパ音を立てつつ吸ひ始めた。さうしてちつと不思議さうに、大川の歩き廻るのを眼で追ひかけて居た。
大川がさうやつて居たのは五分ぐらゐの間であつたらう。——彼の運動を追つて居る榮子の眼は「アラをかしいな。といふやうに無邪氣に見開かれて居たが、だんだん陰險な暗い表情を浮かべて來て、遂には容貌全體がまるきり以前とは別人のやうに幽鬱に變つて行つた。尤も其れは、大川の氣分がただ何となく彼女

に傳染しただけであつて、外に深い原因があるのではなく、榮子が眞面目になる時は、いつもかう云ふ狡猾らしい、薄氣味の悪い、慘澹たる人相になるのである。彼女が洋畫のモデルとして絶好の代物である所以は、その無盡蔵な嬌態を具備する體の曲線にも依るけれど、花やかなうちに一種の毒と憂ひを含んだ、明るいやうで複雑な陰影に富む日鼻立ちにも依る事が多い。どうかするも其の輪廓は恐ろしく多角形に見えながら、而も寶石のやうに屈曲した光を反射して、きらきらとした美しさが全體に漲つたりする。一つ一つに検査すれば缺點だらけの顔であるのに、それが彼女の獨特の美を標準にすれば、動かすべからざる完全な物のやうにも思はれ、遂には其の青黒い、椀形子に似た冷めたさを持つた、奇妙に澄んだ皮膚の色までが、ちつと見詰めて居ると、何か異常に艶艶しい、濃い繪具から受けるやうな刺戟を放つて迫つて来る。彼女は自分でも其れをよく知つて居るせむか、平生お白粉と云ふものをつけたことがなく、ばさはさとした牛地のままなのを誇りとして居る。さうして家庭が貧しい爲めもあらうが、例の自らの耳環の外には體の何處にも裝飾を施さず、服装なども寧ろ薄汚いくら

る古びた垢染みた物を着込んで居る。——
「ねえ、先生、青野さんが又無心に來たのぢやなくて？」
彼女はいつの間にかソフォアに行儀わるく臥ころんで、天井に煙草の輪を吹いて居た。
「そんな事はどうだつていい。今日は少し此れから出かけなけりやならない所があるんだから遊んで居ないで歸つてくれ給へ。」
大川は立ち止まつて、突慥負な口調で云つた。——此の女も青野によく似てゐる。青野に天才があるやうに此の女にも美しい肉體がある。さうして品性の下劣さにかけては、兩方ともいい勝負だ。——さう思ひながら、彼はじろじろと彼女の姿を眺めて居る。
「あたしね、歸らうと思つただけれど、少し先生に話があるから待つて居たの。」
「何だい、また金の事かい？」
さうぢやないわよ。青野さんのことだわよ。青野さんが、此の間手紙をよこして、又此の頃に製作を始めるから是非もう一遍モデルになつてくれるといふの。」
「それで君はどうしたんだ。」
「無論すぐに返辭を出して斷つちまつたわ。」
「なぜだ、なぜ斷つたんだ。行つてやるがいいぢやないか。」

「いや、大丈夫だ。今度は金を持つて居る。」
「え？ それぢや先生は青野さんに貸しておやりになつたんですね。ちよいと、今いくら貰ふ持つて居るでせう。」
「青野がそんな人間に墮落したのは、君にも罪があるんぢやないか。」
「そりや、青野さんが悪いんだわ。あたしはどうせ前から墮落して居る人間なんだから、そんな女に係り合はなければいいのに、深入りをしたのが悪いんだわ。わたしの方では、お金にさへなればどんな事でもするんですから。」
「だから今度だつて、お金になるんだから行つてやるがいいぢやないか。」
「なるかどうだか分りやしないわ。そんなに貧乏して居るのに。」
「いや大丈夫だ。今度は金を持つて居る。」
「え？ それぢや先生は青野さんに貸しておやりになつたんですね。ちよいと、今いくら貰ふ持つて居るでせう。」

甘い汁が吸へると云はんばかりに、榮子は飛びつくやうな調子で云つた。

「それを教へたら、青野は君に一文も残らず液はれて行つてしまふだらう。兎に角僕が保證するから行つてやるがいい。僕の方へは毎日午前中だけでいいのだから、午後になれば君の體は遊んで居るのぢやないか。青野はきつと君をモデルに使つて、今度の大作を仕上げようと云ふのだらう。」

「青野さんの繪なんぞ、今ぢや誰も相手にしないから、モデルに頼まれたつて何だか張り合ひがありやしない。」

彼女の言葉は大川の耳へ這入らなかつたやうであつた。彼は其程深く思案に耽りながら充ちした眼を自分の爪先に注いで、腕を組んでや前のめりに、ばたりばたりとまだ部屋の中を歩いて居た。

「いよいよ己はほんたうに青野と競争しなければならぬ。己のやうな善良な人間が、どうして青野のやうな道徳上の不具者と、藝術の上で同じ傾向を辿らなければならぬかつたのだらう。己の頭と彼奴の頭とに、同じ夢の世界が存在し、同じ美の幻影が浮ぶのはどう云ふ譯だらう。たとへば此處に居る此の榮子

にしたつてさうだ。此の女が〇〇座のオペラ部の下僕の女優として、舞臺で踊つて居た時分に、いち早くも眼につけたのは己だつた。いや少くとも己の積りで居た。すると青野もいつの間にか此の女に眼をつけて居て、早速己に先鞭をつけて、モデルに頼んでしまつた。不思議なことには、己と青野より外に、此の墮落した、無恥な、厚顔な、氣違ひじみた馬鹿な女の持つて居る、奇怪な美しさを認めた者が一人もない。さうしてもうあの頃から四五年も過ぎた今になつて、やつと今度は己が此奴を捜して、モデルに雇つたかと思ふと、又青野の奴が狙つて居る。己が此の際彼奴の邪魔をして、此の女を獨占するのには難作はないが、己は何處でもそんな卑劣な行動は取らない。もうかうなつたら己は飽

きつた。彼奴に對抗して、此の女の肉體の中から、孰方がほんたうの美を掴み出すか、孰方が力ある藝術を作り出すか、執念深く競争してやらう。さうだ、さうしてやらう。——

「おい君、僕が青野に代つて頼む。是れ青野の所へ行つてやれ。君が行かないと僕が困る。」大川は俯向いて居た首を擡げて、決然たる語氣で云つた。

「青野が金を拂はなかつたら、僕があとで拂つてやる。」

「ええいいわ、さうして下されば行きませう。」

「だが、僕が君をモデルにして居る事を、青野はまだ知らないのだらうな。」

「ええ知りませういとも。」

さう云つたまま、彼女は大川の見暮にあつけに取られて、ぽかんと口を開いて居た。

「よし、そんなら其れを絶対に青野に知らせないでくれ給へ。いいかい、きつと頼んだぜ。少し譯があるのだから。」

から線り返して念を押しつつ、彼は呟はしい眼つきで女の顔を覗みつめた。

第三章

青野は今、はつきりと、現實よりもはつきりと、その幻を自分の眼の前に視詰めて居た。

「何處の國の、何處の都とも分らないが、兎に角そこは殷賑な、莊嚴な市街の中央でなければならぬ。その市街が殷賑であると云ふことは、部屋の手右手に引き絞られた、金線銀線が瀧のやうに流れ落ちて居る錦繡の帷の向うの、露臺の彼方に霞んで居る遠景を望めば直ちに領られる。其處には、人間の住む地球からは嘗て見ることの出来ないやうな、さながら深山の

湖にも似た穏やかな瑠璃色の空が、一抹の、金色の鱗雲を微かに浮べて居る下に、此の都の町町が渺茫と連なつて居るのである。何と云ふ神神しい、何と云ふ豪華な町の景色であらう。青野はさう思つて、うつとりと瞳を凝らさずには居られなかつた。

まことに其の市街の立派さと清潔さと、その上を蔽うて居る青空の永劫の美しさにも劣らないほどである。青野の眼には遠景のところに聳えて居る殿堂の圓い屋根や、突元たる尖塔や、澎湃として波濤のやうに打ち續く大理石の Colonnade や石階までも、手に取るやうにありありと感ぜられる。さうして其れ等の町の壁や甍が、今しも和やかな夕日を受けて、靜かに冷やかに、螺鈿のやうに青白く輝いて居るさまは、死に瀕して居る貴い女王の顔の色を想ひ出させるほど、崇高に森嚴に見える。

が、青野の視線は又、それ等の透き徹るやうな明るさを持つ遠景を後ろに控へた、うす暗い前景の部屋の中に、寧ろより多く頻繁に熱心に注がれる。剛健な、洞穴の中のやうな重苦しい空気を湛へて居る室内は、暗くはあるが其れはこんもりとした六月の綠蔭のやうな、或ひは

眞黒な天鵞絨のやうな、不思議に滑かな、深い底光りを含んだ玲瓏とした暗さである。いや其の暗さは、まるで人間の瞳のやうだと云つた方が、却つて適當であるかも知れない。闇を漂はせて居る室内の物象が、ちやうど美しい女のばつちりと睜つた涼しい眸の裡にある、黒眼の表面に映つて居る世界のやうに、微妙な鮮やかさを持つて歴史と迫つて居る。たとへば床の上に敷かれた波斯風の毛氈にもせよ、部屋

の左手に直立して居る圓柱の、乳白色の石に刻まれた Bas-relief の蛇の裝飾にもせよ、青貝を鑲めた卓の上の、青銅の水盤に咲きこぼれてゐる匯蓮の花にもせよ、その下に銀色の尾をひろげて漫歩して居る一羽の白孔雀にもせよ、それ等の物が、黒目がちの瞳の中に紅い影や白い影のゆらめく如くちらつて居るのが、青野には明瞭に看取される。どうかすると、部屋の正面の寢臺の側に据ゑてある七寶の香爐から、葡萄の蔓の繡模様を施した帳を這ひつ

つ舞ひ昇る淡い煙の匂までも、ほのぼのと彼の嗅覺を襲つて来て、——それはアラビヤの没薬であらうか、印度の肉桂であらうか、或ひはまたスミルナの薔薇の精でもあらうか、——芳ばしい古酒を湛へた杯のやうに、青野の魂

は物狂はしい陶酔の境へ導かずには措かないのである。

そのなまめかしい怪しい薫香が、やさしい戀のささやきの如く彼の鼻先を颯と同時に、青野はふと Bien loin d'ici と云ふボオドレエルの詩の文句を想ひ浮べながら、部屋の中央の寢臺のあたりに長い長い凝視を向けた。天井に吊るされてある、水晶、眞珠、瑪瑙の環珞の珠に包まれた天蓋から、法衣を纏うた背の高い魔女の立ち姿のやうに、下へ行くほど階段に巨大な翼をひろげつづつしりと垂れて居る暗綠色の縞珍の帷が、一層その周圍を暗くして居る寢臺の奥には、ものうげに四肢を投げ出した一人の女が、仰向きに臥しまろんで居るのである。も

し此の室内全體を人間の瞳にたとへるとすれば、朦朧とした帷の蔭に五體をうねらせて居る其の女の、身邊から放たれる夢のやうな耀映こそは、——藻をくぐる海蛇の閃めきのやうな、黒髪束の束に埋るる寶石のやうな、果敢なくも眩い光彩こそは、まさしく中心の瞳孔でなければならぬ。此の部屋の四壁を飾つて居る彫刻も刺繍も螺鈿も匯蓮も、白孔雀の銀の翼も、露臺の向うにはるばると展開して居る柵の町町も、ただ此の女の神秘なる媚態を讚

美する爲めに現れた虹に過ぎないかのやうである。

「ああ、彼女はとうとう此處に居たのか。」

青野は何となく、さう思はずには居られなかつた。古い有り難い御厨子の中の黄金佛を拜むやうに、眼を細くして睫毛の先をふるはせながら、ちつと彼女を見守つて居る彼の視神経は、彼女の肉體が恰も龕燈の奥にまたたく火影の如き物體から成り立つて居て、皮膚の面にサファイア色の光の綾を微動させて居るのを感じた。それ等の光は、螢の化身かと疑はれる迄に數箇のエメラルドを故め込んだ彼女の頭髮からも、美しい腫物のやうに彼女の手頸に吹き出て居る紅玉の腕環からも、彼女の胸に結ばれて居る、大理石の階に置く夜露のやうなダイヤモンドの頸飾りからも、彼女の兩の蹠に龍の蹄の如くかがやいて居る金環からも、さうして最後に、繊細な彼女の胴と腰との周りに絡まつて居る、狭霧のやうに薄い、銀河のやうに淡い輕羅からも、一面にぎらぎらと放射して、月の暈輪に似た明るさを投げて居るのである。が、それよりも猶不思議なのは、それ等の無数の裝飾の下に生きて蠢いて居る彼女の肉と肌とである。其處には「肉」と呼び「肌」と呼ばれる

人間の賤しさを超越した、幽霊じみた凄じさと妖精じみた艶かしさとの織り交つた、燐の炎のやうな冷たい美しさが燃えて居るらしい。……

しかし、藤の上に力なく横はつて居る彼女の手足には、やるせない倦怠の情が溢れ、その眸には飽くことを知らぬ淫蕩の慾が漲り、その居るには意地の悪い嘲笑が匂つて居るやうにも見える。ややともすれば、夕闇にしほむ白百合の花に似た、やさしい、響しい溜息さへも、香の煙を搖がせつつ彼女の胸から吐き出されるのが、青野の耳に聞えて来るやうな氣持ちがする。

——その幻を、青野はいつ迄もいつ迄も視詰めた。彼はもう、モデル臺の上に横臥して居る榮子の裸體を先から一心に眺めつつある自分の身を忘れて居た。彼の魂は、深く深く、榮子の肉體を通り抜けてその奥にひらがつて居る漂渺とした空想の世界に分け入つて居るのである。カンザスの上に動いて行く彼の繪筆は、榮子を描いて居るのではなく、ただ眼の前に浮び出た幻の姿を寫して行くのみである。

自分が今、畫いて居る此の女は、いつの世の何處の都に住んで居た誰であらう。どうし

て彼女は、かうまでありありと、かうまで屢々自分の魂を訪れるのであらう。——さう思つた時、青野の空想は急に破れて、彼は夢からさめたやうには、つとして我に復つた。——榮子が不意にむくむくと足をもがいて起き上らうとしたからである。

「おい、どうしたんだ、もう少し辛抱してくれないか。」

青野は哀願するやうな調子で云つた。

「ああ」と、殊更大儀さうな欠をして、焦れつたさうに首を搖す振りながら、榮子は不承無精にもとの姿勢に歸つたが、その眼は猛歌が餌を漁る如く、何故かちいつと陰鬱に青野の態度を窺つて居る。

「此れだ、此の顔なんだ。此の顔が彼女の幻を己の心に送るのだ。」

青野は今更のやうに斯う歎息して、再び榮子の表情の中に惹き入れられて行つた。

大川から惠まれた金の一部で、六月の末に引き移つた此の家の畫室は、先に住んで居た天井裏にくらべれば遙かに増しではあるけれど、ただ徒らに廣いばかりで、勿論畫室と名づけられるほどの設備も裝飾もあるのではない。

目白の停車場に近い郊外の、田圃と雑木林との間に建てられた一軒家で、がらんとした物置きやうな書室の外には玄關も居間も臺所もない其の家屋は、以前、小石川に住んで居たBと云ふ彫刻家が、毎日其處へ通ふ爲めに拵へた、ほつ立て小屋も同様な仕事場に過ぎないのである。去年の暮れにBが洋行に出かけて以來、貸家の札は貼られたまま借り手もなくて久しく荒れ果てて居たのを、青野は大川を保證人に立てて漸くBの家族から借り受ける事が出来た。それはちやうど今から二箇月ばかり前で、以來青野は此の一室に朝夕を送つて居る。

—その生活はいかに亂雑で、いかに不潔であるかと云ふ事は、邊の糞子をひと目見たなら、誰にも推量が出来てであらうほどに、部屋の中は夥しく取り散らされて、場末の古道具屋の店先のやうに、埃まびれの襖摺じみた家具が、敷物もない床板の上に處處はず放り出されて居る。何年となくこびり着いた垢が黒光りに光つて、ところどころの破れ目から綿だの藁だのが飛び出して居る緞子張りの、その襪様式だけは馬鹿に立派な、フリンヂの附いた古い駄掛椅子。ワニスが剥けて、板が割れて返り返つて、一本の脚がぐらぐらになつて居る圓テニエ

ル。その上に載せられた、これも同じく様式だけは複雑な、三人の女神の群像が手に蠟燭を高く捧げた、いづれ昔は何處かの公使館の夜會の席にでも輝いたものであらうが、今では電燈の設備のない此の書室にやな夜なラムプの代用を務めて居る燭臺。Bが通つて居た頃の置き土産らしい、鳥の糞のやうに粘土が點點と附着した洗面臺の瀬戸引きの水流、土壇、缺け茶碗、喰ひ荒らしたトマトやサラダや飯粒の残つて居る二三枚の西洋皿。淺草邊のむさくろしい洋食屋から盗んで來たやうな曲木の腰かけ。もうそれだけでも十分吐き溜めのやうであるのに、一方の隅には前住者が此の家を引き拂ふ時に取り外したストーブの、煙突の殘骸らしい煤だらけな太いトタンの管が、材木の如く二三本倚せかけてある傍に、裏表へデッサンを書き散らした大版の木炭紙が、ちやうど煙突と同じやうに圓く巻かれて立ててあつて、その横には又、現住者が夜の寝具に使ふかと見えるいろいろの物品、——生海苔のやうにつくねてある古蚊帳や、その蚊帳の色とあまり違はないほど汚れ切つた、風呂敷のやうに薄つぺらで皺くちやな掛り布圍や、頭の形が黒くまざまざと凹んで居る、タオルでくるんだ括り枕や、

それ等の物が大掃除の跡の路上の如く堆くたつて居る。もし此の部屋に何等か裝飾の役目を勤めて居る品があるとすれば、それは片側の棚の上の、チーズヤソセエチの饅詰と一緒になつてあるペバアミントとブランドーとの壘であらう。仕事のみまに、どうかすると一杯二杯を傾けたがる酒好きの榮子の爲めに置いてあるので、まさか裝飾品のつもりではないだらうけれど、あまり周囲の色彩が貧しいせゐか、その二つのガラスの入れ物だけが、巨大なエメラルドとトバズとのやうに、青く黄色くきらきらと吐き溜めの中に光つて居る。

けれども、此れ等の壘の外に、まだ此の部屋には一つの偉大な裝飾が、——榮子と云ふ素晴らしいものがあることを忘れてはならない。東側の壁に沿うて据ゑられた、夜になると主人の寢臺に應用されるラック塗りの柳の長椅子の上に、北側の窓の方を枕にして横はつて居る彼女の姿態は、青野が幻に見ると云ふ妖女の怪しい美しきままで、ともすれば引き上げられて見えるのである。おまけに今日は先から多量の酒を呷つて居る爲めであらう、醉を發した全身の皮膚が縞沙引きの絹のやうに汗ばんだ色澤を帯びて、折折さも睡たげに、どんより

と濁つた眼を潰りかける其の容貌には、持ち前の憂鬱と邪惡と驕傲とが、一種の鬼氣をさへ含んで、蕩けるやうに流れて居る。若しあのペバアミントやブランドの壘を青玉や黃玉にたとへるとすれば、彼女のさうした美しさを眠れる約にたとへたとしても、恐らく誇張にはならないであらう。——少くとも青野だけは、誇張どころかまだ比喩が足りないくらゐに感じて居るに違ひなからう。

青野が毎日菓子肉體と、その奥に潜む幻とに凝視を集めつつ、製作に耽り始めてから知らず識らず七十日の子が過ぎて、季節は八月の半ばになつて居た。さうしておそくも今月の月末までに、その作品は完成される筈なのである。彼は時時、仕事の間にこんな事を考へずには居られなかつた。——たとへ自分は生れついでに背徳漢であるにもせよ、かうして創作に熱中して居る時自分だけは、そんな卑しい人間ではないことを、どうか世間の人間に、それが駄目ならばせめて神様に認めて貰ひたい。自分はいつとも社會へ出ては悪い行ひやさいしい行ひをする。だが其れは決して自分の本當の願ひではない。自分には世間の善人どもに數等勝つたいい物がある。彼等の夢にも知

らない、とても理解の出来ない、貴い高い境地がある。此の世の中の凡べての物にも換へ難いほどの價值を持つた、藝術の天地がある。自分には何だか、その天地こそ永遠の存在であつて、此の世の中は假の幻影であるやうな氣がしてならない。さうだとすれば、此の世の中で悪人と呼ばれながらも、藝術の國へ這入つて福ですつと偉大ではないか。——それは今度に限つたことではなく、いつも製作に従事する時、こんな考へが青野の胸に湧くのである。

此の世の中では思まはしい不具者として繼兒扱ひにされる代り、藝術と云ふ優しい母は一層彼を不憫がつて、その暖かい懷ろに彼を抱き上げ、彼を慰め、慈愛に溢れた接吻を與へてくれる。「お前は世間からどんなに排斥されるに嘲弄されても、決して失望したり落膽したりしてはならない。お前の素質は私がよく知つて居る。さうして、外の人にはめつたに見せてやらない美しい國を、お前にだけは内證で見せて上げる。だからお前は自分の運命を呪つたり悲しんだりしないがいい。お前はほんたうに可愛い兒だ。」かう云つて勵ましてくれる彼女の囁きが、何處からともなく青野の心に傳は

つて来る。その慰めと囁きがあればこそ、自分は此の不愉快な矛盾だらけ苦惱だらけな世の中に、自殺もしないで生きて行かれるのだと、云ふやうな心地もする。詐欺、横領、駄法螺、おべつか、夜逃げ、踏み倒し、——さう云ふ惡事の數を判で捺したやうに繰り返してつあらゆる人間から輕蔑と嫌疑とに充ちた視線を向けられ、白晝の大道を公然と歩くことが出来ないほどの、肩身の狭い情ない境遇に落ちてしまつた今日でも、此の一室に閉ぢ籠つて刷毛を握つて居る時だけは、世間の奴等が一緒になつて手を叩いて嘲笑ふのを、あべこべに憫笑してやりたいやうな勇氣を感じる。見つけ次第に自分を擲ると稱してムカツ腹を立てて居る今村の顔つきや、常に自分を破廉恥漢扱ひにして道徳家ぶつて居る大川の様子を想ひ出して

も、そんなものはいつの間にか自分を壓迫する權威を失つて、遙かな下界の蟲けらのやうに小ひさくなつて居る。が、青野は此の頃、さながら世界を征服した王者のやうな誇りと喜びとで張り切つた胸の奥に、不思議な不安と恐怖とが根を蔓らせて行くのを感じた。——ひよつとしたら自分は此の繪を畫き上げると同時に死ぬのではあるまい

か。此の繪の爲めに、自分は最後の精力を消耗しつつあるのではなからうか。自分は藝術の神に愛せられた餘り、此の世の人間がみてはならない貴い美しい國を見た。さうして其の國の秘密を人間の世に發かうとして居る。自分は其の爲めに神罰を蒙つて死ぬのではなからうか。——さう云ふ豫覺が、彼の仕事に段段完成期に近づくに隨つて、次第に強く深く彼の頭を支配し始めた。彼はまた、斯うも思つた。

——事に依ると己は誰かに嫉妬されて殺されるのではないだらうか。自分の今度の製作が發表されたら、例に依つて多くの批評家からは黙殺されるにしても、少くとも二三の眞の藝術家は己の天才に恐れを抱き、嫉妬を感じはしないだらうか。己ばかりが美の女神から特別の愛撫と啓示を受けて居るのを、彼等は黙つて見て居る事が出来るだらうか。己の生きて居る事が、己の藝術のある事が、彼等の爲めに生存の脅威であるとしたら、彼等は己を殺したく思はないだらうか。萬一にもそんな場合があるとすると、己を殺しに来る者は、彼等のうちで最も己を敬視して居る大川でなければならぬ。青野はそれを突飛な推測であるとはかりは思はなかつた。あのお坊つちやんの好人

物の、彼のバトロンである大川が、ひそかに彼を殺しに来ると云ふ想像を、一概に笑ふべき杞憂であるとは考へなかつた。どうかすると、それが餘りにハツキリと、必然起るべき事件の如く眼前に迫つて來て、彼は名狀しがたい昂奮と恐怖とに驅り立てられた。

「馬鹿な！ 己は氣が違つたのぢやないか知らん。」

かう腹の底で自分を叱りながら、ふいと仕事を中止して、慌しく部屋の内を歩き廻つたりする事があつた。

さう云ふさまざまな懊惱や、憂懼や、慢心や、歡喜の間から、日一日と彼の作品は仕上げられて行つた。嬉しい時も恐ろしい時も、青野はすべて命がけであつた。こんなに恐ろしかつたり、こんなに嬉しかつたりするだけでも、青野の壽命は續きさうもなかつた。彼はただ、仕事が完成しないうちに死にさへしなればいいがと思つた。さうして、半日の勞作が済んで、長い夏の日が暮れかかると「いい臘梅に、まあ今日も無事だつた。」と云ふやうにホツと溜息をつきながら、がつかりした體を肘掛椅子に凭れさせた。けれどもそれで、彼の一日の用事が全部終つた譯ではない。夜になつてか

ら、彼にはもう一つの命がけの仕事が待つて居るのである。

最初に其れを唆かしたのは、榮子であつた。榮子が自分を誘惑したのだと、青野自身は考へて居る。多分彼女は始めから其れを目的にして、青野のモデルになつたのであらう。自墮落で放埒で我が儘で手の着けられない彼女が、面倒臭いモデルの役なんぞを、一と通りの報酬で承知する譯はないのである。時にはどこで聞き囁つて來るものか、後期印象派がどうだのラファエル前派がどうだのと、生意氣に繪の批評などをするけれど、もとより藝術に理解や同情のある女でもない。四五年前に、半歳ばかり〇〇座のオペラの女優を勤めて居た關係から、今でも、折折公園あたりの小芝居の舞臺へ、踊りに雇はれる事があるので、自分の姿が油繪になつて展覽會に出品されたら、少しは廣告になるだらうと云ふずる、い見もないではないが、青野のやうな評判の悪い、不人氣な繪かきに畫かれても、さつぱり廣告の效能のない事は此の前モデルになつた時からよく分つて居る筈である。それよりも彼女は青野を誘惑して金を絞取るのが面白いのである。彼女は以前の經驗に依つて、自分の肉體が青野に

對して、どれ程強い魅力を有し、どれ程むごい暴威を振ひ得るかを知つて居る。彼女が知れる限りの男のうちで、青野ほど彼女の肉體を崇拜し、憧憬して居る者はない。二三年前に、暫く二人で共同生活を營んで居た時分、榮子は殆んど青野と云ふ人間が、自分の誘惑に對して無抵抗に屈服されて行くのを見た。その頃の彼女は、既に可なりの擦れつ枯らしではあつたけれど、まだ漸く十六七の少女に過ぎなかつたのに洋行歸りの美術家だと云ふ三十近い髯ムシヤの男を、まるでおもちやの人の如く自在に取り扱ひ翻弄し得るのが我ながら愉快でたまらなかつた。彼女の前に出て來る青野は、自分自身の意志と云ふもの全くない、是非善惡の分別すらも失つた、彼女の爲めならば何處まででも止めどなく墜落して行く痴呆であると思はれなかつた。それだなくとも犯罪性の傾向のある青野が、彼女の歡心を買はんが爲めに無理な工面をして次ぎから次ぎへと悪事を働いて行く様子は、折紙つきの不良少女である榮子の眼にも恐ろしい程であつた。しまひには彼女の方が薄氣味惡くなつて、好い加減にして逃げ出さうと思ひながら、一年ばかりは一緒にずるずると引き擦られて行つた。い

たづら好きな彼女の性質では、青野が何處までも墜落して行く面白さを、見物せずには居られないやうな氣がした。自分の誘惑が小氣味よく成功して、男がだんだん馬鹿になつて行く光景を目撃する事は、反對に彼女に對して一つの不思議な誘惑であつた。その誘惑に堪へ切れないうで、彼女は殆んど、猫が鼠の屍體を口に咬へて振り廻すやうに、それ程亂暴に慈悲も容赦もなく青野の心身を掻き掻つた。さうされるのが青野にはまた、息も絶え絶えに魂の消え入るほどの歡樂であるらしかつた。

「お前は己をつくづく馬鹿な人間だと思ふだらう。女に對して己のやうに馬鹿になる男を、お前は今迄に見たことがないだらう。——己のは此れは病なんだ。己のやうな、かう云ふ奇妙な管筈を持つて居る男を、西洋では Masochist 云ふんだ。」

と、彼は折折頰をしかめて極まり惡さうに辯解しつゝ、さてその次ぎの降出には、直ぐ其の馬鹿をさらけ出して見せた。社會の公人として立つて行く資格のない青野は、眞の戀愛をも味ふことの出来ない人間であつた。彼は友人との交際に於いて金錢以外の情誼を認めないやうに、男女の關係を肉慾以外に理解するこ

とが出来なかつた。その點で彼は彼女とよく一致した。

「彼女は己を墜落させた積りで居るかも知れないが、その實己が彼女を墜落させて居るのぢやないか。」

青野はさう思つたくらゐであつた。

一年足らずの同棲の間に、榮子が彼に拂はせた犠牲の額は、どれほどに達して居たらう。地位だの名譽だの信用だのは、どうせ榮子との關係がなくても、早晚失墜すべき運命に立つて居た青野であるから、そんなものは勘定に入れないとして、單に物品と金錢とだけでも、彼女が女優としての収入に幾倍して居たか分らない。その當時、同じ俳優仲間の青年を情人に持つて居た彼女は、無闇に金ばかりを欲しがつて居た。洋服だの指輪だの腕時計だのを買つて貰ふ傍から傍から、みんな何處かへ注ぎ込んでなくしてしまふらしかつた。さうして結局、倒さにと振つてハタいても一文の錢もなくするまで、執念深く青野を追究した揚句、情人と一緒にふいと姿を隠してしまつた。

青野は其のあとで、せいせいして好い氣持であつた。脂っこい物を喰ひ過ぎた爲めに胃腸を悪くしたやうな、がっかりした心地がす

るだけで、彼女との縁が切れたのを別辟惜しくも悲しくも感じなかつた。さうかと云つて彼女の事をきれいに忘れた譯でもなく、その肉體が持つて居た魅力は、長く青野の腦裡を支配して、絶えずいろいろの空想を生んだ、多くのマゾヒストがさうであるやうに、彼も亦現實の女性に飽き足らないで幻像を戀ひ慕ふ人間であつた。青野はむしろ、彼女が居なくなつてからほんたうによく彼女の美を眺める事が出来た。彼の幻の中に現れて来る榮子は、嘗て青野の眼の前に居た彼女のやうに卑しい所や淺ましい所や穢しい所が少しもなかつた。その時の彼女は「藝術」のやうに完全であつた。——自分の頭の中に住んで居る幻の彼女が眞實の榮子であつて、此の世に生きて居る彼女は、本物の榮子を悪くした擬ひ物ではないだらうか。

——そんな風にさへ彼は思つた。人間として生れて来た彼女は、無恥な、愚かな、慾張りな、貧しい娘に過ぎないけれど、空想の世界に輝いて居る彼女は、永遠の生命を持つた妖艶な女性體のやうに感ぜられた。いつか青野は、自分の憧れる美の對象を彼女の幻に見出し居た。——もしさう云つて悪ければ、彼女の幻が其の對象にびつたりと當て嵌まつて居

た。さうして、彼の腦裡で理想化された榮子の容貌、姿勢、輪廓が、燦然たる光明を放つて彼の瞳を射る毎に、青野は強い藝術的感激の湧き上るのを禁じ得なかつた。

彼女と別れてから一年立ち、二年立つに隨つて、その幻はいよいよ明かに青野の心に描き出された。彼女の姿を中心として、其處には次第に素晴らしい藝術の國が築き上げられ、美しい夢の都が領土をひろげて行つた。それは恰も、自然界の草木が春になるとひとりでに芽を吹き花を咲かせるやうなもので、青野自身でもどうする事も出来なかつた。彼はただ、自分の頭の中にも、自然界に劣らない、其れよりも遙かに優つた、かう云ふ美しい世界があると云ふ事を人人に示したかつた。自然界の眞實の外に、もう一つの秘れた眞實のある事を、彼の持つて居る技巧の力で、此の世に傳へたい欲求に驅られた。——さうして今年の夏になつて、漸く大川の庇護の下に其の欲求を實現する機會を得たのである。

青野は其の繪に何と云ふ題を付けていいか分らなかつた。其處に現れて居る風俗や、建築や、幻の女や、それ等の持つて居る奇怪な美しさは、此の世の中に比類を求めることが出来

ない。けれども若し、嘗て地球上に榮えた事のある國士のうちから、又その國土に住んで居た神や惡魔や人間のうちから、強ひて匹儔を求めるとしたら、其れは青野が常に憧れて居る印度古代の傳説の世界であつた。昔、釋迦牟尼佛が祇園精舍に法輪を轉じつあつた摩揭陀の國、阿難尊者を邪淫の闇へ陥れた惡行に依つて、經文の中に其の名をとどめて居る妖女マタンギイの住んで居た國、——その世界こそ、彼の幻に最も近いものであつた。數年前、歐羅巴から歸朝する際に其れ等の傳説の跡を訪れた青野は、未だにあの地方の空の色や、廢墟や、森林や、外道の神祠や、市街の有様を想ひ浮べる度毎に、それが現代の中央印度の景色ではなくて、マタンギイの生きて居る摩揭陀の國であるやうに感ぜられた。少くとも彼女と彼女の住む世界とは彼の頭の中に花を咲かせ實を結んだ。不思議にも彼は、邪念と獸性とに光に燃ゆる榮子の眸に想到する時、いつも彼女をマアタンギイに擬して居た。さう云ふ譯で、青野は彼女をモデルにして畫かうとする今度の繪の題を、「マアタンギイの闇」と呼んで見た。勿論構圖の中に現れて来るものは、全然彼の夢を以て織り成された空想の所産であつて、

必ずしも印度古代の風俗や傳説に準據したのではないにせよ、青野は其の畫題に何等の不調和をも矛盾をも見出さなかつた。青野に取つては、マアタンギイの名と榮子の肉體とは、もはや傳説中のものでなく實在の人間の姿でもなく、彼の胸臆の聖壇に祭られてある神の名であり肉體であつた。

しかし、青野が今度の製作に關して其れ程眞剣になつて居るのを、それを榮子がどうして理解するだらう。彼女はただ自制力のない、彼自身にも劣つたほどに道念の乏しい、弱者としての青野を知つて居るばかりである。さうして弱者相應に取り扱つてやればいいと思つて居るだけである。此の頃は太川と云ふ保護者に泣きついて、少しは金を持つて居るやうだし、モデルに頼まれたのを幸ひに、又ぞろ此の馬鹿な男を手玉に取つて、甘い汁を吸へるだけ吸つてやらう。彼奴が洗面をつくりながら、呪ひの言葉は吐きかけながら、時には足を踏まれた犬のやうにひいひいと泣き聲を發しながら、次第次第に此方の網に引つかかつて、揚句の果ては女王の爪先に接吻する奴隷の如く打ちひしがれてしまふ様子を、もう一通見物してやらう。——さう思つて、面白半分と欲得づく

とで、彼の畫室へ雇はれたと云ふよりも侵入して來たのである。彼女の腹の中は青野にもよく分つて居た。が、分つて居たと云ふだけで、此の美しい侵入者——新しいマアタンギイの誘惑に打ち克つ術のない事も、始めから知り切つて居た。

青野は自分の胸の中に、崇高な藝術上の欲求と、醜怪な性慾の衝動との相闘つて居るのを見たら、此の二つの物の孰れか一つを捨てなければならぬといふれば、——さうして、藝術に生きる者のみが眞に永遠の生命を得られるのだといふれば、——誰しも後者を捨てて前者に就きたいと願ふのが當然である。殊に青野は、多くの人に比べて遙かに意志の弱い人間であるだけ、此の世に生きて居ても害があつて益のない背徳病者であるだけ、恥かしい情ない變態性慾の管の下に惱まされ通して居るだけ、その願望は一層切實に一層熱烈であらねばならなかつた。けれども彼の願望が切實であり熱烈であればあるほど、二つの物がいよいよ激しく軋めき合つて、彼の苦痛と煩悶とを二重にも三重にもするやうな結果を來たすに過ぎなかつた。「己はお前をモデルにする爲めに呼んだのぢやないか。そんな眞似はよしてくれ、もう勘忍し

てくれ。己は膾炙血を起して卒倒しさうだ。もう明日から繪を畫くことが出來なくなりさうだ。」

かう云つて彼は彼女に手を合はせて頼むこともあつた。ところが彼の奇妙な性癖と心理作用とを飽く迄も呑み込んで居る榮子は、さう云ふ場合に彼を陥れる急所をちやんと心得て居た。「馬鹿、馬鹿、馬鹿、お馬鹿さん！何を云ふんだい生意氣に！お前はあたしの奴隷ぢやないか。何でもあたしの云ふなり放題になつて居ればいいんだよ。」

と、臍白な子供のやうな惡體をつきなながら、毒毒しい眼と唇とに、「嫣然」と云ふ、活字の形そのままのやうにぎらぎらした笑ひを湛へて、勝ち誇つた態度で上から壓迫してかかれ、青野はむしろさうされる事を祈つて居たかの如く、直ぐに、恍惚と前後を忘却してしまふのである。

「そら御覽、生意氣な事を云つたつてやつぱり此の通りぢやないか。意氣地なし！意氣地なしやい！あたしは何處までもお前を誘惑してやる。繪が畫けなくなつたつてそんな事は構やしない。それとも勘忍して貰ひたければお足をお出し、お足をおくれつたらよウ！……」

かう云ふ風にして彼女は毎日青野から二圓三圓五圓ぐらゐづつ巻き上げて行つた。仕事の最中でも厭になると膝手にモデル臺を降りて来て、酒を飲ませるか金を擱かませるかもしなければ、容易に動かうともしなかつた。

「馬鹿、馬鹿、馬鹿やい！」

何かの度にかう云つて嘲り笑ふ彼女の聲は、青野の耳にこびり着いてしまつて居る。彼は實際、自分を此の上もない馬鹿だと思つた。なぜ已はこんななまで自制力がないんだらう。なぜ藝術に専念になれないだらう。榮子のやうな無知な女に、金錢の勘定と色慾の事より外何物も念頭のない卑しい娘に、かうまでの侮辱を受けて、何が面白いのだらう。己は肝腎な藝術の事を忘れてしまつたのか？ あの素晴らしい、何とも云へない莊嚴な藝術の事を考へて見ろ！ どうだ？ 素晴らしいもんぢやないか、莊嚴なもんぢやないか。お前はあんないい物を、淺ましい一時の慾情と取り換へつて済むと思ふのか？ —— かう云つて、彼は腹の中で繰返して見たが、結局すべての反省は徒勞に歸してしまふのであつた。彼は幻の中の榮子を憧憬し讚美すると同時に、現實の彼女と自分自身とを擯斥し憎惡せずには居

られなかつた。

——どうして人間と云ふものは、こんないろいろな苦しみを受けたり、矛盾した感情を味はつたりしなければならぬのだらう。……だが、どうせ不完全な此の世に生れて来た以上は人間だつて不完全なものにきまつて居るのだ。まして己なんかは、その中でも一番出来の悪い不完全な代物なんだ。人間が自分の意志を理想通りに實行できるくらゐなら、最初から人間なんぞに生れて来やしないんだ。——

しまひに彼はさう考へるやうになつた。もうどうしても逃れられない人間の宿命であるとかきらめて、せめてさう云ふ苦しみの中に生きがひのある自分を見出さうと努めた。夏もだんだん深くなつて、八月中旬の酷烈な暑熱が、ペンキ塗りの南京部の薄つべらな板で圍つた畫室の四壁を、煙爐のやうに火照らせて居る中で、青野は折折襲つて来る眩暈の發作と闘ひながら、書は藝術に夜は悪魔に、かはるがはる其の魂と肉體とを捧げた。さうして毎晩、酒に酔ひしれた彼女が最終の郊外電車で歸つて行つてから、がつかりした重い手足を屍骸の如く蚊帳の中へ運んだ。何を考へる能力も根氣もなく空洞のやうに痺れ切つた彼の頭の

底には、云ひやうのない悔恨の情と榮子に對する反感とが、ぼんやり澱んで居るだけであつた。

しかし明くる日の午後になつて、再び意氣揚揚と彼の畫室へ這入つて来る彼女は、一夜のうちに毒毒しさやあくどきを洗ひ落して、いつも取り立ての魚のやうに潑刺とした新鮮さを持つて居た。その様子を見ると、痺れて居た青野の頭はづきづきと痛み出して、前日の疲勞の結果が俄かに體の節節へ疼き出すのを覺えた。ややともすると、彼は書架に向つて衝つ立つたまま急に眼の前が晦くなつて何も見えなくなるやうな氣がした。

第四章

或る朝、突然、寢坊の彼がまだ布圍の中にもぐつて居た午前十時頃、めつたに客が訪れた事のない青野のアトリエの扉を、こつこつと叩く者があつた。榮子が来たにしてはいつとも時刻が少し早過ぎる。誰だらう？ 借金取りぢやないか知らん？ さう思ひながら、青野は、寝た振りをしてぢつと様子を窺つて居た。「我の、まだ寝て居るのか？ 僕だ、大川だ。」

青野は其の聲を聞きや否や、慌てて布團を頭から被つて、まだ呼びつづけて居る大川の聲を二三遍聞き流した。——今時分、何だつて大川がやつて来たんだらう、一遍も己の所へ訪ねて来たことのない男が、何の用事で出かけて来たんだらう。己の方から訪ねて行く用はあつても、向うから来る用なんぞはない筈である。もしかすると、大川は己の繪を見に来たのぢやないかしらん？ 此の家には晝室より外の部屋のない事を知つて居て、何かの用件にかこつけて、製作の模様を内内探りに来たものではあるまいか？——

「青野君、ちよいと起きてくれ給へ。僕だよ、大川だよ、少し君に頼みたい事があつて来たんだ。」

青野は忌ま忌ましさうに寢臺から飛び降りて、どしんどしんと床板に足音を立てて、入り口の扉の孔に鍵を差し込んだ。

「まだ寝て居たんで、鍵がおけて居るんだ。今あけるから待つてくれ給へ。」

「いや、明けないでもいい、此處で話をしよう。」

と、大川は表に立つたまま、扉に口を寄せながら、

「……君、此の家はアトリエと間しかなんだらう。僕が此の戸の中へ這入れれば、自然と君の製作を見るやうな事にはほしくないか？」

かう云つた彼の言葉は、いつも青野に金を貸す時のやうな、反抗的なイライラした調子ではなく、いかにも相手に誤解されるのを恐れるやうな、むしろ大川の柔和で小心な性質をよく露はした、思ひやりの深きうな優しい聲であつた。

青野は自分の恩人に詰まらない嫌疑をかけたのを取ぢないでは居られなかつた。

「まあいいぢやないか、這入り給へな。まさか其處で立ち話をする譯にも行かないから。」

と、青野は氣の毒さうに云つた。すると相手はいよいよ極まりが悪いらしく、ひそひそと囁くやうに、

「一だけど、這入る前に君に頼んで置きたいんだ。僕は君の繪を見ても差支へないだらうか。——實は別段用事がある譯ぢやないんだけれど、僕は今日、君の繪を見せて貰はうと思つてやつて来たんだ……」

青野ははつと思つた。同時に、今迄やさしさうに聞えて居た大川の語氣が、何だか急に陰險な作り聲のやうに感ぜられた。扉の外に、鼻着した眼を光らせて息を弾ませて居る相手の顔が

ありありと見えた。——藝術の上では敵同士である、ついで此の間立派に己に宣言して置きなながら、あの剛情な、神經質な男が、節を屈してこんなことを云ひに来るなんて、敵に降参したも同然ぢやないか。そんなに己の晝く物が氣になるのか知ら？ そんなに己が恐ろしいのか知ら？ それにしても、自分のアトリエへは己を一步も入れない癖に、なんば不斷から金の世話をして居るからつて、よくそんな勝手な事を頼みに來られたもんだ。いつそ斷つて歸してしまはうか知ら？——が、青野はふと、近にまた五十圓ばかり借りに行かねばならない事を思ひ出した。いづぞや借りた二百圓の半分以上は榮子の爲めに誤魔化されたので、もう四五日も立てば、二進も三進も行かなくなるに極まつて居る。此の際大川の御機嫌を取つて置かないと、どんなところで鱈を取られるか分らない。それよりは、快く頼みを聴いてやつて、工合がよきさうだつたら此の場で直ぐに切りだしてやらう。

「見たければ見せてもいいがね、僕もあんまり自分の仕事を見られるのが好きに方ぢやないんだよ。」

青野はわざと勿體をつけながら不承無精に

扉を開けた。

入口の前の石段の左右には二三本のポプラが植わつて、その蔭に紫陽花が咲いて居る。朝からそよとの風も吹かない、日中の暑熱が想ひやられるやうなかつきりと晴れた炎天から、鋭い光線が燃えるやうに赤土の地面へ直射する明るさの中に、大川は瀟洒としたリンネルの服に白靴を穿いて、コーヒの樹のステッキを肩に擔ぎながら、兩手で扉へ凭れるやうにして立つて居た。何となく門口で救ひを求めらるる人のやうな、例になくおどおどした哀れつばい様子があつた。

「……そりやあさうだらうとも。僕だつて自分の畫室へは決して人を入れさせやしないからね。……」

かう云つて、彼はまだ敷居際にもぢもぢしながら、色白の、品のいい瓜實顔をまともに青野の方へ向けた。熱さの爲めか恥かしさの爲めか上氣した頬が櫻色を帯びて、三十一二の歳ごろとは思へない、妙に坊つちやんじみた愛らしさが見える。

「……だから事に代つたら君に斷られるだらうと思つて居たんだ。どうせ君の繪が出来上れば見られるのだから、仕事の最中に邪魔に來なく

つてもいい譯だけれど、僕は先達或る所と、気がかりな事を耳に挿んだのだ。と云ふのは、君と僕とが偶然同じ題材のものを畫いて居るらしい。然も同じモデルを使つて、……」

「同じモデル？ それぢや君は榮子を使つて居るのかい。」

青野は滿身に水を浴びたやうな氣がした。萬事に秘密主義を守つて居る大川が、モデルの名前を人に漏らさなかつたのに不思議はないとしても、それにしても彼は欺かれたやうな氣持ちを禁ずる事が出来なかつた。あの女がどんな事を大川にしやべつたらうか。自分があの女に翻弄されて馬鹿を盡した行爲の數數は、みんな知られてしまつたらうか。「繪をかく爲め」と稱して借りて來た金の使ひ途まで、すつかり曝露してしまつたらうか。もしあの女が、大川とモデル以上の關係を結んで居るのだとしたら、……いやたとへ關係はなくても、自分の性慾の秘密を握られてしまつたとしたら、自分は今もう、金の問題ばかりでなく、女の事に關しても全然大川に頭が上らない。それを考へると恥かしいやら腹立たしいやらで穴へでも這入りたいたやうな心持ちがする。

「その事について、誤解を防ぐために一應辯解を

する必要があるが、……」

と、大川は度胸をきめたらしく、ポケットから悠悠と銀の煙草入を出して、兩切りのスリーキヤツスルに火を點じて、地面へ捨てたマツチの棒の燃え上るのを視つめながら、落ちていた腰がない態度で云つた。未だに入口に直立して居る彼の細長い、兩脚の、すつきりとした白のツボンが日に照らされて、正しい折目の直線を境界に鮮明なる影日向を作つて居る。

「僕は決して君の仕事の妨害をする爲めに、若しくは強ひて君と競争をする爲めに、あの女を使つて居る譯ではない。實を云ふと、今度は君よりも僕の方が先にあの女を雇つたんだ。君が榮子の所へ頼みに行つたのは、僕よりも二週間ばかり後だつたんだ。」

「それを君はどうして知つて居る？ 榮子が君にしやべつたらうだらう。」

云ひながら青野は、包みきれない不安の色を隠さうとして、二三日湯へ這入らない汚れた手先の先で、蓬蓬とした雲脂だらけな髪を毛をどりと掻いた。

「まあさうなんだ。……打ち明けた話をする

つて居たんだ。けれども其れでは僕の氣持ちが濟まないしするから、是非承知をするやうに散散説きすすめて、漸く君の所へ來させたのだ。かう云つても僕は君に恩を着せる積りではないが、少くとも僕に何等の疚しい點がない事だけは認めてくれるだらう。或ひは君は、そんならさうとなぜ知らせなかつたかと云ふかも知れない。しかし僕が自分の畫く物の題材だのモデルだのに就いて、平生から絶対に秘密主義である事は君だつても知つて居るだらう。だから今度にしたつて、榮子であるが爲めにモデルを秘して居た譯ではない。」

「そりやあさうだらう。其の點は僕にもよく分つて居る。君があつた口添へをしてくれたのだとは知らなかつた。いろいろ有り難う。」

かう云つて青野は、不愉快らしくふさぎ込んだ顔を見せて、かすかなお辭儀をした。本氣で感謝して居るのだから皮肉を云つて居るのだから分でもよく分らなかつた。

「それからまた、かう云ふ誤解もあるかも知れない。——僕があつた女と關係して居るのではないかと云ふやうな……」

大川はちよとい言葉途切らせて、相手の表情に反應の表れるのを見ようとした。が、青

野はやつぱり俯向いたまま、何の手答へもなく黙つて居る。

「もし少しでも、君に疑をかけられて居るやうだつたら僕は飽く迄も辯解する必要がある。」

「いや、そんな辯解はしないでいい。」

今度は青野が靨顔をしないで首を擡げた。

「……萬一君があつた女と關係があるにしたら僕には其れを咎める權利はないのだから。」

かう云つた彼は決して嫌味の積りではなかつた。勿論關係があるよりはなない方がいいに極まつて居る。けれど、たとへあつたとしたところ、彼は別段それに嫉妬を感じるのではない。

眞の戀愛を味はつたことのない彼は、戀愛から來る嫉妬の感情をも經驗したことはないのである。彼の恐るるところは、自分が道徳上の不具者であるのみか、性慾の上でも一種の畸兒であること云ふ大事な秘密が、外聞の悪い、此の上もなく不眞面目な思まはしい秘密が、大川の手に握られはせぬかと云ふ心配だけである。

「けれども君に疑はれて居ると居ないとは、僕に取つては重大な問題なのだから、……」

と、大川が少し改まつた口調で云つた。

「……僕は此の間君に金を貸した時、藝術の

上ではお互ひに敵同士だと思つてくれろと、君に宣告しただらう。僕は飽く迄も君の天分を嫉視する。君の製作が成るべく失敗に終ることを祈るときへ云つたらう。あの時のあの言葉の意味は、何處までも藝術の上での嫉妬であつて、決して卑屈な動機から出たものではないと云ふ事を、是非とも君に了解して貰はなければならぬ。僕が榮子と關係があつて、その爲めに君を嫉妬して居ながら、陋劣な感情を藝術に託して發表したやうに邪推される事を、僕は何よりも恐れるのだ。勿論モデルに頼んでくらゐだから、僕も榮子の美は認めて居る。君と一緒に始めて彼の女のダンスを見た時から、君と同時に僕は彼の女の肉體が持つて居る不思議な美しさは認めて居る。けれども幸か不幸か僕はあつたやうな無智な女を戀ひする氣にはなれないのだ。或ひは君とあつた過去の關係を知らなかつたら、今度のやうな場合に、玩具として見ようと思ふくらゐな好奇心は起したかも知れないけれど、彼奴と一度でも關係したが最後、どんな引係り合ひになつてどんな目に會はされるか、どれほどの犠牲を拂はされるか、君の前例を見て居る僕にはよく分つて居る。ああ云ふ札付きの不良少女に係り合ひをつけるほど、僕が

大膽な人間でない事は、君も大凡そ察して呉るだらう。僕はただ、あの女の慾張りを利用して、普通のモデルの二倍も三倍もの金を拂つて、御機嫌を取りながら使つて居るだけの事なのだ。……ねえ君、君はよもや其の事について僕を疑つては居ないだらうね。」

「疑つては居ない。それに、先も云ふ通り疑つたところで仕様がなないのでから、……」

青野は煮え切らない口振りでも云ひながら、似やにやと譯の分らない笑ひ方をした。——さうして、瞳の奥で、まだ何か知ら別な事を氣にかけて居るらしい。

「仕様がなないのでからでは僕が困るんだ。僕の潔白を信じて貰ひたいのだ。」

「そりや信じて居る。……だが僕だつてあの女を戀ひして居ると云ふのではないんだ。僕は誰にも隠して居るんだけれど、……尤も君には、いつだかちよいと話した覺えがあるやうな氣がするけれど、生れつきマゾヒズムの傾向があるもんだから、それを彼の女が君にしやべりはしないかと思つて、それが何だか心配なんだよ。僕は随分あの女と馬鹿な、下らない眞似をしたんだよ。僕は實際その點でも常識を外れて居るんだよ。道徳上の不具者と云はれるよ

り其の方が極まりが悪いくらゐるんだから、もしも君があんな女から聞いた事があつたとしても、どうか僕に聞かないと云つて安心させてくれ給へ。さうして榮子の話はもう止めにしてくれ給へ。」

青野はこんな事を云ふ積りではなかつたのに、何か、船へでも乗せられてずんずん沖の方へ進んで行くやうな心持ちで、つうかうかとしやべり出してしまつた。——いよいよ、やにやと愛な笑ひやうをして頬ツペたを火のやうに火照らせて、——

「ああ止めにしよう。」

大川は面喰つて眼をばちばちやらせて居たが、暫く過ぎて、間の抜けた時分に慰めるやうな聲で云つた。

「その話は止めにして、君の問題に歸らう。それで君は、僕と同じ題材を擇んだのだとする、やつぱりマアタンギイを畫いて居るのかね。」

「さうなんだ、僕は君と同じモデルで同じ題材を扱つて居ると云ふ事を知つてからも、無論最初の計畫を變更しはしなかつた。却つて何處までも君と競争してやらうと決心したくらゐだつた。現に昨日まで、榮子は毎朝僕の畫室へ

通つて、午後から君の方へ廻つて居たんだ。——しかし、あの女から時時君の製作の様子を聞くに随つて、僕はだんだん脅やかされずには居られなくなつた。君と僕とが、偶然同じやうなものを狙つたのはもう此れで三度目だ。去年の展覧會の時も、それから二三年前の時も、二人のあの作品が一つ會場へ陳列された時、僕はどんなに君に對して嫉妬を感じ敵意を抱いたらう。いや恐らく僕は、自分の作品が君の傍に列べてなかつたら、さうして君と僕とが同じ

學校の同期生でなかつたら、きつと君を崇拜する氣になつたらう。正直を云へば、今でも僕は君を嫉妬する資格はないかも知れないのだ。崇拜するのが寧ろ當然かも知らないのだ。仕合はせにも今迄は不人望の爲めに君の物は黙殺されて、僕の方がかりが評判になつたけれど、今度のやうな大作が出品されて、而も其れが立派な出来栄であるとしたら、いくら世間が君の平生を憎んで居ても、もう黙殺する事は出来ないにきまつて居る。萬一また、社會が徳く迄も君の不道徳を追究して、聖罵を浴びせた

如く僕の評判が好かつたとしても、その爲めに僕の嫉妬と不安とは一向減殺されはしない。

「僕は最初、今度の製作に就いては可なりの自信を持つて居る積りだつた。今度こそ君に抵抗してやらうと云ふ意氣込みだつた。君が持つて居るだけの力は、奮發すれば僕にだつてない事はない、さう思つて自分を幾度勵ましたか知れなかつた。だが、君と全然同じ題材の、おまけにモデルまでも同じ作品が、會場に並んで掛けられた時の光景を想像すると、僕はさながら強迫觀念に襲はれたやうな心地がする。君と僕との間にはまだまだ遠い距離がある。それを見ないやうに見ないやうにと思つても、どうしても見ずには居られない。……」

さう云つて、大川は苦しさうな息を吹いて、帽子を脱いで額の脂汗を拭つた。また此の間のやうに知らず識らず眼が血走つて来て顔色が眞青になつて居る。煙草を飲み過ぎたのか、それとも胃擴張を起して居るのか、長い話の途中で折折犬が欠びをするやうに力張りながら口腔を開いて、げえげえとへどを吐くやうな切ない咳をする。

「……僕は、道徳家と云ふ譯ではないけれど、自分の行爲の善惡に就いては普通の人よりも潔癖の方だし、それに、正直で臆病だから他人には親切のやうに見えるし、多くの人からは善

人だと思はれて居る。世間に対して君とはまるで反対な徳望を持つて居る。……」

「……けれども僕だつても道徳家であるよりは藝術家でありたいのだ。たとへ君のやうな人間になつても、いい藝術が作れるならば作つて見たいのだ。僕は少くとも、道徳上の神経は鋭敏だが藝術上の感覺は遲鈍だとは思はれたくない。僕の作品が、君のよりも遙かに劣つた僕の作品が、君のものと列べられて同じ會場へ出品される事が分つた時、僕に少しでも藝術的良心があるならば、どうして平氣で仕事を續けて居られるだらう。もしも容貌の醜い女が、應面もなく美人の前へ出て、而もこゝこゝと厚化粧をして私の方があなたよりも器量が上ですと云つて威張つたとしたら、その女は馬鹿に違ひない。無神経に違ひない。僕の場合にはちやうどそれと同じ事だ。僕は友達の間でお坊つちやんと云はれ、お人好しと云はれて居る。どうかすると自分でも、さう云はれるのを得意に感じて居る。だが藝術の上で迄も、お坊つちやんやお人好しにはなりたくない。假りに、僕が自分の劣つた器量を公衆の面前へ曝して、れいれいしく君と競争するとしたら、

少くとも物の分つた人たちは腹の中でどう考へるだらう。僕は藝術家として、此れほどの屈辱はないと思ふ。それに、君と僕とは此の頃妙な關係になつて居る。世間の人は僕が君を拾ひ上げて、金銭上の援助をして居るのをうすうす知つて居る。それだけに僕の屈辱は一倍強くなる。僕は自分をそんなにまで厚かましい恥知らずの人間にはさせたくないのだ。」

話を聞いて居る青野は、いつの間にか相手の爲めに高い所へ持ち上げられて居た。大川の彼を畏れ、憚り、信ずる言葉が、彼のだらけた魂を引き緊めて、遙かな天空へ翔翔させるやうであつた。それほど大川の告白には眞實が溢れ、熱情が籠つて居た。こんななまでに雄辯な激勵の文句があらうか、こんななまでに有り難い諛諛の辭があらうか、——青野は何だか酔つたやうな氣持がした。

「……君がそれ程僕を認めてくれるのは、忝いだが、」

と、青野は夢から覺めたやうに、ぼんやりとした顔つきで云つた。——何と云つて大川を慰めたらばいいであらう、見え透くやうな謙遜の言葉をならべたら却つて大川は腹を立てやしな

「……君にしたつて今度は一生懸命なんだらう。君が今度の製作に對して、どれ程眞剣になつて居るか云ふ事は、かうしてわざわざ僕のところへやつて來たのでも分つて居る。さうだとすれば君の畫く物が果して僕のに劣つて居るかどうか分りやしないぢやないか。君は此のごろ僕の神經衰弱が移つたんだよ。あんまり仕事に夢中になつて少し昇奮して居るんだよ。だもんだから、そんな事が心配になるんだ。……」

「或ひはさうかも知れない。しかし、誰でも僕のやうな立ち場に置かれれば昇奮もするし神經衰弱にもなるだらう。——僕は兎に角、君の繪を見せて貰はないうちは、仕事を續けることが出来なくなつたのだ。君、お願ひだ、頼むから繪を見せてくれ。」

息切れがして倒れさうになつた人間が、一杯の水を求めゆるやうな、激しい、忙しい調子で大川が云つた。

「敵同士だと宣言して置きながら、こんな事を頼みに來るのは、恥辱だと云ふ事も僕は知つて居る。しかし公衆の前で受ける恥辱に比べればまだまだ僕は我慢が出来る。藝術家が、自分より勝れた天分を持つ人の前に、男らしく頭を下げるのにきまりの悪い事なんぞはな

い譯だ。……僕がこんな事を云へば、反對に君はますます得意になるにきまつて居る。さう思ふと僕の嫉妬は募りこそすれ、決して弱められはしないが、忍び難い所を忍んでかうして君に頼みに來たのだ。全體君と僕とは、平素の性質が黒と白のやうに違つて居るのに、藝術の上ではどうしてかうまで傾向が似寄つて居るのだらう。どうしてかういつもいつも、二人の畫く物が衝突したり暗合したりするのだらう。二人は到底、兩立する事が出来ないやうにさへ考へられる。さうして結局才能の劣つた方が滅びなければならぬのだとすると、勝利は天才を持つ人間の上に輝くのだとすると、僕は恐ろしくなつてぢつとしては居られないやうな氣がする。」

から大川が云つた時、眼に見えぬ暗い影が二人の前を通り過ぎたやうであつた。二人は申し合はせたかの如く口を噤んで、妙にトゲトゲしい眼つきでお互ひの顔の中を見た。

「……よるしい、君がそれほどに云ふなら見せて上げて、多少支へない。」

と、少し過ぎてから、青野が沈鬱な聲を出した。「けれど君、餘計な事だけれど、君は僕の繪を

見たあとでどうしよう云ふのかね。」

「僕の繪と見くらべるのだ。若し僕の繪がとも君のに及ばないと悟つたら、出品を見合はせようと思つて居る。」

「それぢや君が僕の繪を見たあとでも出品を中止しないやうだつたら、君の作品には非常な自信があると認めていいんだね。」

青野は意地悪さうに唇を歪めて云つた。

「君、僕の卑怯を笑つてくれ給へ。僕は君の出來栄を見たと様子で、君と競争しよう云ふのだ。自分の畫いた物が、君の物に比べてさう取かしくない云ふ事が分つたら、或ひは自信が出るだらうかと祈つて居るんだ。——けれども僕には、見ない先から大概結果が分つて居るやうな氣持がする。自信と云ふ物は人の作品を見せられてから起るやうなものぢやないだらう。僕にほんたうの自信があるくらゐなら、始めから君の所へなんぞ來やしないのだ。」

「さうして若し、君が出品を中止しなければならぬ場合になつたとする。さうなつたら君はどうするのだ、まさか永久に僕との競争を斷念するのぢやないんだらう。」

「無論の事だ。僕は自分を發憤させる爲めに君の繪を見せて貰ふのだ。『此の馬鹿野郎』と云つ

て君に頭を擲つて貰ふのだ。今年駄目ならば
來年迄に僕は必ずあの繪を畫き直す。何度で
も自信のつく迄畫き直す。さうして飽く迄も君
と競争する。」

「まあ待ち給へ。それなら斯うしようぢやない
か。——繪を見てからの相談にしてもいいが、
模様によつたら、來年君の繪が出来上るまで、
僕も出品を見合はせるとしよう。……」

「え——」
と云つて相手が驚いて居る際に、青野は何と
思つたか、急に氣味の悪い、いつも金の無心をす
る時のやうな、下可張つた薄笑ひを浮かべながら、
「いや、何も君に對する友情の爲めに云ふの
ぢやないんだ。僕は友情なんぞのある男ぢや
ないんだから、さう思はれると却つて工合が悪
いんだよ。實を云ふと僕はもう例によつて金が
一文もなくなつて居る。だから來年まで出品
を見合はせる代り、……」

こんな事をもぐもぐとしゃべり出した青野の
顔を、大川がふいと氣が附いて見ると、いつの
間にか狡猾な表情がハッキリと浮かんで居る。
不斷ならば癩癩がむらむらと起つて來るところ
だのに、其れを何とも感じないだけ大川は自分
の事で胸が一杯になつて居た。

「……さう云ふと變なやうだが、つまり僕の繪
を君に買つて貰へばいいんだ。買つて貰へば永
久に出品なんぞされなくつたつて構はないん
だ。どうせ僕の物なんか、褒めてくれるのは君
ばかりで、展覽會へ出したつて誰も批評をし
てくれやしないし、賣らうと云つても買手なん
か一人だつてありやしないんだ。僕は外の人と
違つて、展覽會へ出品されたのを名譽だとも
有り難いとも感じた事はないんだよ。それより
か金の方が餘つほど有り難いくらゐなんだよ。」
金が欲しいなら何とかが都合して上げる。だが
金の事と繪の事とは別問題だ。」

と、大川はきつぱり云つた。
「僕から金を貸す代りに、君の出品を來年まで
延ばすなんて、そんな眞似をされちゃ僕が不愉
快だ。君は是非とも今年出品するがいい。」
「それぢややつぱりさうするとしよう。——だ
けれど君、ほんたうに金の方は何とかしてくれ
るだらうか。百圓……か、五十圓くらゐでもま
あ暫くは凌げるんだ。」

うまく行つた、と青野は腹の中で思つた。金
さへ貸して貰へれば外の事はどうでもいい。私
の繪を見なければ、さあさあいくらでも御覽下
さい。……さうして己はまた、當分榮子を相手

にして面白い夢が見られる。……
「馬鹿、馬鹿、馬鹿やい！ お前はあたしの奴
隷ぢやないか。」
かう云つて唇を裂き出して嘲り笑ふ彼女
の顔が、ちやうど門口に咲いて居る紫陽花のや
うにきらびやかに彼の空想に浮かんだ。

第五章

ばたり、ばたり、と大川は八疊の書齋の四角
な紫檀の机の周圍を、檻に入れられた歌のや
うに往つたり來たりして居る。腕を組んで、項
を垂れて、ぢつと足もとから二三尺先を睨ん
で居る彼の瞳は、今にも氣が違ひさうに、折折
險惡な光を漲らせる。今朝、目白の青野の家を
出てから、何處をどう通つて何時ごろ田端へ歸
つて來たのだから、自分でもまるきり覺えがない。
恐らく彼は、目白から此處まで、暴風に凌はれ
て一とツ飛びに撥ね飛ばされて來てしまつたん
だらう。……

彼はもう、畫室へ這入つて自分の繪に面する
勇氣もない。頭の中にはただ、先青野に見せ
られた「アタタンギイの闇」の畫面が、素晴らし
い色彩に充ちた大空の虹のやうに、とても自分
には手のとどかない虹のやうに、懸つて居るば

かりである。その虹をちつと視詰めて居ると、太陽の如く赫赫たる光線を放射して、彼の眼を奪ひ、膽を奪ひ、果ては魂をも奪つてしまふ。彼は気が遠くなつて、次第にがつかかりして、それから陰鬱な、眞暗な谷底へ深く深く落ち込んで行く。

「青野君、君は天才だ。恐ろしい天才だ。僕が君と競争するなんて滑稽至極だ。」

かう云つて敵にひれ伏した時の、あの瞬間の自分の驚愕に充た氣持ちや、絶望的な態度や、諷語のやうな言葉の節節がありありと思ひ出される。若しも神様が二人の様子を蔭で見えて居たとしたら、自分はどんなに神様から笑はれたらう、憐れまれたらう、氣の毒がられたらう。……いや、神様はいつも天才の味方をする。自分の事なんぞでんで考へてもくれなかつたらう。

若しも自分が、藝術家として神から見放されて居るのだとすれば、自分は今も此の世に生きて行く必要はない。自分には青野と違つて、親譲りの財産もあり、地位もあり、名譽もある。藝術を捨てても世間を渡つて行きなければ安樂に渡つて行ける。だが、そんな風にして生涯を送ることに何の價値があらう、何の意義があらう。自分は凡庸の徒かも知れないが、まだそ

れ程に凡庸にはなり切れない。自分だつて、藝術を外にして永劫に生きる道のない事を知つて居る。永劫に生きる事が出来ないとすれば、出来ないとすれば……己は死んでしまつた方が増しだ。

大川は絶壁の縁へ来たやうにびたりと立ち止まつた。午後二時ごろの、密閉された部屋の中は息が詰まるほど暑苦しい。今此の室内で、自分が首を絞つて死んでしまつたら世間は何と思ふだらう。——大川は懐から右の手を出して、喉の動脈を軽く抑へて見た。それから又よろよろと歩き出した。

……さうだ、藝術に望みがないときまつたら己はいつそ死んだ方が増しだ。あの、畫室にある己の繪をすたすたに引き裂いて、青野の天才を天下に推稱する遺言状を書いて、此の部屋で首を絞るか、毒藥を仰いで死んでやらう。さうしたら己の名は青野に依つて千歳に傳はるだらう。これほど藝術に執着し、これほど天才を憧憬して居る、己の壯烈な意志と氣魄とだけはせめて此の世に遺るだらう。兎にも角にも

青野と無益な競争をして世間の物笑ひになるよりはいくらか増しだか分らない。……さうだ、自殺するのが一番いい。

しかし己はほんたうに死ねるだらうか、ほんたうに、藝術に關する煩悶の爲めに死ねるだらうか。……それともたかが一枚の繪の爲めに自殺する事が出来るとしたら、己は氣が違つて居るのだらうか。……いや、氣が違つて居るのも構はない。氣が違ふほど眞面目な苦悶をして居るのだから發狂するのは當り前だ。發狂出来れば有り難いくらゐるだ。發狂に依つて己の藝術的良心の鋭敏な事がいよいよますます證據立てられるんだ。軍人が名譽の戦死を遂げると同様に、己は名譽の發狂をするんだ。……こんなに一生懸命ならよもや死ねないこととはあるまい。死ねる、死ねる、たしかに死ねる、己はもう疾づくに發狂して居る!

だが、大丈夫死ねるとして、己はもう一遍考へて見る必要がある。自殺するより外に、果して何等の方法もないだらうか。己は絶対に神様に見放されて居るのだらうか。いくら修養しても、何年経つても、己は青野のやうな天才にはなれないだらうか。どうも己は、自分の才能に對して未だに多少の未練がある。己には全然天才がないとは信じられない。現に己が斯うして苦しんで居るのは天才のある證據かも知れない。此處で失望し

て命を棄てるか、勇氣を鼓して難關を突破するかが、天才と凡庸との別れ目かも知れない。己は神様に見放されたのでなく、試されて居るのかも分らない。さうだとするとウツカリ自殺したら大變だ。蛇蜂取らずだ。やつぱり何とかして生きて行く方がいいだらうか。……

考へれば考へるほど分らなくなる。生きられるものならば生きて居たいけれど、とても此のままでは生きて行かれさうもない。生きるには生きるだけの活路を見出さなければならぬ。活路を見出すか否かに依つて、己が天才になれるかどうか決するのだ。……さうだ、勇氣がなくつちや駄目だ。無闇に氣を落さないで、もう一通よく、シツカリと考へ直して見よう。

……全體己は最初から勇氣を缺いて居たのぢやなかつたんだ。己の勇氣を沮喪させ、己をこんなに迄絶望の淵に沈めた者は青野なんだ。いや、青野と云ふよりは寧ろ青野に對する己自身の恐怖と嫉妬の爲めなんだ。青野と己とが、たとへ同じく藝術に志して居たにもせよ、時代を異にするとか、傾向を異にするとかしたならば、己はこれほどの打撃を受けやしなかつたんだ。彼奴と己とは、まるで一つ魂から出た二人の人間のやうに、藝術の上で必ず同じ軌道

を辿つて居る。彼奴が畫かうとする題材を己もきつと畫くやうになる。己が漸く搜し出して來たモデルを彼奴もいつの間にか眼をつけて居る。さうして出來上つたものを比べると、己はきまつて彼奴に負かされて居る。己は何だか、自分が青野の影法師ではないかと云ふやうな氣がして來る。實際若し此處に、全然同一な美を表現しようとする二人の藝術家が居るとしたら、二人のうちの孰れか一人は存在の必要がない事になる。藝術と云ふものが自己の存在を主張するものである以上、二人は互ひに他の一人を排擠し合はなければならぬ。——さう氣が付いた瞬間から、己は自分を働み出したのだ。さうして青野が殆んど己を眼中に措かないで、晏如として製作を續けて居るのを見れば見るほど、己はいよいよ彼奴に威嚇され、彼奴を嫉妬するやうになつたのだ。彼奴が金なら己は銀だ、彼奴が天才で己は凡才だと、いつからともなく思ひ込まされてしまつたのだ。

成る程彼奴は天才には違ひない。今のところでは何と云つたつて己は彼奴に敵ひつこはない。しかし人間には早熟の者と晩成の者とがある。己は今年まだ三十一だのに、己に天才の素質がないと、誰が斷言する事が出来る？ 天才

だか天才でないかは、一生かかつて努力して見た後でなければ分る筈はないぢやないか。己が青野に劣つて居るのは、素質に於いて劣つて居るのではなく、成長が遅いだけなのだ。その證據には、己は常に青野と同じ方向に進んで行つて居る。己の素質も研げば金になるかも知れないんだ。

そんなら己はなぜ自信を失墜したのか？ なぜ勇氣を沮喪させたのか？ さうしてなぜ、青野に脅かされるのか？ ——己に天才の素質があると云ふ事さへ明かになつたならば、己の青野に對する不安は全く除去されてしまふだらうか？ ——いや、恐らくさうは行かないだらう。さうなつてもやつぱり己は青野を呪はずに居られないだらう。藝術の上で己と同じ傾向の軌道を走りつゝある限り、いつ迄立つても己は彼奴に脅かされるに極まつて居る。その軌道を己が一尺進む間に、彼奴は三尺も四尺も進む。先へ歩いて行く爲めに、彼奴は自分が何だか彼奴の跡ばかり喰着いて行くやうな氣がして居る。己の彼奴に對する敵意は、單純な嫉妬ばかりでなく、自己と全然同型の藝術家が、もう一人此の世の中に居ると云ふ不安な自

己は今年まだ三十一だのに、己に天才の素質がないと、誰が斷言する事が出来る？ 天才

己は今年まだ三十一だのに、己に天才の素質がないと、誰が斷言する事が出来る？ 天才

覺から来て居るのだ。己の住んで居る想像の世界に彼奴も住んで居る。己の創作しようとする物を彼奴も創作する。彼奴の畫いた繪を見ると、己は自分の魂がいつ一度は到達しようとして居るところの郷土を見出す。畢竟己の感ずる脅威は、自分の離魂體に惱まされたキリアム・キルソンの感じた脅威と同じものなんだ。己のやうな位置に置かれて、誰が打撃を受けずに居られるだらう、誰が平氣で居られるだらう。己の勇氣が沮喪するのも、己の才能の成長が鈍いのもみんなそれが原因なのだ。青野さへ居なかつたら己の素質はめきめきと發達して、もう今頃は立派な金になつて居たかも知れないんだ。

青野に云はせれば己が青野に似て居ると云ふだらう。けれども己に云はせれば青野が己に似て居るのだ。少くとも己は青野に似て居ると云はれて、自分の今迄進んで来た軌道の方向を變換する譯には行かない。己の藝術は己み難い衷心の欲求から出たものだと己は主張する。そんなに容易く變換されるやうな、賈物の藝術ぢやないと己は固く信じる。さうでなかつたら己は始めつから青野と競争する資格もなし、素質もあつたものぢやないんだ。だが、己が

自分の藝術の個性を主張するとなれば青野も同様に主張するだらう。己が變更出来なければ青野だつて出来ないだらう。さうしたら己の受ける不安と壓迫とはいつ迄立つても取り除かれる時機は來ない。己は相變らず落膽し、失望し、脅かされる。……

それでも生きて行かなければならぬとしたら、己は全體どうしたらいいんだ。何處に己をフエタルな運命から救ひ出す活路があるのだ。己も存在する。さうして青野も存在する。

……何處に妥協の道があるんだ。いくら考へても結局道がないとすれば、己はやつぱり死ななければならぬのか？ 青野の天才にとうとう負かされた事になるのか。泣いても笑つても己は神様に見放されたのか？

妥協の道は斷じて有り得ない！ 己が飽く迄も生きて發達して天才の境地に仰びて行くには青野が此の世から居なくならなければ駄目なのだ。彼が存在する限り己の前途は眞暗闇だ。己はどうしても自殺しなげりやならない。……それとも自殺しなげりやなければ、青野を生かして置く譯には行かない。……
「さうだ、己は青野を殺すより外にない。」
大川は覺えず口へ出して微かに云つた。それ

から急いで違ひ棚の前へ行つて、其處に立てかけてある小びさな鏡に自分の顔を映して見た。人間がこんな考へを起す時はどんな表情をして居るだらうかと思ひながら。

……青野が死ぬか、自分が死ぬか、二つの場合より外にない。己が死ねば青野の藝術が成長する。青野が死ねば己の藝術が救はれる。青野を殺すのは不道德だとしても、自分の藝術を殺す方がより不道德ぢやないだらうか。己は他人に忠實である前に自分自身に忠實でありたい。己の藝術が救はれば己は永劫に生きる

ことが出来る。人間の持つて居るものうちで永劫に生きんとする意志が最も高く貴いとすれば、その意志を貫く爲めには如何なる犠牲をも忍んでいいのだ。それを忍ぶだけの熱情と勇氣とがあつてこそ、己は始めて天才になれるのだ。さうなつたら神様だつても己を見放しはしないだらう。己の犯罪がいかに眞剣な、いかに莊嚴な動機に依つて行はれたかと云ふ事は、人間には分らないでも神様は認めてくれるだらう。昔から嘗て一人でも、己ほど莊嚴な動機から人を殺した者があるか。それほど自分の藝術に忠實だつた者があるか。己はその動機だけでも立派に天才の資格がある。……さうだ、

天才の資格がなくつて、どうして藝術の爲めに人を殺す事なんぞ出来るもんか。己が天才だからこそこんな考へが起つたんだ。己が青野を殺すのは唯り天才にのみ許された特權を行使するんだ！ 銀は金を殺す事に依つて自分を金にする事が出来る。青野さへ居なくなれば、青野を愛して居た美の神はきつと己を愛してくれる。さうだ、さうだ、己の活路は此處にあるんだ。己は神から與へられた試験の答案に及第したんだ。その答案に從つて斷然として実行しなければ天才の權利を自ら放棄したも同然だ。躊躇する必要が何處にある！ 肉體が肉體を殺すんぢやない、魂が魂を殺すんだ。此の世の利益の關ひでなく永遠をめあての關ひだ！...よし、もう分つた！

大川は歡喜のあまり、彈かれたやうに部屋の中でどしんと一つ飛び上つた。母親から褒美を貰つた子供のやうな嬉しさがこみ上げて來て體中がぞくぞくした。己は救はれた。己は勝つた。」と、續けざまに口の内で叫んだ。...

うまくやりさへすれば誰も己を疑ふ者はない。己は小膽な人物として、徳義に厚く友情に富む人間として世間に通つて居る。現に己は青野に對して庇護を加へいるいろの面倒を見て

やつて居るぢやないか。己の友人は皆それを知つて居る。さうして義侠的精神の發露だと認め居る。世間の凡くらどもは己の藝術が青野に劣つて居るとは信じない。己が青野を嫉妬して居ようとは夢にも知らない。二人の間の消息に多少でも通じて居る者は唯あの榮子があるばかりだ。しかしあんな女に藝術上の葛藤なんかが分つて溜るもんか。己があんな女に關係でもして居れば戀愛から來た嫉妬の結果だと疑はれない事もないが、己は仕合はせにもあんな女に手を附けなかつた。彼奴の方では何とかがして物にしようとする誘惑したにも拘はらず、己は其の手に乗らなかつた。却つて青野の爲めに周旋して彼奴をモデルに頼んでやつたくらみだつた。己は誰からも如何なる點からも己の犯罪を嘆きつけられる弱所を持たない。すべて此れ等の好都合は、天が己に幸福を授けようとして居る證據だ。

要するに誰にも見られないやうに、痕跡を残さないやうに、巧妙に秘密に遂行しさへすれば己は一生涯安全なのだ。青野は今、たつた獨りで郊外の淋しい一軒家に住んで居る。己を除いて彼には一人の交友もない。彼の家に入出入する者は榮子だけである。彼女は毎日午後から

彼の畫室へ行つて、夕方には、或ひは晩も夜の十二時迄には歸つてしまふ。すると、機會は十分にある。夜の十二時から明くる日の朝までの間、...その間に己は仕事をすればいいんだ。

ここで昇奮してはならないと、大川は思つた。出来るだけ頭腦を冷靜に、科學者の頭やうに透き徹らせて、根氣よく、細細と髪の毛一と筋もの證據をも残さないだけの綿密な計劃を立てなければならぬ。「落ちて着いて、飽く迄も落ちて着いて」と、彼は腹の中で繰り返しながら、その落ち着き振りを他人に示して見るやうに、につこりと笑つて見た。笑つて見たら、ひどく自分がえらくなつたやうな氣がした。それから彼は、巻煙草の先に五分ばかり溜つて居る灰を注意深く灰皿の上まで持つて行つて、ぼたりと落した。——つまらない事だが、非常に沈着になつたやうに感ぜられる。それから、片手を頭の下へやつて仰向けに寝ころんだまま、ちつと天井を視詰め始めた。

「嚴密な意味に於いて、人間の一舉一動は必ず此の世に何等かの痕跡を留めるものだらうか。」

先づ問題は此處から發足する。若しここに、極めて細心な、思慮に富んだ人間があつて、豫め何等の痕跡をも留めないやうに行動しようとしたならば、それは實際成功するだらうか。たとへば己は今此の部屋で數本の煙草を吸つた。それは此の灰皿の上にある灰や、吸ひ殻や、室内に撒んで居る煙を見れば直ぐに分る。ところで己が此の灰皿の灰をきれいに拭き去り、マツチの燃え残りや吸ひ殻とを室外へ捨て、煙を表へ發散させてしまつたら、己が煙草を吸つたことは誰にも分らずに済むだらうか。若しシヤアロツク・ホルムスのやうな、或ひはオーギユスト・デユパンのやうな名探偵が居て、己が煙草を吸つたか吸はないかを嚴重に吟味するとしたら、そのくらゐな事で彼等は欺かれるだらうか。——第一己は灰皿の灰を何で拭ふか、拭つた雑巾なり紙片なりをどう處置するか。その雑巾や紙片をなくする爲めに、焼いてしまふとすれば、また其處に灰が生ずる。今度はその灰を火鉢へあけて外の灰と一緒に交せてゴチャゴチャにしてしまふ。さうすれば灰の方は大概片が付く譯だ。次ぎには吸ひ殻を何處へ捨てたらいいか。此の窓から往來へ投げ捨てれば直ぐに拾はれる。己の吸つて居る煙草はスリ

ー・キャッスルだから殊に容易に見附け出される。己は吸ひ殻とマツチの燃え残りとを袂へ入れて、遠くの方へ散歩に行つて、上野の山の叢の中か銀座通りの敷石の上にも、捨てて來るとする。いや、そんな事をするよりか雑巾を一纏めにして焼いてしまつた方がいい。それで直接の證據は悉く湮滅することになる。己が今日此の室内でスリー・キャッスルを吸つた痕跡はもう残つては居ない。以上の行動が絶対に秘密に運ばれさへすれば、どんな名探偵だつて、己に事實を白狀させることはむづかしいだらう。或ひは探偵はかう云つて己を問ひ詰めるかも知れない。「お前は平生喫煙の習慣があるのに數時間この室内に閉ぢ籠つて居ながら、その間に煙草を一本も吸はなかつたと云ふ筈はない。たしかに吸つたものだと思へる。」——が、さう云はれたつて驚くことはない。己は直ちに云ひ抜けてやる。「さうです。仰つしやる通り僕は喫煙の習慣がありました。けれども此の頃餘り煙草を飲み過ぎて頭を悪くしたので、成るべく節制して居たのです。彼の場合一本も吸はなかつたからと云つて、何も不思議はありません。」かう云つてやつたらどうだらう。「それでもお前は吸つたに違ひない。」と

云へるだらうか。僕が自分で吸はないと云つて居るのに、あなたがたは何を證據にそんな事を云ふのですか。」と、己が斷乎として抗辯すれば、彼等はいかにヤキモキしたつてグウの音も出ないだらう。

コナン・ドイルは其の小説の中に、探偵の資格として三つの要素を擧げて居る。第一は觀察(Observation)である。第二は智識(Knowledge)である。第三は歸納法(Induction)である。此の三つの力が十分に發達して居れば、必ず犯罪の原因を嗅ぎ出す事が出来るのださうである。だが、己が今想像したやうな煙草の事件に對して、その觀察なり智識なり歸納法なりを、何處に應用する餘地があるか。どんな立派な能力を備へて居たところで、其の對象となる行為の痕跡が残つて居なければ駄目ぢやないか。それでも煙草の場合には、嚴格に云ふと未だ絶対に痕跡が残らないとは云へないかも知れないが、假りに己が今、起き上つて違ひ棚の前に行つて、立てかけてある鏡に顔を映して見て、それから再び元の通りに寝ころんだとする、其處へ探偵が這入つて來て、己がたつた今何をしたかを探らうとする。——どうだ、その場合に探偵は己が鏡を見たことを觀察するだらう

か。恐らく彼が神でない限りは、それが分つて溜るもんぢやない。始めからちつとして寝ころんで居たのと、中途でちよいと立ち上つて鏡を見て来たのと、二つの状態には何等の相違も有り得ない。一旦違ひ柵の前へ行つて再び以前の姿勢に復した己の行爲は絶対に痕跡を留めて居ないのだ。勿論己は、顔を映したばかりで、手に觸れた譯ではないのだから鏡の上にも證據が残る筈はないのだ。……

己の行爲を知つて居る者は、ただ神があるばかりだ。神は、己の頭の中に潜んで居る思想をさへ觀破するのだから、彼に對して己は何物をも隠し立てする譯には行かない。ところで若しその唯一の恐るべき神が、己の味方をして居るとしたらどうだ。神が己の天才に愛でて、殺人の行爲を許してくれたとしたらどうだ。神を除けば己は世の中の凡べての人を欺く事が出来る。誰の眼にも觸れないやうに巧みに仕事をやり遂げられる。要するに人を殺すと云ふ事は、煙草を吸つたり、鏡を見たりするのと同じく或一つの行爲なのだ。後の二つの行爲が痕跡を留めずに實行出来るものなら、人殺しだつて其の通りに出来ないといふ理窟はない。其れが失敗するとすれば、結局己の注意が行き届かな

かつたと云ふ事に歸着する。だから己は決して昂奮してはならない。飽く迄も沈着に、さうして冷靜に、——頭腦を物凄くほど冴え冴えと透き徹らせるのが肝腎だ。……

「そこで實際の計劃としてどう云ふ風にしたらいいか。いよいよ己は具體的の考察を運らす順序になつた。」

大川はムククリと身を起して、また部屋の中を往つたり來たりして居る。

第六章

九月三日の午前零時三十分、——陰曆に従へば其れは闇夜の管である。——其の日の其の時刻が大川の心の壁にかかつて居る曆のペエヂに、——激め眞黒く印を打たれた。さうして彼は毎日毎日、ちつと其の印を視詰めつつ、一枚一枚、ペエヂの剝がれて行くのを待つた。

が、彼は徒らに手を扞いて待つのではない。恰も印の上はまだ七枚のペエヂが残つて居る時、ちやうど其れが行はる可き日の一週間前から、彼はかねての計劃に基いて豫定の準備行動に移つた。

彼が展覽會に出品する筈の作物は、殆んど九分通り出来上つて居たので、九月に這入つ

てからは榮子も來なくなつて居た。にも拘はらず、彼は午前中相變らずアトリエに立て籠つて、熱心な瞳をカンパスに注ぎながら、——カンパスの表面にも、いつの間にかアマタンギの姿は消えてなくなつて、ただ眞黒な曆の印が擴がつて居るやうである——餘念もなく刷毛を動かして居る。勿論彼は其の繪に對して何等の未練があるのではない。何とか彼とかいぢくり廻して居れば、少しは出来榮えがよくなるだらうなどと己惚れて居るでもない。寧ろずたずたに引裂いてしまひたいくらいなものである。しかし、例の事を決行した場合に自分が此の繪を堂々と出品して居なかつたら、却つて世間から嫌疑を受ける。それを思ふばかりに彼は平然と、仕事に熱中して居るやうに見せかけて居る。——其れは準備行動の第一であつた。

第二に彼は夕飯を済ませると必ず獨りで散歩に出かけて、十時か十時半ごろ迄にはぐらりと戻つて來る。さうして再び晝室へ閉籠つて夜中の二時過ぎでなければ寢室へ行かなかつた。

彼の家は、母屋と晝室と二た棟に別れて居た。母屋の方は平屋造りの茶がかつた普請で、其處には彼の兩親と幼い妹とが住んで居

る。まだ獨身で居た大川は、三度の食事をして行くほかは、大概アトリエで日を暮らすのが常であつて、その爲めに書齋だの寢室だの書生居屋だのが書室の横に附いて居た。で、彼は夜の散歩から歸つて来ると、眞つ直ぐに書室へ這入つてしまふ事もあるし、一旦母屋の両親の許へ立ち寄つてからにする事もある。立ち寄らないで行く折には、土産物を買つて来て置いて、きつと明るる日の朝飯の時に、「ゆうべ銀座へ行つたから此れを買つて来てやつたんだのに、十一時ごろに歸つて来たらもうみんな寝て居るんだもの。ほんたうに内の者は早寝だなあ。」などと無邪氣さうに云つて、母や妹にその土産物を出してやる。此れ等の事を大川は極めて注意深く、わざとらしくいやうにやつて見せた。

書室の方の書生部屋には書生が一人住んで居る。彼は夕方六時から神田の夜學校へ佛蘭西語を習ひに行つて、十時には歸宅するが、散歩に出かけた大川の戻る迄は、睡眼を擦り擦り起きて居る。大川は普通彼よりおくれで歸つて来て、書室に通つてから一杯の紅茶を入れさせた後、直ちに彼を寝かせてしまふ。大川の實驗に依ると、それきり書生は明るる日の朝まで、

——少くとも夜中の二時三時ごろまで、大川の起きて居る間には、——決して眼を覺まさない事がたしかめられた。従つて大川が夜の十一時以後、アトリエで何をして居るのか、家族の内に誰も知る者はないのである。内の先生は毎晩夜中まで調べ物をして居るのだらう。——書生は多分さう思つて居るらしい、殊にさう思はせる爲めに、彼は書生が紅茶を入れて来る時、いつも書物を繰りひろげて居るやうにした。

それも好い加減な書物ではなく、「Chinese Pot-colain」と云ふ大型の厚い本を机一杯に開いて、その横には又、支那陶器全書だの、「Ceramique de l'Asie centrale」だのと云ふ奴を堆く積み重ねて、いかにも東洋古代の工藝品の研究に没頭して居るらしく見せた。たまには古道具屋から青磁の花瓶だの七寶の香爐だのを買つて来て、れいれいしく書籍の傍に据ゑて置いたりした。

「己はこれから七日の後に人を殺すのだと思つてはいけない。凡てが自然に、平日のやうに運ばなければならない。」

大川は腹の中でさう考へて居た。——彼は自分が、陶器の研究に夜を更かすのだと云ふ事を一層明かにする爲め書生に向つて斯う云は

うかとも思つた。

「——としきり止めて居たんだが、己は此の頃また燒き物の道樂を始めた。凝り出すとどうも際限のないもんだなあ。」

かう獨語のやうに云つて、陶器の趣味に關する二三の會話を、書生を相手に交換して置かうかとも思つた。が、平生の彼としては用のない時には餘り書生に話をしかけないのが通例であるから、其れさへも不自然に過ぎるやうに感ぜられて止めてしまつた。

かうして彼は七日の間、朝の製作と、晩方の散歩と、夜更けてからの研究と、此の三つを規則的に繰り返す事を努めた。從來とても午前中は彼の仕事の時間であり、夕方から屢々散歩に出かけるのが習慣であり、深夜の讀書も、瀬戸物道樂も今に始まつた譯ではなかつた。母や妹に土産を買つて来てやるのも、家族に對して愛情の深い彼としては、格別珍しい行爲ではなかつた。かうして何事も、當り前過ぎるほど當り前に、彼の註文通りに運ばれつつあるらしかつた。

「もう大丈夫だ。己は誰からも眼を付けられては居ない。内の者は己が毎晩のやうに、夜おそくまでたつた獨りで書室に居る事と信じて居

る。——彼等にさう思ひ込ませる事が、實は何よりも肝要だつたのだ。」

彼は心私かに斯う呟いて、自分の用意周到なるを祝福した。萬一彼が散歩から戻つて書生を寢に就かせた後に、再びこつそりと書室を抜け出して、二三時間の間何處かへ姿を消したとしても、誰が其の事に気が付くであらう。それだけでなく大川の家族の者は、許可を経ないで書室のドアへ手を觸れる者はない筈である。彼等はたとへ書間でも成るべく其の近所へ寄りないやうにして居るのに、況んや夜中の十二時過ぎになつてから、誰がアトリエの内部を窺ふ者があらう。——其の日の其の時刻は、恐らく大川の爲めに絶対の祕密を準備してくるであらう。

七日の日数が一つづつ減つて行く間、大川は腹の底にシツカリとして成算を抱いて、身も心も輕輕として居た。夜な夜なコーヒートの樹のステッキを打振りつつ散歩に出て行く折の氣持ちは、到底恐ろしい目論見を眼前に控へた人のやうではなかつた。第一日の夜には、銀座通りをうろついて、養生堂の新鮮なブレイン・ソオダを飲んだ。冷めたい、爽快な胸の透き徹るやうな液體の舌を刺す工合が、其の晩もいつもと

同じやうに美味であつた。それからカフェエ・ギエナへ寄つて妹の爲めにシユウクリームを買つて歸つた。二日目の夜には淺草へ行つて、オペレットと活動寫眞とを見たあとで、ちん屋

は斯うも平氣で居られるのだらう。人の命を奪ふと云ふ大事件が、なぜ自分を少しは平生と違つた者にさせないのだらう。自分の神經は犯罪に對して、常に斯くまで無感覺だつたのか知らん？ 自分はその實青野などよりもよっぽど上手な悪黨なのか知らん？ 大川は我ながら不思議なくらゐであつた。自分は此れ迄、自障落な美術家氣質の仲間のうちでは一番紳士的であり、善人であつた筈なのに、其れが突然人を殺さうと云ふ考へを起して、而も斯くの如く冷靜に振る舞つてゐる。するとやつぱり、氣が違つてしまつたのだらうか。少しも昂奮して居ないやうで、實は昂奮し過ぎた結果頭が馬鹿になつたのだらうか。兎にも角にもこんな場合に此れだけ落ち着いて居られるのは決して普通の狀態ではない。自分はたしかにどうかして居る。或ひは自分の天才的素質が、萌芽を吹き出したからかもしれない。自分はいつの間にか偉大な天才になつて居て、腦の組織が、がらりと一變

してしまつたのかも分らない。——さうだとすれば何と云ふ愉快な出来事だらう！ かう思ひながら、大川は依然として沈着に平氣に行動し續けて居た。天才になつたのだらうが、氣違ひになつたのだらうが進む所まで進むより外に仕方がなかつた。そこで、三日目の夜には動坂下から池の端へ出て、觀月橋を渡つて、精養軒のアイスクリームを食つた。つめたい物を食ふ度に、頭がいよいよ冴え返つてすがすがしい氣分になるのが妙に喜ばしかつた。その晩は精養軒を出ると廣小路の夜店を冷やかして、ダリヤの鉢を掲げて歸つた。四日目に駒込から本郷通りの古本屋を漁つて歩いたが、歸るにはまだ時間が早いし、此れから行かうと云ふところもないので、ふと、森川町の友人のKを尋ねて見ようかと思つた。自分の素振りが、いかに平生と異ならないかを誰かに見せて置く爲めには、それも必要であるかも知れない。彼はさう氣が付いてKの住宅の方へ二三町歩き出した間に、又考へが一變した。

「やつぱり尋ねない方がいい。」

彼は低い聲で、獨語を云つた。

「普通 己はかう云ふ時にKを尋ねるだらうか。毎年展覽會の製作にかかつて居る間

は、成るだけ繪の友達と顔合を合はせないやうにするのが、己の習慣ではなかつたか。己は今、まるで何事もないやうに平氣で居る。ちつとも不慮とは變つて居ない。しかし、それをわざわざ友達に見せに行くのは何事かがある證據ではないか。變つて居ないと云ひながら、既に變つて居るのではないか。事を行つてしまふまでは、必要のない限り、己は出来るだけに會はない方がいい。會へばどうしても自然を装はうとして不自然を曝露する。多くの用心深い犯罪者は、さう云ふ風にして炯眼な探偵に警尾を掴まへられるのだ。だから己は内の書生に對してさへ言葉を慎んで居たのぢやないか。」

——こんな事ではとても駄目だ。ウツカリして居ると直ぐに行動を誤まるやうでは、いつかは人に秘密を感じかれてしまふ。もつともつと己は頭をよくしなければいけない。——さう思つて、大川は固く自分の心を警めた。實際、誰からも睨まれて居ないやうでも、いつ如何なる場合に自分で嫌疑の種を蒔くかも知れなかつた。考へて見ると、榮子が此の頃彼の晝室へ來なくなつたと云ふことは、大川の爲めに此上もない幸福であつた。

五日目も六日目も無事に済んで行つた。さう

してよいよ七日目の九月三日が來たのである。

その日も一週間以來の好天氣が續いた。炎天の空は深海の水のやうに眞青で、大地には殘暑の苦熱が厳しかつた。大川は朝眼を覺ますと、寢室の窓を開いて、裏庭に咲いて居る花壇の花をうつとりと眺めた。此の一と夏の間、倦む色もなく吹き通して來た、百日草と蝦夷菊の花とが、煙草の吸ひ殻のやうに萎れてくちやくちやになつて、脂色に纏せてしまつた傍に、新鮮な葉鶏頭と日向葵の花とが水で洗つた如く美しく冴えて居る。五六本のカンナの莖からは、きくふ咲いて居た黄色のはなが悉く散つて、今朝は中央の一本に眞紅の花が唯一つ開いて居る。——その紅色を大川はぢつと視詰めた。ちやうど此の花のやうに見事に綺麗に、無邪氣にやつて除けようと思ひながら。

それから午前製の製作、それから午後の散歩、散歩には今日は日比谷公園を選んだ。其處の噴水の汜にある藤棚の下には、アーク燈の光に照らされて、月夜のやうな鮮やかな葉の影が、涼しい風に揺られながら、網の目の如く細かにそよそよと戰いで居た。ぼんやりとベンチに竝うて居る彼の前を、いろいろの市民の群れが

ぞろぞろと賑やかに足音を立てながら流れ過ぎた。花やかに、しんみりと陸じさうに寄り添うて行く若い夫婦づれ、婀娜つばい縮緬浴衣をだらりんと着流して夜の妖精のやうにしめやかな、なまめかしい足どりで植込込みの木木の繁みに見え隠れする藝妓の一と組、低い鼻聲でロオレイを歌ひつつ行く中學生、鶯のやうに眞白な服装に黄金の頸飾を附けた西洋人、——それ等が廻り燈籠の如く大川の眼に映つては消えた。松本樓の露臺には灯が暖かく眩く溢れて、建物全體が寶石で作つた巨大な喙の巢のやうにざらざらと輝いて居た。さうして其の間

も、青刺の鳥の嘴から、アーク燈の球を目がけて虹の雨を降りそそぐ噴水の飛沫は、絶えず澄澄として忍び音に泣き咽んで居た。こんな事でもなければめつたに此の公園を訪れる折のない大川は、何だか其の景色がひどく詩的であるかのやうに感ぜられて、甘いやさしいセンチメンタルな氣分にさへ誘ひ込まれた。動いて居る人間も、またたく灯影も、水の響きも木の葉のそよぎも、あらゆる物が夢の如くに美しい、音楽のやうな晩だと思つた。

八時半ごろに日比谷から電車に乗つて神田の神保町で降りた。此の間、今川小路の古本屋に

出て居たミュンステルベルヒの支那美術史を、なくならないうちに買つて置かうと思つたのである。其の店の主人や番頭は前からの類馴染で、大川は彼等を相手に十五分ばかり美術書類の話をした。何でも彼は物識りらしい口吻で、東洋美術史に關するフェノロサとシャザン又とミュンステルベルヒとの比較論などをしゃべつたやうに覺えて居る。それからとある小間物屋で、妹の土産に二三本のリボンを買つて、田端へ歸つたのはきつちり十時半であつた。母屋の方では、もう家族の者は兩戸を締めて寝ようとして居た。

「おい、もう道子は寝ちまつたのかい。こんないいリボンを買つて来てやつたのになあ。」
 かう云ひながら其處へ大川が這入つて来て、蚊帳の中でまだ眼をあいて居る妹の枕もとへ、土産の品を並べて見せた。

「あら、まあ綺麗なリボンなこと。ほんたうに兄さん有り難うよ。あたし今度の日曜に江の島へ行く時に、此のリボンを附けて行くわ。洋服を着てお下げに結つて、——」

と、妹の道子は枕に頬擦りをして嬉しうらに笑み崩れた。買ひ立ての三つのリボンは、まるでアルヘイ糖の菓子のやうに艶やかにケバケ

バしく光つて居た。

「江の島へ誰と行くの？」
 「お父さまとお母さまに連れて行つて頂くの。ねえ兄さん、兄さんも一緒にいらつしやらない？」

「兄さんはね、展覽會の方のお仕事があるから行かれませんか。江の島へ行つたら、今度はお前が兄さんにお土産を買つて来て上げなければいけませんよ。」

かう云つて、母も兄妹の會話に交つた。

「今夜も此れから二時過ぎまで書室で勉強をしなければならぬ。」——さういふ意味の事を、大川はせめて一言、母の耳へ入れて置きたくてならなかつた。それを我慢するのは可なり忍耐が必要であつた。母を相手に二た言三言話をした後、

「それぢやお休みなさい。」
 と云ひ捨てて、彼は急いで自分の書室へ戻つてから、始めてほつと溜息をついた。

彼が這入つてから二三分立つた時分に、書室が紅茶の盆を持つて例の如く睡い眼を擦りつつ書室のドアを開けた。さうして、茶碗に茶を注ぎながら、今しも主人が机の上で纏いて居る美術史の挿繪を珍しうに覗いて居た。その

間はほんの一分か二分に過ぎなかつたけれど、ちつと黙り込んで居る大川には、それが非常に長いやうに感ぜられた。何か一言云ふはなければ變だと思ふ氣持がした。

「どうだ、いい本を見つけて来ただらう。……」
 かう、彼が覺えず話しかけたのは、書生が既に茶をつぎ終つて、一禮しながら部屋を退かうとした瞬間である。その時まで我慢して居た大川は、遂に我慢がし切れなくなつた。

「はあ——」
 と云つたが、いつも済まし込んで居る主人の顔に機嫌の好い微笑が浮かんだので、書生は妙に嬉しかつたものらしい。

「先生、その寫真は何でございませうか。」
 「此れか、此れは支那の洛陽の龍門にある石窟寺の佛像だ。六世紀の北魏時代のものなんだが、もう此の時分に犍陀羅式の彫刻が支那に這入り込んで居るんだ。どうだ、面白いだらう。」

「はあ、面白いございませぬ。——先生は此のごろ、東洋の古い美術をお調べになつていらしゃるんですか。」
 「うん、毎晩二時ごろまで調べて居る。」
 「はあ、」

と、書生が張り合ひのない聲で云つた。さうして、急にまた睡いことを想ひ出したらしく、暫くバツが悪さうにもちもぢして居たが、やがて思ひ切つたやうに「お休みなさい。」と云つて、こそこそと晝室を出て行つた。

「とうとう己は餘計な眞似をしてしまつた。しやべらないでもない事をしやべつちまつた。毎晩二時ごろまで調べ物をする。そんな事を、己は何の爲めにわざわざ書生に斷つたんだ。彼奴はほんやりだから構はないやうなもの、氣の利いた奴なら直ぐと變に思ふぢやないか。」

折角今日まですらすらと巧妙に運んで來たのに、最後に一つ失策をやつた。此れさへなければ己の準備行動は完璧だつたのだ。此れですつかりケチを附けた。と、云ふやうな氣がする。まさか其の爲めに犯罪が曝露する恐れはないまでも、圓滿に玉のやうに滑かだつたものを、ちよいとした弾みで滑かでなくしたのが、彼は残念で溜らなかつた。

「だが、一旦瑕が附いたものはもう仕様がない。此れから先を注意するばかりだ。出來るだけ滑かにこだはりなく、而も大膽に確實に、

さう自分の胸に云ひ聞かせて、大川はのつそ

りと椅子から立つた。書生が部屋を出て行つてから半時間の後、ちやうど十一時三十分の時である。

二三日前から深夜に人知れず揃へて置いた衣服だの晝だの附け髭だのが、一と纏めにして片隅の支那靴に入れてあつた。それ等はみんな二三年前に着馴れたり、假裝會の扮装に使つたりしたものでばかりで、今度新しく買ひ集めたのでないと云ふ事が、大川の得意の一つであつた。たとへば此の鬘や、附け髭や、衣服の切れ地の一片が、兇行の現場に落ちて居たところ、誰が其の所有者を嗅ぎ出す事が出来るだらう。衣服は黒い綺羅紗の背廣服で、地質や色合ひが極く平凡な、有りふれた型に仕立てられて居る。嘗て大川がアメリカから歸朝する際、船の中の食堂服としてタキシード代りに拵へたのだが、その後彼はめつたに着て出た事はなかつた。上衣の裏に縫ひつけてあつた、アメリカ人の裁縫師の名を切り取つてしまつた以上、もう此の服は東京市中の何處の服屋に問ひ質しても、出所の分らう筈はない。鬘と附け髭とは、先年の同窓會に素人芝居の喜劇をやつて某理學博士に扮した時の記念品である。それは友人の或る男が、今はもう潰れてしま

つた新劇團の俳優から借りて來たまま、長らく借りつ放しになつて居た物で、大川自身にすら出所が分らないくらいである。大川はただ、その鬘と髭を着けると顔の感じが一變して、分別くさい、幽鬱な、學者風の人相になることを知つて居る、帽子はこれも同じくアメリカから買つて來た茶の中折の、商標の附いて居る裏地の切れを剝がして置いた。

かうして、年ごろ三十前後の、やや長い髪を綺麗に分けた、濃い八字髭を生やした見馴れない一人の紳士が、大川の邸の裏門の坂を、すたすたと降りて行つた時、母屋でも書生部屋でも皆いい心持ちに寝入つて居た。彼は坂の中途から振り返つて自分の晝室の窓を見た。其處には肉色のカーテンに電燈の明りが赤く映つて、中には主人が机に凭れながら、今日も相變らず東洋美術の研究に夜を更かして居るやうであつた。

動坂を上つて、白山上の四つ辻に出ると、兩側に並んだ化粧店や雜貨店のショウ・キンドウの前には、涼みの客が灯を暮し寄る蟲のやうに連なつて、往來はまだ宵の口ほどに賑はつて居た。二階の軒に岐阜提灯を吊るしたとあるピーア・ホルの奥からは、調子の外れた蓄音器

の長唄が騒騒しく聞えて居た。其處まで歩いて来た大川は、伸を呼んで飯田町のステエションへ走らせた。水道橋を渡つて右の方へ、郊外線路の土手の蔭になる淋しい横丁へ曲つた時、彼は始めて自分の體も魂も眞暗な夜の闇に包まれたやうな氣持ちがした。

伸を乗り捨ててから、停車場の周圍をぐるりと一と廻りして一二分の時を過ぎた後、今度はタクシーで目白驛の附近まで一気に飛ばせる。

「すべて豫め計置して置いた通りにやつた。自動車は郊外の町はづれの、鐵道の上にかかつて居る橋を越えようと、其處で大川は「よし！」と云ひながら、自分で扉をあけて威勢よく地に飛び降りた。さすがに田圃が近いだけあつて、

秋らしい風が冷え冷えと吹き渡つて、鐵路に沿うた堤防の草葉の繁みに蟲がぢいぢいと啼いて居る。遙かな橋の下の、停車場の灯がぼんやりと燈つて居る外は、眞暗な海にでも面して居るやうに黒い闇が果てしもなく擴がつて居る。

「よし、それぢや此處で歸つてくれ。」さう云つて急ぎ足に、すたすたと歩み去る大川の後ろ姿が、自動車の明りの帯の中に五六間照らされて、やがて夜の幕に吸ひ込まれて行つた。

ぶうぶうと睡さうな音を立てて、だんだんに遠のいて行くタクシーの響きを聞き流しながら、七八丁進むと兩側にはもう一軒の家もなかつた。月のない、死んだやうに靜かな空は、今日の晝間と同じやうに美しく晴れ渡つて、星が一面に散らばつて居る。さうして、大川の氣のせむか知らぬが、行く手の森の蔭に立つて居る青野のアトリエの眞上の天には、それ等の星が一層夥しく無數に群がつて居て、チラチラキラキラと一齊に輝き輝いて居るかの如く見える。彼はこんなにまで多くの星が、空の一局部にこれ程深山に集まつて、強く朗らかに光つて居るのを、まだ一遍も眺めた事がないやうに感ぜられた。ちやうど煙突から煙がひろがるやうに、星が、青野のアトリエの屋根の上へ最も濃密に集まつて、そこから四方へ次第にうすく撒き散らされて居るのである。それは殆んど、アトリエが後光を背負つて居ると云つてもいいくらゐな眩ゆさである。

「どうだ、あれを見る。あのアトリエの上の空を見る。天才の住む家にはあの通りの奇蹟があるのだ。」かう云ふ囁きがふいと彼の耳元に聞えて、大川は少し脅かされたやうになつた。

「あの素晴らしい天才を、お前は今卑怯にも殺しに行かうとして居る。その秘密は、誰も知らない積りでも空の星がちやんと見て居る。あの通りアトリエの上にキラキラと眼瞬きをして、夜通し番兵の役を勤めて居る。あれは青野と云ふ天才の魂が、人間の世の物ではなくて、星の世界から降りて来た證據なのだ。」

「だがそれがどうしたと云ふんだ、と、大川は思つた。彼奴が天才であつたにしろ、己が彼奴を殺してしまへば、あの天空の星どもは、今度は己の畫室の上で瞬くだらう、己のアトリエからきつと後光がさすだらう。己は必らずさうさせて見せる。いや、事に依るともう今夜あたりは田端の己の家の上にも、無數の星が寄り集まつて己の歸りを待つて居るかも知れないのだ。……」

彼は氣を取り直して、盜賊のやうにでなく、寧ろ何かの検査に臨む官吏のやうに、威張つた歩き方で、森の下路を滑り抜けた。

畫室の正面の石段へ片足をかけた時、彼はポケットから皮の手袋を出して、兩手に嵌めた。それから變裝の聲を脱ぎ、附け髻を取つて、表の扉を軽くコトコト叩きながら、

「青野君、青野君」

と、底力のある、命令するやうな調子で二三度呼んだ。が、青野は熟睡して居ると思えて、返辭をするらしいけはひもない。北側の窓の方へ廻つて、ガラスにべつたりと顔を着けながら、室内を覗き込むと、中は戶外と同じやうに眞暗である。窓の障子には何の締まりもしてないらしく、棒に手を掛ければすると押し上げられる。其處から大川は身を籠へして室内へ闖入して行つた。

彼は、第一に先づ、腰の周りを手さぐりして、ツボン吊りの外にもう一つ締めて来た柔かい切れ地のバンドを解いた。——最初の彼の計劃は、知ら知らしく青野に面會して、此の間のやうに自分の苦しい衷情を訴へた後、隙を狙つてバンドを相手の頸部へ巻き付ける積りであつた。しかし、かうして容易に忍び込むことが出来た以上は、わざわざ彼を呼び起す迄もなかつた。……

「さうだ。飽く迄も秘密が大事だ。隠せるものならば死んで行く青野に迄も隠した方が安全だ。己は自分の犯罪を、誰に知られるよりも青野に知られるのが一番厭だつたのだ。青野は死んでも彼奴の魂は生きて居る。其の魂は永遠に己の悪事を知つて居る。それが何よりも不愉快だつたのだ。それなのに彼奴は、すつかり油断をして窓の戸締まりもしないで寝て居る。お蔭で己は彼奴がすやすやと寝て居るところをひと息に殺す事が出来る。己は何と云ふ幸運兒だらう。己の目的は此れで完全に貫徹するのだ。」

その時、こんな考へが電光のやうに大川の腦裡を閃いて過ぎた。突暎の間に彼は計劃を變更して——萬一中途で、青野が眼を覺まして大丈夫なやうに、再び聲を被つて鬚を附けた。

眞暗な中で此れだけ身支度を済ましてから、彼はマツチを擦つて濃い室内の闇を照らした。と、小ひさな炎がゆらゆらと燃えて、自分の顔の附け鬚の先がぼうつと明るくなつたかと思ふとマツチは直ぐに消えてしまつた。又もう一本マツチを擦る。今度は大分長い間棒が燃え盡きるまで火が保つて居る。けれども微かな其の光はただ空洞のやうな暗黒を照し出すばかりである。彼は三本目のマツチを觸しながら、そろそろと自分の足もとに圓を描いて見た。埃だらけな床板の上に、敷島の吸ひ殻や、蠟の垂れた跡や、ぼろや紙屑やが散らばつた中に蠟燭の燃え残りか三本落ちて居る。そのうちの一番

長いのを拾ひ取つて明りを移すと、部屋の隅隅が急に物凄く岩窟のやうに朦朧と浮かび上つて、其處にしよんぼりとぞんで居る背のひよろ長い大川の影が、五六本の非常に巨大な柱になつて四方の壁や天井へ折れ曲つて居る。と、たんに彼は「あつ」と聲を立てんばかりに愕然として突きあたりの間にただよふ女の顔に恐る恐る視線を向けた。それはカンザスの面に畫かれたアマタノギイの姿であつたが、どうした加減か祭子が寝ころんで笑つて居るやうに、或る一刹那の間だけ大川には思はれたのである。か弱い蠟燭の灯先がわなわなと顫へながら、ぼつと燃え上る油煙のかけに、彼女の容貌はあかあかと虚空に映つて、その兩頬には生き生きとした血が通ひ、涼しい眸の睫毛の端がほのかに戦いて居るやうにさへ感ぜられる。自分が青野を追い越す迄は、二度と再び其の繪を見まいと胸に誓つて居た大川は奥深い殿堂の神祕の扉が忽然彼の眼の前に開けて、燦爛とした黄金の光が瞳を刺すやうな心地がした。「この繪こそ眞箇の天才の手に成つた不死の藝術だ。」かう云ふ聲が何處からともなく、霹靂の如く大川の耳朶を撲つた。その一瞬間、彼は大地へ身をひれ伏して、己み難い讚歎と驚異の情

が嵐の如く自分の胸裡を吹き通すのを、眼を塞いで遣り過ぎうかさへ思つた。しかし、其の爲めに彼の決心が鈍るやうな事はなかつた。脅かされば脅かされるほど、彼の覺悟はいよいよ強くなるばかりであつた。

青野の寢臺は、恰も其の繪の反對の側の壁に沿うて据ゑられて居た。寢臺と云つても古ぼけたソファの上に布團を敷いただけのもので、それに日本の萌黄の蚊帳が吊つてあつた。蠟燭を傍のデスクに立てて、暫く寢息を窺つて居た大川の左の手の中には、例のバンドがぐるぐるの掌に巻き着いて、しつかりと握り緊められて居た。やがて彼は徐るに、寝て居る男の頭から胸の邊まで蚊帳を捲くつた。それでも青野はまだぐつすりと睡つて居る。ぼかんと口を明いたまま、垢だらけな襟頭を枕に載せて仰向けに寝て居る顔の鼻毛の伸びた、肉の薄い、織い鼻の孔からすやすやと洩れる呼吸が、側に立つて居る大川の呼吸と同じリズムで、靜かに、安らかに響いて居る。掻い巻き口のぐめくれ上つて、寢像の悪い瘦せた股の肉の露出して居るのが、何だかもう、屍骸になつてしまつたやうに傷しく衰れである。……

大川ははつとして手を休めた。バンドが青野

の頸筋をやつと一と廻りしかけた時である。不意に青野の唇が嘘を嚙むやうに緩く蠢いて、眼臉がばたばたと蛾が飛びやうに動いたかと思つた。が、次ぎの瞬間に大川は渾身の力を籠めて、一氣に絞め付けようとする、いきなり猛獸の吼えるやうな呻りを發して、寢臺から猫の如く狂ひ立つた素早い物が、バンドを逆にくいと扱いた。

一君だ、君だ、やつぱり君が殺しに来たんだ！
大川君！

その呻り聲は怒號すると同時に泣いて居た。もう大川の頭には冷靜も沈着も分別もなかつた。ただ狂暴な残忍さが支配するばかりであつた。彼は寢臺に飛び上つて相手の體に跨りながら、葡萄酒のコロツツを抜くが如く首を宙へ吊るし上げつつ、バンドを激しく捲す振つた積りであつた。けれども青野は捲す振られながら起き上つて、矢庭に敵の左の手頸に噛み着いたまま離れなかつた。二人はさうして寢臺から滑り落ちて觀世綯のやうに絡みついて、味板をぐるぐるんと轉げて行つた。そのうちに偶然大川の右の手はストオプの煙突の傍にあつた大きな鐵の火箸を掴んだ。……

その時まで盛んに抵抗して居た青野は、幾度

か喉を絞められて危く息が止まりさうになつた。もうとても駄目だ。もうとても助からない、とうとう己は殺されるんだ！彼の心は續けざまに斯う叫んだ。と、敵の手足へ懸命に武者振りついて居た彼は、突然横なぐりに大地へ叩きつけられて鋭く突き倒されたかと思ふと、何か磐石のやうな重い物が、ぐわん！と頭を痺らせたやうな氣持ちがした。つづいて又ぐわん！と痺れた。ぐわらぐわらと山が崩れて来るやうな大音響が聞えた。顔の下にある床板が船底の如く奈落へめり込んで、彼の體は首へ錘を附けられたやうに縦に倒まに沈んで行くらしかつた。それと一緒に眼だの鼻だの口だのから泥だか鉛だか分らない物が侵入して來て、腦の中を一杯に塞いだやうであつた。彼は次第に氣が遠くなつた。……蠅叩きでひと打ちに打たれた蠅のやうに、或ひは人間が紙屑になつたやうに、彼の屍骸は醜く硬張つたまま動かなかつた。……

その晩の真夜中の二時過ぎであつた。巢鴨の精神病院の角にある交番の前を、黒い背廣に茶の中折を被つた、八字髭を生やした一人の紳士が、駒込神明町の方へ悠悠と歩いて行つた。巡

が、駒込神明町の方へ悠悠と歩いて行つた。巡

查が後から呼び止めて誰何すると、彼は緩やかに戻つて来て、上衣の内隠しから一枚の名刺を出した。

「東京帝國大學教壇法學士、松村敏雄」と、名刺には刷つてあつた。

「小石川原町の〇〇博士の家へ基を打ちに行つて、つい遅くなつてしまひました。自分はこれから駒込の宅へ歸るところです。」

彼は濃みのない辯舌でから答へた。

「はあさうですか、そんならよろしうございませう。」

と、懇懇に巡査が云つた。

かうして大川は誰に見咎められる恐れもなく、田端の畫室のドアの中へ自分の姿を消すことが出来た。彼が持つて居た名刺は、かう云ふ場合の用意の爲めに、自分で活字を買つて来て好い加減な名前を刷つた物であつた。

第七章

青野の家に變事があつたことは、明くる日の朝榮子に依つて發見された。それでなくても塵芥溜めのやうに荒れすさんで居た部屋の中は、一層瀾脈に引掻き廻されて、椅子だの寢臺だの机だのが滅茶滅茶に覆されて居る間に、

青野の體は仰向けになつたまま、ちやうど煙突の一本が倒れて居るやうにして倒れて居た。――が、其れはまだ完全な屍骸にはなつて居なかつた。明け方に息を吹き返した青野は、凡べての記憶力を喪失して恐ろしい白痴になつただけであつた。

「ちよいと、お前さんどうしたんだよ、自殺でもしそくなつたのかい。」

かう云ひながら傍へ寄つて、額を撫でてやる榮子の顔を、下からチロチロと不審さうに見上げて居る青野の瞳には、純然たる麻痺狂の表情が露はれて居た。その唇は折折かすかに顫へるばかりで、何等の音をも發しなかつた。

現場へ臨檢した刑事は、何處かに證據を捜し出さうと試みたけれど、犯人の痕跡らしいものは一つも残つて居なかつた。第一其處には、賊がたしかに戸外から侵入したと斷定し得る手がかりさへも見當らない。勿論盗み去られるやうな物品もなく、例の「マアタンギイの闇」の繪だけが、大方格闘の弾みか何かに、泥まみれに踏み躪られてずたに引き裂かれて居た。さうして其の繪を引き裂いた處も、被害者の頭を擲つた鐵の火箸も、始めから此のアトリエにあつた物で、毫も加害者を手繰り出

す端緒にはならなかつた。嫌疑を蒙つて警察へ拘引された榮子は、半日も立たないうちに釋放された。大川も證人として簡單に一應の取調べを受けた。結局犯人はどうしても發見されないで、青野の精神狀態の恢復を待つより仕方がなかつた。

暫くの間、事件は若い美術家仲間の噂の種になつて居た。「彼奴は度び度び詐欺を働いて、大分友達をひどい目に會はせて居るから、誰かに恨まれて復讐されたのだらう。」と云ふ説もあつた。「いやさうぢやない。社會の同情を買ふつもりで、狂言自殺をし損つたのだ。」と云ふ者もあつた。「あんまり榮子に夢中になつて發狂したのぢやないか知らん。」と云ふ人もあつた。いづれにしても、青野がさうなるのは當然の運命のやうに人人は思つた。

彼の痴呆狀態は日を追うてますます顯著になるばかりで、到底恢復の望みもない事が、醫師の診斷に依つて確められた。彼の唯一の保護者であつた大川は、彼を巢鴨の脳病院へ入院させて、時時自分でも見舞ひに行つてやつたりした。

「青野君、君には僕が、此の大川が分らないのかね。君は自分の過去を忘れてしまつたのかね。

君はえらい藝術家だつたのだ。非凡な天才だつたのだ。」

かう云つて狂人の眼を覗き込む時の大川の顔には、いつも青穂めた、痲痺のやうな笑ひが引吊つて居た。

さうして、異様に落ち窪んだ、暗い、陰鬱な、仕掛けの壊れた機械のやうに眼窩の奥に嵌まつて居る痴人の瞳には、次のやうな謎が意味深く光つて居た。――

「……さうです。私は天才です。私の魂は今でも立派に藝術の國土に遊んで居ます。私の魂は未だに活潑に働いて居ます。私はただ、内部の魂を外部の肉體と靈魂との聯絡を絶たれただけなんです。肉體と靈魂との聯絡を切られただけなんです。それを此の世の人たちは白痴と名づけて居るのです。あなたは多分、白痴と云ふ者がどんな幸福な境地であるかも知御存知ないでせう。」

實際、青野の腦髓は決して死んでは居なかつた。彼の魂は此の世との關係を失つてから、始めて彼が憧れて居た藝術の世界へ高く高く舞ひ上つて、其處に永遠の美の姿を見た。彼の瞳は、人間の世の色彩が映らない代りに、

その色彩の源泉となる眞實の光明に射られた。嘗て此の世に生活して居た時分に、折り折り彼の頭の中を擦めて過ぎたさまざまの幻は、今こそ美の國土に住んで居るほんたうの實在であつた。己の魂がまだ肉體に結び着いて居た頃は、己は屢々此れ等の實在を空想したり夢みたりした。――彼はさう云ふ風に思つた。彼はたしかに自分の故郷へ歸つたのに違ひなかつた。

それ等の多くの幻の中でも、最も頻繁に彼の嚙裡を訪れたことのある妖艶な彼女、――あの美しい榮子の姿は、想像の世界に現れた時よりも更に完全に、更に莊嚴に、さながら美の國の女王の如き威儀を作つて、マアタンギイの間よりも遙かに怪奇な、崑崙宮殿の玉座の椅子に腰かけて居た。彼女は自分の足下に跪いて白衣の裾に接吻をする青野の項を撫でてやりながら朝な夕なに優しい慰藉の言葉をかけた。

「お前は定めし、今迄にも度び度び私を見た事があるだらう。お前が浮世に生きて居た時分に、お前を迷はした榮子と云ふ女も、お前の空想に浮かび出たマアタンギイも、みんな私の影像なのだ。私はお前の美に憧れる心を實で

て、眞實の國から假その國へ、大空の月が其の光を溪川へ落すやうに、自分の姿を幻にして見せてやつたのだ。眞實が影像に優つて居るだけ、それだけ私も彼の女たちに優つて居る。假りの幻の榮子をさへもあれ程熱心に崇拜したお前は、今こそ安らかに私の宮殿に仕へるがいい。人間の世に附き纏ふ悔恨も懊惱も、此の國には長へに跡を絶つて居るのだ。」

……白痴の青野のとげとげしく窺れた顔には、どうかすると、感謝に充ちたやうな涙が、夜露のやうにひつそりと結ばれて居る事があつた。

秋の展覽會に出品された大川の作物は、素晴らしい傑作として新聞に雜誌に紹介された。専門の畫家や美術記者の批評の外に、大川自身身の物語つた苦心談までがいろいろ掲載されたりした。「マアタンギイの間」と云ふ言葉は、まるで芝居の外題のやうに人人の口の端に上つた。

その噴噴たる好評は社會の耳目を惑はしたばかりでなく、大川自身の良心をも欺くに十分であつた。彼にはいつしか、青野といふ人間が、其れ程えらくはなかつたやうに思はれて來

た。今になつて見れば、自分が彼を恐れたのは、全く自分の買ひ被りに過ぎなかつた。自分の素質は、寸毫も彼に劣つて居なかつた。自分かであつた。けれども若し、あの時青野の藝術の生命を奪はなかつたら、自分はいつ迄も強迫観念を打ち拂ふ事が出来なかつたかも知れない。その意味に於いて、青野を殺してしまつたのはやはり自分の成功であつた。——勿論青野の肉體はまだ生きて居る。だが、白痴の肉體が何にならう。彼奴は殺されたに違ひないのだ。

——自分はウマイ事をした。自分はやつぱり、あのお慥で天才になれたのだ。さう云ふ考へが起ると共に、大川の胸にはだんだん確乎たる自信と甲氣とが湧き上つた。さうして、明くる年の夏、再び彼が展覧會に出品すべく畫き上げた「マアタンギイの閨」の出来榮えは、去年の青野の繪に比べて、優るとも劣つては居なかつた。もう大川は、疑ひもなく、青野を凌駕した。青野を慈んで居た藝術の神は、今や大川に恩寵を垂れてくれるやうであつた。銀はたしかに金になつた。

モデルになつた榮子の評判は、大川の繪の噂よりも又一層喧しかつた。再び女優生活に戻つた彼女が、やがて公園の歌劇の舞臺に

現れた時は、もう以前のやうな下葉の踊子ではなかつた。彼女の虹のやうに纖麗な姿態や、鳳風のやうに眩ゆい衣裳に惹き寄せられて、満都の青年は先を争つて其の劇場へ殺到した。凡べての觀客は毒毒しい愛嬌の漲つた肉體の魅力に罫魔化されて、彼女の技藝の拙劣さや、出鱈目の踊り振りを指摘する者は一人もなかつた。

だが、フット、ライトの光の中を飛び狂つて居る彼女が、永遠の國の女王の形を模造した、不完全な影に過ぎないのだと云ふ事を、白痴の青野より外に、誰が知つて居る者があらう。

The Affair of Two Watches

何れでも十二月の末の、とある夕暮の事だつた。

晴れるとも曇るとも思案の付かない空が下界を蔽ひ、本郷一帯の高臺を吹き廻る風はひゅーひゅー鳴つて、大學前の大通りを通る程の物が、かさかさ乾涸らびた微かな音を立てて居た。

此の邊の道路は雨が降ると滑泥になる癖に、此の日は堅い冷めたい鐵板の如き地肌を寒風に曝して、其の上へ叩き付けられる砂塵が、鼠花火のやうに二三叩渦を巻いて走つた。往來の人は口を噤んで自分自分の足の端を視凝めながら、専念に歩く事へ氣を奪はれて居た。正門と赤門と二つの口から大學生がぼろぼろ出て來て其の中へ交つた。其れも小學校や中學校の生徒のやうに多勢景氣よく練つて來るのではない。

大概は一人づつ、稀には二三人組み合つて、洋服の者は外套の隠裏に兩手を突つ込み、襟に頭を埋めてすたすた行く。和服の者は懐ろへ筆記帳を四五冊無理やりに拵ち込み、右の手の人差し一本だけ袖口からちよいと出して、そ

れヘインキ壺を引つ懸けて行く。どれも、これも、暗い顔をして俯向いて歩く所は一角の哲學者めいて居るが、何も文科の生徒ばかりではない。かう云ふ天氣に黃昏の街を歩くと、大概な人の顔は哲學者面になつて居る。その哲學者面を砂塵がさあツと吹きつけて通つた後では、確かに二三人は消えて失つて居るだらう。

杉に原田に私——今日も三人落ち合つて正門を出た。例の如く、一金が欲しい、飲みたいなあ——と云ふ言葉が三人の鼻先に恐ろしい程明瞭にぶら下つて居たが、誰もそんな事は嘘と一緒に噛み殺し、何食はぬ顔でたわいもない冗談ばかり云ひ合つて居た。其の癖しやべりながら銘銘相應に達者な神經を働かせて、對手の懐ろを讀んで見たが、念入りに揃ひも揃つて文なしらしかつた。かう云ふ際に一人でも金を持つて居たら外の二人が寄つてたかつて、貸したものを取るやうな勢で奢らせずには措かないのだから、少しでも懐ろの暖かい奴の顔には一種の恐慌が表れて居なければならぬのだ。で、

若し飲まうと云ひ出して誰も金がないとなると猶更悲惨になるから、三人申合はせたらうにちつと我慢をし抜き、成る可く現實隠蔽の悲哀の近所へは近寄りぬやうにして、やけに笑つたりしやべつたりしながら歩いた。けれども其の笑顔すら時々寒風に衝突つて衰れにひしやけた相好に變つた。かうなると我我は素晴らしい警句が口をついて出る。そして警句が出れば出る程、忘れの筈の一件が矢鱈無上に入み上げて、いくら振り落さうと藻掻いても始末に悪い事になるのだ。

「ああッ……」
今迄調子づいてはしやいで居た原田が、ふいと思ひ出して物欲しさうに嘆息したので、杉と私とはどツと吹き出してしまつた。
「……飲みたいなあ。お互に血の出るやうな冗談を云うたつて仕様がな。え、杉さん。」
原田は杉と私に限つて妙にさん附けにした。「駄目だよ、今日は観念めるさ、とても抗はぬ事だから、僕は此處を先途としやべり散らして花らしく計死する覺悟だ。ワツは……」

杉が途方もない聲で笑つた。何ぼ大道のまん中でも杉の笑ひ聲と來たら可なり駭駭しい。一座の中へ杉が跳び込んでげらげらと一遍引つ掻

き廻したが最後、皆の頭は急に脱線して愚にも付かぬ事が可笑しくなり、果ては湯堂總崩れで、狂人のやうに轉がり出す。

「そろそろ事が不穩になつて來たね。僕は君等と顔を合はせさへしなければ、そんなに飲みたい氣も起らないんだがナ。」

此れは全く私の正直な所なのだ。

「僕だつてさうサ。教場で筆記を書いてる間はけろりとして居るんだが……全體原田が悪いよ、飲まう、飲まうツて口から手が出さうな顔さへしなけりや、格別飲みたい筈がないんだからな。」

「けれども君イ、察して呉れやア、私や此の一回間酒の匂がんのぢや。」

此の文句が如何にも哀れつぽかつたので、又しても寒風に大口を開いて笑つた。

一體三人共實家が貧乏で、大學生にしてはあまり幅の利く方ぢやないのだが、それで月始めに二十圓でも二十五圓でも持つと、一時に豪遊(ごうぶ)を極めて一と月の大半は文なしで暮すのだ。文科の私がいつから此の法科の二人と懇意になつたのか判然しないが、恐らく高等學校の二年時分の事らしい。何でも杉が私の手に握つて居る五十錢銀貨を横眼で睨んで、

「君、そいつを提供したらどうだナ、徒らに手から汗が出る程握つて居ても仕様がないやないか。」

と云つた事を記憶して居る。杉と一緒に始めて原田の下宿を訪ねたのは初夏の午過ぎだつたが、天井の低い四疊半の部屋へ入ると突然徳の臭がむツと鼻を衝いて、嫌に蒸つぽいぐとぐとの疊が歩く度にもしみしと云つた。そして主人

公は汗臭い布団の上へ腹這ひになり、ざらざら西日の射し込む窓の障子を立ち上つて閉めるのが億劫なのか、座敷の中央に洋傘をさして寝て居た。爾來三人は肝膽相照して毎日のやうに此處に集つては、Tulsa-Collium に夜を更かした。凡そ我々のスクール・ライフ中に生じた主な出来事は大抵三人が共通であつた。唯一つ勉強と云ふ事だけが共通でなかつた。それは勉強なるものが決してスクール・ライフの中の主なる出来事ではなかつたからだ。

一と先千駄木の原田の下宿に落ち付く事になつて、駒込の方へ歩き出した。もう好い加減戸外を歩いて居る事は忘れて、往來の端から端へ轉りながら砂埃を蹴つて笑つて行く。其の度毎に杉は子供のやうに意氣地なく鼻をすすり、袂からばらばらの紙屑を擇り出しては鼻をかんだ。

「わたしは下駄の鼻緒が今にも切れさうなので、可なり其の方も心配になつた。」

「一間室は暗い顔をして居るなあ。もうちつと日常りの好い顔になれないもんかな。」

一町も先からやつて來る友達の顔に狙ひをつけて、突然杉がこんな事を云ひ出した。

「ありやいかんぜエ君、ありや一生女に惚れられん顔ぢや。ああ云ふ顔を持った男はもう浮ぶ顔がない。」

顔の事になると、原田は他人より一倍眼が肥えて居ると云つた風に批評するのが癖で、結局惚れるとか惚れられないとか、話を色氣の方へ持つて行つて決着を付ける。

「……時に山崎さん。君、若竹へ出て居る名古屋藝者を見たナ。」

山崎は私の名だ。

「うむ、見た。」

「あの中に一人居るだらうがな。ありやあほえ。粹な顔をしとる。杉さんはどう思ふ。」

何か眞面目の用件らしく、きつと杉を見つめる。

「あれがかい？ 眼のきりきり吊るし上つた、さばさばした女だろ？」

「ふむ、さうだらうよ。さう云ふだらうと思つ

た。あれは君、散道樂をし抜いて、女に飽いた男が好くんちゃ。あの女の糞なら嘗めるがナ私や。」

「其れだけは止して呉れ穢いから。」
杉は仰山に顔を深めて見せる。

「糞を嘗めるは好かつた。僕は賛成だ。」
何でも一風變つた事だと私はいこちになつて賛成するのだ。

「いや、どうも君達には驚く。何も糞を嘗めて見せなくつて好きさうなものだ。」
かう一番們れ返つたやうな表情を見せて置いて、杉は又言葉を續ける。

「驚くと云へば近頃僕の頭の悪いには實に驚く。此の間電車へ乗つて不思議な事を考へた。毎朝五錢の往復切符で割引きの電車へ乗り、かへりの方を誰かに安く三錢で賣るとするんだね。すると最初の日は五錢で買つて三錢で賣るから、差引二錢の損になるが、二日目から其の賣つた三錢へ二錢足して割引へ乗り、又復りを三錢で賣る。今度は二錢出して三錢入るから一錢儲かる譯だ。次の日も同じやうに其の三錢へ二錢足しては電車に乗つて復りを三錢で賣る。かうすると毎日毎日一錢づつ儲かつて而も電車へ片道乗れる理窟になる。何だか變だとは

思つたけれど、其の時にはどうしても、さうとしか思はれなかつたから不思議ぢやないか。」
原田と私は一寸煙に巻かれて、何處が可笑しいのか見當が付かなかつたが、何でも笑つて置けば間違ひがなささうだつたから、
「あははははは。そいつは滑稽だ。」
と、合槌を打つて居た。

根津權現の裏門の前を左へ折れて、溝に沿つて生垣の多い狭い路へ出た。此處は冬になると處處じめじめした霜解の土が終日乾かず、執拗く下駄の齒に粘り着いて、歩くのも相應に骨だが、それでも舌の根は休まなかつた。

「さう云へば杉さん、君は授業料を出したかな。」
かう云つた原田は少し心配さうだつた。多分杉も未納だらうから、そんなら己も安心だ、と云ふ風が見える。

「其の語は止さう。氣になつて仕方がない。」
と、杉は急に顔を曇らせて、不安らしい眼付をした。

こんな心配は試験同様毎学期繰り返されるのだ。此の中で珍らしく授業料が済んで居るのは私だけ、二人は疾うに費ひ込んで了つてる。かう云ふ場合いつでも金策の計畫を立てるのは

杉に決つて居て一寸聞くと天晴妙案で尤もらしく、あはや紙幣の束が濡まれさうな際どい處迄漕ぎつけるものだから、原田や私はのぼせ上つてぞくぞく嬉しがりが、よく考へて見ると、大概は如何にも實行が出来さうで到底實行の出來ない事ばかりであつた。

「處で僕に一策があるんだよ。」
そろそろ杉が始め出した。

「此の頃丸善から出したヒストリアンス。ヒストリーの豫約廣告に依ると、最初手付として金五圓出しさへすれば、直ぐに定價百五十圓の書物を全部送り届けてくれる。殘金は月賦にして二十箇月間に返済すれば好い。處で我我三人が奔走して五圓の金を拵へ、誰か一人の名義にして書物を受け取つたら其れを質屋へ持つて行く。先づ安く見積つても七八十圓には取つてくれるに違ひない。或は百圓位で賣ると云つたら買手はいくらでもあらう。さあどうだ？ 二人の授業料三十圓を差引いて少くとも四五十圓は飲めると云ふものだ。そこで月賦の方は以來二十箇月間三人平等に分擔して支辨すれば、月月大した重荷ではない。」

「どうだ巧いだらう。なアに、月賦さへちやん

「どうだ巧いだらう。なアに、月賦さへちやん

ちやんと拂へば、丸善の方だつて少しも損はないのだからな。」

すると第一に雀躍して喜んだのは原田だつた。

「へーえ、それア好え。」と眼を圓くして、「私やどうしてもやらにや置かんぜエ。君等が嫌なら私一人でもやる。成る程、うむ、確か、確か、屹度うまく行く！」

何となくあやふやにも思はれたが、一と通り理窟らしいので私もつい釣り込まれ、原田の下宿開明館の二階へ上り込んだ時分には、三人とも全然其の腹になり切つて居た。

原田に客膳を奪らせて晩飯を食べながら、えらい鼻息で話し始めた。原田は百圓手に入つたら三人で吉原へ行かうと云ふ。私はそれより柳橋へでも繰り込んで、粹に遊ばうと主張する。杉は躍氣になつて、

「つまらんさ！ そんな事をしたつて！ 其れよりは多勢引ツ張つて行つてうんと牛肉でも食はして紙幣ピラを切つて見せるんだ。驚くだらうなア皆が。」

何しろ一枚百圓と云ふ金の柱を中央に、三人が三方からと見かう見して、さすつて見たり、撫でて見たり、其の周圍をぐるぐる廻つて居る

やうな話なのだ。

「おい、處で五圓はどうして拵へる。」

己は冷靜だらう、と云はんばかりに杉が切り出した。多分原田も私も疾うから其れに氣が付いて居たのだらうが、百圓があまり眼前にちらちらするので、不愉快な企策の相談なんかは後廻しにして、一と先づほくほく嬉しがつて置きたかつたものと見える。

「そりやア君二三日中に百圓入るのだもの、出来ぬ奴があるもんか。」と云ひながら原田はじろじろ私の方を見て、

「君、明日家から貰つて来られんかナ。」

原田も杉も下宿住ひで、家から通つて居るのは私だけだから、かう云ふ災難には時時遇ふものとなければならぬ。

「いや、いい。僕が此の時計を賣る。」杉がニツケルの時計を出した。

「賣るのはつまらんよ。僕を知つてる質屋へ持つて行かう。もつ時計があると五圓になるが、生憎持つて居らん。」

と、又原田がじろじろ私の帯の間を睨めつけ

る。「時計なら、僕も出さう。金が遣入つたら出して呉れ給へ。」

とうとう私も時計を出してしまつた。

妙な事には此れで話が全然さまつて了つて、ちつと待つてさへ居れば百圓が遠くの方から我目にかけてとツと駈けて来る筈のだが、時計を出してから杉と私とは少し不安になり出した。原田ばかりは嫌に睨下つてすばすばやつて居る。

「けれども未だ明日は飲めないんだな。どうしても百圓這入る迄には二三日かかるだらう。」何だか待ち遠でならないので私はかう云つた。

「ちよつと待ち遠だね。けれどなに我慢するサ。原田明日五圓拵へるはいいが、使つて了つちやいかんぜ。」

「馬鹿を云ふな。大丈夫だよ。百圓這入るんぢやないか。そんな眼先の利かない事をするものかい。」

其の晩三人の口に百圓が何度繰り返されたか知れない。

十一時過ぎに開明館を出て、暗い寒い夜路を四丁目の電車停留所迄出る間に、私は遂に下駄の鼻緒をやつつけて了つた。で、夜を幸ひ見ても外聞もなく手拭で足を臺へ縛り付けて歩いた。

私は此の頃激しい、Hypochondria に陥り、たつた獨りになると、強猛なる強迫觀念に襲はれて、居ても立つても溜らなくなるのだが、不思議と今夜は神經が下駄の方へ使はれて、一向恐ろしがる氣が出ない。オスカア・ワイルドが、ドリアン・グレイの中で、

「心靈の惱める時は官能の快樂を迫ひ、官能の惱める時は心靈の快樂を追へ。」と云ふやうな事を云つて居るが、私は茲に一つの眞理を発見した。曰く「強烈なる心靈の苦痛は、偶ま些細なる肉體の苦痛を以て減却する事を得。」さうだ、それに違ひない。

どう云ふ拍子でこんな事を考へ始めたものか、判然しないが、私の足が暗闇で一生懸命跛足を曳いて居る間に、私の頭は頻りにからからそれへと纏まりのない思想の斷片が胸中を組んぶ解れつした。而も其れ等が皆パイプや論語の格言以上の價值と權威とを有するやうに思はれ、發見の度毎に獨りで感服したが、次ぎの發見に移る時分には「大概前の眞理を忘れて居た。何でも其の中には、大は不安なり。」と云ふのがあつたと思つた。「鼻は猿猴也」もあつたやうだ。「自ら誇る時、心毎に悲し。」「黙する

時、必ずしも考へず。」こんなものもあつた。「色彩を欲す、思想を欲せず。」「恐怖は其の對象の生ずるを待つて生ぜず。」「長く黙するに堪へず。」「巻煙草は煙賣を聯想せしむ。」記憶して居るのは此の位だが、此の外に素晴らしい發見が十や二十はあつた筈だ。惜しい事をしちやつた。

矢張眞理は争へんもので、四丁目から電車へ乗つて足の方が樂になると、私は今にも往來へ飛び出して駆け出したくなるやうな恐怖に襲はれ出した。Terror of Death! Ter r of Death! 始終耳でこんな叫びが聞え、動悸が鐵槌を打ち込むやうにがんがん響いた。かと思ふと、あはや心臟の血が一時に凝結するやうな氣がして、一生懸命肋骨を抑へた。私を乗せた夜更けの電車が非常な活力で轟轟と走つて行くのが如何にも情なく、意地悪く感ぜられた。幾度か夢中になつて、一死にさうだ、助けて呉れ。」と云ひつつ隣のお客に武者振り付かうとしたが、さうすればもう狂人になると思つて、ちつと堆へて居た。

水天宮前で電車を下りるや否や、渾身の意識を「駆ける」といふ一點に集めて、箱崎町の家迄奔馬の如くぼんぼん駆けて行つた。

「何だつてこんなに晩く歸つて来るんだ。」と、親父が奥から起きて来て叱つたが、そんな事を恐ろしがつて居る所ぢやない。早く聞かされた一心に、大急ぎで二階の居間へ上り、二つのランプへ燈火をかかんづけて見た。けれども依然として不安なので、今度はそつと臺所へ忍び込み、樽の口から冷めたい液を腹の中へ滾滾と注ぎ込んだ。するとかゝッと暖まつて體中に凍り付いて居た恐怖が次第次第に溶けて行つた。

翌朝眼を開くと、私は口をあぐり開いて仰向けに臥て居た。一と晩の間締め切つた四疊半の空氣はラムプの油煙や人蒸氣で息がつまるやうに熱苦しい。寢床の上の硝子窓から朝日が毒毒しく照つて、瞳がくらくらする。私の頭の中は瓶のやうに空虚になつて居て、石ころが二つ三つ入れてあるらしく、それが頭を振る度に毎ち中で彼方此方へごころ轉がり廻つた。體中が汗でべとべとして居る。蒼白く瘦せた手を見て居ると、各の指が五四の生物の如く頭へて動いて居る。小さい粟粒のやうなものが眼の前へ無数に浮き上つて、いろいろ視線を變へて見たがどうしても消えない。そこら中のものが悉く二重になつて映つて来る。ふと思ひ

出して頭髮を掴み、ぐつと引つ張ると、恰も枯木の根っこを抜くやうに五六本手についた。

階下で杜時計が十時を鳴らして居る。今朝も學校は遅刻だ。昨夜寝たのは一時頃だったから無理もないが、それでなくても此の頃では十時前に起きた例がない。實はもう少し早起をしたいけれども、親父や母親がどうしても寝功させずには置かぬやうに仕向けるので困つて居るのだ。

先づ朝七時頃になると、屹度親父が大聲あげて、

「祿造、祿造。」
と、矢口の渡の頓兵衛もどきで怒鳴りながら、火急の注進でもするやうにとどけた。柳子段を上つて来る。半眼で見つて居ると其の時の劍幕と云つたらない、怒髪天井を衝き、眼中血走り、後ろ手に用刃庖丁を握つて居ないばかりだ。

「やいッ、起きねえかッ。毎朝毎朝人がいくら呼んでももうらんと返事ばかりで起きやがらねえ。起きろつてば起きねえかッ。起きねえと承知しねえから。」

一韓親父は口が粗暴でいけない。どうせ米屋町の相場師だから上品な譯はないが、これでは車夫か馬丁の口調だ。

此の臺辭の間に、ふとんの上から足で私の體を掃すぶつたり或は上の夜具を一枚まくつたりする所作が入る。それでも私が起きずに居ると、仕方なしに、「起きねえと承知しねえぞ。」と今度は「ぞ」の字を使ひ、多少調子の變つた捨臺詞で下りて行く。

但し此の際、私が柔順に起きれば文句なしだが、子供と違つて二十三四にもなると相應に威嚴とか格式とか云ふものを保ちたがるので、かうして見ればおいそれと手輕に起きる事が出来ない。まさか此の邊の道理の解らぬ親父でもなからうから、私は時時親父の眞意の存する所を疑つて、これは屹度、もつと寝て居るがよいと云ふ謎に違ひないと解釋する。多分此此處の推察が穩當な所だらう。

要するに其の眞意は孰れにもせよ、親切が仇となつて私は早起が出来ない。それ故親父の氣が付かない中に起きて了へばいいのだが、又運悪く親父が階段を上らうとする刹那、私は起きたいと云ふ氣持になる。兩者常に間髪を入れない。實に際どい所で起き損つて私も残念で溜らぬ。

階段から下りて行つた親父は朝へ楊枝で朝湯に出掛け、十分ばかりで歸つて来て朝酒を飲み、

遅い遅いと云ひつ朝飯を掻き込んでそそくさと逃げるやうに家を出て行く。米屋町までさほど遠くはないのに、いつでも前屈みに地面へ狙ひをつけて、兩手を化物のやうにぶらぶらさせながら、小刻みの急ぎ足で家から逃げて行く姿の情無さ。あれでは生涯成金になれさうにもない。

親父が居なくなつたから、そろそろ起きませうかと考へて居ると、今度は母親の番。此れも親父同様生え抜きの江戸兒、而も深川は小名木川の邊に生れて辰巳風を吹かせるから、頗る言葉が粗い、あたはいいつそ口惜くつてならねえよ、とか。てめえはてえさうきいたふうな言をぬかすのう、などと云ふと、三馬や春水の人情本では乙だが、明治の聖代に母親の口から出ては物凄。母親は若い時分には一寸見られたさうだから、其の頃なら嘸傳法で好かつたかも知れぬが、もう今では色氣が抜けて形式ばかりで實質なき江戸兒になり下つて居る。

母親の起し方はいささか親父と趣を異にする。始めは唯階段の上り口で、

「祿造、祿造。」
と、名ばかり呼んで居る。返事がないといつま

でも「ロクゾー」「ロクゾー」を繰り返して果てしないから、ブンと鼻で答へると、矢張り「ロクゾー」を続ける。かうして五六遍相呼應するが、母親も黙らなければ私も起きない。すると今度は一段甲高い調子で、

「さつさと起きないかッたら、何してるんだい。ふんにもう何時だと思ふんだ。九時過ぎやないか。片附かないで仕様があまりやしない。おみよつても何もさめちまはア。ふんにもまあ有らうかしら、働き盛りの奴が晝過ぎ迄つても寝てるなんて、能くそれで大學生でございッて云はれたもんだ。」

此の長長い叱言が、母親の口から出て階段を駆け上り、寢惚けた私の耳へ口惜しさうに喰ひ付くだけなら料理も出来るが、壁一重のお隣に住んで居るお琴さんにまで聞えるかと思ふとちつとやそつとの恨みではない。何の事はない、母親は自分の口の粗暴な事と、墮落書生の倅を持つた事を、近所合壁へ出来るだけ仰

山に出来るだけ広く、あらん限りの聲を絞つて吹聴するに止まる。それでも母親は二階へは上つて来ない。實はこの前に二三度例の母親が「ロクゾー、ロクゾー」とやつてる間に、「ウム、ウム」とわざと寢惚摩の生涯辭をしながら大

急ぎで起き上つて布圍を解み、着物を着換へ、澄まし込んで机に向いて居ると、其れと知らず母親は「よし、よし布圍をまくつてやるから」とか何とか、急ぎ込んで上つて来たが、案に相違の體たらくに間拍子悪く退却した事があるの、又しても此の手を喰ふのを恐れて居るらしい。

其れから三十分も経つて大分餘熱の冷めた時分に私は起きる。先づのそりのそりと階下へ下りて、火鉢の傍で悠然と新聞を読み、いざ顔を洗はうとすると、

「さつさと顔を洗つて了はないか。新聞なんざ後でも讀めるッてば。毎朝毎朝一人におこされてさんざつばら世話を焼かせていい氣になつてる。もう何時だと思ふ。十時ぢやないか。」と、前と略同じやうな叱言を、日曜だと親父だが、不斷は母親が云ふ。折角顔を洗はうとした所へ、これで又候意地が突つ張つて、更に二三分は新聞を讀む。此の母親のつべこべ云ふのを上の空で聞き流して、さも面白さうに新聞を讀んで見せるのが、私には愉快で溜らない。

顔を洗つてから、暫らく煙草を喫み、あはや飯を喰はうとする途端に、

「さあ、さあ、御飯を喰べないかよう。いつま

でもいつまでも、臺所が片附かないで仕様があまりやしない。おみよつても何もさめちまはつて、いま御飯を喰べて午の御膳が喰べられるか知ら。」

と、これも似たやうな文句で第三の叱言が来る。お蔭で又二三分飯が遅れて了ふ。この調子で私が學校へ出掛けて了ふ迄、する事なす事一叱言の爲めに妨害される。

習慣は恐ろしいもので、此の頃では朝床の中間を覺ますと、私はすぐ親父の起しに来るのを期待して、どうかすると待ち違ふ氣がする事さへある。親父の方が済むと今度は母親のを待つ。この二つが済まぬ間は物足りなくて起きる氣にならぬ。"Passion is better than expectation" たしか、セルワントスがこんな事を云つて居たが、私は此處でも是れより更に奇響な眞理を發見する事が出来る。即ち、一期待は其の對象の吉凶禍福に拘はらず常に一種の快樂也。一だ。

また親父や母親の方でも此れが癖になつたと見え、毎朝毎朝同じ文句、同じ態度で、屹度一遍づつは型の如く私を叱る。時に面倒臭さうに嫌嫌ながら勤めて居る。茲に至ると叱言とか意地張りとか云ふものを超越して、親子が心

を協せて朝の目録の一つを執り行つて居るやうな氣持ちになる。決して口端や顔付に表はれる程激しい感情をお互に抱藏して居ないのは明らかだ。

それに言葉だけ聞くと親父も母親も如何さま強情の意地悪者らしいが、實は甚だ單純に人が好く出来上つて居る。親父は相模館の癖に、女を買はず借金をせず、謔を言はず、極めて融通のきかない所を誇りとして居る。日曜には家へ引つ込み、朝から寝こんで「神の妙機」と云ふ本を二三頁讀み出すかと思ふと忽ちとろとなつて終に終日晝寝をする。たまたま陽氣の加減で氣が觸れたやうに襦袢一枚になり、

「はて此處のたてつげが甘えやうだが。」などと家中をがたびしちり散らかし、襖を取り外したり、木戸を打ツ倒したり、鋸や鐵槌を引きずり出して、朝から鉈屑を浴びながら騒ぎ廻る事もある。さう云ふ晩には、「ああ今日は好い運動をした。何か旨えものも食ふかな。」

と、「簡易西洋料理法」とある書物を参照して、自ら臺所へ出馬に及び、シチユウ、ピフテキの類を拵へて我我に御馳走しながら、ちびりち

びり啖酌を傾ける。

いつであつたか、新聞の三面に「出商總俱樂部」と云ふ標題で、近頃出商總俱樂部と稱する角魔の徒輩小間物化粧品を賣り歩く商人體に委を變へて市中を徘徊し、女主人の家と見れば如才なく取り入りて彼等得意の好手段に乗せ遂には怪しき關係を結び云云」と云ふ記事の見えた時の事、ある日の夕方藤怒風呂敷を擔いだ書生體の男が格子戸をあけて、

「ええ奥様はお出ででございますか。手前は苦學生でございますが、何かお石鹼香水の類に御用がございましたらお求めを願ひます。」

と、やり出すと、奥で晩飯を食つて居た親父は、俄然箸を投り出してつかつかと玄關へ立ち上り、胡散臭さうにじろじろ男の風體を窺つて、

「要りませんよ、そんなものは。」

と、如何にも突つ慥食にびしやりと障子を立て切つて了つた。面喰つた苦學生はそこそこに逃げて行つたが、親父はまだ眼を怒らし、せい息をはずませて、

「奥様はお出ででございますか、なんて云やがつて怪しい野郎だ。…新聞に出商總俱樂部と云ふのが出て居るから、皆も氣をつけねえと

いけねえぞ。」

かう云つて獨りて憤懣して居た。親父のする事は凡べて斯くの如く愛敬に富んで居る。

さて今朝は平常よりも更に遅れて、學校へ行つたのが丁度午頃、文科は一般に出缺の取締りが嚴重でないからいいやうなもの、私ほどずぼらな學生は珍らしい。

原田が今日の午前中に例の質物で五圓拵へて來る約束だから、早速控所へ行つて見ると、原田と杉とがストープへあたりながら辨當を食つて居る。

「どうだい。五圓になつたかい。」私は早速聞いた。

「處が三圓にしかならんぢや。最初杉さんの時計を出したら八十錢にしか取らんと云ふ。君のがあつたのでやつと三圓になつたんぢや。…」と原田は五圓にならなかつた代りに私の時計を褒めて居る。

「…それに時計と云ふ奴は還入つたら大抵も流れるに定つて居るから、質屋の方でもあまり喜ばん。…いや何も君の時計を流すと云ふのぢやないが。…一體質屋は流れよりも利子を取るのが目的なんぢや。」

何だか大分昨夜とは口うらが變つて來た。

「残額二圓誰かから借りよう。昨今我々は逼迫して居るから早く五圓にして丸善へ持つて行かないと費つ了ひさうだ。」

と、杉は原田の手にある三圓へ秋波を送る。「さうだ。三圓位ぐづぐづして居ると瞬く間だよ。」

「何だか費つ了ひさうだな。」

かう云つて杉が今にも手を出しさうな顔をした。すると原田がこれにつけ入つて、

「あつさう、さう。一寸此の中から筆記帳とインキを買はして呉れや。」

と、怪しからん事を云ひ出す。

「馬鹿を云へ。一枚でも紙幣が崩れりや忽ち失つて了ふに定つて居る。あと二圓足しさへすりや百圓になるんぢやないか。お前はそれだから可かんよ。」

と、杉は顔で憤慨したが、其の實足許は危かつた。

「いやさうでない。インキとノートの金位家へ行けば出来るから今一寸立て換へてくれ。早速教場へ出られんぢや困る。大丈夫だよ。一寸買つて来る。」

委細構はず原田が戶外へ駈出すと、何と思つたか杉が後から、

「おい、原田ア。」

と呼び止めて、

「序に菓子を五錢買つて来い。」
もう斯うなると百圓は金額が多いだだけ、それだけ遙か遠くへ隔たつた感がある。

原田の買つて来た甘辛煎餅をばりばりやりながら、運動場の芝生に臥轉んで、杉が眞面目にこんな事を云ひ出した。

「だが能く考へて見ると、此の計畫は明かに人に聞かれて好ましい事ぢやない。何と云つても丸善とそれから僕等から本を買ひ取つた人を賑く事になるんだからな。たかが授業料三十圓の爲めにそんな不徳を働かんでもすむぢやないか。」

如何にも何人の不都合を詰むるやうな口調で、原田と私を睨めつけながら、自分の企てた計畫を堂堂と攻撃した舉ぐ、とうとう滅茶苦茶にして了つた。

「それよりは此の三圓で愉快に遊ぼう。そして今夜は妙法寺へ来て泊るさ。面白いぜ、それも。」

妙法寺と云ふのは杉の間借りをして居る牛込原町のお寺だ。
「止すなら止しても好えが、然し君等はいざと

なると駄目な男ぢや。私や屹度獨りでもやつて見せるぜエ。」

原田はこんな負惜しみを云つたが、
「……ぢや今夜は何處へ行かう、久し振りで寄席もいいがな。鈴木！ たしか小さんがかかつとつた。」

などと云ふ心配もした。

「いや喰はう。これだけあれば可なり肉が喰へるよ。」

ここで三人暫らくかうしう、ああしよう、久しく胸中に結んで解けざりし欲望満足の計畫を提供したが、結局牛鍋のじくじく云ふ音を聞いて、ぐびりぐびりながらお互の眞紅な顔を睨み合ふのが一番景気が好ささうだと云ふ事になつて、大學裏門側の學園へ躍り込んだのは午後四時頃であつた。

「さう酒を澤山飲んぢや足りなくなるぜ。」
と云ひながら原田は盛に鍋をつツ突いた。大きい肉の切れを頭の上まで高々と掲み上げて、たらたら垂れる醬油を舌で受けながら、ばくりと口腔へ落し込む當は馴れたものだ。そして時時、

「うまいなあ。」
と、眞底から感謝の聲を放つ。

追追と酔が廻つて来た。三人共浅ましく元氣づいて喰ふやらしゃべるやらした。

「要するに百聞這入らなかつたのは事實だけれど、時計が二つなくなつたのも事實らしいね。」

私がかう云ふと、二人はどツと吹き出した。

「わツははは。何しろ天下の滑稽だ。これは立派な小説になる。どうだい山崎。一つ書いて見たら。」

何でも事を仕出かしては「此れは小説になる。」と云ふのが杉の十八番だ。原田は談文學に互ると頗る不案内で、どんな顔を拵へていいか解らずに居る。

「ジェローム・ケイ・ジェロームでも書かしたら面白いものが出来るね。先づ標題は『Three Men……』」

と云ひかけて、私が考へると、杉が即座に後をつける。

「With Two Watches ぞ。でなければ、His-torians' History でもいい。ね、書いて何かへ出し給へ。原稿料と云ふものがあるからな。」

原稿料ときいて原田が手を擧げて突飛な聲を出す。

「賛成！ そりや好えぜエ、山崎さん。一つ書かんかな。時計事件もええが、何か勘う、何だ

な、女の事を書いたが好え。」

其れから暫らく金儲けのやうな、文學談のやうな、而して人生觀のやうな話が榮える。

「僕は死ぬのは嫌ぢやないが、死んでから狭い棺桶の中へ體をちぢめて小ひさくたつて居るのかと思ふと嫌で仕様がな。」

と、杉は凄顔をして肩をつぼめて見せた。

「私や梅毒で鼻が落ちたら、その時こそ、此の通り切腹するぜエ。」

かう云ひながら、原田が杉箸で腹を切る眞似をした。

やがて私が妹から傳授の如何はしい勸進帳を隠り出すと、二人とも負けない氣になつて

義太夫やら端唄やらを怒鳴り立てた。杉は青森のズウズウ音で日本海の嵐のやうな息を吐きながら、

「わスと云ふものないならば」と小鼻をひくひく隆起させて居た。喉が自慢の原田は、如何にも黒人の熊皮を見ると云はんばかりに嚴肅な面構へを拵へ上げて、「夕ぐれ」わがもの

「わしが國『秋の夜』『忍ぶ戀路』と知つて居るだけ片ツ端からお渡ひをした。そして時々仔細らしく首をかしげて、

「や、ここがいかん。どうもこれぢや縁に合はんやうぢや。」

などと云つた。

此の演藝共進會が済むと、再びお喋りが始まり、話題はいつしか古今東西の人物評に滑つて行つた。

「諸葛孔明の生涯は偉大な悲劇だ。あんな大人物でありながら自己の全部を玄德に捧げたのは感心だ。孔明のえらさは透き徹つたえらさだ。

透き徹つた人物は動ともすると小規模になるが、孔明はそれで大きいから不思議だ。漢の高祖などはいくら大きくツても恐ろしく濁つて居るからな。」

「僕は目外ふと孔明の事を考へて、涙が出て仕方がなかつた。」

杉がかう云つて居た。私はそろそろ頭の鉢がきりきりして来て、誰かが雙方の頰をほつた手で抑へて居るやうに感じた。そのうちに何もかも判らなくなつた。けれどもまだ舌ばかりは動いて居た。煙草の煙と、牛の脂と、唾の中で酔つた三人は夢中で議論した。最後に誰だかこんな事を云つたのを覚えて居る。

「尊氏はえらいき。どうして！ 秀吉や家康の比ぢやないからな。」

人面痘

歌川百合枝は、自分が主人公となつて活躍して居る神秘劇の、或る物凄く不思議なフィルムが、近ごろ、新宿や澁谷のあまり有名でない常設館に上場されて、東京の場末をぐるぐると廻つて居ると云ふ噂を、此の間から二三度耳にした。それは何でも、彼女がまだアメリカに居た時分、ロスアンジェルスのグロオプ會社の専屬俳優としていろいろの役を勤めて居た頃の、寫眞劇の一つであるらしかつた。見て来た人の話に依ると、寫眞の終りに地場のマアクが附いて居て、登場人物には日本人の外に、數名の白人があつて居る。日本語の標題は「執念」と云ふのだが、英語の方では「人間の顔を持った原物」の意味になつて居る。五巻の長尺で、非常に藝術的な、階級にして怪奇を極めた逸品であるといふ評判であつた。

勿論、百合枝のアメリカで寫したフィルムが、日本の活動寫眞館に現はれたのは、今度が始めてではないのである。彼女が歸朝する以前にも、グロオプ會社から輸入された五六種の映畫

の中に、をりをりを彼女の姿が見えて、歐米の女優の間に伍してもをさをさ劣らない、たつぷりとした滑らかな肢體と、西洋風の嬌態に東洋風の清楚を加味した美貌とが、早くから同胞の活動通に注意されて居た。寫眞の面に出て来る彼女は、日本の婦人には珍らしい活潑で、かなり冒險的報影にも笑つて従事するだけの、膽力と身軽とを備へて居るらしく、女賊とか毒婦とか女探偵とか、妖麗な、さうして敏捷な動作を要する役に扮するのが、最も得意のやうであつた。殊に、いっぞや淺草の敷島館に上場された、「武士の娘」と題する一篇などは、キクコと呼ばれる日本の少女が、某國の軍事上の秘密を探るべく間諜となつて東亞の大陸を股にかけ、藝者だの貴婦人だの曲馬師だのに扮裝すると云ふ筋で、女主人公のキクコを勤める百合枝の花花しい技藝は、一時公園の觀客を沸騰させたものであつた。彼女が去年、東京の目黒活動寫眞會社の招聘を受けて、前例のない高給を以て抱へると云ふ條件の下に、四五年ぶり

でアメリカから戻つて来たのも、あの寫眞が内地人に多大の人氣を博した結果なのである。しかし百合枝には、「人間の顔を持った原物」などといふ戯曲を、嘗て一度も演じた覚えがないやうに感ぜられた。その寫眞を見たといふ人から、劇の内容や一の場面に就いて、精しい説明を聞かされても、彼女は自分が、いつそんなものを撮影したのか、全く想ひ浮べない事が出來なかつた。仕組まれて居る事件の發端は、或る暖い、廣重の繪のやうになまめかしい、南國の海に面した日本の港の、——多分長崎か何處かであらう。——入江に沿うた街道の遊郭に住む、葛清太夫と云ふ華魁の話から始まつて居る。町中で第一の美女と歌はれて居る華魁が、夕暮になると何處ともなく聞えて來る尺八の音に誘はれて、灣内の景色を望む青樓の三階に、龍宮の乙女のやうなあでやかな姿を見せながら、欄干に凭たれて恍惚と耳を傾ける。尺八の主は、とうから彼女に戀ひ焦がれて居る賤しい穢い、青年の乞食なのである。せめて男と生れた効には、一夜なりとも彼の華魁の情を受け、心置きなく此の世を去りたい。——さう云ふ願ひを、人知れず胸の奥に秘めて居る青年は、自分の貧しい境涯を啞ち、醜い器量を取ぢる

餘り、いつもたそがれの間に紛れては、海岸の波止場の蔭にさまよひて、一竿の笛を便りに、よそながら華魁の顔を垣間見るのを楽しんで居る。此の衰れた乞食の外にも、彼女に魂を奪はれる者は多勢あるが、遂に一人も、彼女から眞に熱情を報いられた客はない。それもその筈、彼女は去年の春の末に、此の港に碇泊したアメリカの高船の船員と、假りの契りを結んでから、明けても葬れても其の白人の係を忘れかねて、再會の約束をした今年の秋を待ち記びつつ、乞食の尺八が聞える度に、ぼんやりと沖の帆を眺めて、物思ひに沈んで居る。

此れが映畫の序幕であつて、やがてアメリカの船員が港へ戻つて來る事になる。葛浦太夫の愛に溺れた白人は、如何にしても彼女を故郷へ連れて行かうと焦りながら、莫大な身請けの金を工面する道がないので、彼女を遊里から盗み出した上、高船の底へ隠してアメリカへ密航させようとする。彼は此の計畫を遂行する爲めに、例の笛吹きを乞食を説いて、相棒になつて貰ふのである。或る夜ひそかに華魁が妓樓の裏口から忍んで出ると、其處に待ち構へて居る白人が彼女を大きなトランクに入れて、荷車に積んで、其れを乞食に預けたまま、自分は何食はぬ顔で、

商船へ歸つてしまふ。乞食は町はづれの寂しい道邊の、彼が毎晩雨露を凌いで居る古寺の空家へ、荷車を曳いて行つて、華魁を入れたトランクを本堂の須彌壇の傍に隠して置く。數日を經て白人は夜の深更に及んだ頃、一般の舳舟を寺の崖下の波打ち際に漕ぎ寄せて、乞食の手からトランクを受け取り、首尾よく本船へ積まうと云ふ策略である。乞食は喜んで白人の頼みを諾したが、仕事が成功した曉には、どうぞ自分に金銭以上の報酬をくれろと云ふのであつた。彼は今迄誰にも語らなかつ切つた胸の中を打ち明けて、「華魁の爲めに働くことなら、私はたとへ命を捨てても惜しいとは思ひません。かなはぬ戀に苦しんで居るより、私はいつそ華魁がそれ程までに慕つて居るあなたの爲めに力を假して、お二人の戀を遂げさせて進ませませう。それが私の、華魁に對するせめてもの心づくしです。けれどもあなたが此の見すばらしい乞食の衷情を、若し少しでも可哀さうだと思召して下すつたら、幸ひ華魁をあゝの古寺へ匿つて置く間だけ、或はたつた一と晩だけでも、どうぞ體を私の自由になさせて下さい。後生一生のお願いでございます。……」

から云つて、涙を流して、あまたび顔を地

に擦りつけて、涙を流して拜むのである。「……去年の春、あなたの船が此の港を立ち去つてから、毎日毎日お部屋の下に亘んで、笛を吹いては華魁の心を慰めて上げたのも私でございます。乞食にしては身の程を知らぬ、勿體ないやうなお願ひでございますが、お聞き届けて下すつたら、私は死んでも本望でございます。萬一悪事が露見しても、罪は私が一人で背負つて、何處へでもあなたの方をお助け申しませう。」かう云つて掻き口説かれて見ると、白人は願ひをになく拒絶する譯にも行かない。自分の大事な恋人ではあるが、どうせ此れ迄多くの男に肌を許した華魁の事であるから、乞食の親切に報いる爲めに、一と夜か二夜の情を賣つても差支へはなさうに考へられた。

——けれども、その話を聞かされた本人の葛浦太夫は、櫻子格子の隙間から、乞食の様子を一と目見ただかりで、身顛ひをしたのである。お客と云ふお客に媚び諂はられて、我が儘一杯に振る舞つて來た驕慢な彼女には、あつたけな、鬼のやうな顔つきをした青年に、體は思か袂の端にでも觸られるのは、死ぬより辛く感ぜられた。そこで彼女は白人と謀し合はせ、兎も角も乞食を欺いて、トランクを荷車へ

積ませてしまふのである。

白人は乞食に別れて本船へ歸つて行く。乞食は荷車を古寺へ曳き込んでから、華魁の姿に會ひたさに、うす暗い本堂の佛像の前でトランクの蓋を明けようとする。が、蓋には嚴重な錠が下りて居て、どうしても開かない。彼は靴にしがみ附いて、中に隠れて居る華魁を相手に、夜中白人の不信を恨み、悶悶の情を訴へる。「あの白人は、悪気があつてお前を欺した譯ではない。きつと慌ててお前に錠を渡すのを忘れたのだらう。今にあの人がやつて來たら、此の靴を明けさせて、必ず約束を果して上げる。」かう云つて、彼女は頻りに乞食を宥め騙して居る。さうするうちに二三日過ぎて、夜の明け方に寺に駆け附けた白人は、乞食に向つて、錠を忘れた事を幾度か謝罪した後、もう直き商船が錨を上げて港を出帆しようとして居る。とてもお前の頼みを聞いて居る暇はないから、どうぞ此れで勘辨してくれろ。」と、若干の紙包みを投げ與へる。乞食は無論、そんな物を快く受け取る筈がない。此一此の後長く華魁の姿を見ることのない世の中に、生きて居ても仕様がなから、私は望みがかなつたら、海に身を沈めて死なうと迄決心して居た。それだのあなた方は、酷

くも私を欺したのだ。さほど華魁が私をお嫌ひなさるなら、無理にとはお願ひ申しますまい。その代り、どうぞ今生の思ひ出に、ひと眼なりともお顔を拜ませて下さいまし。せめて華魁の、黄金の刺繍をしたきらびやかなキノノの裾になりとも、最後の接吻をさせて下さいまし。」彼は繰り返して頼むのであるが、どうしても華魁は承知しない。「何と云つても此の靴の蓋を明けてくれるな。早く其の乞食を追ひ拂つて、私を船へ載せてくれろ。」と、彼女はトランクの中から聲を上げて、白人を促すのである。「お前には氣の毒だが、ああ云つて居る彼女の言葉は、私は背く譯には行かない。それに残念ながら、今日も私はトランクの錠を持つて來なかつた。」と云つて、白人も當惑さうに辯解する。「よろしうございます。さう云ふ譯なら、私は今、あなたの眼の前で、此の海岸から身を投げます。ですが私は、死んでも華魁にあはずには置けません。會つて恨みを言はずには置けません。」と、乞食が云ふ。「死ぬなら勝手にお死に。」と、彼女が再び靴の中で叫ぶ。「寫眞では靴の中間の縦断面が、映し出されて、肩を逆立てて痲癩を起して居る彼女の表情が、自由に撮影されて居る。」「私が死んだら、私の執拗な妄念は、

私の醜い、佛は、華魁の肉の中に食ひ入つて、一生お傍に付き纏つて居るでせう。その時になつて、どんなに後悔なすつても及びませぬぞ。」と云ふかと思ふと、乞食は寺の前の崖の上から、海へ飛び込んでしまふ。すると白人は漸く安堵したやうに、急いでポケットから錠を取り出して、トランクの蓋を開いて華魁をいたはりながら、互ひに謀の成就したのを喜び合ふ。——此れ迄が一巻と二巻との内に收めてある。

第三巻以下は日本を離れた船の中から、白人の故郷のアメリカの事になつて居る。先づ現はれる場面は、彼女を入れたトランクが種種雑多な貨物と一緒に、船艙の片隅へ放り込まれる光景と、そのトランクの縦断面とである。彼女は、最初から貯へられてある水とパンとで命を繋ぎながら、窮屈な靴の中に、兩膝を抱へて、膝頭の上に頭を伏せて身を縮めて居る。二日立ち三日立つうちに、右の方の膝頭に妙な腫物が噴き出して、恐ろしく膨れ上つて來る。さうして、如何にも柔かさうに、ふわふわとふくれた表面には、更に細かい、四つの小ひさな腫物の頭が突起し始める。不思議な事に、その腫物は一向痛みを感じないらしく、彼女は服れ上つて居る局

部を、手で壓して見たり叩いて見たりする。あまり邪気に壓し潰さうとしたせるか、柔かであつた表面は、目を經るままにこちこちに固まつて、其代り四つの小ひさな腫物の頭がだんだんくつきりと、明瞭な輪郭を示すやうになる。四つのうちの上の方にある二箇は球のやうに圓くなり、中央の一箇は縦に細長い形を取り、最下部にある一箇は横にうねうねと、芋蟲が這つて居るやうな無氣味なものになる。トランクの中は眞暗な筈であるが、空氣を通はせる爲めに、豫め作つて置いた僅かな隙間からさし込む明りが、彼女の身邊を朦朧と闇に浮べて、殊に右の膝頭の周圍には、やや鮮やかな、月の暈のやうな圈を描いた光線が、一滴の水をたらした如く、ぼつたりと滲んで居る。彼女は或る時、其の疾患部をつづく眺めて居ると、上方にある二箇の突起が、何となく生物の眼玉のやうに思はれて仕方がない。すると今度は、中央の細長いのが鼻のやうでもあり、下方の芋蟲の形をして居るのが、唇のやうでもあり、腹れ膨らんだ表面全體が、俄然として、紛ふ方なき人間の顔になつて居る事を發見する。「心の迷ひではないか知らん。」彼女は斯うも考へたが、やはり人間の顔に相違ない。而も一層厭なことに、それは

恰も子供の畫いた戯畫のやうな、簡單な線から成り立つては居るけれど、どうやら彼の乞食の儀に似通つて居る。さう氣が付いた瞬間に、彼女は名狀し難い恐怖に襲はれて、ぐつたりと、俯向きに卒倒してしまふ。……氣を失つて項垂れて居る彼女の頭は、ちやうど例の膝頭の上に伏さつて居る。——その間に腫物は刻々と生長して、簡單な線に過ぎなかつた眼だの、鼻だの、口だのは、次第に生命を吹き込まれたやうな精彩と形體とを帯び始め、遂に全く、乞食の顔を生き寫しにした、本物の人間の首になつて居る。(尤も大きさは實物より幾分か小ひさく、ほぼ膝頭へ當て嵌まる程度に縮寫されて巧妙に焼き込まれて居る。)其れは、嘗て笛吹き青年が今や身を投げやうとして呪ひの言葉や放つた折の、あの幽鬱な、執念深い表情を、すばらしい巨匠の手に依つて彫刻された如く、寂然と、黙々と湛へて居るのである。

此れから以後は、その人面痘が彼女にさまざまの復讐をする、凄慘な物語りで充たされて居る。船がアメリカに着くと、彼女は腫物の事を堅く戀人に秘して、サン・フランシスコの場末の町に二人で間借りをして暮して行く。彼女と世帯を持ちたさに、船員を罷めて或る會社の事務員に雇はれた白人は、彼女が近頃ひどく陰氣になつたのを訝しみなながら、それとなく注意をして居るうちに、或る晩偶然な出来事から、とうとう思まはしい秘密を發見して、彼女を捨てて逃げ去らうとする。彼女は戀人を逃がすまいと激しく拮闘する拍子に、過まつて咽喉を緊めて彼を殺してしまふ。(彼女の體には、もう怨靈が乗り移つて居て、無意識の間にそれ程の腕力を出させたのである。)戀人の死體を前にして彼女は暫らく失心したやうに、惘然と佇立して居る。——その時、拮闘の結果、すだに裂けた、彼女のガウンの裾の破れ目から、白人の死體を覗いて居る人面痘が、凄然たる顔面筋肉を始め動かしてにやにやと皮氣味の悪い笑ひを洩らす。(爾來人面痘は盛んに表情を動かすやうになつて、喜んだり悲しんだり、眼を瞬らしたり、舌を出したり、どうかするとさめぎめと涙を出し、唇を至めて涎をたらしたりする。)——此れが最初の復讐であつて、その後彼女の運命は、絶えず人面痘に迫害され威嚇される。彼女は戀人を殺してから、急に性質が一變して、恐ろしく多情な、大膽な毒婦になると共に、美しくつた容貌が以前に倍する儼麗を加へ、一段の嬌態を發揮するやうになつて、次ぎから次ぎへと

多くの白人を欺しては、金を巻き上げ、命をも奪ひ取る。折折、犯した罪の幻に責められて、夜半の夢を破られる彼女は、何とかして改心しようとするけれど、いつも人面痘が邪魔をして、彼女の臆病を嘲り悪事を唆かす爲めに、知らず識らず墮落と悔恨とを重ねて行く。或る時は賈春婦になり、或る時は寄席座人になり、此の劇の女主角は、洋装にも日本服にも極めてよく調和する、都合のいい顔立ちと體格とを持つて居て、其れが寫眞に遺憾なく應用されて居る。彼女の境遇が變轉するに従つて、舞臺は桑港から紐育に移り、歐洲の各國から入り込んだ貴族や、富豪や、外交官や、身分の高い紳士が幾人とも彼女に魅せられて生血を吸はれる。彼女は壯麗な邸宅を構へ、自動車を乗り廻して、貴婦人と見紛ふばかりの豪華な生活を送るやうになるが、孤獨の時は相變らず良心の苛責に悩まされる。而も悩まされれば悩まされる程却つて彼女の肉體は水水しく臆漲り、血色はつやつやと耀きを増す。最後に彼女は、某國の侯爵の青年と戀に落ちて、首尾よく結婚してしまふ。しかし、そのまま侯爵の若夫人として、平和な月日を過す事が出来たら、此の上もない好運であるけれど、決してさうう

まくは行かなかつた。或る晩、新婚の夫婦が多勢の客を招いて、大夜會を催した折に、彼女はとうとう、夫をはじめ誰にも深く隠して居た人面痘を薄座の中で暴露してしまふのである。彼女は始終臍物にガーゼをあてて、上から固い襪をびつたりと穿いて、人の前では如何なる場合でも膝を露はさなかつたのに、その夜彼女が舞臺で夢中になつて踊り狂つて居る最中、突然眞赤な血が、純白な彼女の絹の襪に縷を引いて、點點と床にしたたり落ちる。それでも彼女はまだ氣が付かずに跳ね廻つたが、平生から夫人が膝に纏帶するのを不思議がつて居た侯爵が、何げなく傍へ寄つて傷を調べて見ると、人面痘が自ら襪を齧て喰ひ破つて、長い舌を出して、目から鼻から血を流しながら、げらげらと笑つて居る。

彼女は其の場から發狂して、自分の寢室へ駆け込むと同時に、ナイフを胸に衝き通しつゝ、寢臺の上へ仰向きに倒れる。斯うして彼女は自殺してしまつても、人面痘だけは生きて居るらしく、未だに笑ひつづけて居る。

此れが「人間の顔を持った臍物」の劇の大略であつて、一番最後には、人面痘の表情が「大映し」になつて現はれるのださうである。

大概、此の種の寫眞には、映畫の初めに、原作者並びに舞臺監督の姓名と、主要な役者の本名と役割とを書いた、番附が現はれるのを普通とする。ところが此の寫眞に限つて、作者や舞臺監督の名は何處にも記載してない。ただ、葛浦太夫に扮する女優の歌川百合枝だけが、きれいしく紹介されて、開卷第一に、侯爵夫人と華魁との衣裳を着けて挨拶に出る。さうして、百合枝よりも寧ろ重大な役を勤める笛吹きのお食になる日本人は、一體誰なのか、どう云ふ素性の俳優なのか、今迄嘗て見覚えのない顔であるにも拘はらず、全然閑却されて居るのである。

以上の話を、百合枝は、自分を吊置してくれ二三の客筋から聞いた。それが當の本人の、活きた形を捉へて居る活動寫眞であるからには、彼女は必ず、いつか一通何處かで撮影した事があるに相違ない。けれどもどうしても、彼女にはさう云ふ劇を演じた記憶が残つて居なかつた。尤も、フィルムへ寫し取る爲めに劇を演ずる場合には、普通の芝居のやうに、戯曲の發展の順序を追うてやるのでなく、その時の都合に因つて、臺本の中から手あたり次第に場面を選んで、前後を構はず寫して行くのである。どう

かすると、或る一つの場所、全然異つた戯曲の中の或る光景を、二つも三つも同時に撮影する事さへあつて、活動俳優は自分の演じて居る芝居の筋を知らないで居る例が多い。殊に百合枝の雇はれて居たグロリア會社では、舞臺監督が、俳優には絶対に、戯曲の筋を知らせない方針を取つて居た。俳優は豫め本讀みや稽古をする必要がなく、役の性根などはまるで分らずに、ただ出たところ勝負で、舞臺監督の指示動作を見做つて、その型の通りに泣いたり笑つたりしながら、一と場一と場を拵へ上げて行くのであつた。かうすると、俳優の間違つた解釋を防ぎ、彼等の技藝から、芝居じみた不自然さを除いて、演出に活氣を生ずると云ふ考へから、アメリカの會社では一般に此の方法を取つて居るのである。それ故百合枝は、グロリア會社で働いて居た四五年の間に殆んど無数の場面を撮影して居るけれど、其れ等の場面が如何なる劇の要素となり、幾種類の戯曲を組み立てて居るのか、當時は自分でも想像することが出来なかつた。云はば、彼女は或る大規模な機械に附屬する、一局部の齒車だの彈條だのを製造して居る職工のやうなものだ。成る程彼女は今迄に何回となく、華魁や、貴族の婦人

に扮装した覚えはある。女賊や女探偵を得意にして居たのであるから、トランクの中へ隠れたり、男を齷弄したり殺害したり、そんな光景を演じた経験は、頻頻として、數へ切れない程の回数に達して居る。従つて、そのうちの軌れと軌れとが、人面痘の劇の一部となつて居るのか、彼女に見當が付かないのも、一應無理はないのである。おまけに此の寫眞劇には、熟練な技師のトリックが行はれて、腫物になる乞食の顔を彼女の膝へ焼き込みにしてあるのだから、本人に記憶がないのは、猶更當然であるかも知れない。

しかし、さうは云ふものの、後日完成された一巻の映畫を見るなり、若しくは筋を聞くなりすれば、大抵あの時寫したのが此れであつたと、思ひ當るのが常である。況んや長尺物のうちでも、特に傑出した立派なフィルムを、彼女が今日迄、見たこともなく、存在さへ知らなかつたと云ふやうな、馬鹿馬鹿しい事實がある譯はない。それに彼女は、アメリカに居た時分、自分の演じた寫眞劇を見物するのが何よりも好きで、たとへどんな短いフィルムでも、一つ残らず眼を通して居る筈だ。日本へ歸つてからも、ロスアンゼルス、昔が戀ひしいのと、東京の

會社で拵へる寫眞の出来栄が思はしくないので、たまたまアメリカ時代の映畫が、公園あたりへ現はれる度に、暇を盗んでは見に行くやうにした。だから、全く心當りのない人面痘の寫眞がいつの間にかグロリア會社で製作されて、日本へ渡つて来て居ると云ふ事實は、**「人間の顔を持つた腫物」**以上に、百合枝には不思議に感ぜられたのである。

不思議と云へば、一體それ程藝術的な、優秀な寫眞が、長く世間に認められずに居て、此の頃ふいと、場末の常設館などを廻つて居るのも不思議である。いつ其の寫眞は日本へ輸入されたのであらう、さうして何と云ふ會社の手によつて、何處で封切りをされたのであらう。東京の場末に現はれる前は何處をうろろして居たのだらう。彼女は試みに、同じ會社に勤めて居る俳優や、二三人の事務員に尋ねても、誰もそんな物は知らないと言ふ。折があつたら、彼女は一通見に行きたいと思つて居ながら、何分遠い場末の町に懸つて居て、今日は青山明日は品川と云ふやうに、始終ぐるぐる動いて居る爲めに、いつも機会を逸してしまふ。自分で目撃する事が出来ないとなると、その寫眞に對する彼女の好奇心はますます募つた。

グロブ會社には、ジェフアンソンと云ふ焼き込みの上手な技師が抱へてあつて、盛んにトリック寫眞を製作した位であるから、人面痘の劇も恐らく、彼の技倆を待つて、出来上つたものやうに察せられる。あの快活な劇輕なジェフアンソンの性質から考へると、彼女をびつくりさせる積りで、思ひ切つて大膽な細工を施したかも知れない。塵物の筒所以外にも、豫想外な、微妙なトリックを、全篇到る處に應用したのかも分らない。——だが、さうだとすれば、いよいよ彼女は、その寫眞を見せられなければならぬ筈である。彼女は又笛吹き青年になると云ふ日本人の俳優に就いても、深い疑惑を抱かずに居られなかつた。グロブ會社に雇はれて居た日本人の男優は、當時僅かに三人しかない。その三人の内一人が、長崎のやうな港灣を背景に使つて、少くとも乞食に扮して、彼女と一緒にカメラの前へ立つた事は歸じてないのである。彼女の、白襦子のやうな美しい膝頭へ、醜い飾を永劫に残して居る日本人は、抑も何者であらう。——空想を送しうすればする程、百合枝は何だか、自分が實際の葛蒲太夫であつて、怪しい一人の日本人に呪はれて居るやうな心地がした。

此の、解き難い謎の寫眞の來歴を、日東寫眞會社の内に、誰か知つて居るものはないだらうか。斯う思つた彼女は、ふと、會社に古くから勤めて居る、高潔事務員の且と云ふ男に氣が付いた。その男は、外國會社との取引に關する通信や、英語の活報雜誌だの、筋書だのの翻譯に従事して居る人間で、日本に渡つて來たアメリカのフィルム製作年代や、輸入の経路や、中には現はれる俳優の素性に就いて、精しい智識を持つて居るらしかつた。その男に尋ねれば、何等かの手がかりは得られさうに考へられた。或る日彼女は、日着里の撮影場の傍にある、事務所の二階へ上つて行つて、其處に執務して居る且の肩を、軽く叩いた。

「……ああ、あの寫眞の事ですか、……僕は満更知らなくもありませんが、……」

且は、彼女に質問を受けると、人の好きさうな眼をばちばちやらせて、ひどく狼狽した様子であつた。さうして、不安らしく部屋の周圍を見廻しながら、百合枝が開け放して這入つて來た入口のドアを、自ら立つて締めて來た後、やつと落ち着いたやうにしげしげと百合枝の額を眺めた。

「……さうすると、あなた御自身にも、あの寫

眞をお寫しになつた覚えがないのですね。それではいよいよ、あれは不思議な、變な寫眞です。實はあれに就いて、僕もあなたにお尋ねして見たいと、とうから思つて居たのですが、他聞を憚る事でもあり、それに少し氣味の悪い話なので、ついついお伺ひする機会がありませんでした。今日は幸ひ誰も居ませんから、お話しようござんすが、附いた後で、氣持を悪くならぬやうに願ひます。」

「大丈夫よ、そんな恐い話なら猶聞きたいわ。」

と、百合枝は強ひて笑ひながら云つた。

「……あのフィルムは、實は此の會社の所有に屬して居るもので、此の間中暫らく場末の常設館へ貸して置いたのです。あれを會社が買ったのは、たしかあなたがアメリカからお歸りになる、一月ばかり前でしたらう。それもグロブ會社から直接買ったのではなく、横濱の或るフランス人が賣りに來たのです。そのフランス人は、外の澤山のフィルムと一緒に、上海であれを手に入れて、長らく家庭の道樂に使つて居たと云ふ話でした。フランス人が買った以前にも、支那や南洋の植民地で散放使はれたものらしく、大分疵が附いて傷んで居まし

た。しかし會社では「武士の娘」以來、あなた
の人氣が素晴らしい際でもあり、あなたが會
社へ来て下さると云ふ契約の整つた時でしたか
ら、—それに又、傷んで居るが非常に扱けの
いい、あなたの物としても特別の味のある、
毛色の變つた寫眞でしたから、法外に高い値段
で買ひ取つたのです。ところが、買ひ取つてか
ら間もなく、あの寫眞を、夜遅く、たつた一人で靜か
な部屋で映して見ると、可なり大膽な男でも、
とてもしまひまで見て居れないやうな、或る恐
ろしい事件が起ると云ふのです。その事實は、
以前會社に雇はれて居たMと云ふ技師が、フイ
ルムの巻りを修正する爲めに、此の事務所の下
下の部屋で、或る晩、あの寫眞を映しながら疵
を檢べて居た、偶然の機會に發見されたので
す。最初も誰もMの言葉を信用しなかつたので
すが、その後、物好きな連中が二三人で、代る
代る試して見てから、たしかに怪しい、あの寫
眞は「け物だ」と云ふ騒ぎになりました。怪し
い事は其ればかりでなく、Mと云ふ技師は、あ
の寫眞に奇やかされたのが原因で、だんだん氣
が變になり、程なく會社を罷めるやうになりま
した。M以外の、物好きに實驗した連中も、そ

れから毎晩、夢に驚されたり、譯のわからぬふ
らから病に取り憑かれたり、合點の行かない出
來事が引き續いて生じるのでした。現に社長
なども、實見した一人ですが、後で半月ばかり、
病名の明かでない熱病に罹つて、ひどい目に
會はされたのです。御承知の通り、社長はあ
あ云ふ御幣擔ぎの、神經質の人ですから、さう
なるともう一日も、あのフィルムを會社に置く
のが嫌になつたのでせう。病氣が治ると直ぐ
秘密會議を開いて、あのフィルムを至急に他の
會社へ賣却する事、あのフィルムに關係のある
あなたに對しても、雇ひ入れの契約を破棄す
る事と云ふ、二箇條の意見を提出しました。し
かし社長の此の意見には、大分反對の説があつ
て、あれ程の高價で買ひ入れた品物を、會社が
みすみす損をしてまで、むざむざと外の會社へ
賣却する必要はないと云ふ人や、フィルムは兎
に角、本人のあなたに對して、折角契約を結び、
既に多額の前金まで拂つて置きながら、破談を
申し込むには及ばないと云ふ人や、議論が頗る
紛糾して、結局、一つの妥協案が成り立つたの
です。つまり、あのフィルムに怪異が現はれる
のは、深夜、たつた一人で見て居る時に限るのだ
から、めつたに其れを發見する人はないであら

うし、公開の席で多數の觀覽に供するには、何
の差支へもない譯である。だから社長がどう
してもあれを社内置くのが嫌なら、當分の間、
餘所の會社へ貸す事にして、相當の値で買ひ手
の附くの待つ方がいい。それからあなたとの契
約は、解除する理由が全くない。勿論寫眞の怪
しい事件が、世間へばつと廣がるやうな事にな
ると、あなたの人氣にも、フィルムの價值にも
けちが付きますから、一同堅く秘密を守つて、
たとへ社内人間にも、成るべく彼の事件を知
らせないやうにする。—斯う云ふ案が成り立
ちました。ですから、役員や俳優の類觸れに
著しく動搖のあつた今日では、あの秘密を知
つて居る者が社内へ殆んど一人も居ないのも無
理はありません。最初、秘密會議に出席した
重役連の意向では、何處かの堂堂たる會社へ、
高い損料で貸し付けようとして云ふ考へだつたの
ですが、ちやうど其の頃は、會社同士の競争や
軋轢が激しかつたので、豫想通りには行きませ
んでした。そこで據るところなく、京都、大阪、
名古屋あたりの、小さな常設館へ貸してやりま
したが、新聞へ花らしい廣告を出すやうな立派
な興行主の手にかからない爲めに、あれだけの
寫眞が、遂に何處でも、一遍も評判にならずに

済んでしまひました。さうして此の頃、關西を
 一と廻り廻つて来て、東京の境末に現はれるや
 うになつたのです。……僕は其のフィルムの一
 深夜の怪異に就いては實験者の話を聞いて居
 るだけで、自分が目撃した覚えはありません。
 けれども、あれを會社が買ひ込んで、警察官
 や新聞記者を立ち合はせて、始めて試算をやつ
 た際に、本篇の映畫を詳細に見物して居る一人
 です。その時僕がをかしいと思つたのは、あの
 中の乞食の役を勤めて居る、日本人の俳優の事
 でした。あの劇に登場する主な男女優は、あ
 なたを始め僕には大概顔馴染の名前の知れて居
 る人達ですが、ただあの日本人だけが、一度も
 見覚えのない役者でした。僕は少くとも、あな
 たと同時に、グロオプ會社に勤めて居た日本人
 の役者は誰誰であるか、よく知つて居る積りで
 す。僕の調査に間違ひがないとすれば、女優で
 はあなた以外にEとOの二人、男優ではS、K、
 Oの三人だけしか居なかつた筈です。……ねえ、
 さうでせう? ……ところが、其の乞食になる日
 本人は、Sでも、Kでも、Oでもないんです。
 それとも此の三人の外に、誰かお心あたりがあ
 りますか知らん? 僕があなたに何つて見たい
 と思つて居たのは、その事でした。」

Hは斯う云つて、長い話の言葉を割つた。
 「あたしにしても、三人の外に別段心あたりは
 ないけれど、誰か、あたしの知らない役者を、
 焼き込みにしてあるやうな形跡はないでせう
 か。……あたしはきつとさうだと思ふわ。」
 「焼き込みと云ふ事も僕は考へて見ました。
 トリック寫眞の名人の、ジェファソンの話を聞
 いて居ましたから或はさうかとも思ひました
 が、いくらジェファソンにしたところで、焼き
 込みにしたには、どうもあんまりうま過ぎる箇
 所が、正に一箇所か二箇所はある筈です。若し
 もあれが全然焼き込みだとすれば、ジェファソ
 ンは、殆んど僕等の想像も及ばない、靈妙不可
 思議の魔法を心得て居るのだとしか思はれま
 せん。何にしてもいろいろの點に、疑はしい事
 が澤山ありますから、實は半年程前に、其れ等
 の疑問を一一纏めて、グロオプ會社へ問ひ
 合はせの手紙を出したのでした。するとやがて、
 會社から寄越した返辭と云ふのが、此れが又
 甚だ要領を得ないものでした。會社の云ふ
 には、自分の所では「人間の顔を持つた腫物」
 と云ふ標題の劇を、作つた事はない。けれども、
 其の劇の中に現はれて居るやうな場面をとこ
 どころに使つて、其れに多少似通つた筋の寫眞

劇を、作つた事はたしかにある。だから、何者か
 が、そのフィルムへ他のフィルムの斷片を交ぜ
 込んだり、或は一部分の修正や焼き込みを行
 つて、さう云ふ腫物を製造したのではないだら
 うか。まさか當會社に專屬中の俳優たちが、會
 社に内證で、さう云ふ寫眞を製作したとは信じ
 られない。彼等は毎日會社の撮影場に出動し
 て居て、そんな餘裕は絶対にないのである。そ
 れから、ミツス・ユリエが當會社に在勤中、彼女
 と同時に雇はれて居た日本人の男優は、仰せの
 如く、S、K、Oの三人だけである。しかし彼
 女の在勤以前に日本人が二三人雇はれて居た事
 もあるし、最近には新たに雇つたのが五六人居
 る。故に當會社に於ても彼女が顔を知らない
 日本人を、彼女のフィルムへ焼き込む事は、必
 ずしも有り得ない事ではなく、同時に随分ありさ
 らな事である。但し、當會社では可なり困難な、
 破天荒な焼き込みを行ひ得るけれども、其の焼
 き込みが如何なる程度まで、如何にして可能な
 りやは、會社の秘密に屬すること、残念なが
 ら明瞭なお答へを致し兼ねる。猶、お問ひ合は
 せのフィルムが果して腫物であるとすれば、當
 會社でも捨てるに置かれないし、参考の
 爲め、一應その品を檢査して見たいから、相當

の代價を以て是非當會社へ譲り渡して貰ひたい。……大體が先づ斯う云つたやうな意味で、結局、あの寫眞の正體は未だに分らずじまひなのです。やつぱりグロブ會社の返辭の中に書いてあるやうに、何者かがあれに似寄つた筋のフィルムを、外のいろいろのフィルムと繼ぎ合はせて、うまい工合に修正したり、焼き込んだりして一つの寫眞劇に拵へ上げたると云ふ推察が、一番申つて居るやうですが、さうだとすると、そんな仕事の出来る奴は、ジェフアソン以上の名人でなければ出来ませんな。しかしたとへジェフアソン以上の名人が居るにしても、あんな面倒な仕事を、單に金儲けの目的でやるものではないし、例の眞夜中の怪しい出来事と結び付けて考へると、あれには何か餘程の曰く因縁があるに違ひありません。……斯う云ふと變ですが、あなたは若しや、アメリカにいらした時分に、誰かに恨みを貰ふやうな事を、なすつた覚えがありはしませんかね。どうしてもあれば、あなたに惚れて居ながら、散散嫌はれたとか欺されたとか云ふやうな覚えのある人間に、關係のある事です。僕は必ずさうだと思ひます。さう云ふ男の怨念が、あれに取り憑いて居るのです。」

「まあ待つて下さい。私はそんな、怨念に取り憑かれるやうな、悪い事をした覚えはないけれど、その腫物になる人間の顔と云ふのは、全體どんな人相なのか知ら、何でも大さう醜男だと云ふ話ぢやないの。」

「さうです、恐ろしい醜男です。日本人だから南洋の土人だか分らないくらゐな、色の眞黒な、眼のぎろりとした、でぶでぶした圓顔の、全く腫物のやうな顔つきをした男です。年頃は三十前後、寫眞の中のアナタよりは十ぐらゐ老けて見えます。一掃見たら忘れられない顔ですか、あなたがその男を御存じなら、想ひ出せない」と云ふ譯はありません。いや、あなたばかりでなく、僕等にしても、あの男が何處の何者だか今まで知らずに居ると云ふのは、實に不思議千萬です。なぜかと云ふのに、笛吹きの乞食の役の、深刻を極めた演出と云ひ、腫物になつてからの陰鬱な、物凄しい表情と云ひ、先づあの男に匹敵する俳優は、『ブラアグの大学生』や『ゴオレム』の主人公を勤めて居る、ウエゲナアぐらゐなものでせう。あれ程特徴のある容貌と技藝とを持つた、唯一の日本人が、内地では勿論、アメリカの活動雜誌にも、寫眞は悪か名前さへ出た事がないのは、それがもう、既に一

つの怪異です。今日までのところ、あの男は此の世の中には住んで居ない人間で、ただフィルムの中に生きて居る幻に過ぎないのです。さう信ずるより外、仕方がないのです。殊に、あのフィルムの怪異を實驗した人達は、誰もあの男を、人間の寫眞であるとは思つて居ません。『あの男は化け物だ。あんな役者が居る筈はない。』と云ひます。『化け物でなければ、あんな怪しい變事が起る筈はない。』と云ひます。……

「だから變事と云ふのは、どんな事なんだか、其れをあたしは聞きたいんだわ。先から随分詳しく説明して貰つたけれど、肝腎の變事の話を未だ聞かないのだから。……」

「實はあなたが、神經をおやみになるといけな」と思つて、わざと差し控へて居たのですが、此處まで話が進んだら、もうしやべつてしまひませう。僕はその、後に氣違ひになつたと云ふM技師から、最も詳細な實驗談を聞きました。が、極く掻き摘まんでお話をすれば、つまりあの寫眞の怪異は、その幻の男の顔にあるんです。一體、M技師の長い間の經驗に依ると、活動寫眞の映畫と云ふものは、淺草公園の常設館などで、音楽や辯士の説明を聴きながら、賑やかな觀覽席で見物してこそ、陽氣な、浮き

立つやうな感じもするが、あれを夜更けに、たつた一人で、かたりとも音のしない、暗い室内に映して見て居ると、何となく、妖怪じみた、妙に薄気味悪い、心持ちになるのださうです。

それが静かな、淋しい寫真なら無論のこと、たとへば花らしい宴會とか格闘とかの光景であつても、多数の人間の影が賑やかに動いて居るだけに、どうしても死物のやうには思はず、却つて見物し、居る自分の方が、何だか消えてなくなりさうな心地がする。中でも一番無氣味なのは、大映しの人間の顔が、にやにや笑つたりする光景で、——さう云ふ場面が現はれると、思はずぞつとして、齒車を廻して居る手を、急に休めてしまふと云ひます。そんな場合には、怒る顔よりも笑ふ顔の方が餘計に恐い、M技師はよく云つて居ました。『それに自分は技師だから何でもないが、もし、或る俳優が、自分の影の現はれるフィルムを、たつた一人で動かして見たら、どんなに變な氣持ちがするだらう。定めし、映畫に出て来る自分の方がほんたうに生きて居る自分で、暗闇に一人で見物して居る自分は、反對に影であるやうな氣がするに違ひない。』と云つて居ました。普通の寫真でさへさうですから、『人間の顔を持つた腫物のフィルム

を、此の日暮里の事務所、ガランとした映寫室で、真夜中頃に一人で見て居る時の心持ちは、大凡そ僕等にも想像する事が出来るでせう。何でももう、第一巻の、笛吹きの乞食の姿が現はれる刹那から、胸を刺されるやうな、總身に水を浴びるやうな氣分を覺えて、或る尋常でない想像が襲つて来るさうです。あの寫真は随分疵だらけで處處ばやけてゐながら、それが少しも邪魔にならずに、寧ろ陰鬱な効果を助けて居るのだから妙ぢやありませんか。それでもまあ第一巻から二巻、三巻、四巻までは、どうにか辛抱して見て居られるさうですが、第五巻の大詰、葛浦太夫の侯爵夫人が發狂して自殺する

とき、次ぎに現はれる場面を、ちつと靜かに注

意を凝らして視詰めて居ると、大概の者は恐怖の餘り、一時氣を失つたやうになるのです。その場面はあなたの右の脚の半分を、膝から爪の先まで大映しにしたもので、例の膝頭に啖き出て居る腫物が、最も深刻な表情を見せて、さもさも妄念を晴らしたやうに、唇を歪めながら一種獨得な、泣くやうな笑ひ方をする。——その笑ひ聲が、突如として極めて微かに、しかながら極めてたしかに、疑ふべくもなく聞えて来る。M技師の考へでは、それは外部に餘

計な雜音があつたり、注意が少しでも散つて居たりすると、聞えないくらゐの聲であるから、聞き取るには可なり耳を澄まして居る必要がある。事に依ると其の笑ひ聲は、寫真が公衆の前で映寫される場合にも、聞えて居るのかも知れないが、恐らく誰にも氣が付かずに済んでしまふのだらう。と、云ふことでした。——どうです、あなたにしても、此の話をお聞きになつたら、あまり好い氣持ちはなさらないでせう。實は、お話し申すのを忘れて居ましたけれど、そのフィルムは今後いよいよ、グロリア會社へ譲り渡す事になつて、二三日前に、集鴨の大正館と云ふ常設館から引き取つて、目下、此の事務所の其の棚の上に載せてあるのです。社内で映寫する事は、社長から嚴禁されて居ますが、フィルムのままでも御覧になるなら一向差支へはありません。いかがです、僕が立ち合ひの上で、ちよいとお見せ申しませうかね。兎に角、その乞食の顔を御覧になるだけでも、何か此の謎を解く端緒を得られるかも知れません。……」

日は、百合枝が、好奇心に充ちた瞳を輝やかにして、額くの待つて、傍の棚上に積んである、ブリキ製の圓い五つの罐の内から、第一巻と第五巻とを収めた罐を引き取り出した。さう

して、デスクの上で蓋を除いて、鋼鐵のやうに
きらきらしたファイルの帯を、長く長く伸ばし
ながら、明るい窓の方へ向つて、それを百合枝
に透かして見せた。

「ほら、御覧なさい。此れがを食の男です。

……」

かう云つて、亘は更に第五卷の方の、彼女の
膝へ焼き込んである腫物の額を示して、

「……ね、此の通り、此處で腫物になつて居ま
す。此れがたしかに焼き込みだと云ふことは、
僕にも分ります。此の男にはあなた覺があり
ませんかね。」

「いいえ、私はこんな男に覺えはない。」

と、彼女は云つた。其れが彼女が、過去の記憶
を辿つて見る必要のないほど明らかに、未知の
一人の日本人の男子の顔であつた。

「だけど亘さん、此れは焼き込みに違ひないの
だから、やつぱり何處かに、かう云ふ男が居る
ことは居るのね。まさか幽霊ぢやないでせう。」

「ところが一つ、どうしても焼き込みでは駄目
な處があるのです。そら、此處を御覧なさい。

此れが第五卷の眞ん中ごろです。女主人公が
腫物に反抗して、その顔を殴らうとすると、顔
が彼女の手に噛み着いて、右の拇指の根本を、

齒と齒との間へ、挟んで放すまいとしてゐるの
です。あなたは盛んに、五本の指をもがいて苦
しがつて居ます。此れなんぞはどうしたつて、
焼き込みでは出来ませんよ。」

と云ひながら、亘はファイルを百合枝の手に渡
して、煙草に火をつけて、部屋の中を歩き廻り
つつ、獨り語のやうに附け加へた。

「……此のファイルが、グロオプ會社の所有に
なると、どう云ふ運命になりますか。僕は、
抜け目のないあの會社の事だから、きつと此れ
を何本も複製して、今度は堂堂と賣り出すだら
うと思ひます。きつとさうするに違ひありませ
ん。」

お 國 と 五 平 (一幕)

人物

お 國

五 平

時 徳川時代

所 野州那須野が原

ひろびろとした淋しい秋の那須野が原の夕暮である。上手より下手へ松並木の街道がつづいてゐる。一本の松の根方に旅装束の主従二人が休んで居る。主人と云ふのは西國の侍の後家お國、従者は仲間の五平である。

(五平) 奥方さま、いかがでござります、……もうそろそろお出かけになりましては？……

(お國) あい、まだくたびれが抜けぬわいの、(五平) したが、もう口の暮れに間もない様子、

——何にいたせ此の原中で夜になつては、路が難儀でござります故、次ぎの宿まで今一時辛抱なさりませ、おつらいこととござりませうが、

(お國) ほんに、女と云ふものは意氣地のない、——此のやうな足弱が道づれでは、そなたも定めし迷惑であらう、

(五平) 何の、そのやうな事がござりますものか、長い間おわづらひなされてから、けふでやうやう二日目の旅でござりますもの、お疲れ遊ばすのは當り前、——かうと知つたら、もう二三日宇都宮へ逗留いたすのでござりました。

(お國) いえ、いえ、わたしの體が弱いからとて、さうゆるゆると目を過しては居られぬわいの、……宇都宮で病みついてから、もう二ヶ月にもなるぢやほどに、……

(五平) それもお道理ではござりますが、いかほど勝氣なお方様でも、御病氣には、勝てませぬ。それに今日は又朝から彼れ此れ六七

里もお歩きなされたでござりませう。
(お國) 歩いてても歩いてても、一向人里らしいものも見えぬが、……此處は名にし負ふ那須野が原とやら、——まあ何と云ふ淋しい所であらうぞいの、

(五平) 此の原の先はやがて奥州ぢやと聞いて居ります、——此の原の道を何處までも、もう二三日お歩きなされたら、白河の關へ參るのでござります。

(お國) ああ、白河の關と云へば、子供の頃からよう話には聞いてゐるが、……私が七つ八つの時分、よう祖母様が話しては下されたが、……

(五平) その白河の關へ着くのでござります、その關を越えてずつと奥州の果てまでも、……次第に依つたら參らねばならぬかも知れませぬ。

(お國) わたしの祖母さまは和歌がお好きでいつもいつとも和歌の話をして下された、——歌に名高い白河の關と云うたら、廣島からは何百里の向うにある、——大坂を越えて、京を越えて、東海道果てにある江戸を越えて、まだその先を百里ほども行かねばならぬ。そしてその關の向うにも、むかし夷の住んで居

た奥州と云ふひろいひろい國があるのぢやと仰つしやつて、——

(五平) 事に依つたら、そのひろいひろい國の中をのこらず歩かねばなりません。

(お國) —— 國を出てから、もう三年、今年の秋も暮れて行くのに、いまだに敵のありかが知れぬとは、ほんに何んとした事であらう。

(五平) 今頃お國では、定めし皆様が待ちこがれておいでになります。お坊ちゃんも今年はたしかお六つにおなりなされた筈、まあどんなにかお可愛いことござりませうに……

(お國) あ、これ、子供の事は聞かして賜るな、それを云はれると、飛立つやうに國へ歸りたうなるわいの、

(五平) はて、又してもうつかり致して居りました、お免し遊ばして下さりませ、—— したが、それを思へば一日も早う本望を遂げたいものでござります。

(お國) …… なる五平、わたしはどのやうに苦勞をせうと、旦那様のお爲めゆゑ厭ひはせぬが、そなたは嘸かし…… ほんにそなたには氣の毒でならぬぞえ、

(五平) 奥方さま、どうぞその言葉はお置き下さりませ、何ぞと云ふと氣の毒ぢやと仰

つしやりますのが、お恨みでござります。此の五平奴はあなた様の御家來でござりませうが、……

(お國) それはさうでもあらうけれど、親の代から召し使つたと云ふではなし、ほんの二三年奉公をしたばかりのそなた—— 旦那様のお出での時こそ、主とも思ひ思はれもすれ、今ではそなたを、家來のやうにも思ひませぬ。

(五平) 勿體ないことを仰つしやります、旦那様の御家來なら、かう云ふ時こそなほさら御奉公をいたさねばなりません。—— 二三年の間とは云へ、なみなみならぬ御恩を受けたのでござりますもの。——

(お國) 恩を忘れる者はかり多い世間、僅かな義理を重んじて、ようまあ盡してくれる事ぢや。旦那様も草葉の蔭から、そなたの忠義を喜んでおいでであらう。

(五平) 敵にめぐり遇ふまでは、五年は愚か十年でも二十年でも、きつとお供をいたします。相手は必ず奥州へ落ちのびたこと存じますが、若し奥州に居なければ又引き返して江戸へも上りませう、京大坂へも参りませう、四國へでも九州へでも、日本の國のあらん限りは、どのやうな邊土の果てまでも、い

つ迄でも御一緒にさ迷ひます。

(お國) ぢやがそのやうに運が悪うて、幾年も幾年も敵にめぐり遇はなんだら、…… かうして毎日山を越えたり野を渡つたりして居たら、二人とも知らぬ間に年を取つて、髪に白毛が生えるであらう。そなたとわたしとは…… 考へて見ればほんに不思議な縁ではないか。

(五平) さやうでござります、—— 世が世ならばあなた様は、私のやうな仲間風情がお側へも寄れぬお身の上、それがかう云ふ事になりましたのも、…… 憚りながら、何かの御縁でござります。

(お國) 敵を討ちに國を出た身が道中で長いわづらひをして、それでなうてもそなたに世話を焼かせるのに、思ひがけない看病までもして貰はうとは、ほんに何と云ふ腑がひのな

いことやら、……
(五平) 敵を討つのも御看病をいたしますのも、私に取つては同じ御奉公でござります。しかしまあ、あれほどの御病氣がかうまで早う御本復になりましたのも、大方神佛のお加護でござりませう。もしひよつとしてお體のお悪いうちに、敵にでも遇ふやうなことがあつたら、—— 相手は車怯な池田さま故、どん

な事にならうとも知れぬと、私はただそればかりをお案じ申して居りました。

その少し前から、遠くの方に微かな尺八の音が、きれぎれに聞えて来る。お國は一心に耳を澄ます。

(お國) これ、…五平や、そなた、あの尺八の音が聞えぬかいの？

(五平) 成る程、遠くの方でたしかに聞えて居ります。ではあの虚無僧が参つたさうな。

(お國) あの音色はあの虚無僧に紛れもない、…此の間ぢう宇都宮で私がわづらうて居た折に、いつもあの窓の下で吹いて居たのは、あれぢや、あの調べぢや。

(五平) あの虚無僧も私たちと同じやうに、急ぎの旅と云ふではなし、街から街を流して歩くの上でござりませうが、ああしていつも私たちの跡を追ふとは、ほんに不思議な男でござります。

(お國) あの虚無僧と私たちとは、中山道の熊谷から後になり先になりして、同じ日に宇都宮へ来たではないか。

(五平) さやうでござります。さうして宇都宮でちやうど二た月、あなた様が御病氣の間、

雨の日にも風の日にも、あの男の尺八の音が、窓の下に聞えぬことはござりませなんだ。

(お國) 若しひよつとして、あれが敵の友の丞ではあるまいかと、そんな気がしたのぢやけれど、…

(五平) それは私とても同じでござりました、したが、奥方さま、あなた様はあの虚無僧の顔を、御覧になつたでござりませうが、…

(お國) 此の間、窓の下へお金を投げてやつたとき、深網笠の端をかしげて私の顔を見上げたわいの。

(五平) 私もあの時たしかに見ましたが、池田様とは似ても似つかぬ男のやうでござりました。

(お國) それはさうぢやが、…此の後又も行き違ふやうな折があつたら、もう一度よくあの顔を見たいものぢや。

(五平) うろんな男ではござりますが、あれがよもや池田様ではござりませぬまい。現在敵と付け狙はれるほどの者が、まして御家中で

も評判の臆病なお人が私たちの傍近くへああ押し強う参れる譯はござりませぬ。(お國) さあ、そなたはさういひやるが、私に無禮な態度をしかけ、卑怯にも且那樣を闊討

ちにした男ゆゑ、…私のあとを附けて居ようも知れぬと思ふが、…

(五平) 命を捨ててかかる積りなら、さやうなこともござりませうが、—それもあなた様お一人なら知らぬこと、私がおつ申して居りますのに、命の惜しいあの方に何んぞそのやうな事が出来ますものか。あの虚無僧は決してさうではござりませぬ。池田さまはあの通り、劍術はお下手でも人品だけはお立派な、女のやうに色の白い優しいお方、あの虚無僧は色の黒い、頬骨の出た、武骨な人柄でござりました。

(お國) ぢやが、友之丞はああ云ふ男、何處ぞにこつそりと隠れて居て、不意にどのやうな仇をせぬとは限らぬわいの。そなたも油断をせぬがよいぞえ。

(五平) 私の身は兎も角も、あなた様にお間違ひがあつてはならぬと、始終氣を附けて居ります故、決して決してお氣づかひには及びませぬ。相手はたかの知れた腕前、見つけ次第に必ず生かしては置ませぬが、いまだに運

う出遇はぬと悪云ふのは、—池田様も命冥加なお人でござります。

(お國) 且那樣がお亡くなり遊ばしてから、も

う來月は四年目の祥月命日がめぐつて来るのに、思へば思ふ程憎い奴は友之丞、——ああ、早う本懐を遂げたいものぢや。

(五平) そのうちには時節が廻つて参りませうほどに、さういらいらと遊ばさぬがようござります。……何にいたせ、もう大分暗くなつて参つたやうでござりますが、

(お國) 奥州に近いと聞いたせるか、ゆふべの風が身にしみる。……旅には馴れて来たやうでも、けふは何となら心細い。

(五平) 此のあたりは人の千一人通るではない、暗くなれば尙更さびしうござります。——

いかがでござりますか? おみ足の工合はまだお直りにはなりませんか?

(お國) あらかたたくたびれは抜けたやうぢやが、……(足の先を揉みながら) 此の、拇趾の豆がつぶれて、ここがずきずきと痛んでならぬわいの。

(五平) どれ、どこでござります。ちよとお見せなさりませ、——

お國の足もとへ寄り、草鞋の紐を解き、足袋を脱がせる。笛の音一旦途絶え、又次第に近づく。

(五平) おお、此れはまあ、さぞお痛みでござり

ませう。皮がむけて紅くなつて居ります。はて、何んぞよい工夫は、ちよつとお待ちなされませ、草鞋の紐が觸らぬやうに、此れへ紙をおあてなされたがようござります。——

懐紙を出して細く引き裂き、それを傷口へ巻いてやる。

(五平) さ、いかがでござります、これでいくらがお樂になるでござりませう。

(お國) おお、大さう樂になつたわいの。——久しう草鞋を穿かなんだので、直き此のやうに豆が出来るのぢや。

(五平) もう二三目たちましたら、又すぐお馴れになります。——さちよつとおみ足をお上げなさりませ。

云ひながら足袋を穿かせ、草鞋を結んでやつて居る。

(お國) 五平や、あの虚無僧はだんだん此處へやつて来るやうぢやが、……

(五平) (草鞋を結び終つて耳を傾ける)……町中を流して歩くなら兎も角も、人里を離れた原の中を、此の夕ぐれにああして笛を吹きながら歩いて居るとは、何にしても解せぬ男、……

(お國) そなた、今にここにやつて來たら、も

う一度よく顔を見てはくれぬかいの?

(五平) よろしうござります、幸ひ此處で待ち構へて、今一應念の爲めに、面體を調べて見ることにはいたしません。

(お國) ほんにさうしてくれたがよい、そなた、さつきも云うた事ぢやが、返す返すも氣を許してはならぬぞえ。

(五平) 奥方さまも、成るべく顔を見られぬやうになさりませ、私も此の笠を被つて、そしらぬ風で一服いたして居りませう。——(笠を被りながら上手を見る) あれもう其處へ参つたやうでござります。

笛の音一層近くなる。お國は手拭を頭にかき、五平は煙草に火をつけ、ちつとちつちつと控へてゐる。……

上手より虚無僧の姿が現れる。編笠を深く被り、尺八を吹きつつ二人の前を通り過ぎて下手へ行かうとする。

(五平) もし虚無僧どの、——虚無僧どの、二度目に呼ばれた時、虚無僧は吹くの止めて黙然として歩みを止める、が矢張り尺八を口へあてたまま振り向きもせず立つて居る。

(五平) 虚無僧どの、——憚りながら、少少物

をお聞き申したいのぢやが、
虚無僧静かに尺八を口から離し、二人の方
を振り返る。

(五平) おぬしはあの、先だつて中山道の熊谷
から、拙者どもの後になり先になり、宇都宮
まで一緒に参られたお方ぢやと存するが、さ
やうではござるまいかの？

(虚無僧) (曖昧な、小さな聲で) いかにも、御
一落でござつたなう。

(五平) さてはやはりさうでござつたか、
いや、別段用事と云ふではなけれどかうして
度び度び落ち合ふのが、不思議な御縁ぢやと
存じたので、失禮ながらお呼び止め申したの
ぢや。しておぬしは、此れから何地へお越し
になる？

(虚無僧) いづこと云うてあてはござらぬ、
——

(五平) ぢやが、この街道へ來られるからは、い
づれ奥州へ参られるのでござらうかの？

(虚無僧) ……
(五平) もし左様なら、旅は道づれと申す事も
ござるゆゑ、次の宿まで一緒に参らうではご
ざらぬか？

(虚無僧) ……

(五平) 虚無僧どの、どうなされた？ ……返
辭の無いのはどう云ふ譯ぢや？
(虚無僧) おぬしは拙者に、用事は無いと云は
れたが、さやうに隠しなさらぬがよい。…

拙者の顔が見たいのでござらうが、…
(五平) ……(お國と共に呆然として虚無僧を
見上げる)

(虚無僧) 見たくば見せて進せよう、——
云ひながら極めて落着いて編笠を脱ぐ。色
の白い、さかやきの痕の青青とした美男子
である。

(五平) やや、
(お國) そなたは池田友之丞ぢや。——
(虚無僧) いかにも池田友之丞ぢや。——お國
どの久し振りでござつたなう、

(お國) ここでそなたに出遇ふとは、じき夫の
お引き合はせ。逃れぬところぢや、觀念し
や。

(五平) 旦那様の敵を討ちたさに、奥方さまの
お供をして、三年このかたお前様を尋ねて居
たのぢや。池田様、もう御運の盡きでござり
ます。男らしくお立ち合ひなされい。

(友之丞) まま、そのやうに駭かすともよい、
拙者は昔から人に知られた意氣地なし、劍

術は下手なり力は弱し、お身たちが討たう
と思へばいつでも討たれる。…ぢやが、お
國どのと云ひ五平と云ひ、伊織殿は頼もしい
妻や家來を持たれたものぢや、拙者のやうに
なまじ長らへて生き取を嗜さうより、伊織殿
はずつと仕合はせぢや。
此の臺辭の間に、友之丞は松の根方に腰
をおろす。お國と五平が左右よりそれを圍
むやうにする。

(五平) お立派なお胸前を持ちながら、お前様
の卑怯な手にかかつて無念な最期をお送けな
された御主人様が、仕合はせとは何事ぢや。
云はせて置けば途方もない事を、…
(お國) これ友之丞、生き取を嗜すのが辛い
ら、なぜあの時に潔よう、下手人は己れぢや
と名のつて出なかつたのぢや、かりにも御家
老の家に生れた身が、まあ浅ましい其のやう
な姿になつて、…

(友之丞) 浅ましいのは拙者とてもよう知つて
ゐる。ぢやが、拙者は命が惜しかつたのぢや。
(五平) 池田様、お前さまも今こそ落ちぶれて
おいでなさるが、昔は武士の端くれではない
か、命が惜しいとはよう云はれた。…

(友之丞) さ、さ、その臆病を笑つてくりや

…

れ、いかほど人に笑はれても、拙者は命が惜しいのぢや。

(お國) そのやうに命の惜しいそなたが、何で私どもの居る前へ出て來やつた? それともそなた、とても逃れぬ所ぢやと覺悟をきめておひやるのか?

(友之丞) いやいや、覺悟が出來た譯ではない、——拙者はただ一と目そなたの顔が見たうて參つたのぢや、

(お國) 何? 何とお云やる?

(友之丞) (淋しき微笑) あはははは、お國どの、何もそのやうにきつとならずともよいではないか。實を申せば拙者はそなたと五平とが、廣島を發足したその日から、今日まで足かけ四年の間、明け暮れ影のやうに附き添うて、そなたの跡を慕うて來たのぢや。いかに臆病な男ぢやと云うて、懇には命の危さを忘れることもあるのぢやほどに、……

(五平) 四年の間跡をつけたと? ——そのやうな事がある譯はない、お前様とは先だつて熊谷の宿で落ち合つたのぢや。

(友之丞) 其方がさう思ふのも尤もぢやが、拙者は決して偽りは申さぬ。お身たちが廣島を發足したのは、——忘れもしない一昨昨

年の師走の十日。あれからお身たちは中國筋を大坂へ出て京へ廻り、一昨年の暮れに東海道を江戸へ下つたのでござらうがな、なうお國どの、……虚無僧の姿に變へたはつい此の頃ぢやが、拙者はもう四年越し、そなたの跡を追うて居たのぢや。

(お國) さうしてそなた、私の跡を追うて來てどうおしやる心なのぢや。

(友之丞) どうする心か、それは拙者にも分りはせぬ。知つての通り拙者はそなたに戀慕をして、懇敵の伊織を闇討ちにした。それをお身たちに云はせたら、定めし卑怯ぢやと云ふのであらうが、……

(五平) 卑怯でなくて何としようぞ! ……(友之丞) まま、その言ひ譯は後で申さう、

あの晩拙者は伊織殿を斬つて捨て、闇に紛れて、一日廣島を落ち延びはしたものの、考へて見れば此の先どうなるやら知れぬ身の上、いづこと云ふあてもなくさすらひの旅に出るにもせよ、せめては一と目お國どのの顔を見てからにしたいと思つて、……お國どの、きつと拙者を追ひかけて仇討に出るであらう、拙者を見つけ出すまでは日本國中の津津浦浦を經めぐるのであらう、その時

を待つてこつそり跡へついて行つたら、望みがかなふ折もあらうかと、實はあの明くる日面體を變へて再び御城下へ忍び込み、そなたたちが旗立つ日まで隠れて居たのぢや。

(お國) 夫を殺してその上に又、そのやうな事をしようとは、——聞けば聞くほど面の憎い、

(友之丞) ぢやがそれほどに憎まれても、そなたの事を思ひ切れぬ友之丞を、不憫とは思つて下さらぬか。先だつて宇津宮で、そなたが長のわづらひをして寝て居た折に、雨の日に風の日にも、そなたの部屋の窓の下で尺八を吹いたは、誰あらう此の友之丞ぢや。そなたを思ふ心づくしを、蔭ながら聞いて貰ひたかつたのぢや。

(五平) しかしあの虚無僧は、お前様ではなかつたやうぢやが、……

(友之丞) 拙者は顔に墨を塗つて、お身たちの眼を欺いたのぢや、なうお國どの、そなたも覺えて居るであらう、つい此の間、そなたは窓から首を出して拙者に錢をなげてくれた、あの時始めて、國を出てから四年ぶり、拙者はそなたの顔を見たのぢや、日頃の望みがあるの時やうらかなうたのぢや。

(五平) 聞けば聞くほどお前様は執念きお人ぢや。——したがその望みがかなうたからは、

此の世に思ひ残すこともござるまいが、……いかがでござりますか？ 池田様、さ、さ、男らしう勝負をなされい。

(友之丞) いやいや、拙者は勝負をする氣はない。其方は國に居る時分から、仲間とは云へ武道にすぐれた男ぢやと云うて、人にも褒められ自らも許して居たやうぢやが、拙者には

そのやうな者と太刀打をする腕はないのぢや。拙者は先刻も云うた通り意氣地のない、一武士の風上にも置けぬ男一ぢや。見す見す負けると極まつて居るものを、勝負をしたとて無益であらうが、……

(五平) お前様は此の期に及んでも、まだ命が惜しいのでござるかな？

(お國) 一寸逃れに逃れようとおしやるのか？ (友之丞) 逃げられるものならば、一寸でも二寸でも逃れたい。卑怯とも臆病とも笑はば笑

へ拙者は偽りのない事を申すのぢや。……今更こんな事を云うたとして愚痴かも知れぬが、……そなたの夫の伊織殿と云ひ又ここに居る五平と云ひ、侍の道をよく辨へた劍道にすぐれた人は仕合はせぢや。拙者はつくづく

二人の者が羨しうてならぬわい、……

(お國) そなた、人を羨むほどなら、なぜ自らも男らしうしないのぢや。

(友之丞) 男らしうしたいのぢやけれど、生れつき此のやうな、女らしい氣だてを持って来たものを、自分の力でどうする事が出来ようぞい。拙者とても侍の家に生れたからは、そなたの夫に劣らぬやうな立派な武士になりたうござつた。劍道にも秀で、膽力も備はつた、一人前のもののふぢやと云はれたうござつた。さうすればお國どのからも、——あ

あまで嫉はれはせなんだであらうに、……今頃はいいらしいそなたを妻に持つて、一生榮しく日を送ることが出来たであらうに、……それも此れも、みんな拙者の生れつきが悪いからぢや、つまり拙者が不運だからぢや。

(お國) 不運と云ふのは亡き夫の伊織殿のことぢや。そなたは國におゐる時分御家老の家柄を笠に着て勝手氣儘なるふるまひをしやつたばかりか、夫のある身に戀慕をしかけて、私に恥を掻かせたではないか。今になつてそのやうな事を云うたとして、誰がそれを真に受けよう。そなたが人に嫉はれるのはそなたの身から出た錯ぢや。

(友之丞) いかにも拙者は人に嫉はれた。——侍の身にあるまじき不所存者、——怠け者で、うそつきで、女のやうに柔弱で、物の役にも立たぬからと云うて、そなたばかりか多くの人に羨まれた。ぢやが拙者から云はせれば拙者の氣だての悪いのは自分の知つたことではない。拙者は始めから斯う云ふ人間に生れて来たのぢや、そなたの器量美しいやうに、拙者の心は生れながら醜いのぢや、なうさうではないか、それなのに拙者を攻めたとして無理ではないか。

(お國) そなた、それほど自分の醜さを知つて居ながら、なぜ人の戀を羨んだのぢや。

(友之丞) おお、羨まないで何としようぞ。——伊織どのも人間なら拙者として人間であらうに。その上そなたと拙者とは約束までした仲ではないか。それが行く末の見込みがないからとて、そなたにも疎まれ、そなたの父御にも斷わられた。いやそればかりか、世間の人もそなたたちはよう斷わつた、あのやくざ者の友之丞をよう見捨てた、伊織どのに見かへたと、手をたたいて嘸し合つた。唯一人とて拙者を氣の毒と云うてくれる者はなかつた。

(お國) そなた、それほど自分の醜さを知つて居ながら、なぜ人の戀を羨んだのぢや。

(友之丞) おお、羨まないで何としようぞ。——伊織どのも人間なら拙者として人間であらうに。その上そなたと拙者とは約束までした仲ではないか。それが行く末の見込みがないからとて、そなたにも疎まれ、そなたの父御にも斷わられた。いやそればかりか、世間の人もそなたたちはよう斷わつた、あのやくざ者の友之丞をよう見捨てた、伊織どのに見かへたと、手をたたいて嘸し合つた。唯一人とて拙者を氣の毒と云うてくれる者はなかつた。

(お國) そなた、それほど自分の醜さを知つて居ながら、なぜ人の戀を羨んだのぢや。

それが拙者には……拙者のやうな女らしい者には、云ひやうのない淋しい思ひをさせたのぢや。……拙者が伊織どのを斬つたのは、その淋しさに堪へかねたからぢや。

(五平) ではお前様は、御主人様さへ居らせられなんだから、思ひが届くても考へておいでなされたのか？

(友之丞) いいや、お國どのが拙者を捨てたは、伊織どのが居たからではない、拙者が悪い人間だからぢや。それは拙者ともよう知つて居る。したが拙者は、伊織どのが憎かつたのぢや。伊織どのを褒めそやす世間と云ふものが憎かつたのぢや。伊織どののは誰が見ても立派な侍、拙者は不運な生れの男、それぢやのに人は拙者を憫れまうと思はないで、みな伊織どのの味方する。懇の恨みもあるにはあるが、拙者は世の中と云ふものに桶をつく氣で、伊織どのを殺してやつたのぢや。聞討ちにしては卑怯ぢやと云ふが、女らしい男が立派な侍を殺すのに、外にどう云ふ手だてがあらう。拙者のやうな弱い人間は、卑怯になるより外はないのぢや。

(五平) そのやうな練り言をいつまで聞いたとて埒は明かぬ。あまり時刻の移らぬうちに、

——さ、さ、池田様、逃れぬ所とおあきらめなされてお覺悟なされませい。友之丞さまは、思ひの外にあつばれな勝負をなされて、見事な御最期を遂げられたと、國への語り草になるやうに、立派にお立合なされませ。武士の情に云うて進ぜるのでござりますが、——

(お國) なる友之丞、そなたがどのやうに悪い人でも、それほどまでに私を慕うてくれたものを、決して憎いとばかり思はぬ。回向は私がして上げるほどに、どうぞ聞き分けて覺悟をして賜れ。これ、友之丞どの、私の頼みぢや。

(友之丞) そなたにそのやうに云はれると、拙者はうれしうて悲しうて……涙がこぼれる。そなたから優しい言葉かけられるのも、思へばもう此れで七年振ぢや。生きて居てもかひのない身ぢやほどに、殺すと云ふなら殺されもしようけれど、かうして互ひに膝を交へて、此の原の中にいつまでも暮らして行くことは出来ないものか、ああ、拙者は五平が羨ましい、五平のやうにそなたの供をして五年でも十年でも、遠い國國をさまよふことが出来るのであつたら、……なう五平、そちも武士の情を知るなら、少しは察してくれたが

よい。
(五平) その情を知ればこそ、先程からお前様の覺悟を促してゐるのぢや。

(友之丞) そちは格別、伊織殿から恩を受けたと云ふのではないに、ほんの二三年奉公をした身でありながら、はるばる奥方に付き添うて主人の仇を討ちに出た、——成る程聞けばあつばれな忠義者、定めし後の世の鑑と云はれよう。ぢやが拙者として若しも武道に達して居たら、そちの眞向は喜んでして見せう。まして、連れの女は美しいお國どの、幾日旅をつづけたとて悪うはなし、たまたま敵に出遇つたところで、相手は自ら臆病者と名がつて居る腰拔侍、斬つて捨てるのは容易い事ぢや。なう五平、さうではないか、そして首尾よう歸を報いて國へ歸れば、そちはお上の御感に會うて、侍分に取り立てられる、あはよくば伊織殿の家名を繼いで、晴れてお國どのと夫婦にもなれる。忠義と云ふはさうしたもののぢや。智慧と覺のある者なら誰しも忠義はする筈ぢや。

(五平) 聞き捨てにならぬその一言、——お前さまは私に、何かそのやうな腹があつて、奥方さまのお供に出たと云はつしやるのか？

(友之丞) そのやうな腹があつたとは申さぬ、

そちが仇討ちの助太刀をせうと思ひ立つたは、お主の恩に報いる爲めだ。拙者はそれを疑うては居らぬ、ただその忠義は、はたで見ると辛いものではないと云ふのぢや。拙者のやうにいとしい人からは敵と狙はれ、世の中からは爪弾きをされ、何處と云ふあてもなくさまよふ者の眼から見れば、楽しさうに思はれると云ふのぢや。

(五平) お前様は多くの人に浮き目を見せながらも、ようそのやうな事が云はれる。お前様のやうな根性のひねくれたお人に、われわれの苦勞が分る筈はない。……

(友之丞) したが五平、成る程苦勞もしたであらうが、そちにはそれを慰める術もあつたではないか。……宇都宮でお國どのが煩うた折、そちは心のありたけを盡してまめめしう看護をした。痒い所へ手の届くやうに、かひがひしく世話を焼いた。――

(五平) はて、それがどうしたと云はれるのぢや。……
(友之丞) あの時お身たち二人は、はたの見る眼も羨ましい、仲の好い主従ぢやと拙者は羨ながらさう思つた。……

(お國) これ友之丞、そなた何を云やるのぢや、又しても私に恥を掻かせる氣か？

(友之丞) ……夫の仇討ちに出たそなたが、道中でわづらふと云ふは重ね重ね不運ぢやが、あの二た月の間と云ふもの、窓の下で尺八を吹きながら、拙者はいつもさう思つた、――不運とは云ふが今頃はさぞ心のうちで、お身たち二人はその不運を喜んで居よう。ひよつとしたら仇討ちの事も忘れて居よう。病が直ればいつまでさうしては居られまいが、どうせ世の中は假の宿りぢや、暫しにもせよ楽しい時がありさへすれば仕合はせであらうが、……なうお身たち、それに違ひないではないか。拙者は何もお身たちに恥を掻かせようと思ふのではない、羨ましいと思ふばかりぢや、

お國青ざめた顔色で五平と眼を見合はせる。
(五平) これ、何を證據にそのやうなことを、
(友之丞) お身たちは今、拙者を殺さうと云ふのではないか。死んで行く者に隠し立てをしたとて何になるのぢや。四年の間戀ひしい人の跡をつけて居た拙者が、どうしてそれほど事を知らずに居よう。――成る程國を出た

時はあつばれな主従であつたらうが、お身たち二人がいつからともなく馴れ染めたのは、よう知つて居る。拙者はあの熊谷の越前屋で、お身たちの隣の部屋に泊つて居たのぢや。

(お國) ええつ、ではあの晩そなたは、――
(友之丞) おお、隣の部屋で語聲は残らず聞いた、――ぢやがお國どの、何も察するには及ばぬ、拙者が此處で殺されてしまへば、それを知つて居る者は廣い世の中にお身たち二人。敵を討つて國へ歸れば、きつと首尾よく晴れて夫婦になれるであらう。馬鹿を見るのは此の友之丞ただ一人ぢや。

(五平) ……それを知つて居られては、今更お前様にも面目ない、何も始めからさう云ふ腹があつたといふ譯ではない、ふとした事から不義とは知りつつ奥方さまと、……割りない仲になつてしまつた。……池田様、どうぞ赦して下され、……
(友之丞) はて、拙者は赦すも赦さぬもない、ただそれにつけても恨めしいのは世の中ぢや。――拙者は人妻に思ひを寄せて身を誤まつたに、そちは同じ事をしてそれが忠義ぢやと人に云はれる。そちには不義をしながらも世を渡つて行く道があるが、拙者にはその道

がない。そののやうに、侍の道を辨へて、口頃の心がけが正しい者は善人ぢや、拙者のやうに根性のひねくれた、意氣地のない者は悪人ぢやと、世間の人は一概に云ふ。考へて見れば悪人と云ふ者は、つくづく損な役廻りぢや。いかにも拙者は悪人ならばこそ人を殺した。ぢやがその報いは受けて居るのに、それは拙者を殺さうとするばかりか、それを立身の緒にする。

(五平) 池田様、赦して下さい、私が悪うござりました。私ぢやとてお前さまと同じ悪人ぢや。

(友之丞) そんなら其方は、拙者の命は赦してくれるか。

(五平) さあ、それは……

(友之丞) そちもお國どのも、拙者に向ける刃はない筈ぢや。そちこそ主人の奥方と不義をした。めぐり合はせがよかつたら、拙者がお國どのを我が物にして、そちを伊織殿の敵と呼んで見せるのぢやが、……

(お國) なる友之丞、……さうお云やるのも尤もぢやが、……そなた、それほど私を思うて居るなら、どうぞ私の爲ぢや程に死んでくられ。

(友之丞) いいや嫌ぢや、……世に捨てられて有るにかひない目を送つては居るものの、淺ましき事にはそれでも矢張り命は惜しい。無理に殺すなら殺されしようが、拙者はどうしても死ぬのは嫌ぢや。

(お國) したがそなた、そのやうにして生きて居たとて何になると思つてぢや、私とそなたが夫婦の約束をしたと云ふのは、あれは遠い昔のこと。今では私は、そなたには愛想が盡きた。そなたが五平を殺したからとて私の體は思ひのままになりはせぬぞえ。五平も死ぬなら私も一緒ぢや。

(友之丞) (淋しき微笑) あはははは、拙者が何でお身たちを殺さう、殺したうても拙者にはその腕がないのぢや、なうさうではないか、……

(お國) そんならそなた、思ひ切りよう死んでくれぬか。どうぞ私を助けると思つて、……

(五平) 池田様、濟まぬ事ぢやが了見して下さい、お前様の身になつたら、われわれ二人がさぞ憎うござらうが、……

(友之丞) はて、何もお身たちは拙者を殺さずともよいではないか。懸路の邪魔をしようとは云はぬのに、……

(お國) でも、敵を討たねば國へは歸れぬ、……私たちは明れて夫婦になりたいのぢや。

(友之丞) お國どの、拙者を少しでも不憫と思つたらよう考へて見てはくれぬか。お五平に討つた討たうのとむづかしい事を云ふのは止めて今迄の事はきれいに忘れてしまはうではないか。拙者は虚無僧になり果てて、一管の笛の便りに何處へなと流れて行かう。お身たちももう國へは歸らずに、一生旅をつづけるなり、知らぬ土地に落ち着いて家を持つなり、どうなりとして夫婦らしく浮世をよそに暮すがよい。拙者は武士の道は知らぬが、さうしてこそお互ひに情を知ると云ふものぢや。

(お國) いやぢや、私は國へ歸りたいのぢや、國へ歸つて五平を立派な侍にしてやりたいのぢや、……おお、そればかりか國には可愛い子供もある、……

(友之丞) そなたにさうまで云はれても、拙者はどうしても死にたうない、死ぬのはいやぢや、……此の友之丞がたつた一つの頼みぢや、……

……

……

……

短刀の柄に手をかける。

(五平) 氣の毒ながら是非に及ばぬ、……池田様、覺悟めされい!

五平斬つてかかる。友之丞、尺八で身を庇ひながら飛びのいて、悲しい聲でののしりつづける。

(友之丞) ええ、お身たちは卑怯ぢや、……卑怯ぢや、……不義者ぢや、不義の主従ぢや、……(肩先を斬られて倒れる) おお、おのれ

よう拙者を殺せた、……これ五平、おのれに一言いうて置くが、そこに居るその女は、お國どのはな、……

(五平) 何? 何と云ふ? ——
(友之丞) お國どのは、……この友之丞に……一度は身を任せたことがあるのぢや、……

(五平) うん、さては、日頃の推量に違はず、

チロリとお國の顔色をうかがふ、お國面目なげにうなだれる。

(友之丞) お國どの、……いまはの願ひぢや、……そなたの手で止めを刺してくりやれ、

(五平) いいやならぬ、止めは拙者が刺してくりよう、お主の敵、戀の敵ぢや、——
五平止めを刺す。その間お國は路ばたに

倒れて泣きながら、袂で顔を隠して居る。長き間。次第に暗くなる。

(五平) 奥方さま、——そのやうにお泣きなさらぬがよい。出来たことは是非がござりませぬ。

(お國) 友之丞と私のことを、そなた根に持つて居やるのであらうが、……
(五平) お前さまも私も、此れで本望を遂げたのでござります。池田様さへ死んでしまつたら、私どもは廣い世の中に誰に憐れなものもない調、もうお互ひに過ぎ去つた事は申しませぬ。

(お國) そんなら五平、私を末長う可愛がつてくれるかいの、
(五平) 可愛がらいて何といたしませう、勿體ないがお前様は私の妻ぢや。

(お國) さうきまつたら一日も早う、敵の首を土産にして、國へ歸りたうなつたわいの。

(五平) さぞ苦さまが待ちこがれておいでなさりませうが、——御隠居様やお坊ちやまの喜ぶお顔を、私も見たうござります。

(お國) おお、いつの間にやら、もうすつかり日が暮れた、さ、さ、——早う首を擧げたがよいぞえ。

五平、匕首を抜いてお國と共に屍骸に近づく。

(五平) 池田様、いかにも我れ我れは卑怯でござつた、酷うござつた、とは云ふもの、お家の爲め、戀の爲めには斯うするより外はなつかたのぢや。お前様の不運とあきらめて下されい、——

(お國) 身勝手な奴ぢやと思ふであらうが、……友之丞どの、赦して賜はれ。

(五平) 南無阿彌陀佛、
(お國) 南無阿彌陀佛、……

兩人口の中でかすかに稱名を唱へながら、靜かに跪いて合掌する。

——幕——

或る少年の怯れ

少年の名は田島芳雄と云つた。芳雄は自分の両親がどんな人であり、どんな顔をして居たかはまるきり知らない。彼の両親は彼が生れて四つになるまでの間に死んでしまつたのである。彼は物心が附いてからは兄の幹藏の家で育てられた。幹藏は彼が五つ歳の時に二十四だつた。幹藏の下に二十になる祿次郎と云ふ弟と十六になる柳子と云ふ妹とがあつた。さうして柳子と末子の芳雄とは歳が十一も違つて居たのに、其の間には兄弟が一人もなかつた。いや、實は一人か二人あつたのださうだけれど、生れると直ぐに死んでしまつたのだと云ふ事を、芳雄はずつと大きくなつてから知つた。

だから芳雄は四人の兄弟の一人ではあつたやうなもの、自分だけがひどく幼い爲めに何となく除け者にされて居るやうで寂しかった。芳雄はよく、「芳雄さんは一番可愛さうですね。」と云ふことを親類の人たちから云はれた。それは彼が二た親を知らないといふことが哀れみの

原だつたのである。しかし芳雄は二た親の顔を知つて居たところで、自分が今の兄弟たちに對する心持ちと格別變りはないだらうと云ふ氣がした。外の三人の兄や姉たちは友達のやうに對等に話合つて遊んで居ながら、彼だけは子供だからと云つて相手にされない。それは何も虐待されると云ふのではなかつたけれども、殊に姉の柳子などは彼を自分の子のやうにしてはくれたけれども、其の「子のやうにされる」のが何だか彼には不服だつたので、「子のやうに」されないでも「兄弟のやうに」されて欲しいのだつた。そんな事を芳雄が折折感ずるやうになつたのは彼が七つになつた歳の頃からである。三人の兄や姉のうちではもちろん總領の兄がいくらか威張つて居るらしい様子だつたが、さうして芳雄に取つても其の兄が一番恐いには違ひなかつたが、それでも其の兄は外の兄弟に對しては、芳雄を叱る時のやうには叱る事は出来なかつた。その癖外の兄や姉たちも、總領の兄と一緒になつて芳雄を叱る権利は持つて居た。

彼等は芳雄に對する時だけ、いやに兄貴ぶつたり姉ぶつたりして居るやうに思はれた。總領の兄が、外の二人と違つて居るところは、三人の兄弟の名前を呼ぶのに「祿次郎」とか「柳子」とか「芳雄」とか云ふ風に一様に呼び捨てにする事だつた。さうして彼は三人の誰からも「兄さん」と呼ばれて居た。それから祿次郎と柳子とは互ひに「祿ちゃん」「だの」「柳ちゃん」「だのと云ひ合つて居た。ただ芳雄だけが二番目の兄や姉に對してまでも「祿次郎さん」「だの」「姉さん」だのと呼ばなければならなかつたのである。

芳雄が七つの歳の夏に、總領の兄は大學を卒業して醫學士になつた。今迄は毎朝角帽に金ボタンの制服を着て出て行つたのが、間もなく紳士の着るやうな洋服を着て、毎日午前八時ごろから夕方五時ぐらゐまで、大學病院の方へ通ふやうになつた。その時分親類の叔父だの母母だのが内へやつて来て、「幹藏さんもうとう立派な學士になつたんだから、こんなめでたい事はありません。お父様やお母様も草葉の蔭でさぞ喜んでおいでなさるだらう。」と云つて、口口に甥の出世を喜んだことを芳雄はうる覺えに覺えて居る。が、それよりもは

つきり覺えて居るのは、明くる年の三月に兄が結婚した折のことである。式を擧げたのは日比谷の大神宮で、晩には上野の精養軒でおひろめの宴があつた。芳雄は牛込の廣澤と云ふ親類の叔母や「祿次兄さん」や「柳子」と一緒に自動車に乗つて、日比谷から上野へ廻つた。自動車の中で叔母が、

「ほんたうに好きさうなお嫁さんだこと。——今度は祿ちゃんのお番ですね。」と、そんな事を云ふと、

「なあに、僕よりも柳ちゃんの方が先ですよ。」と、「祿次兄さん」が云つた。さうしたら姉は眞赤な顔をして、

「いやな祿ちゃん」と云つたやうだつた。

その日から芳雄には新しい姉が一人殖えた。新しい姉の方をただ「姉さん」と呼んで、今迄の姉の方を「柳子姉さん」と呼ぶやうになさうと、廣澤の叔母はわざわざ後に注意してくれた。ただの「兄さん」にただの「姉さん」、「祿次兄さん」に「柳子姉さん」、かう二つづつあるのがおかしいと云つて芳雄が笑つたら、「兄さんや、姉さんが大勢あるのは結構ぢやありませんか。」と云つて、叔母も笑つた。新しい姉が出来たと

云ふ事は、芳雄も何だか物珍らしいやうな氣持ちで、嬉しくないことはなかつた。新しい姉は「柳子姉さん」より二つ上の二十で、喜多子と云ふ名前だつた。「喜多子」、……「喜多子」と、婚禮の明くる日から總領の兄は呼び捨てにした。それが耳馴れないせひか、暫らくの間芳雄には新しい姉に氣の毒なやうな感じがした。

精養軒のおひろめの席に連なつた晩に、芳雄は新しい姉と今迄の姉と執方がいい女だらうか知らと思つて、そつと顔だちを見くらべたりしたものだつた。しかし其の晩は執方も派手な

きらきらした御祝儀の着物を着て、お白粉を濃く塗つてきちんとして居たので、顔が同じやうに綺麗に見えてよく分らなかつた。新しい姉の方が今迄の姉よりも別嬪だと云ふ判斷が、いつの間にかはつきりと頭にあるやうになつて

しまつて居たのは、その後二ヶ月か三月過ぎた時分だつたらう。とにかく新しい姉は柳子よりも優しい顔や姿をして居た。さうして芳雄

を親切に可愛がつてくれることは柳子と同じだつた。晝間は外の兄や姉は病院や學校へ行つて内に居ないことが多かつたから、芳雄は自然新しい姉に早く馴染むやうになつた。いつたいは彼は赤ん坊の頃から病身な子供だつたので、

大きくなつてからも月に一度か二度はきつと熱を出したり胃腸を悪くしたりしたので、そんな折に新しい姉は氣を揉んで自分が醫者へ附いて行つてくれたりした。姉は芳雄にはばかりでなく、外の兄弟や親類の人たちにも評判がよかつた。取り分け柳子には仲がよくて血を分けた姉と妹のやうだつた。でも、柳子は弟があまりたびたび病氣で寝たりなんかして姉に面倒をかける事が多いので、をりをりは氣の毒が

る様子で、芳雄が姉に甘えたりして居ると、「芳ちゃん、お前なるだけ姉さんにお世話を焼かすんぢやありませんよ。」

かう云つてたしなめることもあつた。それは今でも半分は夢のやうな工合で芳雄の記憶の中に残つて居る。——姉が赤ん坊を生んだこと、そのことは結婚の明くる年の正月時

分だつた。芳雄は一度その赤ん坊の顔を見たやうに覚えて居る。それから生れる時のおぎやあ

おぎやあと云ふ泣き聲も、お産のあつたのが背の口のごとで芳雄はちやうど二階座敷に居た時だつたから、たしかに聞いたやうに覚えて居る。けれど其の後赤ん坊は居なかつた、生れたと思つたのは芳雄の思ひ進ひであつたかのやうに。——しかしそれから二三年も立つて或る時

芳雄が柳子から聞いたのに、生れたやうに覺えて居るのは芳雄の思ひ違ひではなく、やはりほんたうだつたのだが、生れると間もなく二三日して死んでしまつたのださうで、その所の記憶が芳雄の頭からはぼつりと抜けて居たのである。子供の時分に見たり聞いたりした事はどうも不思議で、ところどころをはつきりと覺えて居るけれど、その後先がぼうつと霞んで業がりが付かない事が多い。で、芳雄は其の赤ん坊が死んだのは知らずに居たが、その後姉が二度お産をして、その時の赤ん坊たちも皆同じやうに直ぐ死んでしまつたのは、明かに覺えて居るのである。姉のお腹が大きくなる度ごとに今度こそは大丈夫だらうと云つて、内中の者が樂しみにした效もなく、いつもお産はうまく行かなかつた。芳雄にしても赤ん坊が出来れば自分も兄になれるのだから、可なり熱心に其れを願つては居たのだけれど。

家の間敷のわりあひに家族が多數だつたので、内の中は赤ん坊が生れないでも随分賑やかだつた。四人の兄と姉とが集まつて、その外に男や女のお友達などもやつて来て、骨牌をしたリトランプをしたり音楽會をしたりして夜おそくまで騒いで居ることが間間あつた。芳雄は

晩の八時になると先へ寝かされたが、騒騒しくて寝つかれないくらゐだつた。彼は子供の癖に神經質で眼敏い性分だつたから。トランプの時はやり方が分らないので見て居ても詰まらなかつたけれど、音楽會の時は皆がいろいろの冗談を云ひ合つて面白さうなので、芳雄も傍へ置いて貰ふのが當だつた。

「芳ちゃん、今度はお前の番よ。さあ、何か唱歌を歌つて御覽。」
みんなが一ときり歌ひ疲れてがつかりした折なぞに、芳雄がぼんやりと手持ち不沙汰で居ると、柳子はよくこんな事を云つた。

「さあお歌ひなさい。今御馳走が來ますから歌つたら芳ちゃんにも上げますよ。」
と、上の姉も一緒になつてすすめた。芳雄は大きな人たちの仲間へ入れて貰へるのは嬉しくない事はなかつたが、兄や姉やお友達も居るので、何となく斯う羞かしくつて歌はうと云ふ氣にはなれなかつた。すると柳子は、

「ほんにと芳ちゃんにはにかみ屋だねえ。歌はなければお菓子を上げなかつてよ。」
などと云つてからかつたものだつた。柳子はいつも上の姉は三味線が好きだつた。柳子はいつも姉の三味線で長唄を語つた。兄たちはトランプ

だと得意だつたが音楽會では何がうまいと云ふことはなしに、英語の唱歌をうたふとか、勸進帳をやるとか芳居の聲色を使ふとか、好い加減な節で出鱈目に怒鳴るばかりだつた。芳雄には、彼に對してはいつも眞面目な顔つきをして居る上の兄が、義太夫を語つて女の聲で臺辭を云ふ時が一番をかしかつた。餘所から遊びに來るお客の中には随分いろいろんな藝人が居て、ダイオリンやマンドリンを弾く者もあつた。上の姉

の從姉にあたる女學生で、みんなが「瑞枝さん、瑞枝さん」と云つてた人——芳雄だけは其の時分、「瑞枝さん」とは呼ばないで、「麻布の姉さん」と呼んで居た——その人は會のあるたびにやつて来て、非常に高い好い聲で西洋の歌をうたつた。ハイカラな女だつたから日本の物はあまりやらなかつたけれど、ダイオリンが上手なので、瑞枝の番が來れば皆が耳を澄まして聞いて、曲が終ると盛んな拍手だつた。「ソプラ

ノ」だとか「バリトン」だとか「獨唱」だとか云ふ音楽に關係した言葉が、をりをり瑞枝の口から出ることがあつたので、芳雄もいつの間にか其れを聞き覺えるやうになつたくらゐである。瑞枝はその外にも意味の分らない英語を、べらべらと話の間へ交ぜて語る癖があつた。柳子も

可なりお轉變の方だつたが、瑞枝にはかなはなかつた。男の人たちに冗談を云はれなどしても、瑞枝は負けずに云ひ合ひをしてやり込めたりする。ほかの女たちはトラムフは下手だのに瑞枝はそれもなかなか強かつたので、どんな會の時でも彼女が一番持て囃されて居た。

* * * * *

兄は大學病院に二年ほど勤めた後、其處をやめて、銀座の裏通りへ「田島醫院」と云ふ看板を出して町醫を開業した。しかし家族が大勢でもあつたし、醫院の方は狭かつたものだから、内中其方へ引越す譯には行かないので、やはり兄は今まで通り本郷の彌生町の家から毎朝通つて居た。そんな譯で家庭の空氣は相變らず暢氣で賑やかだつた。ただ、開業と同時に内の方へも電話が引かれて、夜おそくなどに兄が呼び出されることはあつたけれど、それも極たまだつたのである。

或る時——それは芳雄が十歳の年の暮れで姉がちやうど二度目の赤ん坊を生んだ折のこと、——その赤ん坊は前にも云つたやうに生れると直ぐ死んで居たが、姉はお産のあとの疲れが出た半月ばかり床の上に寝たり起きたりしながら

退屈がつて居たので、それを慰める爲めに夕方からいつものやうな音楽會が彼女の枕もとで催されることになつて居た日に、芳雄は學校から歸つて来ると、柳子に云ひ附かつて銀座の十字屋へ蓄音器のレコードを買ひにやらされた。彼は臆病な子供だつたから獨りでなんぞそんな遠くへ使ひに行くのは厭だつたけれど、十字屋なら所が分つても居たし、柳子や女中は晩の會の支度で忙がしくて手が放されなかつたから、どうしても彼が行かなければならなかつた。京橋で電車を降りて十字屋で買ひ物をしてから、まだ表はうす明るかつたので、芳雄は

レコードの包みを壊さないやうに大事に抱へながら、こんな遠い所まで子供が獨りで使ひに来たのを誰かに見せてやらうと思つて、直ぐ近くにある兄の醫院へ寄つたが、這入つて行くと、兄はもう本郷へ歸つてしまつた跡らしく、玄關や薬局室はがらんとして誰も居なかつた。たびたび來て勝手を知つて居たから、梯子段を上つて二階の部屋のドアを明けると、兄は歸つてしまつたのかと思つたら、もう一人思ひもかけない人と——瑞枝と二人ぎりで其處に居た。芳雄ははッとして、見てはならないものの所へ來たやうな氣がして、でも又すぐ其の部屋を出て

しまふの悪いやうにも考へられて、ちよいとの間、ぢつと立つたまだだつた。瑞枝と兄はちつとと芳雄を見て眼を外らして、——少し顔色を變へたやうだつたけれど、——別に騒ぐやうな風はしないで、ぢつと暫らく動かずに居て息が詰まつたやうな工合に黙りつづけた。瑞枝は寝ころんで居て、兄は其の首のところに坐つて下を向いて顔を送りつけるやうにした形のままで居た。

「いいえ、其處のところぢやございませんわ。……もつと此方、この胸の所が痛いんでございますの。」

「ここですか、ここが痛いんですか。」
兄もさう云ひながら、薬局室から膏藥を取つて來て彼女が指で叩いて居る所へ其れを貼つてやると、瑞枝は立ち上つて、
「芳ちゃん、あなた一人でいらしたの？」
と、芳雄を見てにつこりして着物の襟を直して居た。

「ええ、僕は銀座へ蓄音器のレコードを買ひに、お使ひに來たんです。」
なるだけ兄の方を見ないやうにして、芳雄は

瑞枝にだけさう答へた。何でもないんだ、飛んだ思ひ違ひだつたんだ、と云ふやうな氣も半分はしながら。

「あら、お使ひにいらしたの？ それは感心ね。——あたし此れから兄さんと御一緒に自宅の音楽會へお伺ひする所なのよ。芳ちゃん先へ行つて姉さんにさう云つて置いて下さいな。直きに参りますからうんと御馳走を拵へて置いて下さい。」

瑞枝はそのあとで何か冗談を云つて芳雄にふざけたやうだつた。

晩になつてからの音楽會は、姉が半病人のやうな姿で布團の上に坐つて居るのが陰氣だつたけれど、外の人たちが思ひきりはしやいでくれたので其の陰氣さは忘れられてしまふくらゐだつた。兄も機嫌がよかつたし、兄と一緒にやつて来た瑞枝も、みんなを相手にいつもの通り元氣にしゃべつたり遊んだりした。

田島の一家に陽氣な空氣が充ち互つて居たのは、其の時分が絶頂だつた。其の時分は誰も彼も幸福だつたし、臆病な芳雄も寂しいと云ふ心持ちを餘り味はずに済んで行つたのである。姉の床上げがあつてから後も、暫らくの間は音楽會や骨牌會が催されて、みんながつまらな

い事にきやツキやツと云つて轉じて笑つたりするほど氣輕な心になつて居て、始終集まつて来る瑞枝を始め多くの定連の人たちもよく氣が揃つたものだつたが、芳雄の十一の歳の秋に工學士になつた二番目の兄の祿次郎が神戸の造船會社の方へ行つてしまつたのが、家の中の寂しくなり出した始めだつた。でもまだお轉變な柳子が居て瑞枝と負けず劣らず騒いで居る間はそんなでもなかつたのに、柳子も其の年の暮れに澁谷の宮本と云ふ内へお嫁に行つたので、それから急に家中が陰氣になつて、今迄のやうに會を催すこともなくなつてしまつたのである。姉は、二度もお産をやりそくなつた上に、貧血症になつて時時眼まひがしたり氣が遠くなつたりして寢て居ることが多かつたから、人が尋ねて来ることを嬉しがつて、音楽會の定連のうちで今では瑞枝一人だけが相變らずちよいちよい話に來てくれるのを、たいへん懐かしく思つて居るらしかつた。さうして、病氣が直ると瑞枝を誘つては兄と三人で芝居を見に行つたり、芳雄も連れて日比谷公園へ出かけたリすることがあつた。けれどどうしても以前のやうに面白くなれなかつたのは、——それは一つには、その時分から兄が妙に重々しい、いつ

もむつつりと寒き込んで居るやうな人間になつてしまつたせゐでもあつたには違ひない。兄はもともとちつと沈んだところのある、愛敬の乏しい無口な性質だつたのに、今までは家庭の空氣に釣り込まれて派手な人間に見えて居たのだけれど、祿次郎や柳子が居なくなつてからはいつとなしに自分の元の性質に復つて居たのだつた。それに不愛想なわりには鷹揚で、暖かみのある人だつたから、姉の病身な事や、子供の出来ない事や、いろいろそんな事で人知れず氣を使つて居たのかも知れない。ただ瑞枝と二人ぎりで居る時に、兄が例になくここに笑ひながら話をして居たのを、芳雄はたつた一度、——或る日小石川の植物園へ行くと向うの木かげを二人が手を曳いて歩いて居たのを、——そつと見たことがあつた。二人の方では氣が付かなかつたやうだつたが、……

柳子が結婚した明くる年の三月に、姉は三日目の流産をして又床の上に寝たり起きたりする體になつた。瑞枝はもちろん柳子もりをりを丸儲に變つた姿で澁谷から尋ねて來ては、「瑞枝さん、ほんたうにあなたには済みませんことね。毎日毎日お見舞ひに來て頂いて。」と、心から禮を述べて、瑞枝のやうにしげしげ

とは出歩く譯には行かなくなつた自分の今の身の上をかこつ事もあつた。

「いいえ、あたしなんか暇な人間なんですから毎日でもお伺ひして、柳子さんの代りに姉さんのお相手をいたしますわ。どうせ遊んで居るんですから何でもありませんの。」

瑞枝はいつも柳子にさう答へて、夜おそくまであとに残つては例の花やかな笑ひ聲を響かせながら面白さうな世間話を姉に聞かせて居た。兄も大概の目には、醫院の方を早く濟ませて枕もとに付き添ひながら、それほどにする病人でもなかつたのに、随分やさしく親切な言葉をかけてやると云ふ風だつた。

「瑞枝さんや柳ちゃん遊びに来て下さるの、あたしちつとも退屈なんかしやしませんから、そんなにして頂かなくてもようござんすわ。今日はあなたお忙がしいんぢやなかつたの？」

姉はさう云つて兄の親切を氣の毒がることもあるくらゐだつた。姉は氣だてのいい人には逆ひなかつたから、兄からそんなに大事にされるのはあたり前だつたけれど、それでも芳雄は、自分が病氣の時などに兄があの半分も自分によさしくしてくれない事を思ふと、姉を仕合はせ

な人だと云ふやうに考へずには居られなかつた。さうしてさう考へることが芳雄には羨ましいよりは嬉しい感じを起させたには違ひなかつたが、しかし兄だの瑞枝だのがあんまり姉を大事にし過ぎると云ふことは、其處には何か氣づかはしい譯があるやうな暗い心地のする折もあつて、瘦せて青ざめた姉の顔をぢつと見て居る事は、なぜか芳雄には堪へ難かつた。

産後の疲れと云ふだけで大した病ではなかつたが、みんなが心配して看病したり、姉も妙に寂しがつて人懐っこいことを云つたりしたのは、やはりよくない出来事のある前兆だつたのかも知れない。――姉はその後一旦床上げをしたのだけれど、前からの貧血症がだんだんひどくなつて、流産をしてからちやうど三月目の五月の末に、ふとした事で死んでしまつたのである。死ぬ二三日前までは別に不調と變つた様子はなくて、ただ折折眼まひがしたり氣が遠くなつたりするだけで、ふらふらしながら寝るほどではないと云つて起きて居たのに、或る日の夕方、いつも時時するやうに兄に注射して貰ふと、明るく日の朝あたりから急に容體が悪い方へ向いて行つた。それも、まるでコレラにでも

かかつたやうに幾度も幾度も激しい下痢をして

眞白な牛乳のやうなものを口から吐きつづけて、三日目の晩には危篤と云ふ事になつてしまつたのだつた。いよいよ息を引き取らうとする時には、電報を見て神戸から歸つて来た祿次郎や、前の晩からずつと看病して居た柳子や、牛込の廣澤の叔母や、姉の實家にあたる麻布の萩原家の親たちや瑞枝などが、兄や芳雄と一緒にぐるりと枕もとを取り圍んで、「姉さん」だの「喜多子」だのとてんでに姉の名を呼びながら、しまひにけみんなが鼻を詰まらせてしくしくと泣いた。女の人たちは子供のやうに聲を上げてまで泣いて、ほんたうにどうかしてもう一遍姉をよみ返らせたいと願つて居るやうだつた。だが、最初に兄がそれから祿次郎、柳子、芳雄と云ふ順序に、其處に居る残らずの者が末期の水を唇へ濡らしてやつて居る間に、姉の淨い眼の中から魂が遠くの方へだんだん消えるやうに立ち退いて行く様子が、芳雄にもよく分るやうな風になつて、さうして姉はとうとう死んで行つたのである、眼臉を閉ちてやつたり、胸の上へ両方の掌を組み合せてやつたりして、暫らくの間はみんな一度にがつかかりしたやうに遺骸の傍に坐つたまま黙つて居た。立ち退いてしまつた魂が、まだそんな遙かな所へは行き

切れずに、此の部屋の中にさまようて居るのを恐れてでも居るやうな工合に。

「僕は電報を見てびつくりしちまつたが、どうして斯う急にいけなかつたんでせう。」

その時、祿次郎がふいとそんな事を、隣に居る兄の方へ囁くやうに云つた。

「…急性の腸加多兒を起したんだ。普通の人なら助かるんだが何しろ衰弱して居たもんだから、…」

さう答へた兄の顔つきが芳雄には氣になる事があったので、こつそりと其の方を窺ふと、兄は

「死んだ姉よりも眞青な顔をして居た兄は、芳雄と眼を見合はせたと思つたらどんと衝かれたやうな風に首をちぢめて頷垂れてしまつた。

芳雄も其の時は顔が眞青だつた。

お通夜や、葬ひや、初七日の法事や、そんな事が引きつづいてある間は元の享樂會の人たちのいろいろの顔觸れが集まつて来て、わりあひに賑やかだつたけれど、それが済んでから後、

祿次郎は神戶へ歸つてしまふし、たまに柳子と廣澤の叔母とが佛壇へお線香を上げてら兄や芳雄を慰める外には、めつたに尋ねてくれる人もないやうになつて、あれほどしげしげとやつて来た瑞枝も、

寂しい時にはああいふ

人の花やかな笑ひ聲が何より戀しいものなのに、どう云へ譯かふつつりと姿を見せなかつた。兄は毎日、朝早く起きて染井の墓地へお参りに行つて、そのまますつと銀座の醫院の方へ廻つたが、姉が生きて居る時分には必ず日の暮れには戻つて来たのに、その頃は夜おそくまで歸つて来ない晩が多くなつて、芳雄は一日兄の顔を見ないで暮すことがあつた。芳雄は尋常六年生だつたので、午後二時頃にはいつも

學校から戻つて来たけれど、お若と云ふ飯突き

の女とお元と云ふ年寄の女中と二人しか居ない

家の中に遣入つて居る氣にはなれなくて、夕方

明りのつく時分まで表に遊んで居るのが常だつ

た。でも、書間のうちはさう云ふ風にしていく

らか粉れて居たやうなもの、夜になつてから

の味氣ない心持ちは、—ほんたうに獨りぼつ

ちの、頼りのない心持ちはどうしていいか分

らなかつた。

「坊ちゃん、さあもう八時でございますからお

休みなさいませよ。夜更かしをしていらつしやると今に兄さんがお歸りになつてお叱りになりますから。」

「晩飯を済ませてからしよさいなきに女中部屋へ来て、女中たちの針仕事をして居る傍でひつくり返つて居たりすると、ちきにお元はさう云つて少し離れて居る書生部屋の四半へ、布團を敷いて蚊帳を釣つてくれるのだつた。柳子が嫁に行つてからは此處へ獨りで寝る習慣になつて居た芳雄は、姉が死んでしまつた今になつてまでさうする事は厭だつたけれど、—成るべくなら二階の兄の部屋へなり女中たちの間へなり一緒に寝かせて貰ひたかつたけれど、獨りで寝るのが悪いと云ふ事を兄に訴へるのが何となく氣鬱せで、兄に對して悪いやうな氣持ちがしたりして、つい其のままに辛抱しなければならなかつた。芳雄は、あの姉が亡くなつた晩の事があつて以來、面と向つては兄の眼の中を見ないやうに努めて居たが、それにも拘はらず兄が自分をどう思つて居るのだから氣に懸つた。あまり年が違つて居たので昔からさう打ち解けた仲でもなかつたし、お互ひの氣心はよく分らなかつたが、兄の方でもあの晩の事があつてから妙に芳雄を氣味悪く感じて居るのではないだらうかと云ふ考へが、芳雄の胸の奥深くにあつて、その爲めに、猶更兄と親しめないやうな工合だつた。

「兄が自分を氣味悪く感じて居ると云ふ事、それがほんたうだとすればなぜだらうか。」—芳

雄は其の考へを押し詰めて行くと、はつとするやうなものに行きあたらないければならなくなつて、芳雄は兄を恐ろしいと思ふよりは、自分を恐ろしい子供だと云ふ風に感じるのだつた。兄を疑ひの眼で見ると事ばならないと心にきめて居ながら、しかしやつぱり其の考へから逃れる譯には行かなくつて、毎晩毎晩、兄の歸りがおそい折などには殊に、寢床へ這入つてもまんじりともせずつと其ればかりを思ひ詰める。――姉が亡くなつてから後は電燈をつけて寝るやうにはして居たけれど、萌葱の蚊帳が釣つてある部屋の中はもやもやと煙るやうに薄ぐらく、一つ所をあまり長く見て居ると見えなないものまで見えさうになつて来て、若し姉が幽霊になつて出て来る事があるとすれば、きつと誰よりも自分の所へ出て来るに違ひないと思つて居た芳雄は、それが随分ありさうな事のやうにも思はれたので、其の爲めに一層神経が昂つて睡られなくなり、何度も何度もうづに立つたり布団の上へ怯えたやうに起き上つたりするのだつた。兄は、時計が九時を打ち、十時を打ち、十一時を打つてもまだ歸らない晩が屢々で、どうかすると十二時が鳴つてから餘程過ぎた時分などにお酒に酔つて戻つて来る事があつた。

或る晩、芳雄が寢床で眼を覺ますと電燈が消えて居て部屋の中は眞暗だつた。今何時だらう？…兄は歸つて来たのか知らん？…ふとさう思ひながら、いつもの四疊半に自分が居ることをたしかめる爲めに、手を伸ばして蚊帳の櫛に觸つたり枕もとの障子のありかを搜つたりして、それでもいくらかは安心したやうに頭から夜具を被つてしまつたけれど、いつもなら二三分も待てば直き電燈がつく筈なのに、其の晩はいつ迄立つてもつきさうもなくて容易に寝られなかつた。闇がそんなにも長くつづいて居ると云ふこと、さうして寢ようとすればするほど眼が冴えて来るやうな心持ち――それが芳雄には、電氣の故障のせるだとはかりは思へないで、其處から何か芳雄の眼に見え耳に聞えて来るものが、今にこつそりと忍び寄るのではなからうかと云ふやうな豫感がしたが、なぜか其れは其の時は不思議に恐くも何ともなくて、姉がきつと、自分を恐がらせないでくれるのだと云ふやうにも考へられた。姉が其處へ出て来たところで自分を怯えさせたり怨んだりする譯はない。姉は何か尋ねたいこと、でなければ聞いて貰ひたいことがあるにしても、きつと芳雄にだけは生きて居た時分のやうに優しい姿

をして情深い言葉をかけてくれる。そんな事を思ふと、芳雄は急に懐しくてたまらなくなつて、
「姉さん…」
と、小さな聲で呼んで見たかつた。もしさう云つたら其れに應じて闇の中から、
「芳ちゃん…」
と云ふ細く悲しく透き徹る聲が、直ぐと聞えて来さうな心地がした。それに、芳雄の寢て居る四疊半の次ぎの間は、姉が達者で居た時分に彼女の居間としてあつたので、其處には今も鏡臺だの箆笥だの昔のままに置いてあつたのだから。
芳雄はふいと、自分でも分らない或る怪しい興奮が自分を不慮の臆病な子供とは全く別な自分にさせてしまつたことを感じながら、もしや姉の聲が聞けるかと云ふ戀しさで胸一杯になりながら、それをどうにも制する譯に行かなくなつて、布団を抜け出してふらふらと闇の中を次ぎの間の方へ手さぐりに辿つて行つた。此頃は晝間でもあんまり人が出這入りをしない其の部屋は疊が微臭く濕氣で居て、べとべと足の裏へ粘り着くやうなのを、芳雄は夢の中をさまよふのに似た心持ちで氣味悪く踏みしめて、箆

筒の置いてある隅の方へ暫くしんとして、
だままだ暗い眼の前の菓のやうに視詰めて居た。
瞳を閉んで居る濃い闇の何處か知らで明るい
泡がぼんやりと浮かんで其處からひらひらした
ものが見えさうになつて来るやうな、さうして
其れが「あれ」と云ふ間もなく消えてしまつたか
のやうな、そんな氣持ちが二三度はしたけれど
もただ其れだけに過ぎなかつたので、またべと
べとと疊の上を歩いて筒筒の横の方の壁にび
つたりと添ひながら蜘蛛が這ふやうにして行く
と、思ひがけなく芳雄の手に觸つたものがあつ
た。——それは姉の三味線が、今もなほ其處の
壁に懸けてあつたのである。芳雄は、其の時は
魔がさしたやうになつて、或る恐ろしい經驗を
我から味はつて見たと思ふ根強い好奇心から、
その絲の一すぢを摘んでびんと鳴らした。どう
ツとして、身の毛が竦つやうになつて、闇の底に
ふるへて消える餘韻の果てから姉の聲が響いて
来るのを想像しながら、ぢつと耳を澄まして居
たがそれでもそんなものは聞えて来ない。びん
：…と、もう一遍彼は鳴らして、さうしてまた
ぢつと耳を澄まして息を凝らして居ると、眞暗
な中にぼうつと明るくなつた所が現れて、今
まで見えなかつた障子の棧が眼に映つて来て、

外の廊下を出来るだけ忍びやかに歩いて居るら
しい足音がみしみしと近寄つて来るのだつた。
と、その障子は幽霊が這入つて来でもする時
のやうに静かに明いたが、寝間着を着て片手に
手燭を持つた兄が、蠟燭の穂先に顔の肩間のあ
たりをてらてらと赤く照り返されながら、黙つ
て部屋の隅際に立つた。

その顔は、ちらちらと瞬きをつづけて居る蠟
燭の灯の向う側に、燈明に照らされて居るお厨
子の奥の佛様のやうに其れだけが一つ闇に浮
き出て、高い鼻の影を片方の頬ツべたへ眞黒く
くつきりと落として、物云ふ術を忘れたやうに
唇を固く閉ぢたまま凍り付いたやうな凝視を
芳雄の上に据ゑて居た。芳雄は箆筒と壁との隅
の方へ身をちぢめて、生れたばかりの赤ん坊が
するやうにしつかりと握りしめた兩手の拳を
頤の下へ入れて、たとへやうのない戦慄に體
中を任せながら、——姉の幻を見たにしても
恐らくこれほどではあるまいと思はれる凄じ
い兄の形相を、あの、姉が死んだ晩以來決して
見ようとはしなかつたもの、——兄の眼の中を、
動物的な恐怖を以て睨み返した。が、兄の眼の
中には芳雄のそれに劣らない氣遣ひじみた恐怖
が充ちて光つて居たかのやうに思はれた。

「芳雄、…お前は其處で何をして居るんだ
ね？」

その聲は、しかし其の眼よりもつと露はな
恐怖の爲めに嚴かにわなないて居た。兄はさ
う云つて芳雄の姿と其の傍にある三味線とを
見比べるやうにして、それから斯う、叱ると云
ふよりは哀願してでも居るやうな或る奇妙な
優しさを帯びた調子になつて、

「え？ 何をして居るんだ？ 今何かお前はし
なかつたか。」

「いいえ。」

と云つて芳雄は何處までもさう云ひ切る心で
まだ兄の眼を執念深く睨んで居た。それは反抗
的にはなく、恐怖が彼の視線を其處へ釘着け
にしてしまつたやうに、——
「何もしない？ ほんたうに何もしなかつた
かね？」

兄は、いかにも疑惑に脊やかされた顔つきで
重ねてさう云ひながら芳雄を見る、次ぎにはま
た恐る恐る三味線の方を見て、それを云はうか
云ふまいかと云ふ事を暫らく考へて居る風だ
つたが、
「お前は今、その三味線をいちつて居ただら
う？ え？ さうだらう。」

と云つて、片手に蠟燭を持ち變へてもつとよく彼の方へ芳雄が見えるやうにした。部屋の中に何本もの線を伸ばして居た物の影が其れと一緒には一時はゆらゆらと入り交つて、やがて又前と違つた形にちつと落ち着いて、兄の頬ツべたにあつた眞黒に尖つた鼻の影はもう其處に映らなくななり、顔は今迄よりも平べつたく明るくなつて見えた。でも、いまだにてらてらと赤く照つて居る其の色つや、どんよりと濁つた異様に潤んで燃えて居る瞳の輝き、——それが芳雄には、その時やうやう、兄が恐ろしく泥酔して居るのだと云ふ事をありありと發いて見せたのである。

「いいえ、……」

芳雄は、今度は前とは違つた意味の、酔拂つた兄が何か想像もつかない物凄く眞似をしやしないかと云ふやうな怯えを感じながら、ぐつと體中を角立てるやうに引きしめてまた強情に同じ文句を繰り返すのだつた。

「だけどお前は、こんな夜半に此の部屋へ這入つて何をしようとしたんだね。大分先から此處でどごととやつて居たやうだつたが、何か夢を見て寢惚けて居たんぢやないのかね?」
「ええ。」

と、口の内で微かに云つて芳雄が頷いたのを、その曖昧な様子を兄はどうも信じられないと云ふやうに、思ま思ましいのを堪へて居るらしい顔つきでじろじろと胡散臭く眺めてから、
「よし、よし、そんならもうお休み、そんなところに行らうろしない。」

と云つて、まだ執拗く追ひかけて睨めて居る芳雄の視線を少し極まり悪さうに避けて、廊下を二階の方へ戻つて行つた。

その晩はそれで済んでしまつても明るく日になつたら芳雄は改めて叱られるのではあるまいかと思つて居たのに、兄はそれきり幾日立つてももう其の事を云ひ出さうとはしないのだつた。ただ、それまで裸で懸けてあつた姉の部屋の三味線には、いつの間にか鬱金の切れの袋が被せられたけれど、さうして兄は黙つては居ても腹の中では變な子供だと思ふやうになり、あの晩の事をいつまでも疑ひ深くねちねちと考へて居るらしいのが餘所目にも分るやうな氣になつて行くばかりだつた。

「そりやあさうですけれどね、氣に入つた家と云ふものは容易に付付かないもんですし、そんな事を云つて居たら切りのない話ですから、

やつぱり引つ越してしまはうかと思つて居るんです。——」

芳雄がちらとそんな話を聞いたことがあつたのは、それはちやうどあの晩の事件があつてから四五日立つた時分、姉の三十五日の日に廣澤の叔母と柳子とが彌生町の家へ寄つて兄と何か相談をして居る折だつた。

「まあお前さんが其の氣ならさうしたらいいでせう。此の節の若い人はそんな事を何とも思ひはしないだらうけれど、よく佛縁は四十九日の間は家の棟を離れないなんて云ふものだし、私なんぞは舊弊な人間だもんだから、成るべくならもう少し待つた方がいいとは思つて居るけれど。」

「ほんたうに叔母さんは舊弊よ。」

と、傍から柳子が兄に加勢をして云つた。

「……この内の先には狭過ぎたくらゐだつたけれど、今ちや兄さんと芳ちゃんぎりでがらんとしてしまつて、何だか斯う陰氣臭いやうな氣がしますわ。ここに居ると兄さんだつていつ迄も姉さんのことをお忘れになることが出来ないでせうから、いつそもつと陽氣な所へお引越したつた方がよござんすわ。」
叔母もそれには強ひて反對もしなかつた様子

で、とうとうそれに話(はなし)がきまつたのだつたらう。

「間もなく一家は慌(あわ)しい兄の云ひ附けで小石川の原町の方へ引き移つて行つた。その家は南向きの高臺にある新築の借家で、彌生町の家より部屋(むろ)の数はずつと少なかつたが、眼のさめるやうに明るい晴れ晴れとした間取りの住居だつた。今までは始終姉の幻に追ひかけられて居るやうだつたけれど、それからは芳雄も救ひ出されたやうになつて、夜も安心して眠ることが出来た。あの姉の三味線だの琴だの鏡臺だのは、引つ越す時に兄がそれらをどう云ふ風にしてしまつたのだか、新しい家のどの部屋にも置いてはないのだつた。

みんな、——兄と芳雄との外には誰も、——此の二人の兄弟の仲が新しい住居に移つてから後(のち)も次第に鬱陶(うつとう)しく餘所餘所しくなつて行くのを、氣が付いて居る者はないらしかつた。それはあまりに年齢(ねんれい)の違つて居る兄がまだ尋常科(じんじょうか)の生徒(せいと)で居る弟に構つて居られないのは當り前の事だつたし、姉の生きて居る時分からさうだつたのだから、それを當り前でなく考へるのは何か自分の僻みであるやうに時時は芳雄自身にも思はれる、——けれど、さう思ふ下からいつの間にか僻みが根を張つて来て、心の

奥でぢいッと兄のする事を視詰めて居るやうな氣になつたりした。

その頃になつて、或る日、それまでは久しく顔を見せなかつた瑞枝が、ちやうど芳雄が學校から歸つて来た時にふいと尋ねて来てくれたことがあつた。

「まあ、ほんたうに御無沙汰(ごぶさた)をしてしまつて済みませんでしたわね。一度お伺ひしようと思つて居たんですけど、忙がしかつたもんですからついつい無精(むせう)をしてしまつて、——」
と、いつものりんりんとしたよく響く聲で馴れ馴れしさうに云つて、芳雄を抱きかかへるやうにして懐かしさうに頬擦り(ほなすり)をしたり頭を撫でたりしながら、

「芳ちゃん、あなたどうなすつて？ 姉さんがいらつしやらないで寂(さび)しいこと？ あたしきつと芳ちゃんが毎日寂しがつて居るだらうと思つて居ましたわ。」
と、しんみりした調子で云ふのだつた。芳雄はさうされると直ぐほろほろと涙が湧いて来る眼の中へ、うつむいて自分を覗き込んで居る瑞枝の房房した前髪のほつれ毛が薄暗く蔽ひ被さるやうに垂れかかるのを惱ましく覺えながら、何と答へていいかも分らずに、その眞黒な大き

な庇髪の中にある彼女の顔を、悲しさのあまり顔へ着きでもしたいやうな眼つきで見上げて居るばかりだつた。

「あら、あたし悪かつたわね。折角芳ちゃんが忘れて居たのに、姉さんの事を思ひ出させたりなんかして。ほんたうに濟まなかつたわね。御免なさいね。」

さう云つたけれど、瑞枝の美しい眼の球も櫻ん坊のやうに薄紅く光つて来て、つやつやと涙に濡れて来る眞實な様子が、とてもそれを疑ふことは出来ないやうに力強く芳雄の胸に迫るのだつた。

「兄さんは此の頃どんな御様子？ いつも何時ごろにお歸りになつて？」

「何時ごろですか。……僕は早く寝ちまふからよく知らない。」

「あら、ぢや兄さんはそんなにお歸りがお遅いの？」

瑞枝は驚いて眼を睜つて、

「さう？ そしてどんな御様子？」

と、さもさも其れが心配な事らしく繰り返し尋ねた。
「兄さんは何だかいつも黙つて居て、僕と話なんかする事はないの。」

氣むづかしく眉根を寄せて恨めしきうに芳雄が云ふのを、瑞枝はにこにこ笑ひながら見守つて居たが、急に眼もを擦つたさうに細くしてからかふやうな言葉つきで、

「ちや芳ちゃんは見さんが恐いのね？ え？ さうぢやないこと？」

さう云つて、そんな時にはよく昔さうしたやうに、芳雄の両手を握りて其れを柔かい彼女の手の中へ探むやうにした。

「恐いことはないけれど、…でも時時兄さんはお酒に酔つて歸つて來ることがあるんだもの。」

「まあ！ お酒に酔つて？ 悪い兄さんだこと！ だけれどね、兄さんは姉さんがお亡くなりになつたんで寂しくつて溜らないもんだから、それで氣晴らしにお酒をお飲みになるんだわ。きつとさうに遊ひなかつてよ。芳ちゃんには分らないかも知れないけれど、…」

瑞枝の長い睫毛の生え揃つた眼瞼が、凸面鏡のやうに圓くむつくりと飛び出て居る黒眼がちの瞳の上を忙しなくばたばたと瞬いて過ぎたと思ふと、その度毎に其處からまた少しづつ涙が粘膜のやうに光つて濕り出して來て、それを怪しげに見上げて居る芳雄の額を撫でながら彼

女は情深い蘭子で教へ諭すが如くに云つた。

「兄さんはね、あんなに姉さんを可愛がつていらしつたんですから、いつ迄もいつ迄も忘れることが出来ないでほんたうに力を落していらつしやるのよ。だから芳ちゃんも兄さんを氣の毒だと思つて上げなければ悪くつてよ。ね、分つたでせう？ …あんな事があれば誰だつてぼんやりしてしまふのは當り前だわ。あんな、姉さんのやうないい人はなかつたんですもの。」

さう云ひかけて直ぐ氣が付いて涙を拂ひ落しながら、

「あ、またこんな事を云ひ出して悪かつたこと！ 勘忍して頂戴よ。もう止ませうね。さうして何か唱歌でも歌ひませうね、此れから私きつとちよいちよいお伺ひして芳ちゃんと一緒に遊びますわ。だからもう寂しがらないでも大丈夫よ。ね、きつと來るわ。」

などと云つて、仰壇へお線香を上げたりして、其の日は芳雄の部屋で一時間ほど話をしてから歸つて行つたが、それからほんたうに折折來ねて來てくれるやうになつた。瑞枝はしかし大抵午後の二時か三時ごろにやつて來て、芳雄をつれて活動寫眞を見に行つたり、本郷通りを散歩

して少年雜誌を買つてくれたりして、兄には會はずに歸つて行くといふ所だつた。

「芳ちゃん、又この頃に兄さんにさう云つて音楽會を開かうぢやありませんか。—さあ、あたしがいい唱歌を教へて上げるから一緒に歌つて見ない？」

そんなことを云つて、いつの間にか昔の恍惚な彼女に復つて元氣よく歌をうたふ瑞枝、

「その生き生きとした色つやのいい頬の肉を眺めながら、彼女と仲よく遊ぶと云ふことは亡くなつた姉に悪いやうな心地はしたけれど、でもいろいろ親切にしてくれて優しい言葉で慰められたりすることは、芳雄に取つて満更嬉しくないのではなかつた。それに、瑞枝とさうして隣りて遊んで居たら、いつかは兄も自分を優しくしてくれるだらうかと思はれたので、

神戶の祓次郎から折折芳雄に繪葉書を送つて來ることがあつた。

「此れは楠木正成を祭つた湊川神社の寫眞です。僕は二三日前ここへ遊びに行きました。東京では誰も變りはありませんか。今度の原町の家はいい家ですか。僕は十二月にお土産を持つて行きますから楽しみに待つておいでなさい。」

さうしてよく勉強をしなければいけません。兄さんは姉さんがなくなつてから、寂しがつておいででせうから、みんな慰めて上げるやうに頼みます。」

などと書いてあるのを讀むと、芳雄はいつも返辭をするのに困るやうな氣持ちだつた。

「祿次兄さん、たびたびお葉書を有り難うございます。今度の家は新しくつていい家です。十二月には楽しみにして居ますからどうかきつと歸つて来て下さい。さうして一しよにお正月を迎へませう。うちの兄さんは寂しがつていらつしやるやうです。僕は慰めて上げたいと思ひますが、子供ですからどうしていいか分かりません。」
けれども芳雄は、なぜか瑞枝が來ることは一度も書いてやらなかつた。

* * * * *

つひぞ兄の笑ひ顔を見たことになかつた芳雄が久し振りでそれを見たのは、明くる年の正月に、神戸から歸つて來た祿次郎や柳子や瑞枝などが集まつて、みんなで百人一首をした折の事、それも兄は成るだけ芳雄には其の笑顔を見られないやうにして外の人たちとばかり強ひて

浮き浮きと語合つて居るかのやうに、——氣のせむか芳雄には思はれたのである。柳子や瑞枝が、何かの時に芳雄をおもちゃにしてからかつたりしてどつと賑やかな笑ひ聲が一座を搖がすことがあると、そんな場合には兄も仕方なく笑つてくれたけれど、それがいかにもわざとのやうで却つて氣の毒な氣がして來て、芳雄も兄の居る前ではさうでない時ほど元氣にはなれなかつた。

「まあ、芳ちゃんはこの頃どうかしてるんぢやないの、先にはそんなでもなかつたのに服にひねこびた兒になつたねえ。」

と、柳子がそれを不思議がるくらゐに、芳雄はだんだん無邪氣なところになつた、遠慮深いい、疑ぐり深い子供に變つて行くやうになつて居た。

或る時、——それはもう正月は過ぎて祿次郎が神戸へ歸つてしまつてから、ひと月か二た月も立つて芳雄が直き其の四月には中學へ這入らうとした時分、——日曜の日に柳子がわざわざ迎ひに來て、「子供のくせにさういぢてばかり居ないで、ちつと私の方へでも遊びに來たらいいぢやないか。」と、氣が進まないでもちもぢして居る芳雄を無理に引き立てるやうにし

て、澁谷の宮本の家へ誘つて行つたことがあつた。姉が達者で居た頃に一二度つれられて訪ねた覺えがあるきりで其の後は久し振りだつたから、行つて見ると宮本の兄や母親などが珍らしいさうに「芳ちゃん、芳ちゃん」ともてなしてくれ

るのが嬉しかつたし、其處には柳子の義理の妹や弟たち、——芳雄とは三つ違ひの姉だの、一つ違ひの兄だのいくつか年下の弟や妹が大勢居たので、原町の家よりはずつと廣い其の家の座敷で芳雄は其の子供たちと一日賑やかに騒いで暮した。日あたりのいい縁側にはハムモツクが釣つてあつて、それへみんなして代る代る

乗つて傍から搦す振つて貰つたり、兄がいろいろの鳥を好くので飼つてあると云ふ鸚鵡やカナリヤをからかつたり、ペエビー・オルガンを鳴らしたり、庭へ出て藤棚の下の池に居る鷺鳥の泳ぐのを眺めたり、それは近頃の芳雄にはめつたに味はれない夢のやうに愉快な一日だつたが、だんだん日が暮れて來ると、ふと自分だけが此の賑やかな兄弟たちの仲間と別れてあの寂しい原町の家へ獨り歸らなければならぬことを思ひ出して、何だか急に悲しいやうな心地になり、出來るならいつ迄も此の家の子にして置いて貰ひたく、さうして自分も此處に居る幼い

兄たちと同じやうに年上の兄を「姉さん」だの「兄さん」だのと呼ぶことが出来たらどんなに幸福だらうかとさへ思ふのだつた。

「芳ちゃん、それぢや又遊びにいらつしやいな。もう暗くなつたから誰かに送らせて上げようか。」

「いいえ……僕獨りでも歸れます。」

さう云つて柳子の顔を見上げた時は、芳雄はしみじみと遣る瀬ない氣持ちになつて、面白かつた一日がこんな心細い事になるなら一層始めから來ない方がよかつたと、それが今更恨めしくなつたくらゐだつた。——でも、それから日曜になると欠此り時招かれて遊びにも行つたし、さうでない日には瑞枝が尋ねて來てくれたりするので、その人たちの親切でとしきりよりはいくらか氣が紛れて居られることもあつた。

お茶の水の附屬中學へ這入つてから間もなくの日曜日に、芳雄は學校の制服を着て、それを見せたさに澁谷へ行つたことがあつたが、其の日は生憎子供たちは兄につれられてお花見に行つたとかで内には母親と柳子だけしか居なかつたので、姉の部屋の縁側にうづくまりながら庭に咲いて居る連翹の花をぼんやり視つて居る

と、
「芳ちゃん、今日はほんたうにお氣の毒をしたことね。その代り姉ちゃんがたんと御馳走して上げるからゆつくり遊んで行くといわ……」

さう云ひながら柳子が其處へやつて來て柱に凭れたまま同じやうに庭先の黄色な花を眺めて居た。が、暫らくして、ふいと、

「芳ちゃん……」

と云ひかけて、何か面白い事があるらしく急にここにこと笑ひ出して、芳雄の眼の中を窺ひるやうな顔つきで覗き込むのだつた。

「芳ちゃんはね、此の頃でもやつぱり原町の内に寂しいと思つて居て？」

「ええ、」

芳雄には不意にそんな問をかけられた譯が分らなかつたので、不思議さうに彼女の笑顔を見返して居ると、柳子は一層ここにこと眼元に皺を寄せながら、

「それぢや芳ちゃんは大分此處の内が氣に入つたやうだから、若し内の子になれと云つたらなるだらうか？」

——それは勿論冗談に違ひないと思つたけれど、ふだんからそんな事を夢のやうに考へて居た折なので、芳雄ははつと圖星を刺されたやうな

な具合でにやにやと極まりの悪い笑ひ方をしながら黙つて居たが、若しさうなつたら嬉しいと思ふ心持ちが自然と顔に表はれるのをどうにもする事が出来なかつた。

「今云つたことは冗談だけれどね、……」

さう云つて、柳子はほんの一時の戯れが案外強く芳雄の心を動かしたのを看取つて、氣の毒なことをしたと云ふ風に少し慌てたらしい様子で打ち消してから、

「でもね芳ちゃん、此處の内の子になるよりか芳ちゃんはもつともつと嬉しい事が近いうちにあるかも知れないのよ。」

と、ふざけて居るやうな言葉のうちに何度も多少眞面目らしい調子を合せて云ふのだつた。

「うれしい事つて、なあに姉さん。」

「近いうちにね、お前の内にも新しい姉さんが出来るんだよ。芳ちゃんはまだそんな話を聞かなかつたかも知れないが、兄さんがまたお嫁さんをお貰ひになるの。」

「お嫁さん？」

さう云つた芳雄の聲の中にある微かな戦慄に心付かず、柳子はそれがどんなに楽しい出来事かでもあるかのやうに、歡びに輝く瞳を子供のやうに無邪氣にぱつちりと睜いて云つた。

「ああ、——そのお嫁さんと云ふのはね、しかもお前のよく知つてゐる人よ、お前がほんたうに大好きな人、——誰だか中てて見なくつて？」

「僕の知つてゐる人だつて、……」

芳雄はその時に、柳子の氣輕なのに對して自分の心の奥に湧いて來る秘密な恐れを見破られまいとする苦しさを感じながら、もう大凡は分つて居るその人の名を云はうか云ふまいかに就いてちよいとの間迷はなければならなかつた。もし其の人の名を云つて中つた時、どうして分つたのかと次第次第に問ひ詰められるやうな事だつたら、——それは何でもない筈のことだけれど、——芳雄は其の間に平氣では答へられない譯があつて、それを柳子に訝しまれるやうな場合がないとは限らない。けれどもまたあまり明かな事柄なのを空惚け、爲めに却つて疑ぐられるやうな心配もないではないので、斯う、急にばつたり行き話まつたやうな工合になつて黙つて居ると、——若し其の時間がいつ迄も續いたら芳雄はしまひには顔へ出したかも知れなかつたのに、好い鹽梅に柳子は程よく言葉を繋いだ。

「芳ちゃんの大好きな人でよく知つて居る人だと云つたら、もう大概は分つただらう？——兄

さんはね、今度あの瑞枝さんをお嫁さんにお貰ひになるのよ。」

「瑞枝さんて、——麻布の姉さんのこと？」

芳雄は、何處か遠いところを視詰めながら、わざとそんなことは何の意味もなく獨り語のやうに云つた。

ああさうよ。麻布の姉さんがもう直きお前の姉さんにおなりになるの。ねえいいだらう？

知らない人が來るよりか瑞枝さんなら兄さんにも芳ちゃんにもどんなに仕合はせだか知れやしないし、さうなればお前の内だつて又きつと賑やかになつて、兄さんの氣持ちもお直りになるだらうから、もうほんたうに寂しいことなんかありやしないわ。」

それを知らせてやつたらば飛び着くやうにして喜ぶだらうと豫期して居たらしい柳子に對しては、芳雄は是非さうして見せなければならなかつたし、瑞枝を、に持つことだつてもただそれだけならば随分うれしいやうな氣がしたので、

「そりやほんたうなの？ 姉さん。」

と、聲に元氣を出して云つて、異様にどきどきと胸が動悸を打ち出したのを感じて居ると、その動悸は嬉しいためなのか其れとも外の理由の

ためなのかやがて分らなくなつて來て、今、自分が瑞枝の來ることを喜んだ瞬間に、亡くなつた姉の眼に見えぬ姿が、——悲しく恨めしく訴へるやうな其の人の細い聲音が、ちらと自分の傍を通り過ぎはしなかつたかと云ふ風な恐怖に襲はれて、顔の色が直ぐと青白く總毛立つて來るのを隠し切れなくなつて行つた。

「どうしたの芳ちゃん？」

「どうもしやしないんです。……」

さう云つたけれど、護摩かしてしまふ事とは出ななくなつて、

……麻布の姉さんが來てくれるのは嬉しいには嬉しいけれど、先の姉さんのことを想ひ出したら何だか急に悲しくなつたもんだから。——

「まあ、お前は厭な兒だつたらないね。くよくよとそんな事ばかり考へて居て、まるで女みたいね。ちつとも男の兒らしいところはありやしない！」

柳子は憫れて眼を圓くしながら、どうして此の兒は斯うまでひねくれた性分なのだかと云ふやうに、いぶかしさうに芳雄の様子を眼瞬きもせず見守るのだつたが、さうされればされるほど芳雄は頑固に口を噤んで眼に涙を溜めてうつむいてしまつたまま、病人らしく瘦せた指

の先で新しい制服の上衣のボタンをしよざいなさきうに神経質にいぢくつて居た。

兄が瑞枝と結婚する。——それは人人の柳子までがそれほど無邪氣に喜んで居ることだのに、自分はなぜ子供の癖にそれをしつっこい疑

惑の眼を以て見なければならぬのだらうか？ 芳雄は其の譚を此れ迄にまだ一遍も奥の奥まで

突き詰めて考へたことはなかつたが、今に瑞枝が兄の後妻になりはしないかと云ふ想像は、あ

の先の姉が或る不思議な慌しい死に方、——少くとも芳雄にはさう思はれたところの死に

方をした時から、ぼんやりと彼の頭の中に滲か

れて居て、それが彼の心に霧のやみに淡い暗い影を落して居た。芳雄は時時自分だけがそんな

邪推をしてゐることを考へると、兄に對しても瑞枝に對しても濟まないやうな氣持ちがして、

自分はまだ歳が行かないせいでそんな根も葉もない妄想を氣に病むのだと云ふ風に思つて見

て、どうかするともう其の事をひよいと忘れかけて居る折もあるくらゐだつたのに、それが今

になつて見ればやはり自分の想像がだんだんと事實になつて来て居るのだつた。——

「自分は柳子姉さんがいろいろ心配をしてくれ

地になつて行く。兄を疑ひ、亡くなつた姉の死に方を疑ひ、自分にあんなに優しくしてくれる

麻布の姉さんまでも疑つて、しまひには自分で自分の心さへも疑ふやうになつて来て、それ

を誰にも云ふことが出来ずに、みんなからは子供らしくない子供だと思はれて今に可愛がられ

なくなつてしまふ。上の兄さんばかりでなくみんなが自分を嫌がるやうになつてしまつたら、

自分はほんたうに獨りぼつちになる。さうしたら死んで姉さんが自分を監ながら守つてくれる

だらうか知ら……— そんなことを胸のうちに繰り返して思ひ煩ら

ひながら、芳雄はまだ眼に涙を浮べて、柳子が傍に居るのを忘れてでもしまつたやうにしよん

ぼりと悲戀の花を眺めた。

五月になつて、先の姉の一週忌があつて、その時にまた神戸から出て来た諒次郎が居るうち

に、上の兄はいよいよ瑞枝と結婚することになつて法事が濟んでから六日すると日比谷の大

神宮で式を擧げた。芳雄は今までは「麻布の姉さん」と呼んで居たその人を急に「姉さん」と

は呼びにくいやうな氣がして居たけれど、諒次郎や柳子までがもう結婚の明くる日から瑞枝を「姉さん、姉さん」と云つて大事にするのでそれ

ほど極まりが悪くなく自分もさう呼ぶことが出来た。瑞枝は柳子より三つ歳下で其の時は二十一だつたのに、前には友達のやうにして居た人たちからさう呼ばれても別段羞かしの

やうな様子はなく、それをすつかり覺悟してでもゐたやうにお轉變などころもあまり見せない

でしつとりと落ちていた品のいい姉になつて居た。それを芳雄が殊にさう感じたのは、兄と「姉

」とが箱根へ新婚旅行をするので、中車停車場から立つ時に、みんなしてそれを送つて行つた晩

のことである。

「芳ちゃん、直きに歸つて來ますから寂しがらないで待つていらつしやいよ。たんとお土産を買つて來て上げますから、——さうしてね、今夜はもう遅いんですから歸つたら直ぐに寝な

ればいけませんよ。」

新しい姉は、汽車の窓から首を出して、プラットホームに立つてゐる芳雄を見て羨望のい

い顔をしながらか何となくさう云つたのだつたけれども、いつもは束髪に結つてゐるのに其の晩

は回鬚だつたせゐるか別の人のやうに面髪がしつとと老けてしまつたやうに見えて、そんな

言葉にいかにも姉らしい品格が備はつて聞えるのだつた。

「それぢや御機嫌よう。……いづれまたそのうちに。」

と、その直ぐ次の列車で神戸へ歸ることになつてゐた祿次郎が、彼女の窓の下へ來てさう云つて帽子を取つた。

「祿ちゃんもほんたうに御機嫌よう。今度またいつ東京へいらつしやるの？」

「さうですね、まあ今年の暮でせうかね。……どうです、箱根もあまり平凡だからいつそ後の汽車で僕と一緒に神戸まで行つたら？」

「それも面白いでせうね、神戸でなくつても京都から奈良の方へお廻りになるとようござんすわ。」

と、柳子も傍でそんなことを云ふのだつた。

「……でも何でせう、僕なんぞが一緒ぢやあいないでせう。」

祿次郎は、内を出る時から少し酔つてゐたので、低い聲で姉の耳へ囁くやうな風に云ふと、

「知らなくつてよ。」

と云つて、姉は俄に顔を赧くしてうろたへた様子だつたが、それは初ひ初ひしく妙にはにかんだ風情だつたので、芳雄は男のやうに活潑だつた其の人のそんなところを見ることは始めて不思議なやうな心地がした。

「うちの兄貴も新しいラウが出來たんだから兎に角まあ仕合はせき、此れでちつとは元氣になるだらう。」

——兄の夫婦が立つてしまつてから神戸行きの列車の出るのを待ちながらブラツトフオームを三十分ほど散歩してゐる間に、祿次郎はそれを柳子と語り合つてゐた。

「ほんたうね、あれでいつまでも先のことばかり考へて居られぢや今度の姉さんが可哀さうだわ。……」

柳子はさう云つて、暫らく黙つてゐて、又ぼつりと思ひ出した事があるやうに云ひ足した。

「でもね、瑞枝さんだつて仕合はせでないことはないわ。兄さんのやうに奥さんを大事にする人はないんだから。」

「つまり兄貴の其處に惚れ込んだんだらうね。」と云つて、祿次郎は上を向いて大きな聲で笑つた。

* * * * *

新しい姉は箱根へ行つて居る間にも始終繪葉書を送つてくれたし、旅行から歸つて來てからは先の姉だつてもこれ程ではなかつたと思はれるくらゐ親切にしてくれて、兄と二人暮し

で居た時分には誰もそんなに氣を付けてくれなかつた小遣ひのことや着物のことや食べ物のことや、何かにつけて細かく面倒を見てくれて、

芳雄の方から甘えてねだつたりする折があると其れを一度でも承知してくれないことはないのだつた。兄も結婚してから後は一と晩でも遅く歸つて來るやうなことはなくて、大抵は四時か五時ごろに戻つて來て、姉が芳雄と遊んだりなどしてゐると、

「瑞枝さん、……」と云つて、——先の姉は「喜多子」と呼び捨てにされて居たのに、さん附けにして彼女を呼んだ。

「はあい」
姉はさう云つて、

「芳ちゃん、それぢや又あとでね。」と愛想よく云ひながらいそいそと立つて、兄と一緒に二階の居間へ上つて行つて、長い間其處に二人きりで睦むく話合つて居ると云ふ風だつた。

兄は暇さへあればいつも影のやうに姉の身に添つて居て、ちよいとでもお互に離れたくないやうな様子だつたので、随分仲のいい夫婦だと云ふことは芳雄の子供心に眼にあまるやうにさへ感じられる折があつて、先の奥さ

まの時分にはどんなに仲がよくつてもこれほどではなかつたのにと、女中たちまでがさう云つて盛口をきくくらゐだつた。

芳雄は、それほど姉を可愛がつて居る兄の心の内では、自分のやうな疑り深い弟のあることをどんなにか邪魔にしても居るだらうと云ふ風に氣を廻してゐて、姉があんまり自分をちやほやしてくれることを兄に對して済まないやうに感じて居たが、兄はそれを別段不愉快には思つて居ないで、此の頃はだんだん芳雄とも親しくすることを望んで居ると云ふ様子で、それを芳雄に分つて貰ひたいやうに素振りに出して見せるのだつた。夕方から夫婦が散歩に出かけようとする折などに、姉が、

「芳ちゃん、あなたも一緒に來なくつて？」と、そんなことを云つたりすると、

「芳雄お前と一緒に來たらどうだね、お前が來れば淺草へ行つて活動寫眞を見てもいいが、……」

さう云つて、兄はいくらか餘所餘所しいところを隠し切れずに、それでも何となくにこにこ笑つて見せたりした。

三人で表を歩く時には姉が二人の間に這入つて居て、彼女の兩側を行く兄と弟とは成る

べく直接には言葉を交さずに、姉を通じて話をすると云ふ風にしながら少しづつ親しみを感ぜ合はうとするやうに見えた。

「芳ちゃん、あなた何か欲しい本があるんぢやなかつたの。あるなら兄さんに買つてお頂きなさいな。」

などと云つて、姉の方からそんな機會を作つてくれるので、

「何だね、欲しい本と云ふのは？ 買つてやるからさう云ふがいい。」

と、兄もわりあひに不自然でなく愛情のある言葉を云ふことが出来るのだつた。

そんな時に芳雄は自分でも尙痒いやうな不思議な氣後れを感じながら、兄を失望させるのは悪いと思ふ心づかひから出来るだけは嬉しうな様子をして兄の顔を見上げたりすることはあつたが、それでもあの兄の眼の中を長く長く視て居ると、その眼の奥に情愛を裏切るやうなもの光つて居るやうな心地がして、兄の方ではつとそれに氣が付いたやうな工合になつて、二人が慌ててうつむいてしまふ場合があつた。兄は、どうかして自分の眼の中にさう云ふもののはれるのを防ぎたい、芳雄にいくら見守られても平氣で居られるやうになりたいと思つ

て其れを始終心にかけて居るらしかつたが、いつも其れほど大膽にはなれないで眼と眼を見合はせさへすれば直きにそうつと横を向いて、口もとではやはり機嫌よく笑ひながら知らぬ風を装つて居るやうにして居た。

姉は、——兄から其れを云ひ附かつて居たのかどうかは分らないけれど、——兄が非常に芳雄のことを思つて居て、學校の成績だの體の工合だのを心配したり、どんな物が好きだとか嫌ひだとか云ふやうなことまでも氣にかけていつでも姉に尋ねたりするくらゐだと云つて、それを思に着なければ悪いと云ふ調子で芳雄に話した。

「兄さんはね、ああ云ふ口數の少ない方ですから芳ちゃんには何とも仰つしやらないけれど、それはほんたうに始終なのよ、だから芳ちゃんが他人らしく遠慮なんかしたりすると却つてお氣持を悪くなるわ。芳雄の爲めになることならどんなことでもしてやるからつて、兄さんはいつともさう仰つしやつていらつしやるの。」

さう云ふとき、芳雄は何とも答へずに上眼を使つて姉の顔をまじまじと讀むやうにするのが癖だつた。彼女の顔にはただ美しく眩い笑ひ

が花やかに輝いて居るばかりで、其處からはいかなる秘密をも搜り出すことは出来なかつたけれど、……

かうして、兄とはうはべだけは以前よりもずつと親しくなつて居て、或る所までは兩方から近づいて行つて其處へ来てばつたり行き詰まつたまま動けなくなつて居るやうなちぐはぐな心持ち、——それは芳雄には以前の關係とさう變らない氣がねと重苦しさを覺えさせるに過ぎなかつた。それを何處までも何處までも追ひ詰めて考へて行くと、今まではぼうツと遠くに霞んで居た或る物がだんだんはつきりした形で芳雄の心に映つて来るやうになつて、芳雄が次第に頑強な子ではなくなつて来るに随つて、日々と共にそれが根も葉もない想像から實際の世界の方へじりじりと歩み寄つて来る、或る物の影、——ちやうど眞暗な路などを歩いて居る時に向うの闇からお化けのやうなものが近づいて来るのを、あれはお化けではない、人間だ人間だと思つて居るうちにずうツと傍へやつて来るのを見るとやつぱり恐ろしいお化けだつたりするやうな海氣味の悪い物の影、——が、とうとう芳雄に追ひ着いて来てそれを成るだけ見ないやうに見ないやうにとすればするほ

ど見ずには居られないやうな氣分に誘はれて行くのだつた。さうして其の誘惑は、兄が自分いわざとらしい親切を盡してくればくれだけ餘計に強くなつて行くやうに芳雄には感じられる。——兄が自分に親切を盡す。以前には年の行かない弟に對してあんなに冷淡だつた兄が、此の頃になつて俄に情愛を湧ら始めていろいろとやさしくしてくれる。それは、芳雄の成長して来たことに或る恐れを抱くやうになつて、敵意を持つてはならないと思ふ弱味を感じ出したのではないだらうか？

——お前はもう中學生だしそろそろ分別がついて来たのだから、あの時分に己と瑞枝とが何をして居たのかと云ふことは、だんだんお前にもよく分るやうになつて来たかも知れない。しかし此れからは己もお前を、供だと思つて馬鹿にしない代りにお前の方でもよく物事を考へて、詰まらぬことを思つたりしやべつたりしないやうにして貰ひたい。」

——芳雄は、兄のさう云つて居る心の聲を聞くやうな思ひがした。

先の姉が達者で居た時分、芳雄が十だつた歳の暮れに銀座の隣院の二階の普屋で見た今の姉と兄との様子、——その時の二人の體のこな

しだの驚いた顔つき、——姉は襟をひろげて居たので兄に診察をして貰つて居るやうに見せはしたものの、その部屋は診察室ではなかつたし、今になつて考へればそれがどう云ふことだつたかとも疑ひの餘地はない。兄も姉もそれに對して別に口止めはしなかつたけれど、兄は内内其の時から芳雄と云ふ者のあることが氣にかかると、さう云ふ風に、あの先の姉の亡くなつた時、芳雄が妙な顔をしたのでそれからほんたうに彼を疎んずるやうになつたのではないだらうかと、さう云ふ風に芳雄には推量されるのだつた。芳雄はしかし、兄と今の姉とが二人ぎりで見られては悪いやうにして居るところを、その後一年も立つてからも小石川の植物園で見たことがあつて、兄は其の頃ひどく陰鬱なむつりした人間になつて居たのを、ちやうど先の姉が病氣で寝て居た時分だつたのでその心配の爲めだらうと云ふやうに多くの人け思つて居たが、芳雄には其の時から兄を危険な人だと思ふ心持が湧いたのだつた。さうして間もなく先の姉のあの突然な怪しい死に方、——それを映次郎に對ねられた折の眞實になつた兄の表情、——姉の病氣は兄がいつても診察をして居て、死ぬ前の日に注射をしたのも兄

だつたと云ふやうなことを、さう云ふやうに一つ一つ三四年前からの出来事を想ひ浮べて細かく根柢り葉柢りして行くにつれて、芳雄の頭に根ざして居た疑ひが或る程まつたものになつて恐ろしい形に見えて来るのを、兄もうすうす感づいて居て其れを黙つて置く事が出来ななつて居るのではないか知らん?

兄は、自分の過去の罪が芳雄の心に或る證據を残して居て、それが芳雄の大きくなるのと共に育つて来るのを薄氣味悪く感じて居る。

——自分が瑞枝と一緒になつて先の妻をうまく欺して居たことや、芳雄を除いた兄弟たちの眼までも巧みに刺まして先の妻を愛して居たと云ふ風に見せかけて居たことや、——それ等の事情が現在の芳雄の習性で次第に見透かされるやうになつて来てゐるのを、兄の方でも今では明かに知つて居るに違ひない。けれども兄の犯した罪がただそれだけに過ぎないのならば、芳雄、兄からこんななまで餘所餘所しく疎んぜられはしなかつたらうと云ふやうに考へられる。いつぞや姉が亡くなつてから間もなくの暇に、夜半に電燈が消えて眞暗になつた時、芳雄がふと眼を覺まして姉戀ひしの心からふらふらと妙な氣になつて彼女の部屋へ送つて行つた

折角のこと、闇の中で三味線の縁に觸れて其れを鳴らしたと思つたら、兄がいつの間にか手燭を持つてうしろの廊下になつて居た——その時の兄の顔つき、それはお酒に酔つて居たせゐでもあらうけれど、どんよりと濁つて、或る物の影を一直線に睨んで居るやうに動かなくなつて居た瞳の様子、其處には幽霊をでも見たやうな怯えた色がありありと露はれて居たのを、芳雄は今でも其の通りに想ひ出すことが出来るほどまざまざと覺えて居るのである。兄はあの時、亡くなつた姉の部屋の中でひとりで三味線の音がしたと思つて、恐ろしさに堪へられずに降りて来たのではなかつたらうか。さうして事に依つたら兄の耳には三味線の音ばかりでなく其の外の聲までも聞え、その瞳には見えぬ、管の幻までが見えたのではなからうか。兄が其の頃毎晩のやうにお酒に酔つて歸つて来たことも、それから程なく彌生町の家を引き拂つてあの三味線を何處かへ隠してしまつたことも、兄の胸の奥に良心の苛責があつて、犯した罪を忘れようと思つて居た。だと云ふやうに取れるのだつた。

そんな事を芳雄がいつもよくよとしくどく考へてばかり居たと云ふのは、それは幼い折角のこと、闇の中で三味線の縁に觸れて其れを鳴らしたと思つたら、兄がいつの間にか手燭を持つてうしろの廊下になつて居た——その時の兄の顔つき、それはお酒に酔つて居たせゐでもあらうけれど、どんよりと濁つて、或る物の影を一直線に睨んで居るやうに動かなくなつて居た瞳の様子、其處には幽霊をでも見たやうな怯えた色がありありと露はれて居たのを、芳雄は今でも其の通りに想ひ出すことが出来るほどまざまざと覺えて居るのである。兄はあの時、亡くなつた姉の部屋の中でひとりで三味線の音がしたと思つて、恐ろしさに堪へられずに降りて来たのではなかつたらうか。さうして事に依つたら兄の耳には三味線の音ばかりでなく其の外の聲までも聞え、その瞳には見えぬ、管の幻までが見えたのではなからうか。兄が其の頃毎晩のやうにお酒に酔つて歸つて来たことも、それから程なく彌生町の家を引き拂つてあの三味線を何處かへ隠してしまつたことも、兄の胸の奥に良心の苛責があつて、犯した罪を忘れようと思つて居た。だと云ふやうに取れるのだつた。

時分から病身な子供だつたのが中學へ這入つてからも、よく風を引いて寝て居ることが多かつたし、十三歳の冬から十四の春へかけての頃は、氣管支加答兒だのインフルエンザだので一週間も二週間もつづけて床に就いて居たので、さういふ折に自然とそれをちへさせられるやうになつたのだつた。夕方、熱が四十度近くもあるやうな時などに、芳雄は若しひよつとしてそれを謔言に云つたりして、傍に看病して居てくれる姉に聞かれはしなかつたかと云ふ心配の爲めに、すやすやと眠りかかつたと思ふ頃に急に「あッ」と云つて叫ぶやうな口つきをして眼をばつちりと睨いたり、枕もとをきよるきよるろと見廻しながら體中に冷汗を掻いてふるへて居たりすることがあつた。

「芳ちゃん、……どうかしたの? 恐い夢でも見たんぢやなくつて?」
さう云つて姉に尋ねられる場合があると、芳雄は「恐い夢を見た」と云ふだけでも姉に知れては悪い様に感じられて、
「いいえ、何でもありません。」
と、さう云ひながら、眞青になつた顔の色を姉に見つけられないやうに水糞の下に隠して、又すやすやと寝入るやうな風を装はねばならな

つた。

しかし芳雄は、実際には悪く恐い夢を見た。夢の中に出て来る兄はいつも大抵はほんたうの兄と變りなく心配さうにふきぎ込んで居て、芳雄とたゞ二人ぎりでは何處か分らない寂しい暗い通り路をすたすたと歩いて行くのである。

「芳雄……」

と、兄は其の路を歩いて行く最中に、胸に重苦しい蟻りがあつてそれをどうしても云はずには居られなくなつたやうに突然聲をかけるのだつた。

「芳雄、已はお前が已を疑ぐつて居ることを知つて居る。もう隠すには及ばない、已はよく知つて居るのだから……」

さう云つてから、又長いこと黙つてすたすたと歩いて行つた時分に、

「……已はお前がなせ已を疑ぐつて居るのだといふ譯も知つて居る。先の姉さんが死んだ時に、あの晩に已はお前に顔を見られて眞青になつたことがあつた。さうしてお前はあの時から已を疑ぐるやうになつたのだ。ねえさうだらう、さうに違ひない。……」

さう云はれて芳雄は兄の顔色を窺ふと、背の高い兄は上の方から芳雄の姿を見おろしてにや

にやと笑つて居るのだつた。

「お前は已があの時あんな眞青な顔をしたので、已が姉さんを殺したのぢやないかといふ風に思つたのだらう。だけれど已は姉さんを殺した爲めに眞青な顔をしたのぢやない。已が眞青になつたのは、お前がきつと已を疑ぐつて居るだらうと思つて其れが恐かつたからなんだ。已は成る程お前に疑ぐられるだけのことはして居る。已はあの時分先の姉さんが死んでくれればいいと思つて居た。だからお前が疑ぐるのは無理もないのだが、お前に疑ぐられて居ると思ふと已は薄氣味が悪くなつてそれで眞青な顔をしたのだ。」

さう兄がぶつぶつ口の中で獨り話のやうに云ふ。……

「兄さん、どうか勘忍して下さい。僕が兄さんを疑ぐつたのは悪うございました。先の姉さんは殺されたのにしろさうでなかつたにしろもう死んでしまつたんですから、僕は今更そんなことを穿鑿しようとは思ひません。僕は兄さんを罪人にさせたつて何にも愉快なことはありません、ですすからどうか兄さんも安心して下さい。」

「お前はそれがよくないんだよ。お前は兄さんに安心をしろと云ひながら、心の内ではまだ兄

さんを疑ぐつて居る。兄さんは決して先の姉さんを殺した譯ぢやないんだから、それを信じてくれなけりやいけない。先の姉さんはあの通り腸加答兒で死んだんぢやないか。」

そんなことを云つて兄は夢の中でしきりと芳雄に言ひ譯をする。芳雄は心のうちで、自分はまだ子供だし大人のすることは大人になつて見なければ分らないのだから、自分が今まで兄を疑ぐつて居たのは濟まなかつたといふやうに考へさせられて来て兄を慰めてやる氣になつたり、また或る時には子供だからといつて大人のすることに欺されはしないといふつもりで、兄を何處までも問ひ詰めてやつたりするのでつた。問ひ詰められると兄はだんだんあの三味線を鳴らした晩の時のやうな凄まじい眼つきになつて、氣を失つて倒れさうな工合になつてよろとよるけながら、

「芳雄、もう其の事はいつてくれるな。後生だから勘忍してくれ。已が姉さんを殺したのは悪かつた。」

と、一生懸命に頼むやうな口調で繰り返して返しさういふので、眼がきめてから後までも、其の言葉は芳雄の耳に附いて居ることがあつた。芳雄が一番恐れたのは、かういふ風にして毎

日そんな夢ばかり見て居るうちに、今に亡くなつた姉が出て来て自分がどういふ方法で殺されたかといふやうな話をこまごまと説明して聞かせたりしやしないかと云ふこと、——さうして眼が覺めてからだんだんと事實を調べ上げて見ると夢の話にびつたり合つて居たりするやうなことだつた。芳雄はそれでなくてさへ自分が此の頃のやうに始終病氣になつて寝てばかりゐて、明け暮れいやな夢を見るやうな境遇に置かれたのも、みんな亡くなつた姉がさせて居るのだといふ風に考へて来て、兄の罪が世間へ露顯しないうちはいつまでも斯うして祟られるのではないだらうかと思つたりするのだつた。

「芳ちゃんや、姉さんはほんたうに兄さんに殺されたんですよ。それを知つて居るのはお前だけなのに、どうして芳ちゃんは黙つて居るの？ お前はまあ、あたしが生きてゐる時分にはあんなに可愛がつてやつたのに、何といふ薄情な子なんだらう。……」

と、姉はいつでも草葉の蔭からそんな泣き言を云つて居る。——さうして芳雄が彼女の味方につくまでは何處までも何處までも芳雄にいやな夢を見させる。——

「今の姉さんがいくらお前の看病をしてくれても、あたしのいふことを聞かないうちはお前の病氣は直る筈はない。今の姉さんは親切らしくして居るけれど、それはお前を味方につけたい爲めにあはして猫を被つて居るので、心の内は鬼のやうな人なんだ。……」

しまひにはさういつてあのものやましい今の姉をまでも呪ふ言葉が聞えて来る。——

ほんたうに今の姉さんはそんな陰險な人なだらうか。先の姉さんがああいふ不思議な死に方をしたのは、それは兄さんばかりの知つたことではなく、今の姉さんもその相談にあづかつてゐたのだらうか。兄さんは自分の犯した罪の爲めに始終良心の責め苦を受けてゐるらしくも見えないけれど、姉さんの方はそんな様子が少しも見えないところから思へば、やつぱり姉さんは兄さんの罪を知らずに結婚したのだらうか。——だけれど又、今の姉さんがほんたうに鬼のやうな心を持つてゐる人だとしたら、兄の罪を知りながらも平氣で結婚してああいふ風に猫を被つてやさしい顔つきをしてゐないとは限らない。——芳雄はさう思ひながら、枕もとに坐つてゐる姉の姿をつくづく眺めてゐると、さうして此の人が兄と一緒に先の姉を欺したの

だといふ風に考へて来ると、いつもは自分を我が子のやうにいたはつてくれる情愛の深い彼女の眼つき、雪のやうに白くほつそりしたしなやかな襟つき、先の姉よりはずつと優れて美しい器量の顔だが、兄に比べても幾層倍か物凄いい悪魔のやうに其處に現はれて来るのだつた。

—姉さん、僕はもう此の頃では親切にして下さる姉さんまで疑ふやうになりました。姉さんはあのことを御存じなのではないでせうか。さうして兄さんに頼まれて僕の様子を探るために傍に着いていらつしやるのではないでせうか。——

若しそんなことをむきつけにでもいつて尋ねてもしたら、愛敬のある姉の面持ちが見る間に鬼のやうに恐ろしく變つて来るのではないだらうかと、芳雄はそれをただ氣味が悪いとばかり思ふのではなく、お伽噺を讀んででもゐるやうな物好きな心持ちで空想したゝすることもあつた。

毎日毎日高い熱がつつてぢつとして寝て居ながら直きにうつとりと遠い所へ持つて行かれさうな氣分になるやうなことがよくあつて、ひよつとするともう死ぬのではないだらうかと思つて居たのに、三月の初旬ごろから漸う芳雄は學校へ出られるやうになつたのだつた。

あんまり長く休んでゐたから成程がいい筈はなかつたけれど、四月には兎に角及第することが出来てそれから暫らくの間は珍らしくつづけて學校へ通つてゐたのに、其の年の五月に先の姉の三回忌があつて一週間ばかり立つた或る日に、夕方から急にまた熱が出て来て、血を澤山略したことがあつた。いい鹽梅に四五日すると熱が七度臺に下つて少しづつ直つては來るやうだつたが、兄が學校を休んで成るべく靜かにして居なければならぬといふので、さうしてゐると、やつぱり先の姉の祟りといふやうなことが思ひ出され、そればかりでなくまた別のいろいろな恐ろしい想像が頭に湧いて來るのだつた。自分がこんなにもちよいちよい病氣に罹つたりするのは、兄がいつでも診察をして藥を飲ましてくれるからではあるまいかといふやうなこと、先の姉をさうしたのと同じ方法を兄は芳雄をもさうしようとしてゐるのではあるまいかといふやうなこと、それはいつから芳雄の胸にそんな考へが起つたのだつたかは分らないが、その疑ひは亡くなつた姉の祟りだと思ふことよりも遙かに事實らしく芳雄の神經を脅かさずには措かなかつた。先の姉もやつぱり斯ういふやうな工合に半年も一年も前からじりじりと

煩ちつて行つて、貧血を直す爲めだと云つて兄が時々注射をしてくれるのを其の通りにさせてゐると或る日俄に容體が變つて死んだのだつた。芳雄はまだ注射をされたことはなく病氣も姉のとは違つて居る様だけれども、兄がいつ藥の中へさう云ふ仕掛けをしなかつたものでもない。兄さんではいやだから外のお醫者に見せてくれろなどといへば其れはもう兄に向つて其の罪を發くのも同じことだし、そんなにしてまた此の上も兄から疎まれるやうになるのも恐ろしかつたし、もしかうしてゐて死ぬやうなことがあるならそれも運命だといふ風に芳雄はあきらめても見るとだつたが、いよいよ死ななければならぬやうな時が來たやうだつたら自分は兄さんの爲めを思つて何もいはずに大人しく死んで上げるのですといふ意味を、一と言兄の耳へ入れたいといふやうにも考へるのだつた。

……或る日芳雄はこんな夢を見た。……彌生町の先の家のうしろのところが高き崖になつてゐて、其處を降りられる様に出來てゐる、細い急な坂路の足場の悪いでこぼこな石だらけな段段を降りて行くと、東京の町の中とは思はれないやうに草がぼうぼうと繁つてすすき

などの一面に生えてゐるのが風になびいてさやさやと鳴つたりしてゐる、うら淋しい、ちよいとした廣い原ツ場の窪地があつた。其處へ或る雨の降る晩に、それは六月の半ば時分のことだつたから、鬱陶しい梅雨の時節の雨でしよぼしよと襟のやうに細かくしめやかに降るのだつた、——芳雄は何を考へたのか小石川の家を抜け出して、獨りで傘もささないでちやうど眼に見えぬ闇雲にでもおびき寄せられて行くやうにぼんやりと歩いて行つた。自分はまだ病氣がよくならない。それだのに斯うして寢着のままでもこんなお天氣に表へ出たりしてきつと後で悪くはないかと思つたが、その細かな雨に濡れるともなく顔が濡れて汗のやうにぬらぬらしてゐるのを手の甲で氣味悪くべつとりと拭き取りながら引き返す譯には行かないやうな氣持ちになつて歩くのだつた。彌生町の家のうしろ——彼處には死んだ姉さんの魂が迷つてゐる。彼處に行けばきつと姉さんに會へるのだ。姉さんは自分に何か話したい譯があつて自分をあの原ツ場へ呼び寄せるのに違ひない。——芳雄は歩いてゐる途中で、自分にはそんな考へがあるのだから斯うやつて内を抜け出して來たのだらうといふ風に思つた。

今は知らない人が住んでゐる先の家の門の前へ出て、塀の外から庭の椎の木に向うに部屋の前が見えてゐるのを「ああ彼處に今でも彼の部屋があるんだな。幼い時分に死んだ姉さんとよく話をしたり音楽會を開いたりしたあの部屋が今でもちゃんと彼處にあるんだな。」と芳雄は胸の中でさう獨り語をいひながら櫓への外側を裏口の方へ廻つて崖の縁へ出て、すすきが着物の裾へからまるほど生え茂つて人が笑ふやうな工合にゆらゆらと揺れて動いて居る坂路のさんだんを降りて、何だか遠い山奥へでも来たやうに其の晩は特にさう思はれた原ツ場のまん中まで通つて行つて、もう十分か二十分待つと姉さんに會へるんだと、堅い約束をして置いたつもりで其れを信じながら立つてゐると、兄が後ろから、

「芳雄」

といつて呼ぶのだつた。

跡をつけられたんだなと思つて芳雄は兄を振り返つて見てさう驚かずにおいたので、其れが兄には物凄かつたやうに二三歩たぢちちとなつてから、

「芳雄、お前は體が悪いのに何だつて今時分こんなところをうろついてゐるんだね。」

さういつて、成るだけ芳雄に疑ひ入り深い眼で見ることが止して貰ひたさうに機嫌を取るやうな笑顏を作つて、

「さあ、こんなことをしてゐて又病氣が悪くなるの大變ぢやないか。ね、兄さんと一緒にもう歸らう。さうしておくれ。それでないと兄さんは心配で困るんだよ。」

「僕は今ちき歸りますから、どうか兄さんは一足お先へいらして、——」

芳雄は其の時に自分の聲には死んだ姉の幽霊が乗り移つてゐて、何となくいふ言葉のうちにでも兄には身の毛が竦つやうに聞えるものが潜まれてゐはしないかといふ風におぼろげに感じながらいつたのだつたが、それがやつぱり其の通りだつたと見えて、兄はその言葉の聞きとひとしく、胸を挑まれた歌のやうな眼つきになつて、暫らくの間黙つて芳雄を睨まへてゐた。

「兄さんに先へ歸れといふならそりや歸つてもいいけれど、……」

と、兄は程へてから考へ考へ物をいふらしいおぼつた口調でいつて、あんまり恐ろしい態度を取るのには損だと云ふことに氣が付いた風で、それから少しやさしい低い聲になつて、

「しかしお前はこんなところに獨りで立つてゐ

てどうしようといふのかね。何かそれには譯があるのだらう。え？ その譯を見さんに云つてお聞かせ。」

「別に譯なんて云ふほどのことはないんですから、どうかそれを聞かないで下さい。兄さんにそんなことを云はれると僕は悲しくなるんです。」

さういつた芳雄の心は、兄さんの罪は僕にはよく分つてゐる、だがそれを見さんの前では云はせられるのは辛いから赦してくれろといふのだつた。

「お前がその譯をいふのがいやなら兄さんが云つて見よう。……」

と、兄が云つた。

「……兄さんは今迄お前にその譯を聞くのが恐かつた。だけど斯うしていつまでもいつまでも其の譯を聞かずに放つて置くと、己とお前との仲がだんだん氣まづくやつて兄弟の間に妙な隔たりが出来やうになる。それではお互によくないと思ふから今夜兄さんの方から其の話をしてみよう。——お前が今日ひとりこんなところへやつて来たのは、此處へ来れば先の姉さんに會へると思つたからぢやないのかね。」

「兄さん、——どうかももう止して下さい。——」

僕は恐くなつて來ましたから。」

「いいや何も恐がるには及ばない。恐いことがあると思ふのはそれはお前が間違つてゐるんだよ。お前は先の姉さんが幽霊になつてまだ此の世に迷つてゐると考へてゐるやうだけれど、先の姉さんは此の世に思ひが残る様な死に方をしたんぢやないんだから、決してそんなことがある筈はありやしない。兄さんはそれをお前によく話して置きたいと思つてゐる。」

「でも、兄さんがいくらさう仰つしやつても僕の心の奥にある疑ひは消すことが出來ませんから。——」

と、芳雄はさう口へ出していつたのではなく、ただ胸の中で考へただけだつたが、それが聞えたやうに兄は直ぐと答へるのだつた。

「それぢやお前はどうしても其れを疑ふと云ふのだね。あの死に方の何處に怪しいところがあるといふのだね。お前の心に疑念があるならどうぞ正直に云つておくれ。それを云つてくれさへすれば己はお前にわかるやうにくはしく説明して上げるから。ね、お互にさういふやうにして胸の中を打ち明けてしまふ方が却つて勘違ひをするやうなことがなくなつていいんだよ。さあ、芳雄、遠慮しないで何處がをかし

いと思ふのかそれを云つておくれ。先の姉さんが腸加答兒で死んだのではないとお前が思ふ譯は？」

「ああ」と、芳雄は其の時さう心の奥で叫んだ。——先の姉さんが自分を今夜此の原ツ場へ呼び寄せたのは、かうして此處へやつて來た兄をつかまへて自分に姉さんの代りになつて其の罪を問ひただしてくれと云ふのではないのかわらぬ？ それともまた自分が此れ迄疑つて居たことはみんな根も葉もない妄想に過ぎないで、そんなつまらない勘違ひのために兄弟の仲が割れてゐるのを姉さんは心配して下すつて、自分と兄とを和解させようとして此處へ落ち合はせたのでもあらうか。どつちにしても自分には姉が附いてゐてくれるといふ氣がしたので、

「兄さん、——そんなことを疑つては濟みませんけれど、僕が不思議に思ふのは姉さんが死ぬ前の日に兄さんが注射をなすつたことなんです。あれから姉さんの容體が急に悪くなつたと、さういふと、兄は口で笑ひながらぎよつとしたやうに瞳を光らせて、斯う、暗い夜の中にある芳雄の姿をすうツと奥深く見究めるやうにして立つてゐた。」

「……あの注射が何でをかしいことがあるんだね、注射をしたのはあの時が始めてだつた譯ではなし、あれは貧血の病人を直すのに普通のお醫者は誰でもさうする事なんだからちつとも不思議ではないんだよ。成るほどあのあとで直きに死んだには違ひないけれど、それは先もいつた通り急性の腸加答兒を起したんで何も注射をしたからいふ譯ぢやない。……」

「いいえ、姉さんは腸加答兒ではないんです。あれはあの注射をした薬の中に這入つて居た砒素の中毒だつたんです。」

いつかはさういはいはうと思つてゐたことをとうとう云つてやつた、といふやうな小氣味のいい氣持ちと、兄がそれを聞かされた場合に何か尋常では濟まないことが持ち上りはしないかと云ふ豫感とで、芳雄は眼の前がごちやごちやと見えなくなつて來るやうな混亂した心になりながら其れを投げ出すやうにいつた。

「砒素の中毒？」

といつて兄はもう其の時に氣絶をしきうな合合になつて、

「お前はそんなことを誰から聞いた。——そりやあの中には砒素が這入つてゐたには違ひない。だけでも砒素といふものは貧血の薬なん

だから、それを使つたつて別に怪しいことはいんだよ。」

「でも、人を殺さうと思つて砒素をわざと澤山使へば殺すことも出来るといふ話を僕は薬局の書生に聞いたことがあるんです。僕してそれで死ぬ人は、ちやうど姉さんのやうに下痢を起して眞白な牛乳のやうなものをどすんだつて云ふぢやありませんか。」

芳雄は、その一言の爲めに兄が不意に鐵砲の玉か何かで額を射抜かれてもしたやうな形をして仰向けに反つて倒れてしまひはしないだらうかと思つてゐたのに、兄はそれをぐつと堪へてやり過してしまつたやうな様子で、

「ふん、さうか……」

と云つて、俄に肩をゆすぶつてせせら笑ふのだつた。

「お前が其處まで知つてゐるなら兄さんもう何もいふまい。しかしお前だつて兄さんを罪人にしたくはないだらうから、まさかそんな事を誰にもいひはしないだらうね。それを秘密にして置いてくれれば兄さんは此れからお前をいくらでも可愛がつて上げる。ねえ、その方がお前の爲めにもどんなに得だか知れないぢやないか。さうしてほんたうに兄さん仲よく暮すやう

にしようぢやないか。」

「ええ、僕もさういふ風になりたいと思つてゐるんです。——ただ兄さんが心の底から後悔して下すつて先の姉さんに詫まつてさへ下されば。」

「そりや後悔してゐるとも。兄さんは毎朝毎朝佛壇へお線香を上げる度毎にいつでも死んだ姉さんにお詫びをいつてゐるんだよ。」

「それぢやほんたうに後悔していらつしやるんですね。」

芳雄は胸が晴れ晴れしてうれしかつたのでさう云ひながら兄の體へ飛び着きさうにしたとたんに、——兄は自分を欺してゐる。かうして油斷させておいて此の寂しい原ツ場の中で自分を殺さうとたくらんでゐる。——と、そんな考へが外から囁く人があつたやうにふいと湧き上つて来て、その心で兄の顔色を窺ふと、其れを悟られてはならないとして居るやうに兄は一と入機嫌よく笑つて見せて、

「ああさうだとも、ほんたうに兄さんは悪いことをした。その爲めにお前にもそんな心配をかけたなりなからして済まなかつたね。だがもう此れで分つたんだからお互に仲よくしようぢやないか。さうしてね、こんなところについて迄もぐ

づぐづしてゐるとお前の體にも觸るしするからさつさと内へ歸らうぢやないか。ね、分つたらうね。——さあ、兄さんが手を引いて上げるから此方へおいで。」

兄が芳雄を殺さうとしてゐる證據には、原町の家へ歸るのには反對の方角になる以前の岸線のだんだんのある足場の悪い坂道の方へ、兄はさう云つて甘やかすやうに誘ひながらそのくせ手には力を入れて芳雄の手首をしつかりと握りしめて歩いて行くのだつた。だが、いよいよさうに違ひないと芳雄に思はれたのは、だんだんの上り口へ来た時に眞つ暗の中で「おほほ」と笑ふ聲が聞えて坂道の上の方に今の姉が二人の上つて来るのを待つてゐるのだつと。

「芳ちゃん、あなたは兄さんと仲直りをなすつたんですつてね。ほんたうにいい隠れでしたこと。あたし心配だつたもんだからお迎ひにやつて来たんですの。——そこは足場がわるうござんすから轉ばないやうに氣を付けてね。」

姉がそんなことを云つてゐるうちに、兄は芳雄を先へ立てて自分は後から上つて来たがそれはいざといふ場合にどつちへも逃げられないやうに芳雄を自分たち夫婦の間へ挟んで歩かせ積りであるらしく、さうして此の坂を登りつ

めるまでうちに後から危害を加へようとする計略なのだ。芳雄はさう感づいてしまったので、ああもう自分の命も此處で終るのか、先の姉さんは自分を守つてくれないのか、もうとても仕様がな、と、考へてゐる間にも、こぼこの石のある路はひと足一と足にちぢまつて行つて、いまだにしようしよぼと降つて居る驟雨にびつしよりと濕つた着物の裾が脛へべとべと粘つこく絡みついて、それとなくさへ歩きにくいのだからいざといふ時にはとても逃げることは出来ないのだと観念しながら、今殺されるか、ほら、もうやられるかと眼を潰つて歩いてゐると、路ばたの露に濡れたすすきの葉が折折ひやりと襟を撫でるのにも「あッ」と云ひさうになつて生きてゐる空はなく、もう一と足で坂の頂邊まで登り詰めるところまで来た時に、

「あなたも此處で坂がおしまひになるんですよ。」

と、上から姉がさう云つて兄に合圖するのだつた。芳雄は急に足が疎んで恐ろしきで一杯になつてしまつて、今迄の覺悟も何も忘れたやうになつて、

「あッ、姉さん助けて下さい！ 僕は殺されるのはいやです！」

と、一生懸命にさう叫んだ拍子に、夢を見てゐるんだと氣が付いて、でもまだ眼をあくことが出来ずにゐると、自分はやつぱり熱が高くつて起きも上れずに布団の上に寝てゐることや、頭の方が腫さへつけられるやうに重くなつて居ることや、「芳ちゃん、姉さんは此處にゐるんですよ。」といひながら姉がしきりに自分を揺り起してくれてゐることやが次第にはつきりと分つて来て、ばツと救はれたやうな心地で眼を開いた。

「芳ちゃん、何うなまつてゐたの？」

姉のその聲がかかると芳雄は電燈のあかりを眩しさに避けてばちばちと二三度眼を開きをしてから、

「ええ？」

と、わざと驚いたやうにいつて、極まりが悪かつたので、枕もとの電燈を背にして坐つてゐる姉の頭の大きな暗い影の中へ自分の顔を入れながら、とうとうその人に證話を聞かされてしまつたと思ふその人の襟子を読むやうな合合に恐ろしく見上げると、姉は別に氣に留めてゐるらしい風はななくにつこりして、

「どうしたの芳ちゃん、あんなにうなされて、何を夢に見てゐたの？」

と、——その顔は明りの蔭にありながら花やかな笑ひの爲めに、顔の後ろにある心の祕密がとも外からは覗けないやうにざらざらとかがやきながら、——いふのだつた。芳雄はほつとして、未だにどきどきと體中へ響く動悸が鳴つてゐる胸の上へ手を當ててゐるが、姉から餘りしみじみと注視されるのがいやだつたので其れを避けようとして右を下に横向きになるやうに寝返りを打つと、枕にびつたりと附けてゐる片方の耳から動悸が前よりも一層強く傳はつて、脳髓が槌を打ち込まれつたつある地面のやうに人がんと響いて痺れて來たので、ちーいッとして我慢しながら眉間の方へザリ落ちさうになつて居る氷囊の下から布団の外にべつたく海のやうにひろがった曇りの目を越して、部屋の衝きあたりの唐紙の方へ視線をやつたとき、——其處に、ゆかたを着て腕を組んで體をコチコチに堅くさせて坐つたまま、狂ひを附けるやうな眼つきで此方を睨んでゐる兄がゐると、芳雄は自分がもう死んでしまつたのぢやないかと云ふ風に思つたのだつた。なぜかなら其の折の兄の顔色がちやうど先の姉の死骸を見た時のあの覗のそれと少しも違はないくらゐに眞青だつたから。

——さうして其の瞳は猫のそののやうに眞白く

なつて動かさずにあたから。

「芳雄」

と、兄はやがて吸ひから解かれたやうな風つきで、兩腕をだらりと肩から垂らしてしまつた後、落ち着いた聲でさう云ひながら膝の傍へ擦り寄つて来て、

「どうだね工合は？」

と云つて、又腕を組んで下腹をぐつと落すやうな鹽梅に深く息をついてから何か次ぎに云はうとすることを考へてゐるらしくも見えた。...

「どうだね、工合は？...」

さうもう一通云つた時にたつた今夢の中で會つた通りの底氣味の悪い無理に押し出したやうな薄笑ひが兄の口もとに浮き出して、それが木へでも彫つたものやうに微動だもせずに兩頬に凍り着いてゐたが、ふいと見ると、芳雄がそれまで氣が付かなかつた兄の右手の指の間には、小さくびかびか光る注射の針が持たれてゐて、それが手と一緒に細かく頭へて蜘蛛が天井から糸を引きながら吊る下つて來るやうに芳雄の額の上に垂れ懸つてゐるのだつた。

「芳雄、今夜は一つ注射をして見よう。...さうしたら多分よくなるかも知れないから、...」それを聞くと、芳雄は血がぞうツと頭の方へ

上つて来て、カツカツと火照つた火の氣のやうに熱いものが皮膚の上によらめいて燃えて通つたあとで、今度は反対に氷の如く冷めたい感じがひたひたと手足へ一面に寄せて來るのを覺えながら、自分でも意外だつたほどの敵意を含んだ恐ろしい眼つきをして、

「兄さん、御免なさい、僕は注射なんぞされるのはいやです。」

と、一生懸命な調子で云つて憎憎しく兄の顔を睨み返した。

「なぜだ？ なぜいやなんだい？」

兄は凄じく怒つてやらうとしても、顔の筋がお面のやうに硬張つてしまつたかの如くに依然としてその頬には例の薄笑ひを刻みつけたまま瞳だけを落ち窪ませてざろりと殺氣立てて光らせながら、微暖れた、陰氣に重重しく響く聲で云つたが、その聲の下から芳雄は一層反抗的な氣分になつてまだうなされて居るやうな工合に物狂はしく身悶えしながら云ふのだつた。

「兄さん、後生だから止して下さい。僕は死ぬのはいやですから、...」

それからちよいとの間、あたりはしーんとした静かさで、その時やつと兄の頬にある笑ひの線がびくびくと動き出すらしい様子が見えて、

馬鹿げて大きくばつちりと開かれた瞳の坐つた眼の中から、何か氣遣ひじみた稻妻がびよいと飛び出したやうだつたが、突然、

「馬鹿！」

と云つて、兄は猛悪な相になつて芳雄を怒鳴りつけたと思ふと、その反動で自分自身が氣を失つてしまつたやうに見えるうちに唇を土氣色にして、注射の針を指の股からばたんと落して仰向になつた。...

その明るる日から一と月ばかりの間は兄は芳雄の病室には姿を見せないで、姉や看護婦に云ひつけて薬を飲ませるやうにするだけだつた。でも、七月の月はなになつて、芳雄の衰弱がだんだんに見えて加はつて來るのを捨て置く譯にも行かないのでそれから又をり診察してくれたけれど、用の外は殆んど口もきかないで黙つて脈を見たり熱を測つたりして直ぐに病室を出て行くのだつた。姉も兄からさうしろと云はれてゐるのかどうか以前ほどには親切にしてくれないでただ時時お役目のやうに附いて居たが、夕方兄が醫院から戻つて來た後には殊にさうして芳雄の傍にばかり居るの

* * * * *

は兄に對しても悪いと云ふ風に考へて居るらしかつた。

兄は、姉が芳雄の部屋に行くのを實際いやがつて居る様子で、少しの間でも彼女が見えなかつたりすると病室の外廊下に来て、

「瑞枝さん」

と、いくらか急かちな調子で襖の向うから呼ぶのだつた。さうして内に居さへすれば姉の跡ばかり追ひ廻して居て、彼女を可愛がる度は芳雄を疎んずるにつれて日増しに激しくなつて来るらしく、御飯をたべるのにもお湯へ這入るのにも、何から何まで一緒になければ承知が出来ないと云ふ風になつて行つた。

長らくはじめと降りつづいた梅雨がもう二三日で明けると云ふ頃のこと、——それは蒸し暑い静かな晩で、芳雄の病室には兄の夫婦や神戸から電報で呼ばれた祿次郎や宮本の柳子や廣澤の叔母などが多勢集まつては居たけれどひとつそりと水を打つたやうになつて居て、芳雄はただ自分の額の上に載つてゐる水囊の中の水のちとちと溶けて行く微かな音を、遠く遙かな物の響きにも耳を傾けつつあるやうな心地で聞いて居るのであつた。芳雄には、水の溶けると同じやうに自分の命がもう終りに

して居る危篤な状態にあるのだと分つてゐても、それが今では悲しくも恐ろしくもなくて、自分分は僅か十四の歳で死ななければならぬことや、此れと云ふ面白き思ひもせず人に疑がつてばかりゐて苦しい気持ちも味はひ通した短い一生の間のことや、そんないろいろの不運を

かへ合はせても、もつと生きたいと云ふ氣にならぬで、成る程死ぬときには人間は斯う云ふ工合にだんだんとあきらめが附いて来て、樂に此の世を立ち去ることが出来るのだと云ふ風に感ぜられた。

「芳ちゃん、お前ね、まだ何んでもないんだから、決して力を落すには及ばないんですよ。」

柳子がさう云つて傍近くへ寄ると、芳雄は却つて彼女の言葉を憐れむやうに笑ひながら、「ええ有り難う。だけど姉さん、死ぬなんてちつとも苦しくも何ともないんですよ、そんな心配して下さらないやうに。」

と云つて、それから直ぐに笑ふのを止めて蠟のやうに白い色をした顔に深々とした表情を浮かべて、今死なうとして居る自分だけにしか分らない、或る貴い神聖な物をおつと視詰めるやうな眼つきで、やや長い間腫を大きく朗らかに

睨いて居た。——それは其處に居る總べての人が誰しも其の神聖な物が芳雄にだけはつきりと見えてゐることを疑ふ譯には行かないやうなさうして其の人たちも其の時の彼の瞳を通してそれを堅く信じるやうになるくらゐな神神しさの光ち溢れて居る眼つきを以て。

「芳ちゃん、ほんたうに大丈夫なんですだから氣をたしかにしていらつしやいよ。氣さへたしかにして居ればきつと直るつて、兄さんも仰つしやつていらつしやるんですから。」

姉が慰めるやうにさう云ふと、彼女に並んで坐つて居た兄も恐る恐る言葉を添へた。

「芳雄、氣をしつかりするがいいぞ、まだ大丈夫なんだから。」

さう云つたとき、芳雄の眼はやはり以前の神神しさを一杯に湛へたままで徐ろに兄の方へ向いた。——ちやうど芳雄の視詰めようとして居る貴い神聖な物が其の兄の顔の奥にもあるかのやうに。兄はその威に打たれたかの如くはツとして下を向いて、いまだにまだ心の秘密を讀まれまいとするやうだつたが、芳雄はその氣の毒な空しい努力を嘲けるよりも兄をそんなに氣の毒にさせた自分の今迄の狭い心が淺ましくなつて、先の姉の死ぬ時にはきつと現在の

自分のやうに凡べての人を許してやつただらうと思ふと、ああほんたうに兄には濟まなかつたんだと云ふ感情がむらむらと湧き上つて来て、一兄さん、兄さん。」

と、瘦せた手頭を伸べて兄をんだ。

「兄さん、今迄は僕が悪うございました。僕は兄さんの仕合はせを祈つて居ます。どうか此れからいつ迄も姉さんを可愛がつて上げて下さい。さうして仲よくお暮しなすつて下さい。」

「ああ有り難うよ。」

と、さう云ふ兄と姉との聲が、今は眼を閉ぢてうつらうつらと眠るやうになつて行く芳雄の耳に聞えた。芳雄は、先の姉が嘗て通つて行つた煩らひのない安らかな道を自分も今通りつつあるのだと云ふ心地をして、今度こそほんたうに撞れてゐた彼女の靈にもう直き其處で會へるのだと、固く固くそれを信じた。……

赤い屋根

中山手三丁目で電車を降りて、三の宮の方へ一直線に下つてゐるアスファルトの坂道を歩き出すと、藪子の姿勢には自ら一種の「形」がつき、足はひとりでに弾んで行つた。

今日はいあんまりお天気が好し、それにちやうどお午迄には指環が出来てゐる筈だし、……と、さう思つたら急にその指環が見たくなつて、ふらりと神戸へやつて来たのだが、かう云ふ時に彼女は廻り道をしてでも、此の坂道をスタスタ歩くのが好きなのである。一帯に街が綺麗で、大概な路面はアスファルトで固めてある神戸の中でも、土地の人がトリア・ロードと呼んでゐる此の坂は一番氣持がいい。後ろの方には新緑の衣を着けたトリア・ホテルの丘があつて、そこから眞つ直ぐに、恰も白雲で描いたやうにカツキリした道が、海岸へ向つて降りてゐる。海岸の方には、晴れた五月の青空の下に、明海ビルディングだの、オリエンタル・ホテルだの高い

建物があるが、角砂糖を重ねた如く遠景の中に際立つてゐる。藪子は此處を歩いてゐると、嘗て一年ばかりを過ぎた上海の街を想ひ浮かべて、今でも彼處に住んでゐるやうな氣がするのである。

運動靴のゴムの踵で平らな地面を音もなく踏みしめ、訓練をする馬のやうな足取りで、すうッ、すうッとして、彼女が坂を降りるに随ひ、兩側の店舗のガラスの面には、その花やかな黄色い服が折折ひらひらと蝶蝶のやうに映つて行く。

人造絹絲の、つい此の間自分で編んだワンピースに、同じ手編みの絲のスカーフを頤の下へ一と廻り巻いて、残りをだらりと後ろへ垂らし、花もリボンも飾つてない、此れも共色の羅紗の帽子を被つた姿は、靴と襪と、パテント・レザーの帯を除けば、體中が黄色づくめで、商賣柄に似合はない、あつさりとした好みである。彼女は自分の西班牙風の薄青い皮膚が、此のお粗末な手製の服によく映るのを知つてゐるので、散歩と云ふと時々此れを着て見るのだが、今日はお出しなに不精をきめて、コルセットを着けて

ゐなかつた。上衣の下にはほんの一部分、胸の周りにシユミースがふわふわしてゐるばかり、歩く拍子に細い絹絲の編み目を透して、風が素肌に沁みる工合が、裸體であるのと同じ輕快な感じであつた。此の服装で、手には一本の、革紐の附いた籐のケーンを振りながら行く恰好は、西洋嬢のタイピストが午の休みに運動に出たと云ふ形で、遠日に見たら間違へる人もあるかも知れない。彼女も實はさう見られた氣持もあつて、此の往來を通る時は帽子を眼深に、鐐の先からやや仰向いた鼻の頭と、佛蘭西製のルージュを塗つた唇だけが目立つやうにした。

「一番頭さん、此の間の直しはもう出来てゐる？」

坂の中途の、スワン商會の店へ這入ると、兩手で籐のケーンを持つて、膝頭へぶらんぶらん打つつけながら、だだッ兒のやうに體を揺すつた。

「ええと、宮島さんのは、あれはたしか、——」
「今日のお午迄に間違ひなくと云ふ約束だから、出来てゐなければならぬ筈だわ。ほら、もう二時過ぎよ。」
キラリと小さな腕時計が手裏に光つて、それ

が番頭の鼻先へ突き出される。

「は、出来てをる管でございます、ちよつと調べて参りますから、——」

番頭が奥へ引つ込むと、待ち遠しさうに土間を往つたり來たりして、その間も油断なく、目欲しい物はないかしらんと云ふ風に、陳列櫥の寶石を一つ一つ覗いてゐる。「あ、小僧さん、此れはなアに？」と云ひながら、石を手にとつて眺めたりする。此の、閑人らしいお嬢さんは、こんな事より屈託のない、結構な身の上なのであらうか？

直しを頼んだ品と云ふのは、五六日前、此の店の窓に飾つてあるアクアマリンの指環を見つけて、直ぐ買ふことにきめたのだが、金の臺の赤ツぽいのが気に入らないので、もつと黄色い金にするやうに、云ひつけたのである。彼女はそれを、今着てゐる手編みの服にも、今度誂へたオルガンデイーの夏服にも、よく調和する色にしたかつた。あんな赤ツぽい金の色では、第一腕時計の金に比べても不釣合だと、さう思つた。「あら、番頭さん、此れぢやちつとも直つてゐやあしないぢやないの。」
持つて來られた天鵝絨の函を開けると、彼女は氣むづかしく眉をひそめた。

「へえ、——いえ、——それで直つてをりますんですが——」

「うそよ、やつぱり赤ツちやけてゐるぢやないの！ ほら、」

と、函から摘まみ出して、その服の傍へ嗅つ着けて、

「見て頂戴、此の着物の方がずつと黄色いから。——此れと同じ色にしてくれろつて、此の間あんなに云つといたのに、どうしたのよ、一體、——」

「へえ、成る程、——まだ幾分か赤かかつてはをりますが、此のくらゐならそのお召し物に映らないことはございません。」

「駄目駄目、此れぢやあ厭よ、こんなものが附けられるもんか！」

かう云ふ場合に、満子はいつも妙なヂレンマに陥るのである。色の配合や地質の善悪や、詮議がやかましい一方に、買ったとなるとそれを即座に身に着けたい、その日のうちに皆に見せて歩かなければ氣が済まない、——そんなセツカチな所もあるので、たとへば服の假り縫ひなどでも、何の彼のと文句は云ひながら、三度ほど四度も仕立て直しをするやうになると、もう欲しい方が先に立つて、ええ構はない、面倒臭

いから我慢しまへと思つてしまふ。それで結局、商人にも馬鹿にされるし、自分も損をするのであつた。

「ねえ、ちよつと！ どうしてくれるの？ もつと黄色く出来なないかしら？」

出来なないことはございません、それではもう一度工場の方へ廻しまして、——」

「ぢやあ、いつ迄に直るのよ？ あたし、斯う見えても江戸ッ兒よ、上方の人は氣が長かつて、此れだから厭だわ。」

「えへへへ、いえ、もう決してそんな事は、早速お直し致しますから、どうか五六日御辛抱を。」

「五六日？」

「へえ、來週の水曜日迄ではいかがでございます、今度こそ間違ひはございませんが、——」
指環は彼女の手の中にある。それを二三度、手放したくはなさきうに、掌の上でコロコロと振つて、それから小指へ嵌めて見て、明るい方へ手の甲を向けた。
「でもどうかしら？ そんなに可笑しくはないかしら？」
「ちつとも可笑しくはございませんよ、それで此の間の金よりは、ずつと黄色くなつてをり

ます。」

「この腕時計と比べてどう？ 違つてゐるやうに見えやしない？」

それを番頭に聞いたところで仕方がないのだが、自分でどうやら満足が行くまで執拗く尋ねて、

「ぢやあ、まあいいわ、負けといて上げるわ。」

と、あまり威張つた後なので極まりが悪さうに彼女は云つた。そして空っぽの函をポケットに収めて、一旦小指へ嵌めたものは再び抜かうとはしなかつた。

「左様なら、――四五日うちに又来るわよ、何か耳環にいい石があつたら取つといて頂戴。」

往來へ出ると、彼女はときどき小指の「黄色」を氣にしながら歩いた。もう懐ろには十圓札が一枚だけしかないのだけれど、どうせ今夜は小田切が来るから、百圓か二百圓は大丈夫貰へる。さうすれば明日は又お金持ちになるのだから、此れから元町をひと廻り廻つて、買ひたい物を見つけて置かうか。レインクロフオードや

レア商會にも、新しい夏物が来てゐるだらう。今年もそろそろ、海水服を買つて置かなければならないんだが、……

三の宮の踏切を越えて、電車通りまで出て來

た時、彼女はもう一度「元町へ行かうかどうか」と氣迷ひながら立ち止まつて、腕時計を見た。時間はきつちり三時だつた。小田切の來るのは晩の七時か八時だらうし、今から家へ歸つたところで面白いことがあるのでもないが、事に依つたら「寺木さん」から返辭が届いてゐるかも知れない。あの人はいつも直ぐに返辭をくれるのだから、もう今日あたりは、午後の配達で届く時分だ。四角な、厚い、布目の紙の西洋封筒。それへ「宮島藩子様」と、恰も毛筆で書いたやうに、太く、達者に、シツカリと据わつた男らしい字。……その、濃いインキの、萬

年筆の手蹟が、彼女の眼の前にチラチラした。萬年筆を握つてゐるあの人の手が想ひ出された。日に焼けて、赤銅色に染まつた手。ガツシリとした骨組の、五本の指にはキャッチ。ボールのたこの出來た、岩のやうに頑丈な手。藩子はあの手が好きだつた。

(以下五十二字削除)。いつも大學の制服ばかり着てゐるので、體を見たことはないけれど、きつとあの手と襟袖の取れた立派な體格をしてゐやしないか？ 黒黒と胸毛の生えた、彈力に富んだ逞しい胸。拳闘家のそののやうに肉の盛り上つたたつぷりした肩。強い腕と深い呼吸。

……凡てが健康そのものやうな、疲れを知らない若若しさと純潔とで、張り切つてゐやしないか？……

「さうだ、今日はお金がないんだし、うちへ歸つてあの人の手紙を見た方がいい。」

元町の方へ二た足三足行きかけてから、矢つ張りさうと思ひ直して、彼女はふいと引つ返した。レインクロフオードの前を通ると、それでもちよつと立ち止まつて飾り窓を覗いたが、やがて向う側のユーハイムへ寄り、五分ほど様子に腰かけて、紅茶を飲みながら西洋菓子を三つ四つ喰べてから、上筒井行きの電車に乗つた。

二

藩子の住んでゐる家は、大阪と神戸の間、阪急電車の西の宮で乗り換へて、あれから寶塚へ行く線の、とある小さな停車場の近くにあつた。電車から見ると、まるで海岸の砂濱のやうな明るい白土ちやけた地面に、可愛い小松の林が続いて、幅は廣いが水はそんなに澤山はない。一とすぢの川が、その間をちよろちよろと流れてゐる。何でも陰氣なことが嫌ひで、派手に陽氣にと暮らしたがる彼女は、始めて家を捜しに來た時、此處の景色が氣に入つてしまつた。

東京の郊外の黒つばい土を見馴れた眼には、洗ひ出したやうな綺麗な土の色が珍しかった。白いのは地面ばかりでなく、川床の沙や、護岸の石崖も白く、ところどころにチラホラ建つてゐる文化住宅の壁も白い。その單調を破るものは、それらの住宅の屋根瓦の「赤」と、林の松の幹の「赤」と、濃い、新鮮な葉の「緑」とがあるばかり。見渡したところ、此の明快な三つの原色で成り立つてゐるランドスケープは、油絵の具がまだ乾かないでゐるかのやうに生々しく、初夏の晴れた日光の下では、強い照り返しが瞳に痛いくらいみだつた。

或る土地會社が「翠香園文化村」と云ふ名をつけて、此處を經營し始めたのは一年ばかり前のことだが、彼女が移つて来てからでも、彼女の丘や此方の川縁にもう五六軒も家が殖えた。彼女の借りたのは川を南に控へた場所の、疎らな松に圍まれた一軒で、庭から直ぐに石崖になり、水はその下を流れてゐた。外から見れば西洋館で、中へ這入れば日本座敷の家の作りは、天井が低く、間仕切りが多くて案外風通しが悪く、「こんなに松が澤山あつて流れが近いから、夏は涼しうございませう」と云ふ土地會社の口上とは勝手が違う、聊かそれに乘せられ

た形もあつたけれど、這入りたてには塗つたばかりの壁の匂ひがしてゐたから、壁から何から眞新しいのが取り柄だつた。

二階が八疊に六疊の二た間、その外側に打つ通しの縁側があり、階下は湯殿と臺所の外に、玄關を加へて三密屋あつて、家族は女主人の繭子と、従妹のお美代と、下女のお元の三人だつたが、時々小田切がやつて来るし、此の頃は又現像技師の恩地が泊まり込んでゐるし、それになくても彼女と同じ映畫會社に勤めてゐる男とか、キネマ關係の連中とか、ダンス友達とか、誰かしら男ツ氣のないことはなかつた。

「ああ、暑かつた！今日は薄着で行つたんだけれど、歩いたら汗を掻いちゃつて、——」繭子は四時頃に戻つて来ると、びーンと三和土へ罅隙が入りさうな音をさせて、玄關の土間へケーンを投げ捨て、埃だらけな靴のビジュウを外しながら云つた。「お歸んなさいまし、」と、殆んど聞き取れない程小聲に、口の内で云つて、そこへ出て来たのはお美代である。繭子より五つ歳下の、今年十八になるのだが、生れつきの偶像で、従妹とは云へ何處も繭子に似たところはなく、顔も體も十四五歳で發育が止

まつてしまつたやうに、ひねこびてゐた。一昨年の震災で本所の家を焼かれてから、暫く東京で苦勞をした後、今では此處へ引き取られて「姉さん」の厄介になつてゐるものの、黙つて、むツつりしてゐるだけに神經質で、癖性で、遣リツ放しな繭子の身の周りの世話を引き受け、普通の小間使の三人前も働いてゐる、繭子に取つて此れ程忠實な、重寶な女はないのだつた。「あの兒は可哀さうだから、面倒を見ておやり」と、小田切もさう云つて

心づげなどをやつたのだが、そんなお金は一支も使はず、お給金と一緒に取つて置くのを、「美代ちゃん、お前十圓ばかり持つてないかい？」と、好い加減溜つた時分になると、却つて繭子に借りられてしまふ。それでも決して厭な顔はしないで、「いいえ、いつでもいいんですから」と、催促一つするのではなかつた。

「神戸へ行つたら、白いパンツを穿いてゐる人が大分あつたわ。あたしも今日はフランネルを着るから出しといっておくれ。」ぬいだ方の片足で玄關へ上つて、片一方の足先の先から、ぽんと靴を裏返しに脱ぎ落すと、お美代が「はあ」と云ひながら、直ぐ土間へ降りて、それを拾つて、靴型を填める。——その間に

蘭子は二階へ上つて行つた。

有りつたけの窓が涼しく明け放されてはあつたが、戸外の明るみから這入つたせるか、部屋の中は、しつとりとした、上せた頭を鎮静させるほどの暗さで、川からの反射が、マジヨリカの浜や、本箱のガラスや、机の板や、そのほの暗い中にある物に、しーんと湛へられた水のやうな底光りを與へてゐる。松林の奥で小鳥がちいさい啼きしきると流れの音が微妙にする外は、何も聞えない。まだ半年とは立たない住居ではあるけれど、さすがに「我が家へ戻つた」と云ふ落ち着いた気分を、彼女は感じた。そしていつでも、郵便物が届いたら其の上に乗せてある筈の、机の方へ歩み寄つた。

「宮島蘭子様」——あの萬年筆の手蹟が、直ぐ眼に這入つた。破るのに骨が折れるほど丈夫な封筒を、急いで切つて、立ちながら讀んだ。

唯今お手紙を拜見しました、日曜の午後には遊びに来いと仰せ、誠に有難く存じます。僕もお伺ひしたいのですが、生憎目下北海道から父と妹が京都見物に来てゐますので、折角の御好意を無にしなければならぬことを残念に思ひます。いづれ國の者が歸つてから、又改め

て都合のいい日をお打ち合はせした上で、ゆつくりお邪魔に上りませう。その時は大いに御馳走になります。勝手を云つて済みませんが、何卒悪くお思ひにならないやうにお願いいたします。

先日京極で「南京情話」をやつてゐました。僕は東京で一度見たことがあるのですが、あの支那服を着て居られるあなたが好きで、又見に行きました。僕はあの寫眞の中のあなたのお顔が、一番——と云つては悪いですが、非常に綺麗だと思ひます。あの支那服は實に美しい。寫眞そのものはあまり感心出来ませんが。

では左様なら。最近にお目に懸れることを重ねて希望いたします。翠香園と云ふ所は大變にいい所のやうにお話で想像して居ますが、あなたのお宅はどんな所にあるのですか、それを見せて頂ければ光榮に存じます。

「美代ちゃん！」

——と通り眼を走らしてしまふと、再びそれを机の上へ置きつ放しにして、梯子段の下へ甲高く怒鳴つた。

「美代ちゃん、フランクを出してくれませんか？ それからあの、體を拭くから湯殿へ水を

取つて頂戴。」

裸體になつて、白タイトルの敷いてある流しへ降りて、冷めたタオルで體中を擦りながら、彼女は今の手紙の文句を頭の中で繰返した。

「あなたのお宅はどんな所にあるのですか、それを見せて頂ければ光榮に存じます。」

あの人の手紙はいつもこんなだ、ちやうどあの人の態度の通りだ、遠慮がちで、うごうごしてゐて、ちつともハッキリしてくれない。「僕はあの寫眞の中のおあなたが、……非常に綺麗だと思ひます。あの支那服は實に美しい。寫眞そのものはあまり感心出来ませんが。」……それぢやアあたしそのものはどうなんだらう？

寫眞の中のあたしは好きだが、實際のあたしには興味がないと云ふんだらうか？ 支那服なんぞどうだつていい、お世辭や皮肉はあの人の柄にないんだから、もつとスパバ物を云つたらよきさうなものだに。國からお父さんや妹さんが来てゐると云ふなら仕方ないが、それも何だかアテになつたものぢやありやしない。やつぱりあたしを警戒してゐるんぢやないかしらん？……

顔のお白粉もきれいなつぱりと洗ひ落して、せいせいとして湯殿から上ると、お美代がフラ

ンネルの着換へを持つて待つてゐた。繭子に比べて五寸も身の丈の低い彼女は、乾いたタオルを後ろからふわりと懸けてやるのに、せい伸びをした。そして、腰骨の左右にまくぼの這入つた、肉づきのいい背中の水気を、もう一通よく拭き取つてやつた。

大きなコップに波波と一杯、汲み立ての水を持つて来させて、それをひと息に飲み乾してから、水浴の後のほとぼりを感じながら、繭子は二階の縁側の、籐の長椅子に横になつた。それから再び、さつきの手紙を膝の上に展げて、ゆつくりと読み直した。

此の手紙の主、——寺本と云ふのは、京都の大學の法科に通つてゐる學生なのだが、彼女が彼を知つたのはそんなに古いことではない。地震の後で、京都へやつて来て、岡崎の方に住んでゐた時分、隣りに學生たちの泊まつてゐる下宿屋があつた、——と云ふよりは、さう云ふ若い學生たちを友達にすることの好きな彼女は、その下宿屋があるために、隣りへ住む氣になつたと云つてもいいのであるが、間もなく彼女はどうななキツカケで近づきになつたか、——尤もそんなことにかけては、善く云へばお様子振らない、悪く云へばつうづうしいちだつたか

ら、——彼等の下宿へ押し掛けて行つたり、此方へお茶に呼んだりした。學生たちも此のお轉婆な、やんちゃな女僕を面白がつて歓迎した。黒谷にあつた假撮影所を案内して貰つたり、ロケーションに喰つ着いて行つたりした者もあつた。その頃寺本は下加茂の方に宿があつて、隣りの下宿へ時時遊びにやつて来ては、一座に加はるだけであつた。いつでも斯う、みんなが冗談を云ひ合つてゐるのを、何かが可笑しい」と云ふやうな顔つきで、言葉少なに、黙つて聞いてゐる、——氣取り屋でもなし、さればと云つてはにかみ屋でもないやうだけれど、何處か氣ぶツせな所のある此の青年を、繭子は始めは、別に好きでも嫉ひでもなかつた。が、或る時彼女が「乗馬の稽古をしたい」と云ふと、僕でよければ教へて上げませう」と、寺本が云つた、一北海道にゐた時分乗りつけてゐますから、馬なら多少自信があります。」さう云つて彼は、彼女を圓山や壬生の馬場へ連れて行つた。繭子は彼から馬の稽古をして貰つてゐるうちに、此の青年は自分に惚れてゐるんだなと、いつからともなく感づいてゐた。

少しコケットリを示してやれば、若い男は大抵喜んで自分の用をしてくれるもの、自分

のために有らゆる奉仕を吝しまないものと、さうきめてゐる繭子に取つては、別段寺本の親切が特別に身に沁みた譯ではないが、それでも向うが惚れてゐるなら、ちよいと浮氣をして見てもいいと云ふくらゐな氣持ちはあつた。それに相手が大學生と云ふ點に好奇心がないでもなかつた。大學の學生とは、知り合ひは澤山あるけれど、まだそんな仲になつた者は一人もない。さう思つて見ると、だんだん寺本の制服姿に心を惹かれるやうになつた。兩手で支へて、馬へ乗せたり降りたりしてくれる時の、木で叩いたらカンと鳴りさうな腕の感じ、金ボタンを擦ね飛ばしさうに張つてゐる胸、クリグリとした五分刈りの圓い頭、メルトンのツボンの下にそれとハツキリ見分けられる髯。せいはいかつぶくのいい割りに低く、いくらか喜劇の「デア公」と云ふ形に横に太つてゐる方で、脚もOパイんに曲つてゐて、——此のOパイんと云ふ獨逸語は、

寺本が使つたのである。「繭子さん、あなたの脚は日本人に珍しくX型をしていますね、さう云ふのをXパイイン、僕のやうにOの字なりに開いてゐるのをOパイインと云ふのですよ」と、彼は教へた。——孰方かと云へば不恰好な體つきだが、繭子はその體へ、一生懸命に駈けて來

でドーンと打つかつて見たい気がした。優形の男によく惚れたがる、お面喰ひの彼女は、整つた齒列とばつちりとした眼ばかりが白い、兵卒のやうな此の男の顔の中に、何か今迄に経験しない、生き生きとした、清新なもののあるのを感じた。しかし寺本はどう云ふ積りか、彼女がたびたびさう云ふ機會を作つてやつても、寧ろそれを避けるやうにした。

「寺本さん、一度あたしを遠乗りに連れて行つて下さらない？」

「或る時、二人で加茂の堤防の上を走らせながら、彼女は云つた。

「ええ、よござんす、何處へ行きますか？」

「何處か遠くへ、——と覗くらぬ出る積りで、——」

「はは、そりや駄目だ、明くる日あなたが足疲れちまふ。」

「足疲れたら、汽車で歸ればよくはなかつて？」

「なあに、日歸りで充分ですよ、可なり遠くへ行かれますよ。」

彌子は不思議に、此の男には氣が置かれた。いつ迄立つても、先が丁寧な言葉遣ひを改めないで、此方もガサツに出る譯に行かない。きつと此の人は臆病なんだ、惚れてゐながら

さうなることが恐ろしいんだ。だが恐ろしいと云つたところで、いつかはさうなる、あたしが今にさうして見せる、(以下十八字削除)。……彼女はコツソリ、さう思ふことに意地の悪い樂しみを感じたが、そのうちに京都を引き拂つて、翠香園に移つてしまふと、又新しい取り巻きが出来、手近な所に相手が見つかり、いつもの氣紛れな性分で、忘れるともなく寺本のことは忘れてゐた。

その寺本に、彼女がふいと會つて見る氣になつたのは、ほんの一月ばかり前、出張撮影に京都へ行つた時だつた。自分一人だけ早く體が空いてしまつて、ぶらぶら京極を歩きながら、「ああ、さうだつた、こんな時に寺本さんでも呼んでみようか」とさう思つて、カフェエ。

ローヤルから電話を懸けると、寺本は直ぐ飛んで来た。四月の中旬の、生暖い晩で、寺本の探み上げからは「とすぢの汗が、その赤黒い頬へかけて濡れてゐた。「まあ、どうなすつて？」

大變な汗よ」と云ふと、「いや、お待たせしては悪い」と思つて、急いでやつて来たもんですから」と、彼は云つた。酒はあんまりいけないと云ふので、やつとビールを一杯飲んだだけだつた。

「ちやア、活動でも見に行きませうか？」

「それより圓山を散歩しませんか、夜櫻を見に。」

さう寺本が發議した、そして、二人は京極から圓山まで歩いた。

「どうですか、此の頃馬は？」

「祇園の石段を上つて、暗い所へ這入つた時に、寺本が云つた。

「ああ、さうさう、此處で始めて寺本さんに教へて頂いたんでしたつたね。此の頃ちつともやらないのよ、馬なんか近所ないんですもの。」

寺本は黙つてゐた。彼女は故意に、ときどき寺本の手の甲に觸れた。

「寺本さん、あなたちつとも手紙を寄越して下さらないのね、番地をちやんと教へて置いて上げたのに。——」

「あんまり手紙を上げたりするのも悪いかと思つて、控へてゐました。」

「なあぜ？ どうして悪いの？」

「どうしてと云ふことはないんですが、——ただ遠慮してゐたんですが、……」

「だけでも今日は嬉しかつたわ、暫くお目に懸らなかつたから、電話をかけても来て下さるかどうかと思つてゐたんですけれど。」

「僕はあなたには、寫眞でお目に懸つてゐました、京極へ来たのは缺かさずに見に行きましたから。」

「あたしの寫眞なんか詰まらないわ、ロクなものはありませんわ。」

「寫眞の方では、僕は古くから蘭子さんを知つてゐますよ、三四年も前から見てゐました。」

こんなことを寺本が打ち明けるのは始めてだつた。

「さうお？ だつてあたしの古い寫眞は、澤山はないのよ、五六本ぐらゐしか……」

「でも見てゐますよ、そのうちの二三本ぐらゐは。」

「あなたは寫眞を見ていらしつても、あたしの方では會へないから駄目だわ。寺本さんが活動俳優になつて下さればいいけれど。」

「それぢやあ一つ、日活へでも這入りますかね、活劇の時に馬へでも乗る役になつて。」

「だけどあたし、寫眞ぢやあいや、やつぱり本人に會はなければ……」

歸りに七條まで送つて来たので、汽車の中が退屈だから大阪まで送つて頂戴」と云ふと、寺本は時間を氣にしながら、それでも大阪へ附いて来た。直ぐに引返すと云ふのを、無理にタ

キシへ乗り込ませて、長堀カフェエで暫くしゃべつたが、その間も彼は時計ばかり見てゐた。

「蘭子さん、あなたの方は電車は何時迄あるんです？ 遅くなりやしませんか。」

「あたしの方は構はないわ、歸れなかつたらホテルへ行つてもいいんですから……」

「けれども僕は歸らなくつちや……」

「寺本さんは、何處か大阪にお泊りになる所はないの？」

「ええ、ありません、それに、執方しても歸らなくつちや……」

さう云つて彼は、キツチリ十一時半まで附き合つて、京阪電車の最終で歸つた。

制服を着た寺本の姿が、それから折折何かにつづけて思ひ出されて、どうかした拍子に一途に逢ひたくなることがあつた。その後彼女は四月の末に豫め通知して置いて、又一度京都を訪ねた。二時に停車場で落ち合つて、嵯峨から嵐山へ行つたが、その日の寺本は今迄になく快活だつた。彼女がそつと、八重櫻の枝を折らうとすると、「こらッ、泥坊！」と云つて威嚇したりした。かと思ふと、忽ちその木へ攀ぢ登つて、見事な枝を折つてくれた。渡月橋か

らボートで嵯峨の温泉へ行き、そこで喰べた晩飯も寺本の奢りだつた。あたし今夜は此の温泉へ泊まりたいわ。——その時その言葉が、つい口元まで出てゐたけれど、なぜか彼女には云ひきれなかつた。それを云ふには、あまり寺本の態度が明るく、暗れ暗れとしてゐた。「ねえ寺本さん、翠香園へ一度遊びに来て下さらない？ 今度あたしが御馳走してよ」と、彼女は云つたが、寺本は曖昧に「ええ、有りが」と答へただけだつた。「ではいつ？」と聞いても、「ここんところは忙しいから」とか、「そのうちに是非」とか、何氣なく云つて話を外らした。

此れはと思ふ男があれば逃がしたことはなかつたのに、——ちやうど寶石や着物と同じに、欲しいとなれば自分の物にして見せたのに、寺本に限つてさう行かないのはなぜなんだろう？

全體あたしは、そんなに此の人に惚れたんだらうか？ 考へて見るとモドカシクもあるが、馬鹿らしくもある。だが此の返辭はどう云ふ積りなのか知らん？ 今度の日曜に来てくれれば、小田切はゐないし、恩地は夜業で迎くなるんだし、あたしは一日體が空いてゐる筈だし、すっかり手順がついてゐたのに、またあの人は逃げちまつた。一昨日出した手紙の書き方が悪か

び落ち合ひ、二つ會社に雇はれたのが、経りの戻つた始まりで、此の家を恰も我が家のやうに入り浸つてゐるうちに、とうとう一週間ほど前から、久しい馴染であるにも拘はらず、かうして見ると此の男だつて今更捨てたものではない、やつぱり可愛い眼をしてゐると、蘭子は思った。ピアノストのやうな器用らしい指先が、ほんのり薄く、着色液のしみだと思へて琥珀色に染まつてゐるのも、寧ろなまめかしい感じがした。併優になれば二枚目どころに打つて付けの柄であるのに、自分の好きで現像技師をやつてゐる、此の男の氣が分らなかつた。歳は蘭子より一つ上か、せいぜい同い歳の筈だけれど、顔にも何處やら子供らしい愛嬌が残つてゐるのを、自分でもよく知つてゐて、ときどき甘つたれた言葉を使ふところから、社の内部では「喰はせ者」と云ふ評判があつたが、その「甘つたれ」も蘭子には決して憎くなかつた。

欄干の外は日が暮れかかつて、流れの音が身に沁みるやうにハツキリ聞える。白ツちやけた地面の色は、夕方はなほ際立つて、仄暗いながらあたり一面に濃淡がなく、小松の幹が一本一本數へられるほど、湧え湧えと明るい。何處か遠

くの温泉宿にでもゐるやうで、蘭子はのんびりと、いい氣持ちだつた。寺本のこと苦にならなかつた。たつた今讀んだその人の手紙が、帯の間に這入つてゐることさへ、どうかすると忘れてゐた。寺本なんて面倒な人は駄目なら駄目でいいぢやないか。今日明日のことに行かないものをムキになることがあるもんか。此處にゐる男で澤山ぢやないか。何と云つても寺本さんよりずつとシヤンだし、あたしの性分は何から何まで知つてゐてくれるし、……：

「今日は三ちゃん、おやぢが来るんだよ。」

「うん、知つてゐる。又階下へ追つ拂はれか、遣り切れねえなあ。」

お美代が夕刊を持つて上つて來たので、二人の話はちよつと途切れた。

「爪剪鉄はここにあるかい？」

と、恩地は云つて、机の上に置いてあつたウ

アニティーケースを縁手に開けて、鉄を取り

出すと、その夕刊を縁側へひろげ、足の爪を剪り始める。

「(十八字削除)。……」

「(四字削除)。」

「(二十三字削除)。……」

「(三字削除)。」

「(四十字削除)。」

「(三字削除)。」

「(三字削除)。」

「(十五字削除)。」

「(六字削除)。」

「(四十三字削除)。」

「(十七字削除)。」

「(二十字削除)。」

「(七字削除)！」

「(三十九字削除)。」

大島の裕に粗の夏羽織、紬の袴と云ふいで、たちに象牙のノツブのステッキを衝いて、メンヨン・パイプを咬へながら、此の男の癖の、四肢を踏むやうな悠然たる歩き振りで、小田切がやつて來たのは、彼れ此れ七時半頃であつた。

「入らつしやいませ。」

と、お美代は玄關に畏まつたが、小田切は

ただ「うん」と云つたなり、いくらか極まりが惡

さうにしてすらツと二階へ通つてしまふ。それ

から問もなく、「お風呂が出来てをりますから」

と云ふ知らせに、蘭子と二人で一時間近くも湯

に這入つてゐる。湯から上ると、再び二階へい

チビリチビリと酒が始まる。が、その間はカタリと云ふ物音も立てず、話聲も洩れないので、呼ばれたければお美代も決して上つて行かない。尤も酒は可なり行けるのに違ひなく、日本酒はめつたにやらなかつたが、食事中にはシャトー・ラロースかシヤブリーを飲み、食後はチーズを摘まみながら、コニヤツクのクルヴオアジエか、リキユウ酒を飲むことに極まつてゐた。それでさう云ふ西洋酒の數は、小田切自身が特別に神戸へ注文して、いつも此の家へ備へつけて置いたのである。

「三ちゃん、ちよいと！ 三ちゃんはゐないかい？」

二階で藪子の頓興な聲が聞えたのは、吉例の如く食後の酒になつてから、又一時間も立つたと思ふ時分である。恩地は階下で、お餘りの鱧のすき焼の鍋を圍みながら、お美代やお元と突ツついてゐる最中だつたが、

「おうー！」
と云ひさま、箸を投げ捨て、梯子段の下まで駆けて行つた。

藪子は上から顔を出して、

「三ちゃん、あんた御飯は？」

「今たべてゐますが、もう済みますよ、何の御

用です。」
と、下では丁寧な言葉を使つた。

「さう、ちや、たべちまつたら二階へ来ない？」

「パパさんがあんたに、珍しいお酒を御馳走するツて云つてゐるの。」

「そりや有りがてえな、御馳走になります。——

ちやあ大急ぎで、先へ」とツ風呂這入つちまひます。」

「お湯は後だつていいぢやないの。」

「なあに直ぐ、——五分か十分、直ぐですよほん

とに。酔つ拂ふと這入れなくなつちまふから。」

「酔つ拂ふほど飲ませるなんて、誰が云つた

い。」

「あ、いけねえ！ こりや失策つたか。」

「ぐづぐづ云はないで上つておいでよ、ようツ

たらー！」

「へえ、ちやあお湯は後にします。」

恩地は茶の間へ取つて返して、喚ひかけの飯

を掻つ込んでから、ちよつと帯を締め直して二

階へ上つた。

「御免下さい、御馳走になりました。……

ええと、藪ちゃん、何とか云つてくれないかな、

已アどうも挨拶をするのが拙くて、……」

「うふふふ、何云つてゐるのよ此の人は。そ

んなに改まらないだつて、先から知つてゐるんぢやないか。」

「だけども、……そりやアさうだけれども、……

「やあ、暫くだつたね。」

と、その時小田切が、やつと重い口を動かして云つた。

「君はいつから此方だね？」

「僕ですか、僕は今年の二月からです。此の間

から時々お目に懸つてゐましたが、つい御挨拶

をしそびれちやつて、……どうも済みません。」

さう云つて恩地は、頸ねツこへ手をかけて、

ビヨコンとお辭儀をして見せる。

「さあ、三ちゃん、あんたコニヤツクとリキユ

ウと孰方がいい？」

「ええ、孰方でも、……」

「遠慮なんかしないでいいわよ、折角飲ませ

るツて云ふんだから。ねえ、パパさん、パパさ

んから勧めて頂戴よ。」

「うん、ほんたうに遠慮しないで、……」

「ちやあ遠慮しません、どうか兩方飲まして

下さい、孰方も僕ア飲んだことなんかないんで

すから、……」

實は内證で猪口に一杯ぐらゐづつ、毒味をし

たことはあつたのだが、……

御馳走をするがら上つて来いと云つて置きながら、専ら蘭子に取り持ちをさせて、小田切は矢張り氣むづかしきうに、さうかと云つて不機嫌でもなく、黙つて二人のしゃべるのを聞いてゐる。思地はめつたに人みしりをしない方で、誰にでも可愛がられるのを内得意にしてゐるのだが、此の人ばかりは氣心が知れないで、多少窮屈な感じがした。一體己と蘭公との間を、どう考へてゐるのだらうか、二人の關係を知つてゐるのか知らないのか？ さう思つて見ると、それが彼には胸に落ちなかつた。「さあ、事に依つたら氣が付いてゐやしないかしら？ だけどあたしとおやちとは二十も歳が違ふんだから、大概なことはあきらめてゐるんだよ」と蘭子は云ふけれど、何だか斯う、人の様子を妙に意地悪く、チーツと觀察してゐるやうな、あの眼つきが氣に喰はない。それにおやちだのババさんだのと云ふものの、鷹揚に太つた、品のいい風采は、實際の歳より三つ四つ若く、漸く四十前後としか思へない立派な紳士だ。あれで内實は蘭子に頭が上らないで、どんな我が儘でも許してゐるのださうだから、餘程蘭公がお氣に召してゐるのだらうが、陰險なおお様子振つてゐるのか、焼き餅を焼いたと云ふ話もな

く、まるで女に征服され切つてゐるところは、あまり鼻の下が長過ぎるやうで、どうもをかしい。東京時代にもいろんな男が、おぼつぱらに出入りをしたに拘はらず、いつも此の人は何もう云はないで、女優を妾にしてゐるんだから仕方がないと云つた風な、太ッ胸をきめてゐた。アダリンを飲まれて知らずにゐるとは初耳だけれど、蘭子が目黒に住んでゐる頃、俳優の江やYが矢張り此の人と泊まり合はせて、それに似たやうなわるさをしたことは、のろけ交りに當人どもがしやべつたのを、思地は聞いてゐる。あの人は幾らか美少年趣味もあるんぢやないか、美少年に接することを喜ぶやうな傾きもあつて、蘭子の浮氣を黙認してゐるのぢやないかと、一と頃はそんな噂もあつた。思地が此處へ轉け込むに就いても、「おやちが美少年が好きなんだよ、三ちゃんのこともアレはシャンだツて云つてゐるから、構やしないよ」と、蘭子にさう云はれたからではあるが、それにしても奇態な人だ。かうして面と向つても、ちつとも言葉をかけてくれない。いい歳をして美少年が好きなのも滑稽だから、わざと取り澄ましてゐるやうにも見えるし、腹の中ではづうづうしい奴だと睨んでゐながら、蘭子の機嫌を損ねること

を慮つて、いやいや好きを装つてゐるやうにも見える。まあそんな事は執方だつていいや、づうづうしいならづうづうしいと思やがれと、思地は度胸を極めてゐるのだが、人の顔色を讀むことの上手な彼にも、此の點がハッキリしてくれないと、應對がしにくい。酒を飲まして貰つたつて甘くもない。酔ひが頭へばかり上つて、頸の周りがカツカツと火照つて、變に壓迫されるやうな、息が詰まるやうな氣がする。「パパさん、パパさんはどう思ふ？ 三ちゃんとはアちゃんと執方がシャンかしら？」 此れぢやアとても造り切れないなと思つてゐると、いきなり蘭子がそんなことを云つて、チラリと思地へ横眼を使つた。「ほら、パパさんははアちゃんを覺えてゐない？ 目黒にゐる時分、よくやつて来たHツて云ふ兒があつたぢやないの？」 若い男を掴まへて「兒」と云ふのが彼女の癖だつた。思地も薩では「兒」にされてゐた。「うん、……」 「あの兒と三ちゃんと執方がシャンだらう？ ねえ、パパさん。」 「さあ、執方かな、……」 小田切はいかにも迷惑さうに、口の中でもぐ

「い」と云つた。が、同時に非常に好奇心の籠つた、そのくせ妙に臆病な眸で、点を隔てた男の美貌をコソコソと窺つたが、視線が合ふと直ぐにその眼を外らしてしまつて、繭子の手つきや、足つきや、頬ツべたや、頸ツたまや、そんなものばかりを惚れ惚れと眺めてゐる。眼つきがまるで舌のやうに貪婪に見え、——「どうぞ此の女は？ 實にいい體つきをしてゐるぢやないか、柔かで、つやつやとして、全身が斯う、波のやうにしななして、…此れだから己は此の女が好きなんだ」と、恰もさう云つてゐるかのやうに。……

「でも孰方よ？ あたし三ちゃんの方がシヤンだと思ふわ。」

「じよ、冗談云つちやア……」

と、恩地は又頸ねツこを掴んで、

「そりやアはアちゃんの方がシヤンですよ、僕なんか到底……」

「ウツ云つてらア、背負つてる癖に！」

「アレ、アレ、驚いたなどうも……」

「現像技師なんかさせて置くのは惜しいツて云つてたわよ。」

「誰が？」

「パパさんが、」

「へ？」

と云つた恩地は、その時再び、好奇心に充ちた眼で射られたのを感じたので、ふいと見上げると、不思議にも小田切は、處女のやうに顔を赧くしてゐる。

「さうね、パパさん、パパさんは三ちゃんが御最良ね、いつかさう云つてゐたぢやないの？」

「うん」

と云つたやうではあつたが、恩地にはただ、此の曖昧な人の唇の、かすかに動いたのだけが分つた。

四

「うるさい！ うるさいツて云ふのに又寄つて来る……」

「だつて、……だつてお前、……」

「何がだつてよ！ 馬鹿おやぢ！ 此處は戶外からまる見えぢやないか。」

「見えやしない、今頃戶外を通る者はありやしないから、……」

「誰が何處から見てゐるか知れやしないわよ！ あの松林の中だつて此の頃家が出来たんだから。」

「アレは川の向うぢやないか、……」

「川の向うだつて見えるわよ、戶外が眞つ暗で、二階がこんな明るいんだもの。」

「ぢやア戸を締めて、……よう！……お美代を呼んで、戸を締めさせて、……」

「いけないわよ、今から戸を締めたら暑ッ苦しくツて仕様がありません。」

「もう十二時だよ、……」

「十二時だつていいぢやないの、あたしはもう少し此處に涼んでゐたいんだから。」

「お前、そんな薄着で、風邪を引くといけません。」

「引いたツていいわよ、餘計なお世話よ、パパさんはもつとお酒でもお飲み、……」

恩地が階下へ行つてから、十分ばかりも後であらうか、餘の長椅子に體を臥すころばし繭子は、片手を欄干に、片手を椅子の肘の外の外へ垂らしながら、着物の兩前を、ゾボンを穿いてゐるやうに、兩脚の間へびつたりと挟んで、その脚をゆたかに伸ばしてゐた。小田切は縁側と座敷の境の、闊のところ座布團を敷いて、庭の方から見えないうらに長椅子の蔭に蹲居まつたまま、上から垂れた女の掌を握つてゐた。二人きりになつてしまふと此の男はいつでもさうだが、話の間や酒の間に始終繭子の肌

一部を、——彼女がうるさがる時は指の先でも
足の裏でも構はないから、——何處かを手で以
て撫でてゐないと承知しないのである。もう
昔から馴れっこになつてゐるのだけれども、此
の頃特にそのやり方がしつっこいから、しつき
りなしに蝨が體を這つてゐるやうで、藪子は時
時癩癩が起つて來るのだつた。

「さあ、その手を放して頂戴つたら！ いつ迄
人の手を握つてゐるのよ！」

「だつて、手ぐらゐ握つたつて、……」
「厭！ 厭だつたら厭！」

邪慳にさう云つて、無理に振り握きつて、めつ
たに見せられない品物のやうに、掌を懷ろへ
隠してしまふ。すると今度は、藤椅子に添ひな
がらざるずると下の方へ這つて、足頸に觸り、
足の指へムズムズと來る。

「まあ、此の人は。——犬！ 犬おやぢ！」
ばつとフランネルの裾がまくれて、女の足
は、いきなり小田切の額を蹴つた。が、それで
も小田切はまだ止めない。……

仕方がなしに、もうあきらめてしまつた藪子
は、勝手に足をいぢらせながら、椅子の上から
此の男の頭を見つづしてゐた。而と向ふとさ

うでもないけれど、上から見ると矢張り此の男
も歳を取つたのか、頭のまん中が禿げて來て
ゐる。オー・ド・キーンを擦り込んだり、プリ
アンチンでつやを附けたり、バンダリンで固め
たり、いつも髪毛を氣にしてゐるだけ、何だ
か悲惨な心持ちもする。さう云へばあの襟の
周りから肩にかけての、ところどころに赤ん坊
の手頸のやうな線の這入つた、だぶだぶとした
ぶざまな肉づき、あの締まりのない太り方は、
もう老人の體ぢやないか。寺本さんや三ちやん
の「若さ」の張り切つてゐる皮膚とは、比べ物に
ならないぢやないか。「おやぢ、おやぢ」と云つ
てゐるうちにいつか此の人もほんたうのおやぢ
になりかけてゐる。だが此の人が此れだけ老け
てしまつた間に、あたしだつて歳を取つたん
だ。來年は二十四、再來年は二十五、……ぐづ
ぐづしてゐると直き三十になつてしまふ。あた
しもうつ迄安月給で女優商賣をしてゐたくは
ないんだが、それにしても此の人はどうしてこ
んな因果な性分なんだらう？ ちやんとしてゐ
れば立派な人間で、頼りにもなる男だのに、奇
妙な癖が幾つになつても止みさらもなく、だん
だん激しくなると云ふのは、……

藪子の眼には、椅子の下にゐる男にも、彼女

自身にも分らない程の涙が宿つた。彼女はも
う一度腹立たしげに、
「馬鹿おやぢ！」

と云つて、小田切を蹴つた。二度も、三度も、
蹴つて、蹴つて、蹴りつづけてゐるうちに、パ
ラバラと頬を傳はつて來たものがあるので、始
めてはツツと氣が付いたけれど、それを拭かうと
もしなかつた。

「おやぢ！ あたしにリキユウを一杯おくれ。」
と、彼女は云つた。グラスに酒を注ぎながら、
思ひもかけぬその露に濡れた顔を見上げた小田
切は、さすがにちよつとたじろいだやうな、薄
氣味の悪いニタニタ笑ひを頬に刻んだ。

藪子は一體、生れつきから浮氣でお轉婆では
あつたけれども、その傾向を生れつき以上、上
らせた者は小田切であつた。四五年前に、上海
のカフェで踊り子をしてゐた十八九の頃、小田
切が彼女に惚れたのは、今から思ふとヤンキー
式な茶目な動作や、蓮ツ葉で亂暴な口のきき振
りや、あの時分の流行りであつた鬘の頭や、
彼女の持つてゐたそんな特長が此の病的な
男の嗜好に投じたのである。藪子はそれを、あ
の時分には氣がつかかなかつた。此の男はお金持
ちのお坊っちゃん育ちで、女に惚い、甘い奴

で、まるであたしに目がないんだと思つてゐた。そして此の男の物になりながら、藪では随分好き放題ないたづらもした。此の男を巧く欺して、いいやうに操つてやるのが面白くもあり、それほど自分が胸のあることが愉快でもあつた。ところが、それがさうではなく、欺した積りで實は此の男の計文通りに、一種の鑄型に嵌められてゐたのを、——肉體と共に性格まで、玩具にされつつあつたのを、——彼女は近頃、此の男の秘密が次第に分るに随つて、悟るやうになつたのである。

あれから長年、此の男を旦那にしてゐるけれども、彼女はつひぞ「旦那を持つてゐる」と云ふ窮屈を意識したことはなかつた。こんな自堕落な女を圍つて置きながら、此の男は唯の一度も、焼き餅を焼いた例がない。たまに焼くやうな風を見せても、決して心からの嫉妬ではなく、變態な慾を満足させる芝居に過ぎない。凡べて、此の男のすることは芝居ばかりだ。間抜けでもないのに間拔けた役割を演じたり、欺されてもなひのに欺されたらしく装つたり、不慮は立派な男だのに、彼女の前ではわざと意氣地なく、女のやうな泣き聲で哀訴したり、そんな事にもみ或る云ひ知れぬ愉快を感じる此の

男には、眞面目に人を愛さうとする實意もなければ、眞面目に愛されたいと云ふ願ひもない。「あなた」と云はれるより「おやぢ」と云はれ、手で撫でられるより足蹴にされるのを喜ぶ男。操を立てて貰ふより木偶扱ひにされるのが嬉しい男。二枚目よりも三枚目がいいと云ふ男。——それを彼女は、初めは滑稽に感じたばかりで、却つて都合がいくらくに考へたのだが、氣違ひじみた此の男が近頃のやうにムキ出しになると、自分は此の男に惚れられてゐるんでも何でもない、女王の如く振る舞ひながら實は奴隷にされてゐたんだ、煽てられて、圖に乗つて、知らない間に不自然な道具に使はれてゐたんだと、さう云ふ自覺がハッキリして来て、時々ふいと淋しい氣持ちが胸を襲つて來るのである。

お美代が上つて来て、もう一度ちよつと掃き出したから、雨戸を締めたのは一時頃だつた。蘭子はたつた一杯のリキユウ酒が利いたのか、慵く、大儀で、お美代がそこらを片附けたリ床を敷いたりしてゐる間、まだ椅子の上を離れようとはしなかつた。「いや、己はいいよ、姉さんに寝間着を着せて

お上げ。」と、小田切がさう云つてゐる。

潔癖で、身嗜みがいいので、汗臭い感じはしなかつたが、その代りバサバサと脂氣がなくて、妻びた手足、不正形な、菱形に至んでゐるやうな顔、雀斑の中から覗いてゐる柄巧うな小さな眼、出つ張つた頤と大きな口、あれで呼吸が通ふかと思はれる微かな鼻の孔、——僂のお美代は、それでゐて細細とよく働くが、「そんな不具な従妹があるなら世話をしておやり」と、頻りに彼女を不憫がつて、内へ置きたがつた小田切の心も、今では蘭子には想像がついてゐた。小田切は始終、獸を飼へると蘭子に勧めた。いつか一緒に、道頓堀の松竹座でバーバラ・ラ・マーの「心なき女性」を見た時にも、「お前も猿を飼つたらどうだね」と彼は云つた、「あの猿がゐるのでバーバラ・ラ・マーが一層妖艶な女に見える、映畫の女優は猿を馴らして置く」といふ。さうしてお美代が來てからと云ふものは、凡そ蘭子の體に關係した用は、彼が自分でやらなければ此の兎にやらせた。髪を梳くこと、爪を研ぐこと、背中を流すこと、足腰を揉むこと、靴を穿かすこと、脱がすこと、……何でも彼

でも蘭子自身が手を下すのを喜ばないで、精神的の不具者である彼と、肉體的の不具者である此の兒とが、女主人の指一本でも煩はす必要のないやうにした。

此の兒もきつと、小田切の道具に使はれてゐるんだ、——あたしばかりか、あたしの周りにゐる者は皆道具に使はれるんだ、お美代にしても、は、あ、ちやんにしても、三ちやんにしても、……

「姉さん、寢間着をお着換へにならない？」
椅子の後ろへ来て、もう先から寢間着を持つて待つてゐるお美代の、口の内で云ふ聲が聞えた。

やつと身を起して、帯を半分解きかけた時、
「あ、さう云へばあたし、……」
と、蘭子は急に氣が付いて、お腹の周りや袂の中を探つて見た。寺本の手紙を何處へやつたか、あれきり忘れてゐたのである。

「お湯殿にあつたから取つて置いたわ。」
お美代が耳元で、「と言云つた。

「ふ」
と頷いて見せたきり、そのままするすると着物を脱いで、後ろで擴げてゐる浴衣の袖へ手を通した。……黙つてゐながら、此の兒は何處でも

知つてゐると思ふと、今に始まつたことではないが、蘭子は變な不氣味さを覺えた。小田切の秘密も、女主人の胸の中も、さうして自分自身の位置も、もう此の兒にはすつかり分つてゐるのではないか？……
縁側に落ちてゐるフランネルを拾つて、衣紋竹へ懸け、帯を巻んで、
「お休みなさいました、」
と、お美代は階下へ降りて行つた。

五

ぼんやり電燈に覆ひを被せた暗がりの中で、アダリンが利いたのか、それとも狸か、小田切はグウグウよく寝てゐる……

蘭子は、ちよつと身じろぎして見た。それから、邪魔になる腕を靜かに向うへ拂ひ除けた。弾みに少し枕からずり落ちたが、何の手答へも感ぜられない。ぼかんと口を開けたまま、頭を垂らして、よだれを出しさうにしてゐる様子は、たわいもない。

ほんたうに此の男は寝たんだらうか？ 此の氣違ひは？——
彼女は暫く、怪しげな寝顔をまじまじと眺めた。

此の男の空寝入りは、随分人を喰つたものだつた。目黒にゐた頃、(二十五字削除)。それがやつぱり一種の芝居で、さう云ふ役廻りにされるのが秘密な楽しみだつたのだ。

「僕もああ云ふシヤンは好きだから、内へ置いたらいいぢやないか」と、小田切の方からさう云ひ出して、(八十二字削除)。すると此の男は喜んで飲む。——多分女に毒藥を盛られる連想を以て飲むのであらう。彼女がこれをしてくれると、明るる日の朝、小田切は何でも彼女の要求を容れた。臨時の小遣ひを出すこともあり、着物を拵へてやることもあつた。それも始めは此の男の方から謎をかけたので、いつからともなく、二人の間に結ばれた契約のやうなものであつたが、蘭子に取つても満更悪い商賣ではなかつた。色と慾との兩方面から、彼女はいつも誘惑されてその手に載つた。

蘭子は今夜は、此の男に錠劑を五つも飲ませた。それから熱い湯にコニヤックを交ぜて、それを湯呑みに三杯も口の中へ注ぎ込んでやつたが、そんなにしてもまだ此の男が本當に寝てゐるかどうかは、疑はしかつた。彼女はそつと搔卷をまくつて、起き上つた。枕もとに据わつて、立て膝をして、(四字削除 微かに寝顔に

觸つて見た。(八字削除)此の男は、しばしば此れで空寝入りを観破されるのだけれども、此の頃は狭く、陰險になつて、なかなか化けの皮を露はさない。彼女は二三度、(十一字削除)頬ツペたや唇の邊を、チヨツ、チヨツと捺した。が、それでも相變らずやすやすと寝てゐる、ほかんと口を開けて、頤を垂らして、……

その不可解な顔の前から、彌子はじりじりと、臆病な猫のやうに後へ退つた。そして、廊下に出て、梯子段に明りをつけた。

(三十字削除)……

(五字削除)……

「……………」

「あたし、あなたが好みなつた、前よりずつと好みなつた、あたしのラヴさんはあんたばかりよ、……よう、(四字削除)！」

「う、うん……」

此の女が今夜はさめざめと泣いてゐる、ハテ、一體どうした加減かなと、(五字削除)。

「あなた、あたしを捨てちゃいけないよ、いつ迄もいつ迄も、捨てないツて約束しておくれ。

……」

「分つた、分つたツてば、……」

「ぢやあ、ほんたうに約束する？」

「うん、」

「浮氣をしない？」

「お前はどうかい？……」

「するもんか、あたしは、——しないとなれば。

——」

「あてにやあならねえ。……」

「あなたさへ浮氣しなけりやあ、あたしだつてしやしないよ。あたしはそんな女ぢやないよ。

あたしは、あたしは、……おやぢのお蔭でこんなに悪くされちやつたんだ。……」

(二十八字削除)……」

「あなた、あたしを可哀さうだと思つてくれな
い？ ハタから見ると仕合はせなやうで、あたし
しぐらゐ不仕合はせな者はないんだよ。あたし
はこんな氣象だから、今迄誰にもしやべつたこ
となんかないんだけれど、(十五字削除)、急に
話したくなつちやつたの。いけない？ こんな
ことを云つちやあ？」

「明日、明日にしねえよ。……」

「ううん、今夜、……今夜からうしてゆつくり話
すの。」

(十八字削除)。」

(百二字削除)。」

「月給六十圓ぢやあなあ、……頤が干上つても
いい積りかい？」

「あなたが六十圓、あたしが二百圓取るんだも
の。それだけで喰べて行かれるぢやないか。あ
たし、さうなれば贅澤なんかしやしないよ。月
給はみんな(三字削除)に上げるよ。え、厭か
い？(四字削除)。」

何を云つてやがるんだ此の女は？ 明日にな
れば又お天氣が變るんだらう。——

「厭ぢやあねえ、結構過ぎらア。」

「ぢやあ、承知かい？」

「う、うん、だけでもお前、……」

「何さ、だけでも？」

「……まあ、お前がよく、……もう一度よく、
……」

「考へろツて云ふのかい？」

「已より先に、(十二字削除)……」

「そんな事は分つてゐるよ。(以下二十三字削
除)ツ」

「そりやあする。」

「きつとかい？」

「きつとだとも。」

「ぢやあ、ゲンマンしとくれ。」

「うん、……」

「さ、ゲンマンしたよ、いいかい？」

「大丈夫だ。」

「(十五字削除)、……あたしが泣いたりなんかして可笑しい？」

「可笑しかねえ、……お前にもそんな優しい所があるかと思ふと、可愛いやうな気がするな。」

「あたしほんとは泣き蟲なんだよ、可愛がつてくれなきや厭よ、……」

(以下四十四字削除)

六

明け方、お美代が上つて来て、そうツと雨戸を繰つた時迄は、とろとろしながら覚えてゐたけれど、冷え冷えとした朝の空気が這入つて來ると、滿子は直きに、好い心持ちにぐつすり眠つた。

「姉さん、……」

と、障子の外で呼ぶ聲が耳に付いたのは、それから何時の間にか後であらうか。

「姉さん、」

と、二度か三度呼ばれた時、

「ふん？」

と滿子は、まだ半分は夢現で答へた。

「姉さん、お客様よ、——」

「だあれ？」

「此處に名刺を持つてゐるの、開けてもいい？」

隣りの部屋から、枕もとの方の襖を開けて、名刺を持つたお美代の手が出た。

「此の人？」

「ええ、」

寺本さんだ、……來られないと云つてゐたのに、どうしたんだらう？ それに今日は日曜でもないのに、わざわざ京都から來たんだらうか？……でもよかつた、來てくれてよかつた、まあ嬉しい。……何か譯があるんぢやないのか？……滿子は慌てて、疊の上をずると手繰つて、男の時計を引き寄せて見た。もう十時過ぎだつた。それにしても此のおやぢは……今朝は十時に大阪へ歸ると云つてゐた癖に、まだ寢てゐる。障子際から目がかんかん射込んで來るのも知らないで、顔ちゆうに脂汗を浮かして、出ツ腹の上へ鐵くちやになつた搔搔を横一文字に載せたまま、寢ないでもいい時分になつて、今度こそ本當に眠つたらしい。

……

「ぢやあ、あたしが今行く。」

寢てゐる男を尻眼にかけて、滿子は素早く跳ね起きると、着物を着換へる、帯を締める、

それからちよつと顔を直して、急いで玄關へ飛んで降りた。

「まあ！」

「やあ、どうも突然お伺ひして、……」

男らしい、そしてシツカリと力の籠つた眼が見上げた。此の間嵐山へ行つた時の通りの、あの快活な寺本だつた。

「まあ、ほんたうに！ よく入らして下さつたわねえ！」

「今日は親父と、妹が有馬温泉へ行くと云ふので、寶塚まで送つて來たんです。不意に伺つて失禮ぢやないかと思つたんですが、折角そこまで來たもんだから、兎に角お寄りして見ようと思つて、——」

「ええ、いいよ、あたしちつとも差支へないのよ。」

「でも、會社へ入らつしやるんぢやないんですか？」

「二三日撮影がないんですから、休んだつて構やしないの。ね、寺本さん、ほんとにゆつくりして行つて、——今直ぐ二階を片附けますから。」

「ぢやあ、その間僕は、そこらを散歩して來ませうか。」

格子の外の白い地面がキラキラ光つて、それが照り返す土間の中に、例の象牙のノツブのステッキが瀬戸の傘入れに挿し込んである。あ、此れを此の人が見たんだな、さう思ふと蘭子は氣が焦つた。

「いいのよ、そんな、散歩なんかして来ないだつて！ ちよつと片附けるだけなんだから、ほんの三分か五分の間よ！」

「さうですか、それぢやあ、……」
と云つて、まだ寺本はモチモチしてゐる。

「よくつて？ 寺本さん、何處へも行つちやいけなくつてよ！ きつと其處に待つてて頂戴。」
もう一度強く念を押して、ビシヤリと玄關の障子を立て切つて、

「美代ちゃん、二階へ来ておくれ。」
と、さう云ひながら彼女も梯子段を駆け上つた。

「おやぢ！ さあ起きとくれ起きとくれ！」
「うう、……ああ、……もう少し、……もう少し寝かして、……」

「寝かしてなんか置けないよ、起きてさつさと歸つとくれ！」

ほんとと枕を蹴飛ばして、耳朶を持つてその重い首を吊るし上げた。

「あいた、痛いたたら！」
「痛けりやあ眼が覺めたか？ さアどうだ？ 起きるんだ起きるんだ！」

「何だつてそんな……」
「何でもいから起きるんだつてば！ 起きてさつさと着物を着換へて出て行つとくれ！ あたしの大事なお客様が来たんだから。」

「誰？」

「誰だつていいよ、おやぢなんかの知らない人だよ。——美代ちゃん、構はないからどんどん床を上げておしまひ！」

「驚いたなあ、知らない人なら、己に紹介してくれたら、……」

「馬鹿！ そんな人とは人が違ふよ！ さあ、早く着物を着換へておしまひ！」

「まあ待つてくれ、顔を洗つて、……」
「顔なんか戸外でお洗ひ！ 今日の内ぢやあ洗はせないよ。」

「ど、どうして？」

「あの人とおやぢを一つ家の中に入れて置いや、あたしの氣持ぢが濟まないんだから。——」

「恩地はゐても差支へないのか。」

「何云つてるんだい、今何時だと思つてるんだい、三ちゃんなんざ疾うの昔に會社へ行つたよ。蛆蟲！ 早く出て行けつたら！」

「だけどもちよつと、ちよつとその人を見たいもんだな。」

「誰が見せてやるもんか、見せたら向うが汚れちまはあ。——美代ちゃん、あたしおやぢの番をして、茶の間へ連れて行くからね、さうしたらその後でお客様を二階へお通し。——」

「姉さん、此處にまだ、帽子と袴が、……」

「此方へお越し、それからお客様を通しちまつたら、おやぢの下駄を庭の方へ廻しておくれ。」

彼女は再び耳朶を持つて引つ張り上げた。

「さあいいか、梯子段を降りる時に口を利くと承知しないぞ。黙つて茶の間まで行くんだぞ。さうしないと、もう今度ツから此處の家へ寄せ付けないぞ。」

「ああ、ひどい目に遇つちやつたな。」
茶の間で袴を穿きながら、やつと小田切は口を利いた。

「ひどい目に遇つたつていいぢやないか、それがパパさんは好きなぢやないか。さあ、二百圓置いておいで。」

「二百圓に負けてくれてもいいがな。」

「いけないよ、二百圓だよ、昨夜あんなにアドリンを飲ましてやつたぢやないか。あたし指環を買ってしまったし、もう一文もありやしないよ。」

「流し紙入れから出した百圓札を二枚、満子は引つたくるやうにして四つに疊んで、手の中へ丸めた。」

「ぢやあ、あたしの見てゐる前でお歸り。下駄は其處へ来てゐるから。」

「あ、ステツキ、ステツキ、ステツキを忘れた。」

「ステツキはいいわよ、今度来るまで預かつて置くわよ。」

「なぜ？」

「だつて、先刻玄關にあつたものが、後でなかつたら可笑しいもの。今日はなして歸つて頂戴。」

「這ふ這ふの體で小田切は、茶の間の縁から庭へ降りた。」

「まあ、寺本さん、大變お待たせしてしまつて、」

「二三分の後、胸をワクワクさせながら梯子段を上つて來た満子は、川の向うの、松林の中を、停車場の方へ立ち去つて行く小田切の後ろ姿を認めた。ステツキがないので手持ち不沙汰のやうには見えたが、相變らず悠然と、四股を踏むやうな歩き振りで行くあのおやぢを、……」

年譜

明治十九年(戊歲)

七月二十四日、日本橋區響鼓町二丁目十四番地に生る。潤一郎と命名。

明治二十五年

九月、日本橋區坂本小學校に入學。其の當時まで極めて内氣なるお坊ちゃん育ちにて、乳母の附添ひなくては學校に通ふことを厭ひ、其の爲め一學年の進級に於いて落第せり。二年の時には首席を以て進級す。

明治二十六年

父が米穀仲買人を止めたる爲め茅場町に轉居す。

明治三十三年

秋香義塾に通ひ専ら漢文を學び同時に築地のサンマーに通ひて英語を學ぶ。

明治三十四年

三月、坂本尋常高等小學校全科を卒業す。其の頃父は商業に失敗して中學校に入學せしむる意思なく、高等小學校だけに於て廢學のところ、強ひて懇願したると、教師の勸告

と、且つは親戚の心配の結果、四月、府立第一中學校に入學することとなり。

明治三十六年

六月、父の事業益苦境に陥り、爲めに廢學を迫らるること屢なり。教師の斡旋にて辛うじて通學す。此の當時より築地北村氏の家庭教師になる。

九月、一年級を超えて三年級に進む。

明治三十八年

三月、府立第一中學校を卒業。

七月、第一高等學校英法科に入る。當時既に文學を好み、文學者たらんと志ありしも生活の上のことを考へ、法律を以て生活を支へ、傍ら文學者として立つの決心なりしなり。

明治四十年

六月、北村氏の家庭を出づ。初恋の女なる小間使へ送りし手紙を發見されし結果なり。此の失戀が動機となりて、いよいよ文學を以て身を立つる決心を固め、英文科に轉ず。北村氏の家を出でて後は、伯父と、小學校時代

よりの友人笹沼氏の補助を受く。

明治四十一年

七月、第一高等學校英文科を卒業。東京帝國大學國文科に入る。國文科を選みし理由は、之を好みてにはあらずして、學科が比較的平易なる爲めなりき。

明治四十二年

八月、小山内薫、和辻哲郎、後藤末雄、木村莊太、小泉鐵等と共に文學雜誌「新思潮」創刊の計畫成る。

九月、諭旨退學となる。雜誌に熱中して月謝を滞納せし爲めなり。月謝を納むれば再び通學差支へなきも、創作家として世に立つ抱負盛んにして、通學の如きは面倒くさく其の儘となりたり。

十一月、「新思潮」に「刺青」を發表す。

十二月、「麒麟」を「新思潮」に發表す。同月戯曲「信西」を雜誌「スバル」の爲めに書く、之れ原稿料を初めて取りたるものなり。

明治四十三年

三月、「新思潮」を廢刊す。

六月、「少年」を書き、「スバル」に發表。

明治四十四年

二月、短篇集「刺青」を親山書店より出版。

大學を退きてより居所定まらず、放浪生活を續く。此の後京都に赴きて、暫らく創作の筆を執らず。

明治四十五年

七月、京都より歸京して「長篇小説 羨」を執筆、「東京日日新聞」に連載す。

大正二年

正月、短篇集「悪魔」を粗山書店より出版。

同月、長篇「羨」を春陽堂より出版。

七月、「懺を知る頃」を植竹書院より出版。

大正四年

五月二十四日、群馬縣前橋市の石川千代子と東京に於て結婚す。同時に本所新小梅町に家を持つ。

十月、「お艶殺し」を千草館より出版。「お才と巨之介」を新潮社より、情話新集中の一篇として出版。

大正五年

三月十四日、長女鮎子生る。

六月小石川區原町三十番地に轉居。七月「異端者の悲しみ」、九月「病褥の幻想」を書く。

十二月、同町十四番地に轉居一人魚の唄きを中央公論「新年號のために」、「魔術師」を「新小説」のために書く。

大正六年

春、「玄奘三藏」を中央公論に發表す。

五月十四日母を失ふ。

九月「十五夜物語」、十月「晩春日記」、十一月「ハツサン・カンの妖術」、十二月「兄弟」を書く。

大正七年

春、「鶯姫」人面痘を發表。ついで居を相州鶴沼に移す。夏より秋にかけて「金と銀」

「小さな王国」「柳夢の事件」等を雑誌「黒潮」

「中央公論」中外等に發表す。

十一月月上旬家をたためて、家族を日本橋彌生町なる父の家(米穀仲買店)に預け、單身支那旅行に赴く。朝鮮、滿洲、天津、北京、漢口、九江、その他江蘇浙江地方を遊歴し、十二月末上海より神戸に歸來す。

大正八年

二月十四日、父を失ふ。

三月日本橋の店を親戚に引き渡した、本郷嘯町に一戸を構ふ。此の間に「母を戀ふる記」

「蘇州紀行」「秦淮の一夜」等を發表。夏より秋にかけて「或る少年の怙れ」「呪はれた戯曲」

「秋風」「西湖の月」「富美子の足」等を書く。十二月、相州小田原十字町に轉居。

大正九年

正月、「改造」に「途上」を發表、「中央公論」に長篇小説「鮫人」を連載し始む、牛蔵ほどにて未完のまま中止す。

此の年五月、大正活映株式會社創立され、脚本部顧問に聘せらる。

六月、映畫劇の處女作「アマチユア俱樂部」を脱稿し、七、八、二ヶ月を費して撮影す。十一月、有樂座に於いて公開。ついで泉鏡花氏の「葛飾砂子」を脚色撮影す。

大正十年

三月、「雛祭りの夜」を撮影。

四月、五月、六月、七月を費して、「蛇性の姪」を脚色製作す。その間に小説「私」

「不幸な母の話」「鶴唳」「AとBの話」等を脱稿。

九月、横濱本牧に轉居す。

十一月、大正活映との關係を絶つ。

十二月、「愛すればこそ」第一幕を「改造」に發表。

大正十一年

正月、「中央公論」に「愛すればこそ」第二幕第三幕を「陸路」と題して發表。ついで戯曲「お國と五平」を「新小説」に、「永遠の偶像」

を「新潮」に、「本牧夜話」を「改造」に「彼女の夫」を「中央公論」に寄す。

十月、同市内山手二六七番のAに轉居す。

大正十二年

正月、戯曲「白狐の湯」愛なき人人を發表。「婦人公論」に「神と人との間」を連載し始む。

九月一日、箱根蘆の湖畔より乗合自動車にて小涌谷に至る途中大地震に遇ふ。此の時家族は横濱に在り。四日小涌谷ホテルを發じ、五日朝大阪に至り、九日神戸より上海丸にて横濱に赴き、十一日東京府下杉並村に至りて家族と再會の喜びに遇ふ。二十日再び上海丸にて、家族同伴神戸に來る。月末京都市上京區等持院に家を持つ。十一月東山線三條要法寺内に移り、十二月兵庫縣六甲苦樂園に移る。此の間に「横濱のおもひで」「港の人人」等を發表す。

大正十三年

正月、「無明と愛染」第一幕を發表す。

二月「腕角力」、三月「無明と愛染」第二幕を發表す。ついで「大阪朝日新聞」に「痴人の愛」を連載。同月武庫郡本山村に轉居す。

十一月より「痴人の愛」の續稿を「女性」に連載す。

載す。

十二月、「神と人との間」完結。

大正十四年

四月、「痴人の愛」完結。「二月堂の夕」「瀧洞先生」「赤い屋根」「友田と松永の話」「馬の糞」等を續いて發表す。

大正十五年

正月、長崎より上海に遊び、二月十九日歸來す。

「上海交遊記」金を借りに來た男」「青塚氏の話」等を夏までに發表す。

昭和二年

正月、「顯現」日本に於けるクリップ事件」

「九月一日以後のこと」等を發表す。